

仮面ライダーメルシャウム

fuki

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高海千歌は、浦の星女学院に通う高校二年生。過疎化が進む内浦に住む千歌は、新一年生の入学式に突如現れた怪人と謎の存在の戦いに巻き込まれ、東京の音ノ木坂学院から転校してきた桜内梨子と出会うことで、仮面ライダーとして、スクールアイドルとして、この街でやるべきことを見つけ出していく。

やがて集まっていく少女たちは、憧れの μ sのように、浦の星女学院の廃校を救うことはできるのか。小さな町に迫る怪人を退け、ファーストライブを成功に導くことはできるのか。

本作は、『ラブライブ！サンシャイン!!』と、仮面ライダーシリーズのマッシュアップ作品です。

電撃G'sマガジン誌上で公開されていた『ラブライブ！サンシャイン!!』の設定をベースに、平成仮面ライダー一期をモチーフとしたオリジナル仮面ライダーを登場させていきます。

アニメ『ラブライブ！サンシャイン!!』一期の放送前に考えた設定および物語なので、アニメ版のノベライズにはなりません（収斂する可能性はあります）。

以下の点について、了承ください。

■CDドラマ、コミック、アニメ、ラジオ、生放送、ライブの登場人物や設定や解釈や話題は取り入れています。基本的にはG'sからの展開です。単一のメディアのみに触れている方には、キャラ崩

壊、設定変更と感じられる箇所が多々あります。

■ G's や公式サイトで発表されていた設定でも、初期に撤回された設定（一部キャラの学年など）は取り入れていません。

■ 原作ではほとんど描かれていない、家庭関係や街の状況なども描きます。そのためオリジナルキャラが多数登場し、Aquorserンバーが登場しないパートもあります。

■ オリジナルキャラには男性キャラも含まれます。ただし、Aquorserメンバーとの恋愛関係は描きません。

■ 仮面ライダーシリーズの登場人物、および仮面ライダーは登場しません。特定の作品とのクロスオーバーはありません。

目次

第一話：始まりの鼓動	1	
第一話：始まりの鼓動	2 (完)	
第二話：未来、変わり始めたかも	1	
第二話：未来、変わり始めたかも	2 (完)	
第三話：今考えても仕方ない	1	
第三話：今考えても仕方ない	2	
第三話：今考えても仕方ない	3 (完)	
第四話：始めたいマイストーリー	1	
第四話：始めたいマイストーリー	2	
第四話：始めたいマイストーリー	3 (完)	
第五話：願いましょう、明日の奇跡を	1	
第五話：願いましょう、明日の奇跡を	2	
第五話：願いましょう、明日の奇跡を	3	
第五話：願いましょう、明日の奇跡を	4 (完)	
第六話：大切なこの場所で	1	
第六話：大切なこの場所で	2	
第六話：大切なこの場所で	3	
第六話：大切なこの場所で	4 (完)	
第七話：目指すのはあの太陽	1	
第七話：目指すのはあの太陽	2	
第七話：目指すのはあの太陽	3	
第七話：目指すのはあの太陽	4 (完)	
第八話：Dance with me! Dance with		
ou!	1	
422	y	403
		385
		367
		353
		332
		313
		296
		279
		254
		238
		224
		209
		193
		180
		154
		138
		119
		97
		70
		49
		21
		1

第八話：Dance	with	me!	Dance	with	434
ou!		2			
第八話：Dance	with	me!	Dance	with	447
ou!		3			
第八話：Dance	with	me!	Dance	with	460
ou!		4			
第八話：Dance	with	me!	Dance	with	471
ou!		5			
第八話：Dance	with	me!	Dance	with	501
ou!		6 (完)			
第九話：震えてる手を握って		1			
第九話：震えてる手を握って		2			
第九話：震えてる手を握って		3			
第九話：震えてる手を握って		4			
第九話：震えてる手を握って		5			
第九話：震えてる手を握って		6 (完)			
第一〇話：傷付けたって構わない		1			
第一〇話：傷付けたって構わない		2			
第一〇話：傷付けたって構わない		3			
第一〇話：傷付けたって構わない		4			
第一〇話：傷付けたって構わない		5			
第一〇話：傷付けたって構わない		6 (完)			
第一一話：失敗する予感		1			
第一一話：失敗する予感		2			
第一一話：失敗する予感		3			

第一一話：失敗する予感は		4		724
第一一話：失敗する予感		5		739
第一一話：失敗する予感		6 (完)		751
第一二話：誰もが一つ持ってる、		1		765
第一二話：誰もが一つ持ってる、		2		781
第一二話：誰もが一つ持ってる、		3		799
第一二話：誰もが一つ持ってる、		4		813
第一二話：誰もが一つ持ってる、		5		831

第一話：始まりの鼓動 | 1

どなたか、ひよいと現はれたら！ といふ期待と、ああ、現はれたら困る、どうしようといふ恐怖と、でも現はれた時には仕方が無い、その人に私のいのちを差し上げよう、私の運がそのときまつてしまふのだといふやうな、あきらめに似た覺悟と、その他さまざまのけしからぬ空想などが、異様にからみ合つて、胸が一ぱいになり窒息する程くるしくなります。

太宰治『待つ』（『女生徒』収録） 角川文庫、1954年

AV

バスはトンネルを走り、ほのかに灯る橙色の光を浴びて走って行く。

緩やかなカーブを描いた先に見える輝きに飛び込むと、抜けるような朝の空が出迎える。

眩しさに目が馴染む頃、バスは湾岸沿いの道を走っていた。

内浦湾。

静岡県は駿河湾、そのさらに奥の、幅たった一キロしかない湾だ。

紺碧と言うには鮮やかな青色の湾を中心に、その右対岸には内浦小海の街が、左対岸には長井崎岬の高台——通称みかん山が見え、その間にお椀をひっくり返したような淡島がぼっこりと浮かんでいる。

真つ直ぐな海岸通りに、対向車はない。後続車も先行車もない。凍りついたような時間の中で、係留された漁船とそこで足を休める白い海鳥だけが、波に揺れている。

胸まで届く髪を太陽に照らされた高海千歌は、バスの最後部座席からそれを眺めている。

物心がついた頃からあった、当たり前の街並。

高海家が代々暮らしてきた、歴史のある風景。

波に浚われる浅瀬のように、死に瀕する世界。

「諦めちゃダメなんだ……」

無意識に呟いた言葉が、イヤフォンから響く声に重なる。

荒削りな編曲、層の薄い演奏、低品質な録音、まともなボイストレー

ニングもしていない歌声。

焦燥感と希望に縁取られた、決意の歌。

小さな画面に映る、歌い踊る三人の少女。

その眩しさに胸が締めつけられる。

と、バスが僅かにスピードを落として、対向車線に割り込んだ。左から追い抜こうとする車両が来たらしい。

なんだろう、と思つて振り返ると、バスに追いついてくる自転車が見えた。こちらに向かって大きく手を振っている。

千歌は動画を一時停止、後部シートを山側に移ると、立ち上がって窓を開けた。

「千歌ちゃん！ おはヨーソロー！」

「おはよー、曜ちゃん！ 久しぶり！」

軽快車を片手運転で敬礼しているのは、幼馴染みの渡辺曜だ。ショートボブと制服のスカートを風になびかせ、バスに併走している。

「遅いじゃん！ 朝練どうしたの？」

「寝坊しちゃった！ 新学期いきなり！」

満面の笑みで失敗を語る曜に、千歌は思わず笑ってしまう。

「また泳いでたの？ 夜！」

「違うよ！ アレ見てたの！」

「アレ？」

千歌が問い返すと、曜は上半身を起こした。

「千歌ちゃんも見えないの!? 昨日あそこに——おおおお！」

風の抵抗をもらに受けた曜が一瞬引き離されていき、ややあつて戻ってきた。

「気をつけてよー！」

「あとで言うよ！ 行つくぞー！ 全速前進ー！」

そう言うのと曜は立ち漕ぎになり、お尻を振りながらバスを追い抜いていった。

「またあとでねー！」

クランクが回転するたびに、筋肉質の腿と短パンの裾がスカートか

から見え隠れしていて、千歌はその光景に懐かしさを覚える。

「次は、三の浦総合案内所。時間調整のため、少々停車します」

バスはスピードを落とし、利用者のいない停留所で一時停止した。その間にも自転車は、海沿いのまつすぐな道を遠ざかって行く。

窓を閉め、シートに腰を下ろす。

バス停の名前でしか残っていない、《三の浦総合案内所》だった廃屋が目に入る。

いつまでも変わらないと思っていた千歌の世界は、五年前に一変した。

海沿いの街からは人が消え、漁船のいない栈橋が増え、商店街はシャッターを閉めたままの店が着実に増えていく。仲の良かったクラスメイトは一人ずつ転校していき、進級するにつれて囁かれるのは統廃合や廃校の噂。

学校まで向かうバスの朝夕特別便も廃止となり、このバスにも千歌一人しか乗っていない。

千歌の心にはいつの間にか「終末感」という言葉が芽生え、ゆつくりと、だが確実に育っていた。

アナウンスが聞こえ、バスが発車する。

首にかけたままのイヤフォンを耳に入れ、電話の再生ボタンを押す。

三人の少女のダンスが動き出す。

それを初めて見た、三年前を思い出す。

数センチの画面がいつぱいに広がり、千歌の世界を飲み込んでしまった時のことを。

空っぽだった千歌が、初めて手を伸ばしたいと思った夢のことを。瞬きを一つ。

滲んだ睫の間に、指の長さにも満たない三人の姿が見える。

電話を持つ、小さな手が見える。

一年間を独走した彼女たちは伝説となり、千歌はあの時の魔法のような気持ちポケットにねじ込んで過ごしてきた。

こんな死にゆく街で、なにができるのかと。

それでも、一六年間見続けてきた景色を終わらせまいと願う反発心は、否応なく育っている。

「あとで、か」

曜の言葉が、今さらながら頭にしみ込んできた。

あんな風に誰かと約束するなんて、いつ以来だろう。

岬に建っているコンクリートの目的地は、気付けばだいぶ大きくなっていた。

A

「お化けだよ！ お化けが出たの！」
「え」

感情を込めて言う渡辺曜に、千歌はフラットな驚き声を返す。

「ノリ悪いなあ。もつと驚いてよ」

「いや驚いたけど……。なんでお化け？」

曜は自転車にまたがって、みかん山を巡る海沿いの道を走っていた。クルマ通りはない。後ろの荷台には、海岸通りのバス停で拾った千歌が横乗りしている。

「深夜にあんなところに明かりがあるなんて、普通じゃ考えられないよ」

「あんなところって？」

「あの辺」

曜は片手で海を指差す。彼女が指し示すラインは内浦湾をちやうど縦断していて、真正面に千歌や曜の住む三津があった。

「私たちんち？」

「湾の真ん中！ ぼわーんって青白く光るものがさ、船もなく浮いたのー！」

「だからお化け？ 人魂？」

「で、それが不気味でさ、思わず着替えて探しに行っちゃったんだよ」

「泳いで？ 不気味なの？」

「当然じゃん」

この返答に、千歌の釈然としない表情を浮かべているに違いない、と曜は笑う。

「結局なんだったの？」

「分かんない。てか水が冷たすぎて無理だった」

「そりやそうだよ、今一〇度くらい？」

「しようがないからウチの屋根から双眼鏡で見てたんだけど、一時間くらいしたら、パツと明るくなって、また暗くなっちゃって」

「なんで？」

「分かんない。電池が切れちゃったのかも」

「電動お化け！」

「なんかやらしいぞ」

「なんで？」

「あー、なんでもない」

千歌は首を傾げたか、曜の背中に頭を預けた。

曜はしばらく黙々と自転車を漕ぐ。時々歩いている同級生や先輩に声をかける以外は、通り過ぎていく白線と、朝日を反射する湾の海面だけが、動くものだ。その生徒たちも、去年に比べるとまばらなように思う。新年度が始まるタイミングで、また少くない人数が転校して行ったのだろうか。

一日が、一年が始まるにしては、静かすぎる朝だ。

いつからこうなっていたのかは覚えていない。漠然とした停滞感に覆われた内浦が、曜にとつての日常だった。

「久しぶりだよね、こういうの」

「え？ どういうの？」

「二人乗りで学校行くの！」

横乗りしたままの千歌が曜の腰に抱きついてきた。

「ちよつと千歌ちゃん！」

「あー曜ちゃんあつたかくい！」

「人を自販機みたいに！」

「なにになに？ あつたかい飲み物出てくるの？」

「出ないよー！」

だが千歌の言う通りだ。高校に入学してからの一年間は、毎日水泳部の朝練で、千歌と同じ時間帯に登校することは滅多になかった。そ

れでも抱き付いてくる千歌の温かさは、記憶の通りだ。十数年の幼馴染みの感触は、少しのブランクでは忘れられないらしい。

と、二人が車道でじやれていると、流れるような走行音とともに、ロードバイクが隣に並んだ。

トライアスロンで使われる水陸両用のトライウエアを着た人物が、横目で曜たちを見た。

「おはヨーソロー、果南ちゃん！」

「おはよー！」

声を上げる二人に、松浦果南は「や」と左手を小さく広げて見せた。海水に湿った黒いナイロンに緑のラインが入ったスポーツウエアは、とても登校する生徒には見えない。

「久しぶりだね、果南ちゃん！」

千歌が手を伸ばし、果南の左手に触れた。

「久しぶり、千歌。元気そうだなにより——って、髪。だいぶ伸びたね」

「そうかな」

「伸びてるよ」

曜も同意した。少し前まで曜と同じくらいの短いボブだったのが、少し見ないうちにロブと言ってもいいほどに伸びていた。

「そうかなあ」

認めたがらない千歌に、曜と果南は笑った。ずいぶん前に伸ばしていた時もそうだったのを、曜は覚えていた。

果南の高く長いポニーテールは、今は流線型のヘルメットの下で窮屈そうに揺れている。登下校時に毎日海水を浴びるにもかかわらず、海藻のように艶やかな髪は傷むことをしらない。

「曜とは久しぶりじゃないね」

その果南に水を向けられ、曜は頷いた。

「大会で会ったもんね」

「大会って？」

「曜の高飛込の。千歌、来なかったでしょ？」

「あー、うん、ちよつとウチの仕事が忙しくて」

千歌の家は旅館を経営している。曜が出場した大会は三月の春休み中で、誘いのテキストには断りの返信が届いていた。

「だからその分イチャイチャしてるんだ、朝っぱらから」

「してないって」

「あつたかいんだよう、曜ちゃんのお腹」

「へええ。今頃そこには千歌ちゃんの子供が——」

「——だから！」

曜はペースを上げ、ニヤニヤ笑う果南の前に出ようとする。

だが果南も変速機を操作し、するするとスピードを上げてくる。

「いやあ、お似合いのカップルだと思うよ。高飛込ジュニアオリピックカップチャンピオンに、それを待つ田舎の健気な彼女」

「え、私？ 健気かなあ」

「男女逆転してる！」

『オリピックが終わるまで、君には会えない！ 分かってくれ千歌！』

「え？ えっと、『分かったわ、曜さん！ 私待ってる！ あのみかんの採れる山で！ 金メダルは仏壇に飾りましょ！』」

「うるさあい！」

「うわあ！」

小芝居を聞いていられず、曜は立ち上がってペダルを漕いだ。

グンとスピードが乗り、風を破る抵抗が増す。

千歌の声が景色とともに後ろに流れていく。

軽快車とロードバイクでは決まっている結果だが、勝負をかけずにはいられない。

緩やかなカーブを抜け、直線に入る。

みかん山を登る坂道への分岐路が見えてくる。

そこがゴールだ。今決めた。

対向車線に膨らみ、進入角度を調節。

スピードを殺さず坂道に進入！

「果南ちゃん！」

慣性で坂を登りながら振り向くと——

「いやあ曜は速いね。叶わないなあ」

——果南は気負わぬスピードで曜を追い抜いていき、そのまま低速ギアで坂道を登り始めた。

「じゃ、またあとでね」

からかわれた、と曜は気付いた。

「あー！ 曜ちゃん！ 果南ちゃんに負けちゃうよ！ ダツシュ！
スタートダツシュ！」

横座りのまま前を指差す千歌に、

「頭からっぽだなあ、私」

曜は返答ができない。

*

始業式は滞りなく行われた。

そして今年度最初のホームルームも終わった。去年と同じ担任に、去年と同じ教室、そして何人か減ってしまったが去年と同じクラスメイトで。《私立浦の星女学院高校》は明日から、去年と同じサイクルに入っていくのだ。

「あと一年か」

松浦果南がそう呟くと、

「首の皮繋がったね。とりあえず私たちの卒業までは」

スクールバッグを漁っていたクラスメイトが、嬉しそうに話しかけてきた。

「これで受験勉強に専念できるね」

「水を差すなあ、果南ってば」

ぼやくクラスメイトに別れを告げ、果南はバッグを手に教室をあとにした。

噂になっている統廃合や廃校は、今年度中はない。

理事会から公式に発表されたためか、浦女の空気はいつになく明るく感じられた。

そんな廊下を歩く果南は、制服のスカートを心細げにつまみながら、早くトライウエアに戻りたいと思う。制服を着るのもあと一年の辛抱だが、逆に程度に楽しんでおかなければ後悔するだろう、とも思

う。日常でスカートをはく機会など、果南にはないからだ。

教室棟を一フロアあがると、果南は二年生の教室を目指す。

曜とイチヤイチャしていた、今朝の千歌を思い出した。仲良さそうにしている二人の幼馴染みを見るのも、あと何度あるだろう。来年彼女らが三年生になっても、この学校は存在しているのか。

二年一組の教室で、幼馴染みは帰り仕度をするでもなく、窓際から一つ教室側の席に座り、机の上に突っ伏していた。

「潰れてるねえ、千歌」

いつもの席、いつもの姿勢だ。

グルリと頭を回転させた千歌は、横目遣いで果南を見上げた。

「果南ちゃんか」

「曜は？」

「お花摘み」

「ああ」

千歌の頭がまた回転し、窓の方を向く。窓際の席には曜のバッグが無造作に置かれている。

「果南ちゃんは？」

「トイレ？ 別に」

「違うよ。暇なの？」

「暇と言えば暇かな、今日もお店に予約は入ってないし。潜りに行くのかな」

と、千歌がガバツと顔を上げた。

「お化け!？」

「は?」

「お化けを探しに行くの!？」

その単語で、昨夜の電話を思い出した。

「ああ……曜が言ってたアレ？ そういうつもりじゃなかったけど。なに、気になるの?」

「気になる!」

なにが発火点になったのか、千歌はもう、席から腰を上げていた。「行き先決めてないなら、行こうよ!」トレジャーハンティング!

「……ゴーストハンティング？」

「お化けだったらこの時間はないと思うけどね。曜も誘ってみようか」

千歌は紅潮した頬で笑ったが、不意にしゅんとした顔をした。

「でも私、もうお小遣いがないんだった。まだ寒いよね……」

「器材？ もうすぐ点検期限の器材あるから、むしろ使ってほしいけど」

「ほんと!? じゃあ潜る！」

また笑顔に戻る。忙しい幼馴染みだ。

「オツケー。船の準備はこれからだから、のんびり来てよ」

と踵を返そうとした果南は、

「分かった！」

と荷物をバッグに乱雑に詰め込んだ千歌が、自分を追い抜いて教室を飛び出して行ってしまったのを見た。

「曜を誘ってほしかったんだけど……まあいいか」

下級生の教室に取り残された果南は、愛想笑いを振りまきながら廊下に出た。

「さて、と」

トライウエアの待つ更衣室に向かいながら、防水加工された電話を耳に当てる。

「あ、祖父ちゃん？ ……うん、レンタル器材、二セット備してくれる？ そうそう昨日のあれ。……うん？ 二セット。……違う違う、千歌の分。久しぶりでしょ。……うん、元気そうだよ。……ありがと、じゃあよろしくね」

電話を切ると、果南は溜め息をついた。

「あーあ、一人でサクッと潜ろうと思ってたのにな」

残念そうな言葉とは裏腹に、その声は喜色を帯びていた。

*

内浦湾と江浦湾の境界に当たる、一六五平方メートルの淡島。その東岸に位置するダイビングショップ《ファビュラス・ダイバー・ボーズ》から、クルーザーが出港した。

「そうそう、こんな排気ガスの匂いしてたー！ 懐かしー！」

「一年半ぶりだもんね、千歌ちゃん！」

渡辺曜が千歌と一緒にこの船に乗るのは、中学三年生の夏休み以来だった。

「なにか言ったー!?!」

コクピットの中の果南が振り返って言った。果南には後部デッキにいる千歌たちの言葉は届かなかったようで、曜は頭の上に両腕で大きな丸を作った。ハンドシグナルで「OK」や「平気」の意味だ。

果南は座席で操舵する彼女の祖父——松浦節三を見て、首を振った。

白髪交じりの髪より肌の方がよほど黒い海の男たる節三は、微かに肩を揺すった。笑ったのかもしれない。

松浦家の所有する全長三四メートルのクルーザー《ジュール丸》は、内浦湾をひた走る。どろどろとディーゼルエンジンの音を響かせ、エメラルドグリーンの船底で三本の白い波を刻み、舳先で向かい風を引き裂いて。

千歌はコクピット上のタワーコントロールに上がり、辺りを見回した。

「やっぱりそうなんだよ！ 始まりの鼓動、感じてるよー！」

千歌が両腕を広げ、わけの分からないことを叫んだ。

曜は幼馴染みの視界を求めて、左舷から進行方向を覗く。

左手には曜や千歌の家がある三津が、右手には岬の上の高校が辛うじて見えた。正面は三津と長井崎岬をつなぐ海岸通りだ。淡島は背後に遠ざかり、内浦湾は足の下。

普段は外側から見ていた景色を内側から見ているのだと、曜は気付いた。

四人が向かっているのは、この街の中心だ。

そう思い至れば、ワクワクせずにはいられない。

と、どるどるとエンジン音が下がり始めた。

「え、あれ？」

千歌がきよろきよろする中で、船は慣性航行に入り、やがて完全に

停止する。

「曜、この辺りが座標だけど、あってる？」

コクピットから出てきた果南が言う。

曜は淡島のエレベーターや長井崎岬などのランドマークとの距離を指で測ってから、

「うん、この辺り！」

と足元を指で示した。

「祖父ちゃん、投錨、お願い」

「アイ・ママ」

節三が揚錨機のリモコンを操作すると、モーターの駆動音と共に、錨鎖が下されていく。

「もう到着？」

耳まで赤くなって千歌が、タワーコントロールから顔を出した。

「うん、準備しよ」

曜が言うと、千歌はそそくさとハシゴを下りてきた。叫んだのが恥ずかしかつたのだろうか。

「気温：一七・七、風：南南西の三、水温：一五・四。ドライだな」

「早く暖かくなってほしいね」

果南は祖父と話ながら、ダイビングの準備を始めた。登下校の普段着でもあるトライウエアの上から着ていくのは、紺と緑のドライスーツだ。頭と手を除いて完全防水で、厚い生地のものなら真冬でも海に潜れる。

曜と千歌も制服を脱ぎ、下に着てきたスクール水着にドライスーツを着る。曜は紺と青、千歌は紺と橙。どちらもレンタルだ。

節三の営むダイビングショップで働き、インストラクターを目指すだけあって、果南は手際よくスーツに頭を通した。曜も体力作りのために夏場はしょっちゅう潜っているため、着るのに困ることはない。

だが千歌は、スーツに両脚を入れたところで、上半身部分を着ようと悪戦苦闘していた。

「引っ張るよ、千歌ちゃん」

「ありがとう」

曜が後ろからサスペンダーを肩にかけてやると、千歌は袖に腕を通した。さらに怪獣の着ぐるみを着せるように、お腹側からスーツを持ち上げ、広げた襟ぐりに千歌の頭を押し込む。

「首が折れるう……」

「もうちよつとー!」

すぽん、と首が通り、千歌は鋭く息を吐いた。

「よし! 変身完了ー!」

「まだだよ」

両腕を広げてポーズをとる千歌の後ろに回り、腕から腕へ背中を横断して伸びるファスナーを閉めた。

「よし」

二人は両手と頭以外をすっぽりと覆われた状態になった。ドライスーツは身体との間に断熱層としての空気を含んでいるため、ウエットスーツよりはダブついたシルエットだ。そのおかげで、海風に晒される船上でも、制服よりスクール水着より暖かい。

「私の、閉めてくれる?」

背中を向けた曜のファスナーを、今度は千歌が閉めた。

「はい、いいよ」

「祖父ちゃん、二人をチェックして」

とつくに準備の終わっている果南の指示を受け、節三は千歌と曜の背中を順にチェックして「問題なし」と二人の肩を叩いた。

ドライスーツを着たら、器材のセッティングだ。三人分の器材を出すど、狭い後部デッキがさらに狭くなる。

BC——浮力調整器にタンクを固定し、レギュレーターを繋ぐ。ブーツをはき、ダイビングナイフの代わりの水中ハサミを左脛に固定し、ウエイトベルトを締める。クリップを外した髪を、丁寧にラバーキャップにしまう。

「潜るまでが大変なんだよー」

「集中して、千歌」

三人でお互いの器材をチェックしながら準備していくにつれ、千歌が含み笑いを始めた。つられて曜も笑顔になる。この三人や千歌の

姉たちと何度も潜っていた小中学校の頃の記憶が蘇ってきたからだ。千歌が確認漏れや注意不足のミスで怒られていたことも、今となっては笑える記憶に分類されていた。

今日は貴重な部活休みだったが、こんな嬉しそうな千歌が見られるだけでも、お化け探しに乗った価値がある、と曜は思う。

「これで準備完了だよね、果南ちゃん」

足ヒレでペタペタとクルーザーのデッキを叩き、千歌が言った。

「うん、身体に叩き込まれてるみたいで安心したわ。曜は——」

「問題ないであります！」

曜はフル装備で敬礼し、

「——みたいね」

果南はようやく笑顔を見せた。

曜はクルーザーの縁から海面を見る。波は少なく、太陽の光を反射して海中はよく見えない。それでも水の透明度が低く、レジャーに適した水質でないのは分かる。

果南は右手の腕時計型ダイコン——ダイブコンピューターをチェックしている。三人のレギュレーターに接続された水深やコンパスを表示するゲージと同じく、矢に射貫かれた時計を模したロゴが刻まれたそれは、OGIグループの製品だ。

沼津の小原家に端を発したOGIグループが保有する、耐環境性を付与するラギダイズ技術は、今や様々な分野のデファクトスタンダードとなっている。耐水耐圧加工を要するダイバー機器も例外ではない。

「千歌」

と、果南が千歌に呼びかけ、右手を手のひらを上に向けて軽く握ってみせた。

曜にはそれが、ハンドシグナルで「OK」または「OK?」のサインだと分かる。と同時に、果南が千歌に「ブランクがあるけどハンドシグナルは平気？」と聞いているのだと察した。

「覚えてるよ、もちろん！」

千歌は自信満々に二種類のOKサインを作り、続けてパパパツとい

くっつかのサインを見せた。

「へっへーん。解の公式は忘れたけど、ハンドシグナルは忘れないね」

「それは困るなあ高校生。ウェイトはどう?」

「前より重い気がするよ」

「ドライだからね。さつき言ってた体重が正確なら、それで沈めるはず」

「た、たぶん」

果南は、曜には目配せをただけだった。二箇月前にドライスーツで潜ったログでウェイトを決めたからだろう、曜の体重が減多なことでは増減しないことを、果南は知っている。

果南がクルーザーの後部デッキからプラットフォームに降り、エグジット用のハシゴを海中に展開した。

と、曜の鼻が空気の変化を捉えた。西の空を見ると、僅かに雲の層が見えている。

「果南ちゃん、もうすぐ曇ってくるよ」

「ほんと? 祖父ちゃん?」

「ああ、だいたい一時間後から雲がくる。風向きも西南の七になるか」

タブレット端末を操作する節三が言った。

「錨鎖には近付くな。お化けはいないと思うが、危険なものを見つけたらフロートを上げろ」

「オツケー」

『危険なもの』には水死体も含まれますか!」

曜が手を挙げ、

「当然だ」

節三が頷いた。

「え、水死体!? そんなのあるの!」

「お化けを探しに行くんだから、あるかもね」

「イヤだなあ」

千歌は顔をしかめ、ペタペタと足ヒレを鳴らした。

「長居はするな」

「分かってる。九分五五秒で戻るわ」

果南は祖父に言いながらゴーグルをかけ、クルーザーの縁から背中から海に倒れこんだ。バックロールエントリーだ。果南は仰向けのまま海中を数メートル泳ぎ、海面から顔を出した。

「千歌、曜、おいでー!」

「う、うん!」

「アイ・ママ!」

曜は千歌から少し距離を開けて、ゴーグルを押さえてバックロールエントリー。

タンクの重さに引きずられるように、八〇センチ下の海面に着水する。そのまま身体を伸ばすと脚が海中に沈み込み、身体が垂直に起きる。BCとドライスーツ内の空気で浮力が保たれているので、潜行は始まらない。

「バランスは平気そうね」

千歌も同じくエントリーを済ませ、果南に姿勢を見られていた。

「ウェイトが足りなければサインちょうだい。多めに持つてるから」

「分かった」

「了解!」

「フィートファーストで行くよ。千歌、意味は?」

「足から潜る!」

「オツケー、英語的にはダメだからね」

曜は笑っている二人の方に近付き、三角形を描くようにフォーメーションを組む。

「全然ブランクなさそうだね、千歌ちゃん」

「当然!」

「はいはい。じゃ、潜ったら冷静にね。死体を見つけても、いきなりハグしないですよ」

「分かってるよ! 子供じゃないんだよ!」

「ならあとで解の公式の導出、聞かせてね」

「あー、子供でいいかな」

眉を寄せた果南の「潜行」のサインとともに、三人はレギュレーターをくわえて沈んでいった。

*

BCから空気を抜いて一拍あけて、身体が重くなつていく。さらに肺の空気を出しきると、器材の重さが浮力に打ち勝ち、松浦果南の身体は潜行状態に入った。

曜も同じペースで潜っている。これは予想通り。ダンプバルブから一気に空気を抜いての潜行は、二人が普段からやっていることだ。

千歌はなかなか沈んでこない。BCの空気をインフレーターで調節して潜行しているらしい。

千歌もダンプバルブ組だったが、ブランクで慎重になっているようだ。先行した果南たちに焦って追いつこうともしていない。一つのミスが命取りになるダイビングにおいて、いい傾向といえる。

果南は水深一メートルほどで曜に「水深維持」のサインを出すと、一旦BCに空気を入れ、中性浮力を得て静止した。

やがて千歌が肩のダンプバルブを操作して、果南たちの水深に降りてきた。果南は潜行開始の旨を改めて伝え、BCから排気する。ここからが本番だ。

耳抜きを繰り返して水深五メートルに到達、潜り続ける。

世界から赤が薄れ、穏やかな緑と青の光に満たされる。

海中は細かな泡や塵が舞っているが、見通しは悪くない。

海水の圧力に反発する鼓膜に、届く音は僅かだ。

深くゆっくりした呼吸と心音、泡の動く音、船の発電機。

一年半のブランクがある千歌の様子も、問題ない。

レギュレーターから出る呼吸は、始めより落ち着いている。

経験本数や精神状態が反映されるのがダイビングだが。

千歌は復帰一本目の一分で、勘を取り戻したらしい。

水深一〇メートルを通過した。

緑色の成分もだいぶ消えた。

海底がぼんやり確認できる。

さらに水深一五メートルほど。

肩関節の軋む音が耳に響く。

呼吸音と心音は意識外に消えた。

千歌の目と頬は笑顔のまま。

本番に強い心臓は相変わらずか。

水深一五メートル。

海底は目の前。

砂に覆われた岩場。

BCに断続的に給気。

潜行速度を調節。

二人から離れ。

姿勢を前傾させ。

指先で海底に、

着底。

(ふう)

心の中で息を吐き、張り詰めていたテンションを緩めた。

(まずはオツケーね)

穏やかな青に彩られた、エッジの滑らかな光景を見回す。

日光の一部しか届かない、人間を拒む世界。

日常の裏側にある異世界。

だが果南にとってはここが「世界」であり、地上の如何なる場所よりも落ち着く場所だった。

(さて、二人は?)

果南の世界に、少し遅れて闖入者が訪れる。

曜は海底に指先を押し当て、姿勢を維持した。

千歌は果南に手を振ると、海底に人差し指をあて――

(千歌!)

――そのままフィンが地面に落ちて、砂が巻き上がった。

(最後の最後で。着く魚先を濁すなあ)

砂煙の中で手が「助けて」のシグナルで振り回され、ぼこぼこぼこ、と多量の泡が頭上へ抜けていく。

果南は指に力を込めて海底から離脱、一メートルほど浮上したところで中性浮力を得ると、千歌の手を上から静かに握った。

千歌はすべきことを理解したようで、すぐに浮き上がり、果南の前

で静止した。両手を合わせて「ごめん」らしき表現をするが、そんなハンドシグナルはない。

果南は曜にOKのサインを見せ、ダイコンを確認した。

水深一五・六メートル、二分二七秒経過、ブランクのある千歌を含めてならまずまずのペースだ。

九分五五秒でエグジットするなら、浮上に余裕をもって二分、安全停止に三分として、探索時間は二分二八秒か。

(そう、探索だよ)

潜水中は意識していなかったが、これは「お化け探しダイビング」なのだ。

千歌は忘れていなかったようで、BCのポケットからLEDライトを抜き、三人の輪の外側に光を向けた。

曜もそれに続き、果南から離れる。

果南は海面を見上げた。ほぼ真上に、微かにクルーザーの花緑青色の船底が見え、アンカーロープが離れたところに降りている。この辺りが、曜が指示した座標と考えていいだろう。

(でもね……)

数百メートル離れた三津から算出した座標だから、誤差はある。『お化け』が沈む過程で(水死体から浮き上がる過程で?)潮に流された可能性もある。

そして巻き上がった砂煙は収まっておらず、海底付近の視認距離が短すぎる状況で、なにかを探することはできるだろうか。

(仕切り直した方がいいかな)

ダイビングでもっとも危険なことは、『焦り』だ。焦りは呼吸を乱し、エアの消費を早める。エアの減少ば焦りを産み、悪循環となる。ダイビングシヨップとして二人を引率する身としては、それは避けなければならぬ。

だが指示を出す前に、千歌の口から、ぼこり、と泡が出た。

そして、ライトが一点を向いて止まる。

(なに?)

ライトの円錐は、砂煙に浮かび上がっている。

その先にははなにも見えない。

だが千歌は、なんのためらいもなく、フィンをキックして砂煙に飛び込んだ。

(曜、あっち行くよ)

果南は曜に移動方向を示すサインを出したあと、慎重に周囲を見回し、あおり足で接近する。

砂煙を抜けると、千歌は着底地点から離れた岩場でフィンを漂わせていたが、やがて身体を起こし、こちらに握った手を伸ばした。

果南は「危険」のサインかと思ったが、そうではない。

開いた手のひらに乗っていたのは、小さな球体だった。

(これが「お化け」?)

どのような仕組みか、穏やかに明滅を繰り返している。

近付いてきた曜は、息を吐きながら球体を指差した。

(これが?)

その答えを二人が持っているとも思えず、果南は「浮上」のハンドシグナルを見せるしかなかった。

第一話：始まりの鼓動 — 2 (完)

B

球体は直径三センチほどで、正八面体の結晶がぴったりと内接して収まっている。ファンタジーものでよく見る、縦長の「クリスタル」のようだ。その結晶と球体の隙間を、液状のものが対流するように穏やかな渦を巻いている。

渡辺曜はそれを手のひらの上で転がし、廊下の蛍光灯を反射した輝きが手のひらで踊るのを見た。

「うーん、水風船っぽいんだけど、直接水を触ってる冷たさだよ。ゴムっぽい匂いもベタベタもないし。水の手触りそのまま固めました！ って感じ」

「羊羹の宣伝みたい」

千歌が笑いながら、球体を指で押した。曲面がへこみ、曜の手のひらに結晶の頂点がちくりと食い込む。

「結局、これが「お化け」なの？」

果南が問うが、曜は首を傾げるしかない。

始業式の翌日、入学式の手伝いで集まった曜たち幼馴染み三人は、廊下の一角で球体をいじり回していた。

窓の外では雨がしとしと降り続け、朝の低い光を灰色の雲が隠している。そんな中であって、球体はどういう理屈か、曜の手のひらに虹色の輝きを放っていた。まるで太陽の代わりと言いたそうに。

とはいえ、この握りこぶしに収まる球体に、内浦湾の中心から曜の家まで届く光を発するポテンシャルがあるとは思えない。

「そうだ、昔、光るスーパーボールってあったよね」

唐突に果南が言った。

「ほら、千歌が面白がって何個も海に投げたら、もの凄く怒られてさ。私たちまで拾わせられて」

「よく覚えてるなあ、果南ちゃん」

と言う千歌も思い出しているようで、ばつが悪そうな顔をした。

「でもスーパーボールじゃないか。結晶が尖ってるから、投げたら破

れそうだよね」

「お化けが死んじゃう！」

「死なないよ」

「ストーツプ！ 針路が逸れてる！」

曜は二人の会話に割り込み、千歌の方を見た。

「ねえ千歌ちゃん、昨日、なにがあったの？ たしか、『呼んでた』って言ってたけど……？」

曜の言葉で、笑顔だった千歌の眉が八の字に落ちる。

「なにか聞こえた、と思ったんだけど」

「なんて？」

「それがよく分かんなくて」

「やっぱり、ブランクありでいきなりあの水深は、まずかったかな。ごめんね、千歌」

果南が千歌の肩に優しく手を置くのを見て、曜は複雑な気持ちになる。

昨日、光る球体を回収してクルーザーに戻った時、千歌は『呼んだ』と言った。曜はそれを『お化け』からの声と解釈して身震いしたのだが、果南と祖父の節三は当然と言うべきか、潜水症による幻聴だと思っただのだ。

ゆえに千歌は大急ぎでかかりつけの病院に連れて行かれ、曜は球体を渡されて帰され、翌日の今日に到ったのだが。

「減圧症じゃないよ。果南ちゃんだって、診断、聞いたでしょ？」

一歳上の幼馴染みの反応に、千歌は唇を尖らせた。

「だいたい、声が聞こえたの、海の底だもん。上がる時だって、みんなでちゃんと窒素抜いたもん」

「そうだけど、それ以外に原因が——」

と、校内放送が重なった。入学式の準備が始まるアナウンスだ。

「——私行くね。千歌、今日は安静にしてなよ。なにかあったらすぐ救急車、いいね！」

「なんにもないよう！」

千歌は果南が階段への曲がり角に消えるのを見送ってから、曜の顔

を見た。

「私たちも行く。準備しなきゃ」

曜は千歌の背中を押して体育館に歩き出すが、千歌は不満そうに下顎にしわをよせたままだ。

「聞こえたんだけどなあ」

「ごめんね、千歌ちゃん。なんか、変なことになっちゃって」

「曜ちゃんのせいじゃないけど……」

元はといえば、曜が「お化けを見た」と言い出したことで向かったダイビングなのだから、千歌がなにかの声に導かれたのは、文脈では合っている。

だが曜が「お化け」と言い出したのは単なるフックであり、曜自身がお化けを信じているわけではない。なにより曜自身も、果南が言う潜水症の可能性を考えているのも事実だ。そんな状況で曜がなにを言おうと、頭が痛い展開になるのは目に見えている。

(だからってなあ。せっかく楽しそうな千歌ちゃんだったのに)

考えた曜は、ふと、手のひらに包んだままの球体を思い出した。

「千歌ちゃん。これ、あげるよ」

千歌がパツと振り返った。

「え、いいの？ 曜ちゃんが見つけたのに」

「だって、潜ろうって言ったのも、呼ばれて見付けたのも、千歌ちゃんでしょ？」

千歌は曜の手のひらで虹色の光を放つ球体をしばし見ていたが、ぱつと笑顔になった。

「やったー！ ありがと、曜ちゃん！」

抱き付いてきた千歌の背中をぽんぽんと叩くも、その眩しさに、そこはかとない罪悪感を抱く曜だった。

*

見頃の桜に囲まれた駐車場には、雨にもかかわらず、入学式が終わったばかりの初々しい新入生たちでひしめいていた。

ひしめくといっても、新入生は一三人、その保護者が二人ずついたとしても三九人と、通常規模のークラスの人数しかない。

内浦湾の西端を構成する長井崎岬、その海に面した高台に、《私立浦の星女学院高校》はある。

周囲の評判は上々だ。駿河湾に沿って並ぶ居住地からの交通の便はよく、「みかん山」と呼ばれるほど様々な柑橘類を栽培する畑に囲まれ、海拔約五〇メートルゆえに避難場所にも避難所にも最適だ。弓道場や剣道場など多様な施設を有する格技棟はスポーツ大会の会場に使用可能だし、カトリック系ミッションスクールであった名残のチャペルは近隣住民の憩いの場としても機能している。申し分はない。

ただしそれは、ほんの数年前までの話だ。

西浦地区、内浦地区の予防型高台移転について、沼津市や有力な企業が議論をしていたのは、数年前からニュースになっていた。それが去年、実施されたことで、海岸沿いの住民の多くが内陸部へ転居し、浦女から離れてしまったのだ。それに乗じて少なくなない人数が沼津市内や県外に流出したことで、全国的な少子化に地域的な過疎化が重なり、入学志望者数は加速度的に減っていった。

結果として多量の部活が存続困難から廃部となり、チャペルの聖歌隊は事実上活動休止、学校そのものの人気低下していったことで、今年度ついに三学年合計で五〇名を割るに到ったのだ。

それらが可視化されてしまったのが、この入学式といえた。

だが国木田花丸は、スキップを踏むように歩いている。制服の糊の匂いも消えるような雨の中、お気に入りの黄色い傘を回しながら。

浦の星女学院に入学した嬉しさに対する陰りは、花丸にはない。過疎化が進む状況だからこそ、この学校を選ぶのは確たる理由があるからだ。

だから細身ながらも一本の尖塔を頂くチャペル《聖ゲオルギオス礼拝堂》を見付けた時には胸が熱くなつたし、その前で頭の横で揺れるツーサイドアップの幼馴染みを見つけた時には、

「ルビィちゃんー！」

「あ、マルちゃん」

「入学おめでとうずらー！」

花丸は満面の笑みで抱きついていた。

「ピギイ！ ま、ま、マルちゃん！ 濡れちゃうよ！」

高音域の奇声を発した黒澤ルビイに、花丸は離れて傘を差し直した。

「ご、ごめんなさい、そんな驚くと思わなかったずら！ オラ、嬉しくて、つい」

「ううん、ルビイこそごめんね、ビックリしちゃって」

「私こそ、またオラって言っちゃった」

謝りながら、しかし、どちらともなくクスクス笑い出す。

「これから、また一緒だね！」

「うん！ クラスも一緒だし！」

同じ中学校から進級した二人は、お互いの傘を重ね合わせ、手を触れあい、顔を近付ける。

全校生徒が五〇人以下ゆえに、当然一学年一クラスしかない。沼津市内の小く中学校では同じクラスになれず、学校行事や授業では接触が少なかった二人だが、高校は一緒に色々なことができそうだ。

「そうだ、これ——」

ルビイがスクールバッグを探して、なにかを取り出した。

「——入学祝！」

それは直径四センチほどの小さなぬいぐるみだった。ボールの上に乗ったネコで、可愛いような可愛くないような、独特の顔立ちをしている。

「お揃いだよ！ 入学式に間に合ってたよ！」

ルビイのバッグにも、ピンクのクマの頭のぬいぐるみがついていた。

「あれ、これって」

花丸はそれらに見覚えがあった。中学校時代に二人がノートに落書きしたキャラクターだ。つまり——

「——手作り？」

ルビイが恥ずかしそうに小さく頷くと、花丸の顔は驚きから喜びに変わる。

「ありがと、ルビイちゃん！ 大事にするぞら！」

きつと、もつと楽しいことが始まるはずだ。その漠然とした期待に、むずがゆい心地よさがこみあげてくる。

と、ルビイの傘の向こうに、二つの和傘が見えた。

「ずいぶん遠くまで聞こえたぞ、ルビイ」

その声に、ルビイの身体がビクンと揺れる。

「今日から高校生なんだから、もう少し落ち着てくれないと」

「小学生相手のような言い方ですわ、琳太郎さん。でもその通りよ、黒澤家の人間たるもの、慎みを持って行動しなさい」

「お父さん、お母さん……」

「あの、琳太郎さん、瑠璃さん、お久しぶりです」

花丸はルビイから離れ、丁寧にお辞儀をした。

「こんにちは、国木田さん」

「ごきげんよう、花丸さん」

応えたのはルビイの両親——黒澤琳太郎と黒澤瑠璃だった。しわ一つない紋付袴を着た琳太郎は、恰幅の良い腹にふくよかな頬でニコニコと、藍色のつややかな留袖を着た瑠璃は、肩で揃えた尼削ぎに温度の低い切れ長の瞼を細め、娘の同級生に笑いかける。

「高校でもこの子をよろしく願いますわ、国木田さん。いくつになってもそそっかしいのですから」

「ルビイ、そそっかしくないよ、さつきのはビックリしただけだよ……」

「それでも、奇声を上げるのは感心しないな、僕は」

「う、うう……」

両親の間で、ただでさえ小柄なルビイが小さくなっているのを見て、花丸は心苦しくなった。

「あの、私もさつきみたいにそそっかしいので、ルビイさんにはご迷惑をおかけしてしまうかもしれません。それでもよろしければ、私こそよろしく願います」

もう一度頭を下げる。

そこに、ようやく娘を見つけた花丸の母——国木田環がやってき

た。

「あ、どうも黒澤さん！　うちの花丸がまたご迷惑を！」

「いえいえ環さん、お話をさせていただけいただけですわ」

双方の母が会釈をしあう。瑠璃は頬の端だけを僅かに上げて微笑み、環は笑顔を作りながらも傘の下から娘の肩を掴んだ。

「あ、あの、こんにちは……」

ルビイは花丸と話していた時と打って変わって、囁くような小声で挨拶をする。

「こんにちは、ルビイちゃん」

環はニツコリ笑って言う。だが瑠璃のように「花丸をよろしく」とは言ってくれない。

気付けば花丸は、母に肩をひかれ、ルビイから引き離されていた。

花丸たちだけではない、黒澤家の三人の周囲には、僅かに空間ができていた。周りの人たちが自然と距離を置いているのだ。

当然だろう、と花丸は思う。

黒澤家とは、江戸時代に内浦湾一帯の津元として栄え、明治に入ってから皇室の別荘である沼津御用邸を管理してきた、由緒正しき家系である。沼津大空襲で御用邸が廃止されて以降も、跡地である沼津御用邸記念公園の運営を沼津市より一任され、現在も沼津市内からここ内浦まで、その影響力と家の名を知らぬものはいない。

いや、そんな歴史的背景だけではない。

環の着る袋帯を締めた色無地は、国木田家に婿養子を迎える際に、環の父が奮発して買った一張羅だ。

だが瑠璃の着る留袖は、布地、染色、裁断、縫合、すべてにおいて質が違う。そして高級な着物を上品な年季が入るまで着こなす優雅さが、さらにはそれを雨の中でまとうことへの気取りのない自然さが存在する。

比べれば一目瞭然なのだ。

虫は自分の領分を弁えているからこそ、太陽に憧れはするものの、近付きはしない。

それが大人たちの磁場。

ルビイが「ごめんね」とでも言いたげな顔で、目配せを送ってきた。花丸も眉を寄せてみせながら、そうと知らず同輩のルビイと知り合えてよかった、と思っていた。事情を知っていれば、話しかけられなかったのは目に見えているから。

「あ、そろそろ説明会よ」

環が腕時計を見て言った。これから新入生は教室でホームルーム、保護者は別室で学校からの説明会になる。

「じゃあオラは——私は教室に行くね」

「こつちの説明会が終わったら、《松月》にでも行く?」

母の提案に、花丸は目を輝かせた。

「行く行く! みかんどら焼き食べたい! またあとでね!」

花丸は、同じく両親から離れたルビイの方に駆け出し——

「ずら?」

——違和感を覚えた。

駐車場を挟んで体育館と向かい合うように建つ、聖ゲオルギオス礼拝堂。学校と隔てるフェンスに囲まれたその榛色の建物の、開放された入口の奥で、明かりが揺らめいている。

そこに、人影が見えた。

ルビイは目をこらす。

(チャペル付きの神父様?)

いや、キャソックを着たシルエットには見えない。

ルビイが花丸の所作に気付き、振り返る。

二人の見る前で、それはチャペルから出てきた。

ねちやり、と。

妙に耳につく水っぽい音が、雨に混じって届く。

「なにあれ」

筋骨隆々としているが、どこか不自然な細部を持つ裸体。経年で汚れた布を、ぐるりと巻き付けただけらしい服装。男性的な両腕両脚に、女性的な色気がある乳房や腰回り。

「なにあれ!」

花丸の眩きとは対照的に、ルビイは大声を上げた。

「すごいコスプレだよ！ あのキトン、濡れても汚れが自然！ もしかして本物の汚れ？ 『ロード・オブ・ザ・リング』の衣装みたい！」
ルビイが意味不明な驚き方をして写真を撮ろうとしたので、
「る、ルビイちゃん、無許可で撮っちゃダメずらー！」

花丸は慌てて制止した。
「そ、そっか、そうだよ。あ、あの……。しゃ、写真……。撮っても……」

さつきとは打って変わって小声で囁くが、当然その声は届かない。
そうこうしている間に、その存在はフェンスのドアを押し開け、駐車場のコンクリートを踏みしめた。

「あ、コスプレ」

「すごい、誰あれ」

と体育館の周囲や前庭にいた生徒と保護者が気付き、誰かが写真を撮った。

「あ、あの」

ルビイが呟いた時には、余興の類いと思ったか人が集まってきた、自然と撮影会が始まった。

「天使？」

「生物っぽいっていうか、リアル路線ね」

その輪に遮られ、花丸とルビイは蚊帳の外に追いやられてしまう。
「コスプレだったんだ」

しよぼくれるルビイの横で、花丸は息を抜いた。違和感のある体付きにも納得だった。

「うう、みんなずるいよう」

タイミングを逸したルビイがその輪に加わりたそうな顔をしたが、電話の時計はホームルーム開始二分前を示している。

「ルビイちゃん、私たちは行く？」

「う、うう、そうだね……。あとでまた見られるかなあ……」

後ろ髪を引かれるルビイの手をとって、二人は歩き始める。

と、すれ違うようにストラックス姿の男性が走っていき、

「おい、どきなさい。お前、許可はとったのか」

とその輪に呼びかけた。

「入学式だからってその格好は許されんぞ。何年だ？ 高海か？ にしちやデカいな。なに着てるん——」

言葉が不自然に途切れた。

その一瞬後、花丸の視界の脇をなにかが通り過ぎ。

そば、と体育館の生垣に、なにかが突っ込んだ。

「——あ……あぐ……ゲエツ！」

男性が、濡れた生垣に覆い被さるように倒れ、嘔吐していた。

「ずらっ？」

花丸の声が、凍り付いた空気の中をすり抜ける。

遅れて紺色の傘が、コンクリートの地面に落ちた。

倒れている男性が、先ほどすれ違った男性だと花丸が理解した頃、

「ピギャア！」

ルビイが奇声を発し、

「矢野先生！」

「おいやばいよやばいよ」

「なにやってんだ！ お前！」

「近付くな！ こっち来なさい！」

つられるように駐車場が騒然とする。

「え？ なに？ どうしたずら」

花丸は状況が飲み込めない。

誰かが体育館に戻り、誰かが正門に逃げ、誰かが昇降口に走り、誰

かがクルマに取り付く。

その動きの中心にいる存在が、一步を踏み出す。

ねちやり。

男女入り混じった教師が四人、一斉に飛びかかった。

その後ろに、九人の黒服の男が続く。ルビイを始めとする黒澤家を

警備するボディガードだ。

だが教師の二人は脇腹を、一人は鼻柱を、一人は胸を殴られ、地面

に倒れた。

続くボディガードに到っては、なにが起こったのか分からなかつ

た。

全方位から警棒を手に殴りかかった屈強な男が、同時に倒れたのだ。

花丸は浅い息を繰り返す。

一三人の大人が倒れ、人が走り去った駐車場で、背中を向けたそれが見えた。

むき出しの背中を一直線に貫く、文字らしき一連の流れ。

その両脇にある、肩甲骨が飛び出したような細長いコブ。

天使？

なるほど、羽の付け根のようなデザインに見えなくもない。

「ま、マルちゃん？」

気付けば花丸は、ルビイを抱き締めて立ち尽くしていた。

二人の傘が、雨の中に転がっている。

お気に入りだったのに。

「マルちゃん、逃げようよ！ みんな行っちゃったよ！」

「でも、オラ、どうすれば」

二人の声に反応するかのようには、頭が後ろを向く。

「頭？」

中空の輪が、頭のあるべきところに何枚も浮いている。

細切りにした竹輪のように、皮の貼られた平たい輪が。

それが下から順に動き、花丸の方を向いたのだ。

頭の輪切りが。

「――！」

花丸は声にならない叫び声をあげた。

怪人。

その一単語が頭を駆け巡る。

雨音を押し退けるように、粘つく足音がする。

頭以外後ろ向きのまま、花丸に近付く。

「とまれー！」

離れた生垣から、全身びしょ濡れの男性が箒を手に飛び出した。最初に吹っ飛ばされた、矢野と呼ばれた男性教師だ。

容赦のない一振りが輪切りの頭に放たれ——
ぐぞ。

——一瞬の静寂に、手応えのない音が落ちる。
怪人の右肩と、真後ろを向いた左側頭部に、細長いくぼみが穿たれた。

「なんなんだ、お前」

返答は右腕でなされた。

腹を薙がれた教師は、駐車場をバウンドして転がった。
それで終わり。

「センセ！」

「近付くな！ 中に入れ！」

喧騒が戻り、雨脚がさらに強くなり——
(ルビイちゃん！)

——花丸はルビイを抱き寄せたまま、しゃがみ込んだ。

「マルちゃん!？」

きつく瞼を閉じる。

そうすれば、相手からも見えなくなると信じて。

「ルビイ！ 国木田さん！ こっちに来なさい！」

遠くから、ルビイの母の声がする。

「クソ、俺がやるしか——」

「——早く呼んでください！ 琳太郎さん！」

呼ぶ？ 誰かが助けてくれる？

「でもルビイが！」

「あなたが戦えるわけないでしょう！」

「分かった。……俺だ、キョウ！ 今、浦女に——」

——どん、とくぐもった音がした。

なにかが叫び、なにかが地面をこすり、なにかが割れる音がした。
今度はなにか起こったのか。

遠いはずの海の匂いが鼻に届く。

流麗なピアノの音色が耳に届く。

いや、知りたくない。

知りたくないのに、耳と鼻は閉じられない。
また、隕石が落ちてきてくれればいいのに。

*

「うわあー！」

高海千歌は尻餅をついた。幼馴染みが突如走り出し、二人で運んでいた荷物を落としてしまったからだ。

「曜ちゃん？　ちよつとー！　どうするのこれー！」

「お願い！」

曜は階段を踊り場までジャンプし、滞空中に言った。

「んもう」

取り残された千歌は、廊下で溜め息をついた。

入学式を飾り、管理棟三階の倉庫への道のりを歩んでいた紅白幕は、床でぐちゃぐちゃになっていた。

畳み直すにせよ運ぶにせよ、一〇キロ近くありそうな布塊を一人で処理するのは無理だ。誰かいないかと周囲を見回し――

「ん？」

――窓の外に目が留まった。

傘だ。梅雨に咲く色とりどりの花のような傘が、眼下の駐車場に転がっている。

その持ち主は、先ほど入学した新一年生とその保護者たちだろうが、彼女らは駐車場を放射状に逃げ惑っているようだ。

なにかから？

その答えは、放射の中心、赤い傘と黄色い傘が転がる場所のそばにいた。

「不審者！」

千歌はぐちゃぐちゃの紅白幕を飛び越え、廊下を駆け抜けた。

階段を駆け下り、踊り場でターンを決めて下駄箱を通り過ぎるまで

一〇秒。

下駄箱で外履きに履き替えていた曜を追い越す。

「千歌ちゃん！　安静にって言ってたじゃん！」

「でも！」

ランニングシューズの曜と共に昇降口を飛び出し、体育館と教会の間に挟まれた駐車場へと走る。

目的地は、明らかにおかしい状況だった。

校舎に走っていく生徒に、倒れている教師とボディガード。

赤と黄の傘のそばで、抱き合っとうずくまる二人の新生。

そして——学校の外から近付いてくるバイクのエンジン音。

「暴走族!？」

「去年壊滅させたはずだよ！」

二人のそばを、エンジン音が走り抜ける。

だが黒い染みの線を残して駐車場に向かったのは、バイクには見えない。

「え」

千歌の足が思わずとまる。

漂ってきたのは排ガスやオイルではなく、濃厚な潮の香りだったからだ。

*

花丸に抱かれた黒澤ルビイは、幼馴染みの緩やかにウェーブのかった髪の間から、それを見ていた。

緑色の、苔のようなドロドロした物体が、視界に飛び込んで来たのを。

それが時速数十キロで突っ走り、頭のない怪人をまっすぐはね飛ばしたのを。

ねじれるような声らしき音。

クルマのフロントガラスを叩く鈍い音。

頭のない怪人が、ボンネットを転がって地面に落ちる。

怪人をはねた緑色のドロドロは、ルビイの横でターンし、停まった。

エンジン音が静まり、代わりに小さなピアノの音楽が聞こえてくる。

ルビイは見上げる。

それは、四本の突起の生えた塊だった。

その突起が人間の四肢だと分かったのは、その塊が乗り物にまた

がった人の形だと分かったのは、完全に分離した何者かが二本の足で地面に降り立ったのを見た時だ。

「誰？」

答えるように、乗り物から寝息のような音がする。

それと共に、苔のようなドロドロが、乗り物に染み込んでいき。数秒で、シャープで小柄な外装をまとったオートバイが現れる。ピアノはそこから流れている。

頭のない怪人が、なにかを叫ぶ。

緑色の人の形が、そちらを睨む。

水分を失って鮮やかに硬化した苔の装甲が、胸や腕や脚を覆い。ナイフの如き分厚い一对の触角と、赤い大きな複眼が顔を覆い。カミキリムシの顎を思わせる一对の牙が、音を立てて口を覆い。腰のベルト状の意匠に収まった球体が、桜色の輝きを強く放つ。脇腹のスリットから噴き出した蒸気で、桜の花びらが散り散る。苔の怪人。

「助けてくれたの？」

答えず、怪人は歩きだす。

その先には、頭のない怪人がいる。不自然にゆがんだ胸と腿を蠢めかせ、立ち上がろうともがいている。

戦いにきたの？

と、ルビイの手を誰かが掴んだ。

「立って、早く！ 仲間割れしてるうちに！」

ショートボブの上級生が、ルビイの手を引いて立ち上がらせた。

見回せば、大人や上級生が駆け寄ってきている。

正体不明の存在が、ルビイたちから離れたからか。

「ルビイ！」

父の琳太郎も、袴の裾が濡れるのも構わず走ってくる。

ルビイは上級生の髪の毛の塩素の匂いを嗅ぎながら、渦中から離れていく。

「君も、ほらー！」

別の声がして、ルビイを引き剥がされた花丸も、立ち上がっていた。

だが足が動いていない。

「マルちゃん！ 頑張つて！」

「曜ちゃん！ こつち手伝つて！」

「ルビイは任せろ！」

「お願いします！」

曜と呼ばれた上級生からルビイを受け取った父は、娘を抱えるように走る。

ルビイは校舎のそばで下ろされ、そのまま琳太郎に飛びつき、雨で湿った紋付に顔を押し付けた。

肺が痙攣しているように息が浅く、心臓が破裂しそうなほど胸を叩いているのにやっと気付いた。

顔を上げると、傘の下の瑠璃の姿もあり、安堵で涙が出そうになる。だがルビイは振り返る。

ルビイの親友は、両脇を上級生に抱えられて引きずられていた。

「マルちゃん！」

その向こう、壊れたクルマの手前で、頭のない怪人が立ち上がった。はねられてメチャクチャになっていた脚は、なぜか元通りに治っている。

輪切りがバラバラと動き、頭のような形で苔の怪人を見る。

その苔の怪人は歩みをとめると、脱力した両腕を軽く持ち上げた。

勝ち目はあるの？

そうルビイが思った時、頭のない怪人が小さく踏み込み、その拳を引き絞り――

「カアッ！」

――コンクリートが振動した。

「え？」

地面に叩き付けられたのは、頭のない怪人。

ルビイは何度か目を瞬かせる。

どちらの怪人が、どちらに殴りかかったんだっけ？

方や顔が見えず、方や顔がなく、どちらかが声を発したか分からない。

そう考えている間にも、頭のない怪人は素早く立ち上がり、助走をつけて殴りかかった。

裂帛の気合。

両者が触れるか触れないかで宙に舞い上がったのは、今度も頭のない怪人だった。

なにが起こったのか。

怪人が地面に首から叩き付けられ、薄い輪切りの頭がべしやつと水飛沫を立てても、ルビイには分からない。

「合気道！」

花丸を運んでいる上級生が背後に叫び、ずっと前に姉と見た映画のアレだ、とルビイは父の胸の中で息を上げた。

苔の怪人は、両腕を身体の両側に下ろす。

同時に、脇腹のスリットから蒸気が噴き出す。

その動きに感じられる知性。

「やっぱり、護ってくれてる？」

と、両腕を地面についたままの頭のない怪人から、なにかが打ち出された。

苔の怪人の腕が振られる。

叩き落とされたそれは、輪切りの頭の一部だった。

「うわー！」

ルビイは顔をしかめた。

あれがボディガードをいっぺんに倒したんだ。

輪切りの頭はまだある。円弧を描いて、一枚、二枚と苔の怪人に向かう。

だが苔の怪人は動じていない。地面に落ちた輪切りを足で踏み付けながら、雨の中に左腕を伸ばし、形作られていくなにかを握る。

怪人の背丈以上の長さの、片刃の薙刀。

それを、雨水をめぐり上げるように大きく振るい、飛来する輪切りをすべて撃ち落としてしまった。

「すごい！」

ルビイは眩くが、状況は終わらない。

すべての輪切りを失った怪人が雨の中を跳ぶと、その背中のコブから真っ白な翼が生えたのだ。

差し渡し三メートルはありそんな翼を広げた姿は、誰が呟いたか“天使”としか言いようがない。

その天使が狙っているのが、花丸と二人の上級生だと、ルビイには分かった。

「マルちゃん！ 上！」

ルビイが叫んだ時、上級生の一方が気付いた。

怪人は頭のない頭を下に急降下し。

上級生の一人は花丸たちを突き飛ばす。

「うわー！ 千歌ちゃん！」

千歌と呼ばれた上級生は、倒れた二人をかばうように飛び出し、水たまりを蹴立てた左脚を軸に――

「うおりゃあッ！」

――上段蹴りを放った。

（空手だ！）

上級生の長い髪が膨らみ、足の裏が急降下してきた怪人の左肩を捉えた。

怪人の落下角が逸れた。

だがそこまでだった、上級生と怪人はもつれるようにコンクリートを転がった。

上級生はすぐに肘をついて起きあがろうとする。

だが怪人の方が早かった。

膝立ちに起き上がり、拳を振りかぶっていた。

「千歌ちゃん！」

「ビギー！」

ルビイは声を上げたが、目は閉じられなかった。

あの先輩は、ルビイと花丸を助けようとしたせいで怪我をしてしまった。

いや、死んでしまうかもしれない。

瞬きの間に世界が変わってしまふなんて、耐えられない。

だが――

「え？」

――振り下ろされた拳は、なんの結果ももたらさなかった。
頭のない怪人の胸から、なにかが飛び出したからだ。

薙刀の刃が。

そして。

頭のない怪人と薙刀がざらつと崩れ。

沸騰したように音を立てて泡立ち。

やがてコンクリート覆う雨と完全に同化してしまった。

その向こうに現れたのは、投擲の姿勢で残心していた苔の怪人。

それで終わり。

「消えちゃった……の？」

いや、なにかが落ちている。

手のひらに収まりそうな、淡く光る小さな丸いなにか。

ピアノの音楽が白々しく響く、雨以外に動くものがない世界を、苔の怪人が歩く。

そしてそのなにかを拾うと、踵を返し、緑色のバイクにまたがった。

バイクはどろどろとエンジンを唸らせると、水を裂いて走り去る。

なにも残らなかった。

なにもなかったかのよう。

「あれは誰だ？ 誰から？」

父が呆然とした声を発した。

それでルビイは我に返った。

「マルちゃん！」

琳太郎を離れてルビイが駆け寄ると、花丸は焦点の定まらない目で、

「ルビイちゃん？」

と言ったあと、ルビイに抱きついて泣き出してしまった。

その姿を見たら、ルビイの涙腺も緩んでしまう。

その横で上級生二人は、

「あー……絶対死んだと思った」

「そりゃこっちの台詞だよ！」

と言いかいをしているのだった。

*

液体は熱され、空気と混じり、泡となる。

弾ける泡の衝撃が力を、回転を、収縮を産み出す。

溢れ出た音は連なり、一繋がり音は波を産み、音楽となる。

途切れることなく、心臓の代わりに私を内側から叩き続ける。

蓄えた液体はいつか、泡となって失われるだろう。

それまで、この身は駆り立てられるのか。

*

「見ました!? みなさん、今の！ すごい絵が撮れちゃったわ！」

津島善子は、電話のフロントカメラを覗き込んでまくし立てる。

「いやー、入学早々こんなイベントに遭遇するなんて……。やはりこの雨は不幸なんかじゃなかったわ。我が堕天使ヨハネの《バロールの魔眼》からは、何人足りとも逃れられないのよ——」

自身を「ヨハネ」と呼称する善子は、上気した顔に似合わない低い声で芝居がかった台詞をはいた。姫カットに切り揃えた髪をシャープに揺らす演出つきだ。

カメラは自画撮りの善子を入れ込んで、駐車場を走り回る人たちを映している。その映像はリアルタイムにインターネットにアップロードされ、今まさにニコニコ動画で生配信中だった。

その映像に、視聴者が投稿したコメントが重なる。曰く、「なにやってんだ浦女www」「金かかってんなあ」「コスプレ怪人www」「面白かった」「8888888888」「ちよつとCGっぽすぎない?」「浦女オワタwww」「バロールの目じや死んじまうぞ」「さっきの先生すげー飛んでたな」などなど。

「違うよ違うよ、たぶん出し物じゃないし、CGでもないよ！ 本物の不審者だよ！ ほんとにヨハネたちの目の前で起こったことなんだから！」

「不審者きえたじゃんw」「金かけるとこ間違えてるだろ」

「だから——」

コメントと会話する善子の周りに、人はいない。

配信開始から五分にも満たない僅かな時間で、生放送の累計来場者数は五〇人を越えていた。うら若き女子中学生の顔出し配信などありふれた存在になった現在、中堅配信者から有名配信者へのランクアップの壁に悩んでいた《墮天使ヨハネ》こと善子にとって、これは願ってもないチャンスだった。

「そんな言うなら、インタビュ行っちゃうよ！ 《墮天使ヨハネの真夜中フラガラッハⅡエクストラ》！ お天道様の下でも、リトルデーモンたちの疑問に答えちゃうわ！」

善子は右側頭部のお団子を傘の柄で叩くと、駐車場を走り出した。電話のメインカメラで風景を撮影しながら、自体の渦中にいた人物へと駆け寄る。体育館と昇降口を繋ぐ渡り廊下の屋根の下で、抱き合っている二人の女生徒だ。

「すみません、ちょっといいですか！」

ぼだぼだ、と音を立てる傘をしまい、テレビのインタビュアのような敬語で話しかけた。

「先ほど怪人に襲われていましたけど、今のお気持ちは？」

「え、ええ？」

インタビュイに選ばれた生徒のうち、ツーサイドアップの少女が泣き顔を上げるが、

「な、な、なんですか？ と、撮ってるんですか!?! や、やめて、やめてください……」

か細い声で叫びながら、もう一人の生徒の肩に顔を埋めてしまった。

「あ、可愛い！ これはインタビュ映えるわあ！ ……えへん、なんで襲われていたんです？ さっきの怪人はなんだと思いますか？

お二人は護られていたようにも見えましたが？ 怪人との関係は？」

「わ、分からない、です……」

画面に「やめてやれよw」「その子超可愛いw」「顔見せてー」とコメントが流れていく。大半は無責任なものだが、そこに紛れた「それ

黒澤の子じゃね？」を善子は見落とさなかった。

「あんた、黒澤さん、つて言うの？」

「ええっ！　なんでそれを！」

少女が涙目の顔を上げ、慌てて顔を伏せる。

その小動物のような反応に、突破口をもたらしたネットの集合知に、そして自身の幸運に善子は感謝した。

「もちろん、すべてを見通すこの私、墮天使ヨハネの《ウジヤトの目》の力よ！　私に隠し事はできないわ！」

アナウンサーキヤラから変わってしまったが、善子はさらにカメラを向ける。

少女は周りをきよろきよると見回すが、教師は怪我人の搬送や保護者のクルマの誘導や教会へのフェンスドアの封鎖で忙しく、善子たちの状況に気付いている人はいない。二人の保護者らしき人物もいないようだ。

「ぎ、観念して白状なさい！　この生配信に！　すべてを——」

「——なんの騒ぎですか！」

怒声が響いたのは、そんな時だった。

昇降口から出てきた生徒が、和傘を差してつかつかと善子に向かっていた。制服に緑色のスカーフを締め、艶やかな黒髪を尼削ぎロングに切り揃えたその生徒を、善子は知っていた。

「せ、生徒会長！」

入学式で在校生代表として訓辞を読んだ、浦の星女学院の現生徒会長、黒澤ダイヤだった。

「え、うそ、黒澤って、え？　あの“黒澤家!?”　じゃあこの子が“あの“ルビィ!?”」

美少女を生配信に収めた幸運が一転して不運に墮ちる様に、善子の背筋が寒くなる。

慌てて電話の画面を見ると、「気付いてなかったのかww」「ギルティヨハネwwww」「だから言ったのにwww」「墮天不可避ww」などなど善子へのコメントが流れていく。

善子は慌ててフロントカメラに切り替え、

「ち、違うよ違うよ、気付いてたよ！ 気付いてたけどほら、有名人へのインタビューだから緊張しちゃって！」

そんな意味不明な発言を繰り返すも、

「うちのルビィに！ なにをしているのですか！」

すでに目の前にいたダイヤに電話をひったくられてしまった。

睫の長い切れ長の目に至近距離で睨み付けられ、善子はゆがんだ笑顔を貼り付ける。もはやキャラを作っている場合ではない。

「いやその、さっきの異常事態の体験者に、インタビューを……」

「異常事態?! ええ、わたくしも見ましたわ！ うちの不肖の妹が！」

カメラを突き付けられているところを！」

「ち、違うんですよ！ 妹さんが不審者に襲われてて！」

「自己紹介とはいいい度胸ですわね！」

「本物の不審者です！ 先生も怪我をしたんですよ！」

「怪我？」

と、ようやく逆八の字の眉の角度を緩め、ダイヤは周囲を見回した。

「なんのことですか？ わたくし先ほどまで執務中でして」

だが頭のない怪人も、苔の怪人が残した痕跡も、すべて雨に流れてしまっている。

ただ、教師や保護者がなにやら対応を行っていることや、近付いてきた救急車のサイレンで、なにかがあつたことは認識したようだった。

それを察した善子は、ここぞとばかりに早口でまくしたてる。

「でも生徒会長！ この私、津島ヨハネが、一部始終をニコ生でバッチリ配信しましたから！ あとからタイムシフトでも見られるんで！」

あ、なんなら拡散してくれても——」

「——ニコ生？ 配信？」

「ネットの動画生放送ですよ。あ、ほら、今も配信してますよ、それ」と、ダイヤが持つ自分の電話を善子が指差すと、ダイヤはその画面を矯めつ眇めつする。

「わたくしが映っていますわね。……え？ これが今放送中？」

「ええ、そうですけど」

善子が画面を覗き込むと、「いえーい！」「生徒会長さん見てるー？」
「姉妹揃ってクツソ美人だな」とコメントが流れていた。

「は、は……」

「クシヤミですか？ ならカメラから離れて——」

「——破廉恥な！」

違う意味の大音量に、善子は顔をしかめた。

「は、破廉恥い？」

「うら若き大和撫子の面を、公共の電波に乗せるなど！ 破廉恥と言わずしてなんと言いましょう！ しかもこの、神聖なる学びの園で——」

ダイヤの剣幕と和傘から飛び散る雨水に、善子は後退って手を振る。

「でも学校内で生配信しちやダメなんて、生徒手帳にもどこにも——」

「——規則を破らなければ、なにをしてもいいわけではありませんわ——」

反論が通じる状況でないことは、すぐに分かった。

「ご、ごめんなさい——」

善子が頭を下げると、ダイヤは息を吐き、バッグから黒い端末を取り出して耳に当てると、頷いた。

「わたくしたちはこれで失礼いたしますわ。次にこのようなことをしたなら、分かっていますわね？」

そう言って電話を善子に返すと、彼女の妹とその友達を和傘に入れ、三人で寄り添って渡り廊下から離れていく。そこに丁度、ずんぐりしたボンネットのリムジンが入ってきた。

「あれが黒澤家か……。やっぱり、生きてる世界が違うなあ」

初めての遭遇に、善子の心臓はまだ高鳴っている。

と、校内放送が流れた。不審者侵入の件と、生徒の集団下校もしくは保護者の送迎を促す内容だ。

あんなことがあれば当然か、と善子は、素直に集団下校に加わろうと傘を差して——

「え？ え？」

——駐車場のあちらこちらから、こちらをちらちらと見ている生徒に気付いた。

「なんで注目されてるの？ 私。いや、そりゃ、ヨハネほどの墮天使が現れれば、対となる天使が現れるのも必然だけどさ。そんなに注目すること、くない？」

続いている生配信に弁解がかった台詞を吐くが、流れてきたコメントに眉をひそめる。

『ヨハネの高校デビューオワタ？』

善子は入学初日に、沼津の名家、黒澤宗家のご息女二人にケンカを売ったようなものだ。周りの目が変わるのも仕方がない。

「え？ そういうこと？」

明日からどんな顔で学校に来ればいいんだ？

*

「全作戦行動、終了しました」

「了解。撤収する」

暗く狭い空間の中に、落ち着いた男たちの声が響く。

遅れて壁を埋め尽くすディスプレイのいくつかが消えた。

「申し訳ありません、お嬢様。せつかくご足労くださったのに」

闇の中で、椅子の背もたれが音を立てる。

「構わないわア」

返答は、甲高く、明朗で、華やかで、場違いな少女の声だった。

「懐かしい顔も見られたし」

日本語に似合わぬ、息の強弱がはつきりした声。

「それに、面白いものもね」

電話の明かりが、軽く揺すられる。

画面に映っているのは、ネットの動画投稿サービスのページ。生配信された映像はすでに、無断コピーで拡散を始めていた。

二人の存在が争う映像が。

「《Branchia》……Lock—onよ」

次回予告

千歌「ついに始まったよ！ 『仮面ライダーメルシャウム』！ 九人のスクールアイドルが織りなす、歌とダンスとバトル！ お楽しみにね！」

曜 「仮面ライダー？ メルシャウム？ スクールアイドル？ 歌とダンスとバトル？ 看板に偽りありじゃない？」

果南 「それらしい九人もまだ出てないよね」

曜 「あ、それって振り？ 出てきてほしいの？」

果南 「そういうつもりじゃないけど」

千歌「じゃあお二人の疑問要望にお応えして、次は急展開で行くよ！」

曜 「あ、一応、九人は出てるの？」

千歌「次回、仮面ライダーメルシャウム第二話、『未来、変わり始めたかも』！」

果南「余計なこと言ったかな、私」

C

「また明日ね、曜ちゃん」

「学校があつたらねー」

高海千歌は橙色の傘を差して、クルマで走り去る曜に手を振った。曜の母に家用車で自宅前まで送ってもらったところだった。

「あーあ……暇になっちゃったなあ」

自宅——国の有形文化財である老舗の旅館《十千万》を前に、千歌は電話を見て息を吐いた。

入学式のお手伝いが終わったら、久しぶりに曜と遊びに行こうと思っていたのだが、あいにくの雨模様に加え、学校から送信されたテキストで「自宅待機」を命じられてしまった。家にも連絡網メーリングリストで連絡が行っているから、一度家に戻ったらもう外に出るのも難しくなる。

あんなことがあつた直後なのだから、それも分かるのだが。

「あんなこと、かあ」

そう呟いた千歌は自然と、十千万から道路を隔てた向かいにある、三津海水浴場に降りていった。

内浦湾に面した海水浴場は狭く、砂浜はせいぜい幅三〇メートルほどだ。しかも左側をホテルに、右側を遊覧船の栈橋に挟まれ、実態以上に開けた感じがしない。

砂浜を歩きながら、あの球体を取り出す。

二年次始業式の昨日から、不思議なこと連続だった。

“お化け”を見付けた曜。

内浦湾の底で拾った小さな球体。

怪人と言えぬものたちの襲撃。

そして。

千歌は額に手を当てる。

その光景を思い出す。

怪人の拳は、千歌の腹に届いていた。

千歌と怪人の間にあつたのは――

「――私を護ってくれたの?」

曇天に覆われた鈍色の海に、鮮やかな球体を掲げる。

球体の中に収まっている正八面体の結晶は、六箇所内接したまま、穏やかに揺らめいている。

「ねえ、あの時、私になにを言ってたの?」

問いかけ。

瞬き、息を吐く。

バカバカしい。

曜が“お化け”と言ったから、その気になっていたただけだ。

果南の言う通り、減圧症だったのだろう。

そう考え、球体から焦点を外した時。

その向こう、栈橋の先端に、もう一つの球体が見えた。

それは傘だった。

灰色の世界に挑むように広げられた、桜色の傘。

持っているのは、見慣れない服装の少女だ。鮮やかな紺のブレザーに、チェックのプリーツスカート。制服のようだが、この近くにあのデザインの学校はない。

でも何故だろう。

見覚えがある。

いや、違う。

千歌は気付かず、その方向に歩み出していた。

『明日よ変われ、希望に変われ』……』

言葉が口から漏れる。

九人の少女が歌う、決意の歌が。

何度見たか知れない。

九人の少女が着ていた、制服を。

『眩しい光に照らされて』……『変われ』

手の中の、小さな球体を見下ろす。

輝く結晶をうちに秘めた、穏やかに光る球体。

橙色の傘が砂浜に落ちる。

現実には、非現実が混ざり合った新学期。

どんな非現実な夢だって、叶う気がする。

今なら。

この街でなら。

「私も、輝ける?」

顔を上げると、栈橋の少女も千歌を見ていた。

その視線に、心臓が高鳴る。

「μ, sみたいに」

その名前が、自然に漏れる。

ふいに風が吹き抜け、濃厚な潮の匂いが漂った。

第二話：未来、変わり始めたかも — 1

A V

桜内梨子がヘルメットを脱いで最初に思ったのは、「意外と潮の匂いがしない」だった。

去年の冬にクルーズで回った東京湾は、それが濃厚だった。潮の匂いとはプランクトンの死骸などが原因で発生するらしいから、この海は東京湾よりも魚が豊富で水質が綺麗、ということだろう。

自分に宛がわれた、桜色というには真つ白なフェンダーを突き出した中型のオフロードバイクに触れる。路肩によせてエンジンを切ってから久しいが、雨に濡れたタンクはまだ暖かい。

と、スーツ姿の男性が、歩道を歩いてくるのが見えた。

「早いな、梨子。やっと追いついた」

「お父さんが安全運転なのよ」

父——桜内桑介は傘の下で、後頭部まで禿げあがった貫禄のない顔で笑う。東京から乗ってきた社用車は、すぐ先のコンビニに停めてきたようだ。

「ん？ いつ着替えたんだ？」

梨子は音ノ木坂女学院の制服を着ていた。もちろん膝丈のスカートでバイクに乗れるわけはなく、父が最後に見た姿はレインコート姿だったはずだ。

梨子は答えず歩き出し、海に突き出した栈橋に入る。父も後に続く。

湾を抱える両腕のような陸地の内側にある街。

雨で境界の曖昧になった世界。

父の転勤先が湾に面した街だと聞いた時、海にいい思い出のない梨子は嫌な気持ちになった。栈橋からこうして眺めている今も、それは変わっていない。

陸地の左腕側を見る。高台の上の小さな白い建物が、梨子が転校する私立浦の星女学院高校のはずだ。

この街ではどこにいても、海からは逃れられないだろう。だが学校

の中なら海は見ないで済むだろうし、見えたとしても潮の匂いがなければ、広い湖の畔にいたような気分になるかもしれない。そう予測すれば、少しは気が楽になる。

「少しの辛抱だ、梨子。少しだけ、検査に協力してくれ」

「うん」

「大変な目に遭うかもしれないけど、僕らにはそれが必要なんだ」

「うん」

「いざとなればお父さんが護るけど、それでもどうにもならない時は――」

「――分かってるよ、お父さん」

梨子が遮ると、桑介は力なく笑い、梨子も微笑んだ。

父はこう言うが、会社での桑介の立場からすれば、桑介が梨子を護ることはできないだろう。だが彼がそう口にしなのは、会社における自分の立場を娘が把握している、と確かめるのが怖いからなのだろう。梨子はもう、それが察せる年齢になっているというのに。

「お父さんはこれから会社だけど、荷解きの方は任せていいね？ ウ

チの住所は分かる？」

「平気、メモがあるし」

「そうか、なにかあれば近くの人に聞いてみなさい。転校生だって言えば、こんな田舎町だし、助けてくれるだろう」

「私たちも、もう『こんな田舎町』の住人なんだけど？」

「そうか、それもそうだな」

矢継ぎ早に喋る父は、娘を心配しているようで、自分を心配しているようにみえる。

と、遠くでバスが停まったのが見えた。高台の学校へ向かう海岸通りを走る路線だ。明日からは梨子も利用することになる。

「じゃ、お父さんは行くからね」

「うん」

「しばらくは二人なんだから、なにかあったら会社に連絡しなさい」

「分かってるよ」

「暗くなる時間も分からないから、早めに――」

「——分かってるって。またあとでね」

桑介は栈橋を出て歩道を歩いていった。梨子は反対に、栈橋を突端へと向かって進む。

桜色の傘の柄を掴む指が、無意識に鍵盤を探して動く。

唇が小さく開き、メロディを奏でる。

コンビニの駐車場から社用車の出て行く音がする頃、栈橋の突端に辿り着く。

小さな海水浴場の脇から延びる栈橋は、看板を見るに、中型のクルーズ船に乗るためのものようだ。船はたった直径一キロしかない湾を回る遊覧船らしく、今は栈橋にはおらず、一望できる湾にもいない。休業中なのだろう。

見回すだけで終わる世界。

迷い込んだ自分。

金属製の橋脚に打ちつける波が、どこかから泡を運んできた。

家には行きたくなかった。

両親のいない、自分が梱包したダンボールだけが、人の温もりの痕跡を残す家。梨子の家ではない。

では東京に帰りたいのか？

ピアノコンクール音ノ木坂女学院代表としての梨子は、勝利の機能をまっとうできなかつた。二度目のチャンスは与えられなかつた。

波が引き、泡は海へと連れ戻される。

だがまた波が寄せれば、陸にぶつけられるのだろう。

自分は泡だ、と梨子は思う。

海に捉われていた大気の欠片が、仲間を求めて海面を目指す球体。海面に出たとして、海と陸の間を波に遊ばれてたゆたうだけの球体。居場所がない。

二つの境界に乗らなければ、存在の確立しない虚ろな穴。

二つの境界に乗っている事実だけが、存在価値である膜。

そんな漠然とした恐怖が、梨子に不安の爪跡を残す。

出し抜けに風が吹いた。

無秩序に暴れる髪を押さえ、梨子は海に背を向け。

砂浜に誰かが立っているのを見る。
制服姿の長い髪の少女だ。

地元の子だろうか。
驚きの顔がなにかに照らされ、曇天の下に取り残された太陽のように見える。

こちらを見ている。

その顔が、あまりに眩しくて。

梨子は顔を背ける。

海が目の前に広がる。

視野が狭まり、傘が指からこぼれる。

「どうして」

下腹部が疼く。

身体が熱い。

泡が割れば、還れるのだろうか。

泡が割れば、還れるのだろうか。

どこへ？

「ダメえええええ！」

「え？」

棧橋を踏み鳴らす音に半身を向けた時、梨子の身体は無意識に動いていた。

掴みかかろうとする腕を掴み。

身体を逸らして力をいなし。

腕を相手の顎に引っかけ。

直線の力を回転の力へ。

そのまま仰向けに――

びだーん！

「あ」

――棧橋に叩き付けられたのは、先ほどの少女だった。

「あー！ ウソ、どうしよう！」

仰向けに倒れた少女は、目を回して動かない。

「ちよつと、あなた！ 急にそんな！ ねえ、ちよつと！ 誰かー！」

「千歌が悪い」

「なんでよー!」

「そんなの突き落とされると思うに決まってるよ」

「飛び込もうと思ってると思っただよ!」

「だったら離れた位置から呼びかければいいじゃん」

十千万に担ぎ込まれた高海千歌は、旅館の喫茶スペースにて、姉の美渡からの攻撃を受けていた。

「ごめんね、ほんと。こいつ、だいたい見境ないからさ」

「いえ、その、私の方こそ思いつきり……」

千歌の横に座っている少女は、加害者であるはずが被害者として恐縮してしまっている。

「そのくらいにしなさい、美渡」

口を挟んだのは、高海家の母——枝海だった。落ち着いた小豆色の和服を着て、木製のお盆を手に歩いてきた。

「ここはお客様の場所よ、お話ならともかく、お説教なら向こうでしなさい」

枝海は三人にお茶を出すと、少女に「ごゆっくり」と笑いかける。

「私は客じゃないって?」

「たまたま通りがかっただけでしょう」

「そうだよ、お姉ちゃん。仕事サボってなにやってんの」

千歌は切り込む隙を見つけたと思い、便乗して反発した。

「サボってないって。たまたま仕事でこっちにきたから、寄っただけよ」

「ほら、たまたまじゃない」

「お母さん!」

言い合う母と姉を見られるのが、千歌は恥ずかしくなってきた。

「私平気だから! 君、行こ?」

熱いお茶を口に含み、千歌は少女の手を取って出口に向かう。

「あ、ちよつと千歌!」

「お母さん、私部屋に行ってるから!」

「はい」

「え、私も？」

「ちよつと千歌！」

「会社に戻らないなら手伝って行きなさい」

「ああもう、戻るよ戻る！」

二人の娘は旅館から出た。

「バカチカ！」

「バカミー！」

競うように傘を広げた姉と別れた千歌は、少女の手を引いて駐車場に入り――

「ふふふっ！」

――笑われた。

「あー、もう、君まで笑うー！ みんな、ちかっちのこと笑うんだからー！」

一人称がうつかり“ちかっち”になったのも、遅れて恥ずかしい。頬が赤くなる。

「ごめんなさい。そうじゃなくて……仲がいいんだな、って」
「へ？」

千歌の予想に反して、少女にバカにしたような態度はなかった。

「私、きょうだいかいから、さつきみたいなの、なんか楽しくて」
「仲がいい？ いやいや、疫病神だよ？ あれ。いない方が絶対いいから」

「疫病神？」

そういつて少女はもう一度、口に手を当てて笑った。

その仕草がなんだか上品で、千歌は思わずドキツとしてしまう。

背中まである髪から漂う潮の香りが、海育ちの千歌の感覚を乱しているのかもしれない。

千歌はそんな気持ちを振り払うように、

「でもよかった！」

と大声を出した。

「さつき、君、海に飛び込む五秒前、って顔してたんだよ？ でも、ご

めんね、私の勘違いだったみたいだね」

それは本音だった。まるでお昼のドラマで二股をかけられた挙句捨てられた女優のようだった顔が、今は年齢相応の顔でクスクスと笑っているのだから。それが自分と姉のきょうだいゲンカの微笑ましさによるものだとしても、千歌は嬉しかった。

「そうだよ、私、自殺なんてできないから」

少女は怒ったように困ったように、そつと眉を寄せた。その表情も、この街の人の面持ちとは違って見えて、千歌はむず痒くなる。

「でもうちの道場、投げもやっててよかったよー。あれ受け身なしで入ったら、背骨いつてたよね」

「道場？ って——」

「——千ー歌ーちゃんー！」

梨子の発言を遮るように、自転車のブレーキ音とはつらつとした声が飛び込んできた。

「曜ちゃんが遊びに来たヨーソロ……誰!？」

自転車からヒラリと飛び降りた曜が、梨子を真っ直ぐ指差して叫んだ。

そこで千歌は、梨子と相合傘で密着している状態に気付いた。梨子が傘を差す前に、手を引いて外に出てしまったのだ。

「いやあの、これはその、って、曜ちゃん！ 自宅待機だよ!？」

「お母さん仕事に戻っちゃうから、千歌ちゃんとトランプでもしてろって——いやだから、そちらの方は!？」

「ああ、えつとこの子は……。あ、私、高海千歌だけど、なんて名前なの?。」

千歌はようやく、自分が少女の名前を聞いていないことを思い出した。

梨子は苦笑してから、傘の中で小さくお辞儀をする。

「桜内梨子、今年から浦の星女学院に転入する二年生です。よろしくね、高海さん」

*

明治二〇年創業の歴史ある旅館《十千万》は、その冠に違わず淑や

かな和風建築だが、敷地の裏にある高海家宅は昭和初期に建てられた二階建て鉄筋コンクリート造だ。

「発表があるの」

そう口にした千歌の自室も、当然普通だ。畳敷きの和室に、目の細かい砂壁、同じような木目が並ぶプリントの天井板。ベージュのシーツがかかったベッド、小学校時代から使っている木製の机、天井まで届く本棚、ダイオウグソクムシのぬいぐるみ。中学生の頃に入った時と変わっていない。

そこまでは。

「私、スクールアイドル始める!」

その宣言を聞く前から、渡辺曜はイヤな予感がしていた。

部屋に入った時からずっと、壁を徹底的に隠すがごとく吊された、たくさんの女の子が写されたポスターから目が離せなかったからだ。

「曜ちゃん、聞いている!」

クツシヨンの上に正座する梨子と曜に、仁王立ちの千歌が言った。

「き、聞いている聞いている」

慌てて視線を千歌に戻すと、幼馴染みの顔が笑顔に変わった。いきなりエンジン全開だ。

「でも、どうしたの急に——」

（——いや、急じゃないのか? なにがあつたの、千歌ちゃん）

曜のそんな困惑に構わず、千歌は電話を操作して、曜に画面を見せた。

「え? なにこのサイト。え、読め? えつと——」

『スクールアイドル・学生、主に高校生が部活動で結成する学校所属のアイドル、およびその活動。スクドルとも。』

各学校レベルで行われていた活動が、二〇〇九年のA—RISEの登場により全国区化、商業化が進み、二〇一二年に全日本スクールアイドル連盟が結成される。全国大会は、同連盟が主催する「ラブライブ!」。今年度で七回目と八回目が開催される予定』

——ふーん」

「分かる!」

「そりや分かるよ、書いてあることは」

曜は英語用の単語カードのつづりを開き、「スクールアイドル」「ラブライブ！」などとポイントになりそうな単語を書きながら答える。

「え、なに、続き？」

『現在のスクールアイドルシーンは、アプターム……』

——ん？ なにこの文字。マイクロ……？」

「みゅーず！」

「ム、s」で？ 石鹸？」

「曜ちゃんまで！ もうそのネタ聞き飽きたよー！」

「そんなこと言われても。えつと——」

『現在のスクールアイドルシーンは、アプターム、s」。ム、sが空けた穴を埋めるべく、全国各地でグループが群雄割拠しているが、現在も次なる潮流は現れていない』

——ム、sが空けた、穴？」

「そ、ム、sが全部を変えちゃったんだよー！」

そういつて千歌は自分の電話を曜からひったくり、なにやら歌いながら操作し始める。

曜がカードに「ム、s」と書き込みながら横目で梨子を見ると、彼女は助けを求めるように曜を見ていた。自分も同じ顔をしているだろう、と曜は想像する。

というか、数十分前に出会った女の子を自宅に連れ込んでなにをしているんだ、この幼馴染みは。

「え、また読めばいいの？ ——」

『ム、s【みゅーず】・ギリシヤ神話における創作の女神の名前を持つ、九人の女性スクールアイドルグループ。国立音ノ木坂女学院高校アイドル研究部所属。』

生徒数減少による同校の廃校を阻止するために結成された。パフォーマンスは九人のメンバーによる歌唱と群舞。公式に記録されている楽曲は二四曲（バリエーション曲含む）。

ファーストライブ映像の流出で世に知られ、定期的なPVの発表やライブで着実に人気を集める。第一回ラブライブ！は出場を辞退し

だが、第二回でスクールアイドルの代名詞だったA—RISEを破り、名実ともに頂点へ。同校の廃校を阻止しただけでなく、わずか一年間の活動期間で、スクールアイドルの存在をお茶の間まで広げ、海外ライブを実現するなど、知名度はスクールアイドルの中でも随一。多様な楽曲を残しており、特に大会やPVで披露したダンスチューンは、曲、詞、衣装、パフォーマンスのすべてがハイレベル。一部からは、学生の部活動に求められる水準をプロレベルに押し上げた功罪も指摘される。

——ふーん、え？ ——

『スクールアイドルは、A—RISEが始め、μ sが確立し、そして壊した』と言われることも『

——壊しちゃったの？』

「そこはどうでもいいの！」

千歌が断言し、再び電話は持ち主の手に奪い返される。

「分かったでしょ？ そういうこと！」

「分かんないよ、こんな、いきなりたくさん見せられても分かんないって！」

「んもう！ 大事なのはここ、ここだよ！」

千歌の力んだ指が示したのは、μ sの説明文の一部、『生徒数減少による同校の廃校を阻止するために結成された』だった。

「そういうこと？」

曜はカードに「廃校」を書き込みながら、周囲のポスターを見回し、そこに意匠化された「μ s」の文字が踊っているのを認めた。彼女ら九人がμ sらしいが、曜の目には正直、それが時代劇の四十七士か、スパルタのスリーハンドレットなのかも判別できない。

「要する千歌ちゃんは——」

単語カードのリングから「廃校」のカードを抜き、畳に置く。

「——廃校になりそうな浦女を救うために——」

次に「スクールアイドル」のカードを、「廃校」のカードの上に置いた。

「——μ sみたいにスクールアイドルを始めよう！ って言いたい

の？」

その翻訳に千歌は「うん！」と満足そうに頷き、そのリアクションに曜は半笑いになる。

「ち、千歌ちゃん、さっきのこと覚えてる？ 私たち襲われたんだよ？」

「え？」

「だから！ さっきのアレだよ！」

「そりや覚えてるけど」

「ねえ、アレって？」

梨子が疑問を挟んだことで、曜はこの話題が、浦の星女学院部外者の梨子には伝わっていないことに気付いた。

「えつとね、梨子ちゃん、転入前にこんなこと言うのもなんだけど、さつき学校に怪人が出たんだよ。ドロドロでベチャベチャな緑色のヤツと、頭が輪切りになってクルクルって回るヤツ！ それが学校で戦って、うちの生徒と先生も襲われたの！」

実際には怪我をしたのは教師五人に黒澤家のボディガードだが、あのままなら被害が拡大していたのは確実だ。新生入生を助けようとした時は無我夢中だったが、冷静に思い返すと身震いがしてくる。

だが梨子はピンときていないようだった。当然か、曜だってこんな風に言われたら信じない。

「そうだ、今動画出すよ」

曜はアップロードされた動画を電話で再生し、梨子に渡す。

「え、これ……」

画面を見るなり梨子が絶句し、曜は我が意を得たりと千歌に向き直った。

「これが普通のリアクションなの！ こんなのが出ちゃったら、アイドルもなにも、生徒なんて減る一方だよ！」

そう言って、「怪人」と書いたカードを「スクールアイドル」の上につけた。

「うーん、でも、減った分も取り返す勢いなら」

「そりや死者は出てないけど、このままじゃ——」

「——平気じゃない？ 渡辺さん」

曜に割り込んだのは、電話から顔を上げた梨子だった。

「この緑色の方の怪人、みんなを護ってる」

「え？」

動画を覗き込むと、たしかに緑色の怪人は、ツーサイドアップの新入生を庇うように、輪切り怪人をはねたように見えなくもない。千歌の時もだ。

「いやいやいや、動画で見たらそうかもしれないけど、違うよ、単なる仲間割れだよ、怪人の！」

「こっちの怪人は味方なんだと思うよ」

確信めいた言い回しをする梨子に、さっきまで自分の側だと思っていたのが突然千歌側についてしまった梨子に、曜は絶句する。

「そうだよね！ ほら曜ちゃん！ 怪人は怪人に任せて、私たちはアイドルだよ！」

「もー！ 呑気すぎるよ！ 梨子さんはともかく、千歌ちゃんは死にそうになったのに！」

「いやあ、それほどでも」

「褒めてない！」

と、梨子が目をパチクリさせているのに、二人は気付いた。

「どうしたの？ 梨子さん」

「私、＼たち＼？」

その言葉で、曜のイヤな予感が再湧出する。

「千歌ちゃん、スクールアイドルって、千歌ちゃん一人でやるんだよね？」

「え？」

千歌は心底意外そうな顔で、μ、sのポスターを指差す。

「九人でしょ？」

「一応聞いてあげるけど、そのメンバーは？」

「私と、音ノ木坂からの使者、梨子ちゃんと——」

「——え？ ええ!? 私!？」

「μ、sの母校の梨子ちゃんがいれば、百人力だよ！」

「そういえば、制服同じだ。そうなんだ」

曜は今になって、いくつかのポスターで、sが着ている制服が、梨子のそれと同じだと気付いた。

「え？ だから拉致ってきたの？」

「あと、曜ちゃんと果南ちゃんかな、今決まってるのは」

あー、不意打ちきた。

「千歌ちゃん！ 人を頭数に入れるのは誘ってからにしてよ！」

曜は千歌の肩を掴んで前後に振る。

「だ、だから今誘おうとしてたんだよう」

「私だって水泳があるのに——って、千歌ちゃんだって空手あるでしょー！」

「空手は使いどころないしさあ」

「さつきだって空手キックであいつを倒したのに！ てかまさかスクールアイドルって、梨子ちゃんが音ノ木坂から来たから思い付いた案!? いっ思い付いたの!? 何分前!？」

「ち、違うよ、前から——」

「——ごめんなさい！」

その声が曜の耳に届くが早いか、梨子の姿は千歌の部屋から消えていた。

「……千歌ちゃん？」

「ちよ、ちよっと、強引だった……かな」

曜にじっとりと睨まれた千歌は目を逸らし、ようやくエンジンの回転数を落とした。

*

「お待たせ致しました、国木田様」

「は、はい！」

昨日と打って変わって晴天の朝、普通のクルマの二倍近い全長がある黒塗りの高級車が、私道の入口に停まった。前後にやはり黒塗りのセダンが一台ずつ。まず間違いないカタギではない。

国木田花丸は心臓が二ミリくらいに潰された気持ちになる。だが体格のいい黒いスーツの男性が、慇懃に頭を下げてドアを開けてくれ

るのを見れば、乗らないわけにもいかない。

「じゃ、行つてくるずら、パフエ」

《妙法寺》からついてきてくれた黒と茶のジャーマン・シエパー
ド・ドツグの頭を撫で、私道を登つていくのを確認して、車中に乗り
込む。

果たしてそこには、見知った顔があった。

「おはよー！ マルちゃんー！」

「あ、おはよー、ルビイちゃん！ 今日はあるがとね！」

花丸はホツとしてルビイの隣のシートに座つたが、

「ごきげんよう、花丸さん」

ルビイの姉、黒澤ダイヤまで乗っているのは、当然のはずなのに、何
故か想像していなかった。

「ご、ごきげんございます、生徒会長様」

奇妙な挨拶へのコメントはないまま、リムジンは静かに滑り出す。

「あ、付けてきてくれたんだ！」

ルビイが花丸のスクールバッグを指差した。そこにはボールに
乗ったネコのぬいぐるみがついていた。

「うん、せっかくルビイちゃんがくれたんだもん、お揃いだよー！」

言いながら花丸は、二人のバッグを検閲するようなダイヤの目を気
にする。

「あ、あの、校則違反です？」

「『節度を持った装飾品』と見なしますわ」

ダイヤの言葉に花丸は安心し、ルビイと顔を見合わせて笑った。

ダイヤは軽く息を漏らしたが、それがどんなニユアンスか、花丸に
は分からなかった。

昨夜、私立浦の星女学院高校の理事会は、記者会見で授業の開始を
発表した。

入学式に正体不明の存在に襲撃されたことを考えれば、警察の現場
検証やメディアの取材の影響を考え、数日間は休校になつてもおかし
くはない。だが理事長のジョルジョ・ルカーニアは滞在先のアメリカ
から、民間警備会社による警備体制の強化と警察への協力により、生

徒の安全と事件の早期解決をアピール、授業の開始を宣言したのだ。

それは学校が各家庭に通達を出すより早い発表であり、また理事には被害に遭いかけたルビイの父である黒澤琳太郎も選任されていることもあって、正体不明の不審者による女子校襲撃というニュース以上に理事会の動きが賛否の波紋を広げた。今朝には沼津新聞や静岡新聞の一面を飾るほどのニュースになってしまい、さらには《黒澤総合警備保障》のボディガードが九人がかりで正体不明者を撃退できなかった事実や、学校の警備や調査にルカーニア氏がCEOを務めるOGIグループの警備会社《OGIスクード》の参画の発表により、全国紙どころか経済誌、外国の紙面をも騒がせたそう。

これを「ルカーニア氏が出資する学校の、廃校回避のための売名行為」だと受け取った論客は少なくなき、現在もルカーニアの個人SNSアカウントは炎上中だそう。

だが事情はどうあれ、生徒は授業があるなら登校するだけである。花丸はスマートフォンと遮音フィルムの貼られた窓ガラスに手を触れる。

紫外線どころか一部の可視光線まで遮断された太陽は冷たく、リムジンの車内は落ち着いた間接照明で照らされている。向かい合わせのシートどころか内装はすべて黒の本革だ。

運転席と客室の間には透明な仕切りが降りており、運転席の音は聞こえない。それどころか。ろうろう、とエンジンの振動が微かに伝わってくるだけで、走行音は皆無だ。

加速も減速も、三人が手にするコーヒーカップとソーサーが音を立てないほどに滑らかに行われ、外が見えなければ移動しているのかどうかも定かでないだろう。

総括して、異質な乗り心地だ。普通に生きていたら絶対に乗れない類のそれであり、そう意識すると、花丸の胃が痛くなってくる。送迎の申し出に渋った花丸の母の気持ち分かる気がした。

「マルちゃん、平気？ お腹痛いの？」

顔に出ていたのか、ルビイが心配してくれる。

「やっぱり今日は、休んだ方がよかつたんじゃない？」

沼津市内に住む花丸は、バスで学校に行くのが不安だった。市内から浦の星に通う人はほとんどおらず、一人になるであろう通学時間が心細かったからだ。

そんな花丸の気持ちを雑談のテキストから察したルビイが、ボディガードに護られたリムジンで登校しようと誘ってくれた時は嬉しかったし、

「平気だよ、マルは元気だから」

そんな親友の好意に応えるために、花丸は笑顔でなければならぬのだ。

「あ、あの、ダイヤ先輩、昨日はありがとうございました」

もちろん、その姉にも。

「なんの話ですか？」

「インタビューされてた私たちを、助けてくれました」

ああ、と友人の姉は僅かに首を傾けた。長めの尻削ぎに切り揃えられた黒髪が、ウィンドチャイムのように規則正しく揺れる。

「あれは私の功績と言うより、黒澤家の落ち度ですわ」

「え？ ル、ルビイたちの？」

妹の狼狽に答えず、ダイヤはまた首をほんの数度傾け、窓の外を見る。

「黒澤家の人間ともあろうものが、衆人環視の中で動けなくなるなど、あってはならないことですわ。そして黒総警——黒澤総合警備保障の従業員も、九人がかりで一人の不審者も確保できないなどと、鍛え方が足りない証拠です。極め付けは黒澤家の家長夫婦たる父と母です。手持ちのボディガードを全員失っているのに、不審者に十分に近付かせるまで娘を放置するなど、言語道断ですわ……」

「そ、そんなこと言ったら、オラがルビイちゃんを抱えて竦んじやったのが悪いんです！」

「そもそもルビイの方が、花丸さんの前に立たねばならないのです。進んで矢面に立つ覚悟のないものが、重き責務を背負う黒澤家の後継ぎ候補たりえまじょうか」

「そんな」

「ですから花丸さん、あなたはわたくしたち黒澤家に、恩義を感じる必要などありませんのよ」

結局ダイヤからルビィへの説教のような形になった会話に、花丸は言葉を繋げられず、肩を小さくした。

この二人は普段から、このような「黒澤家の人間たるもの」といった会話をしているのだろうか。

温くなったコーヒーに口を付けている間に、リムジンは江浦湾沿いの道を延々と南下していく。梅原龍三郎が「絵の浦」と呼んだ通り、緑の山々が深い青の海に迫る風景は美しいが、進むにつれて過疎化の進んだ街並みが目立ってくる、その美しさも白々しく思えてしまう。

やがてこんもりと丸い淡島が見えてきた。あわしまマリンパークへの港を越えればもう内浦湾の縁、この安全運転なら、目的地まで一五分ほどだろう。

「お姉ちゃん、なにかいるよ。学校の上」

ちようどそこで、ルビィが声を上げた。

「マスコミですわ」

花丸がルビィの前に身を乗り出して見ると、黒っぽいものがゆっくりと移動しているのが分かった。場所はルビィの言う通り、浦の星女学院のある岬、長井崎岬の上空だ。

「へりですか?」

ダイヤが無表情で頷いた。

リムジンがトンネルを抜け、海岸通りに入った辺りから、学校関係者ではない人の姿が目についてきた。テレビ局のクルーや記者、野次馬などらしい。その中の何人かは、やってくるリムジンにカメラを向けて近付いてくる。

「ぎゃー、ぎゃー、ぎゃー」

電柱に群がる羽虫のような人々に、花丸は思わず窓から離れてルビィに寄りかかってしまう。

「落ち着いて、マルちゃん。どっちの声も聞こえないし、ルビィたちのことは見えないから」

ルビイに肩をいだかれた花丸は、人々の視線がこちらに合っていないこと、口に対応する声が聞こえないことを遅れて理解する。それでもイヤな気分は拭えない。

「黒澤家の送迎用リムジンのナンバーなど、とつくに割れています。逃げ隠れする必要などありませんわ」

ダイヤは流れていく内浦湾に目を向けたまま、気怠げに呟いた。

「いつもこんな感じだったの？ なにかあると」

「うん。ごめんね、マルちゃんにイヤな思いさせちゃって」

「それは……いいんだけど」

プライバシーを護られたリムジンは、何事もなく人々を通過する。

「普段通りに学校に行くと言言し、そして行くこと。それもわたくしたち、黒澤家の責務ですわ」

普段はことあるごとに「ピギイ！」と悲鳴を上げるルビイでさえ、一五歳の高校生とは思えないほどの諦めの表情を浮かべている。幼稚園の頃からの付き合いなのに、親友のそんな顔を見るのは初めてだった。まるで古典の推理小説に登場する、古の呪いを継承する一家のようで、花丸の胸は苦しくなる。

「あ、お姉ちゃんお姉ちゃん！ ほらほらー！」

そんな空気を破ったのは、当のルビイだった。

彼女の電話に表示されたのは、二人の怪人が争っている動画だ。

「やめなさいルビイ。ニコ……云々？ などと破廉恥な生配信サービスを利用するのは」

「だってお姉ちゃん、怪人のこと興味あったみたいだから。あと、これ生配信じゃないよ」

花丸たちにカメラを向けていた少女が配信した、《墮天使ヨハネの真夜中フラガラツハ》枠の動画が、別サイトに無断転載されたもののようにだ。

ルビイはリムジンの客室を中腰でダイヤの隣に移動し、電話を差し向ける。ダイヤは気乗りしていなそう態度だったが、ルビイの見立ては正しかったようで、首の角度は少しずつ電話へと正対していった。「緑色の方、できるようですわね。この構え、芦田流、いや、芦川流だっ

たかしら」

「よかったでしょ？ 配信があつたから、この記録も残つたんだよ」
返答に困つたらしいダイヤは、ふと、画面を指差した。

「《仮面ライダー》？ とは？」

耳慣れない言葉を口走つた。そういうコメントが動画に流れていったようだ

「昔やってた特撮ヒーロー番組だつて。昨日からネットはそればかりだよ？」

「カメンライダー……カメンライダー……聞き覚えがありますわね。花丸さん、存じています？」

「私は知らないです」

花丸が短く否定すると、ダイヤは改めて画面に集中し始める。

あの時は何もかもを拒絶したくなってしまった花丸だが、同じく怪人に襲われたルビィが姉と一つの電話で件の動画くだんを見ている様をみると、現実味がない。すべて夢だったような、小説の中の出来事だったような気がしてくる。

気付くとダイヤは、両腕を軽く持ち上げ、パンチのようなことをしている。ルビィが横で笑っているのにも気付かない。

「戦いたかったですか？」

花丸が言うと、ダイヤは咳払いをして開き始めていた膝を閉じた。

「久しぶりに『刑事ニコ』が見たいな。お姉ちゃん」

「あちらに薙刀は登場しませんわよ」

ダイヤが口を斜めにした時、サスがうねる感触が伝わり、エンジン音が低くなつた。みかん山を登る道に入ったのだ。

「あ、ルビィたちだ！」

傾いた車体の中で、ルビィが電話を指差した。

「いけません！」

ダイヤがルビィから電話をもぎ取り、再生を終了した。

「あ、なんでよ、お姉ちゃん」

「怪人の情報については認めます。ですがこの先は、あの津島ヨハネとかいう新入生の売名行為でしかありませんわ。いくらルビィが可

愛いからといって、そんなものがネット上に存在するなどと、言語道断です！ 花丸さんもそう思いますわよね？」

唐突に話を振られた花丸は、少し考え、言葉を探す。

「開高さんは示しました。『位高ケレバ、務メ重シ』って」
人差し指を立て、軽く顎を上げる。

「マル——私とルビイちゃんは、インタビューを勝手に配信されて困りました。それはたしかです。あの子の売名行為に利用されたのも、たしかでしょう。でもそれは、学校の理事会の記者会見と同じです。理事会は昨日の一件を広める手段として、黒澤さんの家を利用しました。ルビイちゃんとダイヤ先輩が登校するのも、その一部です。一方、津島ヨハネさんも、自分の動画を広める手段として、結果的にルビイちゃんとダイヤ先輩の美貌と家柄を利用しました。どちらも持って産まれた資質——《輝き》です。資質は発揮しなければ意味がない。たとえ『矢面に立つ覚悟』を要するとしても。言い換えれば——」

すっかり冷めたコーヒーを、一口、含む。

「——『ノブレス・オブリージユ』」

その饒舌に、ダイヤとルビイは何度か目を瞬かせた。

「ま、マル、ちゃん？」

「え……？」

幼馴染みの大きな目に覗き込まれて、花丸は正気に戻る。

「ご、ごめんなさい！ マルったら偉そうなことをペラペラ！ 別に、ルビイちゃんに矢面に立つてほしいわけじゃないから！」

「持つて産まれた資質……？」

ダイヤの自問するような呟きをかき消すように、花丸は口を開く。

「ルビイちゃんはどうかだったずら？ インタビューされて、イヤだった？」

「ルビイは……泣いちゃってなければ、ネットで晒されちゃってもいいんだけど」

「なんですって!?!」

「ピギイ！」

妹の言葉にダイヤが目を見開いた。

「ルビイ、あなた！ 黒澤家の人間ともあろうものが、なんとはしたない！」

「じよ、冗談だよ！」

「言っているいい冗談と悪い冗談がありますわ！ 後ろ帯の乙女が不特定多数の殿方に自らの、自らの……なにを晒すと言うのです！」

「か、顔だよ！ お姉ちゃん！」

「ルビイちゃん、迂闊ずら……」

とてもではないが、ルビイと一緒に「歌ってみた」「踊ってみた」動画をネットにアップしたことがある、などと口に出せない花丸である。

第二話：未来、変わり始めたかも — 2 (完)

B

「だって、いきなり『ごめんなさい』って。あり得ないよ、曜ちゃん」
「当然です」

「愛の告白じゃあるまいし」

「プロポーズみたいなものだったじゃん」

「そうじゃないんだけどなあ」

「一目惚れって意味じゃ同じでしょ?」

「違うよお」

違うだろうか、と曜は昨日の光景を思い出す。相合傘で見つめ合っていた二人は、それこそようやく運命の相手に出会えたカップルにか見えなかったが。

渡辺曜は窓際の席に座り、数学の公式を書いた単語カードをめくりながら、幼馴染みと話をしている。

斜め後ろの席に座る千歌は、机に突っ伏したままこちらを廊下側を見ている。相変わらずアップダウンの激しい子だ。

「髪、切ったら?」

「ヤダ」

「なんで」

机の上で悶える千歌は、髪にまみれてお化けのようだ。

「あーあ、せつかくなにかがどうにかなりそうだったのに」

「具体性ゼロ」

「スクールアイドルだよー」

「いいじゃん、梨子さんじゃなくなたって、集めれば」

「なんでよー。最後のピースだったのに……」

「最初のピースでしょ」

千歌は口を尖らせたが、「そんなことないもん!」と立ち上がり、「一緒にやるでしょ、麻衣ちゃん!」

隣の席を見た。

そこには誰もいない。

「千歌ちゃん。麻衣ちゃんは引越しちやっただじゃん」

千歌の口がゆつくりと閉じていく。

「そっか。そうだよね」

そして静かに席に座りなおし、顔を隠すように机にうつ伏せた。

去年と同じように。

「よし席につけー！」

鼻に白いギプスを当てた女教師が教室に入ってきた。昨日怪人に殴られて鼻骨を折られた、二年生の担任教師、笠木信代だ。

生徒がバラバラと動き出す。始業式と入学式が終わり、今日から浦の星女学院は日常に戻るのだ。

学校の状態は、《日常》とは言い難いかもかもしれない。昨日の怪人騒動のせいで、三年生は三人が欠席、二年生は二人が欠席、一年生に至っては半数の七人が欠席だそう。現場を直に経験した新入生と、入学式の手伝いに来ていた千歌と曜を含む数人を除けば、在校生はネットにアップされた動画でしか状況を把握していない。このいびつな出席状況状態は、彼女らの好奇心を考えれば当然とも言える。実際、動画上に登場した曜は、登校直後に質問攻めにあって大変だったのだし。だが、曜からすれば、それも日常の一形態のように思える。

いつからか曜は、この街に渦巻くトロリとした生ぬるいものの存在を感じている。すくおうとしても指の間からこぼれ、その割りにベツトリと手を汚していき、殺したと思ってても気付けばそばにいる。

そして、誰かの希望を一つずつ飲み込みながら、静かに成長していく。

《怪人》とは、それが《非日常》の異物として、日常に染み出してきたものではないか。

誰の目にも分かる、滅びの運命として。

そんな曜の物思いは、

「数IIなのになんで笠木が、って思ってるだろ？ 今日は何んと！

転入生がいるぞー！」

「浦女に!？」

「転入!？」

信代の言葉と教室のざわめきでかき消された。

「入れ！」

そして信代の威勢と反比例しておずおずと入って来た少女を見て、そうだった、と思い出す。

浦の星女学院とは違うブレザーの制服に、漆のような茶色が自然に入った長髪。

身体の線の細さ、肌の色の白さ、そしてはにかむような笑顔。

この街には珍しい存在感に、クラスメイトは一瞬静まりかえり、次いで黄色い声を上げた。

桜内梨子は困ったように眉を八の字にしたが、曜と顔を上げた千歌と見つけて、小さく手を振った。

「梨子さんつてさ、なんか、天使みたいだよね」

「キレーだよねえ」

「千歌ちゃん？　ほんとに一目惚れしてない？」

「あーああ」

脳細胞を一グラムも使っていないような吐息を漏らす千歌からは、先ほどの落ち込み具合はまるで感じられない。やはりアップダウンの激しい子だ。

「最初、うっかり転出書類を書き始めちゃってな。入ってもないのに追い出すところだったわ」

笑う信代の横で、転校生は黒板に自身の名前を小さく書き終え、丁寧に辞儀をした。

「桜内梨子です。国立音ノ木坂女学院高校から来ました。よろしくお願ひします」

一旦は静まった教室に、「音女だ」「マジで？」ときざ波のような眩きが広がる。

「それだけか？　趣味とか特技は？　泳げたりするの？」

「一応、絵を描いたり、小物を作ったりしてます。あと料理も少し。泳ぎはあんまり得意じゃないです」

「音楽は！」

突然の大声に、教室中が驚いた。

曜は驚かなかった。千歌が起立していることにも。

「えつと……はい、ピアノと、あとヴィオラを少々」

やはり控え目な返答に、千歌は畳みかけるように、

「作曲は！」

と重ねる。

「一応……少しは……」

「じゃあ歌とダンスは！ あと——」

「——いい加減にしろ、高海」

割り込んだ信代が、頭をかきながら梨子を見る。

「桜内の席はあそこ、あのうるさいヤツ——高海の横なんだが……変えるか？」

「あ、いえ、平気です」

しかし「よろしくね、渡辺さん、高海さん」と着席する梨子は、明らかに、希望に目を輝かせる千歌を警戒しているようだ。

曜は、その希望がこぼれ落ちなければいいな、と思う。

*

松浦果南が一限の片付けをしていた時、ぼんぼんぼん、と空気を裂く連続音が遠くから聞こえてきた。

「またテレビのヘリだ」

「ちよつと多くない？」

クラスメイトが騒ぐ中、気にせずバッグに教科書を入れていた果南だが、今日一番の騒音が校舎に叩き落とされた時、その手をとめた。

首をもたげる予感に、忘れていた感情が沸き起こる。

制限高度を違反したマスコミのヘリであつてほしい。

でももし、あのヘリなら……。

やがて騒音は学校を通り過ぎ、裏山の格技棟、その屋上にあるヘリポートに着陸した。

見えてはいない、音の動き方で分かる。

かつて心待ちにしていた音なのだから。

「今の、なんだろうね。妙に近かったけど」

クラスメイトの肩を叩かれた果南は、

「さあ」

軽い口調で答えた。

*

管理棟二階の職員室から出てきた桜内梨子は、目の前にいた千歌に声も出せず驚いた。

「……どうしたの？」

「待ってたの！」

そう言うと、千歌は臆面もなく梨子の腕に抱き付いてきた。

「ちよつとー！」

その距離感に、梨子は思わず頭を反らす。

「ねえ梨子ちゃんいいでしょ？ 一緒にスクールアイドルやろうよー！」

「だから、その、そんなこと言われても」

「なんでよー、昨日は途中までノリノリだったじゃん！」

「そ、それは——」

「——あーもうこんなところにいた！ 千歌ちゃん！」

廊下の向こう、教室棟と管理棟がL字に連結する角から、曜が走ってきた。

梨子はホツとして、教室棟に向かって歩き出す。千歌がそれに追いついてきて、曜もUターンして合流する。

「転校初日なんだから、千歌ちゃん一人で独占しちゃダメだよ！ 梨子さんも、千歌ちゃんのことはいあんまり気にしなくていいから」

「なんでよー、気にしてよー」

「千歌ちゃんの発言を全部真に受けてたら、一日が三〇時間あっても足りないよー！」

「あ、ひどいー」

二人のじゃれ合いを横目に、梨子は部屋の並びを覚えようと頭上のプレートを見る。職員室を通りすぎ、次は応接室だ。

「ひどくない。人を巻き込むなら、もっとちゃんと誘わなきゃって言ってるの！」

「ちやんとっ？」

「そ！ ちゃんと」

「そうか！ そうだよね！」

さらに会議室を横目に、生徒会室へと向かう。管理棟二階はこの四つだと頭に記録。

「梨子ちゃん！」

「は、はい！」

そんな時だから、突然矛先を向けられてビックリしてしまった。

「私と一緒に、スクールアイドル始めませんか!？」

「ごめんなさい！」

ビックリしていても結論は変わらない。

「ええー、もう、なんでやりたくないの？」

「普通やりたくないと思うけどなあ」

「だって私、その、地味ですし」

「!!」

物理的な衝撃を食らったように、千歌が壁に吹っ飛んだ。曜までも。

「地味。なに地味って、曜ちゃん」

「地味とは（哲学）」

「え？ え？」

そのリアクションが理解できず、梨子は立ち止まって二人を見比べた。

「分かってないの!？ この清らかな長髪、清楚な佇まい、天使のような顔立ち、どこから見てもアイドル感満載だよ！」

千歌が口にしたのは概ね「清い」のバリエーションだ。逆に「清いとはカツコテツガク」と言いたい。

「さすがに千歌ちゃんに同意だなあ。地味はないんじゃない？」

曜もいつの間にか千歌サイドに回っている。少し心細くなる梨子である。

と、梨子がつい今しがた出てきた職員室のドアが開いた。

出てきたのは、ポニーテールの生徒だった。緑青色のスカートと上履きで、三年生だと分かった。そういえば梨子が担任教師の話を知り

ていた時に、遠くの方に見えた生徒かもしれない。

梨子の視線で千歌と曜が目を向け、

「あ、果南ちゃんーん！」

と千歌が手を振った。

「や」

果南と呼ばれた生徒は短く返し、落ち着いた足取りでやってきた。そして壁際に並ぶ二人に梨子が向かい合っている様を見て、

「なに、君。転校早々シメてるの？」

と梨子に訝しげな顔を向けた。

「ち、違います！ そんなつもりじゃ」

「千歌たちをシメても、浦女は落とせないと思うなあ」

「だ、だから——」

「——分かってるよ」

とイタズラっぽく笑った。からかわれたらしい。

「私、松浦果南。ようこそ、死にゆく街へ」

「桜内梨子です。よろしくお願いします、松浦先輩」

「果南でもいいけど、まあ好きに呼んでよ」

「ねえねえ果南ちゃん」

紹介が終わったところで、千歌が果南に呼びかけた。

「私、スクールアイドルやろうと思うんだけど！」

「また唐突に。説明が必要だよ、千歌ちゃん」

「へえー、千歌がねえ」

果南は驚いたように、千歌をマジマジと見ている。

こっそもう一度スカーフと上履きを確認するが、やはり果南は上級生だ。三人が親しいだけなのか。それとも地域的にこういう雰囲気か普通なのか、梨子には分からない。

「ね、果南ちゃんもどう？ やらない？」

「いいよ」

即答だった。

梨子は、開けた口を手で覆うのも忘れるほど、驚いた。

曜も口をパクパクさせ、当然と満面の笑みを浮かべているのは千歌

だけだ。

「か、果南ちゃん!? まだなにも聞いてないのに、ていうかスクールアイドル知ってるの!?!」

「そりゃあ、知ってるよ」

「いいの!?!」

「条件付きだけどね」

千歌の問いに、果南は両腕を上大きく伸ばして答える。

「うんうん、いいよいいよ! なになに!?!」

「一つ目は、部員が十分に増えるまでの補欠なら」

「部員?」

曜が言って、千歌を見た。

「スクールアイドルって、部活なの?」

「そうだよ、昨日読んだじゃん!」

「覚えてないよ」

「それでそれで、次は?」

「次は——」

——果南が口を開く前に、すぐそばのドアが開いた。

現れたのは、黒く長い髪を正確に切り揃えた、日本人形のような印象の生徒。口元に控え目に添えられたほくろの人間らしさが、むしろ不自然に思える。

その現実離れた雰囲気、梨子は思わず息をとめた。

「あ、生徒会長、こんにちは」

「こんちゃーす!」

千歌と曜が思い思いの挨拶をして、梨子も慌てて「こんにちは」と一礼する。

「ごきげんよう」

生徒会長と呼ばれた生徒は、切れ長の目をそのままに、口だけで笑って挨拶をした。

「廊下では静かにお話してください。生徒会室の中まで聞こえていましたわ」

「あ、ごめんなさい!」

「すみません」

主にうるさかった千歌と曜が頭を下げる。

それを見届けた生徒会長は四人の横を通り過ぎ――

「ダイヤ」

――足をとめた。同じ三年生の前で。

「戻ってきたのね、あの子」

「そのようですね」

「どうする気？」

「あなたの問題ではなくて？」

生徒会長は横目で果南を見る。

果南の唇に僅かに力が籠もる。

「私は私のしたいようにするから」

「わたくしはとめませんわ」

果南の態度の変化に、梨子は気圧される。

「なにになに？ 世界観違うよね」

千歌の囁きに曜が首を傾げるところを見るに、仲のいい二人も知らない件らしい。

二人の上級生は目を合わせず、だが睨み合う。

と、教室棟の階段から、複数の声が上がってきた。

「おう、果南、ダイヤ！ なにやってんだ。二限、遅れるぞ」

その中の一人、周囲を刈り上げたベリーショート的女生徒が、果南たちに向かって叫んだ。ここで梨子はようやく、〃ダイヤ〃なる単語が、目の前の生徒会長の名前だと気付いた。

均衡が崩れ、果南は目を逸らし、ダイヤは眉を弓の字にした。

「ではわたくしたちも、参りましょうか」

ダイヤが果南に提案し、果南が脇に持った教科書を見せる。

梨子はそつと息を吐き、時計を一瞥、二限が始まる前に教室に戻ろうと思う。

だがもう一つの動きに遮られた。

「君、もしかして音ノ木坂の？」

ベリーショートの上級生が、梨子に声をかけたのだ。

梨子は平静を装い、頭を下げた。

「はい、今日、転入しました」

「マジで！　すげー、あの音ノ木坂!？」

「他に音女があるかよ」

「うっさいな」

言い合う上級生に恐縮して、梨子は小さく頭を下げる。困った笑顔を作って。

当然だが、音ノ木坂を、その文脈を知っている人たちはいるのだ。やはり浦の星の制服の準備ができてから転入すべきだった。

父にそう言えばよかった。

「なあ君、何部だった？　もしかして踊れる？」

「いえ、私は主にピアノで——」

「——じゃあ作曲とかするんだろ？」

「え、ええと……」

千歌のような追求にどう答えるか考えていると、

「はい、ゴロツキチンピラ淑女の皆様、授業に遅れますわよ」

ダイヤが手を叩き、梨子に絡んでいた生徒は顔を上げた。

「ほら、行くよ」

果南も滞留していた生徒を押し出していく。

「しゃあない、また今度な！」

ぞろぞろと上級生が去っていき、千歌、曜、梨子の三人が残される。

「いやあ、やっぱ先輩って怖いよね、曜ちゃん」

「いつも気にしてないクセに」

『あの音ノ木坂』……』

上級生の放った言葉を繰り返した。

繰り返してしまった。

「災難だったね、梨子さん」

曜が肩に手を置いた。

その感触が遠い。

「梨子ちゃん？」

額に脂汗が滲んでいる。

「どうしたの？ 貧血？」

指先の感覚が遠ざかる。

あの時と同じだ。

「曜ちゃん、どうしょ。ねえ、お腹痛い？ 保健室行く？」

どうして。

「フォーメアが」

「え？」

「泡が」

「泡？」

来る。

*

「梨子ちゃん!？」

新しい友人の身体から力が抜け、幼馴染みにもたれかかった時、リノリウムの廊下になにかが転がった。

渡辺曜はそれに見覚えがあった。

直径三センチ程度の小さな球体。

曜が夜の海に見つけ、三人で海に潜って千歌が手に入れた、淡く光る「お化け」。

「なんで梨子さんが？」

「それ、私のじゃないよ」

千歌がスカートのポケットを叩いた。

球体は廊下を教室棟の方へと転がっていく。

曜は駆け寄り、拾おうと手を伸ばし――

「――触らないで、曜ちゃん！」

千歌が叫んだ。

「な、なに？」

振り返ると、千歌の手の上で球体が微かに音を立てている。

中の結晶が回転して、振動を生み出しているようだ。

電話が着信を知らせるように。

「それ、私のじゃない」

「そりゃ、見れば――」

「——私のじゃない！」

転がっていた球体がバウンド。

直線を描いたそれが、床に備え付けてあったウォータークーラーに直撃、押し倒した。

「うわあー！」

破損した栓から水が溢れ出す。

その水が床を広がり、床に落ちた球体に達した時、異変が始まる。

球体を押し上げるように、水が立ちあがっていく。

球体は周囲に一回り大きな泡を作ると、その周りを細かな泡で包み始める。

その泡が、質感を変え、色を変え、一つの形を作っていく。

頭が輪切りになった、天使のような形を。

「ウソ」

怪人を。

「輪切り怪人！」

曜は慌てて急停止し、流れてきた水に滑って尻もちをついた。

「冷たー！……こいつ、やられたんじゃないの？ 昨日のアレに！」

《仮面ライダー》ってヤツに！」

「仮面ライダー!? なにそれ！」

ジワツと湿った感触がお尻に達する。

「ああもう、パンツまで濡れちゃったよおー！」

ねちやり、と。

そんなことを気にしている間に、怪人はもうすぐそこまで迫っていた。

倒れたまま上履きの踵で床を蹴るが、水たまりを滑って上手く動けない。

「曜ちゃんに——」

曜の視界に影が落ち、通りすぎる。

「——近付くなあー！」

曜を飛び越えた千歌のジャンプパンチが、怪人の右肩を叩いた。

長い髪が千歌を追って宙を舞い、着地した彼女を追い越す。

「早く！」

怪人は数歩後退り、前屈姿勢のまま動かなくなる。

「ありがとう！」

曜が立ち上がる頃、怪人は頭を上げて千歌を見、次に身体を起こす。

肩に残った奇妙な凹みは、千歌の拳の跡。

服も肉体もない。

ただ形があり、ズレた。

それが、うぞうぞと元に戻っていく。

「なんなのあれ！」

「海泡石みたい！」

「なんで!?!」

その時、外の騒ぎに気付いたか、背後で職員室のドアが開いた。

「なんなんだこりゃ。……おい、また高海か！」

教師が声を上げたが、倒れたウォーターサーバー、水浸しの廊下、意識のない梨子とそれを負ぶう千歌、お尻の濡れた曜、天使のコスプレをした人物、そのどれに対して言ったのかを忖度している余裕はない。

「まったく新学期早々——」

「——先生ごめん！ あいつに気を付けて！」

千歌は梨子を背に立ち上がり、廊下を怪人と反対方向へ走り出した。

「おい！ あ、あいつって……おいまさか！」

「そのまさかです！」

曜もそのあとを追って走る。

二人は階段を降りて一階へ、上履きのまま昇降口を飛び出し、校門から道路に出た。

二限開始のチャイムが鳴るが、教室に戻ってなどいられない。

「……まで来れば」

校門脇の桜の陰で立ち止まる。曜も千歌も人並み以上の体力はあるが、梨子を負ぶってきた千歌は、さすがに息が切れている。

「仮面ライダーは？ 来てくれないの？」

「だからそれなに!？」

「昨日の緑色の怪人のことだよ！ ネット見てないの!？」

「見てないって!？」

と曜は昇降口を指差した。薄暗い下駄箱の奥から、誰かが叫ぶ声がしたからだ。

「こっち来てる!？」

「もう！ なんでよう!？」

千歌は煩悶するが、その手はスカートのポケットに触れていた。今も千歌のポケットにある、謎の球体。

輪切り怪人を作り出したものに似た、“お化け”。

それは思い当たる節だ。

「どうして分かったの?？」

「なにが?？」

「梨子さんのお化けが危険だって」

曜の問いに、千歌は首を傾げた。

「《フォーメア》って言ってたけど。千歌ちゃん、聞ってる?？」

千歌は首を振る。なにも考えてなかったのか。

千歌が背負う梨子の後頭部を見る。髪留めも縛りクセもない女の子の髪が、そこから覗く首筋が、場違いに美しい。

そんな子が、どうして怪人を生み出すものを持っていたんだ?？」

「曜ちゃん、今日は雨降りそう?？」

見上げると、晴天だった空は重い雲に押し掛かれつつある。また雨が降り出したら、あの怪人はまた羽を生やして襲いかかるのだろうか。

だが曜は空気の匂いを嗅ぎ、首を振った。

「たぶん曇りのまま」

「そっか。梨子ちゃんをお願い」

「二手に分かれる気?？」

「あいつが狙ってるの、私か梨子ちゃんのどっちかだよ」

球体を持っている千歌か、怪人に変化した球体を持っていた梨子

か。

「そうかもしれないけど」

曜には肯定できない。できるのは、曜は梨子を負ぶう役を代わることだけだ。

「曜ちゃんは学校に戻って。梨子ちゃんが追われてるようなら電話して」

「千歌ちゃんが追われてたら?」

曜はいつにない真剣な顔で、千歌の目を覗き込む。

「私は……」

千歌は呼吸を整えるように息を吐き、ポケットから握り拳を出した。

その中にあるのは、おそらく、あの球体。

「大丈夫」

笑顔でそう言われれば、曜は頷くしかない。

「行って!」

その声を背中に校門をくぐり直し、管理棟の方へと走った。

千歌が、あの怪人を倒す切り札になるのか。

この街を覆う停滞感を払拭する、切り札に。

*

高海千歌は一人、準備運動をする。

片脚ずつ腿を上げ、上体をひねり、肩の動きを確かめる。

そして、自分の手を見る。

空手の試合以外で初めて、誰かを殴った。

咄嗟に迎撃した、昨日の上段回し蹴りとは違う。

殴ろうと思った。

そして殴った。

べたり、と。

昇降口から日光の元に、古代ギリシャ風の服が晒された。

輪切りにされた頭にある目は、曜と梨子が見えていただろうに、千

歌から目を離さなかった。

これで決定だ。

「さあ、おいでー」

千歌は上履きのまま走り出す。

とにかく学校から離れないと。

昨日みたいなことは繰り返させない。

校庭の脇の道路を通り、果樹園を通り、みかん山を下っていく。

速くなくてもいい、追いつかれなければ。

長井崎岬を巡る道路まで降りて、さらに海沿いを走る。

辿り着いたのは、曜に誘われて釣りをしたこともある、コンクリート造の細長い波止場。その手前のまだらに雑草の生えた空き地。使われなくなつて久しいバスの停留所が、来客を歓迎するように揺れている。

ここなら果樹園の人にも学校関係者にも合わないはずだ。

一キロも走っていないのに、息が上がってきている。

「もう少し、ちゃんと道場、行つてればよかつたかな」

そう言いながら、震える唇を舐める。

緊張しているのが分かる。

苔に覆われた怪人は、来てくれないだろう。

大丈夫か大丈夫じゃないかで問われれば、大丈夫じゃないのかもしれない。

それでも、私は宣言したんだ。

“大丈夫”と。

ヘアゴムで髪をまとめ、背中に放る。

ポケットから球体を取り出す。

丸くて滑らかな感触の球体は、形が判別できないほどの速度で回転する結晶で、周期的に光を放っている。

同期して発する振動は、まるでハミングのようにも聞こえる。

べたり、と。

怪人が道路を歩いてきた。

頭の輪切りを載せた、ボロをまとつた怪人が。

ポケットに球体をしまう。

三戦に立ち。

息を深く吸い、深く吐く。

ヘソの下、丹田に力を集中する。

やがて、構え。

左手を上、右手を下に。

長井崎岬を前に、内浦湾と淡島を背に。

「一応聞くけど、やめないんだよね」

空き地に到達した怪人に声をかける。

「なら、いくよ」

最初に千歌が動いた。

「ふッ！」

短い気合いとともに、踏み込む。

怪人が右腕が動いた。

右上段突き。

左腕で受ける。

練度は高くない。

ガラ空き of 怪人の胴へ、

「せあッ！」

右中段突き。

怪人の鳩尾を捉える。

「へ!?!」

その拳が刺さった。

文字通り。

「どうなってるのおー！」

飛び上段突きの時の手応えのなさとも違う、ゼリーのような手応えのなさで、腕が完全に怪人を貫通していた。

そのせいで右腕が伸びきり、集中力を失い、動きが遅れた。

呻き声を上げた怪人に両肩を掴まれ、突き飛ばされた。

土の上を転がりながらも体制を立て直し、立ち膝で構える。

怪人は穴の開いた腹を押さえ、呻き声を上げていた。

有効打らしいのだが。

「……?」

言葉が出てこない。

自分の右腕から目が離せない。

黒い滑らかな表皮に覆われ、白い手甲をまとった、自分の拳から。怪人を貫通した腕の部分が、変質していた。

「なに、これ」

ようやく絞り出した言葉に反応するように、怪人が顔を上げた。

いや、ぼらり、と頭が七枚の輪切りに分かれた。

その一枚が、正面から飛来する。

「うそ?！」

鼻と耳の下半分が含まれた輪切り。

ゾツとしながらも、変質した腕で受ける。

その瞬間、輪切りは水となって飛び散った。

「つめた！」

輪切りだった水を顔面と左腕で浴びる。その左腕も、泡立つ水によつて、見る間に変質していく。

「どうなってるの?！」

右手の人差し指で、左手の手甲を押してみる。すると抵抗感とともに指の跡がクツキリと付き、遅れて元の形に戻った。

「海泡石だ」

少し前に、果南のお店で触らせてもらったのを思い出す。

水に浮くほどに軽く、微細な穴と繊維の隙間に水が入り込むと柔らかくなる、海の泡の石。

怪人を殴った時に感じたのと、同じ感触。

「まさか」

顔を上げる。

直後、輪切りの鼻が視界いっぱいになり、吹き飛ばされる。

護岸された空き地を飛び出し、背中から浅瀬に叩き付けられる。

「ひゃあ！」

冷たさに声が出た。

「卑怯だよ、不意打ちなんて……」

顔をさすりながら身体を起こし、指先に違和感に驚く。

その原因が分かる前に、水面に映った自分の姿が目に入る。

「なんなの、これ」

黒いヘルメットをかぶったような頭。

橙色の複眼が集合した一對の大きな目。

金属製のように柔らかい、鈍い先端の角。

目も鼻も口も耳も、結んだ髪も存在しない。

腰に締められた白帯に、橙色に淡く輝く球体。

目を疑う。

水に濡れた黒い身体は、素肌と同じように水の感触を伝えている。

まるで露天風呂で風を浴びているように、身体の色んな部分が敏感になっっている。

胸や脚も手甲と同じような白い装甲で覆われているが、その材質は指で押すだけで変形するほど柔らかく、やはり敏感だ。

ウエットスーツや金属の鎧ではない。

これは肌だ。

さつきまで、浦の星女学院の冬服を着て、上履きをはいていた高海千歌は、今や、完全に別の存在に変身していたのだ。

「待ってよ……」

その声に応えるように、鼻の下半分の輪切りを失った怪人が近付いてくる。

水で作られた怪人。

泡で作られた身体。

同じ球体。

「私、怪人になっちゃったの……？」

呆然とする千歌に、怪人が眉の部分の輪切りを放つ。

だが、その動きが見えている。

大きな複眼が捉えた何百もの映像が、その軌道を見せている。意識せず左腕で受け、その輪切りが水に還る。

その水を浴びて、我に返った。

「そっか、こいつ、ウォータークーラーの水でできてたんだっ」

そして原理は分からないが、今の千歌には怪人を水に戻す力がある

らしい。

「だったら、手はあるよー！」

立ち上がる。

まるで素足ののように、水の冷たさと砂利の凹凸を感じる。

それを蹴って跳躍、空き地に着地、怪人へと走る。

ハミングが聞こえる。

海の中で聞いた音のように。

身体から沸き起こるように。

怪人が頭頂部とその下の輪切りを飛ばす。

そのどちらの動きも見える。

奇妙なほどはつきり見える。

その二つを左手で打ち落とし、

跳躍。

昨日、倒されたの時を思い出せば。

さつき、産まれた時を思い出せば。

弱点は明白だ。

「りゃあッ！」

再度の飛び上段突き。

胸の中心を、右拳が突き破る。

弾力のある手のひら大の泡を掴み――

「割れろお！」

――その奥の球体までをも握り締める。

指の中で、膜が裂ける感触。

直後、怪人の身体が崩れた。

古びた布を着た肉体が、その形が、小さな泡に分解される。

ばしやり、と足を濡らし、空き地に黒い染みを残す。

変身したままの千歌は、肩で息をしながら、神経を集中する。

なんの動きもない。

クルマが通るでも、船が通るでもない。

波打ちの音と、葉擦れの音が、思い出したように耳に届く。

「倒しちゃった」

千歌はゆつくりと息を吐き、テンションを緩めた。
残された球体を曇り空にかざすと、中に入っている結晶がするりと動く。

「あれ、形が違う」

結晶は三角形を四枚組み合わせた正四面体だ。同じ正多面体ではあるが、千歌が海で拾った正八面体のそれではない。

「ま、いつか。梨子ちゃんに返してあげよ」

と道路に出て、浦の星女学院に戻ろうとして――

「Wonderful!」

――目の前に現れた人物に、立ち止まった。

「え？ な……」

「一応スタンバってたんだけど、心配して損しちゃったア！ アナタなら全然平気そうね！」

頭のとっぺんから抜けていくような甲高さに、鼻にかかる甘ったるさを絡めた声。日本人とは思えないイントネーションだが、日本人としか思えない流暢な日本語で、千歌はリアクションの方向に困る。

いや、それよりもっと大きな要因は。

その人物が、みかん山の上の道路から落ちてきて、難なく道路に着地したからだ。

その人物が、メタリックな銀のアンダースーツと紫の装甲をまとっていたからだ。

「どなた……ですか？」

警戒を解かずに問うと、その人物はなにが面白いのか、きやらきやらと笑い出した。右手に持っている、農家のおばさんが使うバーコードリーダーのようなグリップ型の機械で、口を押さええながら。

口――そこに素顔はない。一對の紫色の大きな丸い目と、涙のように真下に出て顎の下で曲線を描いて繋がる一本の線が醸す雰囲気は、さきほど水面に映った千歌の顔に似ている。

昨日現れた緑色の怪人の顔にも似ている？

「Sorry! でも、そうよね、知らなくて当然よね!」

千歌の連想を余所に、マスクが、くぱっと上下に割れた。

「今日から浦の星女学院の理事長代理に就任した、小原鞠莉でエス！」
現れた顔は、やはり日本人離れしていた。名乗った名前も、〃マリ
〃とも〃マリー〃ともとれる、長音の判別が曖昧なアメリカ人らしい
言い方だ。

「もしかして……三年生の？」

「Yes！」

鞠莉と名乗った人物は、その場でクルリと回って見せた。腰のベル
トからぶら下がっている平たい部品が、スカートのように翻った。

千歌は首をひねる。一昨年転校してきたハーフの三年生が、理事長
代理のわけがないと思っただからだ。

鞠莉と名乗った人物は、スーツから音漏れしているドラムに合わせ
てリズムを刻みながら歩いてくる。解放された金色の髪の毛を一振
りし、右側頭部から垂れていた三つ編みをカチューシャを、左側頭部
の髪の一束で輪を作った。

「んー、やっぱこうでなくちゃ！ でも早いところ、Shower浴び
たいわア！」

身体をひねった時、上腕部に見覚えのあるマークが見えた。時計を
イメージしたロゴに並ぶ、〃OGI〃の文字。

「小原さん——OGIグループの？」

「That's the 通 ticket! じゃ、その《ムーフォー
ム》、渡してくれる？」

鞠莉は笑うように言っ、グリップを持った右手を千歌に向けた。
そのジェスチャーの意味が分からず、千歌は鞠莉の視線を追い、手
に持ったままの球体を見る。

「これ？ みゅーふぉーむ？ これのことです？」

「Yes! ちゃんと覚えてよ。名前は大事なんだからア」

要求が飲み込めるとともに、グリップ型の機械がまるで、寸詰
まりのピストルのように見えてきた。

脅されている？

「な、なんなんですか。あいつも、私も。なんで私、こんな海泡石みた
いな身体になっちゃったんです！」

「当然じゃない。アナタも《Groups of Meerschäum^群》だからでエス！」
分からせる気のなさそうな言葉は上の空で、鞠莉の手元を注視する。

あれがピストルだとして、変身した今の状態なら、弾を避けられるだろうか。

あるいは弾を叩き落として近付ける？

自信はない。

「この街を護る身体になったのよ、私と同じくね」

鞠莉は首を斜めにして言う。言葉の重みに見合わない、軽い口調で。

「アナタもそうでしょ？ ……そうね、《Kamen Rider Wonder》、かな」

「仮面ライダー……？ これが？ 《ワンダ》って？」

「それとも《Wander》？ どっちでもいいわよね whatever、日本人なら」

それが自分を表現する単語なのだと思いついた時、鞠莉が笑いながらトリガーに添えた指に力を籠めるのが見えた。

直後、音楽が途切れた。

*

トリガーは引けなかった。

「What, s!?! 時間切れ!?!」

耳障りな電子音とともに、ハンドガン型リーダー《エウリュース》を構えていた腕がロックされる。

それと同時に上半身の紫色の装甲が消失、銀一色の姿になった。ベルトにぶら下がった五本のバッテリーが、すべて切れたのだ。

「やっぱり一五分は短いわア……。セブ、回収して」

小原鞠莉が首元のマイクに言うと、イヤーマニターに「承知致しました」の声が届いた。

そして時間をおかず、みかん山を下る道路から黒塗りのバンが走ってきた。

「え、え、なにになに？」

相対していた仮面ライダーがおろおろする前でバンが停車し、黒服を着たサングラスの男たちがゾロゾロと出てくる。

「セブ、せめてSpeakerくらいは別系統にできない？ これ脱ぐまで音楽が聞けないなんて、地獄よオ？」

イヤーマニターに「善処致します」の言葉が入り、これは善処しないヤツだ、と鞠莉は口をへの字にする。

そうこうしているうちに、黒服は鞠莉の左右と後ろに回ると、鞠莉を動かなくなったスーツごと、まるで彫像を運ぶように持ち上げた。「え、そういうレベルで止まっちゃうの？ じゃなくて、ちよつと、待ってよ！」

Wonderが近付いてきたが、黒服が懐に手を入れたのを見て立ち止まった。拳銃に脅えているらしい。

「ねえ、Wonder。アナタ、名前は？」

丸太のように運ばれる鞠莉は、唯一自由な頭で仮面ライダーを見た。

仮面ライダーは思い出したように身体をペタペタと触り、やがてベルトの中心に据えられていた橙色のムーフォームを取り出した。

水が弾けるように変身が解除し、中から小柄な少女が出てきた。浦女の制服に、二年生カラーの臙脂色のリボンをしている。

「千歌。高海千歌です」

「ああ、アナタが」

丸太のように担がれた鞠莉は納得したが、こちらを見る千歌の目は戸惑いがちだ。

背中に届く長い髪を結わいた姿に、鞠莉は二年前に別れた友人の面影を感じる。

「千歌、そのムーフォームはもう、アナタの色に染まったわ。アナタにしか発動できないし、アナタにしか壊せない」

千歌はベルトに入っていた橙色のムーフォームと、怪人から抽出した無色のムーフォームを見比べた。

「なにかあったらいらっしやい。私は浦女の理事長室、それか《ホテルオハラ》にいるわア」

「行ったら教えてくれるんですか？」

千歌と名乗った少女の鋭利な表情に、鞠莉は笑った。

『二人の囚人が鉄格子の窓から外を眺めたとき。一人は泥を見た。一人は星を見た』

「え？」

「アナタはどっち？」

この問いを口にするのは、いつ以来だろう。

目に見えて混乱した千歌にウインクし、

「じゃ、続きはまた星を改めて、ね。Ciao！」

鞠莉はバンに収容され、後部ドアが閉められた。

次回予告

曜 「仮面ライダーもスクールアイドルも出てきたけど、まだ全然見えてこないよ。メルシャウムは？ ムーフームって？」

鞠莉 「だからア、私が『Meerschäum』って言ったじゃない」

千歌 「果南ちゃんとダイヤさんは怖かったし。私、撃たれそうだったし。みんな仲良くしてくれないかなあ」

曜 「怪人は、そんな怖くないんだ……」

鞠莉 「そんな心配も、次回、仮面ライダーメルシャウム第三話、『Shall we dance?』で解消オ！」

曜 「違うよ！ 次回、仮面ライダーメルシャウム第三話、『今考えても仕方ない』！」

鞠莉 「意味深な出番しかないの、もう、ほんと勘弁してほしいわア」
千歌 「鞠莉さんが出てくると、こつちの声もオクターブ上がるよね」
曜 「敢えて低くいかなきゃ」

鞠莉 「次回も見てねー！ Shiny！」

C

「千歌ちゃん！」

みかん山の坂を下りきってターンすると、海岸沿いの道に見知った人物が立っているのが見えた。

渡辺曜は自転車を全力でこぎ、そのすぐそばで急停車した。

「千歌ちゃん、あいつは!？」

髪をまとめたままの幼馴染みは答えず、曜は辺りを見回す。

千歌の足元にはかなりの広範囲に渡って水がまき散らされていた。それだけではない、道路から波止場へ向かう空き地まで、至るところに水飛沫が飛んだ跡があった。

あの輪切り怪人は水でできていた。

つまり千歌と怪人はこの周辺で戦い、まさに千歌が立っている場所で倒したんだ。

その証拠に、千歌はあの球体を手にしているじゃないか。

「そっか、倒したんだ、千歌ちゃん……。倒したんだ!」

曜は千歌の背中を、ぼん、と叩いた。

「ほら、空手やっててよかったじゃない! 私为正しかったじゃない!」

ところが千歌は、叩かれた衝撃でぐらりと揺れ、

「え?」

助ける間もなく肩から道路に倒れてしまった。

「え!?! 千歌ちゃんも!?! ちよつとちよつと待って! 救急車!

……あ!」

曜は電話を操作する手をとめた。

千歌の手から離れた球体が、さつきと同じように転がっていくからだ。

「ま、待ってー!」

幸い、球体の転がる先は海ではなくみかん山の方で、しかもアスファルトの凹みに引っかけかかって止まってくれた。

曜は難なく追いつき、球体に手を伸ばし――

怪人のことを思い出して、恐怖心を覚える。

また、海に飛んでいったら?

いや、アスファルトの水分で小さな天使になったら?

「そしたら、私が戦うよ」

――意を決して球体を掴み取った。

何事も起きなかった。

曜は息を吐き、救急車を呼び、学校にも連絡を入れた。

「お疲れ様、千歌ちゃん。ゆっくり休んで」

と、倒れている千歌を抱き起こして、曜の肩が寄る。

千歌の制服には、倒れる前に濡れた形跡がない。

これだけ水飛沫が飛び散っているにもかかわらず、だ。

水滴に一滴も触らず、怪人を倒したのか？

どうやって？

いや、それよりも気になるのは――

「泣いてたの？」

――濡れている千歌の睫だ。

第三話：今考えても仕方ない — 1

AV

空き地の茂みをかき分ける。

アスファルトの窪みに目を光らせる。

錆の浮いたバス停のコンクリートブロックを動かす。

石造りの波止場の先端で朝の光を飲み込む海の下に目を凝らす。

転校生は明らかに、なにかを探している。

「ここにいると思った」

だからだろう、渡辺曜が声をかけた時、彼女は釣り目がちな目を大きく見開いて振り返った。

「わ——たなべさん」

梨子は教室でしているような顔を作ろうとしたようだが、けつきよくは警戒心を露にした険しい顔になった。たぶんそれが、今の曜の顔でもある。

曜は軽快車から降り、ぱちん、とスタンドを立てた。

「探しもの？」

「そ……そうなの。ここで、これくらいの丸いもの、落としちやっただい」

梨子は指で小さな丸を作ってみせた。

「見つからないよ。私だって、落とししたビー玉、見つけれなかったもん」

曜は冗談めかして笑う。

「そ、そうだよね」

梨子は笑い声を出したが、目は笑っていない。自分の発言がウソだとバレている、と分かっている態度だ。

それを見ているのは、気持ちのいいことではない。

だから曜はポケットに手を入れ、出した。

「これ、なに？」

淡く光る、無色の球体。

「μ——」

言いかけ、梨子は口を押さえた。

「隠し事が下手だね、梨子さん」

それは自分のことでもある。

駆け引きは嫌いだ。

相手の懐が空いていれば、そこに飛び込むのみ。

「渡辺さん、あの、私——」

だが今は、時期が悪かった。

「——おーい！」

遠くから声がしたからだ。

声の主は見なくても分かる。スカートがめくれるのも構わず、アンクルソックスから腿までの肌色を無防備に晒して走ってくるであろう、千歌だ。

「なにしてるの？ こんなところで」

「千歌ちゃんこそ。走ってきたの？」

「うん。さすがに運動不足だったな、ってね」

「あの、高海さん——」

「——なんでもないよ、私たちは」

梨子の言葉は、曜が制した。

こんな問題に、千歌を巻き込みたくはない。だから、

「行き、二人とも」

曜は転校生を迎える顔を作った。

その「仮面」がなぜ必要かは、梨子にも分かるはずだ。

A

「みーんなー！ Shiny！」

脳天を貫くような高音にスピーカーカーがハウリングを起こし、演台の向こうで金髪の上級生が耳を押さえた。

「もう、この程度の音、ちゃんと拾ってよね！ あ、あーあー、OK？

……じゃ、みんな、もう一回行くわよオ！ Shiny！」

舞台上に立つ少女はアイドルライブのように、体育館に並ぶ全校生徒にマイクを向けた。だがコールに対して戻ってきたレスポンスは、三年生の方からまばらに戻ってくる『シャイニー』だけだ。

「Oh! 私が『Shiny!』って言ったたら、『Shiny!』って返してくれなきゃ。次回までに練習しておいてよねエ?」

少女は口を尖らせて言ってから、わざとらしく咳払いをする。

「じゃ、自己紹介ね。私は今年度から浦女の理事長代理に就任した、三年の小原鞠莉でエス!」

五〇人に満たない全校生徒が、にわかになぎわつく。

当然だ、一限開始と思ったら臨時の全校集会だと言われ、体育館に来てみれば一在校生がステージ上でコール&レスポンスに理事長代理就任宣言なのだから、なんの冗談かと思うだろう。

しかし踊るようなステップで演台の前に出てきた金髪の少女は、紛れもなく、私立浦の星女学院高校の理事長であるジョルジョ・ルカーニアの娘、小原鞠莉なのだ。

「本当はO G I Group CEOのDaddyがここに立つべきなんだけど、まだU.S.だし、先週の対応でてんてこ舞いな。許してね」

「ほ、本当なのかな」

黒澤ルビイは、どこまで本気にしていいか分からず、出席番号順で前に並んでいる花丸に声をかける。

「うん……」

花丸の反応はどこか上の空で、ルビイは心配になって横から顔を覗き込んだ。

「どうしたの? 調子悪い?」

「Hey! 私語禁止よ! ルビイ!」

「ピギイ!」

ルビイの挙動は舞台の鞠莉に見られていた。当然だ、バスケットコートが二つ並ぶ広さの体育館に、生徒一〇人前後の列が三つしかないのだから、誰かが動けばすぐ分かる。

ルビイは肩を小さくして定位置に戻り、周りから聞こえるクスクス笑いにますます小さくなる。だが鞠莉がまだルビイの顔と名前を覚えていたのは、ルビイにとっては意外だった。

「あーあー。ちよつと出席率低すぎるわよねエ? 昨日は全校で欠席

一二人だったのに、今日は一四人でしょ？ 出席率六〇パーセント！
この調子で減っていったら、浦女は四月末で廃校よ！」

笑い声が起こる。鞠莉が冗談めかして言っているのもあるが、実際、笑うしかない事実でもある。

「もちろん、理事長代理としては、みんなに楽しい学校生活を送ってほしいと思ってるわア。というわけで、我が小原家から、OlympianなGuestの紹介よ！ Come on！」

舞台袖から出てきた人影に、体育館は騒然とした。

「か、怪人!？」

入学式の駐車場に現れた、苔の怪人だったからだ。

二年生と三年生はその姿を見ようとし、一年生は半数以上が列を離れて逃げようとした。教師でさえ驚いている人がいる。

ルビイは花丸に駆け寄ろうとしたが、逆にすごい勢いで振り返った花丸に肩を掴まれ、抱き締められる格好になってしまう。

「ま、マルちゃん!? 平気だよ、ルビイ、平気だから！」

「Quiet！」

鞠莉が甲高い声をマイクに叩き込んだ。

またもハウリングが起き、違う種類の悲鳴が上がる。

「私のGuestに、ずいぶんな反応じゃない!？」

鞠莉の言葉に、逃げかけていた一年生も立ち止まる。

「《Kamen Rider Branchia》! 私の友人よ!」

なにを言っているのか、ルビイには分からなかった。

「仮面……ライダー……? 《ブランキア》?」

花丸は浅い息を繰り返して呟き、ステージを見る。

前半部分は、先週から何度も目にしてきた特撮番組のヒーローの名前だ。なら後半部分は、彼の固有名詞ということになるのか？

一対の赤い大きな目と触角を持つ、全身が濃い緑色のなにかで覆われた人型のなにかが、理事長代理の知合いだとも言うのか？

「怪人から私たちを護ってくれてるって言ってるのよ、この人が! だから心配しないで! ほら、アナタも手エ振って!」

鞠莉の言葉に、苔の怪人——仮面ライダーブランクアは、まるで恐縮しているように、おずおずと手を振った。

その動きが妙に人間的で、体育館のあちこちから控えめな笑い声が上がった。その笑いは生徒たち自身の警戒心を緩め、解き放たれた緊張は興奮に変わる。

「仮面ライダー！」

「ありがとー！」

「また頼むぜー！」

「マスクとつて！」

「俺のバイクと勝負しようぜ！」

喚声に、浅い角度で会釈を繰り返す仮面ライダーを見ると、ルビイの口は綻んでしまう。

「ほら、マルちゃん、平気だから」

花丸は周囲の反応を見て、舞台に立つ二人を見て、やっとルビイを抱きしめていた腕の力を弱めた。

「護ってくれた、ずら？」

「うん」

ルビイが覚えた印象は間違っていなかった。もっとも、文化祭や卒業式に出てくる芸能人のように紹介されるとは、思ってもみなかったが。

「なんで仮面ライダーなの!？」

どこからか上がった問いに、鞠莉がマイクに言う。

「MaskをかぶったRiderだからよ！もちろん、石森プロには許可を取ったわ！」

説明になっていない。

でも生徒は笑っているし、当の本人も手を振ってるし、それでいいのかも。

花丸も少しは安心できたか、苦笑しているし。

だがルビイは周囲を見回していて、みんなのノリに取り残された顔を見付けた。

入学式の時、ルビイたちを助けてくれた小柄な上級生だ。口をへの

字に曲げ、舞台上の存在を上目遣いで睨んでいる。

どうしてだろう。

あの人は花丸を助けてピンチに陥った時、仮面ライダーに助けられたはずなのに。

目線に戻してもその表情が忘れられず、ルビイはモヤモヤを抱えることになった。

*

理事長権限で半分になってしまった一限が終わり、高海千歌は教室を飛び出した。

修理中のウォークレーターの横を通りすぎて管理棟へ、三階へ上り、長らく無人だった理事長室のドアを叩き開けると、

「理事長！」

「ダ・イ・リ。ずいぶん早かったわね！」

柔らかそうな椅子にふんぞり返った鞠莉の前まで行き、幅の広い机を叩いた。

「どういうことですか！ 私、聞いてないです！」

「在校生が理事長代理になっちゃいけない、なんて規則はどこにもないわ」

「そうじゃなくて！」

「怒らないの。Branchiaのことでしょオ？」

笑い袋を飲み込んでいるんじゃないかと思うくらい楽しそうに喋る鞠莉に、千歌はイライラする。

「あれはなんなんですか」

「企業秘密でエス！」

「ふざけないでください！」

「ふざけてないわ、この学校の警備システムのことだって企業秘密なのよ。」

「理屈が聞きたいんじゃないんです！」

「じゃ、なアに？」

千歌は逸る気持ちを抑えて、鞠莉を睨む。

「この前、あれは来てくれなかった」

握っていた拳を、意識して開く。

「もし私が空手を習ってなくて、あの怪人を倒せなかったら！ そんなあやふやものに、学校を任せられません！」

「だから私がいたんじゃない」

「え？」

当然と言わんばかりの口調に、千歌は威勢を殺がれる。

「忘れたの？ 私のBrilliantなSuit！ 人類の敵たる《Foamare》と戦うために、我がOGI Groupの粋を結集して完成させた、言うなれば……」

鞠莉は椅子から立ち上がると、くるりと一回転して片手を斜め上に掲げた。

「《Kamen Rider Shiny》！」

「しゃ、《シャイニー》——って、また仮面ライダー？」

「まだ発表してないから、Leakしちゃダメよ」

「しませんよ！ てか、だから、フォーメアってなんなんですか！」

「理屈を聞きたいんじゃないんでしょ？」

「だからって——」

だが千歌が言葉を続ける前に、鞠莉が目の前にきた。そして歌うような調子で言葉を紡ぐ。

「——『二人の囚人が鉄格子の窓から外を眺めたとき。一人は泥を見た。一人は星を見た』」

先週も言われた言葉。

「アナタは力を手に入れた。選ばなきゃいけないのよ。護られるか、護るか」

そして唇の形だけで、

「ワ・ン・ダ」

と。

千歌は俯く。

握っている自分の拳が見える。

力。

「いい加減にしてください！」

その声に、鞠莉が弾けるように千歌から離れた。

「千歌ちゃん、こんな人の言うこと、真に受けちゃだめ！」

理事長室に乗り込んできたのは曜だった。ドアの向こうには梨子もいて、「失礼します」と入ってくる。

「ビックリした！ いつから!？」

「ごめん、なんか千歌ちゃん怖くて、入りにくくてさ」

曜は千歌をチラリと見てから、鞠莉に向き直る。

「こんな人とは失礼ねエ」

「理事長！」

「ダ・イ・リ」

「理事会が戦う人を出してくれるなら、千歌ちゃんは戦わせません」

「曜ちゃん、なんで」

「ちゃんとした練習をしてないアマチュアが、プロの真似をするべきじゃないからだよ」

「曜……そっか、アナタが内浦から彗星のごとく現れた、オリンピック候補の渡辺曜ね！」

「話を逸らさないでください！」

曜は顔を赤くして言う。

「とにかく、生徒を、しかも女の子を戦わせるなんて、絶対ダメです！
ヒーローって言うなら、あのブランキアみたいに男の人でやってください！」

「Hero」は女の子にも使えるんだけど——」

——言いかけた鞠莉は、曜の顔を見て肩を竦めた。

「とにかく、千歌ちゃんは戦わない。戦わせません」

「でも曜ちゃん、私、先週戦えたんだし——」

「——倒れたんだよ！ 千歌ちゃんは！ 丸一日！」

千歌は戦いが終わったあとに曜の前で倒れ、そのまま翌土曜日の朝まで目覚めなかった。気絶ではなく睡眠状態だったので命に別状はなかったが、それでも曜が泊まり込みで付き添ってくれたのだ。

「みんながどれだけ心配したか、分かっている!？」

「……ごめん。あんまり……」

その返答に、曜は緊張を緩め、「だと思った」と笑った。

「ごめんなさい、高海さん。私が気を失っちゃったりしなければ」

「え？ あ、あれは梨子ちゃんのせいじゃないよ！」

「そうだよ、練習サボってなければ、おんぶと数分の実戦でくらいダウンしないんだから」

曜は千歌を一瞥して言った。梨子に心配かけさせまいとしているのだろうが、その指摘も的外れでないのが千歌の痛いところだ。

「でも、女の子でも、ちゃんと訓練してれば戦ってもいいんじゃないかな」

「梨子さん!？」

梨子に背中から刺された曜が、引つ繰り返った声を発した。

「ほら、これで三対一よオ？」

「せっかく千歌ちゃんを引き留めようとしてるのに！ 男女平等しなくとも！」

「ごめんなさい、でも一応」

「千歌ちゃんが危ないっていうのに！」

「ありがと、曜ちゃん。でも私、決めたんだ。」

千歌は曜に頷きかけると、鞠莉の前に進み出る。

「理事長代理、私！」

鞠莉が不敵な笑みを浮かべる。

曜と梨子が固唾を飲んで見る。

そして千歌は大声で宣言した。

「スクールアイドルを始めます！」

*

「What……?？」

鞠莉の目が点になった。

「What……!？」

鞠莉の眉が八の字になった。

「What are you saying in this situation!?!？」

鞠莉の顔が鬼の形相になった。

「あつはははは!!」

曜が笑い出した。

「なんで今の流れで！ School Idol!? 今そんな話してなかったじゃないのオ！」

「だよね、だよね、言ってたよね！ 千歌ちゃん、そうだよね！」

頭を抱える理事長代理を前に、曜はお腹を抱えて大笑いをしている。

「あー、はー、いや、うん……。ありがとう、千歌ちゃん！ ありがとうー！」

「な、なによう、曜ちゃん、そんな笑わなくたっていいじゃん」

曜はポンポンと千歌の肩を叩くが、千歌はピンときていない顔をしている。突拍子もないことを言ったつもりがない顔だ。

「ううん、千歌ちゃんはやっぱり千歌ちゃんだよ。安心したわ」

そして絨毯に崩れ落ちた鞠莉を放置して、

「あ、次、体育だっけ？」

「やつばい、着替えなきや」

などと二人はいきなり現実に戻った。

「梨子ちゃん、更衣室、初めてでしょ。場所教えてあげる」

「え？ あ、うん」

「じゃ、理事長、失礼します」

「失礼します」

千歌と曜は理事長室を飛び出して行ってしまった。

鞠莉は「ダ・イ・リ」と付け加える気力もない様子だったが、立ち上がると、

「あんなHeavyな子だと思わなかったわア。でもまあ、Planに支障はないでしょ」

引き出しから出した球体をアンダースローで投げた。

それは正六面体——正方形の結晶が入った、周囲を薄い皮膜と金属部品でシーリングされた球体だった。

「お願いね」

桜内梨子は受け取ったそれをポケットにしまい、頷いた。

*

「人類の自由と平和を護るヒーロー?」

松浦果南は屋上で一人弁当を食べ終えたあと、聞き覚えがある単語だった《仮面ライダー》のことを調べていた。

それは一九七一年にテレビ放映された、特撮番組とそのヒーローの名前だった。一九八九年に『仮面ライダーBLACK RX』が放送されてから原作者である漫画家の石ノ森章太郎が亡くなり、以降一〇年以上新作が作られていない。果南も小耳に挟んだことがある『スーパー戦隊』や『平成メタルヒーロー』と違い、完全に死んだシリーズのようだ。

だがSNSを覗いてみれば、『浦女の理事長代理、仮面ライダーを発表!』と完全に“祭り”状態だった。さらに遡ってみると、入学式の翌日には既にネットニュースを席卷していたと分かった。《墮天使ヨハネ》を名乗る人物がアップした生配信動画に、誰かが名前を紐付けて拡散したことで、急速に浸透していったようだ。

淡島の居住区で祖父と二人暮らしの果南は、基本的には世間に疎い人間だから、その動向には気付いていなかった。

だが、状況は明白だ。

小原家はそんな流行を利用して、OGIグループ傘下と思われるどこかが開発した装置を売り出そうとしているのだ。

「ふざけてるの?」

問い質してやりたい。

人の命を護る力に、どんな気持ちでその名前を付けたのか、と。

「だから父さんだって——」

言いかけた言葉を、鋭い息で殺す。

今まさに果南が使っている電話に刻まれた、OGIのロゴを見る。

OGIグループを、町工場から世界規模のIT企業まで幅広い分野で活躍するコングロマリットに成長させたのは、まさにその、無邪気とも無節操とも評価できる手の広げ方だ。

それは事実上、世界を牛耳っている。

松浦家の、果南の感情とは関係なく。

電話を無造作にスカートのポケットに押し込み、一呼吸。

果南の顔は元に戻っていた。

「あの二人はなにしてるのかな」

意識の切り替えだけは、ずいぶん早くなったと思う。

この二年の間に。

*

「Wow! ダイヤア!」

日本の学校には異質な黒服の男たちの隙間から、やはり異質な金髪の少女が飛び出した。

「お久しぶりですわ」

浦の星女学院生徒会長たる黒澤ダイヤは切れ長の双眸を細め、浦の星女学院理事長代理たる鞠莉の満面の笑みに応えた。

「もう、怖い顔しちゃってエ」

鞠莉は歩を緩めてイタズラっぽく笑うと、黒服たちを背後に従え、立ち止まる。

教室棟の廊下で、二人は睨み合う。

「ね、私の部屋に来ない？ せっかくの再会なんだから」

「どこにも行きませんわ。あなたと、わたくしは」

「あら残念。この学校の行く末を占う、NiceなPlanがあるのに」

声を聞きつけた生徒が、教室から顔を出してくる。

昼食を食べ終えた生徒たちが、視線を向けてくる。

こういう立場なのだ。

いや、こういう立場になってしまったのだ。

「あなたが——小原家がなにを考えているかは関係ありません。浦の星はこのわたたくし、黒澤ダイヤが護りますわ」

ダイヤは唇に力をこめる。

「今度こそ」

鞠莉は口元を斜めにして、近付いてくる。

「構わないわア。それでアナタの星が動きだすなら」

そしてダイヤの長い黒髪に触れ、耳元に囁く。

「果南には内緒よ」

離れていく鞠莉と黒服を背中で見送ると、ダイヤは歩き出す。

他人を拒絶する凜とした冷たさを背負う彼女は、しかし、生徒会室に入ると、一人、肩を振わせるのだった。

*

「部活を作るのって、けっこう面倒なんだね」

昼休み、渡辺曜は生徒手帳をめくりながら、机につっぱしてスパゲティの塊のようになっていた千歌に言う。

「『五名以上の在校生と一名以上の顧問からなる同好会として発足のち、原則三年間以上の活動を継続して行っていること』

——ふんふん——

『ただし三箇月以上の活動と、部活動に相応しい実績をあげた場合、その限りではない』

——だって。相応しい実績って、なに？ 大会に出るとか？—

「え!? じゃあラブライブ!に出たら『私たち、浦の星女学院アイドル同好会です!』って言わなきゃいけないの!?!」

「出られるの?」

「そんなのカッコ悪すぎる! 音ノ木坂のアイドル研究部は最初から部活だったのに!」

「そうなの?」

一人で話を進める千歌を横に、曜は生徒手帳を置き、電話を操作する。

「三箇月は活動しなきゃ、ってことは——夏のラブライブ!って、八月だっけ?」

「千歌ちゃんが部活、始めるんでしょ? 自分で調べなさい」

「ふえーい」

グチャグチャになった髪の毛の隙間から目を出し、千歌も電話を操作し始める。

「千歌ちゃん、髪切らないの?」

「お母さんみたい」

「せめてちゃんと揃えたら?」

「むーん」

「でも部員五人なんて、集められるかな」

「私と曜ちゃんと果南ちゃんと梨子ちゃんで、一人足りないんだよね」
「ちよつと、だから私と梨子さんを勝手に入れるな」

「あ、あった」

曜の突っ込みをスルーし、千歌が電話を叩いた。

「夏の第七回ライブ！は、静岡の県大会が八月六日、東海大会が一日と二四日、全国大会が一週空いて八月二六、二七日だって」

「じゃあ同好会を今立ち上げて、最短の三箇月で部活に昇格したとしても、大会まで一箇月しかないんだ。大忙しだなあ」

「最短でもギリギリ——ん？ エントリー？ エントリー期間が五月九日から一六日？ 五月!?! あと一箇月しかないじゃん！」

「条件は？」

曜は電話を眺めながら言う。

「えつとね、学校から部活動として承認されていることと、エントリー期間中にパフォーマンスを収録した動画を……提出できること!?! えー!?! 厳しすぎるよう、曜ちゃん!!」

「怪人と戦うよりは簡単だと思うけど」

千歌にとっては、空手で怪人を殴る方が簡単なんだろうか。

「てか、エントリーする時に部活じゃなきゃいけないんだから、そもそも夏の参加は無理だね」

「そんなあー！」

容赦のない現実には打ちのめされた千歌を横目に、曜も目的の情報を見付けた。

「音ノ木坂のアイドル研究部って、二〇一一年からあったらしいよ。デビューまで二年も下積みしてたんじゃん」

「そうなの!?!」

「知らなかったのか？」

幼馴染みの意外な反応に顔を上げると、

「だって、曲ばかり聞いてたし……」

千歌は恥ずかしそうに髪の間に戻っていった。

「完全にただのファンだね。……まあみんなそうやって頑張ってたんだから、千歌ちゃんも——」

「——そっか！ この学校にアイドル部が元々あればいいんだ！」

「ん？ 変な方向だぞ千歌ちゃん。そっちにヨーソローは出せないぞ」

「もしアイドル部があれば、そこに乗っからせてもらう！ そしたら曲を準備してラブライブ！だ！」

立ち上がった千歌は、弁当箱をぐちゃぐちゃとしまい始めた。

その小回りのよさに笑いながらも、いいアイデアかもしれない、と曜も思う。

「部活動の情報って、誰がまとめてるんだろ。笠木先生に聞いてみる？」

「生徒会がまとめてるよ」

「うひゃあー！」

真後ろから声がして、曜は飛び上がってしまった。

「か、果南ちゃん！」

「や」

幼馴染みは曜の後ろ——梨子の机に腰掛け、片手を広げた。

「いつからいたの？」

「一分くらい前から。二人とも気付かないから、楽しくなっちゃったよ」

果南は教室を眺める。

「転校生は？ まだ入院？」

「来てるよ。お昼はどこか行っちゃったけど」

「ふうん」

幼馴染みたちの会話の通り、先週末に学校で倒れた梨子は、週末一杯病院に入院していたそうだ。

しかし、と曜はポケットの膨らみを意識する。

梨子が持っていた球体から、怪人が産まれたのは間違いない。千歌は梨子をしつこくスクールアイドル活動に誘っているが、その件について納得できる話が聞けない限り、曜は承諾できない。

たとえばブランキアと呼ばれる存在が学校を護ると宣言し、曜がこの妙な球体を確保しているとしても。

「ねーねー果南ちゃん、生徒会にあるの?」

千歌の言葉で曜は意識を現実に戻す。そうだ、部活の記録の話だ。「たぶんね。部活設立には生徒会と職員会で会議が必要で、その議事録は生徒会が持つてるから」

「詳しいね」

淀みなく出てきた情報に、曜は目を丸くする。

「ちよつと行ってくる!」

「え?」

と言う間もなく、千歌は教室から飛び出していった。

「相変わらず忙しい子だなあ」

「でも、ちよつと懐かしいかも」

曜の言葉に、果南が首を傾げた。

「だってさ、高一の時の千歌って、机で潰れてるか、音楽聞ってるか、どっちかだったでしょ」

「そうかもね」

「入学した頃は違ったと思うんだけど。私の春の地区予選が終わった頃には、もう、かな」

思い出そうとしても、高校一年生の時の、千歌との記憶が出てこない。

幼馴染みだった千歌がいつの間にか、学校だけの関係になっていった。それに今気付いた。先週のように一緒に船に乗ったのも、ダイビングをしたのも、千歌の家に遊びに行ったのも、中学校以来だったのだ。

「私が忙しかったから、なのかな」

「そんなこと言ったら、お店が潰れそうなくらい暇だったのになにもしなかった、私の立場がなくなっちゃうな」

果南はおどけた口調で言う。

「いいんじゃない? 動いたら騒がしいけど、動かない時はテコでも動かないのが千歌なんだから」

「果南ちゃん、スクールアイドル、なんでOKしたの？」

果南は口元に微笑みを浮かべて、曜を見る。

「本気になったあの子が、どこまで潜れるか見たい。それじゃダメ？」
その口調は、千歌を信頼しているようでもあり、試しているようでもある。

「この街の、最後の思い出になるかもしれないしさ」

「大学は東京なんだっけ」

「まあね」

さっぱりした幼馴染みの顔を見ていられず、曜は窓際から教室に目を向ける。

クラスメイトは銘々好きなことをして昼休みを過ごしている。それだけなら、昨日一昨日と似たような風景だ。

だが集会で見せられた全校生徒の現状は、曜に目に見えた危機感を植え付けた。

過疎化が進む街の日常は、毎年のように統廃合だ廃校だと噂されても、なんだかんだで緩やかに続いていた。続くものだと思っていた。それが謎の怪人がたった二日間出現しただけで、あっさりとは瓦解しつつある。このままでは理事長代理の言う通り、四月末には誰も登校しなくなるかもしれない。

曜は単語カードを開き、二枚のカードに文字を書き込んだ。

「今、内浦には、二つの《非日常》があるんだよね」

それを机に並べる。

「廃校」

「ワギリ怪人」

非日常を象徴する、二つの危機。

「そこに、仮面ライダーブランクアが出てきた」

「ワギリ怪人」のカードの上に、「コケ怪人」と書いた三枚目のカードを置く。

《非日常》対《非日常》。

二人の怪人の戦いという非日常により、“私たち”の日常は侵食された。

曜は「コケ怪人」をひっくり返す。
現れたのは、「ブランキア」の文字。

苔の怪人が《仮面ライダー》と名付けられ、体育館に現れた時、それは《日常》に転がった。

一定期間耐え抜いた非日常は、日常と化す。

日常であれば、「私たち」は立ち向かえる。

その点で、理事長代理の行動は正しいのだろう。

「廃校」に対応するのは……」

曜は四枚目のカードにシャーペンを走らせ、リングから抜く。

だが机の上に置く前に、躊躇する。

この希望も、飲み込まれるのか？

怪人か、もしくは、誰かによって。

「私、行くよ」

果南が立ち上がり、曜に手を見せた。

「曜はどうする？」

「千歌ちゃんが戻ってきたら、とりあえず作戦会議かな」

「そうじゃなくて」

「え？」

「私はこの契約に乗ったわ」

果南は曜の手から、弱々しい文字の書かれたカードを抜き取り、机の上に置いた。

「廃校」のカードの上に。

「じゃね」

果南は涼しげな顔をして教室を出て行った。揺れる高いポニーテールは自信に満ちていた。

曜は机の上に目を落とす。

それからもう一枚カードを抜き、四枚目と同じ文字を力強く書いて机に叩き付けた。

「スクールアイドル」のカードを。

*

「やっぱりアイドル関連の部活はないですね」

内山いつきがパソコンの画面から顔を離すと、生徒会長のダイヤと千歌が折り畳みの長机を挟んで睨み合っていた。

「あの、ダイヤさん、一応遡りましようか?」

「必要ありませんわ」

「お願い、いつちゃん!」

同時に言われて、いつきは目で二人を見比べる。

「仕方ありませんわね」

ダイヤの許可に頷いて、いつきは「眠そうな顔ですわ」と評価されがちな目をしよぼつかせながら、マウスを操作し始めた。

(なにがどうなってるのやら)

千歌が突然「スクールアイドル部、始めます!」と飛び込んできた時は驚いたが、ダイヤが打ち返す気満々の態度だったのにも驚いた。千歌がそのような動きをしていると、ダイヤは何故知っていたのだろうか。

「あ、二件あります」

画面に出てきた検索結果は意外なものだった。

「二九九〇年の《アイドル研究同好会》と、二〇一一年の《スクールアイドル同好会》です。へー、あったんだ」

前者はいつきたちが産まれるより前の時代で、文字通り《光GENJI》やアイドル四天王あたりを「研究」する会だろう。だが、つい五年前にスクールアイドルに関係する部活があったとは思わなかった。

「アイドル研究同好会は浦星高校時代なので男女合わせて五人、スクールアイドル同好会は女子生徒五人で設立されています。ですがどちらも部に昇格せず、半年ほどで消滅していますね。全国大会エントリーの記録もありません」

「ありがとうございます、いつきさん」

後輩にも丁寧な言葉のダイヤに、いつきは小さくお辞儀を返す。

「納得していただけましたか? 高海さん」

長机から動かないダイヤに、千歌は、

「はい! これから五人集めればいってことですわね!」

と大きく頷いた。

「そうではありません」

「え!？」

顔をこころろ変える千歌に、ダイヤは平静を保ったまま言う。

「いつ統廃合や廃校の決断が下されるか分からない現状、存続実績のない同好会の設立は認められません、と言っているのですわ」

「実績はこれから作ります! 私たちならできます!」

「あなた方が、他の方々と違う理由が、なにかあるのですか?」

「え……つと、それは……」

千歌は半笑いで口籠もってしまった。いつものように、勢いだけで行動していたようだ。

だが、ダイヤはそんな千歌に、につこりと笑いかけた。

「高海さんの考えは分かりますわ。スクールアイドル活動で母校の廃校を阻止した^らs、その音ノ木坂から桜内さんがやってきたことで、我が校にもスクールアイドルを、と考えたのでしょうか」

千歌が、我が意を得たり、と頷き――

「甘ちゃんもいいところですよ!」

――ダイヤは立ち上がり、ばん、と木目の化粧板を叩いた。

「音ノ木坂女学院はその名が示す通り、元々が音楽を嗜好する生徒の集まる学校です。それがUTX学園の人気によって生徒数が減り、多くの部の活動が阻害された時期だったからこそ、最終的に全校生徒の協力を得て、あれだけの曲を作ることができたのですよ。わたくしたちはどうですか?」

「そ、それは」

「まず、浦の星女学院の生徒数の減少は、競合校が原因ではありません。少子化と再開発計画によって、街そのものが一時的な死に向かっているからです。次に、いつきさん。我が校の音楽系の部活はどのような状況ですか?」

千歌に口を挟む機会を与えず、ダイヤは言葉を続ける。

「はい、えっと――」

いつきは、ダイヤからまとめておくよう依頼されていたメモを画面

に表示する。

「――吹奏楽部とコーラス部は、二年前――二〇一四年に廃部になっています。軽音楽部も同年に同好会に格下げ、去年、廃部になりました。まあブラバンは何年もC編成でコンクール出場だったので、時間の問題だったでしょうけど」

「ありがとうございます」

ダイヤはまた、いつきに頭を下げた。

「音楽系の部活に入っていた生徒の大半は卒業し、今は礼拝堂付きの聖歌隊が三年生に一人いるだけです。それも有名無実ですし、あのように怪人が出てきた場所となつては、大きな増員は見込めないでしょう。お分かりですか？」

ダイヤは椅子に腰を下ろした。

「わたくしたちは時機を逸したのですよ、高海さん」

感情の籠もらない口調で放たれた結論に、生徒会室に小さな沈黙が落ちる。

改めて言語化されて、いつきも実感する。

浦の星女学院は、否応ない流れのただ中にいるのだ、と。

「思い付きの行動で生徒たちを混乱させぬよう、お願い致しますわ」

「……はい」

千歌は口を尖らせたまま答えた。納得していないようだったが、

「失礼しました」

と一礼して部屋から出て行った。

推移を見守っていたいつきは、ゆつくりと息を吐き、ダイヤを見る。

「さあ、わたくしたちも戻りましょう」

怪人襲撃事件に関する議事録を片付ける生徒会長の表情は、生徒会副会長を半年間務めたいつき程度では読み取れないのだ。

*

「曜ちゃん!! ダメだったよー!!」

昼休み終了直前、千歌が半泣きで二年生の教室に駆け込んで行った。

桜内梨子は、そんな千歌を追いかけるように教室に入った。

「おーよしよし、ちっかち、泣かない泣かない」

千歌に抱き付かれた曜が千歌の背中を叩き、一緒にトランプをやっていたと思しき生徒たちにアイコンタクトを送っている。

「千歌ー、また先輩に苛められたの？」

オールバックにした髪をカチューシャでとめた少女が、千歌の背中に取り付いた。たしか井藤むつと言う生徒だ。

「むっちゃーん！ そうなんだよ！ せっかくスクールアイドルやろうと思っただのに！」

千歌はスツと目を細めて、

『そんなさっさつと潰れそうな部は認められませんわ』。とか言っちゃってもおー！」

「子供か」

「なんでよー！」

冷静な曜の突っ込みに悶える千歌を見て、梨子は嬉しい気持ちになる。

千歌と姉もそうだが、こういった反発と接近を繰り返す磁力にも似た絆を見ると、嬉しくなってしまう。そういう人たちを、端からずっと見ていたい、と思う。

「待って待って、スクドル？ 浦女で？ やるの!？」

「やりたいんだよ！ むっちゃーん、やる!？」

食いついたむつは、だが振られた誘いに両手と首をすごい勢いで振った。

「無理無理無理無理!! 私、人前に出るの無理だから！」

「えー!? 体育祭とかでMC司会やってたじゃんー！」

「いやほんと無理だから！」

「じゃあ梨子ちゃん！」

「ごめんなさい」

「だよねー!!」

やけくその千歌が自分の机に伸びた時、五限の教師が入ってきた。

第三話：今考えても仕方ない — 2

B

入口から差し込んでくる雲間の西日に、壁にはめ込まれたステンドグラスの光、揺らめく蠟燭の明かり。

空間全体が厳かに、だが穏やかに彩られている。

祭壇の上に据え付けられた十字架には、全人類の罪を背負って死んだ男性の姿。

国木田花丸は一人、チャペルを歩いている。

十数秒前にはたしかにあった現実が消え、まるで不思議の国に迷い込んだ、アリスになったような気分だった。

それは、日本の田舎町にある廃校間近の学校から、カトリック教会に迷い込んだから、ではなく。

ここが、花丸の知識と記憶にあるカトリック教会とは、似ても似つかない場所だったからだ。

沼津で入っていた聖歌隊の発表で行った教会は概ね、十字架を模した天井の高い建物で、祭壇はその奥にあった。だがこの建物は、サイズの違う部屋が奥に三つ並んでいる構造だ。全体としては十字架の形なのだが、入口から祭壇まで東西に貫く身廊はないし、身廊と側廊を隔てるアーチを支える円柱もない。

中央の広い横長の部屋には、信徒席の代わりなのか、簡素なパイプ椅子が並んでいる。信徒はここに座り、奥の部屋の祭壇に祈りを捧げるのだろうか。機能的には近いものを感じないこともない。

「不思議な作りすら」

花丸は意識せず呟いていた。

「ここは元々、正教会の聖堂でしたからね」

「ずらっつ？」

自分の声がことのほか響いて、花丸は慌てて口に手を当てた。

振り返ると、いつからいたのか、黒いキャソックスを着た男性が立っていた。

「申し訳ありません、気付いていると思っていました」

そう言つて小さく笑つた。

「いえ、あの、オラ——私こそ、勝手に入つちやつてごめんなさい」
「構いませんよ、ここは生徒を含むすべての方に開かれていますから。
表のフェンスも開いていたでしょう」

それもそうだ、と花丸は自分の発言に恥じ入る。

「聖堂だったのですか？　でも表にはカトリックの尖塔が付いていま
す」

「ロシア正教に入信した黒澤家が、明治二十一年に私立長井崎中学校が
創立した時は、〃グーポール〃という炎を模した立派な装飾が付いてい
ました。カトリック教会に改宗する際に、形だけでも、と尖塔に交換
されたそうです」

花丸が首を傾げていると、

「ロシアやアラビアの建物にある、タマネギみたいなアレです」
と砕けた調子で補足した。

花丸は納得して、装飾の少ない天井を見回しながら感嘆の息を漏ら
した。

「教会に興味がありますか？　それとも本校の歴史ですか？」

「私、沼津の聖歌隊に入つて、それで、浦の星に進学したらチャペル
の聖歌隊に参加しなさいって言われたんです」

「では、あなたが国木田さん？」

「はい！」

「よかった。先週の件で、来ていただけなにかと思つていたのです」

そう言われて、花丸は思い出してしまった。

あの頭が輪切りになつていた、天使のような怪人の姿を。

だが、顔は笑顔を保持する。

あれは、あの《仮面ライダー》という人がやつつけてくれたはず
だ。

そう信じることにしたのだ。

「私、今年浦の星女学院に入学した、国木田花丸です」

「聖ゲオルギオス礼拝堂の司祭を務めております、滝川天吾です」
名を明かし合い、一つの儀式が終わる。

「あの、私、お寺の生まれで家もお寺なんですけど、いいです?」

「ええ、本校の聖歌隊は宗教と関係ありませんよ。ではお時間がよろしければ、活動についての――」

言いかけたところで、西日が遮られた。

また曇ってきたのかと目を向けると、出口に誰か立っているのがシルエットで分かった。

「お待ちください」

滝川司祭は花丸にそう言って、出口に向かう。

「ようこそ、ここは聖ゲオル――」

「――Ciao! 久しぶりね、ミルキー!」

その人物は司祭の言葉を遮り、チャペル中に反響する高音で言った。それだけで花丸には、それが朝の全校集会で見た理事長代理の小原鞠莉だと分かった。

「滝川です。呼びたいように呼ばないでいただきたいのですが、小原さん」

「なら私は理事長代理よ。二年前と同じ呼び方はご遠慮いただきたいでエス」

司祭は花丸に目を向けてキャソックに覆われた僅かに肩を竦めた。

「戻ってこられたのですね」

「一段落付いた、って言えばいいんだけど、まア、星が巡ってきたのよ」

鞠莉は花丸にっこり笑いかけると、二人の間を通りすぎ、祭壇の方へ向かう。

「《エンジェル・フォーメア》はここから出てきたのよね?」

「怪人のことですか? 天使を名乗るとは、聞き捨てなりませんね」

「私が名付けたのよ」

司祭は口を閉じたまま頬を持ち上げた。意外と俗っぽいところがある、と花丸は思う。

「はい、そう聞いています。私はあの日、新入生の洗礼の準備がありましたので、純水の搬入に洗礼盤の設置など、ここを離れていた時間がありました」

理事長代理は首を傾げた。左側頭部で結わいた大きな輪っかが、遅れて弾む。

「ねえミルキー。アナタ、実は神様のこと、あんまり好きじゃなかったりする？」

そんなことを、礫にされたブロンズ像を見上げて言った。

「なにを仰るのです。私は神に献身しているのですよ」

西日が雲に消えていき、光の境界がぼやける。

祭壇の手前の鞠莉が振り返る。

「怖くない？ 人間のことなんて気にもしないで回り続ける、無責任なSystemが」

「仰る意味が、よく分かりませんが」

「そう？ アナタは？ この星のこと、どう思う？」

と、その矛先が花丸に向く。

数秒考えて、花丸は口を開く。

「吉田さんは言いました。『天地をもちて書籍となし、日月をもちてその証明とす』って。オラ——私を無視して回る星のシステムがあるなら、私は私の断面で読み解くだけです。そこに好悪はありません」

その返答に手のひらを上に向けた鞠莉は、

「まあいいわ」

と言つて、奥に進んだのと同じペースで戻ってきた。

「Sorry、最近おかしなことが頻発しているから、ね」

「構いませんよ。生徒の迷いを聞くのは、カウンセラーとして私の役目です。神と精霊と父は、洗礼を受けていないものの罪を赦すことはできませんけどね」

鞠莉は片手を振って答え、出口まで行くと、ふと、脇の聖水盤を覗き込んだ。

「空よ。足しておいたら？」

司祭は大股で近付き、鞠莉の発言が正しいと分かったか首を傾げた。

(いつから空だったんだろう)

花丸はこのチャペルの活動に、若干の不安を抱く。

*

黒澤ルビイは退路を断たれていた。

教室棟と管理棟と体育館に囲まれた中庭の、生け垣や立木の生い茂る一角に追い詰められ、三方向から迫る人影に脅えていた。

「あ、あの……」

話を通じる雰囲気でもなさそうだが、ルビイは対話を試みる。

「ル、ルビイに、よ、用ですか？」

すると人影のうち、正面の一人が、口を開いた。

「黒澤ルビイちゃん、だよね？」

オールバックをカチューシャでとめた二年生だ。

「は、はい……」

「ダイヤさんの妹さんだよね、今年入学した」

高い位置で短いサイドテールを結んだ二年生だ。

「そうですけど……」

「私、ダイヤさんと同じ生徒会よ。入学式で挨拶したでしょ？」

低い位置の一つ結びに後れ毛が目立つ二年生だ。

「ふ、副会長さん、ですよね……？」

「よし、じゃあこれで私たち、知り合いだよー！」

もう一度、カチューシャの上級生が言った。

「あ、あ、えっと……」

上級生の発言でルビイは、肯定の発言を意図的に言わせることで、のちの説得を受け入れやすくするテクニツクの存在を思い出した。そういう時は警戒しろと、姉が教えてくれたのだ。

だが、だからといって、包囲網を狭めてくる三人を強行突破するほどの度胸は、ルビイにはない。

「ご、ごめんなさい、私、初めての人には一人でついて行くなっって言われて……」

「謝らなくていいんだよ、少し話がしたいだけなの。いいでしょ？」

頷くような角度に首を動かしてしまう。

なんではつきり断れないんだろう。

なんでボディガードの黒服さんたちは助けに来てくれないんだろう

う。

涙が盛り上がってくる。高校一年生なのにこんなことで泣くなんて、またお母さんに叱られちゃう。そう考えると、ますます泣きそうになる。

「ちよつと、ちよつと、むつ、やばいって！　これあと一步で犯罪だつて！」

「平気平気、もう一〇〇パー犯罪だから」

「ダイヤ様に殺されちゃうよ！」

生徒会副会長とむつと呼ばれたカチューシャの上級生が小声で言い合い、

「いつき、よいつむフォーメーションを崩しちゃダメ！」

サイドテールの上級生が副会長に指示を飛ばす。逃がしてくれる気はなさそうだ。

こんなことなら、一人でリムジンに乗って帰っていればよかった。

電話の電源を切っている花丸を探すなんて、ルビイにできるわけなかったんだ。

(うう、お姉ちゃん、マルちゃん、助けてよう……)

「よしみ、早く！　あれ！」

と、よしみと呼ばれたサイドテールの上級生が、散水されて輝く芝生の上に、ちよん、となにかを置いた。

「ね、これ食べたくない？」

「そ、それは！」

その透明なフィルムに印字された文字と丸い橙色のシールに、ルビイは釘付けになる。

『みかんスイートポテト』！　今月から菓子屋《松月》で販売されている、気鋭の期間限定商品！　食べたかったのにお姉ちゃんが『ルビイは太りやすい』だの『黒澤家ともあろうものが洋菓子にうつつを抜かすなど』だの色々言って結局食べられてない、あのー！

「そ、そうなの？　色々大変なんだね」

同情的に呟くサイドテールの上級生は、それをくれるというのか。

(じゃあ……悪い人たちじゃない……んだよね？)

完全にアウトな判断の元、ルビイは警戒心を緩めてお菓子を手に取る。

「やった！ ルビイ、やったよ！」

「そうだね、よかったねルビイちゃん。じゃあ、お姉さんたちの言うこと、聞いてくれる？」

フィルムを開けようと四苦八苦しているところで、気付けば一メートルも離れていない三人から、なにかの契約書らしき用紙が突き付けられた。

「ピギイ!？」

「ここに名前を書いてくれるだけでいいから。ね？」

「あ、あ、あの、あの——」

「——そこまでだよ！ 君たち！」

そこに別の救いの手が現れた。

「とうー！」

ルビイの後ろの生け垣を跳び越えてきた誰かが、上級生の前に立ちはだかったのだ。

「下級生をいじめるなんて、上級生の風上にも置けないヤツら！ このちかつちが成敗してくれる！」

と妙な構えを取り、ルビイを囲んでいた二年生三人を、ばったばつたと薙ぎ倒していく。

いや、本当に手刀とか入ってるけど、平気？

「く、クソ！ 覚えてろよ！」

お手本のような捨て台詞とともに逃げていく上級生を眺めたルビイは、

「た、助かりました……」

安心して芝生の上に座り込みそうになった。

「お嬢さん！」

そこを助けてくれた上級生がパツと支えてくれる。

「お尻が濡れますよ」

その顔が近くなる。

先輩の長い髪が揺れ、その匂いをうっとり嗅ぎ——

「じゃ、ここに名前書いてくれる？」

——そのまま固まった。

「な、な……なんなんですか!」

ルビイにしては大声を上げ、身体を離す。

「ダメ?」

「ダメっていうか、なんなんですか、先輩たちは!」

見回すと、さつき逃げていった三人の上級生が、常緑樹の陰に隠れてこちらを見ていた。グルだったのだ。

「まあまあ硬いこと言わないで。ここに名前を書くだけでいいから。形だけ形だけ」

「か、形だけ」で引き込んであとで美味しい汁をすすするのは、ヤクザの常套手段だってお姉ちゃんと言っていました! てか、それ部活の新設申請じゃないですか!」

と、ルビイは申請用紙の上の文字に目がとまり、

「スクールアイドル部? スクドル始めるんですか!」

思わず叫んでしまった。

「どうしたの? もしかして興味ある?」

目を丸くした上級生に、ルビイは慌てて口を押さえる。

「あ、あの、ルビイ、部活はできないんです。家からとめられてて」

「そうなの? うーん、妹から攻めれば、って思ったけど、上手いかないもんだなあ」

「上手いいくと思って——」

かさり、と。

草の揺れる音が、妙に大きく聞こえた。

「ん?」

音のした方を見ると、こちらを見ている上級生の向こうの木陰に、太った人影を見付ける。

片腕をぶらぶらと揺らし、膝の曲がらない脚を引きずりながら、近付いてくる。

ボリス・カーロフが『歩く死骸』で演じたような、歩き方。

ルビイは溜め息を漏らし、それを指差す。

「先輩、もういいですよ。ルビィ、部活は——」
「——うひゃあ!!」

ルビィの発言をかき消すように、上級生が声を上げた。背後からやってきた人影に気付いて、だ。

「よつちゃん! そいつから離れて!」

長い髪の上級生が叫び、ルビィの前に出て構えをとる。さつきとは違う、緊張した構えだ。

ということは、これは仕込みじゃない?

そう考えた時、それは太陽の下に現れた。

「ピギィ!」

「怪人!? まさか!」

それは、全体では人の形をしている。

だが、明らかに人ではない。

皮膚が剥げ落ちて、肉どころか骨さえ見える手足に、髪の毛抜け落ちた頭、目玉や舌がはみ出した顔。

極めつけは、藍色と暗褐色の斑点が浮いた腹が風船のように膨らみ、歩きたびに流動性の内容物が内側から表面を蠢かせている腹。

そんなディテールよりもっとも異様なのは、それらが妙に、ポップなタツチで表現されていることだ。

まるで現実味のない、記号化された「死体」。

それが——

「先輩! あっちにも!」

——中庭のいたるところから、地面から滲み出るように、次々と立ち上がっていくのだ。

「ウソお!」

総勢、七体。

気付けばルビィは、さつきと同じように退路を断たれていた。

「な、なんでルビィばかりこんな目に……!」

ただし今度の包囲者は、本当に話が通じない存在らしい。

*

初めて浦の星女学院の校舎を見た時、桜内梨子は「学校っぽくない」

と感じた。

浦女の屋上は、南向きにソーラーパネルが立ち並んでいることを除けば、基本的に真っ平らだ。屋上へのアクセスが外階段だけで、階段室が存在しないからだ。そのため、いわゆる“抽象化された学校”に見られる、上部の出っ張りがない。それが学校っぽくなさの理由だろう。

中庭における千歌と何者かの対面から、数分、遡る。

梨子は屋上にいた。

湾の栈橋にいた時に思った通り、潮の匂いはしない。だが長井崎岬の名の通り、ここは海に突き出した岬だ。前も右も左も、生い茂る緑の向こうは海。長い長い波止場、点々と浮かぶ生簀、湾の海岸線沿いの家々。

それはこの街の人にとって、大切な景色なのだろう。

だが海が苦手な梨子にとっては、処刑台への階段に思える。

「また会ったね、梨子さん」

振り返ると、ソーラーパネルのそばに曜が立っていた。

舌打ちを飲み込む。意識しないうちに背中をとられる機会が続いている。なまっている証拠だ。

「こんにちは、渡辺さん。こんなところにどうしたの？」

浦女で出会った人はほぼほしない苗字呼びで、梨子は答えた。

「スクールアイドルの練習するなら、どこがいいかなー、って思ってた」

「高海さんの？」

「私たちの」

曜は慎重な口ぶりで、その言葉を言った。

「私もするんだ。スクールアイドル」

「そ、そうなの？」

唐突な宣言に、梨子は目を瞬かせる。

「私、この学校が好きだよ。今年で廃校って噂もあるけど、でも、みんながいる限り、ここにいたい。だからさ、教えてよ」

梨子は曜に向き直る。

「なにしに来たの?」

「え?」

「ただの転校生だなんて、もう、通用しないよ」
曜の口調は抑制されている。

だがその裏にある感情を隠していない。

「仮面」はもう、被っていない。

「もし、もしだよ。梨子さんが、私と同じ気持ちを共有してくれないなら——」

風が吹く。

あの匂いが鼻腔を刺激する。

私の嫌いな潮の匂いが。

「——ここにいてほしくない」

強烈な危機感。

ぶつけられた敵意に対してではなく。

曜の手の中で光を放ち始めた、ムーフォームに対して。

「渡辺さん、その球を捨てて」

「先生以外にそう呼ばれるの、久しぶりかも」

「お願い。地面に置いて」

「なんで?」

「お願いだから!」

「なら答えて!」

音ノ木坂女学院のブレザーがはためく。

浦の星女学院のセーラー服がはためく。

「イヤなことがあったんだよ。すごく、すごくイヤなこと。たくさんの人が傷付いて、たくさんの人がいなくなつて、でも、みんな、それを忘れようとしてる」

梨子を睨む両目に、暗い光が灯る。

その手に握る球体に同期する光が。

「二度と……。一度と、あんなことは起こさせない。梨子さんがその使者なら、私は……」

言葉は続かなかつた。

代わりに放たれたのは、輝きを放つ弾丸。

「！」

持ち主の手を逃れたムーフォームが、梨子へ発射されたのだ。

(発動してるー！)

上半身をひねる。

顔面を目掛ける射線から逃れ、眼前を通過する球体を視認する。

手を伸ばせば掴める距離。

発現する前に、回収できる。

だが、その手がとまる。

曜が膝から崩れるのを見てしまった。

ソーラーパネルを支える鉄骨の構造体に向かって倒れるのを。

「渡辺さんー！」

跳ぶ。

曜の横腹にぶつかり、抱き合うように屋上を転がる。

「すっかりして！ 渡辺さんー！」

意識がない。当たり所が悪かった？

いや、失ったから倒れた、その順序だ。

「フォームはー！」

曜を寝かせ、屋上の縁から下を見下ろす。

だがそこには、校庭を始めとする学校施設が見えるのみ。

いや――

「プール……」

――四月にしては透明な水を湛えるに屋外プールに、小さくない波

紋が起きていた。

水影が落ちる底面に、ほのかな輝きが揺れている。

心臓が早鐘を打っているのを感じる。

ポケットの膨らみに触れる。

なにが起こる？

「……あれ？」

なにも起きない。

プールの波紋は、海風によるさざ波にかき消された。

おかしい。

μーフォームは発動していたはずなのに。

「い、いいてて……」

と、曜が起き上がった。

「あれ？　なんだっけ。梨子さん？」

梨子は曜に駆け寄って手を貸すと、その顔を覗き込む。

「渡辺さん、あなたの怖いものってなに？」

「は？」

「怖いものよ」

「え？　え？　飛込の水面尻打ちとか？」

「お、お尻い？　お尻、えつと、え？　それってなにになっちゃうの？」

「あと、交通事故とか？　なについて？　話が見えないんだけど？」

要領を得ない疑問符の応酬に、

「ピギィー！」

奇声がかぶさった。

「怪人!？」

先に反応した曜が、立ち上がって走り出した。ソーラーパネルを迂回して、プールと反対側の縁から身を乗り出した。梨子もそこに並ぶ。

そこは、直角に交わる管理棟と教室棟、そして体育館とその渡り廊下に囲まれた、中庭だ。植物の生い茂るその中に、数人の浦女生と、そうは見えないなにかがいた。

「あれがフォーメア？　なんで、フォームはプールに落ちたんじゃ！」

「ストップ、待って！　説明プリーズ！」

曜が梨子の肩を引っ張った。

「わけ分かんないよ！　梨子さんだけ分かってないで教えてよ！」

曜に覗き込まれた梨子は、その顔を見続けるのも、目を逸らし続けるのも、無理だった。

「……怪人のこと、私たちは《フォーメア》って呼んでるの。《μーフォーム》——あの球体と、人の恐怖心と、水からできた、正体不明のなにか」

「正体不明？」

「まだ分かってないのよ」

曜は梨子から手を離し、

「フォーメア、フォーメア、フォーム？ エア、メア……」

扇状に広げた単語カードに「form」「foam」「air」「mare」「mere」と走り書きしていく。

梨子はそのうちの二枚を示した。

「foam」とmareで、foamare。泡に、悪夢 悪い 嫌な——怖いもの？」

梨子が頷くと、

「恐怖の泡 っってところか。分かった、これ以上は今考えても仕方がないね」

曜は自分を納得させるように呟いた。

「とにかく、なんとかしないと。梨子さん、理事長の番号分かる？」

「なんで？」

「なんで、って！ 《仮面ライダー》って人に来てもらわなきゃ！」

「あ、そ、そっか」

だが電話を取り出す梨子の肩を、またしても曜が掴んだ。

「こっちにも来た！」

「こっち？」

曜の指差す先を見ると、今まさに足を引きずるように歩くなにかが、ソーラーパネルの向こうから現れたところだった。

「お化け から死体が産まれた？」

呆然とした曜の呟きは、前半は意味不明だが、後半は真だった。

水を滴らせて近付いてくるのは、身体のうちがちが腐った死体。

それも一・五倍ほどにも膨れ上がった、水死体だ。

それが、まるでパブロ・ピカソの『ゲルニカ』のように抽象化されている。

ゆえに肉体的な気持ち悪さはなく、だからこそ生理的な嫌悪感だけが刺激される。

それが今回の怪人——フォーメアだった。

「下がって、渡辺さん」

曜を背中で隠すように、前に出る。

その時、どこかから複数の叫び声があった。校舎の中らしい。

「なんでこんな、こんなところに」

曜は疑問を口にしたが、そもそもプールに落ちたムーフォームから生まれたフォーメアが、中庭に出たのがすでにおかしい。

「渡辺さん、ここのプールの水、再利用してる？」

問いかけるが、曜は微動を繰り返す瞳で水死体を凝視しているだけだ。

「渡辺さん！ しっかりして！」

「え？ あ、うん、たしか……トイレとか、中庭の植物の水やりとか」
中水として繋がっているのか。もう水泳部が使い始めているのか
プールの水は綺麗だった。なら濾過システムや雨樋を通じて、学校の
どこにも来られるはずだ。

そうこうしている間にも、死体の形をした怪人は、ギクシャクした
動きでこちらに近付いてくる。斜めになっっているソーラーパネルを
踏んでバランスを崩し、地面に転がってもまだ這い進もうとする姿
は、水死体というより――

「――《ゾンビ・フォーメア》、かな」

じりじりと距離を詰めてくるフォーメアに、梨子はポケットの中の
シーリングされた球体に触れる。

「梨子さん、早く避難しよう！」

「慌てないで、動きは遅いわ」

「この数でも!?!」

「数?」

梨子は周囲を見回し、息を呑んだ。

同じような姿をしたフォーメアが、前から後ろからも、そろそろ
と出てきたのだ。視界に入るだけでも一〇体はいる。

「なんでこんな！ いっぺんに!」

「ゾンビなら多いのは当たり前だよ！」

「論理的！」

曜に手を引かれ、ソーラーパネルに沿って管理棟の屋上を走る。向かう先は教室棟の外階段だ。

「渡辺さん、校庭に避難して！ 乾燥したところに！ 校内放送は!?」

「できるけど、梨子さんはどうするの!?!」

「私は……」

ただの検査旅行だった。

なにもなくていいはずだった。

ポケットの中のムーフォームだって、そういう目的で渡されたわけじゃなかったのだ。

この街に来てから、この学校に来てから、なに一つ、予定通りにいっていない。

あの時は無我夢中だった。

いや、その記憶さえない。

なのに、また、求められるの？

どうして。

その時、ソーラーパネルの上からゾンビが転がってきた。

先行する曜は気付いていない。

「危ないー!」

曜を突き飛ばし。

相手をいなすべく、構え。

遅かった。

回転するゾンビの手が、梨子の顔に届いた。

「いッー!」

視界が黒くなり、赤くなり、明滅する。

激痛と熱が走る。

「梨子さんー!」

顔に触れた手に、熱い液体で濡れる。

目を開けると、青緑色の血が見える。

違う。

目が赤い光を反射するようになったから、血の赤が見えなくなっただけだ。

それも一時的、急速に色順応が始まり、世界の色が戻る。だが手は緑色のまま。

緑色の泡に覆われる。

熱を持つ緑色の泡に。

「梨子……さん？」

全身を覆う泡は硬さを帯び、苔のようにドロドロした質感に変化していく。

身体の熱さは、まるで裸になったような涼しさにとって代わられ。

ついで、五感が失われ、繭のようなものの中に閉ざされる。

その繭から、「梨子」が離脱する。

それを客観視する。

やがて、繭から脚が分離し、腕が分離し。

両肩から取り込まれた空気が肺を巡り、爆発的なエネルギーを与え、脇腹に開いた鰓から音を立てて噴き出した。

水の滴る苔のような物質が、染みこむように身体へと消えていく。

現れるのは、鋭い刃が連なったナイフのような一対の触角、赤い大きな複眼。

腰のベルトでひとたび強く輝く、桜色の球体。

「ふう……」

立ち上がり、ゆつくりと息を吐く。

身体も、服も、靴も、痛みも、熱さも、涼しさも、どこかに消えた。

あるのは、メルシャウムと名付けられた物質の塊。

その怪人に、「梨子」が合流する。

それを主観視する。

変身してしまった自分を。

「《ブランキア》、まさか、梨子さんが」

「ふッ！」

曜に掴みかかろうとしたゾンビの腕を取り、地面に引き倒す。

そのまま胸の辺りを踏み抜くと、ゾンビは水に還り屋上を濡らした。

「行くう」

「う、うん」

今度は曜を先導し、道々にいるゾンビを弾き飛ばし、管理棟から教室棟への短いブリッジを渡る。教室棟の屋上にはゾンビがおらず難なく縦断して外階段まで辿り着いた。

「避難して、渡辺さん」

「梨子さんは、どうするの？」

「私は——」

再度の問いで、曜の詰問が思い出される。

「——分からないの」

「え？」

「なにをしに来たのか、分からないのよ」

『あの音ノ木坂』。

ベリーショートの三年生はそう言った。

“あの”が指す意味は、分かっている。

“μ’s”によって廃校を救われた”、だ。

その属性を帯びた人間なのだ。

喜び、歓迎しなかったのだろう。

そこに、他意はなかったのだろう。

だが梨子は、そこに拒絶を感じた。

音ノ木坂を追い出され、東京から離れたのに。

音ノ木坂の制服を脱げないまま、内浦にいる。

この街で梨子を意味する記号は、梨子が捨てたかった記号なのだ。

二つの相を隔てる、泡のように不確かで曖昧な境界そのものが私。

じゃあ、私はなにができる？

じゃあ、私の居場所はどこ？

「梨子さん……」

鋭敏な聴覚が、曜の呟きを捉える。

大きな複眼で曜を見る。

「でも」

彼女の言う通りだ。

今考えても仕方ない。

「私、《仮面ライダー》だから」

曜は泣きそうに顔をゆがめたが、やがて頷いた。

「一時間もしないで雨がくると思う。それまでに終わらせて、梨子ちゃん」

「ありがと……曜ちゃん」

仮面の奥で笑い、梨子は屋上から飛び降りた。

第三話：今考えても仕方ない — 3 (完)

*

「どうなってるの！ 千歌！」

「分かんないよ！」

高海千歌は襲ってくる水死体のような怪人をさばいて、包囲網を切り崩そうとしていた。

だが立木と垣根の並ぶ中庭の視界はよくなく、生け垣を強行突破しようとして倒れた死体が木陰に見えなくなり、不意に近くから襲いかかってくることもあった。しかも千歌は、生徒会長の妹たるルビィを護らなければならず、両手片足を縛られて戦っているようなものなのだ。

だから千歌は、中庭の外にいるよしみ、いつき、むつの三人——自称《よいつむトリオ》に目を向けた。

「いつちゃん！ 理事長に連絡して！」

「理事長!?!」

「ブランキア！」

「そ、そっか！」

（シャイニーもだけど！）

千歌は水死体が振り回した腕を避け、空いた脇腹に中段突きを繰り出した。だが輪切りの天使怪人の時のように身体を打ち抜けないし、ふらついて幹に寄りかからせた以上のダメージもない。

（勝手に変身しないのはありがたいけど！）

これでは話が進まない。

「むっちゃん！ 放送で呼びかけて！ 教室から出ないでって！」

「分かった！ いつき、行くよ！」

「うん！」

いつきとむつが中庭から走り去り、

「わ、私どうしよ！」

渡り廊下まで後退したよしみが声を上げた。

「よっちゃんは、えっと、えっと、あとで『みかんどら焼き』おぐって

！」

「なにそれー！」

本当はルビィと避難してもらって自分は変身といきたいのだが、よしみとの距離が縮められそうにない。

そうこうしている間に、ルビィのボディガードらしき四人組の黒服が走ってきた。黒服は警棒を手に中庭の周囲に広がっていく。

「来ちゃダメー！ 黒服さんじゃ怪人に勝てないよー！」

千歌が叫んで手を振るが、もちろん彼らは中庭に入ってきた。それは職業意識として当然なのだろうが、如何せん相手が悪い。天使の時のような攻撃は食らわないものの、死体を殴り付けては手応えのなさに驚き、保護対象まで近寄れないでいる。

「ルビィちゃん、私がこいつらを引きつけるから、黒服さんか、よつちゃんのところまで走れる？」

「る、ルビィが!? む、む、無理だよう！」

心底意外そうな顔をされた。

「できるよ！ 天使の怪人の時みたいに！」

「あ、あの時はお父さんもお母さんもいたし、怪人は一人で、《ブランキア》って人と戦ってたし！」

(じゃあどうすれば！)

ルビィに正体を晒してでも、変身するべきか。

「あれ、先輩って、もしかして、この前私たちを助けてくれた先輩？」
「今それ言う!?」

「だって、あの後、挨拶できなくて——」

その時、目の前に迫っていた怪人が地面に倒れた。

真上から降ってきた緑色のなにかに潰されて。

「仮面ライダー!?」

「ブランキアー！」

黒服の一人とルビィが声を上げた。

緑色の苔のような装甲をまとった怪人——仮面ライダーブランキアは、怪人を一人ずつ睨んだ。

そして地面からなにかを引き剥がすように持ち上げる。

それは水だった。その瞬間は。

ブランキアの手には引きずられた水は、まるでホースの水を逆再生したように持ち上がりながら、ブランキアの手元で泡立ち、凝縮、緑色のどろどろになる。それが一つの形を成していく。

二メートルほどの長さを持つ、薙刀に。

「ああやって作るんだ！」

死体は黒服を引き剥がすと、大声を上げたルビイを無視し、ターゲットをブランキアに向けた。

五人の死体がタイミングを計るように、一斉に距離を詰めていく。だがブランキアは冷静そのものだ。

左半身で構えた薙刀の、石突きを顔に引き寄せ、刃筋を左脚の前で上に立てて構え――

「フッ！」

――死体の脚を一気に切り落とした。

前のめりに倒れる死体から一步距離を開け、

「後ろ！」

ルビイが叫び、ブランキアが肩越しに背後を見る。

その動きのまま、腰のあたりからなにかを取り出す。

『セディーユ』

そんな電子音声が登場に響いたと思いきや、薙刀の石突きから水が迸った。それは湾曲した刃に変化し、背後から襲おうとした死体の頭を当然のように斬り飛ばした。

「あれも、フォーム？」

石突きと新しい刃の中間に、ムーフォームらしき球体があった。ただし、千歌が持っているものや天使の怪人を生み出したものと違い、金属部品で覆われている。あれが、OGIグループが開発した、ブランキアが変身するためのムーフォームなのだろうか。

両刃の薙刀を持ったブランキアは、前後左右に目があるかのように、最小の動きで着実に死体を始末していく。脚を切られて倒れた死体も、小さな隙の間に下段に構えた薙刀で頭を切り刻まれ、水に還った。

派手さはないが、長物のリーチに寄りかかった闇雲さもない。

この前の合気道といい、薙刀術といい、訓練を受けているのは確かだ。

九体の死体が芝生に消えていったのは、わずか数秒後だった。

「すごい！」

ルビイの言葉に答えるようにブランキアが千歌たちを見て、体育館の方を指差した。逃げろと言っているようだ。

「ルビイちゃん、行こう！」

だが、

「先輩、前！」

とまらざるを得なかった。

ぼこぼこ、と。

芝生から九体の死体が立ち上がったのだ。

「なんでよ！ 今死んだのに！」

「死体は死なないですよ！」

「理屈が聞きたいんじゃないの！」

「死ぬなら『みかんスイートポテト』を食べてからがいいよう！」

ブランキアの方を振り返ると、そこには四体の死体があった。単純に数が増えているのだ。

そこに校内放送のチャイムが流れる。

『学校に残ってるみなさん！ ただいま怪人が出現中です！ 水死体のような見た目で、確認されているだけで二〇体近く！ 急いで校庭に避難してください！』

「校庭!? むっちゃちゃん、違うよ言うこと！」

「校庭でいいの！」

千歌を制したのは、聞き覚えのある声だった。

息を詰めて、発言者を見つめる。

「まさか」

死体の首に薙刀を引っかけ、地面に引き倒す怪人の姿を。

「ルビイちゃん、ちよつとごめん」

「え、え、ピツ!？」

千歌はルビイを抱きかかえ、今まさに地面に倒れこもうとしている水死体に向かつて走る。

「ブランキア!」

ブランキアが振り返り、千歌に向かつて薙刀を下段に構える。

「先輩!」

「大丈夫!」

言うが早い千歌は、薙刀の下を向いた刃の根元を踏みつけ——
「だあッ!」

——振り上げられた薙刀の勢いで跳躍した。

「ピギイイイ!!」

放物線を描いて射出された千歌は、炎のように髪をたなびかせ、中庭の立木の葉っぱを突き破り、渡り廊下の屋根を踏み、わずかな浮遊感ののち、コンクリートの駐車場に着地した。

「す、すごい体幹力……体操の選手みたい……!」

「どうなってるの千歌!」

ルビイを下ろしたところに、よしみが駆け寄ってきた。その向こうからは黒服の四人も来る。

「ルビイちゃんを避難させて! 急いで!」

「千歌は!」

「追いつくから!」

六人が走り出したのを見届け、中庭へと走り出す。ポケットから橙色のムーフォームを取り出す。

「いこう」

応えるように、細かな振動がハミングを奏でた。

「ブランキア!」

緑色の怪人が顔だけで振り返り、首を振る。

「私も戦う! 戦うよ!」

短い跳躍、低い垣根を跳び越え、

「三戦!」

目の前の怪人に飛び上段突きを叩き込んだ。
抽象化された死体の頭を右腕が貫通し、死体が水に分解される。

その人型の水に飛び込んだ千歌は、芝生に着地した時すでに、白い装甲に橙色の目を持つ戦士に変身していた。

「まさか、高海さん!？」

《〈仮面ライダーワンダ〉》。そう呼んでいいよ。ね、梨子ちゃん」

その名前に、ブランキアの顎が上がった。

「声と同じなんだもん、分かるよ」

ブランキア——変身した梨子は怒らせていた肩を下ろした。脇腹の鰓から空気が漏れた。

「こいつらのムーフォーム、どこにあるの?」

「なんでその名前を——理事長ね?」

「うん」

「あの人は……」

雑談が続けている間にも、復活したゾンビと渡り廊下の方からくるゾンビが合流し、二〇体近い集団ができていた。

「フォームはたぶん、ゾンビの中にはないわ。プールの中だと思うけど、どういう状態か分からない」

「水を吹っ飛ばして、回収してあげればいいんだよね? 楽勝だよ」

と、流れていた校内放送が、唐突に途切れた。

二人は仮面に覆われた顔を見合わせ、頷くと、ゾンビの集団に向かって走っていった。

*

井藤むつが職員室で校内放送をしていた時、窓の外が真っ暗になった。

それが、水が日光を遮っているからだと理解するまで、それがプールに収まっていた水が立ち上がった姿だと理解するまで、一〇秒ほどかかった。それくらい日常と乖離した光景だった。

「すごい、これも怪人なの!？」

むつは興奮しながら電話を取り出し、外廊下へのガラス戸を開けた。

管理棟と水の隙間で流れる風にカチューシャを押さえ、むつは電話のレンズを向ける。これは私史上最高のスピードで拡散されるに違

いない。

ぱし、と電子音ともにフラッシュが光った時、

「ん？」

水の中になにかが見えた。

不定形の透明な膜の表面に浮かぶ、一〇センチほどの泡。

さらにその中央に、淡い輝きを放つ小さな球体が鎮座しているのだ。

「目みたい」

と連想した時、泡が変化を始める。

不定形だった膜が、見る間に巨大な球形に整っていく。

「え？ なになにな？」

変形は数秒で完了した。

むつが目を連想した小さな二重の球は、巨大な球の瞳に当たる部分に収まった。

巨大な目の中に小さな目を持つフラクタルな球体が、学校の二階を優に超すサイズで宙に浮いている。

「井藤！ なにしてんだ！ 避難しろ！」

誰かがむつに怒鳴った。むつが校内放送をしている間、校舎を走り回っていた教師だ。

だがむつは動けない。

へびに睨まれたカエルのように。

三重の「眼」に睨まれて。

正四面体の虹彩を持つ眼球に捕われて。

瞳が広がり、光が強まる。

「ハアッ！」

その状況は、唐突に終わりを告げた。

緑色の怪人が、膜を切り裂いて水の中に飛び込んだのだ。

その裂け目は水の自重に負けて大きく広がり、塩素くさい水が管理棟の外壁と地面にぶちまかれ、

「ぶぶやあああ!!」

むつは頭からもろに被ってしまった。

「ちよ、ちよっ！ なにこれ！ 最ッ悪！」

「早く来いって！」

我に返ったむつは、カチューシャを流され、前髪で前が見えない。それでも教師に引つ張られて職員室に連れ戻されると、髪をどかし、教師が閉めたガラス戸の向こうに目を戻す。

正四面体の虹彩を持つ小さな目を中心に、一回り小さな「眼」が再構築される。

ブランキアはといえば、その球の中に取り込まれてしまった。

「先生、あれ！」

ブランキアは水を蹴って透明な膜に殴りかかるが、弾力があるのか届かないのが、今度は破れない。

形勢逆転、と言わんばかりに、正四面体の虹彩が緑色の怪人を捉える。その周りに、数十個の空気の泡が整然と並ぶ。親指大のそれは、まるでピストルの弾のようで――

「やばいぞー！」

――「眼」の眼底のブランキアに向けて発射された。

「ブランキアー！」

むつが予想したようなことは起きなかった。

ブランキアの手には細長いものが現れたと思いきや、それは高速で回転を始め、泡をすべて打ち壊してしまったのだ。

「やったー！」

「やっぱり薙刀かー！」

手を叩いて喜ぶ二人は、しかし、ヒーローの動きを見て訝しむ。

攻撃手段を失った球体に向けて、ブランキアは槍投げの姿勢をとった。

「おい、こっち狙ってるぞー！」

「待って待ってなんでなんで！」

むつは教師に背中を押され、転びかけながら廊下へと走り――

「え？」

――呼ばれたような気がして、振り返る。

「眼」の中で淡く輝く球体が、こちらを見ている。

その小さな球体が、こちらに近付いてくる。

「え!？」

いや、物理的に、こちらに飛んでくるのだ。

「ウツソオ!？」

「あいつ！ なに考えてんだ!！」

ブランキアの投擲した薙刀によって膜から弾き出された、輝く球体を収めた一〇センチほどの泡は、窓ガラスを割って職員室に飛び込み、等速直線運動でむつと教師の間を通りすぎ、まっすぐ職員室を横断して石膏ボードと断熱材を突き破って廊下に出て、廊下の窓ガラスを割って中庭へ飛び出し、そこに――

「《ジャンピンググライダーみかんパンチ》!!」

――初めて見る仮面の戦士が、橙色に燃える火球をまとった拳を叩き込んだ。

爆轟の衝撃波と光と熱が迸り、むつは意識を失った。

*

「むつちゃん、怪我しなかったみたいだね」

「ほんとだ、よかったあ!！」

学校が配信したテキストで、今回の戦闘で怪我人は出なかったと知り、どすん、と高海千歌は砂浜に腰を下ろした。

「でもメーリングリストの方さ、中庭の木はけっこうやばいかもって書いてあるよ」

「ええー!? あんなに爆発するなんて思ってなかったんだよう!！」

「私も、あの規模の爆発は初めて見たかも」

「梨子ちゃんまでえ!！」

三人は千歌の実家の前、三津海水浴場の浜辺にいた。

梨子命名の怪人《ゾンビ・フォーメア》は、千歌命名の必殺技《ライダーみかんパンチ》で倒れたが、被害はなかなか大きなものになった。管理棟の中庭側の窓ガラスは全壊、中庭の植物は爆風で大半がダメになってしまったらしい。『らしい』というのは、現場は早々に封鎖され、戦闘に参加した千歌と梨子は、鞠莉から「Go Home NOW!」と言われて解散したからだ。

「ごめんね、爆発の強さと方向はコントロールできるって、先に言えばよかった」

千歌は続く不満を表明する機会を失った。

「どう？」

梨子は背を向けて、後ろ髪を見せた。そこには今までなかった、桜色の簡素なヘアブローチがあった。

「お、いいよいいよー」

「おっさんくさいぞ、千歌ちゃん」

梨子は口を開けずに上品に笑った。だが口を押さえはしなかった。

前髪をサークレットとして後頭部でまとめたことで、横髪がすつきりし、美人に小顔が追加された気がする。

「でもいいの？ これ、もらっちゃって」

「いいのいいの、私と曜ちゃんからのプレゼント」

「そんな大したものじゃないよ、そのセブンで買ったヤツだもん。ちゃんとしたの買ったらポイでいいから」

「梨子ちゃんの髪、綺麗だけど、あれだとここじゃ乱れちゃうもんね」

梨子は自分では見えないブローチを、指でなぞった。その不慣れな仕草は、色っぽいようで、純朴そうであり、でも上品だった。

「怪我、治ってるね」

「変身すると治るみたいなの」

曜に額の当たりに触れられ、梨子はくすぐったそうに笑う。

「いいなあ、私のにきびも治してくれればいいのに」

「あ、千歌ちゃん！ また潰してる！」

「気になって触っちゃうんだもん」

曜は今度は千歌の顔を触ってきて、それを見た梨子がまた笑う。

「千歌ちゃんも、髪まとめればいいのに」

「切ればいいんだよ、短い方が絶対似合うって、いつも言ってるのに」
「いいじゃん、伸したい年頃なの」

三人はスカートを畳んで砂浜に腰を下ろした。

曜が梨子に伝えた天気予報の通り、雨は降ってきた。ただ、降っているのかいないのか程度の雨量で、傘を差すまでもない。珍しく天気

予報が外れて恥ずかしそうな曜を見るのは、千歌には楽しかった。笑い声が少しずつ収まっていき、穏やかに打ち寄せる波の音だけが残る。

「ねえ、梨子ちゃん、違ってても笑わないでよ」

曜が声のトーンを変えて言った。

「あのゾンビ、私から出てきたんだよね？」

その言葉は確信に満ちていて、梨子はためらいながらも頷くしかないようだった。

「ムーフォームは——あの球体は、人の強い気持ちで発動するの。それが自分の中のイヤな気持ち、拒絶したい気持ちなら、フォームが単体で水をまとってフォームエアに——怪人になる」

「やっぱり。だから怖いものはなにして聞いたんだ」

「お尻は関係なかったけどね」

梨子は曜と小さく笑い合ったあと、ポケットからムーフォームを取り出した。

曇りの光に透かすと、正四面体だったはずの結晶が、二つの円で内接した円柱に変化しているのが分かった。

「《プリズム》——正多面体を含んだフォームは怪人を産み出しちゃうけど、この《シリンダー》の状態になれば、もう心配いらなから」「え？　じゃあ私のは？」

千歌もポケットからムーフォームを取り出した。橙色に染まった正八面体を含むフォームを。

「怪人を産み出すこともあるよ。でも、自分の中の正しい気持ちで発動すれば、自分の力になる」

「それが仮面ライダーなの？」

曜が問う。

「うん。今のところ、ムーフォームを再結晶化——無効化できる、唯一の存在。OGIの研究者は私のことを《G》とか《ガイア》って呼んでたけど、理事長は自分たちが開発してる強化スーツも含めて、《仮面ライダー》って名付けたみたい」

「ネットからの名前だよね」

「ううん、私がここに来た時にはもう、そう呼ばれてたから——」

二人の会話の裏で、千歌は考えている。

仮面ライダーに変身する条件を、梨子は「正しい気持ち」と表現した。

自分は二度の変身の際、空手の試合でもない相手に攻撃をくわえることを、正しいことだと思ったのだろうか。

海泡石のような手触りの怪人を、拳が叩いた感触は、今でも忘れられない。

小さく頭を振る。

相手は怪人だ。

ウォータークーラーやプールの水が泡立ってできた物体でしかない。

空手の練習でミットを突くのと変わりない……はずだ。

「——ううん、いいの、こんな名前とか理屈なんて、覚えなくて。爆発したら安全って思ってた」

「でも、天使のフォーメア——《エンジェル・フォーメア》かな？ あれは？ 入学式の時は爆発しなかったよね。千歌ちゃんが戦った時も？」

千歌は頷く。

「私もあれとは三回戦ったけど、ムーフォームはいつも摘出できただけで、再結晶化が起こらなかったの。条件は目下、調査中らしいわ」「絶対に倒す、って気合いとか？」

「かも——」

と梨子は思い出したように、千歌を見た。

「——そうだ、ごめんね、千歌ちゃん。先週、私が気を失ってる時、天使と戦ってくれたんだよね」

「平気平気！ 私だって空手やってるんだから。白帯だけど」

梨子に頭を下げられ、千歌は慌てて拳を手のひらに打ち付けて見せる。

「うう、そもそもの話、最初に『お化け』だ！』とか言ってムーフォームを見つけたの、私なんだよね。怪人を産んじやったのも私だし。そ

れを全部棚に上げて、千歌ちゃんに戦わせて、梨子ちゃんに色々ひどいこと言っちゃって……あー、もう！ ごめん！ ごめんね、梨子ちゃん！ 頭からつぽの曜ちゃんでほんとにごめん！」

「そ、そんな、曜ちゃんは悪くないよ。フォームが駿河湾にあることは分析できてたのに、対応が後手後手な私たちのせいだし。恐怖や悪意は誰でも持つてるものでしょ。それに……私が、色々隠してたのは事実だから……」

曜も梨子も、しょんぼりしてしまった。

「もう、いいじゃん！」

だから千歌は、大きな声を出した。

「お化け」の正体は分かっただし、怪人もライダーも分かっただし、梨子ちゃんのこと！ 私たちに必要なもの、他にある!？」

梨子と曜は目を瞬かせ、目を合わせて笑った。

「でも、そっか、じゃあ計画は完全に崩れたなあ」

手をつけて空を見上げる曜が言った。

「計画って？」

「怪人とはブランキアが戦うから、廃校にはスクールアイドルで対抗、そうすれば浦女も安泰だー、って思ってたのに」

「そんなこと企んでたの？」

「なのに、ブランキアは梨子ちゃんだったし、千歌ちゃんも、ワンドだっけ？ ライダーって絶対、男の人だと思ってたのに」

曜の言葉に、梨子は小さく笑った。

「千歌ちゃん、ライダーはやめないでしょ？ だったらこの計画もおしまいだな、って」

千歌は視線を戻す。

海でもなく、駿河湾でもなく、内浦湾に。

砂浜に置かれた曜と梨子の手に触れる。

曜が息を吐くように笑い、梨子の髪が揺れる音がした。

内浦。

普段から猫の額ともウサギ小屋とも言っているほど、この街は狭い。直径一キロ程度の、静岡全図からだって省略されてしまうよう

な、ささいな凹みの周りがある街。

だが千歌にとっては、これが原風景。

これが高海千歌を作った世界なのだ。

「私、どうすればいいか分からなかったんだ。果南ちゃんみたいに船の操縦もダイビングのインストラクターもできないし、曜ちゃんみたいにオリンピックに行くそうにもない。私だってなにかしたいのに、特技なんてなにもなくて、ただ……待ってるしかなくて」

「千歌ちゃん……」

「でも、二人が持つてきてくれたんだよ！」

千歌は砂を撒き散らして立ち上がり、橙色のムーフォームを空にかざした。

千歌の色に染まった、淡く光る球体。

「梨子ちゃんがスクールアイドルを、曜ちゃんが仮面ライダーを、持つてきてくれた！ 私の可能性！ なら私、選びたくない！ どっちもやる！ スクールアイドルでみんなを笑顔にして、仮面ライダーでみんなの笑顔を守る！ μ, sが音ノ木坂を笑顔にしたみたいに！」

大声で宣言してやっつと、自分が決まった気がした。

そうだ、迷ってなんていられない。

この街が私を作ったなら、その恩を全力で返すだけだ。

「私たちが、でしょ」

曜が立ち上がり、千歌の手をとる。

「でも曜ちゃん、飛込は」

「母校を見捨てて金メダルとつてもね。千歌ちゃんがアイドルとライダーのわらじをはけるなら、私にはけないはずないよ」

「ほんと？ やったあ！」

「私も、できる範囲でお手伝いするわ」

梨子も二人に並び、千歌と曜の手をとった。

「梨子ちゃん！ じゃあ一緒にアイドルに——」

「——それはごめんなさい」

梨子が笑顔で断り、曜が口を開けて笑った。

千歌も自然と笑みがこぼれる。

これが始まりだ。

私たちの時代が、今、ゼロから始まるんだ。

「そうと決まったら、準備だよ！ 曲、詞、衣装、ダンス、なんにもないんだから！」

曜が手を叩いて言った。

「えっ」

「ライブをするなら、舞台と観客も必要ね。衣装は省いてもいいんじゃない？」

梨子も指折り数えて言う。

「ダメダメ、こういうのは見た目も大事なんだから」

「欲張ると大変よ？ 最初からフルスペックを目指して挫折しちゃう人は多いんだから」

「さすが音女で本物を見てきただけある発言、じゃあ……」

「どうする？ リーダー！」

「えっ？ リーダー!? ええっ!?!」

千歌が自分の発言を十分に理解するのは、もう少し先のことになる。

次回予告

花丸 「二年生編は一段落かな？ そろそろオラにもまとまった出番がほしいです」

ルビィ 「ルビィ、出番多いのはいいけど、そろそろ狙われる役以外がいいなあ」

梨子 「じゃあ今度、代わる？」

ルビィ 「あ、ブランキア先輩！」

梨子 「ちよつと」

花丸 「梨子先輩は、一番護られる必然性がないと思います」

梨子 「必然性がなくなつて、希望してもいいでしょ？」

ルビィ 「五一話くらいでそんな展開が来るって噂ですよ」

梨子 「ごじゅ——え？」

ルビィ 「それはともかく、次回、仮面ライダーメルシャウム第四話、『始めたいマイストーリー』」

花丸 「強さは相対的なもの、いずれ護られる時がくるぞら」
梨子 「私の強さがそこまで揺るがないってことなら、うん、まあ……」

C

怪人は消えたらしかつた。

津島善子はその爆発を、管理棟の外廊下にもたれて体験した。
ビデオカメラを持って。

「超ラッキー？」

電話のカメラでは、小さな画面の生放送はできても、高画質の動画を長時間記録することは難しかった。

だから母にお願いして、学校に持ち出す許可をもらったのだ。

休み時間にはクラスメイトとわちゃわちゃと試し撮りをして入学式からの「黒澤家にケンカを売った妙なヤツ」感を払拭し(?)、放課後は校内で先輩の部活動や色々な施設を撮影して回っていた。

そんな中での、三度目の怪人出現の報だった。

中庭に面する外廊下からは、現場がいい具合に俯瞰できて、木々が邪魔されながらも戦いはうまく撮れた。

だが二年生の先輩が乱入してきた時、善子は予想もしないものを収めてしまった。

その映像が、今も液晶モニタに映されている。

『まさか、高海さん!?!』

『《仮面ライダーワンダ》。そう呼んでいいよ。ね、梨子ちゃん』

善子は信じられなかった。

名前自体に聞き覚えはなかったが、声の幼さからして、二〇代ということはないだろう。

その衝撃は、中庭の植物の半分を吹き飛ばす爆発よりも、強力で。だが秘密を抱えるだけの器も、スクープを公開して栄光を得る器も、善子にはなかった。

「超アンラッキーよねえ……」

だから頭を抱えるしかないのだ。

第四話：始めたいマイストーリー ― 1

AV

「ドドドンカカカッドン！」

ドカドカドン。

「ドンカッドドンカカッ！」

ドカドカドン。

「ドカカッドドンドンドン！」

譜面を口ずさみながら、いや叫びながら、太鼓の面と縁にバチを振り下ろす。

籠める力と跳ね返される力の、もはや無心の領域に達している制御。

その両腕の疲労は、限界のきわを綱渡りしている。

ノーツの間隙が消え、発声はヒューマンビートボックス―状態だ。

だが、走りきる。

「うおおおおお!!」

高速で飛来するノーツをすべて打ち落とし、一拍ののちに現れた最後のノーツにバチを振り上げ――

「たあッ!!」

――フィニッシュ。

ギヤラリーの存在しない空間で、津島善子はバチを持つ手を弛緩させた。

「はあ、はあ、はあー……」

余韻に浸る演奏者とは対照的に、プラスチックの太鼓はあっさりと残響を消し去って平衡状態に戻り、巨大な筐体がプレイ結果を表示する電子音を賑やかに鳴らす。

『『ノープラ』で“可”が一二だと……？ おいおい……ヨハネ……』

筐体に腕をつけて頭を下げると、お団子にした右側頭部以外の髪がバサツと重力に負けた。

「ママー、鬼さんがいるよ」

「墮天使よ！」

「ひっ！」

大人げない指摘に舌打ち、汗まみれの顔を上げる。

「ラスト、『Private Wars』でも行くか」

気だるげにバチで曲を選び、

「難易度は、『鬼』」

息も絶え絶えのままスタートする。

善子がアーケードゲームでプレイするのは、『太鼓の達人』ただ一つだ。昔は何種類ものタイトルをプレイしていたが、ストレス解消目的でのプレイが増えるにつれ、気付けばこのタイトルだけが残された格好だった。

だが、筐体から流れているロックな曲調に、パニエで嵩増しされたスカートとフロントフリルのシャツ——ゴシック&ロリータ服、そしてドスの効いた歌声としなやかなバチさばきは、ことごとくミスマツチだ。

「はあッ!!」

力を込めた二本のバチで、最後のアタックを叩き降ろす。

フルコンボ、当然だ。

「大成功、これも当然。」

「『可』……二四? ちょっと……」

燃えるように熱を帯びた両腕から、がくりと力が抜ける。

「全良」——可もなく不可もなくが基本の善子からすれば、あり得ない成績だ。

「今日は荒れてるね、ヨハネちゃん」

そこに、ダークブルーの制服を着た小太りの男性店員がやってきた。

「いやあ、ちよつと調子が——」

素で返しかけて、慌てて三本指で顔を隠すポーズをとり、声色を下げる。

「——ミドガルドが《オーディンの加護》を受けし《嵐の神の日》には、墮天使ヨハネの能力は極端に衰えてしまうのよ——」

余韻ありげな流し目と語尾の善子に、店員は笑い、

「腱鞘炎にならないですよ。今年の全国大会は応援してるんだから」と残して去って行った。

「まずエリア大会よ、まったく」

姫カットに切り揃えた髪をさつと整えると、黒いエナメルのシヨルダーバッグを手に周囲を見回す。

スーパーマーケット内に併設されたアーケードゲームコーナーには、カードアーケードゲーム筐体をペシペシ叩いている子供がいるだけだ。お金は入っていないようで、繰り返されるデモとPVに声を上げている。

「まったく……」

夕食の準備で集まってきた主婦の流れに逆らって、善子はスーパーマーケットをあとにした。

一度は往復した家路は、もう薄暗い。それでも、一般人からみればコスプレに近いゴスロリの服は人目を引き、それは墮天使を自称する善子にとっては気持ちのいいことだった。少なくとも、ギャラリイのない環境で音ゲーをプレイするより、一〇〇万倍いい。

会社帰りのクルマが通る道を歩きながら、歩調は自然と先ほどプレイしていた曲のテンポになる。歌を口ずさみ、手でリズムを刻む。失敗箇所を思い出し、記憶している譜面と照らし合わせる。次はもっといいプレイにするために。

「次か……」

眩き、手がとまる。

あの月曜日から、二日が経過した。

無意識に、シヨルダーバッグを撫でる。

あの時は、これからなにが起こるのだろう、と恐怖し、同時に期待した。収めてしまった秘密に、ビデオカメラの重さが二割ばかり増したような気がした。

だが、学校は続いている。爆発で割れた管理棟の窓ガラスは当日の夜間に入れ替えられ、樹木と生け垣が焦げてしまった中庭は全面リニューアルが発表された。だが、余波はそれだけだった。

大きな動きといえば、OGIグループが《仮面ライダー》を正式に

発表し、怪人を《フォーメア》と命名したことだろう。とはいえ、そんな情報で騒いでいるのはメディアやSNSといった外部であり、あの学校に通っている生徒には関係がない。

非日常が、急速に、日常に塗り替えられていく。
なにもかも終わってしまったのだろうか。

いや、なにもなかったのかもしれない。

そんな気がしさえするほど、善子の日常は護られている。仮面ライダーを作り出した小原家に。黒澤家にも？

ゆえに、今の善子の悩みは、もつと普通のことだ。

「もうこんな時間かあ」

暗くなつていく街並みの向こうの空に、善子は恨めしげに目を向けた。

獅子浜に住んでいた小中学生時代は、部活もなく遊ぶ時間が十分にあった。だから沼津市内の大きなゲームセンターに自転車で行く余裕も、『堕天使ヨハネ』として占いや悩み相談の生配信をする余裕もあった。だが今は、学校が終わって、本数の少ないバスで内浦から市内まで戻ると、それで一日が終わってしまう。アーケードで音ゲーをやるうと思えば、近所のスパーのゲームコーナーになつてしまう。自転車に乗れないゴスロリ服の気持ちよさに慣れてしまえば、なおさらだ。

結果、親しい友達がいらない善子は、中途半端な自由時間で、中途半端に一人で遊ぶしかない。

その環境の変化に対する不満の方が、怪人より仮面ライダーより、大きくなつていったのだ。

「西高に転校できないかな」

津波を恐れて海岸沿いの街から沼津市内に引っ越したのだから、怪人を恐れて浦の星女学院からも転校させてほしい、と善子は思い始めている。浦の星のメリットである「高台の指定避難場所兼指定避難所」は、怪人のデメリットに負けるはずなのに。

「オーデインに見捨てられしヨハネ、ウエンズデイに墮つ……？」

いや、それに対抗する術が、善子にはあるはずだ。

今度は意識的に、ショルダーバッグを撫でる。

この重みは、そこで使うべきなのだ。

「壁は壊せるもの、よね」

A

「お待たせー！ 衣装デザインできたよ！」

千歌の部屋に遅れてやってきた曜が座卓に座り、リュックも下さずスケッチブックを広げた。

デッサンや水彩画に、船や船長や棒人間の落書きをペラペラと飛ばしていき、目的のページが現れる。

「すごい曜ちゃん、こんな特技があったんだ！」

「へへーん」

「曜ちゃんはなんでもできるんだよ。運動勉強お絵かきなんでもござれ！」

「なんでもじゃないって」

座卓の和菓子の包みに手を伸ばす新しい友達に、桜内梨子は素直に感嘆した。

丈の短いノースリーブのベストをシャツに重ねたようなトップスに、グラデーションしていくプリーツスカート、ニーソックスと重ねたブーツと、層の構造で魅せる衣装だ。いわゆるデザイン画ではなく、ポップな絵柄で描かれた少女が衣装を着ている着ているイラストだが、言わんとしていることはちゃんと伝わる出来だった。少女がショートボブの千歌に見えないこともないが、そこは気にしないでおこう。

「この辺の黄色を、メンバーのパーソナルカラーに合わせて変えるんだ。スカートのグラデーション先は、補色系の差し色にするか、白か考えてるんだけど、どっちがいいかな」

曜がイラストを指差しながら言い、梨子は考える。

「私はシンプルな方が好みだから、グラデは白かな」

「差し色っていると思う？ 今はボタンだけそうなんだけど」

「彩度を上げた同系色ならありだと思う。全体はペールトーンで揃えて、手袋、ブーツ、リボンあたりを引き締める感じで」

「そっか、さすが梨子ちゃん！ メモっちゃお！」

曜はつづりの単語カードになにやら書き込む。

「頭のリボンだけは、差し色じゃなくてパールトーンの方がいいかな。重くなっちゃうから」

「ヨーソロー！」

“ようそろ”は肯定の返事ではない、と思いながら、梨子も座卓の和菓子を手に取る。クラスメイトの親が経営していると漏れ聞いた菓子屋《松月》の饅頭だ。先ほど曜が口にした時の香りで、ママレード系の酸味と餡子の甘味が合わさっていそうな味だと想像できた。

「ねえ、曜ちゃん、この衣装ってさ」

千歌が電話を見せた。映し出されたのは、μsが初めて世に出した『START:DASH!!』のライブ映像。初期メンバー三人が着ている衣装が――

「――あ、似てる」

「うん、ちよつと探してみたんだ。最初のライブで着る衣装なら、これを参考にしたいな、って。ダメかな？」

「いいよ！ 全然いい！」

梨子は曜の行動に驚いた。アイドルに興味のなさそうな曜が、μsに近付いてくるとは思っていなかった。いや、千歌のビジョンに近付いてきたのか？

「これで衣装はバッチリだね！」

「うん、あとはきちんとクリンナップして、型紙のレベルでデザインに落とし込めば一段落だよ！」

曜の言葉に、意気揚々としていた千歌の顔が引きつった。

「一段落までそんな色々あるんだ」

「そりやそうだよ、ここで手を抜いたら、せっかく買った布がバラバラのヨーソローだよ」

「そっかあ……。ん？ 布を買って？ 縫うの？ 誰が？」

「え？」

千歌と曜が顔を見合わせ、次いで梨子を見た。

「わ、私は無理だよ。裁縫、あんまり得意じゃないし」

「私もダメだよ！ エプロンの裏表逆にポケットを付けるくらいだからー！」

「えぼるな——という私も苦手なんだなあ。そうだ、千歌ちゃんのμ—フォームで、ボンっとー！」

「うまくいくかなあ」

「難しいと思うよ。意識してあの形に変身してるわけじゃないでしょ。そもそも、曜ちゃんの分のフォームがないじゃない」

「じゃあ、裁縫係はお母さんに頼んでみようかな」

曜は単語カードに「裁縫↑母？」とメモをとった。それが彼女の記憶術らしい。

「梨子ちゃん、みかん好き？」

目を向けると、千歌が勉強机の下の段ボールを引きずり出していた。箱には橙色のキャラクターと「寿太郎みかん」が書いてある。

「嫌いじゃないけど、今、勝手にものを食べちゃいけないの」

「え？ なんで？」

「その、アレになつてから、色々あつて」

そう言うと、二人は察したようだ。

「じゃあ、食べていい時になったら食べなよ。せつかく内浦に来たのに、みかんが食べられないなんてもったいないよ」

「そうだよ！ 太陽をたつぷり浴びた、ここのみかんは美味しいんだよー！」

千歌は小ぶりのみかんに親指を突っ込み、真つ二つに割った。皮の一部が破れたようで、柑橘類の香りがフワツと溢れた。

「はい、曜ちゃん」

「私はいいよ、ご飯近いし、手が黄色くなるし」

「ええー!？」

口を尖らせながらも、千歌はみかんをもりもり食べている。必殺技も《ライダーみかんパンチ》と言っていたし、本当にみかんが好きなのだろう。

「そうだ、曜ちゃん、今日は高飛込の練習だったの？」

「うん、市内だね。月水金は水泳部だから」

と短い髪をこちらに向けてきた。塩素の匂いはほとんどないが、湿っているのは分かる。

「あ、そうだ。梨子ちゃん、見て見て」

と曜がバッグから別の単語カードのつづりを出して、リングと紙の端に力をこめ、勢いよく弾いた。

「前逆宙返り三回半抱え型ー！」

それはパラパラ漫画だった。棒人間が台の上から飛び降り、回転して水面に落ちるまでの姿が描かれている。

「あ、すごいー！」

「これ私の必殺技だからね、前逆宙返り三回半抱え型！」

「まえさかさ、ちゆう……？ これをやるの？ 曜ちゃんが？」

「そうだよ、沼津に産まれた高飛込世界チャンピオン！」

千歌が話に入ってきた。

「オリンピックは四年後なんだけど」

「金メダル決まったようなもんじゃん」

「そんなわけではないって」

気付けば完全に集中力を失った自分たちに梨子が苦笑していると、窓の外で草履がコンクリートを踏む音がした。

「千歌、電話よ」

その声に、梨子は聞き覚えがあった。十千万の主、枝海だ。

千歌は立ち上がって窓から身を乗り出した。

「誰？」

「名乗らなかつたわ。低い声の女の人だけど」

千歌が自分の電話を確認するが、着信はないらしい。千歌の番号を知らない人が相手、ということか。

「どうする？ 断る？」

「出てみるー！」

千歌は部屋を飛び出し、ほどなく固定電話の子機を持って戻ってきた。曜に座卓を指差されて子機をスピーカーフォンに切り替え、点滅する保留ボタンを押した。

「はい、お電話代わりました、千歌ですが」

千歌が声を投げる。だが反応がない。

「もしもし？ どちら様ですか？」

いたずら電話だろうか、と思った時、スピーカーの向こうから、鶏の首を絞めたような笑い声が聞こえてきた。

「我が名は堕天使ヨハネ」

完全に想定外の単語で、三人の間になんともいえないムードが漂う。

「あなたのことは、すべて把握しております。我が《ウジャトの目》から逃れられるものはありません——」

曜が目で千歌に何事かを問うが、千歌は手と首を振るのみ。

「あなたには悪魔が取り憑いています。それは闇を食って成長し、いずれあなたを滅ぼすことでしょう——」

すべて把握していると言っている割りに、一対一で話している体なの

が悲しい。「救われる道は、一つしかありません。我が《リトルデーモン》となり、ヨハネに一生を尽くすのです——」

急に内容が小さくなった。

曜が通話口を押さえて、指をクルクル回す。

「ヨハネって、入学式の怪人をネットに配信してた、あの子じゃない？」

「そうだった？ 梨子ちゃん覚えてる？」

「私、ちゃんと見てなくて」

「ちよつと、ねえ。聞いてる？ もしもーし」

電話の主が、若干高くなった声で問いかけてきた。

「どっちにしろイタ電だし。切っちゃいけないよ」

「でもなあ——」

——と、電話の向こうでなにかが叩かれる音がした。

「え？ ちよつと、今電話中なんだけど！」

どかん、となにかが壊れる音に続き、

「わあ！ なに!? なに！ 鍵は！ え！ ウソおおお！」

どすん、どたん、どたん、と重い音が何度か響き、やがて唐突に静

寂が訪れ、

「お手数をおかけ致しました」

との男の声がした。

そして電話は切られた。

終話音が続く子機を切った千歌は、ポカンと梨子たちの顔を見る。

「そうだ、夜、ウチでごはん食べてく？ 果南ちゃんの干物あるし」

「お母さん遅いし、いただいちやおうかな」

「ごめんなさい、私、お父さんが帰ってくるから」

「ええー！ いいじゃん！」

「わがまま言わないの、千歌ちゃん」

電話のことは、それで忘れられた。

*

意識を取り戻した時、津島善子は自分の不幸を呪った。

しんしんと冷えたコンクリートで作られた部屋だ。一辺が四メートルほどの四角い部屋で、壁は見えるが隅が見えない程度に薄暗く、空気は乾いている。壁際に椅子があり、善子はそこに両足を固定された状態で座っていた。

「なんなのよ、これ」

自由な腕で足首の固定を外そうとして、コンクリートの床が一つの頂点に向かって僅かに傾いていることに気付く。それに沿って流れた液体の痕跡と、その先にある排水溝らしき溝に気付く。

「ちよ、ちよつと、ほんとにオーデインの加護はないわけ？」

その時、善子正面のコンクリートの一部が、部屋の内側に動いた。潰されと思ったが、ドアなのだとすぐに分かった。

「Hii！」

入ってきたのは、制服のプリーツスカートと、Paranoidと書かれた黒Tシャツを着た、金髪の少女。

「理事長代理？」

「Oh！ 覚えててくれたの？ 最高にShinyだわア！」

お世辞にも重役に見えない鞠莉は、善子に抱き付いてきた。

「ちよ……！」

その後ろでドアが閉まる。

「ここ、どこなの？　っていうか、なんで理事長代理が？」

「学校の外でくらい、マリーって呼んでくれない？」

善子から離れた理事長代理は、マリーともメアリーともとれる発音で言う。

「マリー……さん？」

「Yes！」

「その、私、なんでこんなところにいるの？」

「ウジヤトの目で見れないの？　堕天使のヨ・ハ・ネ、ちゃん」

善子の顔がみるみる赤くなる。

「まさか、盗聴してたの!？」

「注目してたの！　ウチの大事な商品をNetに流しちゃうような、Dangerousな子を！」

鞠莉の顔が近付いてきて、善子は急に恥ずかしくなる。

この人は、『津島善子』の裏の顔を知っているのだ。

『裏の顔』なんて言い回しをしちゃう性格を知っているのだ。

鞠莉はそんな気持ちをお構いなしに、大きな目をいたずらっぽく細め、善子の身体を舐め回すように見てくる。

「顔は可愛いし、Slenderな身体付きも悪くないわア。大つきすぎないおっぱいも、むしろBetter？」

「な、ちよ、私まだ一五よ!?　そんなの許されるわけないでしょ!？」

「許すかどうかは、私が決めるの!」

「やめて！　やめてください！　お願い！　なんでもするから！」

と、鞠莉の頭が七〇度ほど傾いた。

「今、なんでもするって言った？」

「え？　い、いや、それはあの、合法的なことなら、っていうか」

「合法的ならいいのね」

鞠莉の眉が、弓のように持ち上がる。

「OK、入ってきていいわよオー」

コンクリートのドアが再び開き、黒服を着たサングラスの男がぞろぞろと入ってきた。

(いやいやこれどう考えても一八禁展開でしょ!? あれ? 一五歳ってダメなのよね? いやいや落ち着くのを堕天使ヨハネ! いざとなればわが《オルフェウスの豎琴》で魅了してしまえば——)

——だが最後に入ってきた人物に、善子の志向は中断された。

鞠莉と同じプリーツスカートに、雷マークで連結された“AC”と“DC”が書かれた黒Tシャツを着た少女。長い黒髪が空気に膨らみ、濃厚な潮の匂いが漂う。

「知ってると思うけど紹介するわ、彼女は堕天使のリリーでエス！」

「なによ、堕天使って。た、ただの桜内梨子先輩じゃない！」

強がる善子に、その人物が、一歩近付く。

真上から照らされる明かりで、その人物の顔に影が落ちる。

「……仮面ライダー……ブランキア」

「ほら、やっぱり知ってた」

鞠莉の薄笑いが響き、指先の感覚がなくなる。

黒服が鞠莉を護る形に動く。そのための人数ということ。

つまり、ここで失敗したら命はない。

全身に脂汗を浮かせながらも、善子は口の端が笑顔の形に持ち上げた。

「あ、あの、私、津島善子って言います! あの、先輩たち、私と一歳しか変わらないのに、あんなことしてて凄いなって思ってた! その、私カメラとか持つてるから! 生配信もできるし、プロモーション活動でお役に立てればいいなんて思ってた! そ、それで! 二人を撮影しようと狙ってたんです!」

とにかく喋らなければ。

「その映像を見せてほしいな、なんて思って、だからだから高海先輩のウチに電話したんですよ! ほんとですって信じてください!」

「私たちの力になりたいの?」

「は、はい、そうなんです!」

梨子が善子の前でしゃがんだ。

照明に、後頭部のブローチの桜色が淡泊に光る。

ただでさえ白い肌はさらに白飛びし、眼窩は逆に影で見えない。

「なら津島さん、聞きたいんだけど」

口だけが笑っていると分かる。

そしてその口から、善子の運命を決定する言葉が紡がれた。

「サイホウってできる？」

該当する漢字が思い浮かぶまでの五秒間、善子はアホ面で静止していた。

*

スケッチブックの画用紙には、三つの図案が描かれている。

ピンクのクマの頭、ボールに乗ったネコは、ペン入れと着色が済んだものだ。

三つ目は、ついさつき当たりを取っただけの円。

「どうしようかな」

自室の勉強机の前に正座した黒澤ルビイは、シャーペンを指の中で回す。

クマとネコはルビイの手で球形のぬいぐるみとなり、それぞれルビイと花丸のスクールバッグに結ばれた。それらは形状と色合いともに、花丸と二人で考えたものだ。

だが、その二つと同じ型で作ろうと考えている三つ目に関しては、なにを作るか、誰のために作るか、なにも考えていない。

現状は、薄く縁取られた球体だ。

「新しい布、買ってこようかな」

材料を入れている手提げ袋をチェックするが、布が心許ない。ずいぶん前にカバのティッシュケースに使った、紫色の布の残риがあるだけだ。

「でもなあ」

机の横の本棚に目を向ける。下から三段を占有する雑誌群を見る。

「今月の『ユーチュン』は新学期号だから外せないし……。でも、可愛い春物の小物の型紙も出てきそうだし……」

スクールアイドル関係の雑誌と裁縫関係の雑誌、そのパワーバランスが、そのままルビイの迷いを表わしていた。

天下の黒澤家といえど小遣いは歳相応、すべてを手に入れることは

できない。雑誌を両方買つて、あり合わせの布からぬいぐるみの設計を逆算するか、雑誌を一方だけ買つて、布を選ぶところから始めるか。決めなければ、デザインは始まらない。

「お父さんに買ってもらおうかな……。でも、一緒に出かける機会なんてないし……」

裁縫道具の中のボビンをチエックしながら、またシャーペンを回す。姉には「落ち着きませんわ」と注意される仕草だが、一人だといやつてしまう。

だから、

「ルビイ」

と呼ばれた時、思わず「ピギイ！」と奇声を上げてしまった。

「どうしましたか?」

目を向けると、外廊下と自室を隔てる障子に、人の影が見えた。

「な、な、なんでもないよ!」

「開けますわよ」

障子がするすると開き、ダイヤが現れた。梅の花の模様を染め抜いた寝巻の衣擦れが、雨の音に隠れるように近付いてきた。

ルビイはシャーペンを机に置き、正座のままダイヤの方に向き直ると、ダイヤもその一間離れた位置に正座する。

「ど、どうしたの?」

緊張した妹に、姉は切れ長の瞼を笑顔のように細めた。

「映画、一緒に見ませんか?」

ルビイは、瞬きを繰り返し、机の上の電話を見た。九時を回っていた。

「このところ、一緒に見てなかったものですか」

ダイヤとルビイは週に二回程度、寝る前の時間を使って琳太郎が収集した映画を見ることがあった。一〇年近く続いている映画鑑賞会だ。

だがルビイが《エンジェル・フォーメア》と名付けられた存在に襲われた入学式から丸一週間、ダイヤからの誘いは途絶えていたのだ。

「見たい映画、あるの?」

「ルビイの希望がなければ、ですが」

ルビイは少し考え、そういえば、とあるタイトルを思い出した。

「ゾンビ映画……ダメ？」

姉の臉が微かに見開かれ、一拍、すぐに元に戻る。眉は寄ったまま。

「一応確認しますが、どの作品ですか？」

「『歩く死骸』、なんだけど」

「一九三六年の、ですか？」

「かな？」

また、間があく。

姉の考えていることは予想できる。ルビイは僅か二日前に、水死体のような怪人に襲われたばかりだ。怪人はOGIグループにより《ゾンビ・フォーメア》と名付けられたことで文脈を得、ルビイはその文脈で自分の傷をえぐろうとしている、と思っっているに違いない。

「ルビイ」

「うん？」

「『歩く死骸』はゾンビ映画ではありませんわ」

「……え？」

想定外の言葉に、今度はルビイが言葉を失う。

「あ、あれ、でも、死刑囚の死体が生き返るんだよね？ それで濡れ衣を着せた犯人に復讐するって」

「ええ。ですがそれは、ブードゥーゾンビでもモダンゾンビでもありません。併せて言えば、ホラー映画とも言いがたい作品です」

「そう……だっけ？」

記憶を手繰ろうとするが、見たのはたぶん小学校低学年の頃だ、思い出せない。

「でも、ゾンビっぽい歩き方してたよね」

だからゾンビ・フォーメアを見た時に思い浮かべ、今、見たくなつたのだが。

「あれは主演のボリス・カーロフが、『フランケンシュタイン』の時と同じ演技をしているにすぎません。それが後年のゾンビのイメージに近いだけで、ゾンビではありませんわ」

畳み掛けるようなダイヤの情報に、ルビイは自信がなくなってくる。

「でも……生き返るんだよね？」

「こう例えましょうか。ルビイの好きな『マイティ・ソー』において、人間として死に、超常の力で神として復活したソーを、あなたは『ゾンビ』と呼びますか？」

「う……」

姉が小さく息を吐く音がする。

また呆れられてしまった。

「仕方ありませんわ。ルビイが『歩く死骸』を見たのは小さい頃ですもの。記憶違いがあっても当然です」

だからダイヤの言葉が、ただのフォロワーに聞こえてしまい、

「すごいね、お姉ちゃんは。いつも正しくて」

だからルビイの言葉は、努めて明るく発せられた。

「当然ですわ。それが黒澤家ですから」

それで姉も安心したようだった。

「では、如何致します？」

「ん……。今日はもう少しデザイン考えたいし、また今度でいい？」

ルビイが机の方を振り返ると、ダイヤは頬を持ち上げた。

「分かりました。では、都合がいい日がありましたら、声をかけてくださいませ」

立ち上がり、部屋を後にする姉を目で追い、障子の向こうに消える間際、視線を合わせて笑いかける。

再び、自室に一人になる。

姉の残り香が漂う自室に。

「そっだよ」

シャーペンを拾い上げ、指の中で回す。

いつだってお姉ちゃんは正しいんだ。

真っ白な球体は、まだしばらく、なににもなれそうにない。

*

「こちら、墮天使の津島ヨハネさんです！」

「うわあ、それで紹介されるの、キツイ」

翌日、梨子が二年生の教室に連れてきたのは、お団子を頭に載せた女生徒だった。

だが渡辺曜は警戒した。小声で呟く地声と、『墮天使』で『ヨハネ』のキーワードで、昨日の電話を思い出したからだ。

彼女は千歌をおどそうとした人物なのだ。

「ほんとにスクールアイドルやってくれるの!? ヨハネちゃん!」

だが千歌はそんなこと気にしていないように、下級生の肩を叩いた。

「す、スクドル!? いや、その、私はパフォーマンスってわけじゃないんだけど!」

口を歪めて笑う顔は、墮天使でもアイドルでもないが、顔立ちは和風な純美少女と言って差し支えない。右側頭部でお団子にできるほどボリュームが多く、長さもある切り揃えた髪も、ダンス映えするだろう。

「えっと、墮天使? のヨハネ? さん? 昨日の電話、結局なんだったの?」

曜が聞くと、ヨハネと名乗った下級生は小声で、

「善子です」

と言った。

「え?」

「一応、あの、本名、善子なんで……」

「あ、ああ、そう……」

なんだこの気まずい雰囲気。墮天使を名乗るなら、キャラを徹底してほしい。

「それで、ヨ……ハネさん?」

「はい、えっと、みなさんがスクールアイドルを始めるって聞いたので、お手伝いできればと思いました」

どこから情報が漏れているんだ、と曜は思ったが、よく考えたら理事長代理も生徒会長も知っているのだから、秘密でもなんでもなかった。

「ニコ生配信してたのでライブの配信はできますし、ビデオでPV撮影もできますし、一応体力はあるのでダンスもできないこともないですし、ゴスロリ服が趣味なので裁縫もそこそこできますし」

「おお、完璧じゃん！ 梨子ちゃんスカウトとしても超優秀！」

千歌は喜んでいるが、裁縫の件は怪しいな、と曜は直感する。

「そうだ、千歌ちゃん、詞で合わないところを直してみたの。えっとね……」

と千歌に話しかける梨子は、どこまで裏を取っているのだろう。

いずれにせよ、全面的に信用するのは早いが、できるといいうならやってみよう、と曜はスケッチブックに手を伸ばした。

「じゃあヨハネさん、衣装の件だけど——」

「——その前に、生徒会長にリベンジだよ！」

千歌が大声を出した。

「って、なんの?」

曜を始め、梨子も善子も動きをとめる。

「だって五人揃ったんだよ!? これなら同好会の申請ができるでしょ?」

そういえば、と曜は梨子と目を合わせる。

だが走る千歌を追って三年生の教室に向かった曜たちは、

「まだ早いかな」

と果南にとめられてしまった。

「ダイヤの性格じゃ、頭数だけじゃ認めてくれないよ」

「じゃあなにがあればいいって言うの!」

「一番いいのはライブだろうけど、せめて、人前に出せる状態の歌と衣装は欲しいね」

それは、千歌は唸ってしまうほどには正論だった。現状は、千歌の詞に梨子が曲を書いている途中で、衣装も曜のコンセプトデザインレベルの一枚絵しかないのだ。

「じゃあ、私は作曲しちゃわないと」

「衣装はどうしよう、ヨハネさんに任せて平気?」

曜がスケッチのコピーを善子に渡すと、

「へ、平気平気！ このヨハネの手にかかれば、二三日でパーツと完成させてあげちゃうんだから！」

善子は「んなわけないだろう」と言いたくなる自信で断言し、千歌と梨子は顔を見合わせて笑い、曜は不安になる。

だがスケッチブックから顔を上げた善子が口にした一言で、その件は忘れることになる。

「じゃ、予算ちようだい」

*

「今年度の注目スクドルは——福岡の新星《リグル》、『九人の神から産まれた九人の子供』——神話出身の九人組、完全にμ'sのフォロワーだね」

沼津駅前、様々な雑誌が面陳列された背の低い棚が並ぶ大きな書店の入口。棚の前にはたくさんの客が立ち読みしており、中でも各種週刊誌が掲げる「内浦を襲うUMAの怪！」未確認生命体「怪人は小原家と黒澤家を結び付けるか!? 引き裂くか!?’’といったフォーメア関連の扇動的な見出しは、虫を誘う蜜のように多くの地元住民を誘引していた。

『あ、この人たち、《空白』のR、空白』のI」と《MAGNETIAN》の合体なんだ。全員三年生だし、勝負に出たのかな』

黒澤ルビイはそんな周囲を見もせず、スクールアイドル情報誌《ユースフル・チューン》をめくりながら歩いている。イヤフォンからは、配信されたばかりのリグルの楽曲『僕たちは光の橋』が流れ、電話の画面が映すのはそのPVだ。

「曲は……『AA』のコード進行に『ぼららら』を乗せた感じ？ 衣装は……うわ、『ユメトビ』と『キラセン』の既製品コスプレの魔改造だよ。記者さん、気付いてないのかなあ？」

眩しい笑顔に自信満々のパフォーマンズだが、その実、伝説のPATCHワークでしかない九人に、ルビイは口を尖らせる。

「ルビイなら、もっとキチンとアレンジするのに。曲は無理だけど、衣装なら——ピギイ！」

音楽とPVと雑誌に夢中だったルビイは、棚から動いた人に基づかってしまった。

「ごめんね、大丈夫？」

「あ、あの、ごめんな——」

謝ろうと顔を上げた時、

「——ピギイイイ!!」

相手が男性だと気づき、ルビイは真っ赤になって走り出した。

「あ、ルビイちゃん！」

一緒に来ていた花丸の声を置き去りに、階段を駆け降り、物陰にしゃがみ込む。

「はあ、はあ、もう……。また、ちゃんと謝れなかったよう」

なぜ男性に話しかけられると、こんなに取り乱してしまうんだろう。

「なんでルビイって、こんななの？」

自分でも分からない心の動きを、スクールバッグに結んだクマのぬいぐるみに話しかけた。そうしているうちに、息も心も落ち着いてくる。

顔を上げると、ルビイはステンレス製の本棚の間にいた。

日の光の届かない空間、明滅する蛍光灯、無機質な空間に並ぶ柱。そんな中で、見知らぬ背表紙を向けてくる本たち。まるで異世界の森に迷い込んだようで、ルビイは不安になる。

「ルビイちゃん、平気ずら？」

と、花丸が一階から降りてきた。渋い色の背表紙の本を、何冊も積んで持っている。

「うん。ごめんね、ちよつと驚いちゃっただけだから」

明るい顔を作ってみせると、花丸も笑顔になった。

「じゃあ私、もう少し回ってるね」

「うん、またあとでね」

花丸は、本を抱えて本棚の間を抜けると、階段を登っていった。その足取りは、まるでこの本棚の森が、お菓子の家に見えているかのようだった。

ルビイはスクールアイドル雑誌を手にしたまま、人っ子一人いない本の森を歩く。

「ごっつて、本あったっけ？」

そう口にして、ここが即席のスペースだと気付いた。普段はこの書店に並んでいない本を集めたイベントコーナーのようだ。

そう考えると、「余所から預けられた売れない子供が薄暗い地下で怯えている」というイメージが浮かんできた。

勝手に親近感を抱いたルビイは、やがて、趣味のコーナーに辿り着いた。

数は少ないが、その中に初心者向けのぬいぐるみ制作本を見付け、手に取る。

「あ、可愛くない」

いかにも売れ残りの本らしいニツチなぬいぐるみデザインに、ルビイは笑ってしまった。

小学校の家庭科で裁縫の面白さを知ったルビイは、元々針不精だった母の仕事を奪い、趣味というより実益で裁縫の腕を上げていった。姉が服を破いて帰ってきた時など、小学生のルビイが夜なべして直したものだ。今ではちよつとしたほつれなら普通の針で直せるし、靴下の穴の補修など片手間でもできる。

小物やぬいぐるみの制作は、その延長から産まれた趣味だ。どうしようもない習作から、誰に買ってもらったんだと母親に怒られたものまで数多くを作ってきたが、表に出したことはほとんどない。人にプレゼントしたのも、花丸へのネコのぬいぐるみが初めてだった。

「喜んでくれたよね、マルちゃん」

その時の花丸の顔を思い出すと、今でも嬉しくなる。

だからルビイは、今度は実寸大の型紙が収録された本を取り出した。

服を丸ごと制作したことは、もちろんない。自分にそんなことができるとは思えなかった。

それでも、平面の型紙から立体の服が作られる様を想像するのは楽しかったし、ぬいぐるみ作りに活かせる部分も多かったので、何冊か本を買ったことはあった。

いつかきつと。

ページを閉じると、表紙に印刷されたデザイナーと思しき若い女性と目が合う。そのてらいのない笑顔に、気恥ずかしくなる。

と、見知らぬ森の一角に、

「ここが《ネメア獅子》の住む、《ネメアの谷》ね——」

そんな独り言が聞こえてきた。

「あー、今のなし、しし座はかに座と相性よくないんだった。まったく、予算なんて分かんないわよ、私だって。作ったことないんだもん。スクープは回収されちゃうしさあ……。嗚呼、自らを意図せず窮地に追い込むは、産まれながらにして不幸なり墮天使ヨハネよ——」

その低音と高音を行き来する声には聞き覚えがあつて、ルビイは思わず辺りを見回した。

あの特徴的なお団子頭は目の届く範囲にはおらず、この辺りには現実的な趣味の本しかない。墮天使さんはこないだろう。

だからルビイは冷静を保って型紙本を胸にいだき、本棚の間に立ち尽くしていたのだが。

「あれ？ ねえ、あんたつて」

お団子頭の下にある《なんとかの目》は、ルビイを見逃してくれなかった。

声は発さずに済んだが大きく肩を振わし、ルビイは声の主を振り返る。

「つ、津島ヨハネさん……」

「き、奇遇じゃない……」

ルビイが「ヨハネ」と呼んだ少女——善子は、ルビイの予想と違い、ばつが悪そうに笑っただけだった。だが考えてみれば、入学式の食い付きは単なるインタビュだったわけで、それ以来ろくに話をしていないのだから、この他人行儀な反応は当然とも言える。

「ゴスロリ？ ヨハネさん、こんな趣味あつたの？」

むしろルビイの反応の方が、この場では異常だった。善子のゴスロリ服に誘引されたルビイは、一步で善子との距離を詰めると、お団子にした頭から厚底のローファーまでためつすがめつ眺めだしたのだ。

「え、えっと、なに？」

しゃがみ込んでスカートを触り出したルビイに、善子の顔が思わず引きつった。

「こんな厚いシフォンパニエ、初めて見た。こんな風になってるんだ」「ちよ、ちよつと!」

無造作にスカートをめくられ、肌着のはずのパニエを露出された善子は、大いに慌ててスカートを押さえる。

「え、あ……ご、ごめんなさい!」

ルビイはその声で、自分の行動に気付くと、慌てて立ち上がる。

「あ、あの、失礼します!」

とルビイは善子をおいて立ち去ろうとしたが、

「黒澤さん! ちよつと!」

呼び止められ、振り返った。

ルビイは、善子の目線がルビイの持つ本に向けられているのに気付く。

スクールアイドルの雑誌と、型紙の本に。

「ねえ、聞いていい?」

「は、はい」

「何座?」

「え? ……九月二一日のおとめ座ですけど」

その途端、手を握られた。

「服、作れるんだよね!」

「ピギ!」

突然の大声に辛うじて声を押しとどめたルビイだが、善子はルビイの手を包むように握ったまま、涙目で片膝を突いているではないか。

「我らが慈悲深き神よ……この墮天したヨハネにも、《ネメア獅子の毛皮》を授けてくださるのか——」

「え? ちよ、ちよつと、どうしたの?」

慈悲深き神らしいルビイが問うと、善子は膝をはたいて立ち上がった。

「いやね、とある人に頼まれて服を作らなきゃなんないのよ! アイドルの衣装なんだけど——」

「——アイドル!? 千歌先輩の!?!」

今度はルビイが食い付く番だった。

「なんでそれを?」

「だって、高校生がアイドルの衣装なんて言ったらスクドルしかないし、浦の星でスクドルを始めようなんて千歌先輩以外にいるならルビイも見たいし!」

善子はルビイが突き出したスクールアイドルの雑誌を見て、口を開けて笑った。

「話が早くて助かる! ねえ、手伝ってくれない?」

「スクドルの衣装? ルビイが?」

「そう! お願い! もう、ほんとは作れないのに、無理なんて言えなくてさあ!」

手を合せてくる善子を前に、ルビイは気持ちがいぼんでくるのを感じた。

「あ、あの、ルビイね……。部活は禁止されてるんだ」

「なんで?」

「黒澤家のモットーに反するから」

そう言うと、善子は、

『やるからには勝つ?』? だから禁止されてるの?』

と言葉に怒気を含ませた。

「上手くないかもしれないから、縛り付けられてるわけ?」

善子の手が、ルビイの手首を掴んだ。

「あの、ヨハネちゃん?」

「そんな血の鎖なんて関係ないわ。あんたがやりたいかどうかよ!」
鎖。

《黒澤家》という血の鎖?

そんな風に考えたことなんて、一度もなかった。
でも。

「ルビイが作れるの、こんな小物だよ?」

ルビイはバッグを見せた。直径四センチほどの、クマの頭のぬいぐるみ。

「ウソ」

善子は天国から地獄に叩き落とされたようにガツカリした。

「ごめんね、期待させちゃって」

「そうだよ、ううん、そうだよ。そんなうまい話、ないよなあ……」
その様子に、ルビイはお腹の奥の痛みを感じる。自分の役立たずさに、お腹まで腹を立てているのか。

ルビイが期待させちゃったからいけないんだ。

思わせぶりに服の型紙本なんて持つてるから。

ああ、ダメだ、また泣いちゃう。

「あー、ヨハネさん！ またルビイちゃんをいじめてるぞら!!」

そこに、花丸が階段を降りてきた。ルビイたちの声を聞きつけて戻ってきたようだ。

「え？ あ、えっと。あんた、誰？」

「オラは国木田花丸ぞら！ ルビイちゃんから離れるぞら!!」

普段は抑えている「オラ」と「ぞら」を全開で、花丸は駆け寄ってくる。

「ちよ、誤解よ！ 誤解！」

善子はルビイの腕を掴んでいることに気付いたか、慌てて手を引く込めた。

「あ、あの、マルちゃん、今回は違うの。ルビイ、平気だよ」

ルビイは涙ぐんだ目を誤魔化すように、開いた手を大きめに振る。それで花丸には通じたようだ。

「ごめんなさい！ 私、また慌てちゃって！」

花丸は善子に頭を下げた。

「いいわよ、別に。私だって前科あるし。じゃ、まあ……。邪魔したわね」

善子はルビイを一瞥して、階段へ向かった。

花丸はその後ろ姿をしばし見送ったが、思い出したようにルビイを見た。

「マルは買ってきたよ。ルビイちゃんは決めた？ どっち買うか」

ルビイは眼を逸らすように、手に持ったままの本を見下ろした。

表紙に印刷されたデザイナーと、また目が合った。

第四話：始めたいマイストーリー ― 2

B

雨夜の影が重く垂れ込める、三〇畳一間の狭い本堂。

光輪を背負った毘沙門天の像が室中を睨み付けるように仏間に鎮座し、目前の須弥壇しゅみだんを護っている。

無垢ケヤキの須弥壇は本漆塗りだが、押彫も金箔もない質素なものだ。だが室中に足を踏み入れた者は誰もがそこに目を奪われるだろう。

壇の上に敷かれた黄色の布団に。

太陽のように淡く光る、直径三センチほどの球体に。

それは国木田家が代々祀ってきた、《妙法寺》の本尊だ。

「ご本尊様、オラを助けてほしいぞら」

国木田花丸は合掌すると、目を閉じた。

いつものように、じんわりと、暖かな光が瞼の下に満ちてくる。

年に一度開帳される本尊は、苦しみや不安を取り除き、自身に眠る《輝き》を照らしてくれるという御利益があるとして、近隣の住人には有名だった。縁起は不明だが、少なくとも二〇〇年前には存在していたようで、大正二年の沼津の大火で市内の焼け落ちた妙法寺が、ここ下香貫に移転して以来、ここにあるそうだ。

そんな知識を得るずっと前、四歳の時にその御利益を体験した花丸は、以後、寺の娘という特権でこっそり本尊を拝んでいた。運動会、体育祭、学芸会、定期考査、入試といった行事の前には、ルビィと一緒に忍び込んで祖父や父に怒られたものだ。

こうして拝んでいけば、不安は晴れる。

不安？

不安だ。

また凍り付いてしまうかもしれない。

入学式のエンジェル・フォーメア、全校集会のブランキア。

『三度目の正直？』？

『二度あることは三度ある』？

「……ずら」

不安は晴れない。

心の底に溜まっていた澱が、動き出したただけだ。

花丸は顔を上げ、光の差し込まない本堂なお、淡く光る本尊に手を伸ばす。

雲間から覗く太陽のような、穏やかな快さを、手のひらに感じる。

だが、なにも変わらない。

「花丸」

聞き慣れた声に振り返ると、入口の腰付格子戸、その磨りガラスの向こうに人影が見えた。

「お祖父ちゃん」

花丸の祖父にして妙法寺の住職、国木田十全だ。

「ごめんなさい、また勝手に入っちゃって、オラ——」

「——傘を置いておくぞ」

叱られるとばかり思っていた花丸は、硬く低い声で言われた言葉の吟味に静止する。

「花丸？」

「は、はい！　ありがとずら！」

花丸が慌てて声を上げると、野良着を着た祖父のシルエットの微か揺れた。

「曇鸞は言った、『名の法に即する有り。名の法に異する有り。名の法に即するとは、諸仏菩薩の名号、般若波羅蜜、及び陀羅尼の章句、禁呪の音辞等是なり』」

そして踵を返した。

「え？」

「それに頼るな」

階を下りながら傘を広げる十全の影が、磨りガラスから消える。

振り返り、須弥壇の上の本尊を見る。

「今夜も眠れそうにないずら」

心が晴れないままに本堂をあとにするのは、これが初めてだった。

*

「お父さん」

「ん？」

味噌汁を啜っていた父が鼻で返事をした。

だが声をかけた妹は、ご飯茶碗を持ったまま口を開かない。

「どうした？」

「ううん、なんでもない」

「早く食べなさい。またダイヤを待たせないように」

「は、はい」

母に言われ、妹はご飯をたくあんと一緒に口に入れる。

ぽりぽり、と。

俯いた妹から響く音。

黒澤ダイヤは三人の挙動を横目で見つつ、鱈の干物を口に入れる。

四つ葉のカタバミの家紋に見下ろされた食堂に並ぶ、四つの膳。

その前に正座するのは、現当主の黒澤琳太郎、その妻の瑠璃。そして

長女のダイヤ、次女のルビィ。

声が届くが表情は不明瞭な距離感の四人が、《沼津御用邸記念公園

》の管理を任される黒澤宗家である。

一家が住むのは、昭和二〇年の沼津大空襲にて消失した本邸跡地に建てられた、管理事務所だ。明治時代に作られ現存する東西の附属邸と違い、比較的新しい建物ではあるが、苑地内の景観を統一するため外観は附属邸と統一されていた。

だが関係者しか住んでいない内側から見れば、一般的な日本建築と大差はない。この食堂も、なんの変哲もない畳敷きの和室だ。

(三〇畳給仕付き、ですが)

ダイヤは温めた味噌汁ぬるを口にする。

消失した伝統を偽装する古風な外観の建物は、そのまま、一家の在り方を表わしているように思えた。

「なにか言いたいんじゃないのか」

膳に箸を置いた琳太郎が問うと、ルビィは顔を僅かに上げた。

「門限、伸ばしてほしいんだけど、ダメ？」

「ダメですわ」

「おい、瑠璃」

答えたのは瑠璃だった。

「だってそうでしょう。あなたの門限を一時間伸ばすだけで、ボディガードの経費がいくら発生すると思っっていますの？ フォーマメアとやらの出現で特別手当も多く、そうでなくとも我が黒総警は、小原家のスクードに押されているいうのに」

「じゃあ、お姉ちゃんみたいにボディガードを減らして——」

「——ダイヤくらい自分の身を護れるようになってから、言っってください」

そう言われれば、ルビイはまた俯くしかない。

「ルビイ、正当な理由があれば考えないでもないぞ？」

「琳太郎さん」

「瑠璃、今が難しい時期なのは分かるが、せつかくルビイが言い出したんだぞ？ どうだ、ルビイ」

だがルビイは、黙って首を振った。

思えば、昨日帰宅してからルビイの様子はおかしかった。

買ってきた雑誌を膝に縁側に座ってほうけていたり、引きつけを起こしたように身体を揺すっては縮こまったり。

ボディガードにもそれとなく話を聞いてみたが、本屋で男性に話しかけられて叫んだ以上の情報を得られず、ダイヤももどかしい思いをしていた。

「なにかしたいことがあるのです？」

だからダイヤは、ロールスロイスで花丸を迎えに行く道中、さりげなく問うてみた。

心ここにあらずで電話の画面を撫でていたルビイは、ゆるりと顔を上げた。

「え？」

「門限の件、ですわ」

「あ、うん……」

リムジンは学校と反対方向に向かい、山裾の住宅地に向かう。妙法寺までは一〇分ほどしかかからない。

ルビイはスモークガラスで遮光された窓の外に目を向ける。

その横顔は、か弱い動物のようで、ダイヤは庇護欲を刺激される。抱き締め、押し止め、この世のあらゆる脅威から護りたいと思う。だが口には出さない。

行動してもいけない。

黒澤家の人間として、生徒会長として、人の上に立つダイヤは、ルビイ一人にかまけているように見えてはいけないのだ。

だから、妹の動向をボディガードに聞いている自分の動向も、本来は褒められたものではないのだが。

「ルビイ？」

これでなにも言わないなら、忘れよう、と思った。

だがルビイは、上目遣いでダイヤを見てきた。

「ルビイが『部活したい』って言ったら、お父さん、許してくれるかな」
意外な問いだが、同時に納得した。

「なにを始めたのです？」

「具体的な話じゃ、ないんだけど」

ルビイの幼馴染みである花丸が聖歌隊に入り、活動再開に向けて動き出したのは聞いている。それに誘われたか、触発されたか、したのかもわからない。

ダイヤは、ルビイの背後にある運転席とのパーティションを見た。
この会話は二人だけしか聞いていない。多少踏み込んでも問題はない。

「率直に言いますと……ルビイ。過去の遍歴から、あなたが芸事を続けられるとは思えませんわ」

直接的な物言いに、ルビイは膝の上の手に視線を落とした。

「華道、茶道、書道、剣道、柔道、どれもごく短期間でやめてしましましたね。日舞だけは一昨年まで続きましたが」

「うん……」

「弓道が続けられているのは、相手がいない以上に、《紅谷流》の師範が女性だからでしょうか？」

「ゆ、弓は、それだけじゃない、もん……」

浦の星女学院には、四人しかおらずに大会に参加できない弓道部がある。そこに勧誘されたのだろうか。

「とにかく。部活に入れば、当然、男性との接触が発生します。黒澤家たるもの、『やるからには勝つ』。高校生にもなつて失敗と挫折を繰り返す様を、大衆に見せるわけにはいきません。ルビイも聞いたでしょう、花丸さんの『ノブレス・オブリージユ』を。だからお母様も、ルビイの部活を禁止しているのだと思いますわ」

「うん……そうだよね……」

そう呟いて、ルビイは小さくなってしまった。

ダイヤは鼻息を漏らす。

またやってしまった。

ルビイのためを思つてする会話が、いちいちお説教のようになってしまふ。これでは母と同じだ。

自分の鼻息さえ、ルビイにとっては「呆れられている」と思われるに違いない。

「鎖、か……」

ルビイが呟いた時、リムジンがゆるりと停車した。

ボデイガードが外に出てドアを開けると、

「うおんうおんうおん！」

「ピギイ！」

犬の吠え声が車内に飛び込んできて、ルビイが奇声を発した。

「パフェー！ Quiet！」

妙法寺に続く私道の出口には、飼い犬に人差し指を向ける花丸がいた。

黒々した毛並みのジャーマン・シェパード・ドッグはどうしたわけか、花丸に向かって声を上げている。

「ごめんね、ルビイちゃん。おはようございます、ダイヤさん」

「う、うん、おはよ」

「ごきげんよう」

制服にクリーム色のカーディガンを羽織つた花丸は、飼い犬のパフェを静めようと英語で指示を出している。

「ルビイ、まだ苦手なのですか？」

「ワンコさんが？ 前から苦手だよ」

「そんなことありませんわ。昔、我が家で飼っていた犬たちとは、仲良くしていたでしょう」

その言葉に、ルビイは目を瞬かせる。

「ケイシちゃんたちと？ 怖かった覚えしか——」

「——お待たせしました！」

と、ようやく落ち着いたパフエにお座りをさせた花丸が言った。

「パフエ、オラが帰ってくるまで、大人しくしてるぞら」

しかしパフエはすつくと立ち上がると、花丸のスクールバッグに鼻先を押し付けた。

「ずらっ？」

パフエがくわえているのは、ボールの上に乗ったネコのぬいぐるみ。

「あら、あれはルビイの——」

「——ずらあああ!!」
パフエ！
Drop！
放すぞら

その指示は聞き入れられなかった。

パフエは緩やかな坂道を、勢いよく駆け降りて行ってしまったからだ。

「パフエ！ Stop！
止まるぞら パフエ！ 止まるぞらあああ!!」

花丸が追いかけて、

「黒服さん、お願い！」

その後ろをボディガードが続き、指示を出したルビイも車を降りて走っていく。

サイドブレーキを引いて停まっているリムジンからその様子を見るダイヤは、はたと思った。

「ボディガード相手なら、男性も問題ないのですね……。相変わらず、おかしな遠近感の恐がり方ですわ」

花丸と犬とルビイと黒服のボディガードは、ぬいぐるみを巡って坂を下っていく。

*

「お待ちヨーソロー！」

外階段から上がってきたのは、水泳部の朝練習上がりの曜だった。そのヨーソロー、苦しくない?」

スクールアイドル雑誌《クロキユス》の最新号を読んでいた千歌が突っ込むと、

「タイミング的に、おはヨーソローは違うかな、って」

曜は誤魔化すように、濡れた髪をバスタオルでかきまわした。

「無理に言わなくてもいいのに。はい、祖父ちゃんからお土産」

果南は曜になにかを投げた。魚の干物のようだが、種類までは分からない。

曜は屋上の濡れていない部分を探して、スカートのままあぐらをかいた。

「たまには来いってさ。また獅子岩から飛び込むところが見たい、って」

「もうやらないよ。頭ぶつけてえらいことになったんだから」

「曜ちゃん、あの時は大変だったよね。エレベーターまでじいちゃん
が背負ってさ」

「私がロープウェイ増発してもらったんだからね、感謝しなよ、曜」
「その話はいいって、もう!」

幼馴染み三人組が仲良くしているのを、桜内梨子はニコニコと見ている。

《浦の星女学院スクールアイドル同好会(仮)》は、学校から認可されていないので校内で活動できない。そんな時「校内じゃダメなん
でしょ?」と屋上を提案したのは、三年生の果南だった。単なる屁理屈
なのだが、千歌が「μ sと同じ!」と興奮したことで、決定となったのだ。

(潮の匂いも、あんまりしないしね)

曜は子供時代の話を梨子に聞かれるのが恥ずかしいのか、バスタオルで顔を覆ったが、その隙間から梨子に笑いかけてもいた。

例えば、曜と友達になったのは、この屋上でだった。

曜と諍いをし、ゾンビ・フォーメアと遭遇したことで、仮面ライダー

であることを明かさざるを得なくなったのだ。

あの一件がなければ、梨子はここにはいなかったはずだ。そう思うと、フォーメアにも少しは感謝しないといけないのかもしれない。

「曲はどう？ 難しそう？」

雑談をしていた三人の中から、果南がこちらに本題を切り出してきた。

「はい、取り敢えず、二つは準備してきました」

「もう？」

「デモですけど」

梨子はスクールバッグからノートPCを取り出し、復帰させた。

「曜ちゃん！ 聞こ聞こー！」

「ちよつと、千歌ちゃん、水たまり！」

集まってきた三人にPCを向けて、`kyokuldemo.mp3`を再生する。

「わあ！ これ梨子ちゃんの声！」

「そこに反応しないで！」

「お、盛り上がってきたよ」

曜の言う通り、シンセサイザーが奏でるアルペジオで入った最初のフレーズが終わり、アップテンポのドラムが合流した。ここから音が厚くなるイメージだ。

「ダンスできる曲ってリクエストだったけど、このくらいのBPMでいい？」

「いいよいいよ！ 完璧！」

「ぎつくりした発注だなあ」

果南が梨子に苦笑を見せ、梨子も意識して笑顔を返す。

梨子はこの松浦果南という人物を、よく知らない。先週、生徒会室の前で会ったのが初めてだが、果南はその時、幼馴染みと仲良く話す顔と、生徒会長のダイヤと言葉少なに話す顔を見せていたからだ。

どちらが本当の顔なのだろう。

私には、どちらを向けてくる？

そんな不安がある。

「これいいじゃん！ やっぱ梨子ちゃんを見初めたちかつちの目に狂いはなかったよ！」

「見初めた」って恋仲に使う言葉だよ。やっぱり一目惚れじゃん」
「違うって！」

二年生組はなにを話しているんだ。

「オリジナルでいくんだ。《ラブライブ！》って、パフォーマンス動画があれば、今は既存曲でもいいはずだけど」

「千歌ちゃんが『やるからにはオリジナルだよ！』ってさ」

「千歌らしいなあ」

果南と曜が話していると、

「次のも聞こー！」

千歌がノートPCのトラックパッドを叩いた。

ピアノアルペジオで始まるロックバラードが流れ、今度は千歌だけじゃなく曜も声を上げる。

「綺麗なピアノ！」

「ごめんね、こっちは歌を入れる余裕がなくて」

「いいよいいよ！ 全然いい！」

興奮する二人を余所に、梨子は気恥ずかしさを覚えた。昨夜遅くにギリギリで書いた曲なので、ピアノの手癖がもろに出ている、と気付いてしまったからだ。

そんな気持ちを知ってか知らずか、

「ずいぶん手が早いんだね」

と果南が落ち着いた口調で言った。

「音女——音ノ木坂でも、色々書いてたので」

「スクールアイドルの曲？」

「はい」

「そんな活動的なグループ、音女にあつた？ 去年だよね？」

その疑問を果南が発したことに、梨子は驚いた。ダイビングをする人と聞いていたが、スクールアイドルシーンにも詳しいらしい。

「えっと、特定のグループじゃないんです。今の音女って、*μ's*の影響でできたグループがたくさんあるんですけど、作曲できる子は多く

なくて。だから色んなグループから頼まれちゃって」

「当方ボーカル！ ギターベースドラム募集！ ……みたいな感じか」

果南の例えは的確だった。

全国的なアイドルグループの群雄割拠にあつて、一番苦しんでいるのは、 μ 、 s の母校である音ノ木坂女学院かもしれない。廃校を救った大量の入学生がそのままアイドル研究部に流れたことで、生徒活動としてはむしろ拡散、停滞してしまったように感じられる。

もつとも、そんなことは周りからは分からないだろう。梨子だって入学するまで分からなかったのだから。

「私も、人のこと言えないかな」

だから、梨子は苦笑した。

「桜内さんも？ アイドル志望だったの？」

「私は——」

開きっぱなしの雑誌に目を向ける。

特集ページの μ 、 s の姿に、中学生時代に初めて見た動画を思い出す。

四〇〇メートルトラックの中央、人工芝で舗装されたグラウンドでパフォーマンスをする、九人の学生。

一番美人なメンバーであつても、一番華があるメンバーであつても、商業的にプロデュースされたアイドルとは決定的に違う、普通の人たち。

その九人のケミストリーが、私の世界観を変えた。

こんな地味な私でも、輝ける場所があるかもしれない。

でも。

梨子は果南に目を戻し、首を振った。

「——私の居場所じゃないって、気付きましたから」

あれは、特別な人たちの、特別な物語だった。

《輝き》を掴んだ人たちの。

二曲目が出し抜けに終わり、ギターリフのアウトロの残響が青空に消えた。

「ああああ、よかったよお、梨子ちゃん！」

デモを聞き終えた千歌は、作詞者ということもあつてか、恥ずかしそうに言った。

「エロ親父千歌ちゃん」

「え？ なにが？」

「なんでもない」

「ちかっちはエロくないよー！」

「でも私、二曲目の方が好きかな。なんか、寂しいんだけど元気っていうか、元気だけど寂しいっていうか」

「同じこと言ってるじゃん、曜ちゃん！」

「同じじゃないって！ 同じっほいけど！」

「語彙力！」

言い合う千歌と曜を見て、梨子は顔を綻ばせた。やはり仲良し同士の気兼ねないやりとりは、心が和む。

ふと果南を見ると、目が合った。その表情で、果南も梨子と同じようなことを考えているのが感じられた。

果南とダイヤとの間に、なにがあるのかは分からない。でも、この三人に関しては、梨子が心配することはないのだろう。

そう納得すると、梨子はスクールバッグを引き寄せた。

「じゃあ、譜面、配るね。音源は後でメールするから、練習してみてくださいっ。」

「するする！ やったあ！ やったよ果南ちゃん！」

「喜ぶのは、歌えるようになってからだよ。曜、平気そう？」

「土日もらえれば……覚えられます！」

曜は単語カードになにかを書いて、果南に敬礼した。

「じゃあまず、月曜日をターゲットに練習しようか。桜内さんもそれでいい？」

梨子は頷く。

この幼馴染み三人組がユニットとなれば、きっと、ケミストリーが産まれる。

私は、その後押しを出来るのかもしれない。

私の居場所は、そこにあるのかもしれない。
その予測は、泡のように曖昧な自分の境界に、少しの明瞭さを与えてくれるのだ。

第四話：始めたいマイストーリー ― 3 (完)

*

登校した黒澤ルビイが花丸と階段を登っていると、上から髪で顔を隠した人物がやってきた。

「ピギイ！」

「ルビイちゃん、ヨハネさんだよ」

「え？」

花丸の後ろから顔を出したルビイは、それが昨日日本屋で会った善子だと認めた。

「ほんとだ、どうしたの？ ヨハネさん」

「気が付いたら朝だった」

善子はぎこちない足取りで階段を降りていく。

「どこ行くの？ 授業始まるよ？」

「……え？ あれ？」

善子が振り返る。ぼさぼさの髪を振り乱して目を見せる善子は、『リング』の山村貞子を連想させる。

「徹夜したの？」

「寝たよ、バスで」

「それは寝たって言わないです」

花丸は善子の手を引いて、三階の一年生の教室に連れて行った。

席に座らせると、背もたれに身体を預けて顎をあげ、グツタリしてしまう。お団子は適当にまとめたらしく、崩れかけて髪の毛がウニのように立ち、トドメを刺されたかのように何本ものピンが飛び出していた。

「直してあげる。マルちゃん、お願い」

「うん」

花丸が頭を起こし、ルビイはピンを抜いて机に並べていく。

「ヨハネさん、大丈夫なの？」

クラスメイトが近付いてきた。

「徹夜したみたい」

「なんでまた」

「分かんないんだ」

ルビイは善子の髪をクルクルと巻いていく。中学二年生までやっていた日本舞踊では、ルビイはいつもお団子頭だったから、作り方は知っているのだ。

だが、

「あれ？ あれ？」

何度やってもうまくいかない。

「貸して、黒澤さん」

クラスメイトの一人がルビイからピンを受け取り、器用にまとめてしまった。

「ほい」

お団子を上に向けて机に突っ伏した善子は、涎を垂らして寝息を立て始めた。

ルビイのお団子を作っていたのは、いつもダイヤだ。ルビイは作り方を知っているが、それと作れないことは矛盾しない。

自分の腕を見下ろす。

善子が言った通りだ。

父も母もダイヤも、ルビイを護ってくれる。

失敗をさせないために、挑戦を許さないことで。

ルビイの腕を、《黒澤家》という血の鎖で縛り上げて。だからルビイは、お団子一つ作れない。

「その本、なに？」

お団子を作ったクラスメイトが、ルビイの手提げ袋を指差した。

「え、これ？ ……型紙の本だよ」

昨日買った裁縫の本を出して見せた。季節ものの雑誌ではなかったが、表紙の女性に笑いかけられ、結局買ってしまったのだ。

「黒澤さん、服作るんだ」

「マジで？ だって黒澤家でしょ？ 買ってこないの？」

「バツカ、趣味だよ趣味」

「すげー、なにこれ、マジ意味分かんない」

「え、あ、あの」

クラスメイトたちが型紙本をためつすがめつする様を、ルビイは見ているしかない。

そこに、

「これ、ルビイちゃんが作ってくれたんだよ」

「マジで？ すげー可愛い！」

「プライズだと思ってたわ！」

「ま、マルちゃん！」

花丸がスクールバッグのぬいぐるみを見せるものだから、騒ぎが一段階アップしてしまった。

「ルビイちゃん、たまにはお天道様の下を歩くずら」

そう言つて、花丸は一部のクラスメイトを連れて輪から抜ける。

「ダイヤ様とおそろいの服とか作るの？」

「なにこのパーツ、肩？」

「首じゃない？」

「肩でしょ」

「首だよ」

「あの、あの」

残されたルビイは混乱している。

最大でもたった一三人しかいないクラスなのに、まるで全人類がルビイに注目しているようだ。

作れない、とは言えない空気に、ルビイがキャパシテイオーバーの悲鳴を上げるカウントダウンを始め――

「あ、この人、知ってる」

――そんな声を聞いた。

型紙本の表紙を見たクラスメイトが、隣の子に話しかけている。

「知らない？ ずっと前に歌手やってたじゃん。あれ、私たち、生まれる前かな」

「そうなの？」

ルビイが反応すると、クラスメイトは小刻みに頷いて言った。

「うん、割りと一発屋だと思うけど、すぐ消えちゃった人だと思う」

「この人が？」

型紙のページは読んでいたが、著者のことはろくに調べていなかった。

そこで、本鈴が鳴った。

クラスメイトは銘々離れていき、救われたルビイも自分の席に座った。

「はい、一限始めますよ」

まだ名前を覚えていない数学Ⅰの男性教師が入ってきて、教室は緩やかに授業モードに移行する。

だがルビイは、教科書やノートを開いたものの、先ほどのクラスメイトの話が気になっている。

「津島さん？ どうしました？」

「ヨハネさんは徹夜明けらしいです」

「うーん、寝かせておくか」

教師と花丸が話をしている裏で、こっそり電話を取り出して、検索してみた。

来歴には、小物作りが好きな引っ込み思案の少女が、高校生でアイドルになり、卒業後は芸能活動を続けながら服飾の勉強をし、やがてデザイナーに転向、他の歌手の衣装や舞台を演出していく様が書かれていた。

「小物作りが好きな、引っ込み思案の……」

「黒澤さん？」

気付けば、善子の肩を掴んでいた。

「ヨハネちゃん！」

「ふへあ？」

善子は閉じかけては開く瞼の向こうで、白目と黒目を行き来させてルビイを見た。

「ルビイ、やるよ！」

「え、へ？ な……なに？」

「やる！ 衣装作り！」

「え……え？ ほんと？ ほんとに!？」

「うん！」

チャンスなんだ。

護られるだけのルビイに訪れた、些細なチャンス。アイドルにはなれないけど、先輩たちの衣装作りのお手伝いなら、できるはずだよ。

「よかったあ……。もう昨日散々いじくり回したのに結局ダメでさあ……」

「安心して、基礎からちゃんと教えてあげるから！」

「分かったわ、この堕天使ヨハネ、その見返りに、我がか弱き《リトルデーモン》の願いを聞き入れよう——」

「え？」

「その《サダメメノクサリ運命の鎖》、解き放つ力を与えん——」

瀕死の口調でそこまで言うのと、善子は再び眠りに落ちた。

「鎖……」

宣言してしまった。

この手足を、血の鎖が縛っているとしても。

みんなの前で宣言してしまったのだから、もうあとには退けない。

みんな？

「あの、盛り上がってるところ悪いんだけど」

男性教師の声に、ビクリと震えた。

「そろそろ授業始めていいかな？」

「あ、あ、あの、ご、ごめんなさい！」

様々なニュアンスの視線に耐えられず、席に走る。

（やっぱり護ってほしいよう！ お姉ちゃん！）

*

放課後。

ドアだけ妙に真新しいアパートの一室に足を踏み入れた時、国木田花丸は思わず鼻をつまんだ。どこから漂ってくる香の匂いと、花丸の制服に染みついている寺の匂いが、ミスマッチだったからだ。

「お邪魔します」

「上がって上がって、誰もいないから」

家主の娘の善子がルビイを招き入れ、花丸はその横でローファアを脱ぎ始めた。

制服に合わせて新調した真新しい靴は硬く、紐を解くのに時間がかかる。玄関に腰を下ろして苦戦していると、

「他の部屋は見ないでね、汚いから」

「うん」

二人はどんどん奥へと進んで行ってしまった。

「あ、あ、ちよつと」

「なんか持つてくるわ」

「お構いなくー」

靴を脱げて振り向いた時、ちよつと向かって右奥のドアが閉まった。花丸が歩き出すと、左手前の部屋からも人の気配がする。会話を断らして善子とルビイは別の部屋にいる可能性が高いが、どちらが『見ないで』の対象なのだろう。

(ま、いつか)

近代的な鉄筋コンクリート造のアパートなのだから、うっかり開けた先が座敷牢で、代々閉じ込めていた謎の存在を見てしまったがために口封じ、などの展開はあり得ない話だろう。

だから花丸は迷うのをやめて、閉まったばかりの右奥のふすまを引き開けた。

「お邪魔します」

そこは香の匂いが漂う六畳の部屋だった。黒いスカーフを部分脱色したらしき魔法陣の周りに、LEDらしき明かりの灯った燭台が並び、狙い撃つようにビデオカメラが設置されている。ニコ生配信のための部屋——要するに善子の部屋らしい。

その中央に立つ、天使の怪人と目が合った。

「……ずらああああ!!」

後退った踵が滑り、板張りの廊下に尻もちをつく。

「ら、ライダーさん、ライダーさんは」

「どうしたの、花丸ちゃ——ピギイイイ!!」

背後のドアから出てきたルビイも、奇声を発した。

そして当の怪人は――

「そんな驚く？」

――お面を脱いだ。

当然ながら善子だった。

直後、玄関を叩く音が廊下に響く。

「お嬢様！　ご無事ですか！」

「あ、あ！　平気！　平気だよー！」

外で待機していたボディガードにルビイが叫ぶと、「失礼致しました」と騒ぎは静まる。

「ちよつと、驚きすぎじゃない？　またぶち破られるかと思ったわ」

「それ……なに？」

ルビイが恐る恐る問うと、

「緊急発売、エンジェル・フォーメアマスク！」

善子は得意気に、ゴムのお面を広げて見せた。

「よくできてるでしょ、ちゃんと顔に切れ込みも入ってるの。このヨハネの《ウジヤトの目》がああ光景を捉えていなければ、今頃この商品も存在しなかったのよ――」

そう低い声で嘯く善子だが、

「冗談でもダメだよ！　マルちゃん、すつごく怖がってたんだから！」

花丸とルビイが、この怪人に入學式の日にまさに襲われそうになった本人だとは考えていなかったようだ。

「え、でもネットじゃもう二次創作イラストが大量に作られてるよ？」

国木田さん、見てないの？」

「マルちゃん、最近ネット見てないんだよ！」

「そんな、新作ゲームのネタバレ回避！」

「ふ、ふふ、あはははは!!」

だが花丸は笑い出した。

「は、花丸、ちゃん？」

「そ、それ、かぶって、オラたちを、おどかそうとしてたずら？」

笑うしかない。

自分をおびやかした怪人が、たった一週間でサブカルチャー商品と

して、それも内浦と目と鼻の先の沼津で消費されているのだ。

ますますあの状況が、花丸が体験した出来事ではなく、小説の一段落のように、花丸自身から遠ざかっていく感触を覚える。

花丸は、あの《天使の怪人》の恐怖を、飲み込めてはいなかった。だが世間とはつくに、《エンジェル・フォーメア》という飲み込みやすい“作り事”に矮小化していたのだ。

「ほらほら、衣装だよ衣装。遅くなっちゃう」

赤らんで来た窓の外の雲を指差す、二人は本来の目的を思い出したようだった。

エンジェル・フォーメアのお面は魔法陣の上に放られ、ふすまで見えなくなった。

*

「まず、この絵をクリンナップするよ」

「日本語でオケ」

津島善子が突っ込むと、ルビィは自前の〇・三ミリシャーペンを回して言う。

「曜先輩の描いた絵は優しいタッチで可愛いんだけど、設計向きの絵じゃないんだ。だから、主線を起こして、服の層構造を明確にした上で、解剖学的ゼロ度のポーズで三面図を描くの」

「日本語から遠ざかったんだけど」

「マルちゃん、見本！」

『「ミシンと傘の解剖台の上の出会い」ずらー！』

ルビィの指示で花丸が立ち上がり、ポーズをとった。手のひらを前に向け、腕を自然に下ろしたポーズを。

「これが、なんちゃらかんちゃらゼロ度？ バグった3Dキャラの初期ポーズじゃん」

「ヨハネちゃんも日本語じゃないと思うな」

花丸は正座に戻る。

「……今のポーズで清書するの？」

「うん」

「それで終わるじゃん！」

三人がいるのは津島家宅の居間だ。ルビイは円形の絨毯に直接座って、ガラスの座卓に並べられた曜作画のデザイン画と白紙の画用紙に向き合い、善子と花丸はルビイふかふかのソファに腰を下ろして、ルビイの手元を背中越しに覗き込んでいる。

だというのにルビイは、迷いない手付きで大まかに当たりを取り、真正面から見た衣装を画用紙に描き出していく。

「小物を作る時なんかは、ルビイはデザイン画からいきなり型紙を起こしちゃうんだけど、今回はものが複雑だし、デザイナーさんにも確認したいから、三面図を描いていくよ」

「気合入ってるなあ、ルビイちゃん」

ルビイはこの前『服は作ったことない』と言っていたが、作りたい服のデザインや、型紙制作のシミュレートなどはしていたのだろう。そう感じさせる手際の上さで、ポップで淡い色鉛筆の線が、細く正確な線に写し替えられていく。

ネットの情報や独力でひたすら手を動かして明かした夜がウソのようで、善子は内心、改めてルビイの協力に感謝した。

「さつきから気になってたんだけど」

手持ち無沙汰だったか、襖の上の方を見上げていた花丸が言った。

「ああ、うん」

居間を取り囲む長押の四辺に三枚ずつ、計一二面の能面が三人を見下ろしている。

童子、橋姫、十六、増髪、邯鄲男、曲見、白式尉、山姥、蛙、生成、黒鬼、真蛇。

「お父さんが子供の頃に能をやってたね。集めてたんだって。やつぱヤダ?。」

「なんでずら?。」

花丸は不思議そう見られ、善子も不思議そうに見返す。

「だって、小学校の頃とか、遊びに来た子が怖がっちゃったからさ。獅子浜の時はすごい日本家屋だったし、これかかっていると雰囲気あったんだよね」

「ウチはお寺だから、こういうのは慣れてるぞら」

「こういうの？」

「誰かに見られてるの」

「怖いこと言わないでようー！」

「毘沙門天さんのことだよ」

花丸の言葉にもルビイは心底イヤそうな顔をしていたが、すぐ画用紙に向き直った。

「ルビイも昔は、お姉ちゃんと一緒に日舞やってたから、こういうの平気だよ」

「ルビイちゃん……やっぱり恐がり方の遠近感がおかしいぞら」

能面に囲まれた状況を分かっているクスクス笑う同級生は、善子の経験では始めてだった。

善子は立ち上がって、真蛇の面を手を取った。

角が生えた女の面は、般若よりも鬼化の進んだためか、耳がなかった。

「懐かしいなあ、これで鬼ごっこして、お父さんにメチャクチャ怒られたんだわ」

「それは怒られるよ」

手を動かしながらルビイが笑った。

久しぶりに触ってみた真蛇の面は、堅紙に和紙を張り付けて作られた簡単なもので、記憶のそれよりだいぶ草臥れていた。被るための紐もよれたゴムだし、高価なものではないのかもしれない。

被ってみようか、と思う。

エンジェル・フォーメアのお面で驚かす作戦が失敗して、善子のイタズラ心は行き場がなかった。

だが、真蛇の面を長押しに戻した。

「私、もう堕天使だしね」

獅子浜の小中一貫校に通っていた善子は、九年間で多くの友人が街を転出していったのを見てきた。神と魔の同居する世界から抜け出した彼らは、成長して各々の文脈を持つ世界を寢屋とした。

善子も今はその一人だ。

だから、この面をかけて誰かを追い回すことはもうないのだろう、

と善子は思うのだ。

一つ息を吐いて振り返ると、

「あ、けっこう形になってるじゃん」

ルビイは正面を向いた絵、左を向いた絵、奥を向いた絵の三パターンを並行して描いていた。上半身はまだ抜けが多いが、輪郭線や下半身はほぼ形になっている。

「でも私、やることないなあ」

「オラも出番ないです」

自分のことを「オラ」と呼んだ花丸は、それを恥じたか、袖の長いシャツで頬を隠した。

ルビイがスケッチブックにかぶりついた時から薄々感じていたが、任せっ放しになってしまっている。これで千歌たちに「私がやりました!」と出すのは気が引ける。ルビイたちもちやんと紹介した方がいいだろう。

「手が必要になるのは型紙からだから、それまではルビイ一人で平気だよ」

と言いながら、ルビイが手がとまった。細いシャーペンの先が、イラストの襟元を差す。

「ヨハネちゃん、このトップスって、ツーピースだと思う?」

「え? なんの全一記録が二人プレイ?」

「二枚重ねかどうか、ずら」

「あ、ああ……。どうだろ」

言われてみると、シャツにベストを重ねた着こなしとも、色の違う布を繋ぎ合わせているだけとも見える。

なるほど、層構造を明確に、だ。

「ちよつと聞いてみるわ」

「お願いします」

曜から受け取った単語カードの一枚ペラを取り出し、書いてもらった番号にコールする。

「ヨーソロー! 曜ちゃんへの用は、発信音のあとに言ってね!」

留守番電話だ。後半が半笑いなのは、自分のギャグに気付いたから

か。

「月水金と土日は忙しいって言ってたっけ……。あ、私です、津島善子です。えっと——テキストで送るわ」

善子は電話を切り、ルビイの質問をテキストに書いた。

「ヨハネちゃん、この裾のライン、背中側がどうなってるかも聞いてほしいな」

「了解。まだありそう?」

「たぶん。どうしよ、まとめて送る?」

「テキストだし、五月雨式でいいわよ。取り敢えず二点、送っちゃわ」

「ありがとう」

その間、花丸はルビイのツーサイドアップを丁寧に結び直していた。姉妹のようだった。

次回予告

千歌 「メンバーは揃ったし、曲も形になってきたけど、衣装は問題だよねえ」

曜 「何気にダンスが手付かずなのが怖いんだけど」

ルビイ 「ライダーの方は静かになっちゃったけど、どうなってるのかな」

千歌 「梨子ちゃんと理事長代理が頑張ってるんだよ」

ダイヤ 「ではわたくしは、学校を護ることに専念しますわ」

ルビイ 「お、お姉ちゃん!」

ダイヤ 「次回、仮面ライダーメルシャウム第五話、『願いましょう、明日の奇跡を』」

曜 「部活設立の雰囲気がないタイトルだなあ」

ダイヤ 「私の目がぬばたまのように黒いうちは、スクールアイドルの設立は認めませんわ!」

ルビイ 「手加減してほしいよう、お姉ちゃん……」

C

津島善子の電話がアラームが鳴らした。

「あ、六時から《フラガラハトワイライト》配信しようと思ってたん

だ」

「六時？」

その言葉に顔を上げたのはルビイだった。

「六時!? ウソ！」

ルビイは津島家宅の居間の掛け時計を見上げ、次いでバッグに入れたままの電話に飛びついた。

「ああああ! お、お姉ちゃんが怒ってるよう！」

「つて、あのダイヤ様？」

善子が敬称付きで言うと、ルビイは顔をクシヤクシヤにして頷いた。

見せられた画面に表示された着信回数は、一一件。

「何時なの? 門限」

「六時！」

「高校でも六時ずら!？」

花丸が声をあげ、ルビイは煩悶の顔を答えとした。

衣装のクリンナップ作業は、前後左から捉えた三面図の線画が固まったところで、まだまだ終わっていない。だがルビイが門限というなら、切り上げなければならぬ。

「ルビイちゃん、オラも説明に行くよ」

「あ、じゃあ、私も？」

黒澤家の住む沼津御用邸記念公園の管理事務所までは、善子の家からだと歩いて十数分だ。

「ううん、それは平気なんだけど……」

ルビイは画用紙に書かれた線画を、名残惜しそうに見ていた。

「これ? こっちも平気よ。あとはパソコンに取り込んで、パス取って線を綺麗にして、色指定通りに塗れいいんでしょ? あとはこの私

——ああ、絵の神様ついていないんだよなあ——とにかく、私に任せて! 元々は私の仕事だったんだから!」

ルビイは渋々頷いた。

善子は安心する。ここでルビイに帰ってもらえないと、僅か二日前に小原家の黒服集団に蹴破られて弁償してもらったばかりのドアを、

先ほどのように黒澤家の黒服集団に壊されかねない、と思ったからだ。

「じゃあ……週末はどうする？ デザイナーさん忙しいんだよね」

「月曜日かな。その時点で一旦見せて、それから考えるわ」

「うん、じゃあまた今度だね」

また今度。

その言葉に、善子は鼻がつんとくるのをとめられない。

「じゃあ私は一人で帰るね」

「あ、だめだよマルちゃん、ルビイんちのクルマで送ってくから！」

「でも、ここからならお寺まで二〇分もかからないし、まだ明るいし。なにかあつたら仮面ライダーさんが助けてくれるよ」

「ダメ！ マルちゃんの送り迎えは黒澤家が責任を持って引き受けたんだから、送っていきます！」

「ルビイちゃん、頑固すら」

と、善子は、話す二人のスクールバッグに、似たようなタッチのぬいぐるみがぶら下がっているのに気付いた。

そういえば、ルビイは小物を作っていると聞いていた。であれば、ルビイが自作のぬいぐるみを付けていても不思議ではない。そして、幼馴染みの花丸が同じものを付けていてもやはり不思議ではない。その推測が自然に浮かんだことが、善子には切ない。

「ねえヨハネちゃん、おうちの人は？」

帰り支度を終えて廊下に出た時、花丸が問うた。

「お母さんは〇時すぎ、いつも遅いんだよ」

「お父さんは？」

「んつと——」

——と、外からなにか低い音が聞こえた気がした。

「来たみたいすら」

「エンジン音？ した？」

「ウチのクルマは静かだから」

善子が先んじてドアを開けると、まだ肌寒い夜の風が吹き込み、家の窓をガタガタ揺らせた。

二階の手すりから道路を見ると、黒塗りのリムジンが滑り込み、音もなく道路脇に停車した。

フロントグリルに貼られた、四つ葉のカタバミの家紋を見るまでもない。

「やっぱ宗家は違うなあ」

善子がポツリと呟くと、横にいたルビイは小首を傾げ、次いで目を見開いた。

「津島、さん？」

しかし善子は、それに応えなかった。応える必要があるとも思わなかった。

「ほら、ダイヤ様の《ネメシスの怒り》が炸裂する前に、帰らないと」

善子がそう言うのと、ルビイは数瞬ののち、笑って頷いた。

「今日はありがと、ヨハネちゃん。楽しかったよ！」

「まだ終わってないけど、うん、ありがとね」

ルビイはアパートの階段を降りて、道路の方まで行くと、

「でも海未さんは言ったよ！ 『楽しいだけじゃない、試されるだろう』って！ 頑張ってるね！」

と格言のようなことを言ってるリムジンに走っていった。

「あれは、私の真似です。さようなら」

と花丸もそれを追いかける。

ボディガードらしき黒服の人物にエスコートされる二人に手を振り、黒服を乗せたやはり黒塗りのセダンと共にリムジンが走り去ったのを見送ると、善子は家の中に戻った。

「さてと……」

居間のガラステーブルに残された、線画を見下ろす。

三人が施したアレンジは、大きく二点。

一つは、シャツとベストは重ね着しない。ベストの肩周りをばつさり削減し、チューブトップのように脇から回り込んで、乳房の頂点部分でシャツに接続することにした。こうすれば、省略ではなくデザインと認識してくれるはずだ。

もう一つは、スカートとソックスの調節。パニエ入りのふつくらし

たスカートを、動きやすいミニスカートに変更、代わりにソックスをオーバーニーからサイハイに引き上げて情報量を維持した。一緒にブーツも丈を伸ばしたいが、ここは予算と相談になる。

そんなこんなも、月曜日に曜に確認する案件だ。

二三日できると豪語したのは完全にウソだったが、せめてその時には、人に見せられるレベルに仕上げる必要がある。

「あー、頑張んなきゃー!」

夜は長いが、週末は短いのだ。

第五話：願いましよう、明日の奇跡を — 1

A V

一辺四メートルほどのコンクリートに囲まれた部屋で、桜内梨子はゆっくりと息を吐いた。

部屋は密閉されており、酸素は供給されていない。

天井の散水口から噴霧される水を肩で受け止め、その中の酸素を鰓から取り込む。

「四月一六日、土曜日、一時二三分。梨子、聞こえるか？」

梨子は《仮面ライダーブルーランキア》の姿で、スピーカー越しの声に頷いた。早回ししたように押し潰された高音と、リバーブがかかった海鳴りのような低音が混じった音だが、認識速度と分解能が上がっている梨子には、それが父——桜内桑介の声だとはつきり分かった。

「これで最後のケースだ、頑張ってくれ。テストケース五一二……開始」

スピーカーが収納し、代わって八挺の機関銃砲塔が現れた。

小さな機械音を立てて銃口が梨子を捉え、その前に梨子は地面をすくい上げ、手にした水を振り回す。

銃声が鳴り響くと同時に、手の中に生成された薙刀が閃いた。

いや、閃き続けた。

今回のケースでは、一挺の機関銃から一〇〇発、計八〇〇発の銃弾が、一分間かけて発射される。

それを極限まで薄めた酸素供給量の中で、受け、返し、よけ、耐える。

それがテスト。

視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、触角、そして第六感を駆使し、ひたすら薙刀を振う。

時には腕や胸の装甲で銃弾を受け止め、あるいは受け流す。

緑色の装甲も薙刀も、それ単体で銃撃に耐えられるものではない。幾度となくえぐれ、砕け、そのたびに充満する水分で再構築する。

やがて、銃撃のタイミングにディスプレイがかり始めた。

複数の砲塔の瞬きが巧みになる。

いつもの展開だ。

意識を集中。

『セディーク』

電子音声が銃声の中に響く。

薙刀の石突きの上に機械でシーリングしたムーフォームが現れ、湾曲した刃が飛び出す。

そこからは、危なげなどなかった。

ケース一から順に、数日に渡って難易度を上げていったテストは、今や至近距離からの複数の銃撃にも対応できる能力をブランキアに与えていた。

これに比べれば、《ゾンビ・フォーマ》の本体が放った空気弾など、シャボン玉に等しい。

一〇分間にも感じる一分間ののち。

最後の銃声と、その弾丸が切り裂かれてコンクリートに跳ねた音の残滓が消えた。

硝煙と水飛沫とコンクリート片の中、ブランキアは脇腹から息を吐く。

「全テストパターンを終了を確認しました。エビデンスの採取も完了です」

桑介の声が、誰かに報告している。そして、

「お疲れ様です、梨子さん」

ピアノのアンビエントBGMに乗せて、別人の声が続いた。

コンクリートの壁の一部が内側に開き、誰かが入ってきた。

「素晴らしい成果でした。《セディーク》のデータはほぼ採れたと考えていいでしょう。本当に助かりました」

三〇代らしい男性だった。清潔だが使い込まれた白衣の胸に「依田義森」と書かれた社員証がとまっている。『お父さんより若いのに、《静岡OGI》のムーフォーム関連事業の主任なんだ』と桑介から何度か聞かされていた名前だ。だが梨子は今回で三度目なのに、その顔と声が覚えられない。

義森は腰をかがめ、梨子の握る薙刀を下から上に、舐めるように見

る。

「セディューの刃が、薙刀の柄に侵食してますね。前回前々回よりずっと、融合が進んでいます。シャイニーの装甲追加とはまた違う、メルシャウム群の強化パターン。《GⅡセディューフォーム》、と呼びましょうか」

タブレット端末を指で操作しながら、苔が凝縮したような緑色の装甲を眺める。

「特定の量子信号パターンを加えることで、周囲の液体を“泡”^{Foam}にして、一定の“形”^{Form}にフォーマライズする、それがムーフォームです。特定の圧力変化でも似たような現象が発生することも観測され、それが音楽に類似することから“ム”^{ミュージー}と接頭されたんですが、いずれにしても『何故そうなるのか』は分かっていない。還元主義な物理学では挙動を解析できず、ホーリズムに基づく手探りの生物学的アプローチをしてくるしかなかったのですが……。梨子さんの御助力で、様々な方向への研究が軌道に乗りつつあります。本当にありがとうございます」

義森は一〇歳以上年下の梨子にも、まるで会社の上司にするような慇懃な口調だ。

だが梨子は、彼の発言を理解できない。

「梨子、変身を解除しなさい」

父の声がスピーカーから流れた。

ブランキアは全身を水面のように波打たせたのち、検査着姿の梨子になる。

変身解除後にいつも感じる潮の匂いが、空気の籠もった部屋に充満する。

「しかし、やはり特定の化学成分を充満させた時の、活動効率の低下が顕著ですね。周波数パターンはまだ分かるのですが。ここは詳細な分析を待ちましょうか」

梨子は握っていた手を開き、薄い皮膜と金属部品で包まれた《セディュー》を義森に返した。

「では、梨子、検査着を脱ぎなさい」

顔の見えない父が、そう言った。

梨子は父の発言を掴みかねる。

「桑介さん、宜しいのですか?」

義森はスピーカーを見ずに言う。

「構いません。経過観察は必要です」

父の声は固い。

梨子はうなじに手を伸ばし、検査着の結び目を解いた。

ぱたり、と実験の痕跡の残る床に、検査着が落ちた。

行き止まりのコンクリートの部屋に入ってきた風が、身体を撫で、

突き抜け、渦を巻いて出ていく。

状況を、脳が拒絶している。

「役得ですよ、私は。こんな美しい被検体を研究できるなんて」

義森の熱っぽい視線も言葉も、意識には残らない。

ただ、千歌たちの顔が思い浮かぶ。

明日は曜の誕生日なのに。

誕生日に呼ばれたのに。

みんなが遠い。

A

「たっだいまー!」

自宅に投げた渡辺曜の声に、返事はなかった。母の帰りが遅いのは分かってる。

曜は居間のテレビを付け、買ってきた紙袋を丁寧に明ける。

出てきたのは、たすき掛けしたようなラインの入った水色のTシャツに、余裕のある六分丈のパンツ。そして“YOU”の文字が入ったキャップ。

タグを取り、制服から着替え、姿見に映す。

「ああ、これは……やばいなあ」

スクールアイドルを始めるにあたり、服装からも気分を一新したいと思って一式揃えた練習着。

軽くステップを踏んでみる。

どこかで見たダンスを思い浮かべ、両腕を動かし、脚を交差し、ター

ン。

そして決めの敬礼ポーズ。

「やばいぞう、曜ちゃん」

姿見の中の自分が、満面の笑みを浮かべている。

それが、想像を超えて気恥ずかしい。

そんな状態だったから、電話が着信を告げた時には、変な声が出てしまった。

「あ、曜ちゃん？ もう帰ってた？」

「ち——なんだ、千歌ちゃんか」

「ヨソローは？」

「えっと、今日はね、うん」

見られていないと分かっている、顔が赤らんでしまう曜である。「で、どうしたの？」

キャップを脱いで髪を整え、千歌に問う。

「部費、どうする？」

ああ、と曜は思い出す。スクールアイドルのライブに向けて衣装を作るのだが、予算の工面を考えていなかったのだ。

「親に頼んでみるよ。でも、いくらかかるか分からないし、ヨハネさんの連絡待ちかな。千歌ちゃんは？」

「小遣い、前借りしようかな、って思ってるんだけど」

「できるの？ まだ部活でもなんでもないので」

千歌の母であり、《十千万》の女将である高海枝海は、金銭面に関しては厳しい印象がある。千歌が「前借りお願いします」と言って上手くいったケースを、曜は知らない。

「やっぱり、明日待ちかな」

「だね」

同好会申請の最低人数である五人が揃い、千歌の詞に梨子の曲が付き、衣装も善子の手で形になりつつある今なら、生徒会長も無視はできないはずだ。

「梨子ちゃんの話、した？」

「私？ してないよ」

「ちよつとかけてみる」

そう言うと、千歌は梨子作曲の歌を口ずさみ始めた。コールを始めたようだ。

「出ないなあ」

「週末は忙しいって言ってたじゃん」

と、お腹が鳴った。時計をみると九時が近い。作り置きのお昼を探して台所に行くと――

「ん」

――食卓に広げっぱなし新聞に目がとまった。

カラー刷りの一面に印刷された、名前の通り輝く紫色のメタリックなスーツに。

『対怪人装備 仮面ライダー試作一号機「シャイニー」発表』……？』

「なんか言った？」

「理事長代理が着てた仮面ライダーって、シャイニーって名前だったっけ？」

「そうだよ」

では、このスーツを着て舞台に立っている人物は、あの小原鞠莉なのか？

シャイニーのデザインは、一見して梨子のブランキアとそっくりだ。顔の大部分を占める黄色の大きな複眼もそうだが、身体にフィットしたアンダースーツ上に配された装甲のバランスも近い。

だが、細部はまったく違うともいえる。大きな目を顎で繋げるU字型のパーツが口を成す様は、凶悪な顎門を思わせるブランキアのそれとは違うし、スポーツカーを思わせる流線的な装甲のニュアンスも、苔を凝縮したようなブランキアのそれとは違う。

しかしなにが違うといえば、顔のシンプルさだ。

曜は電話をスピーカーフォンに切り替えると、練習着のポケットから単語カードを取り出し、シャイニーの顔をぎっくり描いてみる。特徴的な目と構成パーツの少なさ、そして記号を組み合わせたデザインゆえに、なかなか描きやすい。

「これで理事長代理も、表立って戦ってくれるんだよね」

千歌が安心したように言った。

「戦えるのかな」

幼馴染みと違い、曜の口調は冷やややかだ。

記事を読むと、OGIグループの《静岡OGI》が開発しているラギダイズ技術——耐環境性能を電子機器に付与する技術——をベースに開発されたことが分かった。『ライダー』という名称も『Ruggedizer』が省略、子音強化したものだと言明している。

だがどう理由をこねくり回したとしても、印刷された写真は、毎年行われる『平成メタルヒーロー』の新番組発表会のそれだ。

OGIグループが併せて開設した特設サイトも電話でチェックするが、ニュース、仮面ライダー、フォーメア、とメニユーに並び、実写とCGモデルを合わせて各々が紹介される様は、毎週更新されていく特撮ヒーローのサイトを参考にしたとしか思えない。

そう考えれば、顔のシンプルスも、まるで「子供が描きやすいデザイン」を狙ったかのように思えてくる。

現実の怪人と戦う装備に与えられた、途絶えてしまったヒーローの名前に、現行のヒーローのフォーマツト。

滑稽だ。

状況の異常さに比べて、対応が軽すぎる。

付けっぱなしテレビに目を向ければ、御用学者もお笑い芸人もコメントーターも、哀悼の意と誹謗中傷を東京のスタジオから沼津に投げつけてくるが、実際の事件について語っているようにはみえない。電話から覗くSNSも同様だ。それは仕方がない。他人事なのだから。

だが、実際に怪人と戦う装備を開発している小原家までもが、その滑稽な記号を受け入れられるのはなぜ？

曜は今でも、自分から産まれた水死体の姿や、それと戦う梨子の姿を思い出すと、鳥肌が立つのに。

「やっぱり出ないや」

「だから、忙しいんだって。そっちも明日にしよ」

マイペースな千歌の発言に苦笑すると、曜の頭から怪人とライダーの話は消えていった。

「そうだね。じゃ、今日は寝ちやおうかな」

「もう？ まだ九時だよ？」

「だって、編曲は梨子ちゃんがしてくれるし、私、することないんだもん」

「それでいうと、私もすることないんだよね」

「お母さんにどうやって前借り切り出すか、考えないとなあ。あーあ」

「ほんとだよ。じゃ、おやすみ」

「うん、おやすみー」

電話の画面が終話を告げると、曜は息を漏らす。

千歌にはあんな風に言ったが、曜も部費を工面しなければならぬのだ。

「……よし」

曜は小さく唾を飲むと、台所をあとにして二階へ上がる。

薄暗い廊下を歩き、父の部屋を仕切るふすまをそつと叩く。

「お父さん、まだ起きてる？」

くぐもった父の声が聞こえて、曜は隙間に指を引っかけてふすまを開ける。

電気の消えた部屋で、背もたれの高い椅子が、紺碧の海を臨む窓に向かっている。

「お願いがあるんだけどさ、ポーンと一万円くらいくれない？」

景気よく言うと、父の笑い声が聞こえる。

「私ね、スクールアイドル始めるんだよ。知ってるでしょ？ スクールアイドル」

曜は両腕を広げて、下ろし立ての服を見せる。

「ほら、これ。練習着だよ。お父さんが名付けてくれた『みんなを照らす太陽』に、やっとなれるんだよ」

椅子の背もたれが、ゆっくりと回る。

「笑っちゃうよね。男の子向けのテレビ見て、男友達や千歌ちゃんと走り回ってた私が、アイドルなんてさ」

壁際にかかっている、紺色の制服が目に入る。

黒地に金四本の袖章は、船長の証。

「衣装はね、私がデザインしたんだ。制服以外でスカート履くなんて、初めてだよ」

積まれた雑誌の上の、大型フェリーの写真が目に入る。父が乗っていた、定期船の写真。

「それで、人気が出たらさ、船の上でライブなんてできたらいいよね。みんな呼んで、パーッとさ！」

壁に画鋲で刺された新聞記事が目に入る。

『さんどつぐ号、駿河湾で爆発炎上』

『生存者二名、乗員乗客五三名の安否は絶望的』

『五二人の死亡を確認』

『短時間に激しい腐乱、OGIグループの実験か』

「そしたら、そしたらさ……」

背もたれが曜と正対する。

身体を預けたシルエットが見える。

「そしたら……」

「曜」

曜の顔が笑顔のまま凍る。

あのシルエットの顔が。

水死体だったら？

「わ、私、走り込みに行ってくる！ 高飛込もあるし、スクールアイドルもあるし、忙しくなるぞう！ じゃ、渡辺曜、行って参ります！」
曜は一息に言って階段を駆け下り、練習着のまま玄関を飛び出した。

仮面ライダー？

メタルヒーロー？

自由と平和を護るヒーローなんて、現実にはいない。

いるなら、今すぐ私を殺しにくるはずだ。

私がもう一度、怪人を産み出してしまおう前に。

*

「はい、じゃあ続き。Dのアウトタクト——Bメロの頭から、千歌ちゃん」と曜ちゃんだけ」

梨子が手拍子で拍を取り始める。

「いち、に、さん、し、いち、に！」

『知らないことばかり、なにもか』——

「——ダメダメダメ！」

ぱんぱんぱん、と手が打ち合わされ、歌が中断する。

「曜ちゃんは走ってる。自分のテンポで歌わないで、周りとは拍を意識して」

「分かってるんだけどなあ」

「千歌ちゃんは最初の音が合っていないから、全部ズレちゃってるよ。最初の「し」はこの音」

梨子は電話の画面に表示されたピアノの鍵盤を叩いて音を出し、「しー、しー、知らないこと」と歌ってみせた。

「厳しいよう、梨子ちゃん……」

「私なんて、さっき初めて歌詞読んだのに」

高海千歌は泣きそうな顔で、譜面を眺めている。

隣の曜は、寝不足なのか、しよぼしよぼした目でオタマジヤクシを追っている。

「この曲は歌から始まるんだから、全員アカペラでも音をとれるようにならないと。最初の一音で音を外したら、それでももうライブは台無しなんだよ！ はい、もう一回同じところから！」

梨子の瞳の中には熱血の炎が灯っていて、千歌は普段との温度差に驚くしかない。

月曜日の早朝、三津海水浴場にいるのはスクールアイドル同好会（仮）の四人だ。

学校指定のジャージを着た千歌と、新調したというゆったりした練習着を着た曜は、音ノ木坂のジャージを着た梨子の前に並ばされていた。

「生徒会長に話しに行く前に合わせよう」と深夜にテキストを送ったのは千歌だが、身体作りやダンスの基礎練もするだろう、と思っていた。だから体育着にジャージを着てきたのだが。

いきなり歌の特訓を受ける羽目になるとは。

「まあまあ、クールにいこうよ、桜内さん。まだ初日なんだし」

割って入ったのは、トライウエア姿の果南だ。海水で髪を濡らした一つ上の幼馴染みは波打ち際に立ち、すくい上げた水を胸にかけて遊んでいる。

「松浦先輩！　こういうのは最初が肝心なんです！」

「ライブの予定だって決まってるのに、飛ばしすぎて壊れたら元も子もないよ。ダイヤにプレゼンする時は、最悪デモテープがあればいいんだからさ」

「そうだよそうだよ、と外野から野次を飛ばす千歌と曜に、梨子は鼻から息を漏らした。」

「そうですね……。じゃあ松浦先輩、最後にもう一度、お願いします」

「また？　しようがないなあ」

言いながら果南は、足元を波に洗われるままに、背筋を伸ばす。

『知らないことばかり、なにもかもが。それでも期待で、足が軽いよ』

手拍子で拍を取らなくても、果南の歌は音程リズムともに完璧だった。

「はい、これがお手本。ちゃんと練習してきてよ」

「お手本って言われると、なんか複雑だなあ。変な声でしょ、私」

「そんなことないです。オーボエみたいでエキゾチックな声だと思います」

「それ、褒めてる？」

「褒めてますよ！　軽快なのに、寂しそうで」

「褒めてないよね？」

千歌は意外な気持ちでいっぱいだった。ダイビング一辺倒の果南に、歌の資質があるとは思っていなかったからだ。

だが、そんな果南と語り合う梨子も、ピアノや作曲という音楽の資質と、怪人と真っ向から戦える格闘の資質を併せ持っている。

十数年一緒にいても、その人の真の資質など、見えないものかもしれない。

歌の練習が事実上終わり、千歌たちはウッドデッキに腰を下ろして

片付けを始めた。といっても、金曜日に梨子に配られた譜面をスクールバッグにしまうだけで、その後は、なんとなく、四人横並びに砂浜を眺める格好になる。

背後の発端状山から登ってくる朝日は、まだ顔を出していない。ぼんやりと桃色を帯びた空に雲は少なく、今日は半袖でもいい天気になりそうだ。

護岸コンクリートを背にして整備されたウッドデッキからは、波の穏やかな内浦湾の北側が一望できる。ウエットスーツで泳ぐにはまだまだ早い、夏には梨子と一緒に、この水で泳げるだろうか。

隣に座っている梨子を見る。

「どうしたの？」

新しい友達、照れたように笑った。

梨子がこの街をどう思っているのか、千歌は聞いたことがない。出て行った友達が多いが、やってきた友達は彼女が初めてなのだ。

もし梨子がこの街に、仮面ライダーとしての役割しか感じていなかったら？

「梨子ちゃん、道場とか行ってたの？」

気付いた時には、千歌はそう口にしていた。

「え？」

梨子にしては唐突でしかない話題だろうが、

「ああ、合気道と薙刀ね」

と、すぐに構えてみせた。千歌が好む上下の構えより両腕の幅が狭く、右腕で顔面を、左腕で胸を護るような構えだ。

「東京で護身用に習ってたの。お父さんが行けっとうるさくて」

「護身用？ あれが？」

曜が驚いたのは当然だが、空手経験者の千歌にも、あの合気道や薙刀術が護身レベルの動きには見えなかった。変身によるパワーアップしたのでなければ、謙遜だろう。

「なんでそんなこと知ってるの？」

三人を余所に、目をパチクリさせたのは果南だ。

「え？」

「合気道とか薙刀とか、なんで桜内さんがやってるって知ってるの？」
曜と梨子の口がパクリと開く。

「そうだ、梨子が仮面ライダーをやっていると知っていると知っている二年生組を除けば、梨子と武術を紐付ける文脈はなにもないのだ。」

「ああ、あの、前にね、私、投げられちゃったの！ そのの棧橋で、びたーん！ って！」

「そうそう、それが千歌ちゃんとの初対面だったんです！」

「合気道と薙刀？ それって——」

「——そうだ、流派ってあるの？ ほら、ちかっちの空手は傍流も傍流の《飾流》ってところなんだけど」

「強引としか言いようのない話のそらし方に、果南が目を細めるのが見えた。」

「我ながら隠し事が下手だな、と思いつつながら、千歌は誤魔化しネタを探す。そんな調子だったから、

「大きい括りだと、《園田流》かな」

「その——え？ 園田？ ええええ!?!」

「梨子が口にした名前に、素で大声を上げてしまった。」

「うん、μ sの園田海未さんの実家。道場なんだよ」

「そうなの?」

「これには果南も驚いたようだ。」

「海未さんは本来、剣道や弓道など、様々な武芸に秀でた方なんです。スクールアイドルを始めたのは、高坂穂乃果さんに誘われたからなんです」

「武道あがりアイドルをやるって、千歌だけじゃないんだ」

「はい、だから——そっか、海未さんも二足のわらじをはいていたんだ」

「梨子は途中から曜に顔を向けた。」

「海未さん、μ sの活動中に、弓道の全国選抜で優勝してるから」

「優勝お!?!」

「それぞれが好きなおことで頑張れるなら」

「千歌がそう眩くと、」

「新しい場所がゴールだね」

梨子は笑顔で頷いた。

「はー！ そんなこと言えるわけだよ。重みが違うなあ」

と、果南の電話が震えた。果南は電話を耳に当て、

「揚がった？ うん、今、三津」

と呟いた。

答えるように、内浦湾の先、駿河湾の海域で光が瞬いた。誰かが合図を送っているようだ。

「ちよつと行ってくるわ」

果南が立ち上がった。

「今から？」

「もう学校だよ!?!」

声を上げる曜と千歌に、果南は軽く首を傾げて見せた。

「また“お化け”が見付かったみたいでさ。みんなも来る？」

その言葉に、千歌は息を詰めた。

曜と梨子も固まっている。

「どうしたの？」

「あ、うん！ お化けならしようがないよね！ お化けじゃあなあ！」

「私あんまり興味ないかな！ 先行つてます！」

曜と梨子が棒読み気味に言うと、果南は若干の訝しみを顔に浮かべながらも、ロードバイクを手に短い階段を上がり、ヘルメットを被った。

「次の予定が決まったら教えて。じゃね」

そして手のひらを見せ、交通量の少ない道を走り去ってしまった。

「って、やっぱり、あれだよね……」

「OGIに連絡してみる。またフォーメアが出てきたら危ないし」

曜と梨子が言う横で、千歌は橙色に光るムーフォームを取り出す。

「果南ちゃんにも教えなくていいのかなあ、なんか悪いよ」

浦女に通う幼馴染み三人組の中で、仮面ライダーや怪人の正体を知らないのは、果南だけだ。

「ブランキアの正体は、あまり広めたくないから……」

果南とそれほど交流していない梨子が、そう言う気持ちは分かる。だが千歌は、スクールアイドルを結成するメンバーに秘密を抱えていることが、どうしても気がかりになってしまふのだ。

それを解消せずに、「仲良し幼馴染みグループ」などと名乗れるだろうか。

第五話：願いましよう、明日の奇跡を — 2

*

「千歌、お前、化粧したことあるか？」

一限が始まる一〇分前に教室に入ってきた信代が、机に突っ伏す千歌の肩を揺すって言った。

「ないけど、なんで？」

顔を上げた千歌の顔を、担任の女教師はまじまじと観察する。

「あとで教えてやる」

「いいよ、別に。笠木センセだってしてないじゃん」

「ダメだ、そんなにきび跡とほくろでライブに出るつもりか？」

「いいじゃん！」

千歌は腕枕の中に顔を埋めた。

「ナチュラルメイクくらい覚えておけて。μ sだってしてたんだから」

「してたの？」

「分からないってことは、してるってことだ」

そんな担任教師とクラスメイトのやりとりを尻目に、井藤むつはトランプに意識を戻す。

三人のババ抜きは、最終局面を迎えていた。

手持ちのカードは、曜が五枚、梨子が一枚、二人の席の間で窓枠に腰を下ろすむつが五枚。

とんとん拍子でカードを減らしてきた梨子に対し、曜は珍しく不調だ。

今日こそは勝てるかもしれない。

むつは、カチューシャで出したおでこを一度拭くと、

「曜、ほんとにやる気？ スクドル」

曜の気を逸らそうと話を振った。

「そのつもりだよ。曲も梨子ちゃんが準備してくれたし」

曜はむつのカードからハートの六を奪い、クローバーの六とセットで梨子の机に捨てた。

「でも、エントリーしなきゃいけないんですよ? 《ラブライブ!》。あと一箇月だっけ?」

むつは話を続ける。

「部活じゃなきゃ、エントリーも無理なんだよ。だから始めるとしても、冬までは地道に活動するしかないかな」

「そもそも曜ちゃんと千歌ちゃんは、もともとと練習が必要です」

梨子は曜の四枚のカードを順番に指差し、狙いを定めて一枚を引き抜くが、上がれず、溜め息をつく。

「厳しすぎるよ、梨子ちゃんは」

「てか、曜、そんな暇あるわけ? 高飛込だって一日中やってるのにさ」

むつはノーシンキングで梨子のカードを抜く。四枚を持つむつなら、どちらでも捨てられる可能性が高いと踏んでいた。

だが、ジョーカー。

舌打ちをすんで堪える。

梨子のさっきの溜め息は、「カードが合わずに上がれなかった」と思わせるブラフだったのか? とんだ策士だ。

梨子はババを手放して安心したか、曜に問いかける。

「そんなに忙しいの? 練習する日って決まってる?」

「土日は朝から夕方まで。平日は月水金の放課後から九時くらい。一応、調整は効くけどね」

「ほんと頑張るなあ。よく二足のわらじをはく気になるよ」

「オリンピックも卒業も、待っててくれないからね」

曜がむつのカードに手を伸ばし、むつは焦る。

なんとかジョーカーを掴ませたいところだが、策はない。

「そういえば今年のオリンピックって、飛込で私たちくらいの子が出るんだよね」

と、梨子の言葉で、曜の指がとまった。

(チャンス——いや、ヤバイ)

むつはおでこが汗ばむのを感じる。

「世界でその子しかできない技があるんだよね? 曜ちゃんの、えっ

と、必殺技みたいに」

曜の指先が、軽く握られる。

(その話題はダメだよ)

むつは小さく首を振ってみせるが、梨子は不思議そうな顔をしただけで、その意味に気付かない。

この街の人なら、曜が今年のオリンピックに出られなかった経緯を知っている。

梨子は誰からも聞いていないのか？ いや、曜と仲良くなりすぎて、逆に聞く機会がなかったのかもしれない。

「みんなすごいなあ、同じ年なのに、私なんかとは全然違って」

梨子の羨望の笑みは純粹で、曜は目を伏せると、小さく口を結んだ。

「ここでジョーカーを引かせるか？」

いや、こんな弱味に付け込むなんて、心苦しすぎる。

「そうなんだよ！ その子に負けちゃったから、今年はオリンピックには出らんなかったんだよ！」

だから、あつけらかんとした曜が笑顔でカードを一枚抜いていった時、なにがなくなったのか分からなかった。

「あ」

「中国の合宿で会ったんだけど、いい子だったよお。ちっちゃくてね」

「知り合いなの？ オリンピック選手と。やっぱりすごいなあ」

そして曜は、スペードの四とクロバーの四と一緒に捨てた。

「え、ちよつと、曜！」

「あと二枚ー！」

オリンピックの件で曜が動揺すると思って、自分が動揺してしまった。なにをやっているんだ。

というか、出場できなかった件、曜はもう受け入れていたのか。ちよつと意外だった。

「追い上げてきたね、曜ちゃん」

「負けないよおー！」

曜と梨子はカードを見せ合い、ジョーカーを含め四枚のカードを手にしたむつは額に汗を感じる。

これでは今回も曜に勝てない、それどころか、初戦の梨子にさえ負けてしまう。

流れを呼び戻さなくては。

(こくなつたら……)

ジョーカー
切り札を切るしかない。

「やっぱ強いなあ、曜。でも、これくらいじゃなきや、千歌の旦那さんは任せられないしなあ」

「だ、旦那さん？　旦那さん!？」

梨子が立ち上がり、狙い通り、とむつはほくそ笑む。

一度しか使えない手だが、この話は強力だ。聞けば、だいたいが面白がつて曜を弄り出す――

「曜ちゃん、もしかして、結婚するの!？」

――んだけど、ちよつとオーバーアクションすぎない？

「しないって！　ちよつと、むっちゃん!」

しかも想定外に曜まで慌てました。

「そっか、そうだったんだ。そっかあ……」

「なに!?!　なに納得してるの、梨子ちゃん!」

梨子は一枚のカードで顔を隠し、顔を赤らめた曜と、担任と話す千歌を見比べている。なんか嬉しそうだな。

「ううん、分かるよ、私、うん」

「分かんないでよ!」

梨子は無造作に曜のカードを抜いたが、情勢は動かない。

なんかよく分からない状況だが、むつの想定よりいい方に転がっている。

梨子だけを引きずり下ろそうと思っていたが、この際だ、曜にも勝ってやる!

「言ったんでしょ？　曜。『金メダル持って帰ったら結婚しよう!』って」

「小学生の時だよ!」

「それなら頑張るよね……!」

「梨子ちゃん!」

むつは顔が緩んでいる梨子からそつとカードを抜き、ハートのジャックとクローバーのジャックを捨てた。

手持ちは、スペードのエースとハートのキング、そしてジョーカーのみ。

流れがきた。

曜にジョーカーを奪わせれば、ワンチャンある。もう一押しだ。

「千歌だって、満更でもないんじゃない？ 最近生き生きしてるしさ」

「ま、まあ、そりゃ、スクールアイドルやりたかったらしいし」

「曜と一緒に、じゃない？」

曜は顔を上げて、むつを見た。

次いで、隣の席で信代と話す幼馴染みを横目で見る。

「曜だって、千歌となにかしたかったんでしょ」

それは、クラスメイトとよく話していたことだ。

曜がオリンピックを指して頑張り、千歌が机の上で潰れていた一年間を見てきたのだから。

「そう……なのかな」

曜の手が、気もそぞろなままこちらに伸びる。

むつはその指の先に、そつと、ジョーカーを差し向ける。

曜の指が、カードに触れた。

勝った。

むつの顔が綻び、

「ほらね」

不意に、曜がこちらを見た。

「え？」

抜かれたのは、スペードのエース。

「はい、上がりー！」

それはハートのエースと共に、梨子の机に叩き付けられた。

「え、ええー！ なんでよお！」

「そんなバレバレのジョーカー、誰が取ってあげますか」

梨子を見ると、安心したガツカリしたか、頬を膨らませてむつを睨んでいる。

そして、シャツフルすることも忘れたむつのカードから、サツとハートのキングを抜き去り、

「二番ー!」

クローバーのキングと合わせて上がってしまった。

「ウツソお……!」

まさかのビリ。

「小細工に走るからだよ!」

曜は満面の笑みでガッツポーズを取った。

「この勢いで同窓会結成!」

「成功させよう! スクールアイドル!」

曜と梨子は机越しにハイタッチを交わし、

「なにやっつてんだ、お前ら」

「むつちゃん、また負けたの?」

こちらに問うてくる担任と千歌に、むつに返答できる余裕などない。

*

窓の外に見える桜は、もうほとんどが雨で散ってしまった。

入学式の日にはあれだけ大勢の人の視線を集めていた花びらも、今は清掃業者が手にした送風機で、地面にこびりついたゴミとして処理されている。

咲いている様も、散りゆく様も、人は美しいと讃えてくれる。

だがその短い期間が終わり、地面に落ちれば、ただの汚れだ。

なら、それは、最初から存在しない方がいい?

ほんのりと赤みを帯びた葉桜でさえ、見上げてくれる人は少ないのに。

昼休みの生徒会室。

内山いつきは漠然とそんなことを考えながら、集まった五人の女の子に目を戻した。

「最低人数は満たした、ということですね」

長机に置かれた、スクールアイドル同好会新設に関する申請用紙に書かれた五人の名前を見て、生徒会長のダイヤは深い息を吐いた。

「はい！ 二年一組：高海千歌、渡辺曜、桜内梨子。三年一組：松浦果南。一年一組：津島善子の五人です！」

いつきは発起人の千歌の声を聞きながら、生徒会室に並んだ五人の顔を順に眺めた。

頭数は揃っている。

チラツと見えた申請用紙の顧問の欄には、水泳部顧問でもある笠木信代の名前が入っていた。同部所属の曜が頼んだのだろう。

「それと、これ！ 作り途中ですが、曲と衣装のデザインです！」

千歌はノートPCをダイヤに向けた。筐体のスピーカーからはシンセサイザーの演奏と、梨子の声と思われる曲が流れ、画面にはゲームのキャラクターのようなタッチの三面図が表示されている。

「どれもまだ未完成ですし、振り付けは手付かずです。でも、必ず形にしてライブをしたいと思ってます！」

それを見て、ダイヤは鼻から息を漏らした。

「認められませんわ」

空気がざわめく。

「いつきさん、申し訳ありませんが、席を外していただけますか？」

「は、はい……」

有無を言わさぬ口調に、いつきは慌ててパソコンをスリープすると、「失礼しました」と生徒会室の扉を閉める。

その向こうから、

「なんでですか！」

千歌が張り上げた声が聞こえてきた。

後ろ髪を引かれながらも、いつきは廊下を歩き出す。せめて穩便に終わってください、と祈りながら。

*

黒澤ダイヤはスクールバッグから三つしかボタンのない端末を取り出すと、一番上のボタンを押した。二度目の発信音で通話が繋がった。

「生徒会室に来てください」

一方的に言葉を送り、終話した。

そして千歌の顔に視線を戻す。

「あなた方がスクールアイドルを始めても、長続きするとは思えないからです」

千歌は驚きと怒りでだろう、犬のように歯をむき出す。

ダイヤはその顔を受け止める。切れ長の目がさらに鋭く見えるよう、尻削ぎのように切り揃えた前髪の下で。

「以上ですわ。わたくし、執務がありますので」

「納得できません」

申請用紙を却下のトレイに移そうとした時、誰かが言った。

「部活設立は、生徒会と職員会の会議で決めると聞いてます。生徒会長に、認めるかどうか振るいをかける権限なんてないはずですよ。私たちのしたいことに、口を出してほしくありません」

発言の主は曜だった。

「いいですわ。ではきちんとして理由を説明致しましょう」

ダイヤはパイプ椅子から立ち上がると、曜に目を向けた。

「渡辺曜さん、あなたは幼稚園から飛込競技の世界に入り、昨年度はJOCのジュニアオリンピックカップの春季水泳競技大会にて優勝しましたね。現在は強化指定選手として、週七日のうち五日間は四年後の東京オリンピック出場に向けた練習をしているはずですよ。……なにを驚いているのです？ 始業式で賞状とトロフィーを授与したのは、わたくしですわよ？ 次に——」

果南を見る。

「——松浦果南さん、あなたはご両親が亡くなって以降、祖父の経営するダイビングショップ《ファビュラス・ダイバー・ボーイズ》を切り盛りしていると聞いています。卒業後は閉店、東京の大学に進学することよ」

「そうなの!?!」

「まあね」

割り込んだ千歌に、果南は軽く答える。

「伝えていなかったのですか?」

「卒業後の話なんて部活には関係ないでしょ、ダイヤ」

「……そうですね。次に、津島ヨハネ——」

善子がピクリと反応し、こちらを見た。

「——もとい、津島善子さん。新入生のあなたに関しては、当然ですが生徒会にはデータがありません。ですが、あなたは《墮天使ヨハネの真夜中フラガラッハ》なる破廉恥な活動で、一定の評価を得ているそうですね。その一因に、先週我が不肖の妹にカメラを突き付けた挙げ句、わたくしの顔をもWebに晒した一件にあることは確かでしょうが、その私怨は不問と致しましょう」

もう一度、ダイヤは三人の顔を見回す。

「あなた方三人は、すでに自分たちの目標、希望、願いを持っています。にもかかわらず、新たに立ち上げた部活動に精を入れると言うのですか？ 私にはそうは思えません。それが理由の一つです」

「だとしても」

曜が抑えた声で言う。

「今、生徒会が却下していい理由にはなりません。生徒会と職員会は、原則三箇月以上の活動実績で判断するんですよ？ 特別扱いしてとは言いません、浦女生としての権利を使わせてほしいんです」

やはり反論したのは曜で、ダイヤは僅かに目を細める。

事前につきが用意した資料に目を通した時、自分の目標に最も近い曜が一番乗り気ではないだろう、とダイヤは予測していた。他から伝わってきた情報でも、先週は千歌の行動を鎮める立場だったはずだ。この短い間になにかあったのだろうか。

とはいえ。

「ではもう一つの理由ですわ」

ダイヤは、音ノ木坂女学院の制服を着た少女を注視した。

「桜内梨子さん、詳細は個人情報なので伏せますが、あなたは書類上は現在も音ノ木坂女学院の生徒であり、本校での扱いも不定期の体験入学生です」

「そうだったの!？」

「転校生だって!」

千歌と曜が声を上げ、

「お静かに！」

ダイヤが小さいが強い声で制する。

「本校は体験入学生を、学内活動に含みません。ゆえに、桜内さんは規定の五人の部員には含まれません」

ダイヤの言葉を、梨子は聞いていないようだった。ただ一人着ているブレザーの裾を握る手が震えている。

「父はそんなこと、一言も」

「笠木先生も事情は知っています。こんなことがなければ、私も明かすつもりはありませんでしたわ」

ダイヤはそう言って、千歌の顔を見る。

「そもそも高海さん、桜内さんがなぜこの街に引っ越してきたのか。その理由を存じておりますの？ それを知っていれば、スクールアイドル活動の要に桜内さんを置くなどと、考えないはずですが」

「なん、なの？ 梨子ちゃん」

梨子はダイヤと千歌の顔を見比べてから、小さく口を開いた。

「今年の最初に船の事故に遭って、ここには検査に来てるの。お父さんと一緒に。お母さんは東京で入院してるから、そう長くはいられなくて」

「それって、一月の？ 東京湾の、あのクルーズ事故？」

曜の問いに、梨子が頷く。

「そんな、話してくればよかったのに！」

千歌が梨子の手を握った。

「ごめんなさい、まさかこんな、足を引っ張るなんて思わなくて」

「ダイヤ、体験入学生だって部活に参加できるはずだよ」

口を挟んだのは果南だ。

「そんな細則はなかった。もしあったなら、二年前——」

「——追加したのですわ、わたくしが。生徒会長に就任して最初の仕事でしたのよ」

果南の目が見開かれた。信じられないものを見るかのよう。

「いつまでいるか分からない生徒を部活動に参加させる危険は、あなたも理解しているのではなくて？」

「ダイヤ、あんた……」

果南はみるみる赤くなつていく顔に不釣合いな、絞った声で呻いた。

「桜内さんには申し訳ないけれど、ね」

「ごめんね、千歌ちゃん、私のせいで」

と、果南の憤りや梨子の自己否定を遮るように、生徒会室の扉がノックされた。

「どうぞ」

ダイヤが声をかけると、おずおずと扉が開かれた、その向こうにいたのは。

「お、お姉ちゃん」

「失礼します」

ダイヤの妹であるルビィ、そしてその幼馴染みの花丸だった。

二人を前に、善子が顔を背けた。その動きが不自然すぎて、疑惑は確信に変わる。

「この衣装を着ている人物の描き方、わたくしはよく存じておりますわ。我が不肖の妹、ルビィの作風と同じですから」

「え？ だってこれ、ヨハネちゃんが土日で塗った、って」

千歌に見られ、善子は口をゆがめた。

「あはは、えっと、土日で塗ったのはほんとだけど、線画も一人とは一言も……」

「あ、あの、ルビィは手を動かしただけで、ルビィが考えたわけじゃ……」

「ウソでしょ、ヨハネさん。この前あんなにテキスト送ってきたの、ルビィちゃんがやってたの？」

「そうとも言出し、そうじゃないとも言……」

「てか、じゃあ梨子ちゃんは、なんでヨハネさんが裁縫できるなんて連れてきたの？」

「あ、あれは、その、理事長代理と色々々あつて……」

「鞠莉と？ それは聞き捨てならないよ、梨子さん」

喧々囂々が始まる。

「お分かりですか、高海さん」

この程度なのだ。

たとえ強い結束があっても、ほんの少しの亀裂で崩壊してしまうのに。

一週間かそこらで集まった彼女らに、学校を代表するスクールアイドルという大役が務まるわけがないではないか。

だがダイヤは、その感情を腹に沈み込ませた。

「曲を作り、演奏しているのは桜内さんですね。衣装設計と制作は実質ルビィになると言っていていいでしょう。スクールアイドルの三大要素、楽曲、衣装、ダンスのうち、楽曲と衣装を部外の間人が担当するのは、活動不能と同義です」

残されるのは、〃やりたい〃という気持ちだけ。

それで続くほど、スクールアイドルは甘くない。

「あなたはどうお考えですか、高海さん」

千歌は眉を寄せた顔をダイヤに戻し、口を開いた。

「もう一人集めればいいんですよね?」

その言葉で、全員がとまる。

「なん……ですって?」

「だから、梨子ちゃんは部員に数えられないから、六人揃えてくればいい、ってことですよね?」

「私を……入れてくれる、の?」

「梨子ちゃんがどんな立場だって関係ないよ、一緒にやるって決めたでしょ?」

梨子の顔に安堵が浮かぶが、曜はまだ眉間にしわを寄せている。

「でも千歌ちゃん、衣装は?」

「このままヨハネちゃんに任せていいじゃん。ルビィちゃんも手伝ってくれるんだったら、きつといいものができるよ!」

ルビィは姉の手前、自分より背の低い花丸の後ろに隠れてしまっている。それでも自分の名前が呼ばれたことで、そっと顔を出して千歌を見た。

「じゃ、生徒会長。私たち、また来ますから、その時——」

「——お待ちなさい」

思わず口走っていた。

背を向けかけた千歌と梨子が、再びダイヤに向き直る。

「なぜですか？ 高海さん。なぜ、そこまでして、スクールアイドルを始めたいのです？」

「始めたいから、ですけど」

あっけらかんとした返答に、ダイヤは長机を叩いた。

「そんな簡単に！」

制御していない声を出したと自覚する。

だが、とめられない。

「この学校では過去に二度、スクールアイドルが誕生しています。それらはどちらも、《ラブライブ！》に出場することもなく、短期間で消滅しました。それはちょうど先週、説明致しましたよね」

千歌が曖昧に頷く。

「スクールアイドルは学校の代表です、素人の遊びではないのです！それが二度も潰えた今、三度目の正直で立ち上がったあなた方が、最低限の資質を持った部員も集められないまま、『始めたいから』で始める!?! そんな志で、なにが出来るというのです！ もう一度言いませわ、甘ちゃんもいいところですよ！」

「なにが悪いの！」

千歌が叫んだ。ダイヤに負けない声量で。

「資質!?! そんなのないよ！ 私じゃ力不足だって、そんなの分かってるよ！ でも浦の星は、もう時機を逸したんでしょ!?! アイドルに相応しい人は、もういないんでしょ!?! なら……なら今度は私みたいな、なんにもない人がやる番じゃん！」

握り締めた拳が震えている。

「私が、戦わなきゃ……」

その手に梨子と曜が触れる。

「負けると分かっている？」

潤んだ目が、ダイヤを見据える。

先週の彼女とは違う。

戦う相手を見ている目だ。
負けるつもりがない目だ。

ダイヤは千歌から眼を逸らし、自分のスカーフがゆがんでいることに気付いた。

気を落ち着けるように、赤い梅花がワンポイントのタイピンを直す。

そして視線を、談判に来た下級生に戻した。

「浦の星女学院の廃校は、確定していますわ」

ダイヤが告げた言葉に、千歌の喉が上下した。

第五話：願いましよう、明日の奇跡を — 3

B

黒澤ダイヤは、持って産まれた人間だった。

父の琳太郎は、『最初に手を挙げなさい』と教えた。

母の瑠璃は、『あなたが前に立ちなさい』と教えた。

その教えに従い、ダイヤは小学校の学級委員になった。中学校の生徒会長になった時も、浦の星女学院で入学年度に生徒会長を求められていると感じた時も、迷うことはなかった。高校生にもなれば、学校の枠組みの中で『黒澤ダイヤ』を否定するものなど、存在しなかったからだ。

その過程でダイヤは、この世界には資質を持つ人間と持たない人間がいることを知った。持たない人間は率いられるのを待っており、持つ人間は彼らを率いて、別の持つ人間と戦い、そして勝たねばならない、と理解した。

それが、江戸時代より続いてきた、『黒澤宗家』としての生き方。

自分に敷かれたレールであり、演じるべき役割であり、かぶるべき『仮面』。ルビイの幼馴染みは『ノブレス・オブリージユ』と表現したが、どれも同じことだ。

だからダイヤには、千歌の行動が理解できなかった。

資質の持たない人間が、それを要する立場に手を挙げるなど。

涙を流してまで、目標、希望、願い——夢を欲することなど。

ダイヤの人生にはなかったからだ。

「黒澤家と小原家が共同で進めている、西浦地区、内浦地区の予防型高台移転の要害の一つとして、小原家はここ、長井崎岬を選びました。本校を創立した黒澤家としては、校舎の移転もしくは学校の存続だけはと考えていましたが、先日の怪人の出現による内浦の安全保障問題に、OGIグループが開発した仮面ライダーなる装置の登場、この五年間で人口の七〇パーセントを失った内浦の現状もあり、沼津市も小原家も移転予算の拠出を断念しました。黒澤家も従うしかありません。最終目標はあくまで、内浦湾一帯の災害対策計画都市としての再

開発であり、本校の存続ではないからです」

「そんな、じゃあお姉ちゃん」

「昨日の理事会で内定致しましたわ。二年後の創立一三〇周年、つまり現一年生の卒業を持って、私立浦の星女学院高校は廃校となります」

ルビィと花丸が高い声を上げた。

「人口流出の直接的な原因は、五年前の《さんどつぐ号》沈没事故と言っていていいでしょう。あの事故で亡くなった五二名の四分の三は、ここ内浦地区に住む水手かこでした。以前から少子高齢化が進んでいた街を、それでも支えていた大黒柱の多くが、一斉に失われてしまったのです。それは渡辺さんもご存じでしょう」

曜が顔を背けた。この街の人間で生き残ったのは、該当船舶で船長を務めた渡辺操だけだった。

「お分かりですか、高海さん。あなたが廃校に抗うなら、戦う相手は小原家であり、この街の経済的な事情ですわ。だからわたくしは——」

高笑いが響いた。

「神の身でありながら、神に見放されし黒澤家。その長女、《金剛石の帳》を持つと言われる黒澤ダイヤ——」

「——どなたですか?」

芝居めいた低い声色で喋っているのが誰か、ダイヤは分からない。「ガツカリだわ。こんな普通の人だったなんて」

千歌の背後から現れたのは、一年生の善子だった。彼女が場の主導権を握ったと理解するのに手間取ったのは、その声色が今までとまったく違ったからだだった。

「……発言の意図が分かりかねますが。黒澤家への侮辱は許しませんわよ」

「侮辱? 侮辱ですって?」

ダイヤの視線をもとめせず、善子は二学年上の先輩を見据えて言う。

「網元制度崩壊も幾度とない大火も沼津大空襲も財閥解体も、不屈の精神で乗り越えてきた黒澤家の宗家の長女が、こう言っている?」

『黒澤家は小原家に負けました。ギブアップです。だからあなたたちも諦めなさい』。はあ？ 黒澤家を侮辱してるのは、あんたじゃなくて？』

「勝ち負けの問題ではありません。先ほども言いましたが、最終目標は——」

「——胴元はいいわよね。好き勝手にルールをいじくれるんだから」「あなたになにが分かるのです！ 責を負う資質もないあなたに！」

声を荒げるが、善子は鼻で笑った。

「よく知ってるじゃない。だから私たちは墮天したのよ。あんたたちの世界からね」

不遜な物言いに、ダイヤは眉をひそめる。

自分とよく似た、尼削ぎロングの少女に。

「ぶつちやけ、こんな学校なくなっちゃえばいい、って思ってた。なんでも、あんたの腑抜けたツラ見てたら気が変わったわ」

善子はつかつかとダイヤに歩み寄る。

「神々の対立なんて知ったこっちゃないのよ、愚民にはね。でも、あんたら勝手な理屈で、私たちの夢を踏みにじろうって言うなら！」

そして長机を叩いた。さきほどのダイヤのように。

「墮天使の、この私が黙ってないわ」

善子は怒っていた。ダイヤはそれは理解した。

だがその怒りがどこからくるのかは、理解できなかった。この場の誰もそうらしかった。

「お、お姉ちゃん」

ルビィがおずおずと口を開いた。

「ルビィ、善子ちゃんを手伝いたいよ。黒澤家としてじゃなくて、ルビィとして」

「ヨハネよ」

善子が呟いた。

「私はヨハネ。私たちを追放した神に、刃向かう墮天使よ。間違わないで、ルビィ」

「う、うん。ヨハネちゃん」

善子は唇を微かに斜めにした。

「黒澤家が諦めるって言うなら、勝手にすればいいわ。でも私たちがスクールアイドルは、『コンティニュー』は三回まで』なんて甘ったれたことは言わない！ 『何度でも諦めずに、探すことが僕らの挑戦』！ そうよね、千歌！」

突然話を振られたものの、千歌は振り向いた善子の目を見て大きく頷いた。

「ヨハネちゃん……。ヨハネちゃん！ そうだよ、私も同じ気持ちだよ！」

千歌は善子の手を握った。

「まったくもう、そんなこと言われたら、追求する気も失せるよ」

曜は梨子を一瞥してから呟いた。

「ごめんね、曜ちゃん。津島さんは私がちゃんと教育するから」

「ちよつと、教育されることなんてないわよ、リリー！」

「リリーはやめてっば」

梨子と善子が言い合う横で、果南が口を開く。

「どうするつもり？ ダイヤ」

「あなたの問題だと、言っただけですわ」

「あなたは、どうするのよ」

「わたくしは——」

——と、生徒会室に扉が開け放たれた。

「Hi！」

外人のような発音に、視線が集中する。果南以外の七人の。

「理事長！」

「ダ・イ・リ。そろそろ覚えてよね」

曜の発言を訂正した鞠莉は、千歌たちの間をすり抜けて長机の前までやってきた。

ダイヤの前に並んだ七人を順に見て、鞠莉は困った顔をダイヤに向ける。

「なーに？ また、か弱い生徒たちを苛めてるの？」

そこでスクールアイドル部の設立申請書に目を落とし、そこに梨子の名前を見付けたようで、「なるほどねエ」と呟いた。

「いいわ、じゃあ私が五人目になってあげる!」

そう言つて鞠莉は、どこからか出したボールペンで署名しようとした。

「なんのつもりですか?」

ダイヤはその手首を掴む。

「なにつて、リリーの身の保証を私がする、つて言つてるの!」

「あなたは小原家の人間でしょう」

「それ以前に、浦女の理事長代理よ。生徒に充実した学校生活を送つてほしいと思うのは、当然じゃなくて? その対象がたとえば、School Idol Idoolであつても」

ダイヤは鞠莉の顔を観察する。

黒澤家は先週、小原家の妙な動きを観測していた。それも、この輪に脈絡なく加わっている善子の自宅で。先ほどの言動で善子の心情の一端は掴んだが、鞠莉に警戒しないわけにもいかない。

だが鞠莉は、ダイヤの思考など意に介さない。

『二人の囚人が鉄格子の窓から外を眺めたとき。一人は泥を見た。一人は星を見た』

視界の隅で果南が目を見開いた。ダイヤもそうだっただろう。

「アナタはこの子たちに、星を見せてあげたくないの? それが届かないとしても」

ダイヤの手が緩んだ。

鞠莉はダイヤの目を覗き込んだまま、ゆつくりと手を引き抜く。

そして用紙に六人目の名前を書き込んだ。

「さ、これでアナタたちは、晴れてSchool Idol 同好会を名乗れます! Congratulations!」

当の千歌たち五人は、お互いを見合つてから、ダイヤを困惑げに見た。

長い睫の下の鋭い目を、一度伏せる。

「同好会の設立は認めますわ」

ダイヤの言葉に、千歌と曜が息を呑んだ。

「ただし！ 現時点から部外の人間の力で成果物を作ることは禁止します」

その意味が染み渡った数秒ののち、ルビィが甲高い声を上げた。

「じゃ、じゃあルビィ！ ヨハネちゃんの手伝いしちやダメなの!?!」

「成果物を作ってはいけない、と言っているのです。教え導く分には構いません」

「そっか、よかったあ！」

喜ぶ妹を横目に、ダイヤは千歌に目を戻す。

「同好会員五人の力で、一箇月以内——そうですわね、中間考査前の部活休みが始まる前日——五月一五日までに、スクールアイドルとしての活動報告をすること。それができるなら、生徒会として、部としての活動の是を職員会に提言致しますわ」

「部、として？ 提言？」

「二度は言わせないくださいませ」

その小さな言葉は、忙しく生徒会室を飛び出していく少女たちの耳には入らなかったようだった。

*

「どうなるかと思ったけど、これで安心だよ！」

「まだだよ、曲も衣装も私たちで作らないといけないんだから！」

「とりあえずできて音源は、帰ってからメールで送るね」

「あ、でも私、今日は水泳だからダメだ」

「じゃあソフトの使い方は明日教えるよ。私も今日、用事あるし」

「ええー!? 一箇月しかないのに、二人とも悠長すぎるよう！」

「しょうがないじゃん、足は二本しかないんだから」

小走りに歩きながら話し合う二年生を、松浦果南は後ろから黙って追いかける。

「三箇月以上活動しなくていいのは嬉しいけど、一箇月は短すぎるなあ」

「一箇月もないよ、今日は一八日なんだから」

「そうだよ、生徒会長のイジワルー！」

「……ちよつと待って、報告期限って、五月一五日って言った？」

曜が単語カードの「5/15」を見ながら立ち止まり、つられて二年生も果南も立ち止まる。

「ラブライブ！のエントリー、一六日が最終日だよ！」

「え？」

曜の発言について行けない梨子を前に、千歌の顔が驚きから笑顔に変わった。

「エントリーに間に合うんだよ梨子ちゃん！ 生徒会長イジワルじゃない！」

「ぼやぼやしてられないよ、千歌ちゃん。今日のうちに編曲を考えて、明日からすぐ動けるようにしよう！」

「分かった！ うわあ、ラブライブ！に出られる！」

「ねえ、希望が見えたところに悪いんだけどさ」

はしゃぐ二年生に、果南が声をかける。

「振り付けは？ 手付かずなんだよね？」

その言葉に、二年生三人が顔を見合わせた。

「完全に忘れてた」

「どうしよう、曜ちゃん！ もう誰にもお願いできないのに！」

「取り敢えず私やることないし、今夜ちよつと考えてみる！」

「ほんと!? じゃあ、参考になりそうな動画送るよ！」

千歌と曜は、バタバタと廊下を教室の方へと走っていく。

梨子が二人を追おうとして、

「待って、桜内さん」

果南が呼び止めた。

「今日、用事があるの？」

「はい、ちよつと——」

「——OGI関係の？」

梨子は目を見開き、頷いた。

頷いてしまったようだった。

「ちよつとよかった、伝言があるんだ」

果南はポケットに手を入れ、それを取り出した。

「伝言って、誰に——」

——梨子が絶句する。

淡く光る、無色の球体。

「……ほんとに、ムーフオームを」

「そんな名前なんだ、この『お化け』」

梨子は手で口を押さえた。

迂闊な子たちだ、と果南は思う。

「もう一つ、伝言」

と人差し指を立てる。

「私がスクールアイドルに参加する二つ目の条件、千歌たちに伝えてくれる?」

果南はチラリと後ろを、生徒会室の方を振り返り、口を開いた。

「小原鞠莉が参加していないこと」

「え? ……え!? それって——」

「——名前は使っていないから。じゃあね」

梨子の言葉を待たず、果南は階段を降りていく。

手の中で、球体が微細な振動を発する。

持続する高音。

廊下の窓ガラスに映った果南に、果南が気付く。

その果南が、果南の意図と無関係に唇を吊り上げた。

「戦え」

誰が言ったのか。

視線を戻し、果南は廊下を進む。

肩にかかったポニーテールを背中に戻して。

小原家が諦めても、黒澤家が諦めても、果南には関係ない。

ダイヤの言う通り。

これは私の問題なのだから。

*

生徒会室を出た小原鞠莉は、不意に袖を掴まれた。

「What's the matter?」

思わず英語で問うてしまった鞠莉に、

「聞きたいことがあります」

クリーム色のカーディガンを着た花丸は、自然に言葉を続けた。

「ラングブリッジさんのこと、知ってるんですか？」

「え？」

「ラングブリッジさんは言いました。『二人の囚人が鉄格子の窓から外を眺めたとき。一人は泥を見た。一人は星を見た』って」

「知ってるのオ!？」

花丸が口にしたのは、先ほど鞠莉が言った言葉だ。いや、千歌にも、ダイヤにも、果南にも、様々な人に道を問う際、使っている言葉だった。

「はい、子供の頃、お祖父ちゃんが枕元で読んだ『カーネギー名言集』で知りました。フレデリック・ラングブリッジさんの詩の一節と言われているんです」

「そうそう、そんな名前の人だったわよね。いやア、私の『不滅の詩』に反応した人、始めてよオ」

『ふめつのうた』!? なんずら!? それが題名ずら!？」

花丸は、今度は大声を上げて袖にすがりついてきた。

「W, W, What?」

「オラもお祖父ちゃんも題名までは知らないずら! 原本を探してるけど全然見つからないずら! どこにあつたずら!」

「え、いや、それは、その、えっと——」

ずらずら連発する花丸に鞠莉は出典を告げようとした時、生徒会室のドアが開いた。

「花丸さん、鞠莉さん。廊下では静かにお話してください」

「ご、ごめんなさい!」

鞠莉の服を離して頭を下げる花丸。

「いいじゃないのオ。女子高生なんて、姦しいくらいがちようどいいのよ」

「ではせめて、三人寄った時だけにしてください」

ダイヤは自分の城に鍵をかけると、二人に先んじて教室へと歩き出しました。

鞠莉は花丸にウインクし、生徒会長の後ろについていく。

「さつきのヤツ、私も詳しくは知らないのよ、ごめんね」

「いえ、手がかりが増えました。『うた』の漢字はなんですか?」

「『詩』よ。Lyricの『詞』じゃなくて、Poemの『詩』ね」

「ありがとうございます、早速お祖父ちゃんに報告します」

花丸がにつこり笑って、鞠莉は息を吐いた。

ずっと前から使っている格言が、まさか愛読している少年漫画からの引用だなんて、特にダイヤの近くでは格好悪くて言えない。

「生徒会長」

と、花丸は歩調を速めると、ダイヤの横に並んだ。

「はい?」

「ルビイさんのこと、怒らないであげてほしいです」

「……はい?」

「ルビイさんが部活禁止なのは知ってます。でも、ルビイさんはずっと前から、アイドルの衣装を作りたかったんです。その『輝き』が——資質があるんです。だから——」

「——^{シャイニング}輝き。キューブリックですか?」

割り込んだダイヤの言葉に、花丸は一度目を瞬かせた。

「ダイヤったら、THE BEATLESに決まってるじゃない!

私たちは輝き続けるのよ! 月のように、星のように、太陽のように!」

「ステイヴン・キングさんです」

花丸の言葉に、ダイヤは唇を微かに斜めにした。

「ルビイのことは、もちろん存じておりますわ、国木田さん」

ダイヤは管理棟と教室棟の中間で立ち止まると、階段を見据えて言う。
「スクールアイドルになりたいと言い出さなければ、わたくしはそれでよいのです」

「そう……ですか。分かりました」

花丸は頭を下げ、階段を登っていく。

「ねえ、ダイヤ。あの子、なんで来てたの?」

鞠莉は、花丸とはチャペルで会っているし、聖歌隊に入隊したのも知っている。ルビィと一緒にエンジェル・フォーメアに襲われた女生徒だということも、もちろん把握済みだ。

だがスクールアイドル活動の文脈では、先ほど生徒会室に集まった九人の中で、彼女だけが埒外なのだ。

「ルビィの幼馴染みですわ。妙法寺のご息女よ」

答えになっていない、と言おうとして、鞠莉は眉を寄せる。

「毘沙門の？ 戦えるの？ あの子が」

ダイヤは振り返り、鞠莉を見た。

「鞠莉さん、わたくしたちと一緒に授業を受けるつもりですか？」
階段を降りれば、三年生の教室だ。

鞠莉はいたずらっぽく笑うと、手を振った。

ダイヤは微かに目を伏せると、会釈し、階段を降りていく。

鞠莉は踵を返し、理事長室に向かう。

「私たちの星は、まだ動き出さなみたいね」

であれば、今の自分は、誰の関係にもコミットできない。

*

「ここが部室？ 意外と狭いのね」

ガラス張りのサッシ戸が軋みを立てて開き、善子がカメラを構えて入ってきた。

「これでも他の部室より全然広いらしいよ」

梨子が言うと、善子は鼻で笑う。

「我が翼の翼開長には劣るわね」

「よくかいちよう、ってなに？」

「怪鳥がルビィを食べられるかどうかの指標よ！」

「ピギィ！」

善子の後ろから入ってきたのは、衣装デザインを手伝ってくれたという、生徒会長の妹だ。

「あ、来てくれたんだ、ルビィちゃん」

「あ、は、はい、お邪魔します！ ……あ、あれ？ 閉まんない」

ルビィは頭を下げながらサッシ戸を閉めようとするが、砂を噛んで

いるのか歪んでいるのか、苦戦している。

「なにしてんのよ、ルビィ」

「だ、だってえ」

「あれ、ほんとだ。なによ、立て付けが悪いんじゃないの？ この学校」

高海千歌は折り畳みの長机を雑巾で拭きながら、後輩たちを笑って見ている。

ここは正式に設立を許可された《浦の星女学院スクールアイドル同好会》の部室として割り当てられた、体育館に併設された第二教官室だ。

教官室は教室の半分くらいの広さで、梨子が言った通り、部室棟の標準的な部室の三倍は広い。その代わり、部屋の東側の壁際には背の高い無骨なキャビネットが並び、必要なのか不要なのか分からないキングファイルたちが無駄な存在感を放っているし、南側は体育館に、北側は中庭に、ガラスのサッシ戸で直接繋がっている。

「ここ、ほんとに使っていいの？」

「理事長代理がくれたんだよ、こここの鍵」

千歌が長机を二脚並べる横を、善子が通りすぎて、窓ガラスに近づく。その先の体育館からは、ネットで区切って活動を始めたバスケットとバレー部の声や体育館履きの音が聞こえてきた。窓ガラスを護る鉄格子にボールがぶつかり、戸と格闘しているルビィが肩を揺らして驚いた。

「しばらく空き部屋だったからな」

そう言ったのは、ルビィに代わって無理矢理戸を閉めた信代だ。

「お待たえヨーソロー！」

曜も一緒だ。

「あれ、水泳は？ 今日、練習の日だよな？」

「明日にずらした。まず一発、認識合わせをした方がいいと思ってな」
信代が言った。

「果南ちゃんは？」

「繋がらない。理事長代理がいたらやらないって、本気みたいだよ」

「名前貸してくれただけなんだし、いいじゃん、手伝ってくれたってさあ」

千歌と曜のやりとりに、伝言を持ってきた梨子はなにか言いたそうな顔をしたが、なにも言わなかった。

「まあ、しょうがないわな……」

信代は呟くと、部員がパイプ椅子を手に長机についていくのを横目に、キャビネットに寄せて立ててあった移動式の黒板を引っ張ってきた。そして、千歌、曜、梨子、善子、ルビイの五人と、善子が回しているカメラの前に、自分を指差す。

「二応紹介しとくか。スクールアイドル同好会の顧問になった、笠木信代だ。二年一組担任、こんなナリだが女で国語教師だ、よろしくな」ルビイが「ピ!？」と短く声を上げた。

当然だ、短い髪に恰幅のいい身体、青いジャージの上下に底の磨り減ったゴムのサンダル履きと、体育館とこの教官室が似合う男性体育教師にしか見えないだろう。

そんなリアクションは慣れていると言いたげに、信代は白いギプスに乗せた折れた鼻を鳴らして、薄汚れた黒板をざっと黒板消しで拭くと、チョークを走らせる。

「つつても、最近のアイドルには詳しくないし、助けてやれそうなどころもない。メインは水泳部だしな。基本は『扱いやすい学校側との接点』程度の認識でいてくれ」

「構いませんー!」

千歌が言い、曜と梨子も頷いている。

その間に、ざっくりしたカレンダーが、黒板に描かれた。

「第七回『ラブライブ!』のエントリーが、五月九日の月曜から翌週月曜の一六日まで。それまでにお前らは、生徒会に部活動の実績を報告しなきゃならん。具体的には、ライブだな」

ポイントとなる箱に日付と色が添えられる。ガタガタと揺れる黒板から、何年前に積もったのか不明なチョークの粉が舞い、千歌は身体を逸らす。

「でだ、お前らの動きは、実は職員会議でも話題になってる」

「ほんとですか?」

曜が頬を持ち上げて言った。

「感触はよくないぞ。ウチのスクールアイドルが一回失敗してるのは知ってるからな、『生徒を入れてライブをやった』程度じゃ実績と思わない。校外からちゃんと客を入れて、その前でパフォーマンスをやって、満足させる。そこまでやらなきゃ、職員会議は認めないだろうな」
「校外から、って、具体的にはどれくらい要るの?」

タメ口で問うたのは善子だ。

「体育館いっぱい、と言いたいところだが、まあ、三分、四分入りだろ」
「五〇人くらい?」

「文化祭で並べるパイプ椅子が八〇〇脚くらいだから、二四〇〜三二〇人か?」

「そんなの無理です!」

ルビイが立ち上がって叫んだ。

「この前お姉ちゃんが言っていました、今の内浦は、世帯数が一二〇ちよつと、世帯人員も一七〇人くらいしかないって!」

「え、そんなしかないの?」

「だいぶ減っちゃってるとは思ってたけど、みたいだね」

口をゆがませた善子が、曜と小声で話している。

千歌もその数字に驚いていた。日に日に空き家の増加は感じていたが、そこまで衰退しているとは思っていなかった。
でも。

「無理でもやるよ。廃校を覆すなら、体育館をいっぱいしたって足りないくらいだもん」

千歌が落ち着いた声で言うと、信代も頷いた。

「まあ客入り云々の前に、曲と衣装をなんとかしなきゃな。結局、動ける面子は高海、渡辺、津島の三人しかないんだろ?」

鞠莉と果南が参加しない現状、そうなってしまっている。

「そうよ。だから動き出さなきゃいけないの。堕天使たるヨハネに、《ホーラ》は微笑んでくれないのだから——」

「お話終わったんだったら、ルビイたち、もういいです? ルビイ、門

限が厳しくて」

「ああ、じゃあ衣装は任せるぞ」

「はい！・ 行こ、ヨハネちゃん！」

「ちよつと、私の話聞いてた？」

ルビイと善子は、サツシ戸をガタガタ言わせて退室した。

「あの、私も、今日はちよつと用事があるんです」

と、電話を見た梨子が立ち上がる。

「その、検査ってヤツ？」

曜が慎重に問うと、「そうじゃないんだけど」と梨子は曖昧に答え、帰り支度を始めた。

「高海、お前、作曲できるのか？」

「やってみないと分かんないけど——」

と、千歌は頭の上で電球が光るのを感じて立ち上がった。

「——梨子ちゃんのピアノ、聞きたい！」

「私の？」

梨子が意外そうな目をこちらに向けてくる。

「そうだよ！ 梨子ちゃんのピアノを聞いてれば、いいフレーズが思い浮かぶんじゃないかな、って！ もう音楽系の部活ないから、音楽室借りられるし！」

「いいじゃん、梨子ちゃんの生演奏！ 私も、歌の練習、やる気出るかもー！」

曜も乗ってきて、

「ごめんなさい、今は、ピアノは弾きたくないの」

だが梨子は首を振った。

はつきりとした否定だった。

「それじゃ、失礼します」

そして梨子も部室を去る。

「無茶言うな。桜内だって万全じゃないんだ」

「あちゃあ、そりゃそうだよね……」

曜は頭をかき、千歌は頬を叩くと、勢いよく鼻を鳴らした。

「分かった、とにかく、私が一曲作る！」

千歌は電話を出すと、作曲アプリを検索し始めた。

「先は長そうだな……」

「ですね……」

第五話：願いましよう、明日の奇跡を — 4 (完)

*

型紙がラフに描かれたスケッチブックが居間のガラステーブルに置かれ、円形の絨毯に直接腰を下ろした部屋着姿の津島善子は、制服のままのルビイとともにそれを見ている。その周りにはルビイのボディガードである四人の黒服の男が立ち、長押しに並ぶ一二枚の能面と共に、二人の挙動を見張っている。

「さすがにカオスね。これだけ顔が集まると」

「カオスなのは、能面だけだと思うけどなあ」

ルビイの指摘を否定できず、善子は笑う。

二人は黒沢家のリムジンで、学校から直接、津島家宅にやってきた。時間は午後四時を回り、ルビイの門限まで二時間ほどしかないが、一箇月というリミットが設定された以上はやれるだけやるしかない。

「まずこんな感じで、服を設計図にするんだよ」

ルビイが指差すスケッチブックの画用紙には、ワンピースを来た女性と、そのワンピースが段階を踏んでバラバラになっていく絵が並んでいる。リムジンに乗っている間にさらさらと描いていたものだ。

「やっぱ難しそうだなあ」

「難しいよ。平面の布から立体の服を作るんだから。想像力勝負！」

「妄想力ならあるんだけど」

善子が手で顔を覆うポーズをした。もちろん意味はない。

「でね、これが——」

ルビイはスケッチブックの別のページから、折り畳んだ薄い紙を取り出した。

「——型紙ね」

「ルビイ様！ それはダイヤ様が禁じて——」

「——衣装のじゃないよ！ この服の！ サイズもちっちゃいでしょ！？」

ルビイが反論すると、黒服は引き下がった。

手伝いをしていないかを監視するためとはいえ、お互いやりにくい

そうだ。

「あんた、黒服相手だと普通に喋れるのね。男なのに」

善子が問うと、ルビイは首を傾げた。

「うーん、男の人っていうか、《黒服》、だからかなあ」

「それはひどい」

だが当人たるクルーカットに厳つい顔立ちの男たちは、眉一つ動かさない。似たような身長に似たような髪型の、画一的なキャラクター。その人間味のなさがルビイには安心なのだろうが、善子には逆に不気味に見える。

「で、どうやって想像すればいいのよ」

「うーん、ルビイはぬいぐるみとか小物みたいな単純な形から入ったし、型紙本は読んでたから、すぐピンとくるんだ。でもヨハネちゃんはそのなことしてる余裕、ないもんね」

なら、とルビイは、黒服に持ってこさせた紙袋をガラステーブルの脇から差し出した。

「なによこれ」

「ルビイが買ったスクドル衣装本！　ここから衣装に似てる服を探して、型紙をパクるの！」

「ええ……」

善子は渋い顔で本の束を眺めていたが、結局は一冊のムック本を抜き出す。

「オリジナルの衣装なら、オリジナルの型紙じゃないといけないんじゃない？」

「その衣装だって、μ sの衣装のリファレンスだよ」

「そうなの？」

「たぶん」

善子は自分でクリンナップした衣装を眺める。善子も人並みにμ sの楽曲は知^{叩いて}っているが、映像となると詳しくない。

「それに、前にマルちゃんと言ってたよ、『巨人が肩の上に乗っていると遠くが見える』とかなんとか」

「あー、誰だっけ、それ言ったの。ニュートンとかだっけ？」

「ヨーロッパの人だった気がするけど、ニュートンさんってヨーロッパ人？」

「アメリカじゃない？」

「って、肩にちっちゃい巨人乗せてんのかい！」

「どしたの？」

「なんでも」

無駄口を叩きながら、善子は本をペラペラめくり、プリントアウトした衣装と照らし合わせ始める。

「袖って、細長い布をクルツと丸めて作るんだ、そつか、そりやそうだよね。……でも今回はノースリーブだから関係ないか。胴の作り方、胴、胴……」

「身頃だよ」

「え？ 桜？」

「胴の部分は『身頃』って言うの。前身頃と後ろ身頃」

「あ、じゃあこれが胴か。へえ……」

「分かんない単語があつたら言つてね、ヨハネちゃん。専門用語を覚えておけば、調べる時とか便利だから」

「りよーかい」

善子はブーツブーツと音読しながら、ノートに単語を書き出していく。

「身頃はジャケットみたいなのでいいのかな。襟……衿？ はワイシャツっぽいけど」

そんな様子に満足したか、ルビイはソファに腰掛け、スケッチブックを抱えてなにかを描き始めた。自分で作る小物かなにかだろう。

「そうだ、一応聞いておきたいんだけど」

と、ルビイが顔を上げて言った。

「なに？ 締め切り？ 予算？」

「ヨハネちゃんの本名って、善子ちゃんでもいいんだよね？」

善子はポカンと口を開け、次いで、思わず笑い出してしまった。

『ヨハネ』という領域について、こんなにも真剣なトーンで問うた人は、初めてだったからだ。

「な、なによう」

ルビイは頬を膨らませたが、笑っていた。

「ああ、いや、うん、そうよ。津島善子。それが現世うつしよにおけるヨハネの真名まな——よろしくね、ルビイ」

今さらな自己紹介に、「うん！」とルビイは満面の笑みで頷いた。

「私は黒澤ルビイです！ 初めまして、善子ちゃん！ これからよろしくね、善子ちゃん！」

「ちよ、ちよっと、真名なんだから、気安く呼ばないの！ ヨハネでいいのよ！」

気恥ずかしくなつてしまい、善子は本に意識を戻した。

ルビイはスケッチブックで口を隠して、まだクスクスしている。

「もう、なにがそんなにおかしいのよ」

そういう善子自身も、さっきの大笑いで頭が火照つてむずむずする。

「まったく。次、リボン。……リボンは？」

「似たのがあったと思うよ、春のおしゃれ可愛い系に」

やっと落ち着いたか、ルビイは抱えたスケッチブックをさらさらとシャーペンで撫で始めた。

「春のおしゃれ可愛い系……春のおしゃれ可愛い系……春……春……」

善子はムツクの表紙をパタパタ見ていくと、「ワンポイントで個性を演出！ 春から始めるスクドル特集！」と銘打たれた型紙本が見つかった。

「これか。……あれ？」

気付けば、さつき身頃を確認していたムツク本を見失ってしまった。表紙を思い出そうとするも、どれも似たようなパステルトーンの背景に、卒業アルバムのような笑顔を浮かべた見分けのつかない女子高生ばかりで、判別がつかない。

「こりや無理ね。黒服さん、付箋取って」

善子は戸棚を指差し、黒服の一人から付箋を受け取る。

「ありがとう」

「いえ」

と答えたあとで、黒服は目を瞬かせた。何故従ってしまったのだろう、と言いたげで、そのリアクションの人間臭さに善子は安心する。「ねえ、あんたの名前も教えなさいよ。私の真名を聞いたんだしさ」「守秘義務がございます」

そう言つて定位置に戻る黒服に、

「さすが黒総警、ガードが堅いわね」

善子は楽しそうに口を尖らせる。

「まあ、いいわ。ヨハネのリトルデーモンに、名前は必須じゃないしね」

善子は咳払いをすると、右手の三本の指先で顔を隠し、左手で黒服たちを順に指差した。

「この墮天使ヨハネが、天国でも地獄でもないこの現世で活動する際に使役するのが、『リトルデーモン』。あなた方四人は、その栄えある一号から四号に選ばれたのよ——」

「今、一号なの？」

「うるさいわね！」

ルビイの指摘に思わず素に戻るが、すぐに、ふんと演技臭く鼻を鳴らす。

「いいでしょ、ルビイ。私がリトルデーモンたちを使役しても」

「黒服さんたちのこと？ ……そんな厳しいお願いじゃなければ、いいけど」

その返答を想定していなかったか、黒服がざわつく。

「宜しいのですか？ お嬢様」

「え、うん……？」

「じゃ、お願いね、リトルデーモン？」

その有無を言わさぬ響きに、黒服たちは視線を交わしたが、最終的には頷くしかない。

*

(うう、お腹痛い……)

善子はちよくちよく『ねえリトルデーモン〇号！』と黒服を呼んで、複数の型紙本を広げさせたり、ポーズをとらせたり、飲み物を取

りに行かせたり、脛をもませたり、と指示をエスカレーターさせていった。

黒澤ルビイはスケッチブックを開きながらも、その様子をハラハラしながら見ていた。

当然だ、ルビイのボディガードである黒澤総合警備保障の四人が、形だけとはいえ、今や《ヨハネのリトルデーモン》と化してしまったのだから。所詮は友人宅にいる間のお遊びと思おうとしても、黒服たちがあとでどのように報告書にするのか考えると、ルビイは胃が痛くなるのをとめられない。

（「形だけ」が一番怖いってお姉ちゃんに言われてるのに……）

とはいえ、黒服を使う善子は、お姫様気質なのか、ロールプレイ慣れているのか、ルビイから見ても様になっていた。黒服も満更ではないようで、善子のきびきびした指示で動く彼らの一体感は、ルビイをただ護っている時よりも、よほどそれらしい。

（でも、それってボディガードじゃなくて、執事だよな）

つまり、お姫様？

「よし、まずここまでかな！」

善子の言葉で、ルビイは日が陰っているのに気付いた。掛け時計は五時四〇分を指している。

「どんな感じ？ ヨハネちゃん」

善子は絨毯に積まれた型紙本を指差す。

「とりあえず、一通り読んだわ」

「全部？ もう読んじやったの!?!」

「まあね」

だが言われてみれば、善子が型紙本に目を通していくスピードは速かった気がするし、質問も矢継早だった。積まれた本から「前ミゴロ」「ミカエシースカート」などと書かれた付箋が大量に飛び出しているのを見れば、読解精度の不安もないと思える。

では、必要な型紙のベースは出揃ったと考えよう。

「なら、次は型紙制作なんだけど。できそう？」

「自動で設計してくれるアプリなんて、ないわよね？」

「無料じゃあ、ないかな」

「なら実際に紙を切って、感じを掴むしかないわね」

それが一番大変なのだ、とルビイは心の中で思うが、それは善子の言う通り、実体験で掴むしかない。

「じゃ、ルビイはそろそろお暇するよ、門限も近いし」

ルビイはスケッチブックを閉じ、ソファで一つ伸びをした。新しい小物はデザインとぎっくりとした型紙設計まで終わったので、次回以降は自分の道具を持ってこようと思う。

「ルビイ、明日は？」

「んん？」

善子の言葉に、ルビイはあくびが漏れかけていた口を閉じる。

「ヨハネちゃんがよければ、今日と同じ感じで来ようと思ってたけど、なんで？」

「ううん、なんでってわけじゃないんだけど」

「心配しないで、ルビイ、衣装が完成するまで全力サポートするから！」

「お嬢様」

と、黒服の一人がルビイに声をかけた。

「明日は弓道の稽古がごさいます」

言われて思い出した、明日は火曜日、《紅谷流》弓道の練習日だ。

「今からじゃ、変えられないよね？」

「はい、今週は、火曜と金曜に師範をお呼び立てしております」

「変える必要なんてないわよ」

ルビイと黒服の会話に、善子が入ってきた。

「週二で練習があるんでしょ？ だったら、どっかは一人でやんないといけないじゃない。同じことよ」

「でも——」

と善子に申し訳ない顔を向けると、善子はルビイの腕をぼんぼんと叩いた。

「——代わりと言っちゃなんだけど、これ、全部置いてってくれない？」

善子が指差したのは、黒服が今まさに紙袋に入れようとしていた型紙本たちだ。

「勉強するの?」

「熟睡したいの」

そう言つて笑う心配りが嬉しくて、ルビイは逆に涙が浮かんできてしまう。

「もちろんいいよー!」

それを誤魔化すように大きく頷くと、墮天使もにっこり笑つた。

「あ、じゃあ、できればリトルデーモンたちも——」

「——それはダメ!」

*

「鍵は高海が持つてるか?」

「うん、センセはいつ来るか分からないでしょ?」

「水泳部もあるしな。曜、明日明後日はそっちだからな」

「分かってますって」

信代が去り、渡辺曜は千歌と二人で部室に残された。

「あーあ、担任も水泳もスクールアイドルも、全部笠木センセなんだもんなあ」

「曜ちゃんが頼んだんじゃん」

「頼みやすいんだよ」

信代は、本来は水泳部の顧問である。去年の今頃、水泳部立ち上げをもくろんでいた曜が、受け持っていた吹奏楽部が廃部になって暇をしていた信代に頼んで顧問になってもらったのだ。

今回も同じ流れだったが、音楽系という点では水泳部より資質にあっていたようだ。それは移動式の黒板に雑に引かれた五線に並ぶ、やはり雑な音符が表わしていた。

千歌はオタマジヤクシの連なりを見ると、長机に投げ出した腕の上で、にんまりと笑う。

「いやあ、まさか私がねえ。こんな、それっぽいヤツを作れるなんてねえ」

千歌が電話を操作すると、録音された歌が再生される。

それは千歌が初めて産み出した、八小節、一〇秒間のフレーズ。嬉しくて、活発で、走り出したくなるエネルギーが、千歌の歌声から溢れてくる。

「これ、絶対ライブ一曲目だよね」

「当然！絶対盛り上がるよ！」

梨子を書いた曲と合わせて三曲しかないが、曜と千歌の中では同じセツトリストが組み上がっていることだろう。

「あー、いいなあ。いいなあ」

千歌は自分の声を繰り返し再生しては、恥ずかしいのか嬉しいのかわかりかねていき、とうとう長机の上に仰向けになってしまった。「なにやってんの、千歌ちゃん」

曜が千歌のおでこを押すと、千歌は水浴びした犬のように身体を震わせ、起き上がった。

信代が黒板に書いたフリーハンドの五線譜とオタマジャクシを、曜と千歌は電話で撮影した。

いつ消されてもいいように、と考えてのことだったが――

「あ、あ、消しちゃうの？」

――千歌はなんの躊躇もなく、譜面を綺麗にしてしまった。今後の予定を書いたカレンダーだけが残された。

「せつかくセンチセが書いてくれたのに」

「ここにあるもん」

千歌は電話で胸を叩いた。

いや、胸で電話を示した？

そんな曜の疑問を余所に、千歌は中庭の方に目を向けた。

「もうこんな暗くなっちゃったんだ。帰ろっか」

ゾンビ・フォーメアの一件を経て一面の芝が植えられた中庭は、もう夜闇と雲に覆われていた。

「じゃ、机、端に寄せておこう」

曜も立ち上がる。

「いいじゃん、明日も来るんだし」

「私、来ないし、使ったら片付けなきゃ」

「また、お母さんみたいなこと言っちゃえ」

「じゃあついで、そろそろ髪切れば？」

「切らないのー！」

曜はパイプ椅子を畳んで、壁際に寄りかかせた。

そのあと、二人で長机の両側を持ってパイプ椅子のそばに寄せる。

目が合って、なんとなく笑い合う。

それが、曜にとっては奇跡だった。

曜は、高飛込の道に進んだ。幼馴染みの中で、それを選んだ子は多くない。

だから千歌と果南の道はもう、「幼馴染み」という以上に交わらないと思っていた。

なのに今、彼女らはこうして、一つの目標に向かって頑張ろうとしている。

ババ抜きの際に、むつが言った通りだ。

私は、千歌ちゃんと一緒に、なにかしたかったんだ。

そう思えば、新しい友達が指揮するスパルタな歌の練習も、耐えられるだろう。

この活動が、一つの実も結ばなかったとしても、私はきつと、満足するだろう。

千歌ちゃんと一緒なら。

片付けはすぐに終わり、曜はスクールバッグを肩にかけた。

中庭へのサッシ戸をガリガリ開け、涼しい海風を背に振り返る。

「帰り、なにか食べてく？ 松月の五月の新品って——」

「——なにか書いてある」

だが千歌は、黒板を見ていた。

「どしたの？」

「なにか書いてあるよ」

「消し忘れ？」

薄汚れた黒板の中央に、黒板消しで乱暴に拭いたらしき跡がある。

「ううん、これ、元々裏だった方」

カレンダーの面を隠すように、キャビネットに向けて黒板を裏返し

ていたのは、先ほど曜も見ていた。

だから今、曜たちが見ているのは、今日、信代が引つ張り出してくるまでキャビネットに向いていた面ということだ。その証拠に、表面にはなかった楽譜用の五線が三段並んでいる。

五線譜？

「笠木センセ、こっちの面のこと、知らなかったのかな」

信代は千歌が作ったフレーズを譜面に起こす時、わざわざ五線を書いた。裏返せば、それ用の面があったのに。

つられて思い出す。

信代が職員会議について話した時、「うちのスクールアイドルが一回失敗してるのは知ってる」と言った。それは曜もよく知っている。

だが昼休みの生徒会室、ダイヤは千歌たちのスクールアイドルを

「三度目の正直」と言ったはずだ。

その齟齬はなんだろう。

「“A q o”で始まる単語ってある？」

曜の物思いは、千歌の呟きで中断された。

「アコなんとか？ ……すぐには思い付かないけど、なんで？」

千歌は答えず、黒板に途切れ途切れに残されたチョークの軌跡を、触れないよう、指でなぞった。

*

夜一〇時を回り、厨房は静まり返っていた。

調理師たちは明日の下準備を終え、もう誰もいない。ここから旅館《十千万》は、明日の朝早くに目覚めるまで短い眠りに付く。

畳敷きの廊下を、宿泊客の子供が走る音が聞こえた。昔はこの時間帯なら、年輩の客や社員旅行らしき集団が騒がしくやっていたものだが、その層は客足は遠退いて久しい。だから今日のように、長期休暇明け、連休明けの平日となれば、入りがさびしいのも当然だ。

それでも、母はそこにいる。

普段着の臙脂色の和服に割烹着を羽織り、厨房の丸椅子に腰を下ろした枝海は、心なしか小さく見えた。父が作ったまかないの丼に箸を伸ばしているが、ステンレスの作業台に置かれた、館内の映像が映し

出されたタブレット端末に指を走らせる様を見れば、味わっているとは思えない。

だから廊下に立つ高海千歌は、たった五メートルの距離を踏み込めずにいた。

この旅館を背負う女将に、これからするお願いのことを思えば。

「なあに？」

結局、その距離を詰めたのは、箸を置いた枝海だった。

「もう、気付いてるなら言ってみよ！」

千歌は乱暴に足を踏み鳴らしながら、厨房に入った。

「声を落とさないよ！」

枝海はお手拭で口を拭いて、千歌の方に丸椅子を座り直す。

年齢より若く見える母は、隈の浮いた険しい顔をしていた。

「用がある側が声をかけるのが、礼儀ですよ！」

「いやあ、ごはん食べてたしさ！」

軽く言いながら、千歌は言葉を探す。

「今日は何組？」

「三組五名様よ。一名様は明後日まで、二組様は明日までのご宿泊です」

やはりさびしい客入りだ。

子供の足音が、むしろ寂寥さを強調する。

「あのね、お願いがあるんだけど」

「小遣いの前借りはダメです」

「まだ言っていないじゃん！」

「言うつもりだったでしょう」

凶星だ。

顔に出ていたか、枝海は鼻息を漏らした。

過疎化する街で旅館経営を続けること自体がそもそも困難なのに、登録有形文化財の建物を個人で維持する負担はただごとではない。そんなことは千歌だって分かっている。ただの子供の小遣いの前借りだからといって、それが家計を圧迫することには変わりはないのだ。でも、言わなければ。

赤点回避だ進級記念だ、などと調子に乗って、みかん食べ放題で散財したことを、この前指摘されたばかりだけど。

「あ、いたいた、千歌」

そこに姉の美渡が厨房に入ってきた。耳を出した短い髪をバスタオルで包み、身体から湯気を立てている。

「今、温泉空いてるよ。チャンスチャンス」

「美渡！　またお客様の湯に入ったの!？」

「いいじゃん、誰もいなかったんだもん。看板娘の出汁が入ってれば、男湯に切り替わったら——」

「——お姉ちゃんも、聞いて！」

千歌に遮られ、美渡はムツとした顔をしたが、すぐに頬を上げた。

「なに、また前借り？」

「違うって！　私、私ね！」

千歌は息を吸い、吐き、もう一度吸った。

「スクールアイドル、始めるから！」

子供の足音がやむ。

一拍の静寂、そして、

「あは、あははは——」

美渡が笑い出した。

「また言ってるの？　まだ言ってるの？　高二でしょ？　もう、ちよっと勘弁してよ！」

「今度は本気だもん！」

「ムダだよムダ！　なるようにしかなんないんだから、廃校なんて！」

千歌は美渡に歯を剥き出したが、美渡はタオルで頭を拭きながら、手を振って廊下を去っていった。

「みんなでやるんだよ！　曜ちゃんと、梨子ちゃんと、果南ちゃんと、ヨハネちゃんと！　みんなを笑顔にして、この街を護るんだよ！」

千歌は枝海に顔を戻す。

「だけど、学校はまだ部って認めてくれなくて、だから、衣装を作る部費も足りなくて、だから——」

「——千歌」

がちり、と音がした。厨房の扉に、美渡のくすんだシルバーリングが当たった音だ。

千歌は振り返りたくなかった。高海家の次女はどうせ、『千歌がやったって、失敗するに決まってる』と茶化すに決まっている。

「私はとめたよ」

もう一度、足音が遠ざかる。

目を伏せる。

心配されてしまった。

当たり前だ。

高海家の三女に、今さらなにができる？

時機を逸した、生徒会長もそう言ってたじゃないか。

みんな諦めたんだ。

そんなの分かってるんだ。

でも。

目を上げる。

枝海の視線を受け止める。

「お願い、お母さん！ 三途の川の六文銭だと思って、前借りさせて！」

頭を下げる。

私はまだ、諦めてない。

ヨハネちゃんが生徒会長に啖呵を切った時、嬉しかった。

幼馴染みでもライダーでもない後輩も、同じ気持ちだと知ったから。

だから、ここで立ち止まるわけにはいかない。

なにも始めないで諦めるなんて、死んでもごめんだ。

枝海の細い息がした。

「いくら必要なの？」

上目遣いで母を見ると、真っ白な割烹着の上に重ねた両手が目に入った。

「正確にはまだ分からないけど、でも、二箇月分は欲しいです！」
その人差し指が、ゆつくり手の甲を叩いている。

「収支は記録なさい。報告が正当なものであれば、高海家は部費として計上します」

「え？　じゃあ……」

小遣いの前借りではない？

頭を上げる。

「我が子に冥銭を持たせるつもりはありません」

枝海は千歌を見据える。

「大丈夫ね？　千歌」

大丈夫。

その言葉が口にされたなら、約束を違えることは許されない。だからこそ。

「大丈夫！」

千歌は断言した。

絶対に実現する。

たとえウソでも、本当にしてやるんだ。

「なら、飾先生のところにも行ってらっしゃい。最近、道場に顔見せてないんでしよう？」

「ああー！　せつかく忘れたのに！　またしばかれるよう！」
身をよじる娘を前に、母はようやく口元を綻ばせた。

*

内浦湾と江浦湾の海岸線に沿って北上し、沼津御用邸記念公園を通り過ぎて沼津市内に入り、狩野川を渡るとリムジンは西を目指す。音も振動も車内に伝えない客席は、まるでリアルな映像を車窓に表示するアーケードゲームの筐体のように、現実感がない。

桜内梨子は夜の闇に流れるライトを眺めながら、この近くに、沼津滞在中に通うはずだった高校がある、と思い出した。ブランキアとなつてこの街で初めて戦った日、最初の「検査」の帰り道に、父が教えてくれたのだ。その時、父は『偉い人の指示で学校が遠くになって悪かった』と謝ったが、そんなことが起こらなければ、千歌たちと出会っていかなかったわけで、今の梨子に不満などない。

その「偉い人」に直接テキストでお願いして、手配してもらったり

ムジンは、自宅からゆったり四〇分ほどかけて目的地の正門をくぐった。

大諏訪にある《静岡小原総合工業株式会社》——通称《静岡OG I》へと。

オフィスと住宅が入り混じる街に立つ、三階建ての白い建物は、沼津に数多く存在するOGIグループ関連企業の中でも小規模だ。午後一〇時を回った今も、ほとんどの窓から明かりが漏れているが、不夜城といった悪目立ちはしていない。

リムジンは社屋を通りすぎ、地下駐車場に降りて停車した。

警備員にドアを開けてもらい外に出ると、視線の先のエレベーターの前に別の警備員が見える。まるで美術館の順路のように、梨子を目的地まで案内するつもりようだ。

ふんわりとしたチュニツクの裾を整え、駐車場を歩く。時間が遅いからか、空調は弱いし、アンビエントBGMも流れていない。コンクリートの寒々しい灰色だけが際立つ地下空間は、まるで、ブランキアとして“検査”を受けるあの部屋のようだ。

エレベーターに乗ると、警備員の操作で三階に上がる。その警備員の先導で短い廊下を歩き、何種類かのセキュリティを越えた先に、一部屋八畳ほどのオフィスがガラスで区切られたフロアが現れた。

目的地はすぐに分かった。警備員が立っているオフィスに近付くと、後頭部まで禿げ上がった白衣の人物が、ガラスの向こうで狼狽と笑顔の中間の顔を示した。

「お父さん」

父の桑介は『梨子』と口を動かした。だが音が届かない。すぐに空気が抜けるような音がしてドアが開いた。

「入りなさい、梨子」

「お父さん、大事な話があるの」

「待って待って」

と、桑介がデスクのコンソールを操作すると、透明だったガラスが磨りガラスのように不透明になる。去っていく警備員の不鮮明なシルエットを見て、アメリカの映画のようだ、と思う。

「どうしたんだ、《スファイア》の経過観察は土曜日だぞ？ 《セ
デューユ》のデータは十分だし、《ハーチェック》だって——」

「——そんな話じゃないの」

「イヤになったのか？ 最初に説明しただろうか？ 最低でも、スフイ
アのデータが採り終わる一箇月は——」

「——そうじゃないって！」

大声を出した梨子に、桑介は不思議そうな顔をした。

「でも、大事な話だって」

苛立つ。娘の言う「大事な話」が自分の仕事に関係していると疑わ
ないのか。

いや、落ち着かなきゃダメだ。

父の職場に、しかも仕事中に押しかけたのは自分なんだから。

今さらながら流れてきたアンビエントBGMに身を委ね、息を吸
う。

「私、体験入学生だったの？ お父さん、《転校》って言ったよね
？」

桑介は、「ああ」と口を開けた。

「浦女のことか。体験入学生だけど、転校でも体験入学でも学校生活
は変わりなく送れるはずだよ。理事会にはそう説明されたけど。

……梨子？ どうした？」

梨子はゆるゆると首を振った。

生徒会長の言ったことは正しかった。

「どうして？」

短い問いの言葉に、

「久しぶりだな」

と父は苦笑する。

「梨子が言ったんじゃないか。海のそばはイヤだって、この街にはい
たくないって。だから、小回りを効かせたんだよ。検査は最短で一箇
月って言われていたから、すぐに戻れるようにね。梨子だってそのつ
もりだったんだらう？ だから荷解きだってほとんど——」

「——分かった、分かったから、ごめん」

梨子は父の言葉を遮り、頷くように頭を下げた。

「学校でなにかあったのか？ 無理に行く必要はないんだよ。話があるなら、お父さんが行ってもいいけど」

「違うの、お父さん。あのね」

顔を上げる。

状況ははつきりした。

きちんと転校手続きをすれば、梨子は部員として参加できるということだ。梨子が頭数として数えられるならば、理事長代理の名前を借りている必要はなくなり、果南は部活に戻ってくる。

それで、すべてが正しい方向に回り始めるはずだ。

梨子が転校しさえすれば。

なのに。

「……あのね」

言葉が出てこない。

なにを考えていた？

父の言う通りじゃないか。

水が苦手で、潮の匂いが苦手で、海なんて見たくない。

音ノ木坂には帰れないし、でも内浦にも居場所はない。

それが私だったはずだ。

なのに、この街でスクールアイドル活動に参加するなんて。

そのために、わざわざ転校扱いにしてほしいと思うなんて。

「どうして？」

せっかく理事長代理にリムジンを出してもらって。

こんな時間に、わざわざ沼津市内までやってきて。

私はなにをしてるんだ。

「梨子、もう少しなんだ、もう少し、お父さんに付き合ってくれ」

言葉を区切った父の手が、梨子の肩に触れる。

「あと二週間もすれば、この街を出て行ける。お母さんにも会えるんだ。な？」

頷く。

父は笑顔になった。

「じゃあ、今日はもう帰りなさい。うかうかしていると——」

「——鬼か蛇が出ますね」

セキュリティがかかっているはずのドアが開き、男性が入ってきた。

「こんにちは、依田さん」

梨子が挨拶すると、義森は頬を持ち上げた。

「真蛇しんじやの面。ご存知ですか？ 梨子さん。耳のない般若はんんにや、と言えどもはや蛇となってしまうた、罪深き鬼女の面です」

三〇代らしい男性だった。清潔だが使い込まれた白衣の胸に「依田義森」と書かれた社員証がとまっている。「お父さんより若いのに、《静岡OGI》のムーフォーム関連事業の主任なんだ」と桑介から何度か聞かされていた名前だ。だが梨子は今回で五度目なのに、その顔と声が覚えられない。

「旧約聖書やコーランにおいて、アダムとイヴに知恵の実を食べるようそののかし、天界を追わせたのも、一匹の蛇ですね。その蛇は《サマエル》と同一視されることがあり、サマエルはさらに、のちに墮天する《ルシファー》とも同一視されます。面白いでしょう。日本の鬼と、西洋の墮天使は、蛇という点で繋がるのですよ」

義森は梨子の前まで回つてくると、チュニツクに隠された胸のふくらみの間を見る。

「ですが、蛇に至る鬼化が『聞く耳をもたない』が理由とあれば、両者は同一ではいられないかもしれませんね。完全に鬼と化した女は、もしかしたら、目も鼻も口もない、角だけが生えたノツペラボウになってしまうかもしれない。それはそれで、かわいらしい気もします」

そう言つて笑う義森の顔が、梨子には蛇に見える。

いや、鬼か。

分からない。

同じなのか？

「梨子、胸を出しなさい」

父が言った。

「よろしいのですか？　桑介さん。本日は経過観察日ではありませんが」

「被験体と主任がいるのですから、目視だけでも意味はあるでしょう」
桑介の言葉に、義森は唇の端を上げ、梨子を見た。

チュニツクの裾をまくりあげる。

空気の流れが、身体を通り抜ける。

「蛇に『裏切り者』のイメージがあるのは、脱皮をするからだ、と言う説がありますね。常に着脱可能な仮面を被り、自分の心は決して見せない」

露になった上半身に、視線が絡み付く。

だが義森は、梨子の肉体を見ていない。

「梨子さんが、もし、誰が鬼で、誰が蛇かを知ったなら——」

彼は振り返り、父を見た。

「——断罪されるのは、誰になるのでしょうかね」

後頭部まで禿げ上がった貫禄のない父は、最後まで表情を変えなかった。

*

「ただいまー」

居間のふすまから光が漏れているのを見て、津島幸子は小さく声を投げた。

日付は変わり、深夜の〇時一分だ。普段のこの時間なら善子は、寝ているか、自室でネット配信をしているのが常だが、

「お帰りー」

返答は珍しく、居間からだった。

「入っていい？」

「いいよ」

ふすまを開けて様子を覗くと、居間一面に広げられた雑誌が目に入った。

「どうしたの、こんなに」

四〇冊はあるそれらは、能面や筆置きや色々なものを重しに開かれ

ている。近付いて見ると、すべて服飾の本だと分かった。

「借りたの。踏まないでよ」

娘はビデオカメラを手にして、それらを前に立っていた。

「なに、服でも作るの？」

「まあ、うん」

「ゴシックとかロリータとか？」

「うん、まあ……うん、そうかな」

「欲しい服があるなら言いなさいよ。最近はもう、買っちゃった方が安いんだから」

「分かってるって」

「ボタンなんて、もう、一つ一〇〇円くらいするんだから」

「分かってるってば」

と、善子の側頭部にシニヨンを見つけ、髪が濡れていないことに気付いた。

「お風呂入ってないの？ この前も徹夜してたでしょ。早く入りなさい」

「いいよ、先入って。沸かしてあるから」

応対がぞんざいになってきた娘に、話したがっていない空気を察する。

「……じゃ、お母さん、先入るからね」

廊下に出て、ふすまに手をかけ――

「ダイヤさんに会ったよ」

――幸子は息をとめる。

うわんうわん、とねじれるような音が、遠くから近付いてくる。

活動を再開した暴走族のバイクが、エンジンを吹かして大通りを走り抜けた。

幸子は振り返る。

「生徒会長さん、なんだっけ？」

「うん」

真蛇の能面が、正面から幸子を見ている。

靴下の足から、冷気が這い上がってくる。

「どうだった？」

「ん……。普通の人だったよ。案外」

「そっか」

「うん」

ふすまを閉め、廊下を薄暗く染める橙色の光の下に立つ。

「会っちゃったか」

呟くその声は、灯りと同じくらいに沈んでいる。

だがそれは、幸子が望んだことなのだ。

次回予告

鞠莉 「これで衣装の件は一段落ね」

ダイヤ 「黒総警の人員をヨハネさんが使役するのは、法令順守として問題がありますけれど」

鞠莉 「相変わらず、ダイヤは気にしやないんだからア。大目に見てあげましょ」

千歌 「いやいやいや、梨子ちゃんと曜ちゃんと果南ちゃんの件は？ なんにも解決してないんだけど」

ダイヤ 「梨子さんが言っていたではありませんか、『今考えても仕方ない』と」

鞠莉 「気長に待ってあげましょオ！ 二年くらい！」

千歌 「二年……？ じゃあ取り敢えず、次回、仮面ライダーメルシャウム第六話、『大切なこの場所で』」

ダイヤ 「情感たっぷりな表題ですが……」

鞠莉 「安心させる気なんてないわよオ！」

C

雲の切れ間から覗く、欠けた月。

黒く波打つ水面で、笑顔のように揺れている。

松浦果南は、ジュール丸の縁に足をかける。
ダイコンピューター
ダイコンを手首から外す。

ゴーグルをスノーケルごと外し、ドライスーツを脱ぐ。

一糸まとわぬ裸体を、冷たい夜風に晒す。

手にしたのは、直径三センチほどの球体。

月光にきらめく正八面体の結晶を内包する、光る泡。手を伸ばし、揺らめく月に、その輝きを重ねる。海。

すべての生命の母、容赦なく選別を強い揺り籠。地表を優しく撫で、時に根こそぎ破壊し尽くす指。彼女は言った。

『もし神様がいるんなら、一番近いのは海よねエ』
彼女は言った。

『水は形を持たない故に、型を問わないのですわ』
どちらも間違いだ。

何度水面を覗き込んでも、自分の顔が反射するだけ。何度海に身体を浸しても、自分の形にしかない。

「今までは、かな」

手放した球体が、海面に落ちる。

それを追って、ヘッドファーストエントリー。

暗く冷たい大気が、暗く冷たい海中にとって代わる。

スクーバの器材を持たない、文字通り、スキндаイビング。

素足でキックする泳力だけが、浮力に対抗する推進力だ。

夜と海の相性はいい。

何十万キロの真空と、十数メートルの水の隔たり。

それが、等価となる間隙。

球体は先導するように、明滅しながら沈んでいく。

火照る肌から冷たい水に、熱量が急速に奪われる。

水に圧迫される肺は、復路の酸素を残していない。

バジャウ族という漂海民族がいる。

一生を海の上で過ごし、海底を歩いて獲物を捕る人々。

ドライもウエットも着ず、ゴーグルも付けずに。

海で生活すべく進化した、憧れの存在。

その彼らでさえ、最後の境界で海に拒絶される。

ヒトである限り。

そして。

球体の降下速度が落ち、水中で停止した。
水深を合せ、キックで身体を起こす。
ぼう、と海水が揺らぐ。

(や)

冷たくなった片手を開いて見せる。
淡く輝く球体に。

その向こうからやってきた存在に。
見下ろすように突き出した吻。

鎧のような鱗で覆われた腹。
垂直に起き上がった身体。

慎ましく点在するヒレ。
渦を巻いて揺れる尾。

(非日常、か)

曜の言葉を思い出す。

街をおびやかす、怪人、廃校。

対抗する、仮面ライダー、スクールアイドル。
集まり続ける、非日常の記号。

果南には、その感覚がない。

日常とは海であり、非日常とはそれ以外。
海をおびやかすものが、対抗すべきもの。

だから、手に入れるんだ。
球体が明滅する。

その振動が、海水を伝わる。
持続する高音が。

(じゃ、遊ぼうか)

果南の応えに、球体は穏やかに染まる。
ジュール丸の船底と同じ、花緑青色に。

直後、果南は解き放たれた。
冷え切った皮膚も、酸素に喘ぐ肺も、泡と消え。

境界を越えた世界に、果南の存在は反転する。

「どこまで潜れるのかな。私は」

海は真の意味で、果南の日常となった。

第六話：大切なこの場所で | 1

AV

「頑張れ！ 仮面ライダー！」

誰かの声援を背中に、千歌は突きをさばく。

場所は《伊豆三津シーパラダイス》のイルカのモニュメントの前、もちろん空手の試合ではない。

相手は、頭の上から脛までを左右から貝殻で挟み、殻の横に空いた穴から黒いウェットスーツのような手足を出した人物だ。いわゆる“着ぐるみ怪人”といった趣だ。だが決定的に違うのは、呼吸するように貝柱を伸縮させて開閉する貝殻の中に、胴体部分が存在しないことだ。

つまり、フォーメア以外にありえない。

《シエル・フォーメア》とでも呼ぶべき三番目の怪人は、貝殻で身体を護りつつ、弱々しい突きで牽制してくる。だが、如何せん腕の可動範囲が狭く、腕を伸ばそうとすると大きく身体を斜めにしなければならなかったために、予備動作は大きいし、突きと突きの間隔も長い。完全にデザインミスだ。

おそらくこのフォーメアを産み出した人は、少し前の千歌のように「詳しくない人」なのだろう。自分の恐怖を、“怪人”という単語から漠然と思い浮かべるイメージに乗せ、このステレオタイプのような姿を産み出したのだと思われる。

だが仮面ライダーワンダに変身した千歌は、そんな相手にあつて、メルンシャウム海泡石のように白く柔らかな装甲に、多くの突きをもらっていた。

「ガードしろ！ ガード」

「ライダーキックだよ！」

「頑張れー！」

(うわあ、超気持ちいい!!)

曇天の下で接戦を演出する千歌は、完全に調子に乗っていた。

狙ったわけではない。

バスで海岸通りを通る帰宅中、OGIグループのキャリアが販売す

る電話に標準搭載された緊急速報メールが、フォーメア通報を発報した。出現場所が、伊豆三津シーパラダイスのラッコ館跡付近という目と鼻の先とあつて、長浜のバス停で降りて現場へ向かったところ、人だかりを発見した。

電話やカメラを構える人々の向こうに見えた怪人は、よたよた歩くだけで脅威には見えなかった。だがいつぞやの梨子によれば、ムーフォームは人の恐怖心で怪人を産み出し、それは結晶構造を変化させなければとまらないという。今が安全そうだからといって、見逃すわけにはいかない。

だから千歌は知り合いの民家の庭の蛇口を拝借してワンダに変身、フォーメアを追って柵を跳び越え樹木を飛び越え、気付けば「三津シー」に入ってしまった。『走らないで——え？　え？』と困惑した係員を横目にシエル・フォーメアを駿河湾際まで追い詰め、なんだかんだ、実家のすぐそばの娯楽施設で決着を付けることになったのだ。

だが、ステージプールを見下ろす観客席や、十数メートル離れた群衆から声援を浴びていれば、ちよつとサービスしてあげても仕方がないではないか。

(よしー、そろそろ必殺技と行こうかな！)

一進一退を繰り返した(ように見せた)千歌は、シエル・フォーメアの突きを左腕で受け、回り込むように右鉤突きを貝殻に叩き込む。渾身の打撃に、怪人はコンクリートを転がり、駿河湾沿いの柵へとぶつかる。

「みんな、離れて！」

上下に構え。

丹田の力を抜き。

息を吸って、気を溜める。

握る拳に向かい、巡るイメージ。

(いくよ、ムーフォーム！)

答える、ハミングのような振動。

地面を蹴る。

一步一步を踏み締め、跳躍。

「ライダージャンピングみかんパンチ!!」

振りかぶった右手を炎が包む。

学校でゾンビ・フォーメアの本体を倒した技だ。

戦う気のない怪人など、一撃で破壊できるだろう。

(戦う気のない?)

手すりを背にしたシエル・フォーメアは、小刻みに首を左右に振っていた。

その素振りが人間的で、千歌は、小さく手を振るブランキアの姿を思い出す。

(いや……相手はただの水だよ!)

コンマ数秒に満たない逡巡を振り払い、

「とりやあー!」

腕を貝殻の隙間にねじ込み、貝柱をぶち抜く。

拳が弾力ある膜を捉える。

一〇センチほどの、中心にムーフォームを納めた、核となる泡。

(これだ、コア・ビード!)

直後、貝殻の内側から虹色の輝きが迸り――

ぼ、と。

――真ん丸の爆炎が駿河湾に放出された。

それは宣言通りみかんのように、曇り空に一瞬の夕日を産み出し、そして消えていく。

一拍ののち、背後から歓声が上がった。

「できた」

残心のまま肩で息をしていた千歌は、やがて腕を降ろす。

そして、今まさに再結晶化をしているムーフォームを、地面から拾い上げた。

シエル・フォーメアを構成していた水は蒸発し、一切の痕跡を残していない。

「これでいいんだよね」

振り返ると、近所の顔見知りや観光客が、手を叩いて声を上げているのが見えた。

撃破を伝えようとして、しかし、どうしようか迷う。意気揚々とガッツポーズをする気分ではないが、あれだけの激戦アピールをしてしまったのだから、黙って立ち去るのもヒーローらしくない。

だから千歌は、怪人を破壊した拳を一瞥すると、慎ましくサムズアップ親指を立てるにとどめた。

A

「おめでとうございます」

受け取ったばかりの茶封筒を見下ろしていた桜内桑介は、聞き慣れた声に顔を上げた。

くたびれた白衣を着た義森が、ガラス張りのオフィスに囲まれた廊下を近付いてきた。

「主任」

「聞きましたよ。栄転ですね、桑介さん」

「いえいえ、まだ内示の段階ですから」

「承諾しない理由はないでしょうか？」

静岡OGIにおける桑介の上司は、口角を持ち上げる。

「アレは間違いなく、今後のOGIグループの最重要分野となります。その基礎研究チームに加わるのですから、桑介さんの今後は約束されたと言っても過言ではないでしょう」

義森は人差し指と親指で円を作って言う。その仕草は、三四歳の上司が四〇歳の部下に向けるものとしては、邪気ななさすぎた。まるでお気に入りの玩具を褒められて得意気になった子供のようで、桑介は思わず頬を綻ばせた。

桑介が手にしているのは、時計を模したOGIグループのロゴと「静岡OGI」の文字が誇らしげに並ぶ、A4サイズの封筒だ。つい数十分前に渡された、東京は芝浦にある《OGI Research Institute》——《OGI研究所》に新設される、μフォーム研究部門への出向の内示が入っている。

《人体ラギダイズシステム》たるシャイニーの一技術として、OGIグループの本拠地たる沼津で小さく扱われてきたμフォームは、いまだ世間には発表されていないものの、グループ内での存在感を強

めつつあった。フォーメアと仮面ライダーが表沙汰になったことで、OGIグループは今後、ムーフォームに関する大規模な対応を求められていくだろう。そのためには、ムーフォームを彼個人の暗黙知から、組織化した知識に発展させなければならぬ。そのための研究部門の新設であり、人事だということ、桑介のも想像できた。

「でも、なぜ私なんだろうね。私は梨子の父親だっただけの、単なる技術者なんですが」

「この分野に携わった経験のある人間が、東京所属では桑介さんだけだから、でしょう」

義森の推測は、桑介を満足させるものではなかった。

だが静かに息を吐くと、封筒を持つ手を降ろす。

「いずれにせよ、被験体の提供は実績と認識されますよ。我々の仮面ライダーの、ね」

顔を上げる。

義森は笑顔だ。

お気に入りの玩具を得意気に披露する、子供のように。

「そう……ですね」

桑介も笑顔を作る。

「着任は五月の第一営業日です。来週末の検査が終わり次第、沼津を離れる予定です」

「構いませんよ、梨子さんは僕たちに任せて、先に行っていただいて
も」

「いえ、ブランキアは責任を持って、私に対応しますので」

「そうですか」

義森と桑介は、僅かな間、笑い合う。

そして、考える。

この異動を画策したのは、目の前の人物ではないのか、と。

「では僕は、明日明後日の検査計画のレビューに入りますので」

「はい、私も作業に戻ります」

義森は自分のオフィスに去っていった。

その不透明なガラスが密閉されると、桑介は振り返り、自分の才

フェイスへ向けて歩き出す。

通達自体は、嬉しくないと言えばウソになる。沼津での役割を終えて東京に帰った際の選択肢が、ベースアップも定期昇給も期待できない四〇歳の一技術者に戻るか、勉強をしてでも最先端技術の研究員になるか、選べるようになったのだから。

だが。

ポケットから端末を出し、待受画面の家族写真を見る。

妻と娘と自分で、元旦に撮った写真。

まだ髪がある。

廊下を形作るガラスに目を向けると、禿げ上がった自分が映っている。

写真の自分より、一〇歳は老いてみえる自分が。

一〇年にも匹敵する四箇月を経た自分には、もう栄転など興味はない。

「もうすぐだ。もうすぐ解放される……梨子」

眩き、自分のオフェイスのガラス戸に手を触れ――

「行っちゃうのオ？」

――鼻にかかる声に呼び止められた。

いつからいたのか、側頭部で金髪を丸く結わいた女子高生が、ガラスに寄りかかっていた。

初対面だが、テレビやプレスで何度も見ていたOGIグループCEOの長女であり、娘の通う浦の星女学院の理事長代理。

「小原鞠莉……さん」

「呼び捨てでいいわよ。桜内桑介」

友達か恋人に言うような気安い口調に対して、桑介は年齢相応の――四〇歳か五〇歳相当の――柔和な表情を作る。

「私は東京の人間ですから。元の場所に帰るだけです」

「研究職のPosition^地位^位を用意してる、って言っても？」

「芝浦の件ですか？ それは聞き及んで――」

「――No, No, No! ここですよ！ 沼津で研究してほしいの、アレを――」

オーバーな身振りで笑う女子高生が提示したのは、第三の選択肢だった。

桑介は戸惑う。

「なぜですか？ 今日、芝浦の内示を受けたばかりなんですよ？」

「リリーのためよ！」

リリー——梨子のことか。

「芝浦が、そのための異動ではないんです？」

「リリーはここにいたい、って言ってたでしょオ？」

「いやいや、あの子は東京に戻りますよ」

桑介が言うと、鞠莉は目を見開いて、手のひらを上に向けた。

「そんなわけないじゃない！ あの子たちは、星を目指すのよ！」

「ほ、星……ですか？」

空に手を伸ばしたポーズの鞠莉に、桑介は言葉を詰まらせる。

「……よく分かりませんが、梨子は海が苦手なんです」

「リリーはそんな態度じゃないわよ」

「内浦に住む友達には言いにくいのでは？」

「その程度の友達しかいない、って思ってる？」

そう食い下がられても困る。

梨子が友人となにを話しているのかは知らないが、子供同士の問題を親子の問題に並べて、しかも会社内でCEOの娘として話されては、桑介はどの立場で返答していいか分からない。

「分かりました、もう一度確認しますよ。でも、あまり期待しないでください」

桑介が言うと、鞠莉はあっさりと背を向けて廊下を進み——

『二人の囚人が鉄格子の窓から外を眺めたとき。一人は泥を見た。一人は星を見た』

——こちらを見ずに言った。

「アナタにとっての星がなにか、見失わないことね」

鞠莉は廊下の突き当たりの扉をカードキーで開き、その中に消えた。

今の会話は、なんだったんだ？

梨子は数日前、まさにここを訪れて、この街を去ることを認めた。あの子の決断が間違っている、と言うのか？

その時、殴り付けるようにガラスドアが開き、義森が廊下に飛び出してきた。

「新しい仮面ライダーです！ 内浦に！」

興奮しきった義森の表情に、まだまだ流動的なこの街の状況を実感する。

*

「次はOGIグループの開発する人体ラギダイズシステム、通称《仮面ライダー》に関するニュースです」

局アナが語る朝の報道番組を耳に、パンツスーツ姿の高海美渡は朝ご飯をかつ込む。

「昨夜、伊豆三津シーパラダイスの園内で、仮面ライダーが目撃されました。発表されている仮面ライダーとしては、これが三体目となります」

「あ、ほら、出てきた！ ほらほら、美渡姉！」

左目だけでテレビを見る。

休日出勤を前に気が立っている美渡が気にならないのか、千歌が嬉々としてテレビを指差していた。見覚えのあるイルカのモニターと建物を背景に、白っぽいものと黒っぽいものが蠢いている。

「《三津シー》じゃん。そういうや最近行ってないな」

「行きたいの？ 『美渡ネー』」

「殺すぞ千歌」

「そうじゃなくて、戦ってる人の方！」

「なんだよ……」

高海家宅の食卓に座るのは二人、美渡がリアクションするしかない。

見ているうちに、白くて細長い貝殻で身体を縦に挟んだような人と、黒いウエットスーツに白い鎧を部分的に付けた人だと見分けが付いた。

初老の男性と女性局アナは、前者を《シエル・フォーメア》、後者

を《仮面ライダーワンダ》と呼んだ。

「Shelley? ああ、^{Shelley}貝か」

卵ご飯を含んだままの口に、一瞬、嘔吐感がこみ上げた。

縦長の映像は、一昔前のアクション映画のようにグラグラ揺れている。風防のないマイクにぶつかると風で、音もろくに撮れていないが、素人が投稿した映像の中ではこれが一番まともなのだろう、二人の攻防はきつちり追えていた。

が、別に興味はない。たくあんを口に入れる。

「美渡姉! ちゃんと見てよ!」

「うるさいなあ。どうでもいいって、特撮も怪人も」

「怖いんだ」

「はあ?」

「志満姉が言ってたよ。美渡姉が平成メタルヒーロー見て、わんわん泣いたって」

「はあ!? 泣いてないわよ!」

思わず椅子から腰を浮かせる。

「いいんだよ、美渡姉。最初の頃はリアルで陰惨だったんだよね? 出会いが不幸だったんだよね?」

「違うわよ! あんたみたいに男友達とかいなかったし——」

と、画面の中の動きに、見覚えを感じる。

「——空手か」

「え!?!」

ビクンと千歌が肩を揺らし、美渡は首を傾げる。

「なに?」

「う、ううん、よく分かったな、って」

なぜか挙動不審になった千歌に訝しみながら、美渡は椅子に座り直す。

「こんなちっちゃい子、この辺にいたかな。千歌、知ってる?」

「いないんじゃない? 飾流には私しかいないし」

「じゃ、どつかから連れてきたのかな」

「私じゃない?」

「は？」

「私じゃないと思う？」

「ご飯を含んだままの口を開けて千歌を見ると、妹はなにを期待しているのか、上目遣いでもじもじしている。

「全然違うわよ」

「え？　なんで？」

「なんでって、知らないけど。散々あんたの飛び蹴り食らわされたんだから、分かるわよ」

家族や周囲大人に、突然空手の技をかけてきては怒られる小学校時代の千歌は、内浦では忘れたくても忘れられない存在だ。

「でも、OGIって苦しいんだなあ」

美渡はご飯を飲み込み、自嘲気味に言った。

「なにが？」

「ん？　こんなシヨウをやんなきゃいけないんだから、やばいでしょ」「シヨウ!？」

立ち上がった千歌が大声を上げ、美渡は眉をしかめる。

「なによ、どう見たってシヨウじゃない、こんなの」

「本物だよ！　本物のフォーメアと仮面ライダーだよ！　フィクシヨンじゃないんだよ、美渡姉！」

「いや、フィクシヨンとは思ってないけどさ、ウチの——」

言いかけて、美渡は言葉を切る。

「なに」

「——お客さんも見たって言ってたし」

十千万を借りて入社式を行った中小企業の社員が、シーパラダイスでこの事件に遭遇していた話は、母から聞いていた。

「そうだよ！　ほらあ！」

「なにムキになってんのよ」

「なってるない！」

とご飯を味噌汁をいっぺんにかき込み、千歌は「ごちそうさま！」と立ち上がってどこかへ行ってしまった。

「おい、千歌！　……まったく、誰が洗うのよ、それ」

ぼやき、改めて画面を見る。

千歌の空手とは似ても似付かない。攻撃の避け方が段取りくさく、極めのないパンチも多く混じっている。避けられそうなパンチももらっている。

要は、〃温い〃のだ。

そんなことは、空手経験者の千歌自身が一番分かっているだろうに。

いや、分かっているからムキになっているのか？

「ミーハーなんだから」

やがて戦闘はクライマックスに入ったようだ。フックで一度距離を作った仮面ライダーが、怪人に飛びかかった。仮面の下でなにか叫んでいるようだが、風の音がうるさくて聞こえない。

ライダーと怪人を重なった時、丸い爆炎が起こった。

カメラが自動で光量を減らし、画面が勝手に暗くなる。

元に戻った時、空には黒煙も残っていなかった。

まるで予算の足りないCGのようで、不自然だが、本物なのだろう。

「もう一度見てみましょう」

局アナが言い、爆発の瞬間がスローモーションで繰り返される。

「先日、浦の星女学院で起こった爆発とは、ずいぶん違う規模ですね」
ワイプに出てきた初老の男性が言う。

「フォーメアが弱かったか、ライダーが出力を調整したのか、OGIは調査中とのことですよ」

「加減ができたのに今までしてなかったのだとしたら、大問題ですよ」
勝手なことを、と思いながら、美渡もクライマックス、味噌汁を飲み干して立ち上がった。

「〃馳走様」

誰もいない食卓に声を投げ、二人分の洗い物をこなす。

そういえば、千歌のスクールアイドルはどうなったのだろう。土日はいつもバタバタしている印象だったが。

だが聞きはしない。美渡はもう、スクールアイドルには関わりたくない。

「しかしOGIは一体、何体の仮面ライダーを所有しているのでしょうか」

スタジオに戻った映像の中で、初老の男性が言った。

「昨夜の発表では、ブランキア、シャイニーとワンダを含めて、全一三体の仮面ライダーを計画しているそうです」

その数字に、美渡は振り返った。

女性が持つフリップには、三体の仮面ライダーと、一〇体の黒いシルエットが描かれていた。

「順次発表していくそうですが、シャイニーのような発表会はしない方針だそうです」

「すべて沼津に配備されるのでしょうか」

「そうだと思います。フォーメアと呼ばれる怪人の活動範囲は、内浦湾の周辺だけですからね」

テレビを切り、シザーケースを改造したウエストポーチを手に玄関へ向かう。

三和土に降りてパンプスを履き、玄関の鏡と手鏡で髪をチェック。

「ワンダね」

眩き、テレビに並んだ三体の仮面ライダーを思い出してみる。

《《ブランキア》》。苔を固めて圧縮したような緑の装甲を全身に付けた、有機的なフォルム。

《《シャイニー》》。滑らかな曲線と光沢を放つ磨き上げられた銀と紫の身体は、装甲というより高級車のボディだ。

《《ワンダ》》。白の装甲は、野球のキャッチャーの胴衣や、武道家の手甲と足甲に似た、スポーティな印象を受ける。

統一感がない。

名前も同様だ。

イタリア語で「鰓」を意味する名詞「Branchia」。

英語で「光る、輝く、光沢のある」を意味する形容詞「Shiny」。

同じく英語で「驚嘆する」を意味する動詞「Wonder」。
言語も意味も品詞もバラバラ。

プロトタイプとか開発初期中期とかいうレベルではなく、デザインがまったく違う。哲学が違う、と言い換えてもいい。

O G Iグループといえば、前CEOである小原喜一郎の志向により、クルマにはクルマの、電話には電話の、ソフトウェアにはソフトウェアの、経営には経営の、一貫したデザインが存在する。だがこと仮面ライダーに至って、それが不徹底なのはどうしたことだろう。(試行錯誤、って言えばそれまでだけ)

共通項を探すなら、ブランキアとワンダの二体については角と口の形、三体全員では仮面に対する目の比率が近いものがある。だが細部の問題と言われれば否定できない。

そしてもっとも奇妙なのは、実際にフォーメアと戦っている映像があるのは、突然現れたブランキアやワンダだけで、O G Iグループが発表会見まで開いて情報公開したシャイニーは、いまだ新聞とテレビの中だけの存在だということ。

この差はいつたいたいなんなのだろう。

「ま、いいや」

ワンポイントの付いたヘアピンの位置を整え、頭を左右に倒してみる。丁寧に手入れした髪が、シャンプーのCMのように流れる。悪くない。

と、足音が階段を降りてきた。

やってきたのはもちろん千歌で、玄関で立ち止まると、上がり框を足で握り、なにか言いたそうな顔でこちらを見てくる。

「なによ」

「ん、気を付けてね、って」

「はあ？ うっさいわね、休出なんてちよいちよいあるでしょ」

険のある声を出すと、千歌はムツと口を尖らせたが、すぐに瞼を伏せた。

「だって、フォーメアが出たら、危ないから」

美渡は面を食らう。

妹がそんな殊勝な言葉をかけてくるなんて、思ってもみなかった。

「あのね、千歌。フォーメアって、この辺にしか出ないんでしょ？ 私

の会社、市内なんだけど」

「それは分かってるけど」

「それにクルマ通勤だからね」

「分かってるよ！」

千歌は声を上げたが、食卓でのケンカのような力はない。

考えてみれば、伊豆三津シーパライズという自宅の目と鼻の先に、つい昨日、怪人が出現したのだ。外出しようとする家族を心配するの、当然かもしれない。

なら、千歌を納得させるのはこの一言しかない。

「大丈夫」

予想通り、千歌は顔を上げて美渡を見た。

「ほんとう？」

「大丈夫。だから心配するなっ」

美渡がそういうと、千歌は頬をかすかに持ち上げた。

「ほら、じゃ、行ってくるよ」

「うん、行ってらっしゃい！」

屋外に出た美渡は、駐車場を自身のクルマまで歩く。

「“大丈夫”、か」

そう言葉にしたからには、守らなければならない。

少なくとも千歌は、そう思っている。

美渡はバカバカしいと思っているが、千歌を納得させるためとはいえ、それを口にしてしまったからには、美渡は本当に何事もなく帰ってこなければならぬ。

「呪いだよなあ、まったく、志満姉よう」

当の昔に家を出た高海家の長女にぼやき、美渡は軽自動車のドアを閉めた。

*

裾を整え、正座をする。

左手で介錯した扇子を帯から抜き、膝の前に離して置く。

そして膝のすぐ前に両手をつき、辞儀。

誰もいない空間。

六〇畳の板床へ。

扇子を帯に、納刀するように差す。

爪先を起こし、右膝を立て、立ち上がる。

一拍。

前にすり出す足。

腰を入れ、肩を動かさず、滑り歩く。

胸を覆い隠す腕。

袖口を握り、袂を持ち、袖を形作る。

帯に差した扇子。

抜刀するように、右手で抜き、開く。

滑り、振り、受け。

叩き、下げ、伏せ。

引き、上げ、差し。

舞う。

頭の中だけで流れる曲に合わせて。

衣擦れと、足袋の音だけが響く。

誰が聞くでもない。

誰が見るでもない。

反射を求めぬ放散。

捕捉を求めぬ発信。

その精度を高めるのみ。

ただ一人の孤独な自由。

一拍。

孤独は貴重だ。

外部の雑音を遮断する十分な技術、空間。

外部の接触を遮断する十分な人脈、時間。

他人の動向に左右されない余裕。

自身の動向に左右されない余裕。

静寂に満ちた孤独の得がたさ。

康寧に満ちた孤独の得がたさ。

凧いだ海のような。

沈んだ船のような。

その贅沢。

一拍。

頭の中の音楽が終わる。

息を抜く。

お団子に結わいた髪を解き、扇子を帯の一周目と二周目の隙間に戻す。

首を回し、肩を上げ、軽く足を広げる。

目の前の「相手」を睨む。

床板を踏み鳴らし、先手。

左頬に右フツク。

相手が床を転がる。

近付き、しかし足払いをバックステップで回避。

立ち上がった相手のワンツートをダッキングでかわし、懐に入り、ボディブロー。

よろめいた相手に、裾を開いて体重を乗せた右キックで追撃。

一拍。

扇子を右手で抜刀し、小骨を握って小指で要を締める。

牽制するように、上段から一振り、二振り。

有効打になるとは思っていない。

頭をかばって近付いてくる相手の反撃を、左手でいなす。

扇子を引き、相手の蹴りを右腕で受け、数歩下がる。

切り揃えた前髪を、背中まで伸びる後ろ髪を、吹き流しの手ぬぐいのように遊ばせ、しかし視界や身体は遮らせない。

体術の経験はない。

あるのは、同世代の男子とのケンカ、狼藉を働こうとするチンピラや暴走族との乱闘、それをとめようとするボディガードへの抵抗。

そこに型も構えもない。

相手に合わせ、動くべき時に動き、それ以外は動かない。

相手の攻撃をしのぎつつ、手首を返して扇子を逆手に。

腰を落とし、下段から振り上げる。

意図せぬラインから顎を砕かれた相手が吹き飛び、地面に落ちる。扇子を納刀、足を大きく開いて中腰になる。裾をはだく。

足袋で板床を蹴る。

一步、二歩、跳躍。

「↓」

そして着地。

立ち上がり、手首を振り下ろす。

めくれた袖が落ちる。

息を抜く。

壁際に置いたスクールバッグから、三ボタンの携帯端末を取り上げ、一番下のボタンを押す。

すぐに板張りの廊下を歩く足音が近付いてくる。部屋の角を曲がり、障子の並ぶ長辺の廊下にさしかかる。

「失礼します。お呼びですか、お嬢様」

専属ボディガードである蓮生の巨躯が、障子の向こうから声をかける。

「獅子浜の視察に向かいます。クルマの用意をお願い致します」

「かしこまりました」

返答ののち、足音が離れていく。

自由も孤独も、得がたい。

だが不本意に手に入れてしまえば、それらも枷となる。

客観的に見れば、その生き様がどれだけ羨ましかろうものでも。

本気の手合わせの相手は、もう手に入らない。

被った「仮面」がそれを許さない。

最初から最後まで一人の空間にもう一度座礼をし、黒澤ダイヤは退室した。

第六話：大切なこの場所で ― 2

「ただいまー」

ヘルメットを被ったままのよしみが店内に入ってきて、カチューシヤの代わりに三角巾を結んだ井藤むつは、電話の画面から顔を上げた。

*

「お疲れ、よしみ。配達、もう一軒入ってるよ」

「聞いている聞いてる」

むつがカウンターの向こうから出した袋を受け取ると、よしみはエンジン音を鳴らしたままのスクーターを店内から一瞥する。

「交代する？ 気晴らしに」

「いいよ、私、インドア派だから」

「バカなことを」

笑って出て行くよしみに手を振り、背の高いカウンターチェアに腰を下ろしたむつは、また電話の画面に目を落とした。

よしみの父親が店長を務める菓子屋《松月》は、絶賛開店休業中だった。

内浦のメインストリートたる県道一七号線に面した立地だが、クルマ通りがなく、近所の利用者が高齢化で配達に頼るようになった現在、店舗を訪れる人は少ない。せいぜいが、店内の飲食スペースを喫茶店代わりに使う学生くらいのものだ。

中学校時代にはその立場だったむつが、バイトという名の暇つぶしで店に入ったのが一年前。すぐにバイト自体が暇以外のなものでもないと感じたものの、友達のよしみでズルズルと続けていると、去年の秋口、個人経営だった店はOGIグループに買収されてしまった。オーナーとなったOGIが採算度外視で事業継続を決めていなければ、このバイトさえ消滅していただろう。

そんな経緯を経験していたから、近付いてきたエンジンは配達用のスクーターだと疑わなかったし、自動ドアが開いた時、

「どうした？ 忘れ物？」

と禿頭の中年男性に話しかけてしまったのも、一概には責められない。

「す、すみません、いらつしやいませー!」

むつが背筋を伸ばすと、

「ああ、いえいえ、お気になさらず」

男性は気よさそうな笑顔で恐縮した。

「なにしてんのよ、むつ」

飲食スペースから先輩たちの野次が飛んできて、むつはそちらにしかめ面を向ける。

そうしている間にも、男性は禿げ上がった頭頂部をこちらに見せて、カウンター兼ショウケースを眺めている。初めて見る人だが、覚えがある気がする。

「ご旅行ですか?」

声をかけると、男性は貫禄の感じられない顔を持ち上げ、曖昧に頷いた。

「ええ、そんなところですよ。娘と少し滞在することになりました」

「あ……ああ、梨子ちゃんのお父さん!」

男性が眉を大きく上げたので、それが正解だと分かった。

「私、クラスメイトなんです。そっか、梨子ちゃん!」

「はい、娘がお世話になってます」

薄い頭を下げられ、今度はむつが恐縮する。

桑介と名乗った梨子の父は、和菓子をいくつか注文した。むつはそれを手早く箱に詰め、ビニール袋で手渡す。

「小学校の近くに越してきたんですよね? 学校で噂になってますよ」

「噂? なんのです?」

「誰も住んでないはずの家に、ボウツと光が浮いてるとか、夜な夜なピアノの音が聞こえるとか」

「ああ……梨子ですね」

梨子の父は苦笑した。

「ですよね! 新年度からだから、絶対そうだって言ってるのに、みん

なお化けだつて。ね、センパイ！」

飲食スペースに声を投げると、

「桜内が住所を教えないのが悪い！」

と先輩は笑って返した。

「すみません、仕事で挨拶回りもできずに」

「いえいえ——あ、すみません、引き留めちゃって」

梨子の父は和菓子を入れたビニール袋を手に笑っているものだから、ついつい雑談してしまった。

「じゃあ、僕はこれで」

「はい、またいらして……って、少し滞在？　なんです？」

帰ろうとしていた桑介は、むっに向き直る。

「ええ、今月末には、東京に戻る予定ですよ」

「そっか、だから梨子ちゃん、部活はお手伝いだったんですね」

「部活？　梨子が？」

「ええ、作曲のお手伝いを……って、知りませんでした？」

言っではまらなかったか、とむつが思った時には、

「そうか、それは困ったな……」

桑介は小さな声で独りごちながら、店から出て行ってしまった。

自動ドアが閉まるのを待って、飲食スペースから先輩が一人やってきた。

「どしたの？　スクドルのこと、内緒だったの？」

「口軽いなあ、私……」

*

内浦湾に浮かぶ、お椀をひっくり返したように盛り上がった緑色の塊——淡島。

遠目には植物に覆われた二〇〇メートルほどの小さな島だが、島の外周部には様々な施設が点在している。

北東には、黒澤グループが経営する淡島の顔、《あわしまマリンパーク》。

北には、OGIグループが経営する高級リゾートホテル、《ホテルオハラ》。

東には、日本一のカエル展示数を誇る《カエル館》と、松浦果南の祖父が経営するダイビングショップ《ファビュラス・ダイバー・ボーイズ》。

波に浸食された天然の彫刻や、点在する銅像、山をくりぬいて作られたブルーケイブ。

高海千歌は、それらを繋いで外周を巡る遊歩道を歩いている。

午前の陽光が容赦なく地面を焼き、外気温が上がってくるのが肌で分かる。遊歩道の外れの鳥居をくぐり、島内部に入る石段の参道を登り始めると、じつとりと汗が出てきた。直射日光を防ぐ木々のトンネルも、羽織った長袖のシャツをはためかせる海風も、あまり効果がない。

「あつついなあ……」

紙袋を持った手で額を拭い、身体を見下ろす。胴を四つ裂きにするように大きく「チ」と書かれたTシャツの胸元に、一筋の汗が染みを作っていた。スクールアイドルの練習着にしようと選んだ服なのに、なにをしているんだろう。

底の減った靴で山道を登り、ふと山肌を見下ろすと、つづら折りになった石段の途中に老婆の姿が見えた。本土から島の中腹までロープウェイで渡ってきたのだろう、小さなキャリーケースを持っている。

千歌は石段を取って返した。

「松和のお婆ちゃん！ ご無沙汰してますー！」

「あら、千歌ちゃん」

豊鑠かぐしやくとした老婆は、《淡島居住区》に住んでいる松和家の祖母だった。

「持ちますよ」

「悪いわね」

キャリーケースを引き受けると、千歌は老婆に並んで石段を上がる。

「ずいぶん髪が伸びたじゃない。お姉ちゃんに切ってもらってないの？」

「最近は美容院ですよ。前髪は曜ちゃんですけど」

「曜ちゃん。懐かしいわね」

松和家は、高海家、渡辺家、松浦家とも家族ぐるみで交流があった家だ。特に千歌世代は幼馴染みグループでもあり、互いの家を頻繁に出入りしていたのだが、松和家の息子夫婦が孫ともども市内に引越した一年前から、疎遠になっていた。

「最近どう？ 浦星に行ったのよね？」

「部活を始めて、頑張ってるところです！ いずれお婆ちゃんも招待しますよー！」

「へえ。かわいい恋人はできた？」

「こ!?!」

「私も浦星で、お祖父さんと出会ったのよ」

「お婆ちゃん！ 浦女はもう女子高なんだよ!?!」

「そうなんだっけ？ まあ、女の子もいいじゃない」

どこまで本気なのか、老婆はケラケラと笑う。

世間話をしながらロックテラスに辿り着いた。ここからは頂上へ向かう道と、北西に回り込んで居住区へ続く道に別れる。千歌は老婆について、居住区へ向かう。

「ここにも、もう、あと一年しかいられないのよね」

「決まったんですか？ 淡島の無人島化」

「らしいわ、西岡さんの息子さんが言ってたって」

老婆は目を細め、口の端を上げた。

「住むところは小原さんが準備してくれるらしいけど……。この歳で馴染めるかしら、本土にねえ」

一定より上の世代は、OGIグループのことを「小原さん」と呼ぶ。だが千歌はもう、鞠莉個人の顔が思い浮かんでしまう。あの鞠莉なら、どんな家を提供するだろう。

やがてコンクリート造の背の低い建物が、切り開かれた森の中に見えてきた。

「ありがとね、千歌ちゃん」

「いえ、お安いご用ですから」

キャリアケースを返すと、老婆は眉を下げて笑った。

「光ちゃんがいれば、上がってつてもらうのにねえ」

その名前に、千歌の笑顔のまま呼吸をとめる。

何十年も前に作られた建物群で、一時期は多くの漁民で賑わっていたそう。今は両手で間に合うほどの人数しか住んでいない。森に飲み込まれるのを待つ、閑散とした廃墟にも見える。

いや、それを言うなら、この島全体がそうか。

外周部の施設はどこも、閑古鳥が鳴いて久しい。高級リゾートのホテルオハラでさえOGI関係の重役が泊まりに来る程度で、本土の住民が島に渡ること自体が多くない。

それでも、いずれの施設も放棄されないのは、沼津に腰を据える黒澤家と小原家が重なり合う島だから。

不必要に延命される、死にゆく内浦の具現だ。

引越した松和家一家。亡くなった祖父。残された祖母。

そして浦の星の廃校に、淡島居住区の廃止。

全体が、細部が、足並みを揃えて死んでいく。

フラクタルに浸食される海岸線のように。

そこに触れることは、千歌にはできない。

だから、

「それじゃ、お婆ちゃん。私、上に用があるから」

そうやって手を振った。

「うん、それじゃあね」

老婆は、「またね」とは言わなかった。

*

風を切るローターから逃れるように屋上のヘリポートを降りている時、ロールスロイスのリムジンが外来用セキュリティゲートをくぐるのが見えた。

「Hi!・ダイヤー!」

小原鞠莉は口笛を吹くように笑いながら、電話を叫んだ。

「名乗っていただけのかしら。わたくしの電話には画面がありませんの」

「細かいこと言わないのオ！ アナタの番号を知ってる人間が、この世に何人いるのよ！」

菱形メツシユのフェンスまで駆け寄った鞠莉は、眼下の立体駐車場の屋上に、制服姿のダイヤを見つけた。直線距離にして一〇〇メートルは離れているダイヤは、米神に付けたピンを護るように、風を受けて膨らみ長い黒髪を抑えている。

その後ろから、巖のような体躯の黒服の男性が現れた。彼は周囲を確認すると、ダイヤに領きかけ、エレベーターに向かって歩き出した主人の少し後ろにつく。

「ロータスも来てるのね？」

「花頭蓮生です。呼びたいように呼ばないでいただきたいですわ」

言いながら、ダイヤは周囲を見回し、エレベーターの機械室に設置された監視カメラに指を差した。

だがそこではない、鞠莉は小さく笑い、

「上よ、上！ Look Heaveward！」

とフェンスの外に叫ぶ。

音速の間が空き、ダイヤが頭上を見上げた。

屋上のフェンス際に立つ鞠莉が片腕を広げると、見上げたダイヤと目が合った——気がした。

「……なんですよ、この建物は」

「もちろん、この小原鞠莉がPresidentを務める、《OGI
M—Research Institute Hospital》
——《OGI研究所病院》でエス！」

鞠莉はクルリと回ってみせると、ダイヤの溜め息が聞こえる。

「わたくしの記憶では、こちらは沼津市立静浦中学校のはずですが」「拝借したのー！」

OGI研究所病院の建物は、四年前の統廃合で廃棄された静浦中学校の四階建ての校舎をそっくり流用したものだ。だが内部には、《静岡OGI》でムーフォームを研究した過程で開発された最新の機材が搬入されており、最新の耐震工事がなされた外壁も相まって、数十年の歴史を感じさせない最新施設に仕上がった、と鞠莉は自負してい

る。

「ほんとは丸々建て替えたかったんだけどね。『Time Flies』って言うでしょオ？」

『光陰矢の如し』と言いますわ。では時間が勿体無いので聞きますが、本日の用件は？」

「あら、これじゃ不足？」

「施工したのはわたくしたちですから」

建築計画の八割方を黒澤家に委託したのは、鞠莉も聞いている。

「では、あとはプレスリリースで確認致しますわ」

「Hey, Hey! もう、上がってきてよオ！」

ダイヤは鼻息を漏らして、駐車場屋上のエレベーターに乗り込むと、鞠莉は「セブ！」と指を鳴らし、専属のボディガードを呼ぶ。

サングラスに杖を持った黒服が近付いてきて、タブレット端末を手渡した。そこには駐車場の地下に降り、社屋へ通じる通路を歩いているダイヤが映っていた。

「大変だったでしょ？ わざわざLim^{リムジン}oでここまで」

通話のインスタンスを鞠莉の電話から端末に飛ばし、通話は続く。

『《黒澤車両運行》の運転手の腕、甘く見ないでいただきたいですわ』
外来用ゲートに繋がる獅子浜からここまでは、舗装されているとはいえ、細く曲がりくねった山道だ。車体の長いリムジンでは、一つ一つのカーブで神経を消耗したはずだ。そういう場所を選んだのだから、当然なのだが。

社屋の外来用出入口に向かうダイヤたちは、その通路で様々なセンサーによるチェックを受けている。通信機能やカメラ機能を持つ携帯端末、可搬記憶媒体などの存在を検出し、のちの社屋側のセキュリティゲートでの自己申告と突き合わせるのだ。

「あらあら」

端末がアラートを上げた。ダイヤのボディガードの蓮生が装着した筋力増強用のサイバネティクスを、危険物として検知したのだ。

だが鞠莉が驚いたのは、ダイヤに対してだった。防弾防刃着を着ておらず、緊急発信用の端末も持っていない。完全な丸腰だ。

「惚れ惚れするわねエ、ダイヤ」

「なにがですの」

「なんでもオ！ さ、屋上まで来て！」

「ではのちほど」

ダイヤは警備員の詰めるゲートの目前で電話を切った。

二人が各々の持ち物をセキュリティボックスに仕舞う様が、タブレット端末に表示される。サイバネティクスを外そうと上着を脱ぎかけたボディガードを、鞠莉は警備員にとめさせた。

「宜しいのですか」

黒服の言葉に、鞠莉は鼻で応える。

「黒澤宗家の御令嬢が、単身敵地に来るのよオ？ アナタとタメを張れるくらいじゃなきや、困っちゃうわア！」

鞠莉たちが話す間にも、ダイヤたちはOGI研究所病院の地階に入り、冷たいコンクリートに貼られた案内を見ながら廊下を進み、エレベーターに乗った。

それを見届け、鞠莉は端末を黒服に渡す。

「で、ロータスに勝てる？ セブ」

「星のみぞ知る、と言わせてください」

「たまには断言したらどオ？ 勝てるんでしょ？」

「ご想像にお任せします」

のれんに腕押しだ。鞠莉は笑いながら口を尖らせる。

鞠莉が「セブ」と呼ぶ初老の黒服は、二〇年以上もジョルジョ・ルカーニアと小原鞠莉の父娘二代の専属ボディガードを務めてきたベテランだ。だが彼の態度はむしろ、やんちゃなお姫様をたしなめる執事を思わせ、その近くも遠くもない距離感が、鞠莉には心地よい。

と、背後でエレベーターのドアが開いた。

「ま、いいわア。ケンカしないでね」

鞠莉は黒服に笑いかけると、現れた少女に目を向けた。

「もう、待ちくたびれたわア！」

「お待ちせ致しましたわ」

長い黒髪を風に靡かせたダイヤが、日に照らされた屋上に出てき

た。その目は切り揃えた前髪と同じくらいに鋭く、規則的にまばたきをするたびに上下する睫が、むしろ人間味を削いでいる。

鞠莉は目を細めて笑い、

「セブ、コーヒーをお願いできる?」

と自分のボディガードに言った。

「もちろんです。ご希望はありますか?」

「こおんな晴れた日には、エスプレッソ・マキアートの気分ね! ミルクは多めでお願い! ダイヤさんは?」

「わたくしはアメリカカーノをお願い致しますわ。……そうね、蓮生、手を貸して差し上げなさい」

ダイヤもそれに乗れば、彼女の専属ボディガードは、視線を泳がせざるを得ないようだ。

「では、参りましょうか。蓮生様」

「え、ええ。お嬢様、ご用の際には一報を」

「一報を入れる手段はありませんのよ」

二人はエレベーターの隣の階段室に消えた。

ダイヤは鞠莉のそばまで近付いてくる。

そして、

「……ぷぷっ」

膨らませた頬から空気を漏らし、上目遣いで鞠莉を見た。

『わたくしの電話には画面がありませんの』

すまし顔の鞠莉が言う、ダイヤは手のひらで膝を叩いて笑い出した。

「さっさと画面付きの、買いなさいよねエ!」

「だって、あなたに直接電話したら、大問題ですわ!」

そこでダイヤは顔を引き締める。

『こんな晴れた日には、エスプレッソ・マキアートの気分ね』

今度は鞠莉が喉の奥で笑い始める。

「晴れた日と! マキアートは! 関係ありませんわあ!」

「好きなんだもオン!」

一頻り笑い合い、鞠莉とダイヤは目を合せ、また含み笑いをし合う。

「久しぶりね、二人つきりで会うの」

「去年の末に会ったではありませんか」

「それが久しぶり、って言うのよオ！」

ダイヤは片眉を上げて笑い、そして——フェンスの外を見る。

鞠莉もそちらに目を向け、

「さ、ご覧遊ばせ」

手を地上へと向けた。

鷲頭山の斜面を背にする校舎を改装したOGI研究所病院の社屋、その屋上に立つ二人の視界に入るのは、校庭の跡地を倍近く拡張した平地に作られた従業員の住む寄宿舎、衣食住を満たすモール、やはり中学校から流用した体育館とプールと増築された娯楽施設など。

「なるほど、これが——」

OGIグループが市から買い上げた市立静浦中学校の敷地は、東京ドーム一つ分ほどの小さな街に作り変えられていた。

だが、ただの街ではない。現時点ではまだ機密性の高いムーフォーラムの研究を行うために、街の周囲は高い柵と自然の山々に囲まれ、獅子浜と江浦に向かう道を透るにはセキュリティゲートを抜けなければならぬ。

「——これが《静浦》、ですか」

旧村名を与えられた、江浦と獅子浜の間にこじ開けられた空間。

管理され、隔絶された街。

「《統廃合に伴う廃校施設の再利用に関する災害対策計画都市の提案》、その第〇号よ。まだ公表できないけどね」

「計画図は確認していましたが、これが——」

小さなカートに乗って動いているのは、引越してきた研究員やその家族——OGIグループの関係者だ。週明けの稼働に向け、目覚めようとしている。

ダイヤは菱形のフェンスに指をかけ、眉をひそめた。

「——これが、わたくしたちの未来、なのですか？　こんな、フランケンシュタインの怪物のような、街が……」

街がこれで完結しないことは確実だ。モールに立ち並ぶ店舗には

採算度外視の商品搬送が不可欠だし、それはこの街が、OGIグループの庇護下でしか存在し得ないことを意味している。

「自分を育てた景色が、企業に牛耳られたツギハギだらけの街になってしまったと知ったら……。」

「悲しむかしらア？」

鞠莉は歌うように言う。

「仕方ないじゃない。必要なPartsをくつつけて、雷を食らわせるくらいしなきゃ、死体は生き返るわけないでしょ？」

ダイヤは鞠莉を一瞥して、目を伏せた。

「μFoamの件が一段落したら、よりOpenな利用に切り替えるわよ。街も開放して、外からAccessしやすい道もちゃんと整備するしね」

そういう問題ではないことは、鞠莉にも分かっている。

OGIグループは母体こそ沼津出身の小原家だが、現状は世界規模で拡大した事業とアメリカから連れてきたジョルジョ・ルカーニアCEOをトップに据えた外資系企業だ。

だから、街やそこに住む人に対する思い入れがない。

だから、ここまでする。

鞠莉はフェンスの向こうに目を向ける。

眼下の街ではなく、もつと遠く。

工事の始まっている静浦山、その向こうの駿河湾に浮かぶ淡島、さらに奥にはみかん山こと長井崎岬——浦の星女学院。

OGIがLock-on目付した要害たち。

小原家と黒澤家が、破壊する場所たち。

「私たち、地獄に落ちると思う？」

「わたくしが今さら、天国に行けると思っているのですか？」

ダイヤは目を伏せたまま、口の端で笑う。

「果南は違うわよね」

「そう……ですわね」

フェンスを掴むダイヤの指に、鞠莉の手が触れる。

家の都合を建前に、僅かな時間を笑って過ごせたとしても、それは

お家の手のひらの上でしかない。

だが小原家も黒澤家も、街の、社会の、世界の手のひらの上だ。圧倒的な力で押し寄せてくる大局に、いずれは押し流されるのだから。

海の手に。

神の手に？

それでも抗うしかない。

大切な場所を護るために。

*

海拔一三七メートルの山頂にある《淡島神社》の本殿。その入口を開けると、冷たい空気が足元にしみ出してきた。

「お邪魔しまーす、りおさーん」

高海千歌は靴を脱ぎ、一礼すると、無人の部屋に上がった。

現在の淡島神社には神職がいない。主要な社殿や本尊が失われたことで、神社庁からも事実上放棄されてしまったためだ。

だが唯一残された山頂の本殿は、淡島に住む老人などが定期的に掃除をしているおかげで、今日も清潔に保たれていた。

千歌は壁際に紙袋を置くと、五〇畳の狭い板の間を進む。

「千歌ですけどー」

誰もない。

動いているものは、窓から入る光に舞うチリだけだ。

「りおさーん？ 変だなあ、行くって言ったのに」

不意に、髪の毛に違和感。

跳び、肩から転がる。

だん、と床を叩く音。

身を起こし、振り返る。

「なまってはなないね、高海ちゃん」

千歌が立っていた場所に拳を振り下ろしていたのは、人懐っこい笑顔で浮かべた男性だった。

「りおさーん！」

飾りお。

ボタンシャツをラフに羽織った《飾流》空手の師範は、足の裏をジーンズの向こう脛で拭いている。

「今日の差し入れは？ みかんだよね」

「私だよ！」

千歌は笑うと、シャツを脱ぎ捨てた。

息を鋭く吸い、ゆっくりと吐き、上下に構える。

「今日の私はひと味違うよ」

「お、今日はそのTシャツか」

りおが着目したのは、千歌の「チ」Tシャツだった。内浦界限では千歌の母親が販売元に「十」と「万」も出してウチの旅館とコラボしよう」と打診するも轟沈した件で有名だったりする。

「違うよ！ 私だって！」

「髪？ だいぶ伸びたね」

「違うって！」

千歌は足で床板を叩き、もう一度構える。

「もう！ ふざけてると怪我するよ！」

千歌の剣幕に、師範は天井の梁を掴んでいたらしい手をはたくと、白いものの混じりだした太い眉を下げ、頬をニツと持ち上げた。

「させてみる？」

「言ったなあ！」

一気に間合いを詰める。

（今日こそ有効打をとってやる！）

最速のタイミングで左突き。

千歌の先手にりおの眉が上がる。

ラフに羽織ったボタンシャツの内側を狙う。

腕が極まる直前、りおの手のひらが拳の甲をはたき落とす。

（まだ！）

一歩身を引くりおに、右足を踏み込み、右突き。

避けられる。

開いた胴に、カウンター後の先の右突きが迫る。

（狙い通り！）

左も右もブラフだ。

前進する勢いを右拳にこめず、りおの右突きを左腕で抑え。本命の、後の先の右鉤突きを――

（――えっ？）

違和感。

なにに？

分からない。

引く？

（……いや、行くよ！）

上体をひねり、右鉤突き。

りおの左脇腹に拳を叩き込む――

「ほッー！」

――はずが、気付けばりおの背中が、千歌の胸に密着している。

（えっ？）

視界が回る。

だん、と床を叩く音が響く。

「えっ？」

それが、自分が無意識にとった受け身の音だと気付いた時には、千歌は長い髪の間隙から天井を見ていた。

「ワンパターンだね」

数瞬ののち、起き上がる。

なにが起こった？

りおの右突きはブラフで、千歌の右鉤突きを掴んで投げたのか？最初からそのつもりだったのか？

千歌が立ち上がると、師範は満足そうに口を斜めにした。

「どれ、今日のお土産はなにかな」

そして背を向け、千歌が持ってきた紙袋を見る。

（……チャンス！）

小さく距離を詰め、足払い。

りおのバランスが崩れる。

（もらったー！）

倒れ込むりおの左腕に手刀を振り下ろす。

腕の一本でも奪えれば、勝ち目はある。

だがりおは笑っていた。

自らバランスを崩しきって倒れ、下段蹴りを放つ。

「ぐッー」

右脛に完璧に入った。

蹴りの反動で距離をとって、りおが立ち上がる。

その時には、千歌は空中にいる。

痛みを感じている余裕はない。

右腕を振りかぶり、引き絞る。

飛び上段突き。

何度も怪人を倒してきた、必殺技。

りおの眉が弓の字に上がる。

決める！

「うりゃあー」

だが突きが眉間に当たる直前、りおの頭が僅かに左に逸れた。

突きの狙いを逸らされた。

眉骨を押す感触が拳を伝わり。

りおの身体が滑るように左へ消える。

カウンター
後の先。

右鉤突き。

ああ。

やり返されちゃった。

飛んだ勢いのまま肩から地面に落ち、仰向けで板の間を滑り、本殿の壁にぶつかってとまる。

「く……か……い……」

息ができない。

左脇腹に刺さった突きが、水月を打ち抜いていた。

えづきを押し込める。

「お、美味しそう。いいね」

りおは千歌の持ってきた紙袋に手を突っ込み、取り出したみかんの

皮をむき始めた。

その身軽さに、起き上がれないままの千歌は歯噛みする。無視していた右脛の痛みが、じわじわと這い上がってきた。

「手加減して勝てる相手だと思ってる？」

「本気だったよ……！」

「いや、迷ったね」

なんとか立ち上がった千歌は、りおを見る。

優しそうに下がった白髪交じりの眉は、手合わせの前となにも変わっていない。

「一手違えば、今日こそ高海ちゃんが有効打をとってたのに」

「ウソ！」

「ウソじゃないって」

りおは千歌の長袖シャツを拾い、投げた。

千歌はそれを掴み、乱暴に顔の汗を拭う。

「次、本気で驚かせてくれなかったら、破門だからね。まあ、その前に——」

そして、にっこり笑う。

「——死ぬかな」

その言葉に、千歌は目を見開く。

死ぬ？

私が？

喉が上下する。

汗が顎を伝わり、床に落ちる。

師範は板の間を奥に進みながら、みかんを食べている。

次に戦うフォーメアが、師範のように知性と技術を持っていたら。

飛び上段突きが——必殺技が外れたら。

私は、死ぬの？

千歌は一礼する。

「ありがとうございます」

「うん。みかん、枝海さんにお礼を言っておいてね」

本殿を出ると、青空に浮かぶ太陽は南中をすぎている。

第六話：大切なこの場所で — 3

B

ジュール丸を係留し、ウエットスーツ姿でスクーバの器材を陸揚げしている、遊歩道を歩いてくる人影が見えた。

それが幼馴染みの千歌だと気付いた松浦果南は、木製の栈橋に置いたりフトバッグを一瞥する。

だが千歌は、口の中で独り言を言っているだけで、果南の存在にさえ気付いていないようだ。

その様を十分に堪能した果南は、栈橋から遊歩道に上がると、

「や」

と開いた手を顔の前に突き出した。

「ん、え？ 果南ちゃん！ いたの？」

「いたよ。もう、何回呼んでも気付かないんだから」

「ご、ごめん！ 考え事してて！」

「冗談、今が最初」

と言うと、千歌は「ええ!？」と声を上げたが、慌てた顔と怒った顔がこんがらがっている。こころ表情を変える幼馴染みが楽しくて、ついついからかってしまう果南だ。

「で、なに？ 今日もやられちゃったの？」

「え?」

「りおさんに。会ってきたんでしょ？」

淡島神社を根城にしているホームレスに千歌が師事していることは、内浦の住民なら誰でも知っている。島の周囲をトボトボと歩いている時は、師範にメタメタにされた時くらいのものだとも。

「う……。それも……。んだけど……」

果南は栈橋に戻り、海水で濡らしたリフトバッグと器材を拾い上げた。千歌はなにも言わずについてきて、こちらの手を見ている。

「なにか言われた？」

「まあ、うん——つて、違うよ！ そんなことより！」

千歌は気分を変えるように大声を上げた。

「そこ、本当に閉めちゃうの!？」

千歌が指差したのは、カエル館の隣の建物だった。

「ああ」

赤茶色の建物に掲げられた真っ白な看板には、青から紫を經由して赤にグラデーションする『The Fabulous Diver Boys』の文字と、脇を添える三人の男性のシルエツト。

果南の父が開業し、現在は果南の祖父が経営するダイビングショップ『ファビュラス・ダイバー・ボーイズ』は、果南の卒業と同時の閉店が決定していた。

「すっかり閑古鳥だしね。祖父ちゃん一人じゃ回せないし」

「それもだよ！ 卒業したら東京って、なんで教えてくれなかったの！」

栈橋を遊歩道まで歩く果南に、千歌は床板をドスドス鳴らしながらついてくる。

「タイミングがなくてさ。曜には大会で言ったし」

「だって、じゃあテキストで教えてくれたって……」

「じゃあなんで千歌はこの一週間、テキストで聞かなかったの？」

「それは……むうん……」

千歌は口をつぐんだ。

水上にあると途端に重く感じる一式を手に、カエル館とダイビングショップが共有しているウッドデッキに上がると、ダイビングショップの裏へ入る。そこにある器材洗浄槽に張った真水に、器材を入れる。

そして自分はリフトバッグと一緒に、更衣室の扉を開いた。

「覗かないですよ」

「覗かないよー」

個室のシャワー室のカーテンを閉め、リフトバッグを床に置く。蛇口をひねると、冷たい真水がウェットスーツと身体の間染み渡ってきた。

身体を震わせ、ウェットスーツの胸のファスナーを開く。

登校時にも着ているトライウエアがむき出しになる。

水で潤滑したウエットスーツが、するすると脱げていく。
水が全身を覆っていく。

だが、物足りない。

あの快感を知ってしまったら。

「果南ちゃん」

更衣室のドアが開き、果南は顔を上げる。壁に貼られた鏡の中の自分と目が合う。

「入るなら入っちゃって」

言くと、アルミのドアが、砂を噛む音と共に閉まる。

「ダイビングもやめちゃうの？ 一八歳になったら一級小型とるって
言ってたじゃん」

「続けるよ。一級もとる」

「でも東京、行くの？」

「うん」

「なんで！ なくなっちゃうよ、このお店！」

そうなるだろう。

ポニーテールにしていた髪を解き、水に晒す。

いつもと違う果南が、鏡から覗き返してくる。

「ほんとは五年前に終わってるんだよ、このお店は。父さんが死んだ
時にさ」

千歌の返事はない。

「ダイビングが好きだったから、祖父ちゃんに無理言っ続けても
らってただけ。延命してたんだよ」

必定の死に向かい歩む、この街と同じ。

果南はリフトバッグを拾い上げ、口を開く。

ぼう、と淡い光が漏れ、内容物が顔を見せる。

直径三センチほどの球体——梨子曰く《ムーフォーム》——が一
二個。

ネットで調べた限りでは、具体的な情報はなにもなかった。

だが、これと同じ物が果南たちの前に現れたタイミングと、この街
に怪人が現れたタイミングを考えれば、無関係とは思えない。

だから果南は、祖父を介して漁船から“お化け”の情報を集めることにした。

私たちの海に、これ以上、余計なものが現れてほしくはないから。「戦え」

誰が言ったのか。

果南はシャワーをとめ、髪を結わき直す。

鏡の中に、見慣れた顔が戻ってきた。

「お待たせ、千歌」

カーテンを開けると、千歌は長い髪で顔を隠し、更衣室のドアによりかかっていた。

「背中、汚れるよ」

千歌の肩を引っ張り、果南はトライウエア姿で屋外に出る。脱いだばかりのウエットスーツを器材洗浄槽で軽く洗い、外壁と島の岸壁の間にある日陰に裏返して干す。器材はあとでいいだろう、海水には浸してないのだから。

「ほら、入っちゃって」

「ウエットで潜ってきたの？ 寒くなかった？」

「これくらいなら平気だよ。ほらほら」

果南は笑いながら建物の裏口をくぐり、手のひらを開いて見せる。すぐに人感センサーが働き、薄暗いダイビングショップに光が戻ってきた。

「なんか、久しぶりだなあ」

千歌が眩き、店内に歩み出る。

「年度末に来たでしょ。ほら！」

と、果南はカウンターの上面にあった石を放り投げた。

「あー！」

千歌はキャッチし、手のひらをそつと開く。

「……メル^海シャウム^石」

「曜と二人でそれ触って、騒いでたじゃない」

千歌は受け取った白く軽い石に触れ——無言になってしまった。

「欲しいなら持ってけば？ あっても捨てるだけだし」

「うん……」

千歌のリアクションにクエスチョンマークを浮かべるが、果南は問わず、カウンターの内側に入った。

東向きの店内には、様々な商品が並んでいる。消臭剤やベビーパウダー、潤滑油といった消耗品から、防水バッグ、カメラのラギダイズキット、スノーケルなどの海水用品、さらにはログブックのバインダー、フィン、ゴーグル、ダイブコンピュータダイコンを始めとするダイビング用品。

もちろん客はいない。果南が小学生の頃は、店番をサボって潜りに行きたびに祖父の節三に怒られたものだが、今では黙認されているほど、誰も来ない店になってしまった。店舗としても、去年のシーズンから今年にかけての半年で売れたのは、両手の指で数えられるほどだ。

それでも店を維持できているのは、多くの商品に刻印されたロゴを見れば明らかだ。

時計を射る矢を模したロゴを。

「ダメだよ、果南」

眩き、カウンターの上のフォトフレームを手取る。

フアビュラスなヤツら五人の男性と四人の女性の写真。

その九人の一人が、若き日の父——松浦鏡一だ。

この店を立ち上げ、内浦の過疎化に対抗しようとした男。

フレームの亚克力板に反射する、その娘は？

「やっぱり私、父さんとは似てないね」

フレームを倒し、薄い唇で笑う。

「本当にやめるのですか？」

「五年も延命できれば、父さんも本望だよ」

「それはあなたの想像ではなくて？」

顔を上げる。

逆光の入口に目を向ける。

見慣れたシルエットは、浦の星女学院の生徒会長——

「——ダイヤ」

「ごきげんよう、果南さん」

波のように規則的に揺れる黒髪の下で、黒澤家の長女は、親しげな笑顔を浮かべている。

店舗に足を踏み入れるその後ろで、大柄の黒服の男性が入ってきた。ダイヤのそばに常にいるボディガードだ。

果南は目を細め、左手を指差した。

「ダイビングの予約でしたら、本土でお願いします。係員がこちらの受付にいますので」

「ですから、そうしてきたのですわ」

「え？」

ダイヤの言葉に応えるように、果南の祖父、節三が店に入ってきた。

「あ、じいちゃん！　こんちは！」

「おう、千歌ちゃん」

器材を背負った祖父は、果南にダイヤを示す。

「お客様だ、果南」

「祖父ちゃん。あつちは？」

「店仕舞いだ」

節三は店を奥まで来ると、通り過ぎざま、

「天下の黒澤さんだぞ。粗相のないようにな」

と果南に囁き、奥の出口から出て行った。

「どういう風向きの変化？　沼津に産まれて駿河湾を二メートルも潜ったことないあんたが」

「おかしいですわね。シチリアの海でなら、一〇〇メートル以上の記録があるのですが」

ダイヤの冗談に眉をひそめると、果南は千歌を見て、顎で外を示す。

「千歌、行って」

「うん……」

「蓮生、こちらで待機してくださいますか？」

「承知しました」

心配そうにダイビングショップをあとにする千歌と、入口の脇で直立する黒服の前に、ダイヤが果南に歩み出る。

「連れて行ってくださいますか、果南さん。あなたの場所へ」

*

「千歌ちゃん、あ、見えた見えた！ こっちー！」

渡辺曜が手を振ると、連絡船の栈橋が上がってきた千歌がこちらに気付いた。曜は電話を耳に日光の下に出て、改めて手を振る。

「みんな、え!? なにやってんの!?!」

二〇メートル程度の距離を、空気と電波経由で喋る千歌は、こちらを指差して大声を上げた。

幼馴染みの疑問は当然だろう。曜が出てきた円形の休憩所から、善子と梨子も出てきたからだ。

「なんか、集まっちゃってさ」

「じゃあ呼んでようー！」

千歌は電話を降ろして走り出し、
「いってて」

と数歩も行かずに脇腹を押さえて立ち止まった。

「どうしたの!?! まさか——」

曜は駆け寄るが、千歌は手のひらを振って押し止めた。

「——違う違う、りおさんに思いつきりやられちゃったんだよ」

「道場で? ああ、だからテキスト、届かなかったんだ」

「うん。ほら」

千歌はTシャツをめくり上げて脇腹を見せてきた。

「……手加減してもらった?」

「容赦ゼロだよ。すごい痣じゃない?」

「全然」

腰骨と肋骨の間が若干赤らんでいるが、痣にはなっていない。

「もしかして、怪我の治りが早くなってない? アレで」

「アレで?」

アレとはもちろんムーフォームのことだ。

この軽傷で、千歌がさっきの痛みがりをするとはいえない。皮膚の鬱血が先に治り、遅れて内臓のダメージを修復していると考えられないか。

千歌が服を戻した頃には、黒いレースのついた日傘を差したゴスロリ服の善子と、その日陰に入った梨子も近くにきていた。

「私、黒魔術専門だから、回復はできないわよ」

善子はモノトーンのコシツク&ロリータの膨らんだスカートを摘まみ、弾ませてみせた。

「平気、じつとしてれば回復するから」

『イース』系なのね」

「そうそう」

千歌と善子は笑い合ったが、曜にはなんの話か分からない。

「千歌ちゃん、淡島にいたんだ」

「うん、お母さんが、りおさん——道場の師範に挨拶に行けって」

「大事だよ、それ」

「でもコテンパンにやられちゃって、果南ちゃんにこれもらったんだ」

千歌がポケットから出したのは、不規則な形をした白い石だった。

「海泡石？ ファビュラスの？ なんてりおさんにやられると、果南ちゃんがくれるの？」

「分かんないけど、くれたの。なんでかな」

千歌が分からないなら、曜に分かるはずもない。

「なに？ それ」

聞いたのは、日傘を手にした善子だ。

「海泡石。メルシャウムって言うんだって」

千歌は後輩の手のひらに石を乗せて言った。

「うわ、軽い」

「でしょお」

善子はしばし手のひらで石を転がし、

「これ、メシヤムパイプの原料よね」

と言った。

「そうなの？」

「たしかウチにあるわよ。父親が若い頃に使ってたって」

「へえ。見てみたいな」

「なんでよ。高海先輩、メシヤムマニアなの？」

「そうじゃないけど」

千歌は誤魔化すように、長い髪を背中に流した。

その顔は妙に楽しそうで、曜は不思議に思う。普段なら、りおに伸されたあとなら、それこそ地団駄を踏むほど悔しがるのに。

「結局お前も来たのか、高海」

そこに、二年生の担任であり、スクールアイドル同好会顧問の女教師、信代がやってきた。

「先生まで！」

「不満そうだな」

信代は日に焼けた腕に抱えた缶ジュースを、一本ずつ曜たちに放った。

「なんで？ みんな、土日は用事あるって言ってたじゃん」

「うん、笠木センセと市内に行こうとしてたんだけどさ」

「プールの屋根に穴が空いたって連絡が入ってたな」

「天井？ 小学校か中学校の頃にも、曜ちゃん、そんなこと言ってなかった？」

「なんだろうね、静岡のプールって、天井が弱いのかな」

「とにかく、他のプールも抑えてないから、今日の練習は中止だ」

「あ、筋トレと走り込みとバク宙の練習はするよ！」

曜が筋張った腿を上げて連続ジャンプをすると、舞い上がるスカートの中を梨子がガン見してきた。短パンははいているぞ。

「梨子ちゃんは？」

「え、私？ あ、えっと、私は先方が急に予定ができちゃったみたいで」

「先方？」

「うん、検査の」

「あ、そっか、そうだよね」

梨子が事故の検査で沼津まで来ているのは、このメンバーは全員知っている。だが千歌はバツが悪そうに、言葉を濁した。

「私は、ルビィに用事ができちゃったから来たのよ」

「津島さん、忙しかったの？」

「ちよ、リリー！ 人を暇人みたいに！」

そんなこんなで全員が集まった、ということだ。

「じゃ、スクールアイドル同好会、第二回ミーティングといくか。そこで」

と信代が指差したのは、さっきまで曜たちが待ち合わせた休憩所だ。

「使っていいんです？」

梨子が問うと、信代は親指で淡島を差した。

「理事長代理に連絡したら、許可下りたぞ」

あの鞠莉相手なら許可は下りるだろうが、それに正当性はあるのだろうか。

そんな疑問を口にすることもなく、集団はそろそろと歩き出す。

「にしても、高海……似合ってるじゃないか」

信代の含み笑いは、千歌の「チ」Tシャツに向けられていた。

「どういう意味？」

「お前にしか着れない、って意味だ」

千歌は瞬間的に顔をしかめたが、すぐすまし顔になって、信代の顔を指差した。

「笠木センセも似合ってますよ、お鼻！」

千歌が示したのは、白いギプスが貼ってある信代の鼻だった。

「ほお、ケンカ売る気か、お前」

「売ったのは先生じゃん？」

信代はすこむが、千歌はどこ吹く風だ。

「千歌ちゃん、もう！」

曜は千歌を、休憩所の方に向かう梨子たちに押しやり、信代と距離を明けさせる。

その間にも、千歌は信代にあかんべえをしている。

なんでそんなに強気に出られるんだ、と曜は思ったが、信代の鼻を折ったのはエンジェル・フォーメアであり、その怪人を倒したのは仮面ライダーワンダに変身した千歌なのだ、と思い出した。「ワンダⅡ千歌ⅤエンジェルⅤ信代」の関係式で、千歌が優越感を覚えていたとしても、まあ不思議ではない。

しかし、千歌はこの数週間、ギプスを貼った信代を前に授業やホームルームを受けていた。この前の部室でだってそうだったはずだ。なぜ今、面と向かってあんなことを指摘した？

千歌のTシャツは、某《West系》の高校生向けブランドが『ひらT』『カタT』としてリリースしているシリーズの一つだ。曜も練習着を選ぶ時には『よ』と『ヨ』をチェックする程度には定番で、その人気の発火点は、μ sのメンバーが『ほ』Tシャツを着ていたことだそう。それを貶されたから、千歌はカチンと来たのだろうか。いや、それならそれで、嬉々として説明し始めそうではないか？

最近、千歌の考えが読めないことが増えてきた気がする。

いや、「考えが読める」なんて、そもそもが上から目線なのか？

善子の持つ日傘に入った幼馴染みの横顔が、ちよつぴり遠く感じる。

*
全長三四メートルのクルーザー《ジュール丸》は、エンジンを緩める気配をみせず、湾内を南へ走る。

コクピットの表示計を見る限り、時速は二二ノット——約四〇キロだ。数値的にはクルマに大きく劣るが、連続する粒の粗いエンジン音、船自体が作り出した波を切る衝撃で、体感速度はもつと速い。同じ船舶でも、大型の旅客船よりも早く感じる。

コクピットの風防からデッキに顔を出すと、風圧と水飛沫に襲われ、慌てて米神のピンを押さえる。そして、髪をひとつ結びにしたことを思い出し、ここがいかにもいつもの世界ではないかを実感した。「まだ着かないのですか！」

黒澤ダイヤは、コクピットの上のタワーコントロールに叫ぶ。

果南は返答しない。ダイヤ以上の風圧に晒されているはずの席で、果南は高いポニーテールをなびかせ、ただ海を睨んでいる。

気付けば周囲は、海しかなかった。まだ一七歳の果南が持つ二級小型船舶操縦士免許では、陸から五海里——約九キロ以上の海には出られない。だが海上から陸地が見える距離は、せいぜいが四キロだ。駿河湾を南下する船からは、兩岸の山地が水平線の上に薄く見えるだけ

で、富士山も北の空に出てきた雲に滲んで消えてしまっている。

そんな『ウォーター・ワールド』の世界を急駛する果南の顔は、凜々しく、潔い。

触れるものすべてを切り裂き、自分は崩れてしまいそうな、一触即発の鋭利な軽やかさ。

あの時とは違う果南。

すべてが変わってしまった非日常を、クルーザーは一時間以上急駛しただろうか。

鼻を突くエンジンの排気が消え、船の速度が落ち始めた。

「ここから先には行けないよ。今の免許だとね」

果南がデッキに降りてきた。

緑色のラインが入ったトライウエアを着た肢体に、ダイヤは、自分がレンタルした長袖のラッシュガードを着ていることを思い出した。そして、身長が同じにもかかわらずプロポーションでは負けている自分の身体を、思わず抱く。

「寒い?」

「平気ですわ」

ダイヤは果南に背を向け、デッキの縁に腰掛ける。

ゆらり、と船のバランスが動く。

波が船体を叩く音が妙に大きく聞こえる。

果南が操作するタブレット端末が見え、ここが、伊豆半島を半分ほど南進した地点だと分かった。そこが地図上で、黒い黒い青で塗られていることも。

「水深はどのくらいですか?」

「だいたい七〇〇メートルかな」

「七……!?!」

ダイヤは肩越しに海面を見下ろす。

駿河湾は「日本でもっとも深い湾」と言われる通り、大陸プレートが沈み込む駿河トラフに向かって急速に深くなる構造だ。それゆえ、陸からそれほど離れなくても、外洋に匹敵する景観とダイビングを楽しむ、関東圏のダイバーには人気のスポットになっている。それは黒

澤家の人間として、知識では知ってはいた

まさか、高校三年生がたった一時間で来られる地点だったとは。

「ダイヤ、私を信じる？」

「え？」

顔を向けると、果南は後部デッキのプラットフォームに立って、開いた片手をダイヤに見せていた。

あの頃の仕草で、あの頃の顔で。

「果南さん？」

「どう？」

「それは、もちろん信じているけれど——」

言葉の途中で、果南が海に飛び込んだ。

「——果南さん！」

駆け寄るが、果南の姿はどこにもない。

「なにを」

果南はなんの器材もつけていないどころか、ダイビングスーツさえ着ていなかった。この季節の海がウエットでさえ冷たいことなど、ダイビング未経験のダイヤだって知っている。

どうする？

いざとなったら救助を——

「……そんな」

——誰もいない。

半径四キロの視界には、清水港から出航した定期船も、プレジャー

ボートの類もない。

取り残されてしまった。

喉が渴いていくのを感じる。

陸地との連続性を断ち切られた異様。

底知れない重さの水の厚さ。

戻ってこられるのか？

流水にさらされた吸血鬼のように、浮き上がれなくなってしまったら？

身震い。

「ここが、果南さんの場所なのですか？」

何秒か、何十秒か、何分かのものち。

「やっほー」

果南の顔が海面に現れた。

「大丈夫でしたの!?!」

「心配した?」

「当たり前ですわ!」

果南のトライウエアの上半身が海面に現れる。

「心配性だなあ。スタティック・アブネア S T Aで九分五五秒の記録を持つてるんだけど?」

「だって、果南さんが——」

さらに、あぐらをかいた下半身が海面に現れ——

「——え? な、な……」

——巨大な顔が現れた。

言葉を失う。

「こいつは《カヴァルツチャー》。私が名付けたわ」

応えるように、果南の姿が空に上がっていき、ダイヤはデツキに尻餅をつく。

「……タツノオトシゴ、ですか?」

直立した身体に、細い吻を突き出した愛嬌のある顔、妙に膨らんだ腹、渦を描いて丸まった尾。

それらが、大きな鉄板を溶接した騎士の鎧を思わせる、緑がかった金属光沢を放つ鱗に包まれている。

「カヴァルツチャーだってば。広めておいてよ。誰かさんに、変な名前つけられる前にさ」

果南は、その存在の頭上で、あぐらをかいているのだ。

「未発見の新種……というわけではないようですが。怪人——フォーメアなのですか?」

「さあ? その怪人とかライダーってヤツ、私、見たことないからね。ダイヤは?」

「わたくしも、新聞やWebでしか」

タツノオトシゴは、一〇メートルはある巨体を海面から数センチ浮かせ、身体を震わせるたびにハミングにも似た鳴き声をあげては、ようやく立ち上がったダイヤを興味深そうに見下ろしてくる。

《カヴァアルツチャー・フォーメア》と名付けるには、あまりに愛玩動物のような趣だ。

「じゃあさ、お化けは？」

「お化け？」

ダイヤはカヴァアルツチャーの上の果南に目を戻す。

「ここ何週間か、海に光るものが出るって、聞いたことない？」

「……そういえば、網子あんごの方々がそんなことを言っていると、父が言っていましたわ」

「そっか」

果南はカヴァアルツチャーの頭で立ち上がり、鼻先の横から海を見下ろして肩を震わせた。

「曜はこんな高さから飛び込んでるんだ。私には無理だね」

そう言うと、カヴァアルツチャーはするすると海に沈んでいく。

果南が三メートルばかりの高さから海に落ちると、カヴァアルツチャーは再び浮上を始める。そして膨らんだ腹を水面に出したところで停止した。

「乗って」

「は？」

「お腹のところ」

よく見ると、腹の一部に滑らかな皮膚の部分がある。ダイヤがデツキから手を伸ばすと、そこが、ぱく、と開いた。

「うわー！」

「育児嚢だよ。入って入って」

「ええ……？」

お腹の中はたしかに人も入れる空間がある。プラットフォームから足を伸ばし、意を決して飛び込むと、硬いが弾力のある感触がサندانに伝わってきた。

海面から直接上がった果南が壁を（内臓を？）叩くと、波のように

皮膚が閉じた。

表からは白く光るだけに見えた表皮は、内側からはロールスロイスのマジックミラーのように透過した膜となり、波間に心細く浮かぶジュール丸を見せている。

そんな光景にダイヤが驚いていると、

「じゃ、行こっか」

足元が動き出した。

「え？ え!？」

真下に。

カヴァルツチャーが潜行を始めた、それは分かった。だがダイヤは、まるで初めてエレベーターに乗った子供のように、後退りした。背中と手で触れた壁は、暖かく脈打つ餅ののようで、その生物感にまたうろたえる。

「私の場所に行きたいんでしょ？ ダイヤ」

果南は楽しそうだ。

少なくとも、楽しそうな顔をしていた。

泡立つ波が目の前を通りすぎ、縦長の楕円形の視界はすぐに青い海に覆われる。

それも徐々に、徐々に黒く黒く色を失っていく。

「これが、海？」

「そんなこと言うの、ダイヤくらいよ」

「仕方ないではないですか。ダイビングなど、許される家系ではありませんから」

「それはウソだと思うよ」

ダイヤの視界に、果南が顔を挟む。

「琳太郎さんたちは、ダイヤにそんなこと言った？」

ダイヤは目をまたたかせる。

と、床が動いていくのを感じた。ダイヤはすぐに、空間自体がディスプレイスバリー号のセットのように回転しているのだと理解し、乗り込んだ入口が床になるのだと察した。

「だ、大丈夫ですよ!？」

「私を信じなつて。ほら」

果南が軽い調子で透明な膜に飛び乗ると、ダイヤに腕を広げてみせた。

その腕の中に飛び込むのは癪だ、ダイヤは変化していく角度に合わせてサンダル足を小股で動かしていく。

最終的にカヴァルツチャーは、頭を斜め下に向けて平衡安定した。

二人は今は、リクライニングした座椅子に腰掛けるように、透明な膜に身体を預けている。

日光は完全に届かない。

果南の顔さえ、シルエツトでしかない。

カヴァルツチャーの目が放つ光の円錐だけが、視界のすべてだ。

キラキラと光を反射する水面で、人々を引き込む癖に。

すぐ裏側には、人々を引きずり込む深淵を隠している。

その本質は、深淵の底に触れなければ分からないのに。

そんなものを、ダイヤは知っていた。

あの時見た星空。

届かなかった夢。

「スクールアイドルのようですわね」

口走った言葉に、果南は鼻を鳴らした。

「どう？ あの子たちの調子は」

「あなたが聞くのです？」

「私は一週間ノータッチだったからさ」

「手を差し伸べておいて、なにを考えているのですか」

果南は闇の中で、笑ったようだ。

「なぜそんなに、鞠莉さんのことを……怒っているのですか」

その時、カヴァルツチャーの速度が落ちた。

「到着」

どれだけのスピードが出ていたのだろうか、舞い上がる粉塵が光で照らされ、先が見通せない。

「なんなんですか?」

「待つてな、って」

再び垂直状態になったカヴァアルツチャーの中から、果南は粉塵の隙間を縫うようにLEDライトの光を放つ。

塵が消えていく。

「……………え？」

目の前に現れたのは、金属の表面。

錆に覆われ始めたそれが船体の外壁だと気付いた時、そこに書かれたものが日本語だと気付いた時、ダイヤは息を呑んだ。

「連れて行って、って言ったよね、ダイヤ」

カヴァアルツチャーが浮き上がる。

外壁が下に消え、泡と粉塵と小さな生き物しか見えない黒い世界が広がる。

やがて浮上がとまり、カヴァアルツチャーが照らすものが眼下に見えた。

「《さんどつぐ号》……………」

《黒澤造船》が製造した、全長一九〇メートル、排水量一万三〇〇〇トンの大型カーフェリー。

だが、だとしたら、ここは――

「――水深二二〇〇メートル。ここが私の場所だよ、ダイヤ」
痛んだ箇所から崩壊しつつある手すり。

船腹で真つ二つに割れて海底に倒れた船体。

窓ガラスが割れて深海生物の住処となった艦橋。

五年前の事故で沈没した船を前に、ダイヤの足が竦む。

「ここに、父さんがいる」

果南の声が上から聞こえる。

「船長と琳太郎さんは助かって、五二人の船員は水死体で揚がって」
手が震える。

喉が引きつる。

「父さんだけが、ここにいる」

「果南さん」

「鞠莉のこと、怒ってるわけじゃないよ」

果南が膝をつき、ダイヤの肩に触れた。

「OGIが救難艇を出さなければ、みんな死んでた。曜だってあなただって、今みたいにはなつてなかつたんだから」

その指に力が籠もる。

「でも、私は許せない」

ダイヤは置かれた手に手を重ねる。

「なら、なぜあなたは二年前……私たちと友達になつたのです？ なぜ——」

——わたくしたちの手を離したのです？

「私が地獄にいたなんて、知らなかつたからよ」

息がとまる。

「私と一緒に来る？ ダイヤ」

指が動かない。

果南の手を握り締めたいのに。

「私の地獄に」

今度こそ、行ってしまおう。

この、星のない世界に。

今——

「冗談よ」

その手は、ダイヤの指の間からすり抜けた。

「さ、戻ろうか。黒服さんも心配するしね」

カヴァルツチャーが垂直の姿勢のまま、浮上を開始する。

ダイヤの視界から、さんどつぐ号の船影が消え去る。

真つ暗な深海に残された、朽ちかけた人類の残滓が。

ここがあなたの場所だというのなら。

ここがあなたの地獄だというのなら。

あなたの目に、沼津は、浦の星女学院は、どのように映っているのです？

わたくしたちは？

第六話：大切なこの場所で — 4 (完)

*

「で、進んでるのか？」

顧問の笠木信代が改めて問うと、「はい！」と「チ」Tシャツを着た千歌が手を上げた。

「三曲目もほぼ編曲終了だよ！ なんと！ このちかっちが全部やっただから！」

「あの続きをか？ てか、お前、楽器できたのか？」

「できなくても！ なせばなる！」

千歌は梨子のスクールバッグからノートパソコンを出し、トラックパッドをペシペシと触った。

「千歌ちゃん、復帰はこっちだよ」

隣に座る梨子が横から操作すると、千歌は不満そうな嬉しそうな顔で梨子の肩に肩をよせた。

淡島へ渡る小さな港の、広い駐車場に面した小さな円形の建物は、休憩所といってもしつかりしたコンクリート造の建物だ。

淡島のレジャー施設《あわしまマリンプーク》が繁盛していた頃には、ここでチケットの販売が行われていたこともあったが、それがロープウェイ乗場の建物に統合されてしまった現在は、ベンチ以外の機能を持ち合わせていない。

中途半端な立地から老人の寄合所としての役割も持たず、土曜の午後を回った今も、ベンチに座っているのは信代、千歌、曜、梨子、善子の五人だけだった。

「お待たせ！ じゃあ我が渾身の一曲、とくとご覧あれ！」

「待つて千歌ちゃん、説明——」

梨子の言葉を遮って千歌がパソコンを操作し——

「たららら、たったっ、たららら、チャチャ！」

——信代は嘖き出した。

再生された音源が、明らかに千歌の歌声だったからだ。

だがボーカルではない。メロディ裏メロドラマから手拍子らしき

音まで自分で歌って、ダビングしているのだ。

「お前！ 楽器！ これ！」

「私だよ！」

部員に目を向けると、曜は苦笑して首を振り、善子は口をひくつかせている。

「おい桜内、確かにアバンギャルドだけど、これでいいのか？」

「途中なんです！ 楽器に置き換えますから！」

「えー!? 換えちゃうの!?!」

「換えちゃいます！」

「ビビった、ウチの体育館に高海の声が充満すると思ったら、鳥肌が立ったぞ」

「ほら！ 先生こそケンカ売ってるじゃん！」

「売るべき時は売らせてくれ」

医者からはもう不要だと言われている鼻のギプスを指で叩くと、千歌は口をとがらせた。

「このままじゃダメかなあ」

「ダメだよ、シンセの使い方もちゃんと教えてあげるから」

曲は完成まで梨子に任せれば問題ないか。指で音源の停止を促すと、今度は善子に目を向ける。

「津島、衣装はどうなってる?」

水を向けられた時代錯誤なゴスロリ少女は、半笑いの顔のまま口を開く。

「ああ、えつと……型紙はそれっぽくできて、部費も予定の半分は集まったわ。あとは材料の買出しと実作。先輩たちの採寸は必要だけど——そうだ、ねえ、パーソナルカラーってどうなってるの?」

後半はメンバーへの呼びかけだ。

「私みかん色がいい！ 曜ちゃんは青だよね？」

「青は果南ちゃんじゃない？」

「果南ちゃんはエメラルドグリーンだよ」

「じゃ、私は……水色でお願い」

「オツケオツケ、千歌先輩はオレンジ色、曜先輩は水色ね」

「みかん色！」

「細かいわね……。つて感じですよ。知り合いに手伝ってもらおうから、来週中には見せられるかな」

善子は電話にメモを書き、ショルダーバッグにしまった。

「衣装は平気そうだな。あとは振り付けか。曜？」

「はいはー——あ！」

曜のスケッチブックは、気付けば千歌がペラペラとめくっている。

「千歌ちゃん、勝手に見ないですよ！」

曜が手を伸ばすと、

「いいじゃん、見せにきたんだし！」

と千歌はベンチから立ち上がって曜をよけた。

「それが振り付け？」

梨子が聞いたので、曜は千歌を諦めたか、頷いた。

「棒人間だ、可愛いわね」

「でも、これじゃ紙芝居だよ、動きが分かんない」

善子と千歌の言う通り、スケッチブックに描かれていたのは、歌詞に対応するシンプルな棒人間のポーズだけだ。振り付けとは言い難い。

「だからヨハネさんにカメラ持ってきてもらったんだよ」

「ようやく私が、本来の役割で活躍する時が来たわね」

そんなことを言いながら、善子はショルダーバッグから三脚やビデオカメラを取り出した。

「なんだ、本来の役割って」

「元々は私、裁縫とカメラ係だったのよ。パフォーマーなんて聞いてなかったわ」

「できないのか？」

「さあ？ やったことないし」

善子の返答は正直だ。正直すぎて心配になってくる。

「こんなグラグラで、ほんとにライブなんてできるのか？ あと一箇月もないんだぞ？」

「じゃあ先生も踊る？」

そう言ったのは千歌だ。

「私がアイドルやるように見えるか？」

「いや全っ然見えないね」

「ケンカ売ってんのか、この《素晴らしき海原の会》のメンバーに」
「理不尽！」

千歌の頭をグリグリしている横で、善子が曜を見た。

「でも松浦先輩って、一番歌がうまかったんでしょ？ 前途多難よね」

「私たちが上手くなるしかないよ。ね、千歌ちゃん」

「自信ないなあ……」

「ま、この音楽の神《イヒ》の力を授かりしヨハネなら、全人類を墮天させるパフォーマンスを魅せることなど容易いことよ——」

「じゃ、ヨハネさん、カメラよろしく」

「聞いてた!?! 今の！」

ボケなのか突っ込みなのか分からない発言をスルーし、曜はカメラの前に立った。四人はベンチに並んで座り、見守る。

「では、渡辺曜、ダンスの振り付けを発表します！ ミュージック、スタート！」

片手を上げた曜は、千歌が再生した曲に合わせて踊り出した。

途端、

「あつ、こりやヤベえ」

「これやるの？ 私たちが？」

「帰っていいかな」

信代、千歌、善子の顔が引き攣った。

「ストップストップ！」

梨子が立ち上がって手を叩き、曜は動きをとめる。

「なに？ まだAメロも終わってないのに」

「曜ちゃん、あなた、スクールアイドルを舐めてる？」

梨子の目が据わっている。

「え？ え？」

「その三人、今の曜ちゃんのダンス、どうだった？」

梨子に三人呼ばわりされた顧問と生徒は、顔を見合わせる。

「どう、って……どうもこうもないだろ……？」と信代。

「ボディビルダー？」と千歌。

「歌舞伎でしょ」と善子。

「操り人形みたいな」と梨子。

「ああ、パントマイムだ」と信代。

「ちよ、ちよ、ちよっと！」

曜は両手を突き出して振る。

「なんなの？ なにそのリアクション？ ダメだったの？ なんて？」

曜が言うと、梨子は無言で善子のビデオカメラを指差した。

気圧された善子が休憩所の壁に向けて、映像を投射する。

曜は絶句した。

映し出されたのは、スケッチブックに描いたポーズを再現する、曜の姿。

その再現度は高く、信代は曜の身体性に改めて驚嘆するのだが。

「特撮ヒーローの……名乗り？ みたいだね？」

苦笑して放った自分の言葉で曜が青ざめたのを見て、四人は問題意識が共有されたことを理解した。

曜はスケッチブックの紙芝居的時間感覚をも、再現してしまったのだ。

「分かった、状況は分かった。高海、桜内、編曲完了を目指せ。津島、引き続き衣装を頼む。曜——」

信代は肩を叩かれた曜は、魚のように口をパクパクさせた。

「——お前はちよっと勉強しようか」

*

ガラガラの駐車場に社用車を乗り入れた桜内桑介は、すぐに娘の姿を見つけ、停車した。

パワーウィンドウを開けて手を振ると、娘と友達が駆け寄ってきた。

「後ろに乗って」

「どうしたの？ このクルマ」

「ちよつとね」

桑介が乗ってきた社用車は、いつものセダンではなく無骨なワンボックスカーだった。

梨子がスライドドアを開け、

「お邪魔しまーすー！」

と髪の毛の長い少女が乗り込んできた。

「はい、どうぞ」

桑介が肩越しに返答すると、背後を気にしながら乗ってくる梨子と目が合った。

「乗る子、まだいる？」

「ううん」

二人がシートベルトを締めるのを待って、桑介はアクセルを踏み込む。

エンジンが軽い音を立てて、タイヤがコンクリートを踏み締める感触が伝わってくる。

「あの、梨子ちゃんのお父さんですよ？ 私、高海千歌って言います！ いつも梨子ちゃんにはお世話になってます！」

「ちよつと、千歌ちゃんー！」

「いえいえ。こちらこそ、梨子がお世話になっていきます」

千歌と名乗った少女の真面目な発言に、桑介は思わずバカ正直に返答してしまう。

「それで、どちらまで？」

「お父さん、タクシーじゃないんだから」

「十千万って旅館まで！ 道沿いに行った左側です！」

「千歌ちゃんも！」

調子を狂わされている梨子に頬を緩めつつ、桑介は県道一七号線を南へと走り出した。

「それで、なんでこんなクルマなの？」

「ウチから荷物を運ばないといけないんだ」

「平気ですよ！ 私、よく軽トラとかワゴンとか乗ってますから！」

「そういう意味じゃなくて……」

「どういう意味？」

「べ、別に、意味はないんだけど」

バックミラーを見ると、千歌は活発そうな顔付きに似合わぬ長髪を遊ばせ、眉を寄せる梨子を覗き込んでいた。

梨子はもしかしたら、「東京から出てきた桜内親子が乗っているのが野暮ったいワンボックス」という点を恥じているのかもしれない。その若者らしい自意識は、四〇歳を越えた桑介にはすでにないもので、そう思えば、頼りない父だと思いつつ気を遣って接する普段と違い、友達の前でなんとか体面を取り繕おうとする娘が、微笑ましく思えてくる。

「あの、東京の頃の梨子さんって、どんな感じだったんです？」

「ちよつと、千歌ちゃん！」

「普通の子だったよ。家では基本、ピアノを弾いてたんだよね」

「掘り下げなくていいから！」

「やっぱり弾くんじゃん！ 梨子ちゃんの生演奏で練習したい！」

「またそれ!? もう、ヤダって言ってるでしょ!？」

照れ隠しか大声を出す梨子に、千歌がまたちよつかいを出し、二人はじゃれ合い始める。イタズラっぽく笑う千歌に、梨子は顔を赤らめて声を荒げてはいるが、本気でイヤがってはいないようだ。いい友達だと想像できる。

海岸に沿った県道を走る。深く入り込んだ海は穏やかな波に揺れ、遠くに横たわる山々は雲に煙っている。夜闇に浮かぶ電灯しか見えていなかったからか、雲間から覗く太陽が照らす景色が眩しく、桑介の目は細まり、口の端も自然と持ち上がる。

「いいところですね、内浦は。街も自然も近くて」

「そうなんです！ いいところなんですよ！」

何気ない感想に、娘の友人ががっぷり食い付いてきた。

「みかんは美味しいし、沼津も伊豆の国も近いし、海水浴場はたくさんあるし、湾内でダイビングもできるし、少し離れば《らららサンビーチ》も《大瀬明神の神池》もあるし！ 最高なんですよ！ 梨子ちゃんもそう思うでしょ!？」

「え？ 私、どれも知らないんだけど……」

「なんでよう！ じゃあ連れてってあげる！ お父さん、行き先変更です！」

「じゃあ、大瀬崎まで行ってみようか？」

「お父さん！ 仕事があるんでしょ!?!」

観光案内所の番組のようなやりとりだ。

しかし今の自分はまさに、娘の友達と一緒に遊びに出かける父親のようだ。状況に相応しい年齢からは五年ほどズレているだろうが、コンクリートとガラスの中でOGIグループの中での立ち位置に悩んでいた数十分前や、沼津からの撤退に向けた引き継ぎにステアリングを握っていたさつきまでより、むしろ現実味がある。

もちろん、それが現実逃避なのは分かっている。

だから、

「あー！ ほら、今のところ！ 《いけすや》って言って、アジが美味しいんです！ 絶品なんです！ アジ井とアジフライのセットがオススメ！ ご家族三人でいかがですか!?!」

と千歌が指差し、

「千歌ちゃん、お母さんはこっちはいないんだよ」

「あ……」

梨子の指摘に口を開けたまま凍り付いた時も、桑介の表情に変化はなかった。

「ごめん……ごめんなさい。東京で入院してるって、私、聞いてたのに」

千歌は俯き、梨子はその肩に触れる。

「気にしないで。そうですね、いつか三人で来れたらいいね」

桑介はできるだけ柔らかい口調で言う。

梨子も千歌の耳元になにかを囁いたようだ。

ややあつて、千歌は顔を上げた。

「来てくれるなら、フォーメアの件が全部片付いてからですね。今の内浦は安全じゃないですから」

その発言に、桑介は虚を突かれる。

「心配ですか？ 怪人は今のところ、すべて仮面ライダーたちが倒しているけど」

「仮面ライダーだって無敵じゃないんです。そんなに頼りにしないでほしいって思ってますよ」

自分の手元を見下ろす千歌に、これが一般人の認識なのか、と桑介は驚いた。

だが言われてみれば、この前現れたワンダは、戦い慣れていないのか、如何にも弱そうなシエル・フォーメアに苦戦していた。シャイニーの実戦も披露できていない現状、仮面ライダーへの信頼はOGIが考えるより低いのもかもしれない。

「僕らも、もっと頑張らないとな」

その呟きは桑介の想定より大きかったようで、千歌はパツと顔を上げた。

「僕ら？」

「あ、いえ——」

「——お父さん、OGIの会社に勤めてるの」

「梨子」

「いいでしょ、教えたって」

「え？ 中の人？ シャイニー作ってるんです!？」

「いや、僕は——」

「——ただの平社員よ」

娘の素っ気ない口調に、

「出世しそうなんだけどな」

と桑介は苦笑する。

「千歌さん、心配しないでください。たしかに仮面ライダーは頼りなく見えるかもしれないけど、OGIグループは一丸になって、この街を護ろうと頑張ってますよ。今だってそうです。だから、内浦は大丈夫です」

千歌は何度か瞬きしてから、

「大丈夫……」

俯くようにゆっくり頷く。

「そっか、そうだよね。大人の人だって戦ってるんだよね」

その顔に、ほのかに笑顔が戻ってきて、桑介は安心した。

その自覚に驚いた。

沼津への出張で関わったムーフオームおよび仮面ライダーに関する作業を、桑介は業務として割り切っていた。フォーメアは実際に内浦で人々に恐怖や被害を与えているし、高い金を使ってシャイニーを開発しているとはいえ、全体としては対岸の火事のような認識で、ネットや同僚と同じでエンタテインメントの一種のように思っていたからだ。

いや、そんなことを言語化して考えてもいなかった。桑介のリアルはあくまで、被検体としての役割を負わせた娘を、早く母親のところに連れて行ってあげたい、という思いだけだったのだから。

だが、その娘の友達の顔を見れば、桑介の心は苦しくなる。

元々人口の流出が深刻化していると言われる街に現れた異常事態で、旅館の娘である彼女の生活が変化したこと、それに順応しようともがいていることが、桑介にも想像できたからだ。

その想像は、地図上の一地域であり、異動通知の文字であり、短期滞在の住所であり、借家と職場の往来であり、あと何週間かで去ることになるだけだったこの内浦が、桑介自身のリアルになったことを意味していた。

桑介はそれに驚いたのだ。

(いや……)

それも、言語化するまでもないことか。

和菓子を買って一人で会社に向かった時には見向きもしなかった景色に、自分がなにを感じたかを考えれば。

*

「あ、そこだよ、その旅館」

せいぜいが五分程度の道のりを経て、桜内桑介の運転するクルマは、貫禄のある日本家屋を向正面に見せる旅館の前に着いた。

梨子がクルマ通りのない前後を確認して降り、

「ありがとうございます」

千歌も乗ってきた時とは違う真面目な面持ちで降りる。

「じゃあ梨子、遅くなる時は一言連絡しなさい」

「うん」

「それじゃ、娘をお願いします、千歌さん」

「もういいから、お父さん」

口を膨らませる梨子に笑いながら、パワーウィンドウのボタンに手をかけ――

「お父さん！ 折り入ってお願いがあります！」

――千歌が上がりかけた窓ガラスに掴んできた。

「千歌ちゃん？ お、お父さん、って」

「どうしました？ やはりどこかに出かけます？」

桑介がふざけて問うと、しかし千歌は浅く吸った息を鋭く吐き、改めて息を吸った。

「梨子ちゃんを浦の星女学院に正式に入学させてください！」

その言葉に、桑介は目を丸くする。

「ち、千歌ちゃん!？」

「家のことに口を挟んで、不躰なのは分かってます！ でも、私、梨子ちゃんと一緒にやりたいんです！ スクールアイドルを！」

スクールアイドル。

先ほど菓子屋で聞いた名だ。

「待ってよ千歌ちゃん。曲はもうほとんどできてるし、メンバーだって足りてるんだから、私が入部する必要もないでしょ？」

「もうそんな理由、関係ないよ！ 私が梨子ちゃんとやりたいの！」

「それは、でも……」

恥ずかしそうに頬を染めた梨子は、友達の問いに娘は即答せず、父の顔を見た。

「うーん、困ったなあ」

学校で友達を得た梨子は、桑介よりずっと早くに、この街をリアルとして実感していたはずだ。だから学校に属するスクールアイドルの手伝いを始めたのだろう、それは想像できる。

だが、梨子がここにいるのは――桑介が静岡OGIに所属している

のは、梨子の検体としての役割が終わるまでだ。それは昨日のワンダ出現の影響で今日の検査がなくなったように、様々な要因で前後することはあるが、それでも五月初旬には終わる見通しなのだ。

それをこの少女は知っているのだろうか。

「お父さん！」

その真摯な表情と声を知れば、桑介も子供扱いはできない。

「千歌さん」

呼びかけると、千歌は真剣な目を向けてきた。

「聞いているとは思うけど、僕たちは梨子の検査のために、ここに来ているんです。近いうちにここを去らなきゃいけない」

「それは分かっています。短い間でもいいんです！」

「なぜそんなに、その、スクールアイドルをしたいんです？」

「護りたいからです、大切なこの場所を！ 大人の人は違う、私たちのやり方で！」

「アイドルになつて？」

「はい！」

フロントガラスに視線を向け、少し考える。

「梨子はどうしたい？」

桑介はスクールアイドルに明るくない。夏や冬に大会の模様をニュースで知る程度だ。だがアイドルと銘打つ以上、人前で歌ったり踊ったりする資質が求められることは想像できる。

それが梨子にあるのだろうか。

「私は……」

梨子は口ごもり、目だけで千歌と父を見比べる。

そこで桑介は思い出した。

「そうか、この前、会社に来て言いかけたことって、このこと？」

「この前？」

「なんで体験入学生なのか、聞きに来たよね。できないことがある、つて」

梨子は首を傾げる。

「覚えてない？」

「あの、それっていつのことです?」

「今週の月曜日ですよ。日曜日のじ……検査の翌日なので」

桑介が答えると、千歌はパツと表情を明るくした。

「じゃあダイヤさんに言われた日じゃん! そうだよ、やっぱり一緒にやりたかったんだよね!!」

梨子は目を泳がせている。

「梨子、どうした?」

「一人で会社に行った時……だよな? でも、あれ?」

梨子は前髪をかき上げるように持ち上げ、額に触れる。

「どうして?」

「梨子ちゃん? 具合悪いの?」

千歌が梨子の肩に触れると、梨子は弾かれたように顔を上げた。

「あの、ごめん……この話、あとでいい? 私、なんでだろ、変な感じ
で」

梨子の態度に、桑介は困惑する。

静岡OGIの社内で桑介と話したことを、どうして語らないのだろう。体験入学生でいることを、役目が終え次第ここから去ることを、梨子はあの時、納得した。その結論を、友達の前で言いたくないのか?

だとしては様子が妙だが……。

「平気? 調子悪いんだったら、このまま帰る?」

「……ううん、頑張る。千歌ちゃんをビシバシ鍛えなきゃ」

そう口にした梨子は、もうすっかり元通りだった。

「ええー。優しくしてくれないの?」

「しません」

言い合う二人に、桑介はまたも困惑するが、

「あの、ごめんなさい、急に無茶なこと言って」

千歌が丁寧な頭を下げてくれば、意識を切り替えざるを得ない。

「あ、ええ、いえ。でもビックリしました、越してきて間もないのに、こんな友達ができてたなんて」

「そ、そうですか? いやあ、それほどでも……」

さつきの真剣な顔はどこへやら、千歌はふにやりと笑う。

梨子も今度は照れ隠しをせず、嬉しそうに千歌を見ていた。

「梨子、僕は行くけど、もし体調が悪くなったら、すぐ連絡しなさい」

「うん……」

「スクールアイドルの件の結論も、だよ？」

「うん」

「では、千歌さん、梨子のこと、よろしくお願いします」

「もちろんです！　ありがとうございます！」

窓を閉めてワンボックスを出す。

バックミラー越しに大きく手を振る千歌を見て、音ノ木坂女学院時代の梨子にもあのレベルの友達がいたのだろうか、と桑介は考える。少なくとも桑介は、梨子の口から友達の話聞いた覚えがなかった。

内浦の自宅に着いた桑介は、エンジンを切ると、クルマを降りずにダッシュボードを開いた。車検証などの書類に、誰かが置いていった文庫本、そして桑介が入れたA4サイズの茶封筒が見える。

茶封筒は二つ。

東京は芝浦の《OGI研究所》への異動。

沼津は静岡の《OGI研究所病院》への異動。

似たような名前を付けたな、と桑介は口元で笑う。

昨日、前者を受け取った時、断る理由はないと考えていた。たった一箇月かそこらの出張で、被検体を提供して実験のサポートに入っただけで、栄転としか言いようのない立場に迎え入れられるのだから。

だがなにより、梨子のことだ。

沼津にいる以上、梨子は《ブランキア》であり、OGIの被検体だ。その宙ぶらりんな状態は、父親としても辛い。だから検査が終わり次第、可能な限り早く、娘を母親の場所に連れて行ってあげたいと思っていた。

だが。

新しい友達とじゃれ合う梨子の顔を思い出す。

娘のために言葉を尽くす千歌の顔を思い出す。

契約を遵守するなら、桑介がこの街を出る時、それらは永遠に失わ

れる。

桑介は残りの人生を、記憶の中の打ち沈んだ梨子と生きていかなければならない。

それを考えれば、もう一つの実験肢が鎌首をもたげてくる。

(知っていたのか？ 小原鞠莉は)

内浦が、梨子の大切な場所になっていることを。

同種の感情が、桑介に芽生えるであろうことを。

次回予告

曜 「なんかさ、笠木センセのところだけ、妙にギャグテイストじゃない?」

ダイヤ 「せっかくシリアス一辺倒で攻めていたのに、曜さん、なんということを……」

曜 「え、私のせい?」

花丸 「ずっとシリアスだと疲れちゃうから、渡辺先輩はあれでいいです」

曜 「色々言いたいことあるけど……まあいいや。次回、仮面ライダーメルシャウム第七話、『目指すのはあの太陽』」

ダイヤ 「そして曜さん回、ということですね」

花丸 「ん……」

曜 「まあ、そうともいえるかな」

ダイヤ 「?」

花丸 「お楽しみにずらー!」

C

「あー、クソ」

コンパイラにエラーメッセージが吐かれ、高海美渡も汚い言葉を吐き返す。

「これダメなんだっけ? ったく、ShellもCも専門じゃないつてのに……」

ブラウザを立ち上げてネットで検索しようとするが、セキュリティ警告が表示されてしまう。

「余計なことをしてくれちゃってもう!」

先日、機密情報漏洩に関するセキュリティブリーチが判明したことで、JH開発室からのインターネット接続が全面的に禁止されたしまったのだ。おかげで今まで許されていたネットでの調べ物ができなくなってしまう、美渡の作業効率は急降下していた。

「いや、落ち着け、高海美渡……」

頭の高さのパーティションで区切られた開けたオフィスには、自分以外の作業者はいない。爪先でジュートソールのサンダルを弄びながら、ノースリーブのブラウスの胸元を摘まんで風を送り、への字にした口を少しずつ解いていく。

要求された実装はとっくに終わっていた。だがみんなの目に触れる以上、ダサイコードは書きたくない。そんな意地のせいで、休日出動しながら時刻は二時半を回ってしまった。

手を動かしている間は夢中な分、一度ストップをかけられると著しく機嫌が悪くなる自覚はある。唇を振わせるように息を吐き、OGI製のCPUアーキテクチャマニュアルと、先輩が持っていた閲覧権を借りて入手したハードウェア設計図を広げ、キーボードを叩く。

問題の箇所を特定し、修正、コンパイルは通過。テストコードの結果はオールグリーン。

「当たり前だろ、この美渡様の手にかかれば」

次はシミュレーターにリモートで繋ぎ、モジュールをアップする。処理速度は申し分ない……と思う。

「これで限界かなあ」

背もたれを倒して伸びをする。

「お疲れ様です、高海さん」

口から心臓が飛び出すかと思った。

蛍光灯の逆光の中で、直属の上司の顔が覗き込んでいたからだ。

「しゅ、主任！ お、お疲れ様です！」

思わず脇を両手で隠し、声を上げる。

「はい、お疲れ様です」

繰り返す主任を前に、急いで姿勢を直そうとするも、リクライニングは妙にノロノロとしか戻らない。

隠した脇は永久脱毛して久しいことを思い出したが、今さらわざわざ見せるのもおかしい。

気まずい思いに目を泳がせるが、主任は伸び放題の髪の下で、涼しげな笑顔を浮かべたままだった。

「進捗は如何ですか？」

美渡が自分のマシンと正対するのを待って、主任が口を開いた。

「えっと、JH担当分の全モジュールの単体テスト、ただいま完了です。明日の日曜一杯で内部結合して、提出できるかと」

「テスト設計は？」

「昨日のレビューの戻りは取り込んだと思います」

「把握しました。ありがとうございます」

「……って、なんで私がJHのまとめ役みたいになってるんですか」

最年少二二歳の自分が、JH開発室の進捗報告を主任にしている絵面がおかしくて、美渡は笑ってしまう。

「申し訳ありません、サポートに入っていたのに、JN開発室に付きっ切りで。皆さんには無理を聞いていただいて、本当に感謝しています」

「いえ、そんな」

一〇歳以上年上の相手に慇懃な口調で話しかけられると、丁寧とはいえない敬語しか使えない美渡はむず痒くなる。

「今日はもう帰られますか？」

「そうですね。ここの洗濯機やシャワーは、あんまり使いたくないし」
「同感です」

主任は笑い、着込んでいるが清潔に保たれた白衣をつまんだ。

その大して気にしていなそうな身なりも、顔を縁取る伸び放題の髪と雑に当てた髭も、年頃の美渡としてはあまり近付きたくない属性ではある。だがこの人物に関しては、あまり苦手ではなかった。なにを考えているか分からない目や、上品なアルカイクスマイルを浮かべる口元に、どことない不穏さを感じるから、と推定したことはあるが、答えは出ていない。

「しかし、不思議ですね。美渡さんのような方が、なぜこのような仕事

を？」

そう口にした主任は、美渡の頭を見た。

彼の目には、慎ましいが値の張るピンやピアスで彩られた、手入れを欠かさない髪が見えていることだろう。まじまじ見られると照れくさく、横髪に触りながら顔を逸らす。

「知らないです？ JNでも有名な話だと思っただんですけど」

「あまり雑談はしないものでして」

見た目からして仕事しか興味がなさそうな主任は、それをなんでもないことのように言った。

実際のところ、美渡は浮いている。座り仕事なのでそれほど値の張らないパンツスーツが基本になったが、それでもジャケットを脱ぐ就業中は、快適性とスタイルの両立できるコーデを選んでいたりする。

そういう人物は、男性であれ、片手で数えるしかない女性であれ、このオフィスには皆無なのだ。主任が気になる気持ちは分かる。

「まあ、その、仕事をサボってるところを見つかっちゃって」

主任が小首を傾げた。先を促したようだ。

「ほんとはホテルオハラのコンシエルジュの採用だったんですよ。でもあんまりにも仕事がなくて、暇で暇でExcelのマクロで『マリオブラザーズ』を書いて遊んでたら、上司に見つかっちゃって。で、コピーを渡したら、いつの間にかこっちに転籍になっちゃったんですよゲームを？ VBAで？」

頷くと、主任は苦笑した。

「高海さんって、おいくつなんですか？」

「いいじゃないですか、別に！」

笑いながら言った後、まるで自分に対する千歌の反論のようだ、とさらに笑いがこみあげてくる。

そんなことを考えていたから、

「高海さん、仮面ライダーに興味はおありですか？」

「は？」

主任の唐突な話題についていけず、美渡は片眉を上げた。

「あ、え、えつと……妹は夢中ですよ。高校生なんで、子供っぽいとは

「思いますけど——」

「——そうですか!」

と、主任に笑顔になった。

「ではこちらへどうぞー!」

「え? ああ……」

主任は嬉しそうにオフィスを出ていき、

「私は、興味ない、っていうか……ええ?」

一人呟いた美渡は、付いて行かざるを得ない。

廊下の突き当たりにある、一度も開いたところを見たことがない扉がカードキーで開き、主任のあとについて入る。そこは本社ビルのちようど中央付近に位置する階段で、主任はそこを下っていった。

「あの、どこに?」

主任はボサボサの髪の間で笑い、一階の扉をカードキーで開ける。さらに廊下を通り、いくつかのセキュリティを抜け、辿り着いたところは二階まで吹き抜けになっている広い部屋。その中央の作業台に

「……はあ?」

——天井から吊るされた人影があった。

俯き加減で立っているそれは、ギラツと輝く銀色の装甲をまとった、のつぺらぼうだった。人が入っているようには見えないが、天井や床から伸びるケーブルやパイプが接続され、装甲の方々にインジケーターが明滅しているところを見るに、なんらかの動作はしているらしい。

「《ラギダイザー計画 試作μ-6型 2号機》です」

美渡はそのフォルムに見覚えがあった。

「仮面ライダー……? ウチでも開発してたんですか?」

「『ウチが』、開発したんですよ。我々、静岡OGIが」

「え?」

主任の方に振り向くと、彼は上を示した。

「皆さんと同じく、《仮面ライダーシャイニーMark II》と呼んでいただければよろしいでしょう」

二階部分に作られた広い窓から、数名の男女が見下ろしていた。美渡が顔を上げると、女性の一人が手を振る。

「高海美渡さん、あなたには明日から、この子の運動制御を書いてもらいます」

「私が？　なんでですか？」

「あなたにしか改修できないからです」

「……もしかして、この前提出した、アレの話ですか？」

美渡が思い出していたのは、JH開発室での作業が一段落した先月の後半、一時的にガラス張りの個室に呼ばれてガッツリ作業したことがあったのだ。

それは正しかったようだ、主任は涼しげな笑顔にはつきりと喜びを含めた。

「先月あなたにヘルプで書いていただいたマニピュレーター制御の最適化、見事でした。我々が開発した運動制御をあの水準に底上げできれば、この子のパフォーマンスは現状の二〜三倍をマークできるでしょう。いずれくる対黒澤家のために——」

主任が美渡の手を握る。

「——あなたの力が必要なんです」

美渡にはピンときていない。あの作業がどのような役割を果たしたかなど、続く本来の作業に悩殺され、知らなかったからだ。

だが、分かったことはある。

ブランキアとワンダの実戦投入からの事後公式発表、対照的に発表されたまま姿を見せない小原鞠莉のシャイニー、そしてまだ見ぬ一体の仮面ライダー。

OGIグループはなぜこんなに発表を連発するのか、朝のニュースを見た時から不思議だった。

そうではない。

《仮面ライダー》というキーワードは、小原家だけのものではない、ということだ。

つまり、主任は焦っているのか。

「だから昨日の夜、急に作業が前倒しにしたんですか？　ワンダが出

てきたから」

その言葉に、主任が目を丸くして、次いで細め、笑った。

「世界が私に乗ってきたんですよ、高海さん。この依田義森のヴェイジョンに！」

ああ。

主任は喜んでいるんだ。

爛々と光る目にかかるボサボサの髪を、美渡は切りたくてしようがない。

第七話：目指すのはあの太陽 — 1

A V

『泥のように眠る』という言い回しがある。

子供の頃、〃ように〃が指すのが「泥の眠り方」なのか「泥のあり方」なのか、気になって夜も眠れない時期があったが、〃泥〃が中国の妖怪を意味し、水から上がるとぐでんぐでんになってしまう様を示しているのだと知って、スツキリした。

『眠れない時は羊を数える』という方法がある。

子供の頃、これを実践して逆に眠れなくなることがあつて悩んだことがあつたが、英語圏の〃眠る〃と〃羊〃の類似から生じたものだ^{sleep}と知って、英語で数えるようにしたら〃シープ〃という音韻がまるで^{sheep}寝息で、自分の声を聞いていて寝るといふ希有な体験ができた。

『舌で上唇を舐める』という方法がある。

子供の頃、深夜まで芹沢光治良先生の本を読んでいて――

「――それは眠気覚ましの方ずら」

布団の中で、国木田花丸は瞼を開く。

天井の、連続した木目の繰り返しを目で追う。

昔から、なにかと眠れなくなる夕チではあつた。

だがあれから二週間も経つたのに。

「……いつくしみ深き、友なるイエスは……」

そつと口ずさむ。

昔、祖母に歌つてもらつた子守歌を。

「……罪科憂いを、取り去りたもう……」

讚美歌。

神を讚え、祝福を得るための歌。

「……こころの嘆きを、包まず述べて……」

近所の教会の聖歌隊に入った時は、宗派の違いで悩まされもしたが、いつからか、歌は花丸の心の支えになっていた。

ゾンビの怪人が出た時も、浦の星女学院のチャペルにいた花丸は、司祭と共に聖歌を歌うことで恐怖に打ち勝つたのだから。

「……………などは下ろさぬ……………」

だがその小さな眩きも、途中で止まる。
ぼんやりと浮かぶイメージ。

天使の形。

その頭が、ばらり、と崩れるイメージ。

身体が震える。

あれは花丸たちの前で死んだかに見えた。

でも、そうじゃなかったら？

小原家はテレビで、怪人が人間の恐怖心から産まれると発表した。
であれば、あれと同種の怪人が再び現れないと、誰が言える？

安心して眠れる夜なんて、来ないではないか。

口を固く締める。

布団を頭までかぶり、膝をお腹に寄せる。

本尊も、祈りも、恐怖を払拭してはくれなかった。

「……………負える重荷を……………」

お天道様の光が窓の縁を舐め始める横で、花丸は闇の中で身をよ
じった。

A

「ずら……………！ ずら……………！」

国木田花丸は走っていた。

走ることができていた。

昨夜も怪人のことを考えていたように、いずれ出会う怪人に対する
予行練習を、脳内で重ねていたからだ。

だから少なくとも、なにもかもを投げ出してうずくまってしまう
に済んだのだが……………。

「なんなんずらあ……………！」

七つの体節が作り出す、黄金の斑点を帯びた黒光りする装甲。

アスファルトを叩く音とともにそれを運んでくる、整然と動く七対
の足。

虫のようだが、エビやカニなどの仲間の甲殻類。

「なんで、ダンゴムシさんが……………！」

しかし全長は二メートル近くある。

朝の勤行を終えた花丸が、黄色いフルジップパーカーにキュロツトを着て日課の早朝ランニングを始めたら、いつの間にか後ろにいたのだ。

幸いにもスピードは花丸のペースと同じ程度だったが、それでも動揺で息が上がれば歩調は乱れ、ペースが落ちれば背後に張り付いてくるのだから、たまったものではない。

「ずら……！　ずら……！」

六時を回ったばかりの街に人影は少ないが、いないわけではない。だが彼らは巨大なダンゴムシに追われる花丸を見かけても、フォーメアと思ってか着ぐるみコスプレと違ってか、電話で写真を撮るだけで去ってしまう。

そうこうしているうちに島郷海水浴場に沿った道に入る。

菌の間から息を吐きながら振り返ると、ダンゴムシはまだ一四本の脚でこつこつと音を立てて一定距離の後ろにいる。

「いつそ、ペースを上げて引き離そうか。」

「いや、それで疲れてしまったら元も子もない。」

そんなことを考えていたからか、土手のサイクリングロードに上がろうとした時、階段で足が滑った。

「ず、ずらあー！」

いつも気を付けていたのに、と思う間もなく、両腕を投げ出して階段の上に倒れた。

立ち上がろうとすると、膝に痛みが走る。

「いった……痛いずら……！」

階段を泳ぐように振り返ると、一對の複眼と長い一對の触角を備えた頭盾が、花丸を正面に捉えた。

そして……逆立ちをした。

長い触角を脚にして胴体を支え、甲殻をこちらに向けて起き上がったのだ。

「ず、ずらっ……！」

脚を動かしてゆっくりと一八〇度回転すると、七対の足が生えたお

腹が花丸の方を向く。そして身体正面を護るように足を折り込み、お尻から三番目の足を腕代わりにして前に垂らした。

そして、お尻の内側にあつた顔らしき部分で、花丸を見下ろす。

「あなた、ダンゴムシ怪人ずらう？」

答えるように、花丸に近付いてくる。まだ慣れていないのか、足取りはぎこちない。

花丸は血が滲んでいる膝を気にしながら、後ろ手に階段を登ろうとするが、うまくいかない。

「オラを食べても美味しくないぞら！ どこかに行くぞらあ！」

もちろんそれを聞き入れる怪人もないだろう。

それでもなんとか土手に這い上がって下を見ると、集まってきた野次馬が遠巻きに花丸を見ている。

メディアでは「怪人には近付かないように」と呼びかけているし、助けてほしいとも言えないが、「隔岸観火」という言葉が脳裏によぎるのはとめられない。

その間にもダンゴムシ怪人は、目と鼻の先まで迫っている。

「やだ、オラ、ルビイちゃん、ダイヤさん！」

元は足だった腕を伸ばし、花丸のパーカーに触れようとして——
かん、と。

——眩い光が弾け、動きを止めた。

「え？」

花丸とダンゴムシ怪人は見合い、

「おい、あれ！」

と誰かが指差す方向に目を向けた。

雲のたなびく南の空に、横腹を見せたヘリコプターらしきものが見えた。

丸く突き出した鼻と、テールローターのついたお尻に紫色でプリントされているのは、時計をイメージしたロゴと“OGI”の文字。

そのへりは鋭く方向転換すると、グツとノーズを下げてメインローターをこちらに向け、空気を裂く連続音と共に海岸沿いの土手を急接近し、そして花丸たちの頭上を通過する直前、二〇メートルはあろう

高さからなにかを落とした。

「ずらっ。」

花丸はそれを、タンポポの綿毛だと思った。

上部に細長い冠毛をこんもりと付け、子房のような下部をぶら下げ
て落ちてくるからだ。

だがすぐに、ずんぐりした吹矢だと思った。

軽い綿毛にしては海風の影響をまったく受けず、一直線にこちらへ
と落ちてくるからだ。

だがすぐに――

「Shinyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyy
yyyyyyyyyyyyyyyyyy!!」

――ダンゴムシ怪人の背中を踏みつけて着地したのが、人間だと分
かった。

「ず……ずらっ。」

サイクリングロードに尻餅をついた花丸は、口を開けたまま見上げ
る。

倒れたダンゴムシの甲殻の上に立っていたのは、頭から蓑をかぶっ
たような人物だ。

いや、光沢のない藤色のワイヤーで頭の上から太腿までを覆った、
銃身の長い小銃を持った人物だ。

「ちよオつとBoi乱sterous Land着ing地だったかしらア
？」

その人物が小銃を操作すると、『ウムラウト』の電子音声と共に、藤
色のワイヤーが消失する。

代わりに金属光沢を放つ紫色の装甲が生成され、銀色のアンダー
スーツに配されていく。

高級車のようななめらかな曲線を描くシルエットと、ベルトからぶ
ら下がる平たいパーツが作るスカート、そして大きな丸い二つの複眼
とそれを結ぶU字型の口。

その姿に、見覚えのない沼津市民はいないはずだ。

「みんなア！ Shiny！」

だからだろう、早朝の街に響く甲高い声に、

「小原さんだ！」

「仮面ライダー！」

「鞠莉ちゃん！」

「シャイニー！」

集まっていた野次馬は思い思いのレスポンスを返すことができた。

シャイニーは全身で朝日を反射させながら、右手に持った金剛杵こんごうしよのようなものを振って声援に答える。さきほど持っていた小銃はどこにもない。

「り、理事長……ずらら？」

「ダ・イ・リ、よー！」

シャイニーが首に手を当てると、マスクの前面が頭頂部に向かってずれ、鞠莉の顔が現れた。

途端、土手の下に集まっていた人たちの声のニュアンスが変わった。

「やっぱ本物だ！」

「すげえ！」

「マリー！」

鞠莉は観客に手を振って応えてから、足元で黒光りする装甲を身動ぎしているダンゴムシ怪人を見る。

ダンゴムシ怪人は鍋をこすり合せたような声を発するが、起き上がることも丸まることもできないようで、七対の足でカサカサとコンクリートをこすっていた。

「まったく、《Roly-Poly Foamare》だなんて、趣味の悪いヤツを産み出す人もいたものねエ」

「ろ、ロリポリ？」

《ロリポリ・フォーメア》と名付けられてしまったダンゴムシ怪人から飛び降りると、シャイニーは粒状の光弾を連続で発射した。そこで彼女が持っている物体が、銃身の短い拳銃だと分かった。

「Oh, Golly」

だが光弾は全弾、甲殻に弾かれてしまった。着弾点は熱で赤みを帯

びたが、さすがダンゴムシ怪人、なんともない。さらにモゾモゾと直径二メートルばかりの「ダンゴ」に丸まってしまふ。

「だったらア——」

とシャイニーは軽いステップで距離を縮め、

「How's This!」

上段回し蹴りを繰り出した。

いかに甲殻が固くとも、形状に由来する弱点はいかんともしがたい、ロリポリは衝撃で土手を転がり、島郷海水浴場へゴロゴロと落ちていつてしまった。

「理事長代理！ 逃げられちゃいますよ！」

「慌てないの。ちゃアんと見せてあげるから！」

なにを、と問う間もなく鞠莉はマスクを閉じ、砂浜に飛び降りた。拳銃を持っているのに近付くのか、と思う花丸の前で、シャイニーはベルトの横からなにかを抜き出す。

「ずらっ!？」

花丸の視力にはそれが、淡く輝く球体だと分かった。

「マルちゃん、怪我は？」

野次馬がゾロゾロと土手に上がってきて、電話のカメラを向ける中、土手に上がってきた中年の女性が花丸に問うた。

だが、花丸はシャイニーが持つ球体から目が離せない。

シャイニーはその球体を、拳銃の銃身の上にはめた。

同時に、『アイコサヘッドロン』の電子音声。

さらにもう一つ、ベルトの横から抜き出した機械の球体も、銃身の上にはめてはめる。

今度は『ウムラウト』の電子音声。

「ギアて、私の必殺技：初！ 受けてもらいまアス！」

シャイニーはロリポリ・フォーメアから五メートルも離れていない位置まで近付くと、両脚を開いて砂を踏みしめ、両手で構えた武器をターゲットに向ける。

「Lock-on！」

三番目、『ラブライブ』の電子音声。

その銃口の先で、ロリポリ・フォーメアが二足歩行状態で立ち上がった。

足を折り畳んだ胴体を、無防備にさらして。

「《EuryssUmia・t Scream》! Now!」

シャイニーが叫んだ直後、空間がゆがむほどの光が迸る。

砂浜の砂が円錐状にえぐれ、波が穴状に消し飛んだところまで見たところで、強烈な光度に顔を逸らして腕でかばう。

それでも地上に現れた太陽とでも言うべき光は、悠々と花丸の瞼を貫通し、網膜に神経や血管の像を焼付けていく。

そんな永遠とも思える一瞬の光が通り過ぎた時。

どん、と腹に響く轟音がした。

何人かが叫び、花丸は顔を上げる。

「怪人は?」

「どこいった?」

「倒したの?」

口々に疑問が飛ぶ。

それくらい、島郷海水浴場は日常の光景に戻っていた。

「Pheew!」

唯一の非日常であるシャイニーは、紫色に輝く両腕を軽く振ると、砂浜から二つの球体を拾い上げた。そして砂浜が不自然にえぐれたあたりで、波に洗われる三つ目の球体を拾った。

「ずら……?」

その球体に、花丸は改めて見覚えを認める。

「いいわよ、回収して!」

そこにヘリコプターがやってきた。シャイニーは下ろされた縄ばしごに捕まると、花丸たちに手を振った。

「Foamareは倒したわよオ! ご協力に感謝しまアス!」

それに、思い出したかのように野次馬たちが声援を送った。

「応援ありがとオ! Toodiees!」

裏返しそうなほどの高音を引きずって、ヘリコプターはシャイニーを回収し、南の方へと海を飛び去った。

野次馬も、状況は終わったと言わんばかりに三々五々に離れていく。

花丸はその流れに紛れて、土手のサイクリングロードを走り出した。

時間を食ってしまった。右手後方から登ってくる太陽の位置は、いつもより高い。花丸はそれに追いつかれないよう、少しだけペースを速める。

膝はすりむいていたが、大した怪我ではないし、その痛みを感じるような心の余裕もなかった。

「なんで……理事長代理がご本尊を？」

その疑問は、齒の間から朝の海風に流れ、消えていった。

*

「この腕の角度からこの脚の動き、逆に器用じゃない？」

「これにヨーソローは出せないな、私」

各々自分の電話を見ながら、善子と曜が話している。

「ポーズそのものは、アイドルっぽいと思うけど」

「うーん、なにが悪いんだろ」

昼休み、スクールアイドル準備中の二年生二人は善子を呼び出し、部室のすぐ外にある体育館横のベンチでお弁当を食べながら、曜のダンスをチエックしていた。

二人に挟まれた高海千歌は、右手で海苔弁のごはんを口に放り込み、左手で曜がダンスのポーズを描いたスケッチブックをめくり、しかし目と意識は、隣接する中庭を囲う工事用のフェンスに向いている。その中では、対ゾンビ・フォーメアで千歌が起こした爆発に端を発するリニューアル工事が進んでおり、今も出入りの業者がフェンスの内外を歩き来していた。

「動きが鋭すぎるのかな……。そういえば、あの笠木って先生は？
なんか言ってた？」

「ダメダメ、四〇年前から時間がとまってたよ。プレイバック！ つて感じ」

「二世代以上前じゃん」

「そういや、梨子先輩は？ てか、お昼っていつも一緒じゃないの？」

「検査云々で、お昼は食べられないんだって」

「昼抜き？ めっちゃきつそう……」

自分を挟んで話を続ける二人の間で、千歌はお弁当に最後に残った厚焼き玉子を口に持っていく。

そしてまた、中庭を出入りする人々の姿を見る。

彼らの服やトラックには、《黒澤土木工業》の文字が渋いフォントで書かれており、一目で黒澤系の会社と分かる。だが中庭を囲うフェンスに貼られた工事許可証には、矢に射貫かれた時計のOGIグループのロゴと、《OGIプラットフォーム》の文字が入っていた。

つまり、手を動かしているのは黒澤家だが、それを統括するのは小原家、ということ。

小原家がこの学校の主導権を握っている、というダイヤの発言は正しいのだろう。スクールアイドルとして廃校を阻止するとなったら、目の前のこの構造を破壊しなければならないことも。

そんなことができるのだろうか。

「食べないの？ 食べてあげようか？」

「へ？」

物思いに耽っていた千歌は、真横から接近していた曜に気付かなかった。

その口が大きく開けられ、千歌がくわえたままの厚焼き玉子に食い付こうとしていることに。

「うわ！ 食べるよ！ 食べる！」

慌てて厚焼き玉子を口の中に収めながら顔を逸らすと、反対にいた善子の真ん丸い目が合う。

「いつもこんなところでイチヤイチャしてるの？」

「してないよ！」

と口を押さえて大声を上げた時、渡り廊下に見知った顔を見つけた。

「あ、梨子ちゃん！ こっちこっち！」

渡りに船とばかりに大きく手を振ると、今学期からの転入生はこち

らに気付いき、そそくさと近付いてきた。

「まあ、とにかくやってみるよ。今日は私、飛込だから、移動時間もあ
るし」

「なにを？」

「振り付けの直しよ。聞いてなかったの？」

善子に呆れられ、それが議題だった、と千歌は苦笑しながら弁当箱
を片付ける。

その間に善子はスケッチブックをペラペラとめくり、ふと手をとめ
た。

「ねえ、曜先輩。飛込ってなにが楽しいの？」

その画用紙には、飛込台から落ちる競泳水着姿の人物が、パステル
カラーで描かれていた。パスが効いたダイナミックな構図で、姿勢
のチェックで使うイラストではなさそうだ。

「なにがって……楽しそうに見えない？」

「見えないわよ。自分から墮天するなんて、怖すぎるわ」

「たかだか一〇メートルじゃん」

曜は人差し指を上に向けたが、善子は「無理無理無理」と小刻みに
首を振った。

「千歌先輩、やれる？」

「無理だよ、三階建てのビルから飛び降りるようなもんだもん」

「お待たせ。外で食べてたんだ」

そこに梨子がやってきた。

「あ、リリー」

「だから、リリーはやめてって」

警戒するような善子の眩きに、梨子が呆れたように指摘する。

「ねえ梨子ちゃん、三階建ての屋上から飛び降りるって、怖い？」

「そこから？ 説明が必要だよ、千歌ちゃん」

だが梨子が微かな上目遣いとともに、

「怖い……かな？」

と曖昧に笑うのを見て、千歌は曜と目を合わせた。ゾンビ・フォー
メアと戦うためにブランキアに変身した梨子が、まさに三階建ての教

室棟の屋上から中庭へと飛び降りたのを思い出したからだ。

だが千歌は合わせて、午前中に曜が見つけてきた動画で見た、仮面ライダーシャイニーをも思い出していた。

エンジェル・フォーメアを倒した千歌の前に現れ、仮面ライダーという括りを教え、ワンダという名を与えた存在は、早朝、派手にへりから飛び降りて初お披露目となった。その高さは一〇メートルではきかなかつたはずだが、変身者である鞠莉はなんのためらいもなく、ダンゴムシのロリポリ・フォーメアの上に着地したのだ。

戦闘も圧倒的だった。遠距離からの狙撃、近距離での牽制射撃、そして必殺光線と、現れたばかりのロリポリ・フォーメアをろくな駆け引きも起こさせずに撃破してしまった。ネットでは姿フォームチェンジの変化による攻撃距離の変化が話題だが、千歌個人としては上段回し蹴りに注目せざるを得なかった。砂浜で必殺技を放つための繋ぎの技でしかないのだろうが、あの近接戦闘は一朝一夕でできるものではなかったからだ。

スーツのサポートがどれだけのものかは不明だが、少なくとも、鞠莉はシャイニーの能力を使いこなしているのだろう。梨子がブランキアを使いこなしているように。

この学校を小原家から解放するために、もし、他の仮面ライダーと戦わなければいけないとしたら。

私は勝てるのか？

死なずに負けられる？

「高飛込んでなにが楽しいのかな、って話してたの。梨子先輩はどう思う？」

善子が改めて聞くと、梨子は小さく首を傾げた。

「ジェットコースター的な楽しさ？ 高いところから一気に飛び降りて、クルクルって回るの、気持ちよさそうだよね」

「あ、それっぽい。そういうこと？」

梨子の意見に善子は手を叩いたが、曜は首を振る。

「なんだろう、飛び込むまでの技も楽しいんだけど、むしろ、水面をぶつかる瞬間、かな」

そう言つて、指を絡ませて組んだ手のひらを、ぐっと前に突き出した。

「そこが？ 痛くないの？」

梨子が顔をしかめて問う。

「それがいいんだよ」

「痛いのが？」

「痛いのがいいの？」

二人のリアクションに、曜は肩に頭がつくくらいに首を傾げた。

「うーん、そんな改まつて考えたことないんだけど……。水と泡と自分が一体化する感じ、かな？」

「水と泡と、自分が？」

梨子が顔を近付けた。

「うん、落ちた時は自分が泡になつて消えちゃつたみたいなのがするんだけど、だんだん身体感覚が戻ってきて、で、水面に出ると、『The New 曜ちゃん！』みたいな」

「死と再生？」

「人魚姫？」

「姫え!? ええ、なんだろう、よく分かんない！」

恥ずかしいのか大声を上げた曜は、逃げるようにこちらに顔を向けた——千歌は思わず目を逸らした。

「千歌ちゃん？ どうしたの？」

梨子と善子に攻められた曜がひねり出した言葉は、千歌が聞いたことのない類のものだった。幼馴染がこの一年夢中になつていたものについて、自分がなにも知らなかったことが、千歌にはショックだったのだ。

だが、千歌は笑顔を作つて、すぐに顔を戻した。

「ううん、なんでも。それよりせつかく四人集まつたんだし、なにかしようよ」

「あ、じゃあ七並べ！」

「そんな暇ないわよ、曜先輩。型紙切つてきたから、チェックさせて」
「よーし、じゃあさっさと済ませて七並べしよう！」

「しません」

三人は各々の荷物を手に、中庭に面する部室入口に向かう。千歌はその後ろ姿に、言いようのない不安を覚える。

晴天に浮かんだひとかけらの雲のように、夕焼けに伸びる自分の影のように、不安の種があちこちにまかれていっているのを感じる。

それはいつか大きく育ち、やがて、太陽を覆い隠してしまうのかもしれない。

「千歌ちゃん？」

サツシ戸を開けるのに苦戦する善子と曜の手前で、梨子がこちらを見ていた。

その顔からは、新しい友人を思いやる気持ちが容易に見て取れ、千歌は自然とこわばった顔を弛緩させた。

「……私、太ったと思う？」

「え？ うーん、そんなことないと思うけど？」

「お腹にね、肉が乗ってきた気がするの」

「ちよつとちよつと、採寸した後に体型変えないですよ」

「んー、そんなもんじゃやない？ 太すぎず細すぎず」

「曜先輩はいつも見てるから当てにならないわよ」

「そうかなあ……つと、開いた開いた、お待たせ」

ようやく開いたドアをくぐり、三人は部室に入ってしまった。

「……大丈夫」

自分に言い聞かせる。

まだその時ではない、はずだ。

第七話：目指すのはあの太陽 — 2

*

「あ、マルちゃん!」

教室に入った途端、国木田花丸はクラスメイトに声をかけられた。

「なになに、もう平気なの?」

「当然じゃない!」

返答したのは花丸ではなく、その後ろから顔を出した金髪の理事長代理だった。いや、この場合の適切な呼び方は——

「——シャイニー先輩!」

得意げに口元を持ち上げる鞠莉は、新入生からの賞賛と羨望の視線と声を浴びるのに満足したか、

「じゃ、午後も勉学に励んでね! Ciao!」

と軽く去っていった。

クラスメイトの注意が逸れている間に、花丸が自分の席に座ると、

「怪我は?」

と隣の少女が声をかけてきた。

「転んですりむいちやったただだよ。心配かけてごめんね」

膝を指差すと、クラスメイトは安心したように笑い、ノートを差し出してきた。

「午前中のノート、後で写していいよ」

「ありがと。……ルビイちゃんは?」

教室を見回すが、ツーサイドアップの幼馴染みの姿が見えない。

「昼休みが始まったら、ダイヤさんが連れてっちゃったんだけど」

「生徒会長が?」

「やつぱ家のすぐ近くであんなことがあったら、黒澤さんとも考えちゃうよねえ」

「まあ初の沼津での怪人だしなあ」

シームレスに世間話に切り替わっていく少女たちの会話を耳に、花丸はガラスのタッチパネルを指で撫でる。入学式以来にチエツクしたSNSのタイムラインは、速やかに拡散された今朝の一件で祭り状

態だった。誰が撮影したのか、またも複数の映像がアップされている。

だが話題の中心は、ようやく活躍の場を得た仮面ライダーシャイニーでも、襲われた花丸でもなく――

「ロリポリって、変な名前だよね」

――OGIグループが特設サイトに発表した新怪人、《ロリポリ・フォーメア》だった。

「理事長代理が付けてるんでしょ？ あの名前。謎センスはハーフだからかな」

「でもデザイン的には一番可愛げあるんだよなあ」
「分かる」

「ああいうの来ると思わなかったよね」

「なんで？ 虫ってオーソドックスでしょ」

「私はエンジェルの方が好みだけだな」

「貝は地味だったしね」

「さすがに死体に萌えるヤツはいないでしょ」

「私ゾンビ派なんだけど」

「マジで？」

「なんで嫌いなの？」

そんなクラスメイトの会話は、まるで新作アニメが始まった時のようだ。

怪人であるフォーメアは、ネット上で既にキャラクターとして一定の市民権を得ているようで、イラストや立体化作品が数多くアップされていた。四月スタートのアニメやドラマが軒並み視聴率を落としているというニュース記事からも分かるように、普段アニメの二次創作を投稿している人たちが、数時間前に出現した新フォーメアのイラストをさっそくアップしていたりと、リアルタイムで進行している「本物のフィクション」の大波に乗っていることが観測できた。

必然的に「推しライダー」や「推しフォーメア」といった概念も産まれているようで、おおまかに、男性陣は仮面ライダーに、女性陣は怪人に興味があるらしい。

「でも、やっと次のが来たって感じだよな」

「何日ぶり？」

「窓ガラス吹っ飛んだの、先々週の月曜日だっけ」

「先週のシエルから一日ぶりだ」

「〱ぶり〱って言うなら一〇日ぶりでしょ」

ゆえにその界限では、怪人の出現頻度に低さがたびたび話題になっていた。せめて週に一回は出てきてくれないと、アニメを楽しむ層の需求のスピード感にはついてこれられないようだ。むしろ、「#俺の恐怖心が産んだフォーメア」のタグで行われるオリジナルの掌編小説自分語りやイラストのように、UGC方面の実りを感じる。

「でもさ、結局あれってなんなの？」

「フォーメア？ 恐怖の泡だっけ？」

「そういうんじゃないって、目的っていうか、動機っていうか。なにがしたいわけ？」

「世界征服とか？」

「虫じゃあるまいし」

「ダンゴムシじゃん。てか、悪の組織ってそういうもんでしょ？」

「知らないよ」

タイムラインに多く表明されているもう一点の不満は、仮面ライダーとフォーメアに対する「物語性のなさ」だ。

特設サイトにはエンジェル、ゾンビ、シエル、ロリポリの四体のフォーメアが掲載されているが、どれも、なぜ出現して、なぜ襲ってきたのかは書いてない。敵組織の「動機の不明」というのは昨今の特撮ヒーロー、特に『平成メタルヒーロー』によくあるパターンらしいのだが、それは視聴者が物語の当事者の視点と一致しているフィクションでは利のある構造だ。だが本件の扱いは現実の事件報道などと同じで、視聴者は純粋な傍観者でしかない。だからSNSやメディアから入ってくる情報だけでは、ただただ意味不明なだけになってしまう。

「そんなこと言ったら、仮面ライダーの目的だって分かんないじゃん」「てか、なんで理事長代理が着てるんだろ」

「イメージアップじゃない？」

「あーあ、小原さんなら色々知ってんだろうに、放出してくんないかなあ」

「無理でしょ、それこそ黒澤さんへの最強のアドバンテージじゃん」
仮面ライダーについても、なぜ開発されて、なぜフォーメアを倒すのか、OGIグループの公式発表以上のことは知られていない。

もちろん、フォーメアの「人間を襲う」、仮面ライダーの「怪人を倒す」といった目的は分かる。だが、「襲う／倒すこと」でなにをしたいのか」という意味での目的は、依然不明なのだ。

だから、ざっとタイムラインを眺めるだけでも、「僕が産み出したフォーメアで救われる」系の掌編小説を除けば、物語性のあるものはごく少数だ。数コマ程度の漫画さえ少ない。作り手と受け手が共有する物語も、キャラクター同士の関係性も見えなければ、二次創作は産まれづらいからだ。

「まあでも、次はもうちょっと手応えのあるヤツが来てほしいよね」

「ロリポリもシエルも、割りと一方的だったからね」

「難しいんじゃない？ 悪役をどのくらい立てるかなんてさ」

花丸がSNSの遡りに満足して、バッグから五限の準備を出す頃になっても、クラスメイトはそれぞれでフォーメア話に花を咲かせている。

（不思議すら）

まだ「怪人」と呼ばれていたフォーメアに初めて遭遇したのは、今ここにいる浦の星女学院の一年生だというのに、体育館で仮面ライダーブランキアを見た時には一斉に逃げ出したほどだったのに。

もう誰も怖がっている様子がない。

みんな、二週間前のことを忘れているのだろうか。

「でも、よく逃げ切れたよね、マルちゃん。エンジエルの時は大変だったのにさ」

「え？ そ、それは、まあ……」

唐突に話しかけられ、しかもあまり思い出したくない話だったので、花丸は言葉に詰まる。

「でもむしろ、自分の恐怖にはちゃんと向き合えるもんなのかな」
「オラの？」

顔を上げると、各所で咲いていた会話の花は一転、花丸を中心に再構成されていた。

「あのダンゴムシ怪人が、私の恐怖ずら？」

「違うの？ だって前に、虫が嫌いって言ってたじゃん」

「苦手は苦手だけど……。怖いわけじゃないよ」

「そうなの？」

「たぶん、本堂にある毘沙門天様の方が怖いと思ってると思うよ」

「あー、そりやそうかもね」

そこで予鈴が鳴り、ややあつてルビイが教室に入ってきた。クラスメイトたちは今度はそちらに集まっていき、「ピギイ！」とツーサイドアップの幼馴染みの声が聞こえてきた。

自席に残された花丸は、バッグの玉乗りネコのぬいぐるみをつまむと、再び、鞠莉が手にしていた光る球体のことを思い出した。

*

「妙よねエ……」

長い背もたれにもたれた小原鞠莉は、尖らせた口で呟く。

「《エウリユスIIウムラウト・スクリーム》の命中と対象の爆発は、
ミツシヨウデータレコーダーステージボイスレコーダー

M D RとS V Rから確認しています。それでも、ですか？」

理事長室の机に置かれた卓上スピーカーフォンから、慇懃な男性の
声が聞こえる。

「そ、《Prism》のままよ？ 《Cylinder》になるんじゃないかったのオ？」

鞠莉の指がつまんでいるのは、日光に淡く光るムーフォーム。

「そのはずですが」

ムーフォーム内の正多面体結晶が再結晶化して円柱結晶になれば、以降フォーメアを産み出すことはなくなる。仮面ライダーシャイニーはそのために開発され、ブランキアの戦闘データを元に新造された《Mark II》はそのために出動したのだ。

だが結果的に、目的は果たせなかったようだ。

必殺技を食らった球体の中には、依然として正八面体の結晶が浮かんでいるのだから。

「同じパワーソースのライダーが攻撃すると、再結晶化が起きないケースは記録されていますが——」

「——当てはまらないわ。あれは私が産み出したFormareじゃないんだから」

「仰る通りです」

鞠莉と慇懃な態度で通話しているのは、静岡OGIに所属している仮面ライダーシャイニー開発計画の責任者、依田義森だ。鞠莉よりも二〇歳近く年上の男性だが、CEOの娘という立場が二人を逆転させている。

「であれば、もう一つのケース、そのムーフォームがすでに誰かに紐付けられている時、ですね」

「だったら色が付いてるはずでしょオ？」

椅子を回して今度は蛍光灯の光にフォームをかざすが、ブランキアの桃色や、ワンドの橙色のような鮮やかな色はない。

「やっぱりBranchiaの能力、再現できてなんじゃない？」

「残念ですが、可能性はありますね。明日以降、可及的速やかに再調整を行います」

義森の声は、しかし、言葉とは裏腹に喜色を含んでいる。

「嬉しそうじゃない」

「はい？」

「なんでそんな上機嫌なの？ 上手くいかなかったのに」

義森は一〇年近く《人体ラギダイズシステム》に関する研究開発を行い、のちにシャイニーと名付けられたシステムを一から作った、執着も一入の人物のはずだ。

「もちろん嬉しいですよ」

だが彼は、声のトーンを変えずに言った。

「エウリュスの『必殺技』機能の実戦は、今作戦が初です。全機能の正常動作確率は約二三パーセント、《スクリーム》自体が発動しない

可能性さえあったのですよ。そこから考えれば、ロリポリを消滅させたシャイニーの戦闘行動は、一般人へのお披露目として申し分ないと評価できます」

スピーカーフォンが発する早口の声からは、義森の伸び放題の髪の毛と涼しげな笑顔が容易に想像でき、鞠莉は眉をひそめる。

「それはそうだけど、それでいいの？ このフォームは無効化できなかったのよ？」

「彼らが知る術はありません。再度フォーメアが産まれる前に確保できたのですから、お互い、不利益はないと考えます」

らしい割り切り方だ。鞠莉は尖らせた口から静かに息を漏らす。

「ですが、あまりに完璧な撃破で、交戦データとしては十分ではありません。本気を出しすぎですよ、鞠莉さん」

「それは同感ねエ。実戦でのShiny破損Dataのためにも、ちよオつとPinchを演出してもよかったかしらア？」

「いえ、ヒーローの初登場は、ありえないくらい強い方がいいのです」

そのヒーロー観はなかった、と鞠莉は笑う。

「必要とあらば、ブランキアとの模擬戦で事足りるでしょう。如何致しますか？」

「考えておくわ。Well……」

時計を見ると、五時限の終わる一〇分前だった。

「そろそろ切るわよ。ちよつとは真面目に勉強しなきゃ」

理事長室の机に広げた数学IIIの教科書をシャーペンで叩き、鞠莉は首を回した。一人で勉強するのは楽しくないが、仕方がない。

「待ってください、そのムーフォーム、《μ8型》と言いましたか？」

「そうよ、Octahedronね」

鞠莉の手の中で、六つの点で内接する正八面体が揺れる。

「では《ウムラウト》や《ハーチェク》のベースフォームよりも不安定です。運搬時には細心の注意をお願いします」

「分かっているわよ。結果が出たら伝えるわ」

「静岡OGIにはいらっしやらないのですか？」

「当然じゃない、今日はO G I 研究所^静病院の立ち上げ初日よオ？ μ
—Foam専門研究所の、Specialな機材とSpecialな
人材が活躍するChanceなんだから」

「では僕も伺います」

「アナタには《Mark III》のPlanをお願いしてるわ。新
しいEngineerも入れてあげたでしょ？」

「ですがμ—フォームに関しては、現時点で僕以上のスペシャリスト
はいません。本件のような特殊なケースなら、僕が立ち会った方が—
—」

「——聞きなさい、義森」

日本語としての発音を強調した口調で言う。

「フォーメアが現れてしまった以上、もう私たちに時間はないの。μ
—フォーム関連事業は細分化され、あなたは人体ラギダイズシステム
関連事業の主任に着任した。μ—フォームに関するあなたの業績は
理解しているけど、今のあなたには《仮面ライダーシャイニー》に注
力してほしいの。それに納得したからこそ、異動人事は受理したんで
しょ？」

隙を与えずに言い切り、生まれた緊張感のある間を味わう。

せつかく和やかな雰囲気で終話できると思ったのに。

口の中に唾液を溜めたまま、待つ。

「分かりました。作業を続けます」

返答は平坦なものだった。

鞠莉は頬を緊張させたまま、

「お願いね」

と卓上スピーカーフォンを切り、その横にμ—フォームを置いた。

そして唾液を飲み込んだ。

義森は納得していないようだった。何故だろう。電話でも言った
通り、彼の知識と技術力は鞠莉も認めているが、彼の本来の専門はラ
ギダイズシステム——仮面ライダーの研究と開発だ。だからこそ、彼
が不可欠なシャイニーの強化に力を注げるよう、属人性を省ける箇所
を組織化、機械化するためにO G I 研究所病院の立ち上げを進めてい

たのだ。

今までシャイニーの開発者としての義森と話した経験では、鞠莉の判断に食い下がることはそう多くなかった。だからこの件で揉めるとは思っていなかったのだが。

「分かんないもんねエ、こっちの天気は」

ぼやく鞠莉は、差し込む日差しに触れた球体が、黄色みがかつた光を机に描いたことに気付いていない。

*

「げほっ、げほっ……」

競泳水着姿の黒澤ルビィは、お腹まで水に浸かってむせていた。

「大丈夫ずらっ？」

「う、うん、もう一回行くよ」

プールサイドでしゃがみこむ花丸を見上げ、水深一メートルもないプールの底を蹴る。

身体を水平に伸ばし、体重をビート板に乗せてバタ足をしようとする。

が。

「あ、あ、ダメ、沈んじやう」

どれだけ水を叩いても、脚が沈んでくる。

「お尻が沈んでるからだよ、もっとお腹に力を入れて！」

「分かってるんだけど……」

もう一度底を蹴って、ビート板に上半身を乗せるように泳ぎ出す。

「うう、なんでかなあ」

「武田さんは言いました。『為せば成る。為さねば成らぬ成る業を——』」

「『——成らぬと捨つる人の儂き』、でしょ？ その名言、使いすぎだよ」

「分かってるならやるしかないずら！ ……そうずら！ ビート板があるから泳げないずら！ 一般プールに叩き落とされればイヤでも泳げるようになるずら！」

「スポ根はやだよ……」

「ずら」を隠さない花丸に、ルビイは水に濡れた顔で半泣きになる。

曜の採寸データを得て「ちよつと一人で手を動かしたい」と言う善子を尊重して時間が空いてしまったルビイは、「泳げるようになりたいな」という独り言を耳聴く聞きつけ尊重した花丸の提案で、ここ、沼津市のお隣、富士市は富士総合運動公園の温水プールに連れてこられていた。

だが一般プールの二五メートルを泳ぎ切れないルビイは、一五〇センチそこそこの身長もあいまつて、滑り台がついている児童用プールに入れられてしまったのだった。

(うう、恥ずかしいよう……)

平日の夕方ゆえ、子供連れの大人もパラパラといる中で、膝を折つて火照った顔を水に浸す。

花丸は「ルビイちゃんなら小学生に見えるから気にしないずら」と言っていたが、そういう問題ではない。中学生に見えたって小学生に見えたって、たとえ誰も見ていなくなつて、自分が恥ずかしければ恥ずかしいのだ。自意識とはそういうものなのだ。

そんな理屈を言いたいが、花丸は「だつたら泳げるようになるずら！」と返してくるだろうし、実際、泳げなければ一般プールには戻れないのだ。

海に面した街で、砂浜の目と鼻の先の家で育つたルビイだが、一家の中で唯一、泳ぐことができない。

両親の話では赤ちゃんの頃からそうだったらしく、ダイヤには「水に浮くという機能が備わっていない吸血鬼なのですわ」とまで言われている。黒澤家パワーで小中の水泳の授業は全免除されていたが、子供心にそれはどうなんだ、と薄々感じていて、高校の水泳の授業からはちゃんと受けたい、と思っていたのだ。

とはいえ、「黒澤ルビイ」が個人単位で知れ渡っている沼津で、児童用プールを使うなど、たとえ自分が許しても、黒澤家とダイヤが許さない(自分も許さないけど)。だから、自宅のある沼津御用邸記念公園からクルマで四〇分ほど離れて、使用料も沼津のプールよりずっと

高い富士までわざわざやってきて、四人のボディガードも出入口の警備に割り当てて練習を始めたのだが。

「なんで泳げないのかなあ……?」

ビート板に上半身を預け、足から沈む動作を何度か繰り返し、ルビイは悲しくなってきた。

「背泳ぎの方がいいのかな」

花丸も児童プールに入り、仰向けに水に浮いてみせた。

「お腹に空気を溜めて、身体を水平にすれば浮くよ」

滑らかに脚を上下させて、頭の方に進んでいく花丸。

その姿を見ていると、競泳水着を大きく膨らませる胸はともかく、自分も真似できそうな気がしてくる。

ビート板をプールサイドに置き、長い髪を収めたスイムキャップを水に浸し、底から足を離す。

が。

「あ、あ、ピギびびぶべぼこぼぼぶぶぼ」

お尻を引つ張られたように沈んでいく。

鼻に水が入ったところで、手を引つ張られる。

「だ、大丈夫すら!」

水深が身長の三分の一しかないプールで溺れるなんて。

「やっぱりルビイ、吸血鬼なのかなあ……」

「吸血鬼が苦手なのは、聖水と流水すら」

また逃げ道を塞ぐようなことを。

「オラの教え方が下手なのかな。……あ、ウチの学校、オリンピック候補の先輩がいるって知ってる?」

「渡辺曜先輩だっけ?」

先生がそんな話をしていたのを、ルビイは思い出した。

「お願いしてみよつか。オリンピック級の泳ぎ方、教えてくれるかも!」

「ええ!? オリンピックに出るかもって人が、ルビイに泳ぎ方を教える暇なんてないよう!」

「だよねえ」

それに、絶対に体育会系のスパルタアスリートに決まってる。

一度プールサイドで休憩しようか、とはしごに取りついたルビイは、しかしすぐに、同じく上がるうとした花丸を水面に押し戻した。

「ぶぶぶくぶく——ど、どうしたずらう？」

「あの人！」

「え？」

ルビイは児童プールに顎まで浸かり、一般プールの向こう、女子更衣室に繋がる通路を指差す。

きよろきよろと上の方を見回しながら歩いているのは、浦の星の学校指定のスクール水着を着た少女だ。ルビイはその顔に見覚えがあった。

「小口田よしみって人だよ！ 二年の先輩！」

「どうしたの？」

「前に追いかけて回されたの！」

「そうなの？」

ゾンビ・フォーメア騒動の直前に、あの先輩を始めとする四人の二年生に、スクールアイドル同好会に勧誘されたのだ。

まさか、まだ諦めてないのか？

まだ距離はあるが、いずれこちらにやってくるだろう。そうなったら、ルビイが児童プールに入っていることがバレてしまう。

「出よ、マルちゃん！」

ルビイは花丸の手を引くと、よしみから離れるように、大回りで女子更衣室へと向かった。

*

短水路としても使える二五メートル四方の飛込プールと、一一レーンの長水路用競泳メートルが並ぶドームの中。

ホイッスルの音を耳に、渡辺曜はその正方形に一〇メートルの高さから飛び込んだ。

自然に背筋を伸ばした身体が、放物線を描いて落下する。

101A——前宙返り半回転伸び型。

地上とも水中とも違う浮遊感を、伸ばされた一瞬の長さを味わい。

組んだ手のひらで水面を突き破る。

水陸も上下も反転した世界で、水の冷たさと衝撃の熱さを味わい。気泡を追いかけて水面に顔を出す。

「いっ感じ」

水影でゆらゆらと光る飛込台は、下からは、意外と低く見えた。

浦の星女学院の水泳部（一人十顧問）は、静岡県富士水泳場にやっ
てきていた。

静岡県内で飛び込みの練習をするととなると、現実的な選択肢は片手で数えるほどしかない。一〇メートルの飛込台と五メートルの水深を持つ、日本水泳連盟公認の飛込プールは、大規模な水泳場にしかないからだ。そういう意味では、内浦に住む曜が手軽にアクセスできる沼津市立総合水泳場は、彼女がオリンピックを目指す上で欠かせない施設だったといえる。

だがその沼津市立総合水泳場が点検中の事故で天井板が外れて使用不能になってしまえば、曜はクルマで一時間以上かけて富士市まで移動するしかない。ただでさえ短い練習時間はさらに減り、ウォーミングアップの気楽な一本目を飛んだ今は四時半を回っている。

時間が勿体ない、曜はプールサイドに上がり、歩きながら競泳水着とスイムキャップを直す。

と、笛の音が鳴り、他校の生徒が踏み切った。

見上げ、技をチェック。

「前宙、抱え、一、二、あ——」

——入水、盛大に水飛沫が上がった。

顧問の男性に手を貸されてプールから上がった男子生徒は、上半身が真っ赤だった。回転速度が足りずに水で打ったのだ。青痣で済めばよいのだが。

曜は裸足で裏手に回ると、少し前に登ったビニル製の階段をまた登る。飛板飛込に使う、一メートル、三メートルの飛板を通りすぎ、五メートル、七・五メートル、互い違いに並ぶ飛込台を通りすぎる。

その間にも何人もが飛び、そのたびに多様な水面を打つ音が聞こえる。成否は見なくても分かる、勝負になる相手はいない。

一〇メートルの飛込台が見えた時、ホイッスルが鳴った。

曜のすぐ前の男子生徒が手を挙げて飛び――

「え?」

――その背筋と骨格に見覚えがあると思いついた時、水を叩く音が響き、続いて男性の声と拍手が聞こえた。

「305C」

飛び降りる一瞬しか見えなかったが、曜には回転の方向と初速から、それが前逆宙返り二回半抱え型と分かった。

耳に残る入水の音に、曜の唇が持ち上がる。

まずは身体を温めて、と考えていたが、心の方が温まってしまった。「見せてあげよう、私の必殺技を」

307C――前逆宙返り三回半抱え型。

ホイッスルの音で飛込台に上がると、自然な足取りで縁まで進み、躊躇なく身を投げた。

（〇――）

胸に当てた膝を抱え、後方へと回転。

身体の水が、円弧を描いて飛び散る。

（――）

二秒間で、七回の半回転。

腹筋の力で、小さく早く。

（――）

回る風を耳で数え。

回る青を目で捉え。

（――）

脚を真上に。

腕を真下に。

（――）

入水。

手のひらで水を掻き分けるように貫き、遠心力で流れる脚を筋肉の力で整え、一直線に水に入り込む。

会心の出来だ。

水深五メートルのプールを半分以上潜り、身体をくすぐる泡の感触を味わう。

一瞬でも間違えば、出血骨折身体一面の痣と、長期間苦しむはめになるのに。

いや、上手くいっただって、時速五〇キロで水面に落ちる痛みは免れないのに。

楽しくて仕方ない。

曜は水を蹴ってプールサイド際の水面に顔を出した。

「やつぱり曜だ」

そこに、水色のスイムキャップを被った男子生徒が立っていた。

その顔を、競泳水着だけを着了た身体を、まじまじと見てしまう。

細面の顔には面影があった。水に濡れると薄く見える短い髪も、低い背に似合う狭い肩幅も。

「考朔……くん？」

「あんまジロジロ見るなよ」

わざとらしく胸と股間を押さえる姿に、曜は噴き出した。

「ウソ、久しぶり！ なにしてるの!？」

「なにして、飛込に決まってるじゃん。早く上がりなよ、次が来る」

プールサイドに上がる曜に、考朔は歯を見せて笑った。

「じゃ、さっきの305C、考朔くんだったんだ」

「やっとこさ、二回半が安定してきたよ」

上体をひねって腿上げをする考朔の身体は、小柄ながら、腹筋と背筋を中心に見事な筋肉の塊だ。

それを見て、曜は急に恥ずかしくなった。

ホイッスルが鳴り、男子生徒が飛び降りた。考朔と同じ305C——前逆宙返り二回半抱え型だが、入水で脚が流れて水飛沫が上がった。

「でもやつぱり曜だよ、さっきの307C、肘くらいも水飛沫が立たなかった」

「え？ そ、そうかな、たまたま上手くいっただけだよ」

「出遅れちゃったからな、俺も早く追いつかないと——」

「——おう、ナンパなら余所でやれ」

そこに信代がやってきた。曜が他校の生徒に絡まれていると思っただろう。

「違いますよ、先生。友達です、松和考朔くん、中学まで一緒に飛込やっていたんです」

「そうなのか？」

ガタイのいい信代に据わった目で睨まれ、考朔はうろたえたものの、背筋を伸ばした。

「はい！ 松和考朔、一緒にオリンピッククに出るべく、鋭意特訓中であります！」

とわざとらしい軍隊口調で敬礼をする様は、昔々、曜と一緒にしていた仕事だ。信代もそれを理解したか、警戒心を解いたようだった。

「まあ、まだリハビリ中なんですけどね」

そう言って、考朔は自分の右脚を指差した。

「それは？」

信代が問い、曜はそれを見たくない。

だが見てしまう。

考朔の右脛から右腿にかけて走る、うねるような手術の跡を。

「バイクで事故っちゃった怪我です」

考朔は右腿を上げて、左右に振ってみせた。縫合痕だけではない、創外固定で開けた穴の跡も到るところに残っている。

「まだ新しいな。いつの怪我だ？」

「中三の卒業直前ですね。復帰は高二から、まだ半月くらいです」

「それで、さっきのあれか？ いやまて、中三でバイク？」

「違いますよ、兄貴のバイクに——」

と、プールサイドの向こうから、男性の声が上がった。

「——やば、戻らないと！ 曜、今日このあと予定ある？」

「え？」

「ああ、えっと、練習終わったらプールの外で待って！」

「で、でも何時になるか——」

「——じゃ、またあとで！」

走り去る考朔を見送る曜は、信代に頭を叩かれて我に返る。

「おい、曜。お前、アイドルも始めるんだろ？」

「え？」

「男はNGだぞ」

「は？」

「NGだからな」

「わ、分かっていますって！ あ、もうすぐ休憩時間だ、もう一本行ってきます！」

「おい！」

信代から早歩きで距離をとる曜は、でも、と思う。

「スクールアイドルを始める」と言ったら、考朔はどう思うだろう。

飛込台の階段を上がる脚を、競泳水着に包まれた身体を、曜は改めて見下ろす。

考朔が小柄ながら筋肉質の身体であったように、時速五〇キロの入水で発生する四〇〇キログラム重の負荷に耐え得る鎧を、自分もまとっている。

もう私は、女の子の身体じゃない。

もう昔の「渡辺曜」じゃないのだ。

そう意識したら、曜は恥ずかしくなってしまう。

ホイッスルの音を聞き、誰もいない飛込台に立つ。

絡まった気持ちを自覚する。

なんの技をしよう。

来て早々だが、あと数分でプールの休憩時間が始まる。

その前に、気持ちを切り替えたい。

一度飛び込んでしまえば、新しい私になれるのだから。

「死と再生？ 人魚姫？」

梨子と善子の言葉を思い出し、曜は嘔き出した。

ガラじゃないよ。

縁まで前進。

もう一度、101Aだ。

死んで、生き返って、リセットすればいい。

だが、そうはできなかった。

飛込台の下がざわめき、ホイッスルの音が短く連発した。しゃがんで下を覗くと、誰かがプールサイドに倒れているのが見えた。

水色のスイムキャップを被った誰か。

「考朔くん!？」

ここ数週間で、曜の前で意識を失った人々の顔が過ぎる。

イヤな予感を飲み込み、曜は飛込台の階段を駆け降りる。

たった二秒で降りられる一〇メートルが、途方もなく長い。

第七話：目指すのはあの太陽 — 3

B

「《Mark IIプラットフォーム》の回収を完了。Sーユニット、集合しました」

つるんと黒い目をした仮面の人物——仮面ライダーシャイニーの向こうで後部ハッチが閉まったのを確認して、野尻松之介は首元のマイクに言った。

「了解。《スターフォア一六号》、帰投します」

コクピットからの応答ののち、タンDEMローターの回転音が高まる。ややあつて、軽い浮遊感と共に後部ハッチ側が沈み込んで、機体が斜めになった。ヘリが上昇を始めたのだ。

「ただいま、パイン」

松之介を「パイン」と呼称したシャイニーが首元を操作すると、空気が抜ける音を立ててラギダイズシステムのマスクが上下に割れた。『Hand Of Doom』のうねるようなベースサウンドと共に顔を出したのは、OGIグループCEOの一人娘であり、松之介と同じ「Sーユニット」のメンバーであり、仮面ライダーシャイニーの正式装着者、小原鞠莉だ。

「お疲れ様です、鞠莉さん」

ヘリの側面に並ぶディスプレイ前の自席から立ち上がり、松之介は鞠莉に近付く。

シャイニーはお披露目の時と違い、銀色のアンダースーツに装甲が配されただけの姿だ。物理的にシャイニーのスーツを装着しただけで、ムーフォームを装填して紫色の装甲を生成していないこの状態を、松之介たちは《プラットフォーム基盤》と呼んでいた。

装甲の配色は、紫色の装甲を生成するガイドとなるマットブラックのパネルと、金属光沢の銀のツートンカラーだ。日光の偏光による魚のカムフラージュ機能を参考にしたデザインらしいが、世間は鞠莉の「シャイニーな」趣味だと推測しているようだ。松之介もそうだと思っている。

「P h e w、肩こったわア。」

鞠莉は後頭部でまとめた金髪をそのままにイヤーマニターを耳から外すと、まだ海水が滴る肩に触れた。

「もう少し小さくできないのオ？ これ」

「我慢してください。やつと実用に耐えうる『鰓』ができたんですから」

そこには《Mark I》にはなかった、ブランキアの研究結果から開発した溶存酸素換気装置鰓が取り付けられていた。首の横に大きく盛り上がったそれは、ボディビルダーの僧帽筋のようで、首を傾げれば頭にぶつかってしまふほどのサイズがあつた。鞠莉の日本人離れたオーバークションからすれば、邪魔以外のなにものでもないだろう。

松之介はイヤーマニターを受け取り、充電器に差し込んだ。シャイニーの襟元からは変わらず、Black Sabbathのビートが漏れている。指揮車と会話するためのイヤーマニターとは別に、スーツ内のボディソニックで音楽を聞くのが鞠莉のスタイルだった。

と、後ろに傾いでいた機体が平衡を取り戻した。前進が始まったのだ。

松之介はヘリの側面に並ぶディスプレイの一つを見る。駿河湾を中心とする地形図に、単位時間ごとに観測されたムーフォームの反応を積分した情報がオーバーラップされた地図で、その中でもひととき大きな反応が、大瀬崎の東七キロの駿河湾上にあつた。松之介が乗る輸送ヘリ《スターフォア一六号》は、今まさにそこから離脱するところだった。

「パイニー」

壁際のシャイニー着脱システムに腰掛ける鞠莉に呼ばれ、松之介は手元のコンソールを操作する。マニピュレーターが鞠莉からシャイニーの装甲とスカートのような五つのバッテリーを剥ぎ取り、やがて、銀色のアンダースーツと、バッテリーインジケーターがついたベルトだけが残された。

そしてバッテリーが接続されていた五つの環状汎用バスOUBに、ワイヤレス給

電送機が取り付けられた。これでへりに乗っている間は、充電の心配の必要がなくなった。

「やっと解放されたわア！」

全裸の上にアンダースーツを着ていることへのてらいなどないように、鞠莉はへりの貨物室内で大きく伸びをした。

むしろ松之介の方が恥ずかしく、誤魔化すように丸い窓から外を見る。

眼下の洋上には、OGIシーテックの計測船が二艘見えた。水深八〇〇メートルでの深海調査および採取作業において、S—ユニットをサポートしたチームだった。

「やっぱり地上はいいもんねエ」

「気が早いですよ」

「地面があるだけで違うの」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

そこに、ゴシック調の黒服に髪をオールバックに撫で付けた初老の紳士がコクピットからやってきた。

「ただいま、セブ！ はい、お土産よオ！」

紳士——セブは鞠莉が投げた透明な球体を受け取った。そして、

「オーナーとお呼び下さい」

日本人離れた青い眼をサングラスの上から覗かせ、鞠莉を睨んだ。

「今の私は、お嬢様の専属ボディガードではございません。ジョルジョ・ルカーニア様の命において、お嬢様を含むS—ユニットの全権を所有するもの——いわばオーナーにございます」

「分かってるわよオ、飼Ownerい主様」

鞠莉は手のひらを天井に向け、片眉を持ち上げると、気を取り直したように投げ渡したものを指差した。

「それより見てよ、Dodecahedronよオ？」

セブは球体を目線に持ち上げると、多面体を内包して揺らめく球体を眺める。

「《μ—12型》、ですネ」

「ようやく見つけられましたね、正一二面体のムーフォーム」

直径三センチ程度の球体に収まっているのは、松之介が言ったように、一二枚の正五角形で構成された多面体結晶だった。

「ねエ。呼び方、統一しないの？ 分かりにくいんだけど」

「正式名称はμ—12型ですつて。呼びたいように呼んでるのは鞠莉さんだけですよ」

「うるさいわねエ、パインちゃんのクセに」

松之介のことを「パイン」と呼ぶように、鞠莉は正式名称を重要視しない。特にセブは、幼少期の鞠莉から一貫してそう呼ばれ続け、セブ自身もそれを否定しないことから、《OGIバトラー&コンシエルジュ》の内部でも「Sebastian」が本名だと思われるほどだ。まあ彼については、日本人離れた眼の青さと、鞠莉の専属ボディガードというには執事的すぎる佇まいであることも影響しているだろうが。

「でも、μ—12型ですよ、鞠莉さん。これでシャイニーはもっとパウアップできるんですよ？」

松之介は自分の席に戻りながら言った。

フォーム内部に生成される結晶構造は、つねに正多面体をとる。当然、正一二面体の存在は予言されており、推測される性質を前提とした開発計画もいくつか立案、準備されていたのだが、もともと球形に近い正多面体ゆえに数が少ないのか、発見には到っていなかった。

それがついに手に入ったのだ。μ—フォームの反応情報はさらに蓄積され、いまだ海底にあるフォームの種別の判別も可能になるだろう。

セブも頬を持ち上げて頷いた。

「シャイニーの有用性も、Mark IIで実証されたと言ってよいでしょう。『怪人がいなければ無用の長物』ときおろしたマスコミも、態度を改めるはずですよ」

「そうですよー・ S—ユニット^僕の未来は明るいですよー」

今回の一件は、OGIグループ全体としても大きいはずだ。シャイニーが対怪人兵器ではなく、耐環境性能を付与する本来の意味での《

人体ラギダイズシステム》として役立つことが証明されたのだ。連続稼働時間一五分、耐水深度一〇〇〇メートルと、専用の深海探査艇には大きく及ばないが、いずれは汎用性が高く小回りの効くシステムとして、グループの大きな武器となるはずだ。

「そうねエ」

だがその装着者たる鞠莉は、喜ぶどころか目を細めて、どすんと壁際の座席に座った。

「どうしたんです?」

松之介が問うが、鞠莉は答えない。

同じく腰を下ろしたセブが、サングラス越しに鞠莉を見る。

「気になるのですか、主任が」

セブの言葉に、鞠莉は一瞥を返す。

「なんの話です?」

主任——ムーフォーム関連事業の責任者であり、仮面ライダーの実質的な開発者である、依田義森のことだろうか。

「変じゃないイ? 最近」

「変って、僕が入社した時にはもう変でしたよ。いかにも元黒澤家、つていうか」

「どんなImageよオ」

「自己愛過敏で特権意識みたいな」

松之介はキーボードを指で叩きながら言った。

「ふうん……セブは?」

「私は依田主任について、特別な感情を抱いてはおりませんので。なぜそう思われたのです?」

「この前電話でさ——」

「——フォーメア反応です!」

作業員の一人が声を上げた。

貨物室がざわめく。

松之介もディスプレイを見ると、赤い帯にアラートが表示されていた。

コンソールを操作して、自動検知したSNSの投稿を表示する。

青々した芝の上を走る黒っぽいものを撮した写真に『怪人いた』の一言。付与された位置情報は、北緯三五度一分、東経一三八度四一分。「本物ですか？」

「確度八七パーセント、同様の投稿が同タイミングに五点。間違いないです！」

「場所は？」

「富士市です、ここから北北東二〇キロ！」

セブの問いに松之介が端的に答える。

「行けるわよね、セブ」

「当機は可能です。シャイニーの充電はいかがですか？」

バックルのインジケータは赤色が三つ、点滅が一つだ。

「充電率七七・四パーセント、残り稼働時間は六九六秒です」

「OK、一〇分もあれば楽勝よオ——」

と、視界の隅でなにかが光った。

直後に破壊音、機体が縦に揺れる。

「——What, s?」

鞠莉の叫びに合わせて貨物室の回転灯が光り、アラームが鳴り始めた。

*

「右手ドラム缶奥、未確認です」

「前方のキャットウォーク、三名を確認」

液晶画面が映しているのは、薄暗い倉庫を移動する映像だ。頭部に装着したカメラが、曲がり角で安全確認をする簡単な手信号や、その黒い手袋が持つ拳銃や小銃など物騒なものを捉えている。

「二名の死亡を確認。一階左側面の援護に」

「背後に警戒して。敵のPDW持ちが一人見えた」

「了解」

同倉庫内に簡単な仕切りで作られた即席の空間に、そんな画面が四×四の配列で一六台積み上げられ、両脇にあるスピーカーがメンバー同士の無線音声を流す。一六台のうち、表示が目まぐるしく変化していくのは一〇台、つまり、六人はすでに“死亡”していた。

そんな、 F P S と呼ばれるゲームのような画面の集合を
眺めながら、

(場違いなところに来てしまいましたわ)

黒澤ダイヤは手持ち無沙汰に、腰の前で組んだ手を組み替えた。

デジタル時計が九分一四秒の経過を示す下、画面の前にオペレーターのように座る二名の社員は、複合カメラとマイクを始めとするセンサーで集められた各メンバーの情報を端末で監視している。とても話しかけられる状況ではない。

ダイヤは壁際に置かれた車椅子を一瞥すると、

「蓮生、蓮生」

肩越しに専属ボディガードを小声で呼んだ。

「はい、お嬢様」

「どちらにいらっしやるか、分かりますか」

強健な肩幅の黒服は、自分の端末を何度か操作し、手のひらで前方を示した。

「ナンバー一二です。画面では中央右下です」

手のひらの先は、四×四に配列された一六の画面のうち、「No. 1
2」と貼られた一つだ。

黒い全身スーツに同色のベストやホルスターを装着した人物が、画面の奥に進んでいく様を捉えた映像だった。当然だが、それは目当ての人物ではない。カメラの主は大きな小銃を手に、微かな衣擦れの音と共にその人物を追跡しているのだ。

だが追跡は、すぐに終わった。

コンテナの向こうに姿を隠したその人物を追いかけたカメラが、不意に、こちらを向いている銃口を映したからだ。

「敵と交戦——」

誰かがの言葉に重なり、モーターの唸りが響く。

画面に向けて幾筋もの白い線が放たれ、

「——いてー、いてー！、ちよ、待て待て、ヒット！」

カメラの主が、降参というように両手を振った。

血は出ていない。もちろん死んでもいない。

「ああ、クソ、絶対気付かれてないと思ったのに」

「次も負けませんよ」

「ああ」

その言葉を最後に、「No. 12」の画面が暗転した。

「“死亡”したようです」

「見れば分かりますわ」

「No. 2」の画面では、撃たれた人物が撃った人物に、BB弾のボトルを手渡す場面が映されていた。

(サバイバルゲーム、ですか)

敵味方に分かれた、空気圧でプラスチックのBB弾を発射する玩具銃で撃ち合う遊びだ。子供の原初的な遊技でもあるが、財力を得た大人の人気も高い競技でもあり、ここ沼津周辺にも定期的に会合を行うグループが存在するらしい。

だが《黒澤重工》の沼津第十一倉庫、その三階で行われているこの試合は、競技や遊技ではない。

八対八の二チームに別れた彼らは、紺色のアンダースーツにゴーグルやフェイスマスクといった装備を身につけている。違いは、ベルトのバックルにあたる電池残量の表示装置が赤か青か、だけだ。

その形状を知っているダイヤは、緩やかに息を吐いた。

その時、背後に気配がした。

「まさかバレてるとは思わな——瑠璃さん？」

振り向いた先、仕切りの縁に立っていたのは、ついさっき“死亡”したナンバー一二の人物。

「ご無沙汰しております、お祖父様」

深々と一礼を頭を下げたダイヤが顔を上げた時、紺色の装備の下から、ダイヤが会いに来た顔が現れた。

「ああ……ダイヤか。驚かせてくれるな、心臓が止まると思ったぞ」

黒澤家前当主、黒澤琅太郎。

彼はしわだらけの顔をさらに縮めて笑いながら、背後に控えた黒服のボディガードに頭部装備一式を渡した。

「申し訳ありません。年度初めの挨拶が遅れてしまいました」

「そつちじゃ色々あったからな。元気そうじゃないか」

「お祖父様もお元気そうだなによりです」

「そう見えるか？」

ヘルメットの下から現れた髪は、年末に顔を合せた時よりもずっと白く、崩れる直前の灰のように見える。紺色のスーツにピッタリと覆われた身体も、老人らしくしおれ、しわが寄り、力を入れれば折れてしまいそうだ。

それでも、ダイヤが物心ついた時から知っている好々爺の笑顔は変わらない。まずはそれに安心した。

「しかし、ますます瑠璃さんの生き写しになってきたな」

「そんなに似ていますか？」

「ああ、その制服だと特にな。将来の旦那は苦勞するぞら」

琅太郎に頭から足先まで眺められ、ダイヤは自分の格好を意識する。

ダイヤが着ているのは、黄白色と灰色の普段の制服ではなく、黒いセーラー服と白いスカートの旧制服だ。私立浦星高等学校時代に採用され、男子の同色の詰め襟と共に着用されていたもので、改称後の私立浦の星女学院高校でも着用を許可されている。それを着てきたのはもちろん、経営母体が黒澤家から小原家に移った後の新制服を着ていては、祖父がなんと言うか分からなかったからだが――

（――わたくしこそ、複雑ですわ）

自覚があり、それを嬉しく思っていなかっただけに、外から指摘されると、どう答えていいか分からない。

そんなダイヤの思考を余所に、祖父はホルスターから玩具の拳銃を抜いた。

「しかし、思ったより面白いぞ、サバゲーは。第三ゲーム目でようやく一ヒットできたが、それ以外は撃たれっぱなしだ」

照星と照門を合わせ、仕切りに向かって構えてみせる。

「まずは一ゲームで一ヒットが目標だな。コンテナの配置も頭に入ってきた今なら、チームワークもいけそうだ」

「無理はなさらないで下さい。お身体に障りますわ」

「これ以上どこに障るんだ？ 障ったとしても、もう上さんもいないし、会社も関係ない。好きにやらせてもらおうよ」

琅太郎は両手を広げてみせる。

「だいたい、ミニ四駆はどうされたのです。年末にお目にかかった際には、『来年は大会だ』と意気込んでいたではありませんか」

「主催者に断られた。『勝つても負けても扱いに困る』とな」

「ああ……」

「あと、私の関与する余地がゼロだと気付いてしまつてな。あいつらがな、マシンのセッティングまで済ませてしまうからな」

祖父が目を向けると、彼の専属ボディガードは眼を逸らした。

「だがサバゲーは違うぞ。まず顔が見えないのがいい。誰も私に手加減しない。しかもコイツの性能がどうあろうと、私が当てられなければ絶対に当たらない。この感覚、掘りがあると思わないか？」

「仰ることは分かりますが、わざわざ危険な趣味を選ばなくとも」

「危険は成長だ。その余地がない人生など、つまらんと思わんか？」

「それは、わたくしに対する嫌味ですか？」

ダイヤが唇を斜めにして言うと、琅太郎は瞼の周りのしわを深めて目を丸くした。

「ほう、そう思ってるのか」

「はい？」

琅太郎はしかし、しわに囲まれた目を細めた。

「いや、そうだな。黒澤家と小原家の三世代公開対決。盛り上がると思わないか」

「銃の撃ち合いなど、わたくしの趣味ではありません」

「そうだそうだな、お前は脚と棒だったな」

ダイヤは笑顔だけを返し、祖父は銃をホルスターに戻した。

「それで、学校はどうだ」

「はい、つつがありません——と言いたいです、廃校の噂と怪人の出現で、生徒の志気は最低レベルですわ。仮面ライダーの出現で出席率の低下こそ歯止めがかかりましたが、それ以外は——」

「——お前の学校生活について聞いてるんだ」

「わたくしの……ですか？ そちらは、つつがありませんが……」
意図を測りかねたまま口を開くと、祖父は唇の端を持ち上げていた
ずらっぽく笑った。

「三人が揃ったんだろ。二年ぶりに」

三人。

「なにも起こらないわけがないずらっ？」

ダイヤは眉間にしわを寄せかけたが、敢えてわざとらしく片頬を膨
らませた。

「その話はしたくありませんわ」

琅太郎は笑いながら、倉庫の壁際に歩いて行く。

もちろん、なにも起こらないわけがない。三人が揃ったことで、
各々が刻んできた時間が重なりつつある。だが。

沈没したさんどつぐ号、再構築破壊された静浦、そして空中分解した三
人。

重なった三人の時間がその後、同じ方向に進むことはないだろう。
そんなことはおくびにも出さない。

三人の少女の時間など、黒澤宗家のご隠居とは一番遠いことだから
だ。

琅太郎は壁際に置かれた椅子のような装置に腰をかけた。黒服が
手元のタブレットを操作すると、高い背もたれの上部に格納されてい
た機械の腕が伸びてきて、祖父の紺色のスーツから様々な部品を外し
ていった。

立ち上がった祖父に残されたのは、八〇を越えて衰えた身体に張り
付いたアンダースーツ、そして背腰部に五つの電池を予備弾倉のよう
に取り付けたベルトだけだ。ベルトのバックルには電池残量が五つ
の区画で示され、今は最後の一つが赤く点滅していた。それは色こそ
違えど、今朝方から本格的に活動を開始した、《仮面ライダーシャイ
ニー》の装備と同一だ。

それを黒澤家のご隠居様である祖父が着ているのは、ダイヤには複
雑な心境だった。

「お祖父様。お祖父様が自ら被験者になる必要がおありですか？」

「ならない理由があるか？　これは装着者の脳波を検出して、スーツに肉体を動作させるんだ。八二にもなって、自分の脚で立って歩けるとは思わなかったぞ」

「まだ八一歳ですわ」

「ん？　そうだったか？」

玩具を自慢する少年のような口調に、ダイヤは内心で溜め息を吐く。

「だから危険だと言っているのです。肉体を操作する機械、しかも試作機以前と聞いています。もし事故が起これば――」

「――私たちに大損害、か？」

ダイヤは小首を傾げ、切り揃えた前髪を斜めにする。

「黒澤家に、ですか？　小原家ではなく？」

試合の進行を監視する《黒澤重工》の社員が聞き耳を立てているのを察し、ダイヤは声を抑えた。

「このスーツを考案、設計したのが誰か、知らんのか？　私たちの分家

――まあ、網子の末端だ」

それは初耳だった。というより仮面ライダーの技術についてダイヤは、小原家の公式発表以上の情報を持っていない。

「問題が起これば、責任は我々にある、と？」

「そう思う人間はいるすら」

「だから私たちが、動作検証を外注されたのですか？　お祖父様が？」

「私は歩きたいだけだよ」

琅太郎は目を細めて笑い、車椅子に腰掛けた。

「どちらにせよ、怪人を撃滅する技術は、可及的速やかに完成させなければならん。アレをこの街の問題に押し止めるために」

その時、電子音が鳴った。

見上げると、デジタル時計が「15:00」を表示して止まっている。

「第五ゲーム、終了です。作業員は各自、担当被験者のスーツを除去して下さい。第六ゲームは一時間後に開始予定です」

画面の前の社員がマイクに言い、倉庫中がにわかに騒がしくなっ

た。

「まあ、まずは散歩できる程度の電池容量にして欲しいもんだがな」
祖父は下目遣いで自分の身体を見た。充電が切れたアンダーズーツによつて、座ったままの姿勢で全身の間接をロックされてしまったのだ。

琅太郎のそばに、ボディガードとは違う黒服が近付いてきた。「担当被験者のスーツを除去する作業員」のようだ。

「お嬢様、少々お待ち下さい。ご隠居様をお召し替えします。では、ご隠居、失礼します」

そう言つて、黒服は車椅子の手押しハンドルを掴んだ。

「このままで構わんよ」

祖父は、ダイヤを見たまま言う。

「どっちみち脚は動かん」

「ですが、そのスーツでは身動きができません」

「モバイルバッテリーはどうした？ OUB接続なら使えるぞら」

ベルトに並ぶ五つの電池は、OGIグループ主導で開発された汎用接続端子《Orbital Universal Bus》で接続されている。OUB接続の給電機器なら、電話用でも充電できるはずだ。

「とにかく、脱いで頂かないと——」

「——私は今、ダイヤと話をしているんだが」

黒服の手がとまる。

「それでもか？」

祖父の笑顔は変わらない。

声を張ったわけでもない。

だというのに、

(え?)

ダイヤ以外の全員が、動きをとめた。

なにが起こったのか。

全員の服が電池切れで動かなくなってしまったのか？

いや。

糸だ。

空間に張らされた、糸を感じる。

黒澤宗家以外の心臓に巻き付く触手。

心臓を焼き尽くし、灰に返す導火線。

一手も間違えられない一線の網。

その出発点は。

ああ。

(お祖父様)

黒澤家が彼らを絡め取った。

いや、その事実を改めて認識させた。

「(隠居様)

数秒後か、数分後か。

緊張を破ったのは祖父の専属ボディガードだった。

「(隠居様はテストの被験者です。正確なデータを取るためには、他の被験者と同等の手順を踏んでもらわなければなりません。ゲームごとにバッテリー切れのスーツを脱ぐのも、その一つでございませう」
手押しハンドルを掴んだままの黒服は、唇を真一文字に閉じ、言葉を紡いでいる黒服を見る。

「構いませんね」

ややあつて、祖父は下唇を突き出した。

「その通りだ。頼む」

糸は消滅した。

琅太郎の専属ボディガードに目で促されると、着替えを促しにきた黒服は改めて「失礼します」と車椅子を引いた。そして動けない祖父を乗せたまま、ボディガードと共に仕切りの向こうに消えた。

状況の終わりを待って、ダイヤ専属ボディガードの黒服が、主人の後ろで細長く息を吐いた。

ダイヤも同感だった。

祖父が影で「狼太郎」と畏怖されているのは、ダイヤも聞いたことがある。孫娘にとっては物心ついた時から人好きのする老人であり、狼どころか灰がかった白髪で羊や山羊の印象が強い祖父だが、高校

生にもなれば、それが家族に向けた顔であることは理解できていた。できていたが、いざそれに直面すれば、平静な顔を維持することしかできなかった。

彼は首だけの存在になったとしても、誰にも潰されずに生きていくのだろうか。

「では蓮生、私たちは——」

「——ルビィはどうしてる?」

思いの外近い祖父の声に、ダイヤと黒服は肩を振寄せた。

「お、お——祖父様?」

仕切りに目を向け、すぐ反対側で衣擦れの音がしていることに気付いた。

ダイヤ黒服は瞼を大きく開いて、しかし口は塞いで首を振り合う。

「どうした?」

「いえ」

なんでこんな場所で着替えを、と思ったが、倉庫を仕切ったこの一帯は被験者の更衣室にもなっているようで、辺りからは何人もの人の動く音が聞こえた。

その間にも平静を取り戻したダイヤは、声のトーンを意識して口を開く。

「申し訳ありません、本当はあの子も挨拶に来る予定だったのですが

——」

「——市外に出てるんだらう? 国木田の娘さんと一緒だとか」

知っているのか。

「ええ、花丸さんと水泳の特訓だそうです。まったく、泳ぎたいのであれば、わたくしが一から教えてあげたのですが」

「練習して失敗するところなんて、家族に見られたくないすら。まして、母親やお前にはな」

またか。

「お祖父様との予定を忘れていた件については、容赦願います。わたくしからきつく叱っておきますので」

「いい、いい。先行き短い老人に媚びへつらうより、特訓の方がずっと

いい」

「それは、わたくしに対する嫌味ですか？」

また、笑い声が戻ってくる。

ダイヤは胃の辺りを押さえる。

こんな意味のない会話をこなすのも、黒澤宗家の次期当主である自分のノブレス・オブリージュなのか。

せめて妹は、こんな御家の磁場に捕われずに、平和に特訓してくれればいいのだが。

*

「な、なんで、なんでルビィばかりい！」

「とにかく走るぞらー！」

本格的に泣き始めた黒澤ルビィは、幼馴染みに手を引かれて、タイル敷きの歩道を走る。だが、

「ピギィー！」

早々に足がもつれて転んでしまう。

「ルビィちゃん！」

「なんでルビィばかり追っかけられるのよう！」

花丸に無理矢理立たせられて、膝ほどの高さの石垣を乗り越えて丘の林に入る。青い葉に衣替えを始めている木々の幹に隠れたルビィは、花丸の胸に抱かれて息を潜める。

よしみから逃げる形で予定より早く温水プールから出てしまった二人は、せっかく来たのだからと、公園を散歩しようとしていた。

富士総合運動公園には温水プールだけでなく、もっと大きな水泳場に野球場や陸上競技場、相撲場からテニスコートなど、様々な施設が含まれている。弓道を習っているルビィが弓道場を見たがったので、駐車場の隣の弓道場に向かおうとしたのだが。

「ルビィちゃん、黒服さんとクルマは？」

「まだ五分くらいかかるみたい。うう、素直にプールで練習してれば」

電話から顔を上げると、花丸は幹から顔を出して、石垣を越えられずに歩道で停まったそれを見ていた。

「あれもフォーメアぞら？」

花丸が呟いたが、ルビイは答えられない。

始めは暴走族かと思った。姉に恨みを持つ人が、ルビイで恨みを晴らそうとやってきたのかと。

だが、何度か接近される中で二人は、そのバイクがあり得ないデザインをしていることに気付いた。

どうおかしいか。

まず、タイヤが六つある。

正確には、タイヤの形をした部分が六つある。実際に動いているのは二つで、二つは前後からかけられた力によつて縦にひしゃげて、残りの二つは真上に向けて空転している。

そしてタイヤの間を埋めているのは、辛うじてハンドルや燃料タンクだと判別できるようなバイクのパーツだ。

つまり、三台並べたバイクをもの凄い力で前後から押し潰し、後ろ二台の前輪が天に向かっているような格好なのだ。

そんなバイクの化け物が、運転手もなしに、二人を追ってくる。

天使やゾンビ、はたまた貝殻にダンゴムシといったフォーメアは、異様ではあるがどれも人型だった。だが今回のそれは、一線を画している。追われていること以上に、それがルビイには恐ろしかった。

その時、二人の電話がフォーメア通報を発報した。

ルビイと花丸の通報が届いた証拠だった。

「よかった。これで仮面ライダーが来て、やっつけてくれるよね？」

ルビイは息を抜いたが、花丸の顔は晴れない。

「マルちゃん？　へりで来てくれたんでしょ？」

「ここ、沼津から何十キロも離れてるよ。どれくらいかかるか分からないよ」

「そんなあ……」

悲観的な予想を口にした花丸は、しかしルビイと違い、落ち着いているように見える。朝にロリポリ・フォーメアに襲われたばかりだからか、その時に助けてくれたシャイニーを信じているからか。

「あ、もうすぐクルマが来るって。シャイニーが来るまでそこで——」

——と、エンジンを吹かす音が響いた。

「えっ？」

それは石垣にタイヤを押し付けたかと思うと、ジャックナイフのように後輪を持ち上げ――

「ずらっ？」

――空転していた上向きのタイヤの一つを、石垣の上に乗せた。

「えっ？ ええっ!？」

つまり、バイク自体を六〇度回転させたのだ。

「そんなのずるい!」

バイクの化け物は、ばるんばるん、とエンジン音を鳴らし、ちぐはぐなタイヤで石垣を乗り越えてしまった。そして青々とした下生えを土ごとえぐり、斜面を上がってくる。

「行く、ルビイちゃん!」

「もう諦めてよう!」

アスレチックや展望台に繋がる階段を登り、たまに道を外れ、丘を南側から登る。

バイクの化け物もついてきているが、道路以外を走るためのデザインではないのか、スピードは遅い。

だが、いずれは追いつかれてしまう。

「な、なんで、なんでルビイばかりい!」

「とにかく走るずら!」

仮面ライダーが来るまで、体力がもつだろうか。自信はない。

第七話：目指すのはあの太陽 — 4 (完)

*

流れ込んでくる空気が耳元で鋭く鳴り、野尻松之介は辺りを見回した。

「なんです!」

彼の疑問は、直後に解消した。

「メーデーメーデーメーデー、こちら《JASPI6》《JASPI6》《JASPI6》! 大瀬崎沖三キロの地点で第一、第二エンジン停止!」

パイロットの声が流れる輸送ヘリの貨物室、その後方上部に日光が見えたからだ。

「現在六〇〇フィートから下降中、不時着水を試みる!」

「お嬢様、再装着をお願いします」

「脱いだばかりなのにイ!」

「は?」

出現したフォーメアへの対応を始めていた松之介は、キーボードに指を置いたまま啞然とし、全作業員が動き出した機内を見ていた。

「パイシー!」

「野尻さん!」

「え? あ、は、はい!」

すでにシャイニー着脱システムに座っていた鞠莉と、コクピットに向かうセブに両側から言われ、松之介は慌ててディスプレイに目を戻す。

他の作業員が物資や装置をベルトで固定し直すのを横目に、現実感のない指でシャイニー着脱システムを起動。

「何回も着たり脱いだりするの、Commercial Movie だったら絶対ダサイわよねエ」

「なんの話ですか」

雑な相槌の間に、鞠莉の銀色のアンダースーツの脚、腕、胴、頭へと、銀と黒の装甲が装着され、《Mark II》プラットフォーム

》が完成した。

システムから立ち上がった鞠莉は、マスクを開いたままの頭を両手で整えると、ヘリの窓に張り付いた。

松之介も席を立ち、主人の横の窓を覗き込む。

編隊を組んでいる同型の輸送ヘリ《スターフォア一七号》は、《一六号》より若干高い高度を問題なく飛んでいた。

「やられたのはこっちだけっぽいわねエ」

「そんなこと言ってる場合で——」

「——ねエ、あれ」

呑気な主人の言葉を叩き落とそうとして、しかし鞠莉は機体後部の作業員のところへ走って行った。

作業員から鞠莉が引つたかったのは、アタツシエケースだ。《島郷海水浴場》でロリポリを倒して回収したムーフォームを入れて、鞠莉が学校から持ってきたものだ。

だがジュラルミン製のケースは鍵がひしゃげて、ぱっくりと開いていた。片面に開いた大穴は、内側から強い力が加わったらしき痕跡で、つまり——。

「——ロリポリが!？」

なんらかの方法で発動したムーフォームが、機体後部の第一エンジンを破壊して、機外に飛び去ったというのか。

そこにセブが戻ってきた。

「陸地まで泳ぐしかなさそうです」

「セブ、これ!」

松之介は鞠莉が持つケースを指差したが、セブは目で制した。その話は後だ。

「計測船に引き返せないわけエ？」

「ここからでは無理です。極力陸地に近付くしかありません」

「各員、シートベルトを締めてください! 間もなく着水します!」

機長の無線で、S—ユニットと作業員が壁際の座席に座る。

陸地に近付いたとして、あの高度から安全な落下速度まで減速して着水できるとは思えない。ドライブシャフトが動作して前後ロー

ターが同期できているのは不幸中の幸いだが、どちらにせよ、墜落には変わりないのだ。

(ああ、神様、せめて鞠莉さんだけでも……！)

そう祈って正面のシャイニーを見れば、しかし仮面を開いた鞠莉の顔は、満面の笑みだった。

松之介は目を疑ったが、ここ数年の経験からそれが、恐怖のあまり引き彎った顔ではなく、初めて直面する「墜落」という状況を楽しんでいる顔だ、と察するしかない。

(その肝、半分くらい僕にくれないかなあ……！)

シートベルトを握り締め、歯を食い縛る。

引き延ばされた時間の中、衝撃を待つ。

数秒か、数分か。

ふつと窓の外が暗くなり。

ずん、と突き上げる衝撃に、鉄がこすれる異音が混じった。

(……え?)

違和感。

着水による減速のGがない。

波に揺れる感触がしない。

水に当たる音がしない。

さざ波のように、貨物室にざわめきが広がる。

「機長、なにが起きましたか」

セブが無線に問うた。

「ふ……不明です。前後ローター破損ですが、高度は一五フィートから変化なし、進路も変化なし……陸地に向かって進んでいます」

「Cavalluccio Marino……?」

眩いたのは鞠莉だ。

彼女の視線は、丸い窓に向いている。

いや、窓を覆うなにかに。

それは滑らかな金属質の、節くれ立った指のように見えた。

誰かがへりを掴んでいる?

何十メートルの誰かが?

やがて、機体が減速するのが感じられた。

そして機体は右に傾き――

ずん、と。

――横倒しで停止した。

「なに?。」

作業員の誰かが呟いた。

「ここ、どこですか?。」

「伊豆半島の北西端……ですね」

別の作業員が、九〇度傾いて固定されたディスプレイを見て言った。

（止まった、のか?。）

機体の左側面を見上げる格好の松之介は、その事実を飲み込み、心臓の高鳴りを思い出した。

後部ハッチが開き、真つ暗な貨物室に光が差し込んでくる。

と同時に、現在地が辺鄙な地点だと分かり、安堵した。

「怪我はないですか? 鞠莉さ――」

正面で真下を向いて固定された銀色の鞠莉は、いつの間にシートベルトを外したのか、松之介の頭の上に着地した。

「――ま、鞠莉さん!? 待ってください!。」

鞠莉が後部ハッチに向かうのを見て、松之介もその後を追う。

飛び出したブーツが踏んだのは磯浜で、目の前には着水する予定だった海、そして――

「なんだ、あれ」

――駿河湾を富士山に向かって北上する、巨大な尻尾のような物体が見えた。

その節くれ立った物体は、指を握るように先端から丸まっていき……海中に姿を消した。

「あれもフォーメア……なんですか?。」

「不明です」

松之介が口にし、電話を片手にやってきたセブが応えた。

「本社と連絡がつかしました。陸路で回収車両が向かっているそうで

す」

鞠莉の専属ボディガード兼S―ユニットのオーナーは、ヘリの墜落現場とも爽やかな空と海と礫浜とも合わないゴシック調の黒服の燕尾を翻し、電話をしまった。

「じゃあバンに積み直しですか。あ、《一七号》は？」

「深海作業器材を搬出しなければ、装着システムは載せられません」

もう一機のヘリも、一旦内浦まで戻らないといけないのか。

「ああ、こんな時、シャイニーが単独で富士に飛べれば――」

――と振り返り、松之介は見てしまった。

腹を見せて礫浜に横倒しになったOGIグループの《スターフォア一六号》の向こうで、大勢の人々がこちらに電話を向けていたのだ。

「あれ？ セブ、ここって……」

「大瀬崎の礫嘴、ですね」

大瀬崎。地理的には辺鄙だが、ダイバーにはダイビングの名所として知られており、大瀬明神や神池と呼ばれる淡水池などの観光地がある、年中人が絶えない場所だ。砂でなく礫の浜を踏んだ時に、気付いているべきだった。

「どうするんです？ これ」

「回収作業後のアクシデント、と発表するしかないでしょうね」

「フォーメアと戦った、ってことにします？」

「負けた、と？」

結局はセブの提案通り、この件は夜の記者会見で事故として発表された。その影響は、シャイニーの有用性の証明により翌日に上がるはずだったOGIの株価を、概ね帳消しにしてしまう勢いだった。

それはともかく。

「鞠莉さんは？」

シャイニーをまとったままの鞠莉は、正体不明の存在が消えた残滓が浜に届けた波を、銀色の足で受けていた。

楽しみにしていた海面への墜落が、フォーメアの手で助けられなかったことに、思うところがあるのだろうか。

ややあつて、こちらを向いた鞠莉は、電話を向けるギャラリーに気が付いた。

だが「Shiny!」とは言わず、小さく手を振っただけで、へりに戻っていった。

*

国木田花丸と幼馴染みは、富士山に向かって富士総合運動公園内の林を駆け上がり、吹き抜きの建物に辿り着いた。

それは相撲場だった。鉄柱が支える木製の屋根の下に、水捌けをよくした地面に盛られた土俵場があり、脇には平屋の更衣室もある。

登ってきた南側を見ると、なだらかに傾斜しながら駿河湾の海岸線へと続く街が、新緑の芽吹く木立の間から垣間見えた。こんな素晴らしい景色を見ながら相撲が取れるのか、と思うと、少しだけ興味が湧く。

が、今はそれどころではない。

「も……もう無理……」

ツーサイドアップの先端から汗とプールの水を滴らせるルビイは、「南」と貼られた鉄柱にもたれかかり、肩を上下させた。花丸も息を弾ませているものの、毎朝のランニングのおかげで辛くはない。

「休んで。しばらくは平気だと思うよ」

気付けばバイクのエンジン音は、ずいぶん遠くになった。だが離れていくでもない。

ルビイも花丸も、最初の怪人から追いかけてばかりだ。その事件が分からなければ、安心はできない。

花丸はグチャグチャになったバッグの中から電話を出し、OGIグループが配信するフォーメア情報収集アプリを立ち上げた。自分が渦中にいるのに電話の向こうの情報を気にするなど、地震の時に見るSNSのようだが、もちろんフォーメアには計測可能な速報情報がない。

花丸は諦めて、電話をしまった。

考えてみれば、今まで出現したフォーメアの情報は、仮面ライダーに倒された後でOGIが発表するのが常だ。花丸が通報した形状に

さえ、速報で言及していないのだから、OGI発の情報で今役に立つものはない。

「ライダーさん……来れないみたい……」

役に立つ情報は、ルビイの電話にあった。

SNSで絶賛拡散中の、横倒しになったOGIのヘリの横で富士山を望むシャイニーの写真がそれだった。

「ずらあ……。シャイニーさん、お疲れ様ずら」

苦笑しながら、花丸は考える。

場所は大瀬崎、陸路なら富士まで一時間以上かかるだろう。いずれは他のヘリなどで来るにしても、仮面ライダーを期待するのは危険だ。フォーメアはまだ、公園内の道路を歩き来しているようだ。公道に出ればさらなるスピードで追いかけてくるだろう。ルビイのりムジンに乗せてもらうのも得策とはいえなさそうだ。

(オラがなんとかしなきゃ)

その発想に飛躍があるのは分かっている。仮面ライダー以外がフォーメアを倒した実績がないのも分かっている。

でも。

「ルビイちゃん、乗って」

花丸は屈んで、ルビイに背中を向けた。

ルビイは一瞬息を詰めたが、すぐに喘ぎながら首を振る。

「そんな、無理だよう……。マルちゃんだけ逃げて……」

どこかで甲高く唸るエンジン音が聞こえてきた。その音は遠いが、相手が諦めていないのは確実だ。

なら私も、諦めるわけにはいかない。

「トウエインさんは言いました。『勇気は恐怖への抵抗であり、恐怖の克服である』って」

「え……う？」

入学式の日、エンジェル・フォーメアに襲われた花丸たちを助けてくれたのは、仮面ライダーでもなんでもない、ただの上級生だったのだ。

「今度はオラが、ルビイちゃんを助ける番ずら！」

ルビイはしばし花丸の目を見ていたが、申し訳なきそうに頷くと、背中に乗ってきた。

幼馴染みの両膝に腕を通し、お尻を支える。見た目よりもふくよかだ。これなら水に浮かないはずがないのに、と思いつながら、花丸は相撲場を北側に抜けて――

「マルちゃん！ 前！」

――宙を舞うバイクの化け物を見た。

「ず、ずらあー！」

どこをジャンプ台にして跳んできたのか、バイクの化け物は真正面から花丸の元に飛来し、すれ違い、土俵に飛込み――盛大にすっ転んだ。

「ずらあー！」

横転して回転して土俵の外に飛び出していったバイクを見送ると、
「しっかり掴まるずらあー！」

もうもうと上がる土を尻目に、花丸は丘を駆け降り始めた。スカートかショートパンツか迷ったが、後者を選んで本当によかった。

「ピィィ……！」

抱き付いてくるルビイの腕は若干苦しいが、それはルビイが無事な証拠、不満は言わない。

元々が駿河湾から富士山に向かって傾斜した土地に作られた運動公園ゆえ、北側は高低差が少ない。二人はほどなくして二車線の道路に出た。

(でも、どうしよう)

丘を取り囲むように走るのは舗装された道だ。ここを林を行き来して、時間を稼ぐ？ それとも――

「――マルちゃん……あそこ……」

ルビイは車道の向こうを指差した。

指の先には、相撲場のあった林の丘とは違って芝生に覆われた斜面が広がり、その上に富士山をバックにぽつんと建つドームがあった。

「プール？」

花丸は覚えていた。今日のプール遠征でルビイが最初に目を付け

た、先ほどの温水プールよりもっと大きくて深いプールのある、静岡県富士水泳場だ。なら。

その時、バイクの化け物が斜面から飛び出し、歩道の柵に激突して停止した。

「ピギイ！」

きりきりきり、とスキール音を鳴らしてこちらを向いた化け物バイクを前に、花丸は唇を舐める。

「勝算はあるぞら」

こいつはバイクのように走れるが、バイクのようにタイヤでしか走れない。それは先ほどの土俵で証明済みだ。

急発進したバイクを柵を乗り越えて避け、車道を横断する。

「ま、マルちゃん」

「舌噛むよー」

斜面を水泳場まで上がる階段へ歩道を走る。

車道に出たエンジン音を背後に、大駐車場への道を通りすぎ、コンクリートで囲まれた階段に駆け込む。

階段はなだらかだが長い。三〇メートルはあるだろう。

「ふん。オラの足腰、甘く見ないことぞらー」

ルビイのお尻を支え直し、一段ずつ上がっていく。

「マルちゃん、こつちに来るよ……」

バイクは芝の斜面か階段か迷ったようだが、階段を選んだようだ。四つのタイヤで前転を繰り返す、花丸を追う格好になった。

「都合ずら」

階段なら相応の時間がかかる。今は距離をとれるだけとるのだ。

「マルちゃん……」

「平気ずら、ちゃんと掴まってるぞら」

毎日鍛えているだけあり、スタミナと足腰には自信がある。

ルビイを背負ったままプールに飛び込めば、泳げるかもしれない。

「ねえ、マルちゃん……」

「もう、どしたぞら」

肩越しに振り返ると、ルビイは背後を見上げていた。

バイクじゃない。

「上だよ！」

その視線を追おうとした時、突風が前髪をかき上げ——
「へ？」

——すぐそばのコンクリートが吹き飛んだ。

「うひゃああ!!」

「ピギイイ!!」

前のめりにバランスを崩した花丸は、咄嗟にルビイの手足を離して階段に倒れ込んだ。

「いったあ……」

「平気すら？」

「う、うん」

顔を上げると、階段を仕切るコンクリートの壁がごっそり砕けていた。

「ずら……？」

爆発ではなかった。

光も音もなかったからだ。

なにかが落ちてきた？

階段に散らばったコンクリ片に注意しながら、花丸たちは穴の開いた壁から下を覗いた。

そして息を呑んだ。

階段の下の道が破壊され、なぎ倒された並木と砕けた瓦礫の中に、なにかがあった。

直径二メートルほどの、黄金の斑点を帯びた黒光りする球体。

それが、生卵を割るように、真っ二つに開いた。

「い、隕石すら……？」

《ロリポリ・フォーメア》だった。

*

意識を取り戻した考朔が医務室に運ばれたことで、飛込プールを含む静岡県富士水泳場は活動を再開した。

だがプールサイドの荷物置き場にいる渡辺曜は、まったく気が休ま

らない。

(考朔くんのアレ、フォーメアが産まれた……ってことだよな?)

思い出すのは、自分がゾンビ・フォーメアを産み出した学校の屋上でのことだ。

μーフォームを手に持った状態で梨子と話していた曜は、頭に血が上ったと自覚した瞬間に意識が遠ざかった。気付いた時には梨子に抱きかかえられていたが、フォームはすでに学校のプールに落ち、フォーメアが動き出していたのだが。

(二〇分は経ったぞ……)

その状況と照らし合わせれば、《ほにやらら・フォーメア》が今頃どこかで悪事を働いていても、おかしくないのだが。

曜がいくら見回しても、水泳場の中に不審者はいなかった。

(貧血かなあ。怪我から復帰して間もないみたいだし)

それに、プールサイドで会った時、考朔はμーフォームを持っていたようには見えなかった。曜とは条件が違う。

(いやいや、フォームに触れてなきや発動しない、って法はないよね。飲み込んでたかもしれないし。それでお腹の中で《バクテリア・フォーメア》が暴れてるかもしれないし、あ、水着の中に隠してたら? 三センチくらいなんだから、海パンに隠してもまあサイズ的に——)

——なにを考えているんだ。

煩惱を振り払い、バッグから電話を取り出す。アプリでフォーメア情報を確認しておきたかったからだ。

「曜、ちゃんと休んでおけよ」

「分かっていますって……あれ?」

顧問の信代に生返事をしながら、ロック画面にデカデカと表示されたそれに気付いた。

「フォーメア通報! やっぱり!」

思わず声を上げ、電話を操作する。

「さっきのか? どうせ内浦でだろ?」

信代は呑気な口調で言った。たしかに、速報に場所は記されていない

い。だが発報は数分前、考朔が意識を失ったタイミングに近い。

(……ん？　じゃあエンジェル・フォーメアって、梨子ちゃんが産んだの？　いやいや、入学式でエンジェルが暴れ出したのは、梨子ちゃんはブランキアになって来るより前だったじゃん。次の日だって、エンジェルが出た後、土日ぶっ続けで気を失ってたって言ってたし……？)

答えのない疑問に曜の頭が空転していると、ぶるっと電話が振動した。

「あ、ヨハネさんだ」

もはや本名を覚えていない後輩からのテキストだった。

「えつと？　『ギャラルホルンが鳴り響き、太陽と月は吞まれ、地は震え、命は失われ、虹は砕け、九つの世界は海に没することよ』……？」
大量の絵文字でデコられた意味不明の文章を音読しながら、曜は眉間にしわを寄せた。

(ヨハネさん、＋とかつけまくるタイプじゃないんだ)

次のテキストが届いた。指マークとURLらしき文字列だ。

「こつちだけでよくない？」

URLに触れると、ニコニコ動画のページが開き、ロードが始まった。

タイトルには『【テラ】僕らは今のなかで　を太極拳風に踊ってみた【ステラ】』とある。いわゆる「踊ってみた動画」だ。

「待って待って、こんなの見てる場合じゃないんだけど。ヨハネさんの電話、通報届いて——」

「ばあん、と。」

「——ないの？」

顔を上げる。

「なんの音だ？」

紙の束をめくる信代が言う。

曜は口を開いたまま固まる。

プールサイドの喧噪が一瞬抜け、泳ぐ人たちの水を叩く音だけが響く。

「事故？」

「こんなところ？」

近くで他校の生徒が騒ぎ出す。
なんだろう。

閉まったシャッターに、思い切りサッカーボールをぶつけたような音か。

いや、もっと大きなものが激突したような？ たとえば――

「――バイク？」

ばあん。

同じ音。

二度、三度、四度。

少しずつ強くなっていく。

五〇メートルの競泳プールの向こうにいる人たちが、壁を見ながら後退りする。

泳いでいた人たちも、プールから上がろうとしている。

「センセ、今日は帰りませんか？」

「だな」

曜はバッグに電話を放り込み、だが、走り出せなかった。

ばりばりばり、と水泳場の壁が外側から破壊され。

閉鎖された薄暗いドームに、強い風と鋭い日光が入り込んできたからだ。

いや、そこに投げ込まれたなにかを見て――橙と緑と青と銀の色が混じった、なんだかよく分からないものを見て、自分の予想が正しかったことを認識したからだ。

《《バイク・フォーメア》》

七五メートル先のプールサイドで、巨大なバイクの形をした物体が、横腹を見せて立ち上がったからだ。

「フォーメア？ あのグツチャグチャなのが怪人だったのか!？」

信代が叫び、ドームがそれを反響させた。

「センセ、考朔くんは!？」

「誰だよ、それ！」

「さつき医務室に——」

曜が言い終わる前に、もう一つの闖入者が現れた。

「——まさか!」

「ダンゴムシもかよ!?!」

OGIによってロリポリ・フォーメアと命名されたそれは、プールサイドをゴロゴロと転がって、不意に丸まっていた身体を展開、二足歩行状態になった。

「曜、あっちだ!」

信代が飛込プールの近くの非常口を指差した。

気付けば飛込プールのそばにいた他校の生徒や顧問は、我先にと更衣室の方へと走っている。

曜も早歩きで信代の方に歩き出し——バッグの中で鳴り始めた場違いな音楽に泡を食ってしまった。

「ちよつと、ほんと、ほんとこんな時に!」

「おい、曜!」

電話を取り出し、ロードが終わった動画を停止させようとして、

「あれ?」

思わず足を止める。

肩幅まで足を開き、タイトルの通り太極拳の型ようなゆったりとしたダンスを踊る少女。

緩やかにウエーブした髪の少女と、ツーサイドアップの少女。

「あれ?」

小さな画面の中の二人に、曜は見覚えがあつたからだ。

「これって……?」

ばあん、と音がして振り返る。

ロリポリ・フォーメアが細い腕でバイクを掴み、プールサイドに叩き付けたところだった。

バイクは火花を散らしてタイルを滑ったが、六つあるタイヤの二つを地面にこすりつけ、走り出した。

「あいつら、仲間割れしてる?」

「あれも仮面ライダーなのか?」

ロリポリはダンゴ状態になり、軽くバウンドしてその後を追う。二体のフォーメアは競泳プールの角を併走してカーブし――

――更衣室を目指して走る水着姿の人たちと、同じレーンに入っ
た。

「後ろ後ろー！」

「避けるー！」

国際大会にも使われる水泳場だから、プールサイドは余裕を持って七〜八メートルの幅がある。

だがバイクは蛇行運転で、ロリポリは直径一メートル以上もあるのだ。

何人かが競泳プールに飛び込み、何人かが観客席の下の壁際に飛び――何人かが足を滑らせて転んだ。

そこにバイクとロリポリダンゴが突っ込み――

「ダメずらあー！」

――ダンゴが壁に激突した。

「え？」

バイクが競泳プールの中に落ちた。

「なに？」

なにが起こった？

接触して弾かれたのか？

「危ないよー！ マルちゃんー！」

声に目を向けると、場違いな少女が二人、プールサイドにいた。

プールサイドを走る少女と、外壁のコンクリ片や曲がった鉄骨を乗り越えている少女。どちらも水着ではない。

「あれ？」

曜はその二人に見覚えを感じる。

その間にも、状況は動く。

プールに落ちた人はプールサイドに上がり、転んでいた人は立ち上がり、全員が更衣室へ避難した。

バイクは気泡を発しながらプールの底に沈んでいき――揺らめいて見えなくなった。

「消えた!? おい、どうなってんだ?」

気付けば隣にいた信代が問うた。

「弱ったバイク・フォーメアが泡を割って水に戻った」と予想したが、もちろん口にはできない。

ロリポリ・フォーメアはプールサイドを這って、プールの縁にやってきた。立ち上がった時には足だった触角を漂わせ、プールの水に触れた。

そこに、水着ではない少女が、恐る恐る歩いていく。

緩やかにウエーブした髪 of 少女と、その後ろに隠れたツースサイドアップの少女が。

「あれ?」

思い出した。

あれは、浦の星女学院の生徒会室で生徒会長のダイヤと話した時に、ダイヤに呼び出された後からやってきた二人の下級生だ。

ダイヤの妹のルビイと、名前を知らないもう一人。

「あれ?」

思い出した。

それは、今まさに曜の電話が再生する動画に出ている二人だった。

「じゃあ、もしかして、ヨハネさん」

曜の足が、水に濡れたタイル敷きの床を踏む。

あの二人を、私に紹介してくれたの?

「曜!?! おい!」

やがて、曜は走り出した。

次回予告

花丸 「ロリポリとバイク? 二体も怪人が出てきちゃったね」

ルビイ 「しかもどっちもやられてないし。どうなっちゃうんだろ」

曜 「怪人よりスクールアイドルだよ。私の振り付け話、全然進んでないじゃん」

鞠莉 「そんなことより私のShinyよオ! 見た見たア!」

花丸 「フォームチェンジで狙撃も体術もできるなんて、他のライダーさん必要ないぞら」

ルビィ「でも一五分で動けなくなっちゃうんでしょ？」

鞠莉「うるさいわねエ。Agile Developmentなのよ」

曜「はいはい。次回、仮面ライダーメルシャウム第八話、『Dance with me! Dance with you!』」

花丸「ロリポリ回の後編すら、お楽しみに！」

ルビィ「次は溺れないで泳げるかなあ」

鞠莉「じゃあFoamareに追っかけさせる？」

曜「いいけど、プールは壊さないですよ？」

ルビィ「よくないよう……」

C

プールサイドで逆立ちする巨大なダンゴムシに、国木田花丸は恐る恐る近付いていく。

「逃げられちゃったずらっ？」

ロリポリ・フォーメアと名付けられた怪人は、今は頭になっているお尻の部分を前傾させた。それが申し訳なさに頭を下げた仕草に見える、花丸は警戒心を緩める。

その時、顔に当たる場所に直径一〇センチほどの泡が、一つ目の眼球のように埋め込まれていることに気付いた。

泡の中で淡く輝くのは、六点で内接する正八面体を包み込んだ、ほのかに黄色味がかかった球体。

「〔本尊……っ？〕」

ロリポリを倒した理事長代理が持っていた本尊が、なぜここに？

いや、こんな球体がたくさんあるのか？

それらが、ロリポリを始めとするフォーメアを形作っているのか？

そんなことを考えていたから、

「マルちゃん！ 近付いちゃダメ！」

「え？ ちよ、ちよつと危な——」

追い付いてきたルビィに手を引かれて簡単にバランスを崩し、濡れたタオルに尻餅をついてしまった。

「——いったあ……」

「あ、あ、ごめん！」

ショートパンツから染み込んだ水が、じわりと下着に達したのを感じる。バイクに追いかけてまわされた件と比べれば、なんと気の抜けたダメージだろう。

「怖がらないで、ルビィちゃん。ロリポリさん、落ち着いてるよ」

と花丸は顔を上げ、しかし、そこにロリポリはいなかった。

ロリポリは花丸の横を迂回し、身体の前面に畳んだ七対の足を展開させてルビィに覆い被さろうとしていたのだ。

「ピギィ！」

今度はルビィが尻餅をついてしまった。

「もうー！」

花丸は黒い甲殻の縁を掴み、叫ぶ。

「ロリポリさん！ オラは足を滑らせたただけずら！ ルビィちゃんはマルの命の恩人ずら！」

ロリポリはあっさり動きをとめた。

「ピ……？」

唾然たるルビィを前に、一四本の足を畳み直し、直立状態に戻る。

「ま、マルちゃんの言うことが、分かるの？」

ルビィの疑問に答えず、花丸は徐ろに手を伸ばし、ロリポリの一つ目のような泡に触れる。

「ご本尊を安置した球体の表面は、滑らかで、明け方の川のように、冷たく、流れていた。」

「やつぱり、オラを護ってくれてたずら……？」

僅かな間ののち、ロリポリは左右に身体を振った。首を振る仕草に見えた。

（違う？ なら——）

「——ルビィさん！ と……えっと、テラさんかステラさん！」

「ずらら！」

「ピギィ！」

びくり、と二人の肩が揺れた。

声の方向を見ると、競泳水着姿の少女がこちらに手を振りながら、

プールサイドを走っていた。

花丸はその顔に見覚えがある。

「あれ、渡辺先輩だよ」

「オリンピック候補の？ え？ なんでこんなところ？」

いや、それより不思議なのは、なぜオリンピック候補の先輩が、

「ルビィさーん！ テラさんかステラさーん！」

電子の海に沈んだあの名前で、花丸たちを呼んでいるんだ？

「や、やばいよ、ルビィがここにいるって知られたら！」

「同感すら！」

ルビィに手を引かれ、花丸はプールサイドを走り出す。

「あ、待ってよ！ なんて逃げるのー！ ルビィさーん！ テラさん

かステラさーん！」

「大声で連呼しないでほしいずらー！」

「走らないでください！」

「おい、ロリポリが動き出したぞ！」

「え？ なんで私を追ってくるの!?! もうバイクは倒したでしょ!?!」

「なにやっつてんだ曜！ お前も避難しろ！」

「ダンゴに言ってくれよー！」

「放っておいてほしいずらー！」

「うう、お姉ちゃーん！」

先輩と後輩の追いかっこは、ロリポリが曜をプールに落とすまで続いた。

第八話：Dance with me! Dance
with you! | 1

AV

「だから。なんともないって言っただろ? 血液検査、尿検査、CT、MRI、えっと、あとPET? 全部問題なしだった」

見舞いに来てくれた曜に、松和考朔は噛んで含めるように言った。「本当に? 本当に変なところ、なかったの? 頭が痛いとか、胸が苦しいとか」

「しいて言えば寝不足かな、検査検査でほとんど徹夜だったから。あと、運動不足。早く飛込したいわ」

「ダメだよ! 原因が分かるまで飛込禁止!」

ベッドに身を乗り出して声を上げた曜に、

「そんなにライバルを減らしたいわけ?」

スツールでみかんを割っていたもう一人の幼馴染みが、チクリと言った。

「そ、そんなつもりじゃないけど」

「そうだよ果南、そんなわけないじゃん、曜に限って。なあ?」

「そ、そうだよ、この曜ちゃんに限って!」

「ふうん」

果南は唇の端で笑いながら、三分の一に割ったみかんをこちらに放り投げた。一房口に入れると、強い酸味が鼻から抜けていく。

「ごめん、これ酸っぱかったわ」

「懐かしい味じゃん。食べないなら、それも食べていい?」

「相変わらず悪食だね」

もう三分の一を受け取り、考朔は丸ごと頬張った。

プールサイドで倒れた考朔が意識を失っていたのは、わずか十数秒の間だった。だから医務室で少し休んだら練習に戻れる思っていたのだが、数分で救急ヘリがやってきて、気付けば病院で精密検査を受けさせられ、なんだかんだ丸一日も入院してしまった。

「でも、俺が入院すると曜たちがお見舞いに来てくれるんだから、たまにはいいかな」

「やめてよ、それで毎年入院するの」

「曜はあんまり行つてないでしょ、お見舞い」

「行くよ!」

「でも、俺が運ばれた後、怪人が出たんだって? 倒れてむしろラツキー?」

「かもね」

「果南ちゃん!」

曜が声を上げるが、果南は軽やかに笑う。内浦時代の幼馴染みたちの、距離感と温度が懐かしい。中学校の頃に戻ったようだ。

だが、変わったことも多い。

特に違うのは、ギャザーの入った水色のキュロットスカートをはいている曜だ。制服のスカートの中にさえ短パンをはいているようなキャラだっただけに、敢えてミニスカートにも見えるキュロットをはいているのが新鮮で仕方ない。

果南も、今時のスポーツフアッションかと思いきや、タイトにフィットした本物のスポーツウエアを着ている。水中だけでなく、陸上も彼女のフィールドになったらしい。

そして、最大の変化は、

「なあ、千歌は?」

この二人の真ん中に、千歌がいないことだった。

曜と果南は小さく見合い、曜が口を開いた。

「千歌ちゃんは忙しくてさ、色々」

「空手?」

「まあ……そんなところ、かな?」

考朔の問いに曜は言葉を探しあぐねたのか、果南に水を向けた。

「苦手だった空手の型に取り組み始めた、って感じかな」

「あー、ああ、うん、そうだね。そんな感じ」

二人の会話はよく分からなかったが、考朔は笑った。中学時代はこれといって目標のなさそうだった千歌が、やりたいことを見付けたら

しい、と察せられたからだ。

それが、考朔には言葉を濁す必要があることなのだ気付けば、表情は曇ってくるのだが。

その時、ドアがノックされた。

「どうぞー」

ドアが開き、入ってきたのは見知った顔だった。

「失礼しまーす——って、曜ちゃん!? 果南ちゃんも!」

曜たちと同じ内浦時代の幼馴染みの、小口田よしみだった。

「あれ? よしみちゃん。一緒に行こうって誘ったのに」

「曜ちゃんだって、今日は行かないかもって!」

「行かないとは言っていないよ」

言い合う二人を見て、

「はっはあ」

果南が小さく笑った。

「曜。私たちはそろそろ、お暇しようか」

「え? なんで?」

「いいから。じゃ、考朔。退院したら淡島に来なよ」

「う、うん? え?」

「ちよつと、果南ちゃん!」

「病院ではお静かに、だよ」

果南はなにか言いたげな曜を押し、病室を出ていった。

見送ったよしみは、バツが悪そうに考朔のそばまでくると、

「えつと、久しぶり」

と、後ろ手に持っていたビニール袋を渡してきた。

「うん」

それが彼女の実家である菓子屋《松月》のみかんどら焼きであることは、考朔には分かっていた。

*

「ぼてとが逃げちゃって——」

「そんな時間に散歩に——」

「でも家から出るなって——」

マンションの駐車場で、数人の中年の女性が会話している。

向かいの教会から出てきた国木田花丸は、目を合わせないようにして教会の角を曲がり、家路を進もうとした。

「花丸ちゃん！」

久しぶりの賛美歌の練習で満ち足りていた気持ちだが、しゅう、としぼんでいく。

それでも花丸は、たった今気付いたような顔で振り返り、会釈をした。

「もう平気なの!?! ほら、こつちいらつしやい！」

「ダメよ、昨日の今日で元気ないんだから！」

「なおさらでしょ、ほらー！」

誰かが花丸の小さな肩に触れる。

輪の中に入れられた花丸は、人当たりのいい笑顔を作った。

「お久しぶりです」

「ほんとようー！」

「何日ぶり？」

「この前、礼拝に来てなかったじゃない！」

《聖書友の会》沼津教会の近所に住むこの主婦たちは、毎週の日曜礼拝に小さな教会に集まってきては、牧師の説教を聞き、聖歌隊の歌を聞き、主の晚餐をいただいている。

小学生で正式な聖歌隊メンバーに選ばれた花丸は、なにかと世話を焼いてくれた彼女たちのことを敬虔なプロテスタントだと思っていたが、成長するにつれて「礼拝後に駐車場でする井戸端会議がメイン」だと分かってきた。今日のような平日だって、そうしているのだから。

「でも、仕方ないわよね」

「入学早々だしね」

「入学式もそうじゃない！」

「お祓いしてもらった方がいいわよ？」

「虫難なんて効かないでしょ？」

「やめなさいよ、五年前のこと思い出しちゃうでしょ？　ねえ？」

始まった。

「でもダンゴムシならいいじゃない。大きかったんだし」

「そうよねえ、あの時はほら、小さい虫がすごいいたって」

「もう五年、新しい家だったらねえ」

耳の奥に、誰かが「次の方、どうぞ」と呼ぶ声が蘇る。

鼻の奥に、清潔なシートから漂う柔軟剤の匂いが蘇る。

花丸はまたも、閉じられない耳と鼻を恨む。

（『三界無安』 ずら）

珍しいタイプではない。

傷が治っているかを確認するには、かさぶたを剥がしてみなければ
ならない、と思っている人たち。

家族も、学校の友達も、花丸を担当したカウンセラーでさえそう
だったのだ。

月に一回くらいは、誰かが花丸の傷を見る。

なにも言わずに受け入れてくれるのは、いつも本堂で花丸を癒やし
てくれる本尊と――

（――ルビィちゃん）

幼馴染みの顔を思い浮かべながら、右手をそつと左手で包む。

作り笑いで相槌を打ち、彼女らが満足するのを待つ。

正面から受け止めなければ、傷が開くこともない。

少なくとも、すべては。

A

「じゃあ、あの子が《P i l e u p F o a m a r e》を産み出し
た、つてことで間違いないわけエ？」

「おそらくは」

報告を噛み砕いて言い直した鞠莉に、桜内桑介は頷いた。

「松和考朔さんの身体からは、μ―フォームと似た量子信号パターン
が検出されています。これが人体から検出されたのは、彼を除いては
梨子――ブランキアの例しかありませんので」

桑介はディスプレイに目を向けた。映っているのは、被検体の少年
が入院する病室を捉えた監視カメラの映像だ。音声は入っていない

が、先に来た二人の見舞客の少女と騒いでいたことと、その後の一人の見舞客の少女と言葉少なに話していることから、少年が緊張状態にないのは読み取れた。

「しかし、《スランバラー》の直接的な分析が実現するとは、思いませんでした」

「感謝しなさいよオ？ 富士あっちから静浦こっちに搬送する手配、結構苦勞したんだから」

「苦勞では、こちらも負けていませんよ」

現在進行形でフォーメアを産み出している人間——鞠莉が名付けたところの《スランバラー》——から得られた知見は、ブランキアのムーフォームから導き出された様々な仮説を裏付ける材料となることが期待されていた。そのため《OGI研究所病院》を含む静浦は、開業早々きりきり舞いで、考朔も二四時間フル稼働だった。被検体の入院期間をどれだけ引き延ばせるかは、前例がないために分からないからだ。

だが、現状でも断定できる、重要な発見もあった。

「彼から検出された量子信号パターンは、ブランキアのそれとは異なります」

「どういうこと？」

「発動中のムーフォームが発信する信号により、個体識別が可能になる、ということです」

「怪人に色が付けられるようになる？」

「平たく言えば、そういうことです」

桑介の言葉に、OGIグループCEOのご息女兼OGI研究所病院の社長は、ディスプレイに映る少年を見た。

「スランバラー、または対応するフォーメアのデータを採取できれば、残りの特定が可能です。発動状態のムーフォームでも、おそらく同じことができるでしょう」

鞠莉は何度か頷き、桑介に目を戻した。そして、

「Gotcha、《Mark III》に積むRadarの仕様は決まりね」

そんなことを軽く言うから、桑介は慌ててしまう。

「待つてください、特定可能と言っても、差は極めて些少です。静浦ここのような大規模な設備でなければ、検出は不可能です」

広域レーダーで静岡OGIが計測してきた駿河湾のムーフォームの信号も、数年間の蓄積があつたにもかかわらず、有意な差異を発見できなかったのだ。ましてや人型スーツに格納可能なレーダーの性能など、たかが知れている。

「まずは広域レーダーのアップデートで個別識別技術を確立して、そこからシャイニーに——」

「——広域を拾う必要はないわア。どうせFoamareのそばにSlumbererがいるんだから」

「……どういふことですか？」

「だから、Foamareに逃げられたら、その辺りにいた人をCheckすればいいってことですよ？」

「ですから、そのためには大規模な——」

「——No, No, No! 特定なんてする必要のないよオ！」

そこまで言われて、鞠莉のビジョンが、ようやく頭に浮かんできた。

「そう……ですね。ムーフォームの量子信号パターンを発する人を見付ければ、ことは足りるのですね」

「そういうこと！」

やっと分かったのか、と言いたげな顔で鞠莉は鼻を鳴らした。

桑介は端末を操作しながら、まだ一七歳の社長に舌を巻く。

報告の理解の早さもさることながら、その思考の展開の早さの方に、だ。

父親の会社の技術力や資金力にものを言わせて《仮面ライダーシャイニー》を開発させ、民衆の前に出ては「シャイニー！」と叫ぶだけの人物、そういう声は社内外問わず多い。だがこうして直接研究チームや開発チームの声を聞いては理解を深め、あまつさえ次のステップへの指針を示す様を見ている桑介には、鞠莉を否定することはできなかつた。

「そんな感じで考えてみてね、モルス。静岡OGI大 諏のJH開発を使っ

て、Mark IIIには間に合わせて」

「僕が、ですか？」

「そうよ、だからこうやって、この機密の塊の街に呼びつけたんじゃない」

「僕に準備しているポストを、ちらつかせているわけですね」

「Uh—huh」

鞠莉はいたずらっ子のように鼻を鳴らした。

「アナタにはここで、μ—Foam関連事業のManagerに収まってもらいたいんだけどねエ」

「先日も言いましたが、梨子の検査があと二回終われば、僕はこの街を離れるのですよ？」

「なら、なんで内示の承諾をしないの？」

その指摘に、桑介は口を閉じる。

「聞いたわよ、保留にしてもらってるんでしょ？」

「越権行為ですよ」

「浦の星女学院の生徒として、聞いたのよオ？」

なぜここで、学校の話が出てくるのだ？

そう思ったが、桑介は表情を動かさなかった。

「分かりました。ここに居る間は、レーダーの仕様策定に加わります」

「頼むわよ、モルス」

「……モルス、ですか？」

「名前、〃桑〃でしょ？ 早く言ってよね、Nickname決めるのも大変なんだからア！」

呼びたいように呼ぶクセがあるのは本当らしい、と桑介は思わず笑ってしまった。だから、

「ねえモルス」

「は、はい、なんででしょうか」

『BranchialFoamare』は、True？」

息がとまった。

「どう？」

社長はこう問うたのだ。

「お前の娘は怪人か」と。

不意打ちだ。

「ブランキアは……スランバラ産み出した人とフォーメア産み出された怪人が統合された形態、といえます」

「それは分かっているわア？」

ポーカーフェイスを維持しながら、言葉を探す。

「発動したムーフォームの力で梨子の身体を泡立たせ、表面部分を強化装甲に変質させる。それが我々が観測している、ブランキアの変身メカニズムです。液体を泡立たせて特定の形状を形成するフォーメアと、仕組みとしては同一です」

社長は唇に指を当て、何事かを口の中で呟いていたが、やがて桑介の肩を叩いてドアへと歩き出す。

「だとしたら、Radarに積むムーフォームのDetection Systemを作るのは、アナタにしかできないこと、よね？」

「それは——」

梨子の父親である、自分にしかできないこと。

「——検討を始めます」

桑介が頷くと、社長は満足そうに目を細め、「よろしくね！ Cia o！」と去っていった。

端末にリーダーの仕様をざっくり書き込むと、溜め息をつき、無音のままのディスプレイに目を向ける。

スツールに座った見舞客の少女と、ベッドで半身を起こした被検体の少年は、まだ途切れ途切れの会話を続けていた。梨子と同年代の二人が想い合っている間柄なのは、鈍感な中年男性の桑介にも想像できた。

そんなことは、想像したくなかった。

ブランキアとフォーメアは、本質的に等価だ。

ムーフォーム探知システムを開発すれば、その探知結果には自ずから、梨子が含まれる。

このスランバラの被検体も、フォーメアを産み出している間は同じだろう。

梨子だけを除外するのは簡単だ。

いや、僕らがこの街から離れば、システムに手を加える必要さえない。

だが、この少年はどうなる？

いずれ現れるであろう、たくさんの《悪夢にまどろむ者》たちは？

「参っちゃうな。ただの検査旅行だったのに」

小原鞠莉は苦手だ。

あの少女を前にすると、自分の時間がとまっていることを認めざるを得なくなる。

*

「果南ちゃん、ほんとに帰るの？ まだ全然話したりなかったのに」

「遠慮しなよ。よしみ、考朔のこと好きなんだから」

「え、え？ そうなの？ ええええ!!」

「車内ではお静かに、だよ」

目を白黒させる幼馴染みのお尻を押して、松浦果南はマイクロバスに乗り込んだ。

「なんでそんなの分かるの!？」

「なんであれで分からないの?」

シートベルトを締めながら運転手に「OK」のハンドシグナルを送ると、シャトルバスは研究所病院の地下駐車場を出発し、少しして屋外に出た。

外来用セキュリティゲートを越えた先は、午後の木漏れ日が照らすボコボコのアスファルトの山道で、うわんうわん、と低いギアで走るバスに、曜はひっきりなしにお尻の位置を動かしている。

「この後どうする?」

果南が問うと、曜は頬にかかる髪の向こうから控えめに見返してきた。

「なに?」

「ううん」

曜は目を伏せ、口を尖らせる。

「考朔にできることはないよ。怪人のこともね」

髪を振り乱してこちらを見る曜に、果南は前を向いたまま笑う。

「《パイルアップ・フォーメア》、だっけ？　あの“追突事故の恐怖が元つてことくらい、私にも分かるよ”

“玉突き事故”の名を与えられた、三台のバイクが結合した怪人。

「うん……」

曜は窓の外に目を向けた。そこにはコンクリートで舗装された山の斜面しかない。

本当に分かりやすい子だ、と果南は思う。

考朔がバイクで追突事故に遭い、右脚の脛骨と腓骨の開放性骨折をしてから、丸一年以上が経過した。

事故は雨の夕暮れ、獅子浜の《大久保の鼻》で起こった。考朔の兄を含む運転手三名それぞれに小さな過失があり、タンDEMシートに乗っていた考朔を含む四人が大小の怪我を負った。お互いを巻き込んでグチャグチャになった三台のバイクの映像は、ローカルテレビで何度も放送され、果南の頭にも焼き付いている。

誰が悪いわけでもない。

だというのに果南の幼馴染みたちは、その件には触れようとしない。曜はなにごともしなかったかのように振る舞い、千歌は逆に考朔を極力避けるようになった。

内浦の幼馴染みの中で唯一、定期的に沼津市内の病院にお見舞いに行っていたのは、よしみだけだった。

だから果南は、曜に身を引かせたのだ。

会話のない二人の乗客を乗せて、シャトルバスはのろのろと民家の間の山道を下り、国道四一四号線を渡り、津島神社を通りすぎ、獅子浜北公民館の前で停まった。病院に行く時に二人が乗った場所でもあった。

バスから降りた果南は、一つ伸びをして、公民館にとめさせて貰っていたロードバイクを回収した。

「曜はどうするの？　今日は練習、ないんでしょ？」

もう一度、問う。

「私、寄ってきたいところがあるんだ」

曜は果南から視線を外すように、市内の方を見た。

「そつか。ま、無茶はしないでよ。戦いも追跡も、その役目の人がやってくれるからさ」

そういうと、曜は頬だけで笑った。

「なに？」

「ううん、私、全然役に立ててないな、つて。身体だってバツキバキで女の子っぽくないし。せめて準備中は頑張んなきゃ」

アイドルの方の話か。

そちらもそちらで重症かな、と思うが、もちろん口にはしない。

「じゃ、また明日」

「ヨースロ」

了解のイントネーションで呟いた曜に手のひらを見せ、果南はロードバイクの細いタイヤに重心を乗せて走り出した。

ゾウの鼻のように南に出っ張った岬、大久保の鼻が見えてくる。

考朔がバイク事故に遭った現場だ。

見通しは悪くないし、交通量も多くない。

膨らみすぎないように注意しながら、緩いアールを描く車道を走る。

今、私が死んだら、誰が悲しむかな。

右手の空き地に積まれた土の山と、その向こうに見え隠れする淡島を横目に、果南はクランクを回し続ける。

第八話：Dance with me! Dance
with you! — 2

二〇分ほどのジョギングのちに渡辺曜は、海岸沿いの平野から沼津アルプスに向かう勾配に並んだ住宅の間にて、舗装されていない小道を見付けた。

「ここかな?」

表札も案内板もないが、単語カードに描いた地図が示す場所に似ていた。

砂利を敷いた小道を登っていくと、両側の民家を越えた辺りで山沿いの森にぶつかり、道は左にカーブする。

カーブの終わりはまた直線、その先に、木に囲まれた小さな山門が見えた。

「《妙法寺》……ここだ」

山門に掲出された達筆な看板に向かい、湧き水らしき池を横目に歩を進める。

その時、歌が聞こえてきた。

「ふーんふーんふーんふーんふ……」

曜は耳を疑った。

まったりとしたそのハミングが、耳慣れないものだったからではなく、どこかで聞いたことがあり、かつ、お寺で聞こえてくるようなものではなかったからだ。

「ふーんふーんふーんふーんふ……」

山門をくぐった時に思い出した。

「ビックカメラのテーマ曲じゃん、これ」

市内にあるカメラ量販店で流れているフレーズだったのだ。

「なんで、こんなところで?」

境内に入り、軽く曲がった参道を歩いて本堂の正面まで行くと、その歌が本堂の向こうから聞こえてくるのが分かった。

踏み固められて雑草も生えていない土に下り、小振りな木造の本堂を左手へ回る。若干傾斜した境内の山裾側には住職一家が住んでいるらしき建物があるが、本堂の奥と右手には鬱蒼とした森の斜面しか見えない。

「Shall we gather at the……」

ハミングだった歌が英語になった。だが曲調は同じ。

本堂の狭い外廊下に沿って足早に進み、陰から現場を覗くと――

「Where bright angel feet have……」

――そこには小柄な少女の姿があった。

まったりと口ずさむ歌にリズムを合せ、異様にゆっくりと両腕と両脚を動かす様に、曜は昨日見た動画を思い出し、それが太極拳らしいことに思い至る。

つまり彼女が、善子が紹介した動画の投稿者の一人――国木田花丸のようだ。

「With its crystal tide for……」

曜がなんとなく知っている太極拳よりもゆっくりとした動きで、何秒もかけて持ち上げた足を、何秒もかけて地面に下ろし、その間も腕は淀みなく動き続けている。

それは見た目以上に、筋力と体力とバランスが必要な動きだ。

「拳法としての太極拳の腕前は不明だが、ダンスの資質があるのは間違いない。」

「よし……」

意を決して建物の陰から出た時、

「たーんたーんたーぬぎーの……」

英語の歌詞が日本語に切り替わり、

「うおんうおんうおんうおん！」

「うわあー！」

吠え声でつんのめった。

本堂を背に振り返ると、いつの間にか、曜のそばに大型犬がいた。

「マジっ？」

黒と茶の艶やかな毛並みに覆われたそれは、通った鼻筋の下に並ぶ鋭い切歯と、真つ黒い瞳で否応ないプレッシャーをかけていた。番犬だ。

「ま、待って待って、怪しいものじゃないよ。参拝客だよー!」

手のひらを見せて後退るが、合わせて足音もなく近付いてくる。

「うおんうおんうおん!」

「うひい!」

「パフェ、Quiet! 静かに Sit! お座り」

番犬は、すつと腰を下ろした。

「お、おお……?」

「パフェ、Good Boy いい子」

曜は、劇的な変化をもたらしコマンドに振り返る。

太極拳のポーズのままとまった花丸が、闖入者の顔に目を丸くしていた。

「よ……ヨーソロー。国木田さん」

「……………」

その目が細められた。

「パフェ、Guard 警戒」

番犬がすつくと立ち上がり、曜の方に近付いてくる。

「え! え! 待って待って、なにもしないから!」

花丸は完全に警戒していた。

当然だ、昨日の今日で、プールの一件を忘れているわけがない。

「昨日は悪かったよ、その、追いかけて回して!」

「そのことじゃないぞら!」

「え? あ、お寺とか神社とか言っちゃったこと?」

「《テラ&ステラ》ぞら!」

叫んで、だが花丸は自分の口を押さえた。

「ごめんって。顔出ししてたし、ハンドルネーム隠してたなんて知らなくて」

「オラのことじゃないぞら!」

また声を上げ、花丸は眉を斜めにする。

「ルビイちゃんは、あのプールにお忍びで行ってたずら！ 軽々しく呼んじやいけないずら！」

そんなこと知るわけがない、と反論しようと思ったが、黒澤家のご息女であれば、そうなのかもしれない。

「分かった、ごめんなさい」

「それでいいずら」

花丸は鼻息を漏らして言い、

「はああ！ 先輩になんて口の利き方を！ マルこそ、ごめんなさい！」

と頭を下げた。

「いいよ別に、それは。それよりさ、この子、懐いてくれたの？」

黒と茶の大型犬——パフェは、曜の周りを回りながら、日の光で暖かな毛並みをこすりつけていた。

「渡辺先輩の顔は覚えました。パフェ、Patrol^巡」

番犬は花丸の言葉に、曜から離れて寺の敷地を歩いて行った。警備に戻れ、と指示したのか。

曜はようやく人心地つけた。

「番犬がいるなんて知らなかったよ」

「ジャーマン・シエパード・ドッグの国木田P^パerf^{フェ}ectです。最近
は物騒だからって、お母さんが連れてきたんです。それで——」

と、小柄な後輩は曜に顔を向けた。

「——なにかご用ですか？」

その目に不信感が戻ったのを見て取り、曜は人当たりのいい表情を意識した。

「今日、学校休んでたからさ。怪我でもしたかと思って」

「いえ、一日に二回も怪人に追いかけられたので、学校でなにを言われるか分からなくて」

島郷海水浴場のロリポリに、静岡県富士水泳場のパイルアップのことだ。

「パイルアップの方は、国木田さんたちだって噂になってないよ？」
「バイクの怪人のことですか？」

「こそ」

「でも、渡辺先輩、大きな声で『ルビイサーン』、って」

「悪かったって……。まあその、ルビイさんのことは何人か呟いてたけど、壁をぶち破ってバイクを投げ込んだロリポリ動画が超人気です」

「そんなもんずら……？」

方言丸出しで小首を傾げる花丸に、曜は思わず嘖き出した。

「そんなもんなの。だから、学校来ても平気だよ」

「分かりました。その件は、ありがとうございます」

花丸の顔は、「それだけ？」と問うていた。

本題を切り出さねばならない。

「ねえ国木田さん、お願いがあるんだけど……」

だが、曜は考える。

本当は、「ダンスの振り付けを手伝ってくれない？」と言うつもりだった。

担当がいらないからと、ダンスの振り付け係に自分から飛び込んだ曜だが、自分の資質が如何ほどのものかは、最近のみんなの反応で分かってしまった。だから、ルビイに衣装作りを手伝ってもらっている善子に、曜も続こうと思ったのだ。

しかし、高飛込でオリンピックを目指す自分は、そもそもアイドルに詳しくない。千歌の話についていくために、スクールアイドル自体の勉強も必須になる。その二足のわらじをはきこなした上で、振り付けまでできるだろうか。

アイドル活動が動き出してしまえば、肉体的に役に立てるだろう。だが、こと準備においては、自分が役に立つビジョンが見えないのだ。

なら、いつそのこと――

「――国木田さん、スクールアイドルやってみない？」

「オラが？」

花丸は目を大きく開いた。そんな可能性など想像もしなかったよ
うだ。

「でもオ——私、聖歌隊に入ってますし」

「私だって、水泳やってるよ?」

「アイドルに興味なんて、ないですし」

「私もだよ。友達に誘われたからやってるだけ」

「そうなんです?」

「だから話についていくの、大変だし」

ズルい論調だ、と自分でも思う。

「調べてみたら、案外ね、友達の付き添いで来た子とか、親戚に勝手に履歴書を送られた子とかの方が、後になって人気が出たりするみたいだよ。安室奈美恵とか、木村拓哉キムタクとか」

「私や渡辺先輩の方が、人気が出るってことですか?」

「いや、まあ……そうは言わないけどさ」

この方向は藪蛇だな。

「でも私、アイドルで役に立てることなんて、ないですし」

「いやいや、ニコ動の『踊ってみた』見たけど、振り作ってるじゃん!

それに『歌ってみた』もめっちゃ上手かったし——」

「——見たすら!?!」

「え、うん」

「あああああれはオラとルビイちゃんの一夏の過ちすら! 封印されし

『夏への扉』へはネコ一匹通してはいけないうらああああ!」

「犬じゃないの?」

曜の突っ込みも虚しく、花丸は髪の毛を振り乱してくずおれた。これは善子の言う通り、九つの世界も海に没するかもしれない。

その時、くぐもった音がした。

這いつくばっていた花丸が顔を上げ、曜は音の方を振り返る。

「誰かいるの?」

そこには逆光を浴びた妙法寺の本堂がある。

「お祖父ちゃんは出かけてますけど……?」

膝をはたいて立ち上がる花丸を残して、曜は本堂の表に回って階段を上がった。

太陽を象つたらしき御紋が浮き彫りにされた扉は、硬く閉ざされて

いた。

いや、障子のように区切られた磨りガラスの一つが外れている。曜は拳が入るくらいの空間から中を覗いてみる。

学校の教室ほどの一間しかない本堂には、冷たいが清潔な匂いの空気が漂っていた。部屋には壁に沿って様々な仏像が並んでおり、中でも光輪を背負って棍棒のようなものを持っている仏像は、薄暗さもあつてなかなか迫力がある。

その仏像が見下ろす先に、漆塗りの台座があつた。須弥壇しゆみだんというのか、手のひらサイズの黄色い布団が置かれたそれは明らかに異質で、この寺の本尊があるのだろう、と曜は考える。

だが花丸の言う通り、人のいる気配はない。

なんだつたのだろう、と振り返り――

「はっ？」

――ダンゴムシと目が合った。

ただし、全長は二メートル近くの。

「ちよー！ ちよちよちよつとちよつとー！」

後退り、扉にぶつかってガラスが音を立てた。

その間に、ダンゴムシは七対の足で本堂の階段を上がると、逆立ちし、足を胸に折り畳み、ロリポリ・フオーメアと化した。

一対だけ残った足が、腕のように曜に伸びる。

「ぱ、ぱ、パフェさん！ パフェさん、He助いけてー！」

「どうしました!?!」

番犬の名に応えて現れたのは、飼い主の姿だ。

「国木田さん！ 来ちゃダメー！」

無意識に手を伸ばし、節足動物らしく節のついた腕を掴む。

「あ、また！ ポリちゃん！ Stopダメ！」

「えっ？」

ダンゴムシがとまった。

いや、花丸のコマンドを聞いた？

「怪我はないぞらっ？」

「え、うん」

答えてから、ダンゴムシに問うたのかもしれない、と思った。

黒光りする甲殻で覆われた腕は、日光を浴びてか暖かい。それを握っていると、さつきまで早鐘を打っていた心臓が、急速に静まっていくなを感じる。

「ポリちゃん、Lie down^{伏せ}」

花丸のコマンドに、ロリポリの胸から腹にかけて折り畳まれている足がわさわさと動き始め、再び腹這いの状態に——つまり通常のダンゴムシ状態に戻った。

曜が足を掴んでいる必要もない。全長二メートルくらいのダンゴムシは階段を下りていき、花丸のそばに走っていった。

「ポリちゃん、Good Girl^{子ずら}」

「ポリちゃん？ 女の子なの？ いや、そのコマンドって……躡けたの？ フォーメアを？」

土の上をかさかさとして歩くダンゴムシを指差すと、花丸は溜め息をついて言う。

「ウチのご本尊が本堂を抜け出して、これに変身してるらしいんです」「へ？」

「昨日はへりも墜としちゃったらしくて。いちいち出てこないで欲しいです」

なにが主語だ？

本堂のガラスの穴を横目に、曜はフォーメアに対する考えを改める必要を感じている。

*

「ごゆっくり」

「はい、いただきますー！」

母の環が運んできた湯飲みを受け取った曜の横で、

「ああ、これは……なるほどずら」

国木田花丸は深く頷いた。

本堂左手の庫裡の縁側に腰掛けて見た、先輩から転送された振り付け動画は、凄惨なものだった。

鋭い動作と緊張感のある構えの結合体は、ダンスというよりは拳法

の型のように、しかし時折混じるアイドル的仕草のせいですべてが崩壊していた。ボディビルダー、歌舞伎、操り人形、パントマイム、と他の部員に酷評されたのも無理はない。

「なんでこうなっちゃうと思う？　ちゃんとアイドルっぽいポーズ、考えたのに」

「その発想が、根本的に違うんです」

「どういうこと？」

断言した花丸に、相談主の曜が湯飲みにも口をつけながら問うた。

「ダンスは時間表現です」

花丸は言葉を探すように、天に指を向けた。

「舞踊という単語が『まわる』と『どびはねる』で構成されているように、常に動いています。だから『ポーズ』という考え自体が、そもそも存在しません」

曜が英単語用らしき単語カードを取り出して、「時間表現」「ポーズはない」と書いているのを見て、花丸は不安になる。

「中学校で習いませんでした？」

「ろくにやらなかったんだよね、内浦中学校じゃ。選択はフォークダンスだったし、静浦中学校の統廃合でバタバタしてたし。国木田さんは第三中学校だっけ？」

「はい。マルは——私は創作ダンスでしたから、基礎から教わりました」

だから迂闊にも、『踊ってみた動画』など作ってしまったのだが。

花丸は熱い湯飲みを手で覆い、曜と並んで軒下から境内を眺めている。

先ほどまで這いずっていた巨大なダンゴムシは、カラスの襲撃に遭ってダンゴ状態になっていた。パフエが駆け寄ってきてカラスを追い散らすと、恐る恐るダンゴムシに戻ったが、カラスの姿を警戒するように触角が揺れている。

「平和だなあ」

「ごめんなさい、気が散りますね。パフエ、ポリちゃん、Patrol
！」

花丸の指示に、ダンゴムシと犬は仲良く寺の巡回を始めた。

入学式から始まった仮面ライダーとフォーメアの戦いなど存在しないかのような光景だ。

花丸はお茶を口に含み、鼻に抜ける茶葉の香りとあられの香ばしさに朝食のお茶漬けを思い出して、早くも夕食が待ち遠しくなった。

「ダンスにポーズはない、か……。じゃあなにがある？ ポーズじゃなくて、なにが……」

曜は法華経を唱題するように口を動かして、またしても花丸は不安になる。

「あの、ポーズがない、は過言でした。決めポーズ的にとまる箇所はありません」

「そうなの？ ああ、そうだよね。うーん、そっか……」

曜はカードを睨んでぶつぶつと呟く。

「つまりですね」

花丸は湯飲みを置いて立ち上がり、軒下から境内に出ると振り返る。

「ダンスのレッスンを受けたことはないので、上手く伝えられるか分かりませんが」

少なくとも言葉よりは、上手く伝えられるだろう。

花丸は頭の中に、賛美歌『Shall We Gather at the River?』のイントロを展開する。

太極拳の時とは違い、本来の速度インテンポで。

二拍のリズムを膝で刻み、拳を腰に。

「Shall we gather at the river」

左足を左前へ、右足を左前へ。

左足を右前へ、右足を右前へ。

「Where bright angel feet have trod」

右拳を前に出し、左拳を前に出し。

右拳を引つ込め、左拳を引つ込め。

「With its crystal tide forever」

Flowing」

拳と足を組み合わせる。

ただし足は後ろ向きで。

「by the throne of God?」

左足を左前へ、右足を左前へ。

腰に当てた拳を下ろす。

「はい」

歌をやめ、曜を見る。

「今の動き、どう思いました?」

「ダンスっばい!」

曜は胸の前で小さく拍手をした。

「なぜだと思えます?」

「え、いや、なぜって」

「ダンスはポーズとポーズを繋げて構成されていません。設計はポーズでも、その姿勢になる時間は〇・一秒もないんです」

「うん……」

「さっきの動きで言うと、拳を突き出した瞬間のポーズを見てほしいわけじゃないんです。拳を出して戻す一連の動作が重要なんです。違い、分かります?」

「……現在形と現在進行形?」

「そうずら! それずら渡辺先輩!」

花丸が手を叩き、歩いていたらロリポリが驚いてダンゴに戻った。

「そっか……そっか、「時間表現」だ!」

曜も理解に到達したか、弾かれたように膝をバタつかせた。

「分かったよ! 名乗りポーズじゃなくて、変身ポーズを考えればいいんだ!」

「ずら?」

「そうだよ、なんで分かんなかったんだろ! 絵本の変身ポーズって、腕を動かす矢印とか描いてあったもん!」

「絵本? あの……ほんとに分かってます?」

単語カードをペラペラとめくる曜はなにかを掴んだ口ぶりだが、直

前の発言でそれが正しい方向なのか、花丸には分からない。

「分かっている——けどそれを、四分近く考えるのか。しかも三曲。ウソ……」

しゅうつと音が聞こえるほどに、曜のテンションが落ちていく。

「生徒会長が言った締め切りの五月一五日まで、あと三週間もないです。振り付けの完成を待って練習となると、二曲でもギリギリだと思います。ダンスの基礎練はしてます?」

「基礎練? 体力作りはしてるけど」

していないようだ。

花丸は考える。

曜は、ダンスの振り付けのなんたるかを、把握しただろうか。

ここで思い違いがあり、手戻りが発生したら、もう取り返しが付かない。

スクールアイドルの三大要素を、楽曲、衣装、ダンスと言い切った生徒会長が、ダンスのないパフォーマンスを認めるだろうか。

黒澤ダイヤという人物については詳しくないが、あの黒澤家と考えれば、確実に否だ。

浦の星女学院にスクールアイドルが産まれる最後のチャンスは、そこで潰える。

そうなれば、どう思うだろう。

ルビィちゃんは。

「渡辺先輩」

「ん?」

しおれていた曜が顔を上げる。

「私、入部してもいいです」

花丸の言葉が飲み込めなかったか、曜は顔中の穴を開けたり閉じたりした。

「え? マジ? スクールアイドル同好会に?」

「はい」

「ほんと? ほんとに!?! やったあ!」

曜は縁側から太陽の下に飛び出して、花丸の横を駆け抜けた。

「よーし、じゃあ曜ちゃん、ダンスしちやうぞー！」

と、先ほど花丸がやってみせたダンスを再現しだした。

「なんで覚えてるずら？」

「そりや覚えるよ！ 歌は覚えてないけど！ ほら、国木田さんも！」

「じゃ、じゃあマルも！」

と花丸も合わせて踊ってみるが、アドリブでやった一回限りのものだから、どうにも合わない。

「違うよ国木田さん、腕は斜め上一五度！」

「え、こ、こうずら？」

「そうー！」

気付くと、花丸の左隣にロリポリ・フォーメアがいて、こちらも花丸の動きを真似し始めた。

「君もやる!? 意外と動けるじゃん！」

おかしなことになってしまった。

でもまあ、いいか。

「じゃ、じゃあ次のセット、いくずらー！」

「ヨーソロー！」

花丸が四小節一セットをアドリブで踊り、曜とロリポリが次の四小節でそれを繰り返す。

それを何度か繰り返し、段々複雑になっていったステップに、ロリポリが脚（という名の触角）を絡ませて転んだところで終わった。

「あー、楽しかった！ スタミナあるね、国木田さん」

曜は息を弾ませて笑った。

「じゃ、改めて！ これからよろしく——」

「——待ってください。私の入部には条件があります」

花丸が遮り、曜は肩を上下させたまま固まる。

花丸が告げた交換条件は——

「それ……。ちよつと簡単に、ヨーソローは出せないなあ」

——先輩に頭を抱えさせることになった。

第八話：Dance with me! Dance
with you! — 3

黒澤ダイヤは入部届けを保留ボックスに入れてから、数秒前に退室していった生徒の顔を思い出す。

いや、思い出すまでもない。

妹の黒澤ルビィと幼稚園の頃から友達だった、国木田花丸だ。

「預かってください。受理してほしい時に連絡します」

そう言っていた。

ダイヤは息を漏らす。

「受理タイミングをずらしてほしい、ってお願い、生徒では始めてですね」

パソコンのキーボードを叩く副会長のいつきが言った。

申請書類の効力の発生日は、書類の作成日ではなく、生徒会と職員会または理事会が押した承認印の日付だ。そのタイミングの調整は、教職員の間では書類作成の効率化を図る上であることだった。

だがいつきの言う通り、生徒は直近のタイミングでの承認を求めてくる。「校内施設を今週末に使いたい」「明日から自転車で来たい」「今日から部活を始めたい」「今すぐ証明書がほしい」などなど。

だが。

「一例だけ、ありましたわ」

ダイヤは腕時計を見る。

一六時一分三八秒を示してとまった、三本の矢を。

「自分たちの記憶を書き換え、過去を消し去った申請が」

書かれなかった名前。

押されなかった承認印。

刻まれなかった時計の針。

「存在を許されなかった夢への線路……ですわ」

「どうしたんです?」

いつきが頭ごと視線を向けてきたのに気付き、ダイヤは急に恥ずかしくなった。

「すみません。こんな詩的な言い回し、わたくしらしくありませんわね」

「中二病的では？」

「はあ?」

思わず声を荒げてしまったが、硬直したいつきの顔を見て、心を落ち着かせる。

「その申請、連絡があり次第、すぐに対応できるようになさってくださいませ」

「は、はい」

ダイヤは息を抜く。

別々の角度を向いた、三つのベクトル。

それを揃えるには?

まったく違うベクトルを合成するしかない。

その役目は、時間がとまってしまった自分にはできない。

あの二人には、それが分かっているだろうか。

*

「無用心だなあ」

ジャージ姿の松浦果南は、もぬけの殻になったスクールアイドル同好会の部室に立っている。

海風で湿った埃に砂が混じった、すえた匂いがする。懐かしい匂いと言ってもいい。

壁際に寄せられた長机に乗っていたスケッチブックをパラパラとめくると、曜が描いた宣伝用のポスターらしきパステル調のイラストが、何種類かあった。一回り小さな図案はビラ配り用だろうか。

これらを何枚刷るのだろうか。その予算はどこから? 小原家に頼めるのか?

「ふん」

部屋の奥へ進む。

ガラスと鉄格子の向こうに見える体育館に、果南と同じ緑色の

ジャージを着た三年生がまばらに入ってきた。

球技のコートを二面並べた広さのアリーナは、二〇人を切ったクラスメイトには広すぎるし、二〇〇人を切った内浦の住民にも広すぎる。

そこに千歌たちは、何人集められるのだろう。

どんな景色を見るのだろう。

「なにが見えるのオ？」

背後から声がした。

「二人の囚人が鉄格子の窓から外を眺めたとき。一人は泥を見た。一人は星を見た」。これ、フレデリック・ラングブリッジって人の詩だったらいいんだけど、知ってた？」

近付いてくる足音に、果南は目を向けもしなかった。

「アナタが見るのはもちろん、星よね」

どうせそこには、右側頭部で金髪を輪にした同級生が立っているに決まっているからだ。

「この黒板、まだ残ってたんだ」

振り返る。

少女は移動式の黒板を指で叩き、目と口を三日月のように細める。

取り残された“A”と“q”、そして“o”。

「覚えてる？」

金髪の少女と目が合う。

金色の虹彩に反射した自分と目が合う。

舌打ち。

果南は顔を体育館への窓に戻す。

「つれないわねエ。スコもコウも、アナタも」

鼻にかかる甘ったるい声に、ガラスに映る自分の眉間にしわが寄るのが見える。

「《パイルアップ・フォーメア》を捕獲したわ。そのスランバラー――産み出した人もね」

ガラスに映る少女が黒板に指を這わせ、チョークの粉と埃を拭って黒い線を描いた。

「私がこの二年で成し遂げた成果、見に来ない？」

なんでそんなに楽しそうなんだ？

なんで私の前で笑っていられる？

そんな気持ちさえも見透かしたような目が、ガラスに映っている。

「気が向いたら来てね」

細長い封筒が長机に置かれ、サッシ戸がザリザリと音を立てて閉まる。

ややあつて、金髪の少女が体育館に入ってきた。

第二教官室のこちらに手を振りながら。

「ふん」

星も泥もない。

鉄格子から見えるのは、この街を諦めた女子高生たち。

「戦え」

それを見つめる、ガラスに映った自分の鏡像だけだ。

「分かっているわよ、言われなくても」

*

「じゃあ改めて、よろしくね」

「は、はい！ よろしくお願ひしますー！」

学校指定のスクール水着を着た黒澤ルビィは、競泳水着姿の渡辺曜に頭を下げた。

「あんまり硬くなんないですよ。今日はまだ様子見だから、ハードにはいかないよ」

「は、ハードになります？」

「んー……ルビィさんが本気なら、かな」

曜がプールサイドを見て、ルビィも目を向ける。

そこには同じくスクール水着に身を包んで体育座りをする、花丸の姿があつた。

大きなドームに覆われた沼津市立総合水泳場の利用者は、ルビィ、花丸、そして曜の三人だけだ。

ここは浦の星女学院の水泳部が飛込の練習に使っているプールらしいのだが、先週の金曜日に点検中の天井板を破損させてしまう事故

を起こし、使用不能となっていた。ところが水泳部が代替施設にしていた静岡県富士水泳場も、先日のフォーメア騒動で使用不能となってしまったので、急遽、照明の動作テスト期間に使用許可が下りたというのだ。

水泳場のオーナーである沼津市と関係が強く、浦の星女学院の理事会を实质牛耳っているOGIグループの力が働いたことは、黒澤家のルビイにも分かっていった。

だというのに。

「とりあえず、水に浮いてみようか」

そこで行われているのは、二〇一五年度JOCジュニアオリンピックカップ春季水泳競技大会優勝者が、たった一人のカナヅチ高校生に行う基礎水泳講座なのだ。

(うう、いいのかなあ)

沼津市内には五〇メートルプールや飛込プールが使えずに困っている学校がたくさんあるだろうに、そしてルビイのすぐ前にいる人はオリンピックに向けて飛込の練習があるだろうに。

これで泳げるようになれなかったら、どうしよう。

「じゃあ、まずは蹴伸び。なにがあっても息はとめててよ」

「とめてるんです?」

「水の中で息はできないでしょ? さ、ルビイさんのタイミングで」

と、曜はルビイから少し離れ、水面に手を差し出した。

考えていてもしようがない、ルビイは爪先立ちで触れていた床で何度か跳ね、意を決して蹴る。

ぷうつと膨らませた頬を水につけ、伸ばした手を支えてもらい、身体をうつ伏せに伸ばした。

そして、ゴーグルの中で閉じた瞼を恐る恐る開き――

(ピギイ! ふ、ふか、深い! 深いよう!)

――暗くて遠い水底に、身体が竦んでしまう。

(あ、あ、沈んじゃう、どうしよ、どうしよ!)

どうしようもない。

瞼と口を強く閉じていると、両脇を抱えられ、すごい勢いで水面に

引き上げられた。

「ぶはあー！」

プールサイドに掴まり、息を大きく吸う。

やっぱりダメだ。

「平気？」

振り返ると、曜がプールの中でルビイを見ていた。

「は、はい……」

「もう一回、やってみようか」

「え？」

今ダメだったのにな？

「休む？」

「い、いえ……」

言つて、足元を見る。

今日の五〇メートルプールは、一昨日の児童用プールよりずっと深い。それでもここは、一五四センチのルビイでも足がつくくらいの浅い場所だ。底が暗く見えたのも、天井の電気が調整中ではないせいだろう。

そんなこと、分かっているのに。

「もう一回やってみよう」

曜は水を挟むように手を叩いて、ゆらゆらとプールサイドから離れていった。

水面を漂うその動きは優雅だった。身体のどこをどう動かしているのかは分からないが、爪先立ちでキョンシーのように飛び跳ねて動くルビイとはレベルが違う。

「あの、もしかしたらルビイ、吸血鬼かもしれないんです」

「どゆこと？」

「水に浮けないんです」

「ルビイさんが？」

花丸曰く、吸血鬼が弱いのは流水らしいが、曜はこれで信じてくれるだろうか。

「あつははは！ 吸血鬼なんているわけないじゃん！ 気のせいだ

よ、気のせい！」

ダメだった。

「ほらほら、そんなこと言ってる暇はないよ。やろう！」

曜は笑顔の残った顔で、ルビイに手を伸ばした。

もう一度、ルビイは蹴伸びをし——

(ピイ……！)

——やはり沈んだ。

またプールサイドに引きずられる。

(うう、やっぱりスパルタだよう……)

口を閉じて沈んでいるから、この前のように水を飲むことはなかった。だがこの調子で蹴伸びを繰り返していたら、疲れて溺れてしまう。

オリンピック選手候補の先輩は、そんな可能性を想像していないのかもしれない。人はすべからく水に好かれると、本気で信じているのかもしれない。

(でも、もう呆れちゃったよね)

そう思っ、おずおずと先輩を見ると、

「ほら、吸血鬼じゃないよ！」

曜は何故か、安心したような顔をしていた。

「よかった、物理的に浮かない身体だったら、どうしようかと思っただよ」

「え？ あの——」

「——国木田さん！」

ルビイが言葉を返す前に、曜は手を上げて花丸を呼んだ。

「私、一本飛んでくるから、その間、お願いできる？ 背面蹴伸びでね」

「は、はい」

曜はプールサイドに上がり、飛込プールの方へ歩いていく。その脂肪の一欠けらもなさそうなお尻や脚は頼もしくて、それが離れていってしまうのを見ると、さつきまでスパルタだなんだと怖がっていたにもかかわらず、ルビイは急に不安になった。

「背泳ぎだって、ルビイちゃん」

「う、うん……」

花丸の水着が濡れて濃い紺になる様を見ると、児童用プールの特訓を思い出して泣きそうになる。
と、

「胸で浮くんだよ！ 両腕を伸ばして、弓みたいに！」

ドームを反響するアドバイスが飛んできた。

見ると、曜は敬礼のようなポーズをしていた。

「弓？」

ルビイが呟く。

「やってみる？」

「……うん」

物は試しだ。

「ちゃんと支えてよ」

「デメテル号に乗った気持ちでいるすら」

「なんだっけ、その船」

床を蹴り、両腕を頭の上へ伸ばして水に伸びる。

花丸の柔らかい手を手の甲で感じ、言われた通り、弓をイメージする。
る。

胸で浮くというなら、大きく反る鳥打ちが胸だろう。腕を姫反と見立て、握りを腰に、大腰から小反にかけてを足に置く。

大小異なる三つの反りが、総体としてなだらかな曲線を描く和弓に、自分を合わせる。

沈んだ腕に頭を乗せているために額まで濡れてしまうが、我慢だ。
その一方で、

（なんだっけなあ、デメテル号。どこかで聞いたと思うんだけど）

高いドームの天井を眺めながら、余計なことを考えている。

『ポセイドン・アドベンチャー』はポセイドン号だし、『白い嵐』はアルバトロス号だし、ってどっちも沈むじゃん。『マルティナは海』——
はいきなり寝ちゃったんだ、えっと後は——

ドームの天頂に近い部分に、天井板が外れた箇所がある。それは十字架の形をしていて、花丸に案内された教会を思い出した。

「——ドラキユラさんだ！ 船員が一人ずつ謎の失踪をびびるぼぼ（うごぼい）」

思い切り水を飲んだ。

今度は花丸に引つ張られ、水面に復帰して散々にむせる。

「ダメだよ、やっぱり——」

「——すごいぞら！ ルビィちゃん、浮いてたぞら！」

「え？」

花丸は、プールサイドの壁にかかっている大きな時計を指差して、ふわふわと水中を飛び跳ねている。

「三〇秒くらいぞら！ ふかぷか浮いてたぞら！ ふかぷかぷかぷか——！」

「そ、そうなの？」

見回すが、目印がないため、自分がどの辺りから泳いできたのかわからない。

もしかしたら浮いていただけで、動いていないのかもしれないが。

「ほんとに浮いてた？」

「もちろんぞら！ もう一回浮かぶぞら！ ふかぷかぷか浮かぶ

ぞら——！」

「それ、ピエロさんの顔を思い出しちゃうから、やめてほしいな……」

*

渡辺曜が飛込台の階段を上がっていくと、最上段の台に腰掛けた人影を目にとめた。

脚に何箇所もの穴が塞がった跡を残す、競泳水着を着た小柄な男子。

「考朔……くん？」

「やっぱり曜だった」

と、内浦から去った幼馴染みは、人懐っこい顔で笑った。

「なんでここに？」

「体調的には問題ないから、って小原さんに紹介されたんだ。でもこれだけ人が少ないと、飛び込みにくくてさ」

そういえば、考朔が入院していた病院は、OGIグループの研究所

を兼ねていた。曜がこの水泳場を使うから、気を遣って合わせてくれたのだろうか。だがなんのために？

「ねえ、あれって友達？」

飛込台から見通すと、五〇メートル以上離れた競泳プールに、花丸とルビイの姿が見えた。

花丸にバトンタッチした場所から少し離れている。背面蹴伸びで浮かんだり沈んだりしているので、諦めてしまったわけではなさそうだ。

「後輩。泳ぎ方、教えて、って言われたから」

「面倒見いいよね、曜って」

「へ？ そ、そうかな」

「うまくいきそう？」

「たぶん。怖がつてるだけだよ」

それは最初の感触で分かった。

ルビイは水に顔を付けること、というより水の存在感に萎縮してしまっている。だからフォームを維持できずに沈んでしまうのだ。小さな頃からそれを繰り返したことで、「自分は浮けない」と感じていたのだろう。

その恐怖心を取り除くには、自信を育てるしかない。顔を水に向けてなくても浮ける背面蹴伸びを指示したのは、そのためだ。

「まず飛び込んでみよう、って感じだよね」

「俺と同じパターンだ」

「え？」

「忘れたの？ 俺にも言ったでしょ、『まず飛び込んでみなよ』って」

「そうだったけ？」

「そうだよ、ヤダヤダ言ってるのに崖の上に連れて行かれてさ、飛び込むまで千歌と見張ってるんだもん」

「ええ？」

「ほら、忘れてるよ」

考朔は苦笑し、飛込台の上を歩いていく。

「でも、あそこで飛び込まなかったら、今頃俺、こんなことできてない

よね」

そういうと振り返り、背中から虚空に倒れ込んだ。

201A——後宙返り半回転伸び型。

まるで映画のワンシーンのように仰向けに落ちていく考朔は、緩やかに頭を真下に向け、両手で水面を突き破った。

「そんなこと言っちゃったっけ」

それを飛込台の横から眺め、曜は呟く。

下から笛の音が聞こえた。考朔がプールから上がり、飛込の準備ができた合図だ。

曜は飛込台の縁まで進む。

花丸と、彼女におぶさるルビイが、こちらを見ているのが分かる。

そう、ちょうどあの関係だ。

花丸は曜に、ルビイを泳げるようにしてほしいと頼んだ。

それが、花丸がスクールアイドル活動に参加する条件だった。

その交換条件は、友達思いと言えば聞こえがいいが、主体性はゼロだ。

だから曜は即座にヨーソローを出せなかった。

ルビイ本人にその希望があるか確認できなければ、成立しない条件だったから。

花丸が主体的にスクールアイドルをやりたいと思わなければ、意味がないから。

(ウソだ)

恐怖心を取り除くには、自信を育てるしかない？

それを私が言うのか？

私が水泳を教えられるとでも？

「ダメだよ曜ちゃん！ 頭からっぽにしなきゃ！」

口に出し、プールに背を向ける。

荒い呼吸を、鼻息で無理矢理絞る。

技は決まっている。

宙に身を投げ、身体を折り畳み。

膝を抱え込んだ姿勢で後方へと回転。

307C——前逆宙返り三回半抱え型。

（○——）
小学校に入る前から、実家の目の前にある内浦湾で飛込をやっていた。

最初は千歌ら幼馴染みの子たちみんなで、成長してからは考朔と二人で。

その才能をどこかで知った大人にフックアップされた曜は、小学生の大会で頭角を現した。

船長だった父が船と職を失った後も、彼の願いである『みんなを照らす太陽』を目指すんだ、と邁進した。

（——一——）
中学校二年生の時、初めて成功した前逆宙返り三回半抱え型。

当時のコーチが「これでオリンピックピックも夢じゃない」と言ってくれたことで、その技は曜の代名詞となった。

期待の新鋭として地元新聞にも載り、たぶん、有頂天になっていたのだと思う。

そんな時、招聘された中国合宿で、彼女と出会った。

（——二——）
彼女が109C——前宙返り四回半抱え型を成功させたのは、その時が初めてだったという。

「三回半では回転が速すぎる」と四回半に挑戦した彼女は、小柄な曜よりさらに小さな少女だった。

演技群こそ違うが、難易率は曜の前逆宙返り三回半抱え型よりも○・一高い。

負けるわけにはいかなかった。

（——三——）
だが曜は前逆宙返り三回半抱え型の精度を上げられず、中三、高一と記録を残せなかった。

女子選手では世界でただ一人の技を持つ彼女は、《リオデジャネイロオリンピックピック》の出場権を獲得。

曜は太陽にはなれなかった。

（――・五！）

手のひらで水の面を貫く。

目を閉じる。

失敗だ。

自分で分かった。

重力に合わせて脚を下ろし。

揺れる水面を見上げる。

自分にとって《ラブライブ！》は、オリンピックの代わりなのだろうか。

一人で実現できなかった夢を、千歌たちの力で叶えようとしているのだろうか。

花丸には主体性がないだって？

学校を廃校から救うために千歌への協力を決めた曜には、《スクールアイドル》自体に対する情熱はない。

情熱がない太陽は、誰かを照らせるのか？

（頭、からっぽにならないなあ）

身体から泡が離れていく。

たった三メートル先の、手の届かないところへと。

第八話：Dance with me! Dance
with you! — 4

B

「変だよ、マルちゃん」

黒澤ルビイは言うが早いがプールから上がった。

「どうしたずら?」

「なんか変なの!」

プールサイドを走り出すが、短い笛の音がして、

「そこ、走らない!」

監視台の上に座っていた帽子の人に注意されてしまった。

「先輩が上がってこなくて!」

「平気だから」

監視員が言った時、ちょうど曜が水面に顔を出した。

「曜先輩!」

プールサイドに上がった曜は、ゆっくりと焦点をルビイに合わせる。

「ルビイさん。どうしたの?」

目を丸くした曜の目を、さあつと赤い血が滲む。

「血! 血ずら!」

追い付いてきた花丸が声を上げた。

「どうしたの!?!」

競泳水着の小柄な男子が飛込台の方からやってきて、ルビイは慌てて花丸の後ろに隠れた。

曜は自分の脛に触れ、真横に裂けた傷から滲む血を見て、ああ、と口を開ける。

「入水で切れたんだよ。よくあるから心配しないで」

「いきなり大技にいくからだよ」

そう言ったのは、監視台から降りてきた女の人だった。ルビイは帽子に隠れたその髪型と声に記憶を刺激される。

「あ……果南さん？」

それは姉のダイヤの友達であり、一時期は黒澤家にも遊びに来ていた、二年上の先輩だった。

「や。久しぶり、ルビィ」

緑のラインが入ったスポーツウェアを着た果南は、帽子を脱ぎ、片手を広げて見せた。

「なにしてるの？ 果南ちゃん」

「それはこっちの台詞。全然飛び込まないから退屈してたんだ」

「そうじゃなくて——」

「——笠木さんに頼まれたの。顧問代理だよ」

果南は手にしていた救急箱からチューブを取り出し、曜の瞼に塗り始めた。

「イツプス？ らしくないね、曜」

ワセリンのようだ。果南に瞼をグリグリされて、曜はイヤそうに身体をよじらせたが、結局されるがままになった。それは泳ぎ方を教えてくれた時の頼もしさとは違う顔で、花丸の陰から覗くルビィは興味津々だ。

「君、曜の後輩？」

その視線に、先ほどの水着の男子が割り込んできたから、

「ピギィ！」

ルビィは花丸の後ろにくっついてしまう。

「え、ど、どうしたの？」

「そちらは悪くないです。ルビィちゃんは男の人が苦手なんです」

頭を下げる花丸の背中が、スクール水着越しでも暖かい。

「あんたは？ ルビィの友達？」

果南に問われ、「ああ」と曜が声を上げた。

「えっと、こっちが国木田花丸さん、こっちが黒澤ルビィさんだよ。で、こっちが松浦果南ちゃんに、松和考朔くん」

各々が挨拶をして頭を下げる間も、ルビィはほとんど同じ身長の花丸の後ろで小さくなっている。

「で、泳ぎ方、教えてるわけ？ あんた、今ダンスの——」

「——ストップ！ ストップ果南ちゃん！」

曜は果南に両腕を振った。

「ダンス？」

「違う、違うんだって！」

考朔にスクールアイドルの件は知られたくないらしい。

同じくそれを察したか、

「松和さん、その脚、どうしたんです？」

花丸が口を開いた。

「ああ、昔、事故だね」

花丸の視線を追ったルビイは、考朔の脚にミミズがのたくったような傷跡を見つけた。

「痛そう……」

ルビイは見ているだけで、同じ箇所がムズムズしてくる。

「平気だよ、もう見た目だけだから」

「本当に？」

一瞬、誰が言ったのか分からなかった。

考朔がその発言主を見た。

発言主——ワセリンの付いた人差し指を自分の左前腕に押し付ける果南は、笑顔を浮かべていた。

「本当だよ、ほら、なんともないでしょ」

考朔は膝を曲げて垂直ジャンプしてみた。

「なら、バイクの免許は取った？」

「え？」

「果南ちゃん!？」

「黙ってて、曜」

温度のない言葉に、曜の喉が上下する。

考朔は困惑したように、果南と曜を見比べている。

(なんで今、バイク?)

そのキーワードに、ルビイの背筋が寒くなる。

「追突事故ずら？」

「そうかもね」

(なに？ なんの話をしてるの?)

怖くなり、花丸のスクール水着を引っ張るが、彼女は動こうとしない。

「どうしたの？ 果南。変だよ？」

果南が歩を進める。

考朔を飛込プールに追い詰めるように。

「あんたは変じゃない？ 考朔」

「え？」

果南の左手が伸び、考朔の肩を掴む。

その左前腕が、水面を反射するなにかに覆われ――

「果南？」

――直後、プールの水が弾けた。

甲高いエンジン音とともに、多量の飛沫が宙を舞い。

高速回転するタイヤがナイロンの床で異音を鳴らす。

現れたのは、グチャグチャに合体した三台のバイク。

いや――

「――パイルアップすらあ！」

「ピギィー！」

花丸が叫び、ルビイの手を引いた。

果南の左手は、まだ、考朔の肩を硬く掴んでいる。

*

「こ、これが、怪人……？」

現れた存在に気が遠くなりながらも果南に支えられて、松和考朔は意識を繋ぎとめた。

《CBR400R》の特徴的な橙色のフルカウルを鼻先に持ち、その後部を押し潰して乗り上げた緑色の中型ストリートファイター《390 DUKE》の前輪が、威圧するように見下ろしてくる。角度的によく分からないが、もう一台のバイクが《390 DUKE》の後部を押し潰しており、合計三台のバイクが連結された形状をしているらしい。

それこそが、小原鞠莉が考朔をここに導いた、考朔がここにいる理

由。

曜たちと俺をもう一度、繋いでくれるかもしれない、俺の中の非日常。

五体目の怪人、パイルアップ・フォーメア。

いや、でも――

「――怪人って、人の形じゃないの?」

「とは限らないみたいだよね」

果南の眩きを消すようにエンジン音を轟かせた怪バイクは、生きているタイヤのうち二つで走り出した。だが考朔たちに迫ってくるのではなく、逆にプールサイドを遠ざかっていく。

そして十分に離れるとターンし、割れたカウルの奥のヘッドライトをこちらに向けた。

「果南、これヤバくない!」

「ヤバいね」

後退りする考朔の肩に果南の手が添えられ、その冷たさにゾツとした時――

「Shinyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyy!!」

――銀色の輝きが落ちてきた。

「Ciao! 今日はGalleryは少ないけど、全力でいくわよオー!」

五本の細長いパーツをスカートのように翻したそれは、ベルトの横にぶら下げた球体に、ダンベルのような道具を押し当てた。

『ウムラウト』の電子音声の流れ、黒と銀の身体に鮮やかな紫色の装甲が生成される。

さらに上半身に歯医者のような円形の装甲が追加され、顔にも大きな丸い目とそれを繋ぐ小さな“U”の字の口が現れる。

「《Shiny=Umlat Foam》!」

「め、《メタルヒーロー》!」

考朔は思わず、子供の頃に見た特撮ヒーローの名を叫ぶ。

「^違Nopers! I'm Shiny! 《Kamen Ride

r Shiny》！」

だがスカートのような部品の下で足を揃え、片手を斜め上に掲げるポーズは、テレビや新聞で見た写真と同じ。

「これが《仮面ライダー》、じゃあ中の人って——」

「——浦女の理事長すら！」

「ダ・イ・リ、だってばア！」

その声は噂通り、あるいは公式発表通り、OGIグループのCEOの一人娘だった。

シャイニーはダンベルのような道具をガンスピンのように回した後、怪バイクに向ける。その仕草で、それが武器だと分かった。

「ルビィさん、国木田さん、控え室に行くよ！ 果南ちゃん、考朔くんをお願い！」

考朔はまだ状況を把握できていないのに、曜は指示を出し、後輩の女子二人も果南もてきぱきと移動を始めた。

「曜！ 控え室で平気なの!？」

明らかに手馴れている三人に戸惑いながらも、考朔は曜に問う。

「あいつ、パワーはないから！」

いかに怪人といえど、バイクとして入ってこられない場所に逃げ込んでしまえばいい、ということか？

だがバイクのエンジン音が高らかに唸りを上げれば、考朔は曜に従うことだけを考えるしかない。

「来るわよォー！」

シャイニーの手元が輝き、粒のような光が連続で放たれた。

それらは走り出したパイルアップ・フォーメアを目がけ、《CBR 400R》のカウルに命中、橙色のパーツが弾け飛ぶ。

「やったー！」

「まだまだアー！」

光弾は怪バイクの先頭車両を破壊しただけだ、《390 DUKE》を次なる先頭にし、依然として向かってくる。

「そんなのありずら!？」

「急いで！」

曜が花丸の手を引き、花丸もルビイの手を取り、一列で走り出す。考朔も果南に背中に手を回され、曜たちの前についた。

「もう！ 似たような場所で同じヤツにい！」

曜が叫ぶと同時に、

「I a！」

気合と共に金属の音が響く。

振り向くと、腰を落としたシャイニーが、パイルアップの真正面から受け止めていた。

「Oh……けっこうHeavyね……」

前輪を抱えられたパイルアップは、後輪をがむしやらに回してナイロンのプールサイドを焦がし、水を蒸発させる。

「でも、アナタのSpecsはア——」

『セディュー』の電子音声と共に、シャイニーの身体から紫色の装甲が消えていく。

いや、入れ替わるように、ショットキングピンクと言ってもいい鮮烈な輝きが生まれ、三日月のような装甲が上半身から突き出る。

そして、

「——把握済みなのでエス！」

シャイニーが身を返すと同時に、色も形も鋭い装甲が《390 D UKE》の前輪を切り裂いた。

「今回は逃がさないわよ！ 出入口と排水溝をShut outした今、アナタはまさにCornered Rat！」

シャイニーが叫び、腕を翻す。

「この《edilla》のオ！」

直後、ひしゃげたガソリントankと後輪が、鮮やかな断面を見せて宙を舞う。

「敵じゃあないわア！」

切り裂かれた怪バイクは蹴り飛ばされ、プールサイドを転がっていった。

「す、すげー！」

筆記体の“X”のように組み合わせた三日月を目のガイドライン

に、法令線のような、あるいは涙の跡のような波線が口を作る《セ
デイーフォーム》の顔は、上半身から突き出すショッキングピンの
の装甲と相まって、先ほどの《ウムラウトフォーム》とは別人のよう
だ。

ダンベルのような銃も、気付けば柄の末端から三日月型の刃が伸
び、ナイフというには長く剣というには短い半月刀に変化していた。
考朔は知らないことだが、それはブランキアの薙刀の石突きから飛び
出した刃と同じ形状だった。

「あと一台！」

二番目の車両は怪バイクから完全に分離し、プールサイドに飛び
散ったパーツが泡となって消えていく。

（これが仮面ライダーなんだ）

鞠莉が考朔を、このプールに連れてきた理由がよく分かった。

これなら、フォーメアを倒すことなんて、造作もない。

「油断しないで！」

横を走る曜に言われ、だがフォーメアから余計なパーツが分解さ
れ、最後のバイクだけが残されたのを肩越しに見た時――

「兄貴のだ」

――考朔は立ち止まってしまった。

見間違えるはずもない。

あの時、兄と二人乗りしていた、他の二台と共に廃車になった、青
色の《DR―Z400S》。

追突事故を起こした前の二台に乗り上げ、松和兄弟を振り落とし
た、兄の愛車。

考朔から一年もの間、高飛込を奪ったバイク。

それが、怪バイクの三台目だった。

心拍数上がる。

エンジン音が高まる。

「考朔くん！」

曜のこわばった顔が走り去る。

「なにしてんのオー！」

シャイニーが考朔たちの方を振り向いた時、

「理事長！・前！」

曜が叫んだ。

分解されずに落ちていた二つのタイヤが浮き上がり、宙を舞ったのだ。

半月刀を逆袈裟斬り、一つは切り落す。

だがもう一つのタイヤは伸びきった彼女の右腕に絡まった。

「What!?!」

その径が縮まり、ショッキングピンクの装甲に絡まっていく。

「ちよつとパイン！ どうなってるのよ、これエー！」

取り落とした半月刀を左手で拾ってタイヤのゴム部分を斬るが、スポークはすでに半月型の装甲の根元に食い込んでしまった。

前腕から火花を散り、半月型の装甲が泡となって消えた。

「聞いてないわよオー！ こんな馬力イ！」

シャイニーは銀と黒のアンダースーツからスポークを剥がそうとするが、掴めそうにない。

放っておけば腕が折れるだろう。

俺の脚みたいに？

そう考えた矢先、首になにかが絡みついた。

誰か、と思う間もなく、急速に手足の感覚がなくなり、意識が遠の

き――

「ごめんね」

――耳元で誰かの声を聞いた気がした。

*

幼馴染みから力が抜け切った時、シャイニーの右腕に絡まっていたタイヤが水となって、拘束が解除された。

やはりスランバ産み出した人ラーの精神状態で、フォーメアの力は変化するらしい。

「助かったわア！ 果南！」

「果南ちゃん!? なにしてるのー！」

松浦果南は口の端で曜に笑い、自分が絞め落とした考朔を壁際へと

引きずる。

「でも……Curse、ここまでなんて」

シャイニーはだらりとぶら下げた右手首に毒づいていた。装甲が護るべきメカニズムまで破壊されたようだ。

だが果南の物思いは、パイルアップ・フォーメアの次の挙動に掻き消された。

普通の二輪車になったそれは、タイヤの摩擦音を鳴らしてプールの水面を走っていたのだ。

「そんなこともできるはず!?」

叫ぶ花丸たちの前に回り込んだパイルアップは、威嚇するようにエンジン音を鳴らす。

「焦らないで！　そこに入って！」

だが曜たちも、もう控え室の前まで来ている。あとは入るだけだ。だが――

「ピギイ！」

――ルビイが転んだ。

引きずられ、

「ずらあ！」

「うわあ！」

手を繋いでいた花丸が、そして曜が転んだ。

「曜！」

フォーメアが前輪を上げて走ってくる。

「Shit！」

『ウムラウト』の電子音声と共に形態変化するシャイニーが果南の横を過ぎ、銃を突き出す。

だが、左手でまともに撃てるか？

最後尾になった果南は考朔を寝かせると、瞼を伏せ、飛込プールの水面を睨む。

ここまでか。

これが、小原家が二年間で成し遂げた成果か。

フォーメアとスランバラーを捕獲し、この水泳場で勝負に持ち込ん

だ仮面ライダーは、負けた。

小原家の作る機械では、これが限界なのだ。

小原家の作る未来では。

水面に左手を伸ばし、その手を広げ――

「マルー…どいてエー！」

――シャイニーの射線を、花丸が遮ったのが見えた。

花丸は時速数十キロで走るフォーメアに、広げた手を伸ばしている。

果南と同じように。

音が近付いてくる。

「まさか」

小さなハミングのような響きと共に、花丸の向こうの空間がゆがむ。

一瞬も待たず、淡い輝きが溢れ出した。

「ピギイ！」

「ムーフォーム!?!」

ルビイと曜が叫び、応えるように光が舞い――

「ずらッ！」

――プールから飛び出したロリポリ・フォーメアが、バイクを壁まで殴り飛ばした。

「うわあ、本当にこの前と同じ絵面だぞう！」

曜は倒れた考朔に駆け寄りながら、誰にともなく叫んだ。

だが果南は、ダンゴムシに抱きつく花丸を見ることしかできない。

第八話：Dance with me! Dance
with you! | 5

*
来た。

来てくれると信じていた。

「ポリちゃん!」

国木田花丸は、金色の斑点を帯びた黒光りする甲殻に抱き付いた。

「ちよ、国木田さん!」

「平気すら!」

曜に答え、花丸はその背中から離れた。

逆立ちした怪人の前に回り、本来はお尻だったはずの顔を見上げる。

一つ目の眼球に収まった、黄色に淡く輝く妙法寺の本尊を見上げる。

「オラを護つてくれる、ずら?」

富士市でパイルアップ・フォーメアに追いかけられた時も、妙法寺と一緒に踊った時も、花丸を傷付けるようなことはしなかった。最初のランニングの時だって、ずっと追いかけてきただけだった。

だが、ロリポリ・フォーメアは身体を左右に振った。

胴体に折り畳んだ足を一本伸ばし、花丸の喉元に当ててくる。

「オラが護る、ずら?」

ロリポリ・フォーメアは身体を前傾する。

そうか。

そうだったんだ。

「ルビイちゃん! ここは任せて!」

「平気なの!?!」

「灼然炳乎ずら!」

「行こう、ルビイちゃん!」

何人かの足音がプールサイドから消え、反応するように体勢を立て

直したパイルアップがアクセルを開いた。

後輪で走りながら前輪が持ち上がる。誰もいないハンドルがねじれ、前輪が傾く。

そのままロリポリに殴りかかる気だ。

だが――

「――ずらッ！」

気合一閃。

ロリポリの腕が前輪の軌道を逸らし、プールサイドにバイクを叩き付けた。

だが後輪だけで飛び跳ねるように起き上がったパイルアップは、今度は花丸にターゲットを移して前輪を振り下ろしてくる。

「ムダずらッ！」

花丸が指を差すと共に、ロリポリはまたしても前輪を受け止め、今度は節のある腕でフロントフォークをへし折ってしまった。

「すごい、ロリポリさん！」

控え室に避難したルビイが、ガラス越しに歓声を上げた。

すごいのは、咄嗟に二十四式太極拳ダンビエンの単鞭をイメージした花丸なのだが、ロリポリゴ本尊が褒められるのも悪い気はしない。

水の泡でできたバイクは、火花を散らすこともなくプールサイドを転がっていった。

もうタイヤは後輪しか残っていない。周囲の水を集めて復元しようとしている今がチャンスだ。

「シャイニーさん！ 必殺技を！」

「そうしたいのは山々んだけどオ！」

シャイニーが金剛杵のような道具から連発する光弾は、一発もパイルアップ・フォーメアに命中しない。

「左腕に S i g h t i n g S y s t e m が乗ってないのよオ！」

「下手な鉄砲――」

「――一発で E u r y s が溶けちゃうのオ！」

「エウリユス？ じゃあマルが――」

「――アナタが溶けちゃうってばア！」

そうこうしているうちに、前輪を作り直したパイルアップが立ち上がってしまった。

だが叶わないと思ったか、バイクは花丸たちから距離をとって、競泳プールの方へ走って行く。

「に……逃げちゃったぞら」

「もう、Planが滅茶苦茶よオ！ あんな強いなんて思ってたなかったわア！」

鞠莉はプールサイドに腰を下ろし、マスクを開くと襟元に声をかけた。

「セブ、Mark IIの予備パーツ、どれくらいで持ってこれる？」
音漏れするドラムの音とともに男性の声が聞こえるが、会話の内容までは分からない。

悠長な、と花丸は思いかけたが、先ほど鞠莉が言った通り、怪人ではあるがバイクでもあるパイルアップ・フォーメアに、この水泳場から逃げる方法はない。スピードも、産みの親らしき考朔が気を失ったからか、一昨日やさつきまでより格段に落ちている。あとは時間をかけてでも倒せばいいのだ。

「花丸ちゃん、終わった？」

ルビイが控え室から顔を出したので、「まだだよ」と返す。

「まあ、Trash^{ぶつ}ed^壊out^た Armor^装のDataもとれたし、結果All Rightかしらア？ 《Umla・t》から《ed illa》へのFoam Changeも滑らかだったしね」

「ウムラウト？ セディュー？ ……ダイアクリティカルマークずら？」

「What？」

花丸は立ち上がって、今は後頭部にスライドしているシャイニーの「仮面」に指で触れる。

「丸ポチ二つが目になって、口が“U”、顔全体で“ウムラウト”。
ことだったんですね」

さきほどのセディューの顔も、^{C=セディュー}“■”^{U=ウムラウト}が背中合わせになった形だったのだと思いついた。

「分かるウ!? よかったア、Webじゃ誰も、顔が文字だって言ってくれなくて、もうウズウズしてたのよオ!」

「フォームの名前を載せないと、誰も気付かないと思います」

「載ってなかったっけ? ……あ、そっか、《Hack》ってまだ公開してないんだった」

一昨日の遠距離攻撃の「泡」^{フォーム}のことか。

「でも、そっか、Diacritical Markか……。Foam Changeっていうより、《Diacritical Change》? ふふふ……。あ、Sorry About That、セブ。それで腕の交換だけ——」

「——まったりしてる場合じゃないよー!」

控え室から飛び出してきた曜が、彼方を指差して叫んだ。

「あいつ逃げちやうー!」

「え?」

曜が指差す先に目を向けた鞠莉の目が丸くなり、立ち上がる。

「What the fudge?」

ドームの反対側で外壁に突き当たったパイルアップは、二つしかないタイヤを壁に押し付けて、真上に向かって走り始めていたのだ。

「そんなこともできるぞら!?!」

だとしたら、曜の言う通りだ。

ドームの天頂にある、十字架の型に開いた天井板の穴に辿り着いてしまえば、パイルアップの勝ちだ。

「天井を閉じなさい! Now! ^{今すぐ} てか、なんで修理が中途半端なのよオ!」

「理事長代理! パイルアップがあそこから出たら、なにが起こるんです!?!」

曜がシャイニーの肩を掴んで叫んだ。

「分かんないわよオ! アイツらがなに考えてんのか、さっぱりなんだもん!」

「お、OGIグループも分かってないぞら!?!」

だとしたら、事態はより深刻だ。

ロリポリに押さえつけさせて必殺技を当てる？ いや、ロリポリが強いのは背中側の殻だ、腹側の腕で押さえつけたら意味がない。

「ど、どうすればいいはずら」

「くそう、この曜ちゃんを差し置いて、あいつ太陽みたいなことを……！」

曜の言う通り、ヘッドライトを灯してドームの内側を螺旋に走るバイクは、太陽を押しして天球を走る神話の甲虫にも見える。

「太陽……？」 「太陽……？」

花丸と曜は顔を見合わせ、

「そうずら！」 「そうだよ！」

手を叩き合わせた。

「シャイニーさん、必殺技の準備をするずら！」

「だから、Lock-onできないって言ってるでしょオ！」

「しなくていいんです！」

その間にも、曜はエウリュースという名前らしき拳銃をシャイニーに渡し、花丸はロリポリに手招きしている。

「急いでください！」

「もオ！ 分かったわよオ！」

鞠莉はシャイニーのマスクを閉じ、ベルトの腰のホルダーから球体を二つ取り出した。

それをエウリュースの銃身にはめ込むごとに、『アイコサヘドロン』『ウムラウト』の電子音声が流れる。

パイルアップ・フォーメアはドームの内側を、もう真つ逆様状態で走っている。

「下がって、マル！ 曜！ ……Oops、必殺技の名前は！」

「そんな急に思い浮かばないずら！ 渡辺先輩！ 名付けてください！」

「私!? え、じゃあシャイニーIIフンコロガシ・アタックで！」

曜の提案に、花丸とシャイニーが嘔き出す。

「ふ、糞ずら!?!」

「Dung Beetleはないんじゃないイ!?!」

「ああほら、逃げちゃう！ 発射用意！」

「Great Scott！」

必殺技の発動を意味するらしき、『ラブライブ』の電子音声。無造作に発射された輝きの奔流に――

「ポリちゃん！ Take a Leap of Faith！」

――球体と化したロリポリ・フォーメアが飛び込んだ。

必殺技はエウリュースを消失させたが、ロリポリは違った。

黒かった装甲は赤熱し、それを通り越して青みがかった白光の輝きを放ち。

「全速前進！ ヨーソロー！」

弾丸のように射出され、花丸の目に残像を描いて飛んでいった。

「そういうことオ!？」

「そういうことずら！」「そういうことです！」

ドームという天球を、ロリポリは頂点に向かって飛ぶ。

真正面から走ってくる、パイルアップを迎え撃つために。

「ゲーテさんは言いました。『太陽が素晴らしいのは、塵さえも輝かせることだ』って」

パイルアップ・フォーメアは天頂に辿り着けなかった。

「人の恐怖も照らせないあなたに、太陽の資格はないずら！」

ロリポリ・フォーメアの体当たりをくらい、爆発した。

*

爆発の中心を起点に二つの円弧が描かれ、ムーフォームが飛び出した。

それらは軽く掲げた少女の手の中に収まった。

「やった……やったよ花丸ちゃん！」

「ポリちゃんがずら！ すごいずら！」

二人の後輩が抱き合って喜ぶ様を、小原鞠莉は腕を腿に乗せて眺めている。

「Mark II、右前腕以外の機能は正常です」

「お変わりありませんか、お嬢様」

「まアね」

水泳場の別室でモニターしているS—ユニットの声に、小原鞠莉は笑いながら答えた。

右腕は前腕から先が動かなかった。アンダースーツに強力なアシスト機能が搭載されている反面、機能がダウンすれば逆に動かなくなってしまう。バッテリー切れ以外の、シャイニーの根本的な弱点が判明した格好だった。

「意外と打たれ弱いよね、この子」

「これから対応していけばいいんですって！」

松之介が大声で言えば、

「想定のスペックを超えた怪人を撃破できたのです。見事な勝利ですよ」

とセブも同意した。

「もちろん……。ほんと、Shinyな子たちだわア」

シャイニーを着る鞠莉が聞いている音は、スーツのマイクが拾った音をSユニットのサーバーが調音し、イヤーマニターに返しているものだ。

だから、

「あー!! 上ー! 上ー!」

曜が叫んだ声があまりに大きくて、鞠莉は思わずシャイニーのマスクを開けた。

「どうしたのよオー!」

言いながら、曜が指差す頭上を見、揺らぐ光に気付いた。

「Ops……」

ドームの天井板は惨憺たる状態だった。

補修を待っていた十字架のすぐ横に、ぽっかりと丸い穴が開いていた。怪人の爆発で吹き飛んだようで、穴の周辺は黒く焦げ、今も炎が燃えている。いや、二人の怪人がそこに到った道筋も、タイヤ跡と焦げ跡が描いた黄道として残っていた。

「これ、重傷だよね?」

O G Iグループの修理スタッフが、慌ただしく動き始めた。ドームの外側のハシゴで、消火に向かうのだろう。

「私が練習するところ、どんどんなくなっていくちやう……。まずいなあ」

「平気よオ、これくらい。Foamの実験で割りとやらかしてるからね」

「え？　ここで実験してるんです？」

「当たり前じゃない、こんな大量の水があるところなんて、飛込プール以外ありませエン」

「じゃあ先週のも？」

「そ、Shinyの開発Teamがちよオつと焦つちやつてね。だから心配しないで、今週末までには直すわ」

「いいのかなあ……」

首を傾げる曜の横から、花丸が歩いてきた。

「小原先輩、これ、お渡しします」

それはパイルアップ・フォーメアを産み出していたムーフォームだった。

「円柱結晶、《シリンドラー》ですね」

松之介がイヤーマニターに言ってきた通り、フォームは再結晶化されていた。もう怪人を産み出す危険はない。シャイニーのベルトのホルダーに、機械でシーリングされた《アイコサヘドロン》のフォームと一緒に納める。

「そっちは？」

鞠莉は、花丸が持っているもう一つのフォームを指差す。

「これは……」

若干の抵抗のあと、花丸はそれも渡した。

こちらは、正八面体を有する球体だ。シャイニー初お披露目の時に、砂浜でロリポリを撃破して入手したものと同じ——に見える。

「セブ、これ、なんだと思う？」

「スターフォア一六号を墜としたフォーム、でしょうね」

フォームがわずかに黄色味がかっているのが、光の加減か、今は見て取れた。つまり、すでに誰かと紐付いており、それは目の前の少女以外にはいないはずだ。

だから、

「アナタがもってなさい」

と花丸に返した。

「いいんですか?」

「いいけど、ちゃんと使いこなさないよオ?　ちゃんと意識してないと、ソイツ、色んなところを壊して飛び出しちゃうんだからア」

「仰る通りです」

花丸の苦笑を見れば、この対応で問題ないと確信できる。

「じゃ、悪いけど、今日は解散ね。水も抜かなきゃいけないし——」

——と、目を向けた飛込プールの水面が揺らぐ。

直後。

水柱が上がった。

「うわあ!」

「な、なんぞらあ!」

「ピギイ!」

曜と花丸が足を滑らせて尻餅をつき、ルビイが控え室の入口で縮こまる。

どぼどぼと落ちてくる水が治まった時——

「ふお、フォーメア!?　にしては」

「大きすぎずら」

——全高一〇メートルの、金属製のタツノオトシゴとしか言いようのないものがそこにあった。

「ピギイ!」

改めて、ルビイが奇声を上げる。

その体積を産み出した分だけ減ってしまった飛込プールの水面に立ち、巨大な怪物はプールサイドに目を向けている。

「こいつ、もしかして、あの時の!?!」

「我々の命の恩人、ですな」

松之介とセブが、各々イヤーマニター越しに言う。

鞠莉はすでに、それを見ていない。

怪物の隣、やはり水面に立つ人物を見ている。

黒いアンダースーツの上に、シャイニーと同じような装甲をまとった人物だ。鎧として上半身に、ブーツとして爪先と踵から向こう脛にかけて、グローブとして手の甲から前腕の外側にまもっている配置も近い。

だが素材はだいぶ違う。アンダースーツはウエットスーツやスポーツウェアのように、マットな質感だ。鱗の形の鉄板を何枚も溶接して作った装甲は対照的に、長時間かけて酸化した金属のような、あるいは深海のような、青から緑を複雑に行き来する光沢を放っている。

そして、頭には仮面。

「あれもタツノオトシゴ?」

花丸が声を上げた。

たしかにその頭は、額から鼻にかけて伸びる顔のような模様と、頭の天辺に立つヒレ、後頭部から突き出して渦を巻くポニーテールのような尻尾のせいで、頭全体でお腹の膨れた緑色のタツノオトシゴを表わしているようにも見える。

その人物は、補充されていく飛込プールの水面を歩き、プールサイドに上がった。足の裏の水は動かない。ナイロンの床に付いている水にすら触れていない。

「アナタが《Cavallucier Foamare》の主なのね。一昨日のChopperの件、ほんと助かったわア」

鞠莉の言葉には耳も傾けず、その人物は道を空けた曜と花丸の横を通りすぎる。

「……果南ちゃん?」

曜が呟き、その人物は彼女を一瞥した。

「果南ちゃんだよね? 果南ちゃんも変身したの?」

「違うみたいよオ?」

鞠莉は曜の背後を指差した。控え室の窓ガラスの向こうには、ルビィと並んだ果南が見えたからだ。

「久々の《Group of Meerschäum》Riderだし、私がGod Motherになってあげる。リュウノコマ――

《Kamen Rider Ryuma》はどうかしらア？」

龍駒と名付けられた仮面ライダーは、わずかに頭を傾げた。

「仮面ライダー？ だって、目が」

曜が指差す仮面に、ブランキアやワンダ、そしてシャイニーに共通している大きな目はない。月の満ち欠けを思わせる弓字型のスリットの奥で、左右非対称の細い目の連なりが、エメラルドグリーンに輝いているだけだ。

だが仮面ライダーか否かは、目の有無では決まらない。

O G Iグループが「仮面ライダー」と名付けたものが、仮面ライダーなのだ。

「Wee、私たちはそろそろ撤収——」

カヴァルツチャーが尻尾を一振りした。

いや、尻尾を切り離した。

それを龍駒がキャッチし、

「——シッ！」

ムチのようにしならせ、床を叩いた。

「Ooh！」

「果南ちゃん！」

「龍駒さん!？」

鞠莉、曜、花丸が同時に声を上げる。

尻尾ムチは鞠莉の足元、ほんの一〇センチ手前に当たり、水を飛び散らした。

「アンタ、何者なの？」

鞠莉は問うが、返答はない。

ただムチをクルクルと巻き取り、左手の人差し指で「こっちへ来い」のジェスチャーをする。

その仕草に、鞠莉の背筋に冷たいものが流れる。

「いいわよ、なんだかよく分かんないけど——」

襟元を操作し、シャイニーのマスクを閉じる。

「——やってやろうじゃないのオ！」

飛び出し、自由な左手で龍駒に殴りかかった。

だが拳が届く前に、身体が右に引つ張られる。

「あ、このオー！」

龍駒のムチが、シャイニーの右腕を拘束していたのだ。バランスを崩されたシャイニーは数歩つんのめり。

龍駒の左パンチを腹部に食らった。

「いッたアOW！」

胃液がこみあげる衝撃。

ヘッドアップディスプレイに赤いワーニングが閃き、ダメージログが高速で流れる。

「腰部バツテリー損傷！ 想定……一四〇パーセント!? パイルアップの倍ですよ、鞠莉さん！」

「お嬢様、エウリクスを！」

イヤーマニターから聞こえる松之介とセブの声を、まばたきブリック操作でミュート。

控え室から出てきたスタッフが投げたハンドガン型リーダーを、プールサイドに蹴つて返す。

離れようとした龍駒を、右腕のムチを引つ張つて遮る。

「食らいなさいEat This！」

カウンター気味に入ったシャイニーの左パンチで、龍駒の胸の装甲が凹んだ。

「まだまだア！」

こちらも左拳の装甲が破損するが、攻撃を緩めるつもりはない、緩めたムチを再度引つ張る。

だが龍駒がムチを手放したことで、シャイニーは一人、バランスを崩した。

今度は龍駒のカウンターパンチが、ウムラウトの目を叩き割った。マスクの中で頭がシェイクされ、顎を思い切りチンガードにぶつける。

「ど、どうすればいいはずらあ」

パイルアップ・フォーメアと正面切つて戦っていた花丸が、ムーフォームを手にオロオロしているのがサブウィンドウに表示された。

「Don't Do Anything!」

そう叫びながら龍駒の膝を左肘で受ける。

そして思う。

なぜ破壊されていない左腕を、ムチで拘束しない？

右腕を拘束したなら、そこを攻めて完全に破壊しなければ意味がない。

現状では龍駒は、自分の右腕を拘束したのと同じことだ。

(いや——そうなの?)

シャイニーが左でパンチを出せば、龍駒は右半身を逸らし、位置がズれる。

龍駒が右で膝蹴りを出せば、シャイニーは左で膝をいなし、位置がズれる。

龍駒のムチが近距離戦を強制し、足さばきをリードする。

付かず離れず、三拍子のボックスステップ。

決められた殺陣を演じるようなその様は——

(——踊らされてるみたいねエ)

口の端に笑みが浮かぶ。

攻撃を捌く余裕はない。

シャイニーの装甲が火花を散らして弾け。

龍駒の装甲が水飛沫と泡を散らして弾け。

シャイニーのバッテリースカートが膨らみ。

龍駒の頭のタツノオトシゴが水に揺らめく。

それが、無性に楽しい。

イヤーマニターの声は耳に入らない。

もはや、相手が誰かはどうでもいい。

ただ、踊り通したい。

クライマックスに向かう、このワルツを。

だからか。

気付いた時には、競泳水着姿の少女が二人の間に立っていた。

「ちよつとオー!」

「渡辺先輩!」

パワーアシスト機能で動くシャイニーに中断命令を打つ。

その前に、右腕を拘束していたムチが思い切り引っ張られ、

「Ouch!」

シャイニーはプールサイドに耳から叩き付けられていた。

ダメージログが流れていくのを待って、顔を上げる。

「なんで見てたの、果南ちゃん」

タツノオトシゴの尻尾ムチを掴んでいたのは、曜だった。

「理事長一人であんなにピンチで！　ロリポリが来てくれなきゃ私たち、どうなってたか分かんないのに！　なんで見てたの！」

筋肉質の腕が、ムチを握り締めて震えている。

「ま、まあ私は別に、一人でも——」

「——理事長もです！」

怒鳴られ、シャイニーの肩が上下に揺れる。

「そんなボロボロになって！　今フォーメアが出てきたら戦えるんですか!?　仮面ライダーなのに、戦えない人にために戦うのが役目なのに、ライダー同士で戦っててどうするんです！」

穴が開いたドームに、曜の怒声が響く。

その残響が消えた頃、龍駒の肩の力が抜けた。

尻尾型のムチが床に落ち、泡となる。シャイニーの腕を縛り、曜に握られていた部分も、流れて消えた。

「それもそうねエ」

鞠莉も身体を起こすと、左手で首元を操作し、マスクを開いた。

「楽しかったけど、私、時間切れだし」

そう言うと同時に全身の関節がロックされ、頭の上から水が流れてきた。

マスクに乗っていた「顔」と、上半身の円形の装甲が、泡となって消失したのだ。

「ねえセブ、一五分しか戦えないの、ほんと、なんとかしてほしいんだけど」

そう言って、龍駒にウイंकする。

「現状の技術力では不可能です」

龍駒は肩を竦め、背を向けると、曜と花丸の方に歩いていく。

「果南ちゃん……なんだよね？」

曜に片手を広げて見せた、龍駒は控え室を通りすぎた。

控え室の窓の向こうに、果南の姿はなかった。

ルビイが誰かを見送ったあとのように、更衣室への扉を見ているだけだった。

第八話：Dance with me! Dance
with you! — 6 (完)

*

手城山と鉛山の山間を縫う道路を、渡辺曜は眺めている。

黒塗りのセダンの後部座席に並んで座る花丸との間には、乗車してから一言も会話がなかった。

ルビイは先を行く黒塗りのリムジンに乗っている。沼津市立総合水泳場への往路では三人がリムジンに乗っていたが、ボディガードの入場を禁止していた水泳場内であんなことがあったために、復路は念のため、一台二人の護衛態勢に変更になってしまったからだ。

今フオーメアの襲撃が起こったら、曜は花丸とロリポリに護られるだろう。黒澤総合警備保障のボディガードも、職業意識と鍛えた技と黒澤家への忠誠心で、ルビイを護って怪人に立ち向かうだろう。どこかに行ってしまった果南も、もしかしたら駆けつけるかもしれない。自分はどうする？

ルビイと一緒に、クルマの中で震えているしかない。

「はあ……」

溜め息が漏れた。

「どうしました?」

花丸の抑制の利いた声で言った。リムジンと違って、運転席と後部座席を仕切るパーティションがないからだろう。

「ううん、ちよつとさ……」

言いかけて曜は、続ける言葉がないと気付いた。

今の溜め息はなんだ?

仮面ライダーとフオーメアの戦いに自分が役に立たないことは、分かりきっていただろうか?

だから少し考えて、

「すごかったよね、さっきの花丸ちゃん。太陽みたいでさ」

花丸のことを口にした。

「太陽？」

「だって、アレって花丸ちゃんが作り出したんでしょ？ それがあんな風になっちゃうんだから、それって花丸ちゃんが太陽、ってことじゃん」

「そんな、私がお天道様なんて、おこがましいです」

花丸はうろたえたように俯いたが、まだ「ずら」は出てこない。

「そうかなあ、『曜』なんて付いてる私より、よっぽど太陽っぽかったけど」

曜が言うと、花丸は俯いたまま首を振った。

「あ、でも待てよ。シャイニーが転がす太陽のダンゴムシって構図だと、フンコロガシはシャイニーってことになっちゃうね」

「それで正しいです。フンコロガシは天の道を司る虫で、分類的にもダンゴムシとはだいぶ違いますから」

「そうなの？」

「グソクムシに近い生物です」

「ふうん……」

曜はポケットから出した単語カードに「フンコロガシ」と「グソクムシ」と書き、それぞれの裏に「≠ダンゴムシ」「≠ダンゴムシ」と書いた。

「渡辺先輩って、意外と理屈っぽいんですね」

「こう見えても文武両道なんだよ、曜ちゃんは」

気付けばクルマは市街地を走っていた。太陽が右手にあるから、南下しているようだ。

手にしていたままの単語カードを、何気なしに、扇状に開く。

ずいぶん前に書いた、「怪人」と「廃校」のカードが目に入る。

さらに広げると、相對する「ブランキア」と「スクールアイドル」のカードも出てきた。

非日常を象徴する四枚のカード。

鞠莉が《龍駒》と名付けた、四人目の仮面ライダーの顔を思い出す。

あれが果南なのは間違いない。

「私はこの契約に乗ったわ」

教室の窓際でそう言った、果南の顔を思い出す。

パイルアップ・フォーメアを考案から引きずり出したのは、果南だ。果南は最初から自分が戦うつもりで、そうしたのでだろう。

顎を上げ、背もたれに頭を預ける。

それが、なぜあんな風になってしまう？

果南と鞠莉の確執について、幼馴染みである曜はなにも知らない。せいぜいが「一緒にスクールアイドルをしたくない」程度のことだと思っていた。

だが果南が龍駒で鞠莉と共闘しなかったことを思えば、その「程度」を逸脱しているのは明らかだ。

自分はどうすればいいんだろう。

溜め息。

内浦という狭い街で一緒に育った幼馴染み。

その中で千歌と果南は、フォーメアを倒して街を救う仮面ライダーになった。

だが曜は戦う力がないどころか、フォーメアを産み出す側に回ってしまった。

千歌と曜と果南は、廃校を救うためにスクールアイドルになろうとしている。

だが曜はアイドルになる動機もなければ、アイドル活動に役立つ特技もない。

文武両道だって？

唯一自信がある水泳で花丸を部活に引き込めそうではあるが、自信の源である高飛込は果南に「イップス？」と言われる始末だ。

各々が好き勝手に踊るダンスに振り回されて、なんとなく踊れている気がしているだけ。

いや、もう振り落とされるところかもしれない。

「私はヒマワリだと思います」

唐突に、花丸が言った。

「ヒマワリ？」

文脈が分からず、曜は問う。

「もし私が、さっきの戦いで役に立てたように見えたなら、それは周りにたくさんの太陽があつたからです。ご本尊に、ルビィちゃんに、シャイニーさんに、高海先輩に渡辺先輩。みんなが輝かせてくれたから、私は役に立てたんです」

「私も？ 私、なんにもしてないよ？」

花丸は目を丸くした。

「今日、私たち全員を引っ張ってくれたのは、渡辺先輩ですよ」

「いやだって、私、振り回されっぱなしで——」

「——そもそも」

花丸が強く言い、曜を遮った。そして、

「最初にエンジェル・フォーメアに遭遇した時、私を助けてくれたのは、先輩たち二人です」

曜を真っ直ぐ見て、笑った。

「私が『フォーメア』という恐怖」と戦おうと思えたのは、あの力を得たからじゃないです。二人が、私とルビィちゃんを助けてくれたからです。本当にすごいのは、先輩たちなんです」

その言葉に、曜は心臓を鷲掴みにされたような気分になる。

「だから私は、ヒマワリでいいんです。雲の上の太陽に憧れて、少しでもその輝きを見たいと思っっている、ヒマワリで」

そう言つて、花丸は車窓に目を向けると、窓ガラスに手を触れた。

空の果てにある太陽に、手を伸ばすように。

そして、

「そっか、みんなもきつと、そうやって恐怖に折り合いをつけてるぞら」

一人納得したように呟いた。

「そう……なんだ」

曜は曖昧に笑つて、反対の窓を見る。

そんなつもりなんてなかった。

いや、梨子が戦つた時のことを覚えていなかったように、曜も無我夢中で、自分がなにを考えていたか覚えていない。

あの時の話の中心は、逃げ遅れていた生徒二人、そして戦うブランキアとエンジェル・フォーメアだったのだから。

なのに？

*

「あ、着いたみたいです」

花丸に言われ、渡辺曜はクルマが停車したことに気付いた。

「……、どうして？」

開けてもらったドアの先に広がっていたのは、ただの住宅地だった。沼津なのは間違いないが、来た覚えのない場所だ。

「ごめんなさい、狭い方に押し込んでしまった！」

ルビイがリムジンから駆け寄ってきた。

「それはいいけど——」

「——遅ーい！ 早く上がってきてよ！ ……あ、曜先輩！」

声の方を見上げると、アパート二階の共用廊下から善子が手を振っている。

「ヨハネさんのウチ？」

「そうです」

黒服に挟まれる形で階段を登った三人は、流れるように津島家宅の居間に通された。

「あれ、これ」

そこに散らばっていたのは、水色と白色のバラバラの布地。

「よーし、来たわね。じゃ、私のリトルデーモン一号二号三号四号、頼むわよ」

その単語が指す対象がルビイのボディガードだと気付いた時には、彼らは散らばった布に取り付き、ペンのようなものを手になにかを始めている。

「なんなの？」

ルビイに問うが、答えが返ってくる前に善子がベージュの布の塊を突き出してきた。

「これに着替えて」

「私が？ なんで？」

「ブラとパンツは着てていいから。早く！ ルビイの門限も近いし！」

「え、う、うん」

勢いに負けて廊下を挟んだダイニングルームに押し込まれた曜は、布の塊を広げてみる。

「ペチワンピ？ なんぞ？」

疑問に思うも制服を脱ぎ、ワンピースタイプのペチコートを着た。下着が透けない厚さだが、丈はかなり短く、むき出しの腕や脚が心許ないことに変わりはない。

「脇の処理、面倒がらなくてよかったあ」

曜はふすまを開けて、もじもじと居間に入る。

「これでいいの？」

「よし、リトルデーモンたち！ 今こそリトルデーモン五号を産み出す時よ！ さあ——変！ 身！」

「え？ ええ!? ちょっと、ちょっと待——うひゃああ!!」

善子に引つ張られて部屋の中央に引つ立てられた曜は、何故か善子の指揮下に入っているルビイのボディガードの手で揉みくちやにされ——

「うん、いいわね」

——黒服がいなくなった時、三人の下級生の視線に囲まれていた。

「うわああ！ すごい！ すごいよヨハネちゃん!! こんな風になっただんだ！」

『Dancing stars on me!』の難易度“鬼”の全良達成よりは苦勞したわよね」

「これで踊るんだよね!! 三色揃って！ うわああ！」

得意げに言う善子を放置し、ルビイは曜の周囲をグルグル周って写真を撮り始めた。

「……でも、ヨハネちゃんと千歌先輩の髪に合わせるなら、リボンはどう少し下がいいかな？」

背中の方が引つ張られる感触がして振り返ると、ルビイが水色の布をつまんでいた。

「気を付けてよ、ルビイ。まだ仮止めしてるだけなんだから」

「三面図ではいいと思ったんだけど、曜先輩、スタイルがよすぎてバランスが悪いかも。おっぱい周りは調整しなきゃだし、スカートの後ろ身頃はもつと上げて——」

「——ひゃあー！ ちよつとルビイさん!?!」

遠慮なくスカートをめくられ、曜は悲鳴を上げた。

「動かないでください、見せパンじゃないんですから」

「だったら無造作に触らないでほしいが、ルビイの目は据わっていて、反論できる状態ではなさそうだ。」

「あ、事後報告になっちゃったけど、頭回りは実作中に変えたわ。あのリボン、実際に付けるとけっこうデカイサイズだったから。うん、いい感じじゃない？ あとは、グローブの手の甲が意外とのつぺりしちゃうから、なにか考えたいんだけど」

「なに？ なんの話なの？」

「ヨハネちゃん、渡辺先輩、分かってないよ」

と、花丸が善子のシャツを引っ張った。

「あ、ごめん、ヨハネたちだけ盛り上がったわ。リトルデーモン二号、それ取って」

と黒服が姿見を持ってきて、

「え……」

覗き込んだ曜は言葉を失う。

ジャケットとシャツが合体した、シンプルだが厚みを感じさせるノースリーブのトップス。

パニエを挟んでふつくらと動きやすい、白から青にグラデーションするミニスカート。

菱形が並ぶサイハイソックスに、脛を覆うミドルブーツでトゥーンにされた脚。

左右非対称のリボンを右端にぶら下げた、真っ白なカチューシャ。

光り輝く海のような水色で統一された服。

それを着ている、自分。

「なに？ これ」

「は？ 衣装に決まってんじゃん」

「この色は？」

「前に言ってたでしょ。パーソナルカラーは水色だって」

「誰の？」

「曜先輩の！」

「私の？ これ、私のなの!？」

「言ってるじゃん！」

たしかに衣装は、曜の身体にフィットしている。

「すごい、こんなのが作れちゃうんだ」

「他人事みたいすら」

姿見の向こうから顔を出した花丸が、電話の画面を曜に見せた。

表示されていたのは、スケッチブックに描かれたスクールアイドル。

鏡に映る自分の服は、たしかにその少女のそれに近い。

「私のデザイン？」

花丸はにつこり笑う。

ヒマワリのように。

「まだ気付かないんです？ 渡辺先輩は、今、私たちの中心です」

辺りを見回す。

居間の中央に敷かれた円形の絨毯。

その外側に置かれた姿見の横に花丸が立ち。

一回り離れたソファにはスケッチブックと曜を見比べる善子とルビィ。

四人を囲むように四人のボディガードが壁際に並び。

ついでに壁の長押では一二枚の能面が曜を見下ろしている。

私を中心？

「世界は自分を中心に回っている。そう思った方が楽しいすら」

花丸の笑顔は眩しい。

それは、私が照らしたから産まれた輝きなの？

「私か？」

曜は姿見の中の自分を見る。

《廃校》という非日常と戦う《スクールアイドル》。
それに“変身”した姿だ。

そうだよ。

Take a Leap of Faith。

私はもう、飛び込んだんだ。

選択肢は二つ。

泳ぎ切るか、溺れるか。

「なら、泳ぎ切るしかないよね」

曜は頬を持ち上げ、善子を見た。

「ヨハネちゃん、手の甲にスーツを入れよう！ トランプの！」

「マーク？ 三人だと、一つ余っちゃうわよ」

「ダイヤはほら、アレだから、ハートとクラブとスペードでさ！」

「そうね……。抜いて補強すれば、予算はかからないか」

今度はルビイに向き直る。

「ルビイちゃん、ほんとに泳げるようになりたい!？」

「え、あ！ 曜先輩！」

ルビイが首を振る横で、

「ルビイって泳げなかったの?」

と善子が聞き、その向こうで黒服がざわついている。

「渡辺先輩、それ、内緒だったはずら……」

「ウソ！ ご、ごめん！」

曜は足と手をバタバタさせて謝る。

「でも、泳げるようになりたいんだよね!? 本気で！」

「え、そ、それは、はい……」

「なら、協力するよ！ 一緒に泳げるようになろう！」

「教えてくれるずら!？」

反応したのは、花丸だった。

「うん、時間が許す限り、だけどね」

「なんで花丸が喜んでるのよ。ルビイの話でしょ?」

「そうずら！ ルビイちゃんは渡辺先輩を目指すずら！」

「え？ え、ええええ!？ あんな飛込できないよう！」

「できるぞらー！」

「飛込は教えないって！」

慌てて立ち上がったルビイがソファでバランスを崩して転び、花丸がそれを後ろから支え、善子が自分の作った衣装を護ろうと曜の前に出る。

太陽になれるかもしれない。

この小さな輪の太陽になら。

今はそう思っている、いいよね？

「で……なんでこんな、能面があるの？」

「それ、また説明するの？ 察して」

*

ヒノキの一枚板で作られたという急な螺旋階段を上がると、狭い廊下の先に客室がある。

そこは、なんの変哲もない一〇畳の和室だ。西と南に開かれた障子の向こうに続きの広縁があり、外界を隔てる全面窓からは、内浦湾、淡島、三津の街並みが一望できた。鮮やかな夕焼けが照らす雲海の隙間には、富士山も覗いていた。

「太宰さんは言いました、『富士には、月見草がよく似合ふ』って」

そう呟く国木田花丸は、内心で興奮している。ここがいわゆる「聖地」であることを知っており、かつ中高生の小遣いではとても宿泊できない場所でありながら、巡礼できてしまったからだ。

「ありがとうございます。こんな時間に、急なお願いを聞いて下さって」

「構いませんよ。当日キャンセルのお部屋ですから」

頭を下げた花丸に返したのは、十千万の女将であり千歌の母である、高海枝海だ。小豆色の和服は、訪問着や付け下げといった礼装ではなく、波の図が染められた小紋で、彼女の質実さと気品を物語っていた。

畳の間を通り、敷居を跨いで広縁に出る。

自然なように整えられた枝振りの松の下には、クルマ一台通らない県道一七号線を挟んで、三津海水浴場の海が夕焼けを揺らしている。

「太宰さんの部屋が《月見草》なのは、『富嶽百景』と関係があるので
すか？」

「はい、先代からはそう聞いています。一九四七年に太宰さんが滞在
した時、こちらは《松式》^{まつのに}と呼ばれていましたが、のちに改名された
のです」

「太宰さん」と自然に敬称を付けた枝海に、花丸は親近感を覚え
る。

「まあ、『富嶽百景』に描かれたのは、《十千万》ではなく《天下茶屋
》の滞在記なんですけどね」

上品な佇まいに茶目っ気をくわえた女将は、年齢よりずっと若く見
えた。

浦の星女学院スクールアイドル同好会に入部するにあたり、花丸は
発起人の千歌に会いたいと思った。如何なる状況にも対応できるよ
う、入部届は予め生徒会に提出していたが、直接挨拶をするのは礼儀
だと思ったからだ。

だから千歌が、太宰治が『斜陽』を執筆したことで有名な旅館《十
千万》の三女だとは、想像もしていなかった。

だが、さもあらん、とも思う。

聖地であるこの部屋は、先ほども感じたように、なんの変哲もない
和室だ。

ここに比べれば、同じく十千万にある《伊豆文庫》と呼ばれる書庫
の方が、よほど聖地然としている。太宰治の作品を始めとして、彼の
作品への評論、娘である太田治子の作品、伊豆に縁のある作品と、数
百冊の書籍が収蔵されているし、彼の写真や自画像の複製もあるのだ
から。

だが、それは情報だ。客観的に存在する事実が刻印された物質にす
ぎない。

そうではない。

情報にも物質にもならない領域がある。

この世界のすぐ隣にある、普段は気付けないなにか。

一瞬に折り畳まれた無限のように、雨滴の落ちる間隙を埋める万劫

のように存在する、違う時間、違う次元、違う可能性——違う世界。それが自分と繋がっていると理解すること。

世界観の破壊と再生。

その扉を叩く他者が、芸術であり、表現。

その鍵を探す旅路が、巡礼であり、人生。

誰かと同じ場所に立ち、同じ風景を見て、同じ書物を読み、同じ空気を吸うことに、意味はない。

扉と鍵が揃った時に手に入る、世界を変える力。

その存在を予測すればこそ、意味を与えられる。

まだ見ぬなにかを「待つ」ことにさえ、「待つ」ことを恐れることにさえ。

「ありがとうございました。私はそろそろお暇します」

もう一度、花丸は頭を下げた。

「ごめんなさいね。本当は今頃、帰ってるはずなんですけど」

無垢ニレと思しき外装の電話を手に、枝海は言った。

「せっかくですし、宿泊していかれたら？ キャンセル料は全額いただくので、一名様なら無料がかまいませんよ」

「そ、そんな！ オラには恐れ多いぞら！」

思わず「オラ」と「ずら」が出てしまい、花丸は口を押さえたが、

枝海は微笑んだだけだった。

「では、お玄関までご案内します」

「あ、はい！」

花丸は枝海について畳の間を通り。

退室のきわ、窓に目を向ける。

六九年前、自らの実家である津島家をモデルとした旧家の没落を描いた時、彼はこの部屋で、この「斜陽」を見たのだろうか。

手の中に、微かな熱を覚える。

今日、曜はみんなの中心だった。

だが、そこに居続けることはできない。

天の道を歩む以上、太陽は必ず沈む。

その時、ヒマワリでありたいと願う自分に、なにができるのか。

あの優しい幼馴染みに。

次回予告

千歌 「出番がなーいー！」

梨子 「私だって、名前しか出てないわよ」

ルビィ「スクールアイドルの中心人物がいなくても、意外とお話、回りましたね」

梨子 「実質、仮面ライダー回だったもんね」

千歌 「ポリちゃん回じゃーん！」

梨子 「あれって結局、マルちゃんのフォーメアってことでいいの？」

千歌 「違うの？」

ルビィ 「次回、仮面ライダーメルシャウム第九話、『震えてる手を握って』。ルビィ回前編です」

千歌 「ちかっちの出番はー!？」

ルビィ 「あ、あります、ありますから……」

梨子 「私も、少しは活躍したいなあ」

C

シャイニーと龍駒が戦っている。

黒澤ルビィは、控え室からそれを見ている。

怪人からルビィたちを護ってくれるはずの、仮面ライダー同士の戦い。

ガラス越しの光景は異常で、握り締めた指先が痺れてきたことにも気付いていない。

そんな戦いも、やがて曜が介入して終わった。

「終わりましたね、果南さん」

ほっと息を吐いたルビィは、滑り止めのついたテーブルにお尻を乗せ、姉の友人を振り返った。

スポーツ選手のような服を着た果南は、無表情のまま、右手の拳を差し出した。

「なんです？」

ルビィは首を傾げる。

果南が手のひらを開くと、そこには淡く光る透明な球体に乗っている。

揺らめく液体の中で、クリスタルのような正八面体が回る。

「本尊？」

花丸の実家、妙法寺の本堂に安置されている、あの太陽のような球体に似ている。

「なんで果南さんが——」

——顔を上げ、ルビイは息を呑んだ。

おかしい。

「果南さん？」

強烈な違和感。

瞼を閉じ、開ける。

眉を寄せる。

なにかおかしい。

果南が別人に思える。

こんな間近にいるのに。

瞼を強く閉じる。

気のせいだ。

今日だって、二年振りに再会したんだ。

記憶の中の顔と違っていて当然じゃないか。

「戦え」

声に目を開けた時、果南は背を向けていた。

ルビイが口を開ける前に、高いポニーテールを揺らした彼女は、更衣室に繋がる廊下へのドアをくぐる。

そして開いた手のひらを見せ、視界から消えた。

「果南さん……？」

残されたのは、テーブルの上の球体。

朧な照明を浴びて回る正多面体が、七色に分散した光を投げかける。

その光の揺らめきに、ルビイはなぜか、見とれてしまう。

「ルビイちゃんー！」

肩が震える。

顔を上げると、プールサイドを花丸が手を振りながら歩いてきた。ルビイは咄嗟に球体を掴むと、両手で覆い――

「ピギー！」

――手のひらに痛みが走った。

「どうしたの？」

入口から覗き込んできた幼馴染みが、ルビイを不思議そうに見ていた。

「う、ううん、なんでもないよ」

ルビイは球体を包んだ手を、スクール水着のお尻に押し当てる。なぜ隠したのか、自分でも分からなかった。

「果南さん？ 今、帰っちゃったよ」

ただ、手のひらの中に隠した球体が、その中の結晶が、ルビイをつづっていた。

第九話：震えてる手を握って — 1

A V

腕が動かない。

橈骨と尺骨がむき出しにされた前腕、その骨の隙間を、銀色に輝く鎖が巡っている。手のひらまで伸びるそれは腱のようにも見えるが、骨の動きを阻害しているの、手首は回らないし握り拳も作れない。

脛も同様だ。脛骨と腓骨の間に巻き付いたずっしりと重い鎖で、爪先が徐々に柔らかな土の中に沈んでいく。

「解剖学的ゼロ度?」

言葉を呟いても、顎が動かない。

水たまりに映った顔の三分の二が、翼を広げたコウモリのような金色の目で覆われている。

いや、頭全体が、黒と赤のヘルメットで覆われている。

「これ……誰?」

襟を立てたマントを羽織ったような、黒と赤の身体。

それぞれを鎖に縛られた、戦いからはほど遠い四肢。

「《運命サダメノクサリの鎖》?」

誰かの呟きが聞こえる。

「そうよ」

顔を上げると、嬉しそうな誰かの顔が見えた。

ステンドグラスのような細かな色の集合が、総体として誰かの顔に見えた。

傾げた首がむず痒い。

怪我をしている?!

「苦しいでしょう、ルビィ。でも安心なさい」

ルビィ?!

それは誰?!

「あなたの夜を、解放してあげる」

本当に?!

本当に、解放してくれるの?!

この苦しさから？

水に浸していた手を伸ばす。

「そうはさせないぜ」

その手が誰かの襟を掴む。

誰の手が、誰の襟を？

鎖がこすれる音がする。

*

千歌：《Orange, squash》、《シャンティ》。

曜：《浦の星少女隊》、《潮風^{セイ}sail》、《Sakuya》、《^{サンシャインズ}Lir》》、《SS's》。

花丸：《^{かのん}歌音》。

善子：《Kiseki》、《Palettes!》。

月曜日の昼休み、体育館付属の第二教官室である《浦の星女学院スクールアイドル同好会》の部室にて。

単語カードに書かれた言葉たちが、長机に並べられていく。

「色々集まったぞう！ グループ名！」

「あんまり挙げられなくて申し訳ないです」

「花丸はアイドルに疎いんだからしょうがないわよ。我らが同好会のフィジカル担当なんだから、ね」

「うん……」

「ヨハネさんのは意外と硬派だよな」

「こ、硬派って言う!? 堕天色を出さないの、苦労したんだからね!」

「てか、曜ちゃんがこんな神話オタクなんて思わなかったよ!」

「調べたんだよ。《μ's》って言ったら神様でしょ?」

「《コノハナノサクヤビメ》なんて、富士山の神様を引っ張ってるところは渋いです」

「お膝元だしね」

わいわいと騒ぐ先輩同輩を前に、

(居辛いなあ)

黒澤ルビイは肩身が狭い。

ルビイは元々、花丸と二人で屋上で弁当を食べるつもりだった。先

を歩く善子を見付けた時も、一人で食事をしたいと言う彼女に声はかけなかった。ところが下階から先輩方がやってきて、千歌の「花丸ちゃん！ ルビイちゃん！一緒に食べよ！」と曜の「ヨハネちゃん！ランチミーティングは部活の基本だよ！」で押し切られてしま

い。
気付けば、浦の星女学院スクールアイドル同好会のミーティングに加えられてしまったのだ。

「そういえば桜内先輩って？」

もふもふと《のつぽパン（クリーム）》を食べる花丸が問うと、
「学校お休み。病院みたい」

二段重ねのお弁当を広げる曜が答えた。

「調子悪いんですか？」

「どうなんだろう、どつちかと言うと病院の都合が色々あるみたいだよ」「いないと知らなきゃ、ここに来てないわよ……つと、理事長代理からテキストが来た」

コンビニ弁当のご飯をつまむ善子が、震える電話を見て言った。

「なんで番号交換してるの？ヨハネさん」

「い、色々あつてね……」

曜は口を動かしながら、新たな単語カードにシャーペンを走らせる。

「『Shinies』、『Stella』、『Spica』、『Soliel』……うん、光ものばっかだね」

「シャイニー先輩、『Shiny!』って言いたいだけじゃ
のつぽパン（みかん）を頬張る花丸の中では、鞠莉はすっかり『シャイニー先輩』になってしまったようだ。

「これで全部かな？ けっこうバリエーション出たよね！」
一四枚の単語カードを前に、千歌は海苔弁を口に含んだまま言った。

「そう？ 私には同じに見えるけどな」

「一番数出した曜ちゃんがなに言ってるの！」

「浦の星少女隊を出した人に言われたくないです」

「人のこと硬派とか言って、自分だって八〇年代じゃない」

「だ、だから、同じになっちゃうから出したんだってば」

千歌と花丸と善子に指摘され、曜は反論した。

会話を続ける四人の後ろから身を乗り出し、ルビイは目を細める。

五人が上げたグループ名は、大まかに四つに分類できる。

「神話系、光系、地域系、その他」

眩き、千歌と曜の間から手を伸ばす。

「じゃ、あとは多数決かな。理事長代理がいないと挙手が——ルビイ？」

単語カードを並び替える。

神話系——曜の《Sakuya》と《Lir》。

光系——曜の《SS's》、鞠莉の《Shinies》、《Stella》、《Spica》、《Soleil》。

地域系——千歌の《Orange'squash》、《シャンティ》に、曜の《浦の星少女隊》、《潮風sail》。

その他——花丸の《歌音》、善子の《Kiseki》、《Palettes!》。

そのうち、《SS's》をのぞく光系と神話系を右端によける。

さらに、千歌の《Orange'squash》、《シャンティ》と、その他の三枚を長机の真ん中に。

残りの《浦の星少女隊》、《潮風sail》、《SS's》を左端に並べる。

「ルビイちゃん？ どうしたの？」

のつぽパン（ピーナッツ）の封を切る花丸の声に、ルビイはハツと顔を上げる。

「え？ ……あ、あ！ ご、ご、ごめんなさい！ 勝手に動かしちゃって！」

ルビイが単語カードを元に戻そうと手を伸ばし——

「待ちなさい」

——縛ったビニール袋を置いた善子に、掴まれた。

「この分け方、説明してもらおうかしら」

「で、でも」

「意味があるんでしょ？」

善子の力は思いの外強く、ルビイの手は一ミリも進まない。

「う……」

そして三人の顔に見つめられれば、折れるしかない。

「も、もういるんだよう」

「なにが？」

「神話系も！ 光系も！ 《Orange, squash》も《シャ
ンティ》も《歌音》も！ 《Kiseki》も！ 《Palett
es!》も!! もういるんだよう！」

一拍ののち、四人が声を上げ、広くはない部室に反響し、ルビイは
耳まで赤くなつた顔を手で覆う。

ああ、居辛いよう……。

A

「去年《ラブライブ!》にエントリーしたグループって、七〇〇〇組
以上いたんだ。すごいなあ」

後部座席から前の座席の背もたれにもたれ、千歌が呟く。彼女の電
話にはグループアイドルがリストとなつて並んでおり、その総数は七
二二六組。

「今年度のエントリー予定は、今のところ四八五一組です」

「なによ、それじゃ並大抵の名前はあるに決まってるじゃん！ 先に
言つてよ、ルビイ！」

「ご、ごめんね、ヨハネちゃん……」

「スーパーバイザーをいじめちゃダメだよ。マルたちが最初に調べる
べきだったの」

後部座席の真ん中で足を組む善子から隠れるように、黒澤ルビイは
窓ガラスと花丸の間で小さくなる。

スクールアイドル同好会の三人は、海岸通りを走るバスに揺られて
三津海水浴場へ向かっている。

ルビイはスーパーバイザーとして善子に捕われていた。本当は、今
も後ろから追いかけてくるリズムジンで帰る予定だったのだが、押しの

強い千歌と善子がいると、幼馴染みの花丸がいてもルビイは負けてしまふ。

顔を上げると、普段はコンクリートの防波堤に隠れて見えない海が、バスの高い座席からは、遠く牛臥山まで見通せる。

綿のように千切れた雲が浮かぶ空が、内浦湾を穏やかに覆う様も、リムジンのスモークガラス越しのそれとは違う。

それが、ルビイには落ち着かない。

「なんたら少女隊も、けっこうあるね。これはどういうことですか？
スーパーバイザー！」

千歌に聞かれ、ルビイは車内に目を戻す。

「えっと、《少女隊》ってグループが八〇年代にいて、その響きがアイドルを思わせるんだと思います。《少年隊》は八〇年代から今も存続しています」

「曜ちゃんっぽい名前だと思ったんだけどなあ」

千歌は意外そうに呟いたが、ルビイにはなんとなく想像できた。衣装デザインで《μ, s》の『START:DASH!!』を参照し、話系のグループ名を提案したように、曜はアイドルに対して造詣が深くない分、逆に「アイドルらしいもの」を意識してしまうのだろう。それは長所でもあるし、短所でもある。

ちなみにその曜は、バスには乗っていない。今日は普段なら高飛込の練習日なのだが、先日の一件で壊れた水泳場はまだ直っていない&曜と花丸で週末に考えた振付けを発表するため、自転車で三津海水浴場へと先行しているのだ。

「μかのん” って音の名前もいっぱいあるぞら……」

花丸はさびしそうに、自分が一つだけ提案したグループ名を口にした。

「音楽記号や曲調の単語なんかは、一通り使われてると思うよ」
「神様系もだいたいあるなあ」

「当然です。《μ, s》——「文芸・学術・音楽・舞踏などを司る女神」の《ムーサ》に続くべく、神様や神話の人物の名前をつけるグループは多いんです。このアフターμ, s時代の三年間の統計をとったサ

イトによると、去年デビューのグループのおよそ半数が神話系だったと言います」

「半数!?!」

「すごい人気すらあ」

「二期、《ブラッディ・エルジエーベト》が頭角を現してきた時は、流れが変わると思ったんですけど」

「ち、《血の伯爵夫人》?! そんな墮天的な人いたの?」

「うん、でも本当に μ sの直後だったから、散々比較されて、メンバーが登校拒否になったりして、潰されちゃって」

今思えば、その世間の潮流にルビイも無関係だったとは思えない。それくらい、 μ sの影響力は大きかった。シーン全体がああ九人の呪縛下にいたのだ。

「ぬー、《ヘイムダル》もあるなあ。別名は……《リグル》か。どれどれ」

「リグル? それ、ユーチュンに載ってますよ」

「ゆーちゅん?」

ルビイはスクールバッグに乗せていた紙袋から、スクールアイドル情報誌《ユースフル・チューン》を出した。九人の女子高生が決めポーズをとっているグラビアページを開き、花丸に手渡して千歌に渡す。

「この人たちです」

「やっぱいるんだあ。ランクは——え? 福岡の新星で六一一位?」

「なのに浦女スクールアイドルの余裕、ただものじゃないぞら」

「余裕じゃないよ! 梨子ちゃんは歌のレッスン厳しいし! 花丸ちゃんの振り付けは難しいし!」

「難しくないです。渡辺先輩は完璧にマスターしてます」

「曜ちゃんは特別なの!」

花丸と言いかう千歌から雑誌を受け取った善子は、ページをめくってメンバーのバストアップを眺める。

「衣装は半手作りなのね。よくできてるなあ」

「それ、ほとんど既製品の魔改造だよ。ヨハネちゃんみたいに一から

作ってないんだよ」

ルビイが不愉快そうに指摘すると、善子は目をパチクリさせた。

「でも九人分揃えてるんだから、すごくない？」

「それはそうだけど、でもいくら揃えたってデザインはμ、sのコピーだし、曲だってμ、sの曲のチャンポンだし、ランクだって三桁の真ん中——」

「——ランク？」

千歌が呟き、ルビイは言葉を切る。

「ルビイちゃん、ランクってなに？」

「え、えっと、夏の《ラブライブ!》には、パフォーマンス動画があれば県大会に出られるんですけど、冬の《ラブライブ!》は本戦一発なので、県のランキングでトップを獲らないと出場自体できないんです」

「え?」

「皆さんは静岡県枠なので、昨年度で言うと……一三五組の中でトップにならなきゃいけません」

「え、ウソ! トップに!? 私たちが!」

「オラがトップ!」

「つて、千歌先輩、目指すは優勝じゃなかったの?」

「優勝なんて、そんな、ちかつちには荷が重いつて!」

「あ、あ、あの、トップは冬の話で、あの……」

前を見ると、ニコニコとこちらを見ているバスの運転手を鏡越しに目が合い、騒いでいるのは三人なのに、ルビイが恐縮してしまう。

だからスクールバッグに押し込んだままの球体が、微かに振動していることに、ルビイは気付かない。

*

黒澤ダイヤが来客を客間に通した時、反対の障子が乱暴に開け放たれた。

「タクー!」

座布団に座る間もなく入ってきた黒澤家の現当主が、丸い顔を綻ばせて客人の肩を叩く。

「ご無沙汰してるぜ、リン兄さん」

それに答えたのは、来客でありダイヤの叔父——黒澤琢朗だった。

「相変わらず黒いな。仕事してるのか？」

「兄さんこそ順調に肥えてるじゃないか。接待なんて俺の方が多いのじゃない」

「諦めてないんだよ、僕は」

「内定したんだろ？ 寿命が縮むだけだぜ」

「言っている。必ずひっくり返してやる」

四四歳の琳太郎と、三八歳の琢朗は、顔立ちこそ似ている。だが、家庭を持って宗家の党首となった長男は、白い肌にくよかな顎周りと体系をした、黒い袴の着物が馴染んだ初老となり、独り身で《黒澤重工》傘下のグループ会社を複数切り盛りする三男は、浅黒い肌に海水に痛んだ髪の毛、ビルドアップした肉体を覆う黒いシャツが似合う壮年のままと、内面も外見もまったく違う。

「しかし、何年ぶりだ？ ここに寄るのは」

「五年じゃないか？ ほら、松浦の兄ちゃんがさ」

「ああ……」

琢朗は言葉を濁し、琳太郎も頷くに留まった。

ダイヤも理解している。父の兄弟や若かりし頃の友人が、果南の父である松浦鏡一の葬儀ののちに、ここ沼津御用邸記念公園に集まったのを見ていたからだ。

「ではお父様、叔父様、失礼致しますわ」

「ああ」

「じゃあな、ダイヤちゃん」

茶を運んできた使用人と入れ替わりに、ダイヤは外廊下に出た。

（ちゃん付けですか。それこそ五年ぶりですわね）

と思っていると、廊下の角から現れた姿に目が留まった。

浦の星女学院の制服を着て、ツーサイドアップにまとめた髪を左右に垂らすのは、ダイヤの妹のルビィだ。

姉に気付いた彼女は、小さくお辞儀をしてから、小走りにやってきた。

「ただいま、お姉ちゃん」

「お帰りなさいませ、ルビイ。早かったのですね」

「うん、今日はルビイが役に立たない部分だったから。……お客さん？」

客室の中に気配を感じたか、ルビイは声を落とした。

「ええ、琢朗叔父様ですわ」

「おう、ルビイちゃん！」

柱に叩き付ける勢いで障子を開けた琢朗に、

「ピギイ！」

ルビイはダイヤに抱き付くように隠れてしまった。

「おいおい、どうした？」

「申し訳ありません、ルビイは現在、男性恐怖症なのですわ」

「い、言わないでよう！」

「そうなのか？ ちっちゃい頃は抱っこしてもらいに走ってきたのに」

「そ、そんなことしてないです」

琢朗が面白がるようにルビイの顔を覗き込もうとするが、ルビイは叔父から逃げるようにダイヤの周りを回る。

「おいおい、勇気ルビイの石ちゃんルビイが聞いて呆れるぞ」

「ルビイ、ちゃんと挨拶なさい」

「やめとけ、タク。しつこいと警備を呼ぶぞ」

父に肩を掴まれたところで、叔父は追求をやめた。父は笑っていたが、冗談ではない態度だった。

「分かったよ。ルビイちゃん、また今度な」

琢朗は頭を撫でようと手を伸ばしかけたが、それも諦め、父と共に障子の向こうに消えた。

「ルビイ」

「うう……。ごめんなさい、お姉ちゃん」

「謝るのは、わたくしにはありませんわ」

涙目のルビイの背中を押し、外廊下を歩く。

障子の向こうから、琳太郎たちのくぐもった声が聞こえてくる。

「どこまで進んでる?」

「あちらさんとは最後の調整中だ。来月にもプロトタイプが上がるだろう」

「よし、こっちは……」

やがて声は遠ざかり、林が静粛する表通りの喧噪が、意識に戻ってくる。

「叔父さん、なんだったの?」

「わたくしも分かりませんわ。……ルビィ、血縁関係にある男性とは、普通に接していたはずでは?」

「え、そ、そうだっけ? ルビィ、覚えてないよ」

ルビィは不思議そうな顔で見上げてきたが、

「そうだ」

と思い出したように手を合せた。

「ルビィのボディガードさんたち、今月も、先月までの四人がいいんだけど、ダメ?」

「……急にどうしましたの?」

ダイヤは首を傾げる。

「だから、ルビィのボディガードさんたち、変えないでほしいの」

「わたくしたちの一存では決められませんわ。黒総警の従業員が原則四箇月で異動になるのは、ルビィも知っているはずですよ」

「そ、そうなんだけど——」

「そもそも、あなたのボディガードは昨日すでに、交代されているでしょう」

「え、そうだったの?」

分かっているのに、先月の四人を要望したのか?

ダイヤは抑えた鼻息を漏らし、ルビィの背中を軽く叩く。

「安心なさい、ルビィ。怪人に襲われる頻度の高いあなたのために、今期は腕利きを集めましたのよ」

「……うん」

しよんぼり頷くルビィを見て、先月の四人にボディガード以外のなにかを求めていたのだろうか、とダイヤは心配になる。

「分かっているとは思いますが、ルビィ。ボディガードはあなたの友達ではありませんし、それ以上でもありませんわ。まして、あなたは黒澤家の人間。雇用者と被雇用者の形式を弁え、節度ある関係を心がけてくださいませ」

「分かっているよ、お姉ちゃん」

ルビィは答えると、ダイヤから距離をとるように早足で歩き出した。

ルビィの態度は不可解だ。彼女が求めるボディガードとの関係がどのようなものであれ、彼らは男性でもあるというのに。

「相変わらず、遠近感のおかしな男性恐怖症ですわ」

ダイヤは焦点をルビィから廊下の先の林に移し、夕食までの時間の過ごし方を考える。

第九話：震えてる手を握って ― 2

*

翌火曜日の午前一〇時。

「ねえ、ルビィ。リトルデーモン一号から四号は？」

津島家宅の居間に入ってきた黒服のボディガードを見るなり言った善子に、黒澤ルビィは目を瞬かせた。

「なにアホ面してんの、この前の人たちはどうしたのよ」

「ヨハネちゃん、分かるの？ 前の人と違うって」

「なに言ってるのよ。ああ、もう、また一から教えるの？」

善子は唇を尖らせたものの、すぐに「ううん」と口角を三日月のように吊り上げると、右手のひらで顔を隠すポーズをした。

「あなたたち！ 今日からあなたたちは、この墮天使ヨハネのリトルデーモン、六号から九号よ！」

壁際に並び立つ黒服四人は、横目で視線を交わした。

「まず、私のことを説明しておくわ。天界から追放されし私が地上で活動するこの現し身をね。通常、人間たちは津島善——」

「——ヨハネちゃんって言うんだよ！」

善子の自己紹介に横から割り込んだ。

「ちよつと、ルビィ！」

姉も言っていたではないか、「雇用者と被雇用者の形式を弁え」と。

新しいボディガードの主導権を、今度は善子に握られるわけにはいかない。

「いい、みんな。ヨハネ様って呼ぶように！」

ルビィが宣言すると、クルーカットの男たちは直立したまま頷いた。

いい感じだ。これならリトルデーモン化したとしても、ルビィと善子の力関係は理解してくれるはず。

「うん、まあ、いいわ——」

善子は咳払いをして口調を整えた。

「なんか最近、みんな「ヨハネ」って呼んでくるのよね。墮天使とし

ての魔性が、このアバターから溢れ出てるのかしら。あなたたちも感じる？ 我がリトルデーモンたち——あ、ちよつと待って」

反応に困るボディガードを放置し、善子は墮天使キャラの途中から電話の画面を指で触り始める。

「うわ、梨子先輩、マジでウチに来るんだ……」

「ゴールデンウィーク中、各セクションをチェックして回るみたいだし」

「なに、その桜内社外取締役みたいなの。まったく、なんとか避けてきたのに……」

「なんで？ 梨子先輩って怖い人なの？」

「怖いって、あの悪魔みたいなの——話したことない？」

「だって、ルビイは衣装のお手伝いで、梨子先輩は作曲だもん」

「接点なかったんだ。まあ楽しみにしてなよ。じゃあ、右から順に、フルネーム」

「辰本迅です」

不意の展開に、ルビイはなにが起こったのか分からなかった。

「ジンね。はい、次」

「来間急一です」

「クルマ？ Qちゃん？」

善子は四人のボディガードから、名前を聞き出しているのだ。

「あ、あー！ 守秘義務！ 守秘義務う！」

ルビイが慌てて両手を振るが、もう遅い。

「申し訳ない。墮天使にはその権限があると思った」

「墮天使だけど、ヨハネちゃん是一般人なの！」

「ほらほら、二人も四人も同じでしょ、あんたたちも」

「ダメなの！ ダーメーナーのー！」

雇い主の娘にとめられ、ボディガードは口を開かなかつた。

「まあいいわ。私、人の名前、覚えるの苦手だし」

と善子は壁際に向かい、長押から四枚の能面を外して回ると、ボディガードに手渡した。

「かけて」

「はい？」

「被って、って意味よ」

黒服はさすがに動揺したか、ルビイの顔を見た。ボディガードが身辺警護業務中に顔を覆ってしまうのは、問題があると思っただろう。いや、そもそも――

「――ヨハネちゃん、あのね、この人たちはね、ルビイのボディガードなんだよ。ヨハネちゃんが勝手に命令しちゃダメだよ」

「私のウチなら、そんな用も起こらないんじゃない？ てか、ここで張ってるんだって、ルビイが私の手伝いをしないか見張るためなんですよ？ なら、私がうっかりルビイに命令しないように、黒服に命令したって構わないんじゃない？」

「え？ そう……なの？ そうなのかなあ」

「はい、じゃあ決まり。かけてかけて」

ルビイが曖昧な返答をしてしまったものだから、黒服は被らざるを得なくなってしまった。

そして善子の顔を隠すポーズのように、黒服が能面を被っていくと、津島家宅の居間に異様が出現した。

男性でも女性でも黒服でもない、名状しがたいなにか。

いや、その名前は決まっているのか。

「よしよし、じゃあ今日からあんたたちは、ヨハネのリトルデーモンよ！ その名も、六号《ジューロク》、七号《カンタン》、八号《マスカミ》、九号《シャクミ》！」

あ、個別の名前まであるんだ。

「デーモンって言うには、ちよっと和風テイストすぎるけど、ま、似たようなもんでしょー！」

十六、邯鄲男、増髪、曲見の面は、どれも形だけの安物だが、普通のアパートの一室における異質さは、仰る通り、悪魔と大差ない。

「あの、僕の面、女面ですよね？」

「これもだよな」

マスカミとシャクミが善子に問う。

「男面が少ないのよ、見れば分かるでしょ？ それとも、なに？ 全員

女面で統一する？ ジューロクとカンタンを真蛇しんじやと生成なまなりに変えればいいんだけど？ それともあんたたちだけ鬼神面にしようか？」

そう一息に言うのと、黒服は離れた仲間をそれぞれ見比べた。

「本気でこれでやる気か？」

「俺に質問するな。なにも問題はない」

「お前は男面だから、そんなことが言えるんだ」

不遜の欠片もないジューロクに、乱れ髪の女面で喋るマスカミは不服そうだ。

「お前たちも、これでいいのか？」

「口を慎め、堕天使ヨハネ様のご意志だぞ」

「お前はなにキヤラなんだ？」

「お面があつたら戦えない、つてわけでもないだろ？」

「それはそうだが……」

カンタンとシャクミに言われ、結局マスカミは渋々と背筋を伸ばして基本姿勢に戻った。

「じゃ、いいわね。今日からあんたたちはこの堕天使ヨハネのリトルデーモンとして——」

と、玄関のチャイムが鳴った。

「——ああもう、またしてもヨハネの演説をぶった切るとは、流石は堕天使リリー。シャクミ、出てきて。三人はテーブルとソファをどけて、トルソーをここに。あと……その紙袋の中のプリントアウトを番号順に広げて」

しゃくれ顔にえくぼの女面の黒服が廊下に消え、残りの三人も動き出す。

その光景が、ルビィには信じられない。

「ルビィのボディガードが、リトルデーモンとして善子に使われる」という点は、先月と同じだ。

だが「能面を被せられる」というステップが加わったことで、黒服の男たちは「ルビィのボディガード」という記号を完全に剥奪されてしまった。

もちろん、それは「形だけ」だ。

だがその「形」により、今や彼らは、「ヨハネのリトルデーモン」以外のなにものでもなくなった。

これこそ、姉が弁えろと言っていた「雇用者と被雇用者の形式」の逸脱ではないのか？

ルビイは背筋が凍る思いがする。

そんなことを考えながら、ルビイは自分の裁縫道具を広げて自分の小物の作業を始めようとしていたから、状況の把握が遅れてしまった。

今、誰が梨子を迎えに行った？

「よ、ヨハネちゃん、あれってまずいんじゃない？」

「——ぎゃああああ!!」

玄関から聞こえる絶叫にきつく目を閉じ、ルビイはフォーメアが産まれていないか気が気ではなかった。

*

的場より二メートル離れた射位にて、甲矢の矢筈を番える。板張りの床を足袋の足指で掴み、弓を頭前方に厳かに掲げ。ゆつくりと息を吸い、左手で弓を圧して、右手で弓弦を引く。ゆつくりと息を吐き、弓を引き分け、番えた手を目の高さに
会。

一秒。

二秒。

三秒。

頬付けする矢柄の感触、弓幹と弓懸越しに掴む弓弦との応力。矢尻の先、直径三六センチから始まる同心の円の中心の一点。後方に五度傾いて立つ的に向け、右手の三本の指を解放——

四秒。

五秒。

六秒。

——解放——

七秒。

八秒。

九秒。

「——してよう……！」

一〇秒。

一一秒。

一二秒。

離れ。

矢羽根が頬をかすめ。

一瞬後、矢が立った。

的枠の横の、安土に。

「ありや」

正面の審査員席から発された声を耳に、一番射手の黒澤ルビイは気を取り直して息を吸う。

(ダメだダメだ、冷静に、冷静に……)

額を流れる汗を拭わず、弦に二射目の乙矢を番う。

(甲矢の時は、いい感じで集中できてたのに……)

背後で、二番射手の弓が軋み、その緊張が張り詰め——

——たん、と矢が的の中心に中った。

「おおー！」

普段ならしないはずの喚声に耳を奪われながらも、乙矢を番えた弓を引き分ける。

(今度こそ！)

意気込み、矢柄に頬付け。

待つ。

……指が弓弦から離れない。

(なんでよう！)

意図しない間ののち、矢尻は芝生の矢道に刺さり、木製の矢筈が矢柄の先で揺れた。

「うーん」

声を気にしないように前屈し、足元に置いてある二手目の矢に手を伸ばす。が——

(あ、あ、あれ)

——掴めない。

(ど、どうしよう、早く拾わないと、ルビイの番が)

焦れば焦るほど、矢を掴めない。

と思っている間に、だっ、と矢が的を貫く音が聞こえた。

二番射手が乙矢を射つたのだ。

本当なら今頃、二手目の甲矢を番えにかかっているのに。

「焦るなー！」

審査員席から野次が飛んでくる。

弓懸の付いていない薬指と小指に神経を集中するも、細い矢柄はルビイの手元からこぼれていく。

「ルビイ」

ついに声がかかった。

振り返ると、白筒袖の弓道衣に胸当てをしたダイヤが、ルビイを見下ろしていた。

冷たくも熱くもない切れ長の双眸の姉に、ルビイはうろたえる。

「お、お姉ちゃん、ごめんなさい、今拾うから」

「焦らなくて宜しいですわ」

その一言で、心臓が爆発しそうになる。

正面に目を戻すと、一段高くなっている審査員席に座っているゴシック&ロリータ服の善子が、顔の前で弓を引くような仕草をして、「がんばルビイ！」と小声で言っている。

(もう、ヨハネちゃん！)

怒っているのか笑っているのか考えている間に、二手目の甲矢と乙矢が右手に収まっていた。

(よ、よし、次！)

立ち上がり、改めて足踏みして足を開く。

今日は水曜日。

ルビイは午後から津島家宅での作業の手伝いをするつもりだったが、だが昨日の弓道での行射があまりに芳しくなく、紅谷師範からお叱りを受けてしまい、自主練習に変更したのだが、その連絡を受けた善子が「じゃあ見学させてよ」と沼津御用邸記念公園にやってきて、さら

に準備をするルビイを見たダイヤが「久々にご一緒致しますわ」と言い出したゆえに、三人で公園内に併設された弓道場に赴くことになったのだ。

弓から離れて久しい姉に、成長した自分を見せられる、と張り切っていたのに。

「落ち着けー。落ち着いて敵を狙うのよー」

(敵なんていないよう!)

四立ち八手一六射の矢は、残念、いずれも的を射ることはなかった。

*

「コンパウンドボウでも買おうかしら」

「え!? お姉ちゃん、洋弓に行っちゃうの!?!」

黒澤ダイヤはうっかり声に出して、耳聡いルビイを反応させてしまった。

肩越しに振り返ると、生成りの上衣に黒い袴という和装の妹は、黒い私服を着た友人と肩を寄せてダイヤを見ている。

「一応言っておきますが、ルビイ。わたくしは二年前に和弓をやめているのですよ。今日のはただの懐古です」

「そうだけどう」

「そちらのヨハネさんを誘った方が、まだ分があると思いますわ」

「私!?! ……うーん、やっぱ、そういう道系で鍛えてなきや、ダメだったのかなあ」

厚底のローファーをゴツゴツ言わせて歩く善子の返答は、ダイヤが予測していた「この墮天使ヨハネに近代兵器は似合わないわ」とは逆で、

「殊勝なところもあるようですわね」

と驚きを呟いた。

樹冠の隙間から午後の穏やかな光が差し込む中、ダイヤと二人は、沼津御用邸記念公園の飛び石の小道を歩いている。弓道場と、ルビイたち黒澤家が住んでいる公園の管理事務所を結ぶ道だ。

ルビイと同じ弓道衣を着たダイヤは、松林を揺らす穏やかな風を切り揃えた長い髪で感じ、土手を隔てた向こうから流れる微かな波音を

聞き、そして流れ込んでくる潮の香りを味わう。胸当てや弓懸に弓は弓道場に置いてあるので、足袋に草履を履いた足取りは軽い。すり足でも軽いものは軽い。

公園は新緑の色に覆われ、すっかり“初夏の候”の顔だ。静岡県の花であるツツジの香りがほのかに漂い、足元には仏炎苞の中に花序を密生させるウラシマソウの群生があり、頭上では様々な種類のフジが花を咲かせ、組んだ竹の上から総状になって垂れ下がっている。そのさらに上からはツバメやオオルリのさえずりが降ってきて、土から木からは小さな昆虫や動物が顔を出し、つられたか、まだ日も高いのに、木々の合間に一匹のコウモリまで見えた。

ダイヤの記憶において季節の変遷は、この公園の変化と結びついていた。五月四日も例年通り、自然の循環の一日としてすぎ、記憶に懐かしい明日がやってくるだろう。ダイヤ本人には今年も様々な変化があつたにもかかわらず、だ。

(人間のこことなど気にせずに戻り続ける無責任なシステム、ですか) そう口にした少女の顔を思い出す。

当の本人こそが、自分のワルツに他者を巻き込んでいく世界のシステムの側なのに。

そんなことを考えて目を細めていると、

「しかしまさか、ダイヤさんまで撃ちに来るとは思わなかったよ」

善子の内緒話が聞こえてきた。

「私が来たから？ この前、啖呵切ったから、当て付けで来たのかな。あー、なんであんなこと言っちゃったんだろ」

ルビィへの耳打ちのようだが、ダイヤの耳にもしつかり届いている。

「ううん、お姉ちゃん、『武器の練習をしようかしら』って言ってたから、それだと思う」

「物騒な……、って、怪人のために？」

声量が段々上がってきた。

「弓で？ ええ、ダメだよ、中つたら痛いよ」

「殺すんだから、そりゃ痛いわよ」

もうすっかり普通の口調で話している二人に苦笑する。

とはいえ妹が友人と話しているのだから、姉がその話題に能動的に入るのも不躰だ。

が、

「でも、ま、ダイヤさんが全部撃ち殺してくれるなら、沼津も安泰よね」

勝手な期待を抱かれては、

「待ってください、わたくしは弓道で怪人とやり合うつもりはありませんわ」

さすがに割り込まざるを得ない。

「だって百発百中だったじゃん」

善子の言う通り、ルビイとの四立ちで行った一六射は、皆中だった。

仔鹿の革で作られた弓懸越しに、親指が弦に引つかかる感覚は、二年振りでも忘れていなかった。

うち一手は継矢ひとてが起こり、甲矢の矢筈を乙矢の矢尻が打ち抜いて、ダメにしてしまったほどだ。

その成績自体は当然だ。黒澤家の人間として、「やるからには勝つ」の精神で生きてきたのだから。

それでも。

「中てられることと使うことは別問題です。わたくしに弓道は合いませんから」

「なんで？」

敬語を使わない善子をスルーしつつ、ダイヤは相応しい言葉を見付ける。

『Be water, my friend』

「え？」

『水になれ』、ですわ」

「ブルース・リーさんの言葉だよ。『心を空にして、形を、型を捨てなさい。水のように』」

妹の発言は正しい。ダイヤは頬を持ち上げる。

「心を鍛えるための礼であり道である、武芸の効力は分かりますわ。わたくしも日本舞踊を続けておりますから。ですがわたくしは、戦い

を『型』に落とし込みたくはないのです」

「でも、素手よりダメージは与えられるんじゃない？」

「中てられれば、ですわ」

気付けば距離の縮まっていた二人の後輩を、ダイヤは一瞥する。

「和弓の最大の弱点がなにか、ご存知ですか？」

「え、えつと……。え？ なにかあるの？」

ルビイの発言に、ダイヤはまたも頬を持ち上げる。今度は苦笑で。

「ヨハネさんは？」

「ん……。弦の正面に、弓があること？」

「その通りですわ。矢を押し出す弦は、弓の中心に向かって戻っていきます。ですが、矢は弓の横に接しています。その原理ゆえに、矢は狙いの右に飛びます。これを回避するために、人間の経験と正確な技を求めるのが和弓なのですわ」

「へえー！ よく知ってたね、ヨハネちゃん！」

「へっへーん」

意識しないで弓を引いていたルビイの方が驚きだ。

「対してハンティング用途の洋弓は、弓に矢を通すウィンドウを開けることで、その問題を解決しています。他にも、弦をカムにかけることで弓のサイズを抑えつつ、小さな力で引けるようにしたり、スタビライザーで弓にかかるモーメントを制御して命中精度の向上を図ったりと、様々な工夫が盛り込まれているのです」

「お、お姉ちゃん、いつもより横文字多めだね」

咳払い。

「いずれにせよ、精神集中と人間の高い技術を要求する和弓では、素早い怪人を狙うには不利です。火薬を使わない高殺傷力を有する武器を求めるなら、洋弓——コンパウンドボウ、またはクロスボウが相応しいでしょう」

「へえ、けっこう合理的なのね。『死んでも和の精神は護りますわ！』とかだと思ってた」

「人の命を護るのに、精神もクソもありませんわ」

「お姉ちゃん、言葉遣い！」

「おっと、ごめんなさい」

「もう、いつもルビイに怒ってるのに」

姉妹のやり取りに笑った善子は、一息ついて、

「じゃあやっぱり、戦う気は戦う気なんだ」

と真面目な口調で問うた。

「鞠莉さんも戦っていることですしね」

相手が怪人だろうと世界のシステムだろうと、あの少女が戦わないものはない。

「それ、張り合う必要がある？　いくら黒澤家VS小原家だったって、得手不得手はあるでしょ？」

「張り合いではありません。『ノブレス・オブリージユ』の問題です」

「のぶ…は…?」

「マルちゃんが言ってたんだよ、えっと、『メシタカケレバ、クライメシ』とか、そんなヤツ」

そんなヤツではない。

「なにそれ、便所飯？」

『資質のある人はみんなを護りましょう』、って意味だよ」

解説は合っている。

「へー、お偉い人は、やっぱ違いますのんね」

「含みを感じる言い回しに聞こえますが、津島ヨハネさん」

「別にー。ん、じゃあルビイも戦うの？」

「ルビイも!?!」

思ってもいなかったような声色で、妹は明らかに動揺していた。

「でもでも、ルビイ、弓しかできないし」

「弓で強い人なんてたくさんいるじゃん」

「そうですね、コンパウンドボウはランボーも使っていますのよ」

「そうかどうか」

「あいつもだよ、ほら、えっと、ホークアイ」

「ジェレミー・レナーさんの？　かっこいいよねー!」

「まったくルビイは、ド派手アクションCGてんこ盛りビッグバジェットAAA作品ばかり見るのですから」

「『ランボー』だって同じじゃん！」

「『ランボー』一作目はアメリカン・ニューシネマの小品ですわ！」

「『アベンジャーズ』だって9・11以降の非対称戦争の脅威を——」

「——ケンカしないでよう！」

ルビイが割って入り、ダイヤは我に返った。

なにをしているのだろう。公園の小道で立ち止まって、映画の話で怒鳴りあうなど、黒澤家の風上に立つ自分にあるまじき行為だ。

善子もそう思ったか、二人は目を合わせて笑いをこらえた。

「だいたいルビイ、弓だって戦えないよ、昨日なんて二割も中らなかつたんだし……」

ルビイが歩き出し、善子はダイヤに歯を見せると、レースのスクートを靡かせて彼女を追った。今度はダイヤが二人を追う格好になる。「ねえ、それっぽいフォームなのに、なんで中んないの？」

「いざ会になると、もたつちやって、なかなか離れにならないんだ」

「カイ？ ハナレ？」

「あ、ごめん。矢を射ろうとして、弦から手がうまく離せなくなっちゃったの」

「静まれ！ 俺の右手！」

「そういうんじゃないよう……」

善子はわななく自分の右手を左手で掴み、ルビイは口を尖らせている。

「少し前は、ちゃんと離れてただけだな」

「まあ、よく分かんないけど、気合じゃない？ 技名でも叫んでみれば？」

「？」

「技名って？」

「《ブラッディ・マーニ・スパイク》！ とか」

「なにそれ」

「この前地獄の門番より伝授された、墮天使ヨハネの遠距離攻撃よ。赤き月が真円を描きし時、彼の心臓は血に飢えた牙の餌食にならん——」

と、善子は右手で矢を横し、左手で弓を引く動作をしてみせる。

「欲しい？」

「いらぬ」

「なんでよ！」

「地獄の門番って、ケルベロスさん？ 伝授って、ヨハネちゃんより偉いの？」

「えっ!? それは、まあ、ほら、吸収したのよ、相手の技を！」

「ふうん」

「と、とにかく！ 気合よ！ 気合！」

やはり「もたれ」か、とダイヤは思う。

射場でルビイの立ちを二番射手として背中から見ている限りでは、射に関する能力に問題があるとは思えなかった。肉体的にも、何十メートルも先まで矢を飛ばす弦を、数十秒間かけて引きながら維持する持久力は、ダイヤより高いはずだ。見た目がいかに細く小さくても、筋肉量を反映した体重がそれを証明している。

にもかかわらず会から離れにいかないのは、精神的な問題が大きいだろう。いわゆる「イップス」というもので、ゆえに善子の言う通り、気合も影響しそうとは思っただが。

しかし、コロコロ声の調子を変える善子に、ルビイが笑いかける声は朗らかだ。なにかと母のように説教をしてしまうダイヤが久しく聞いていなかった声色で、黒澤家の束縛され、小動物のように縮こまったルビイだけが妹ではないのだ、と改めて思い起こさせる。

「お姉ちゃん？」

前を歩くルビイが、上気させた顔でダイヤを見つめてきた。

「はい？」

「なんでルビイの服、見てるの？」

言われ、飛び石を歩く妹の身体をジロジロと眺めていた自分に気付いた。

(なにをしているのですか、わたくしは)

焦る。「自信を出せばいい結果が残せるはずですわ」が正直なところだが、それは黒澤家の姉として問題がある。

だから、

「この道着もルビイが着ると可愛い、と思っただけですわ」と口走った。

「え？」

ルビイが首を傾げ、

「へえ」

善子がニヤツと笑うのを見て、ダイヤは別種の失言だと気付いた。「なに、ダイヤさんって案外、ルビイちゃんラブだったりするの？」

「ち、違いますわ！ そういう意味ではなくてですね！」

妹に続いて顔に赤みが登ってくるのを自覚し、どう言い訳しようかと考える。

「だって、その道着は可愛くないでしょ？ でもルビイが着ると可愛いんですよ？ それって『ルビイが可愛い』って言ってるも同然じゃない！」

「そ、そうではなく——」

「——可愛くない？」

「それでもなく——」

「——和風の衣装！ 可愛いかも！」

渦中の人は、まったく別方向の発言を繰り返した。

「和風のアイドル衣装は多いけど、道着のアレンジって中々ないんだ。うん！ 素足で武術の型を取り入れるダンスとか、草履でしつとりした曲にするとか！ 楽しそうじゃない？ ヨハネちゃん！」

「え？ いや、そんなことして、その道の人に怒られない？ あ、ヤクザさんじゃなくてね」

話を振られた善子は、ルビイとダイヤの顔を見比べながら言った。「平気だよ、師範に聞いてみよー」

さつきまでの落ち込み方がウソのように、ルビイは軽やかに小道を進んでいった。

ダイヤは横に並んだ善子と含み笑いを見せ合うと、並んでその後ろを歩きます。

そして、自分が笑っていることに気付き、驚いた。

こんな風に取り止めのない会話をして、作り笑いではない笑みを浮

かべるなど、肉親でさえ久しくなかつたことなのに。

墮天使を自称する彼女も、世界のシステムに真つ向から立ち向かう人間であり、その世界観で誰彼構わず振り回せる人間なのだろう。

やがて公園の管理事務所の外壁が、木々の向こうに見えてきた。

そして、その出入口に藍色の和服を着た女性を見つけた時、

「お母さん」

ルビイの足がとまった。

第九話：震えてる手を握って ― 3

*

細い眉に長い睫、真つ直ぐに切り揃えられ、後頭部でまとめられた艶やかな黒い髪。

日本人形のように美しく、そして感情の感じられない切れ長の双眸。

黒澤ダイヤが日に日に似てきたと感じている、自分と同じ種類の顔立ち、そして顔付き。

「あれが黒澤瑠璃さん」

善子が口にした通り、それが黒澤宗家現当主のご寮人だ。

「弓の稽古をしてきたのです?」

顔が見える距離になって、瑠璃がルビィに言った。

「そ、そうなんだ。昨日、師範に怒られちゃって」

「何射引いたの?」

「え、えっと、一六射」

「中てたのは?」

「え……」

瑠璃は表情を変えず、こちらに歩き出した。二本歯の下駄が飛び石を踏む音が、海風で揺れる林に響く。

「中てられたの?」

「お母様」

ダイヤは思わず諫めたが、瑠璃は気にせずルビィの目の前で立ち止まる。

ルビィは、震えを押しさえるように重ねた手に目を落とし、首を振った。

「中てられなかったです」

瑠璃が手を上げ、ルビィは身体を硬くする。

「そう……」

だがその手は、娘の頭に置かれた。

「聞きましたわ、怪人の話。この一箇月、何度も狙われてたのね」

言葉に反して、その声に感情の色はない。

ただ機械仕掛けの人形のように、規則正しくルビイの頭を撫でている。

「う、うん、でも、みんな護ってくれたよ。先輩も、先生も、仮面ライダーも、ロリポリも」

そう、ルビイはこの一箇月で、何度となく怪人に襲われ、その模様が大量にWebにアップされていた。「怪人は黒澤家の跡継ぎを殺す、小原家の生物兵器」という言説も、ここ数日でまことしやかに囁かれるようになったほどだ。

「でもね、もしルビイが強くなって、怪人を倒せたらね、ルビイだって――」

「――やめなさい」

「え？」

ルビイは頭を上げた。

瑠璃の無表情が、その視線を受ける。

「なんで？ ルビイが戦えれば、誰も怪我しないですむんだよ？」

「あなたは誰も護れませんわ」

母はにこりともせず娘から手を放し、その横をすり抜けた。

ダイヤは微かに目を伏せ、歩き出す。

瑠璃とすれ違い、ルビイに追い付き、その背中に触れる。

「お母様の言う通りです。怪人と戦うためには、特別な訓練が必要ですよ。だから仮面ライダーというものが――」

「――そんな言い方、ないんじゃない？」

その低い声色が誰のものか、ダイヤは分からなかった。

「瑠璃さん、瑠璃さんでいいんだよね」

飛び石で構成された細い小道を留め立てするように、善子がダイヤたちの母の前に立っていた。

「ルビイだって自分のやれること探してんのよ。それを、なに、よくもそんな簡単に、諦めるなんて言えるわね」

「い、いいんだよ、ヨハネちゃん」

「よくない！ ルビイを雁字搦めにして、なにがしたいのよ、あんた

！」

「ヨハネさん、これはわたくしたち家族の話ですわ」

「ルビイの話よ！」

割って入ったダイヤの言葉をも、善子は叩き落とす。

「ダイヤさんもダイヤさんよ！　今の瑠璃さんの言葉聞いて、なんとも思わないわけ!?!」

瑠璃はなにも言わず、無表情で善子を眺めている。

「ああもう、イライラする！　こんな……こんな時代錯誤な家！　来るんじゃないかった！」

善子は吐き捨て、小道を外れて林の方へ向かう。

「ヨハネちゃん！」

だが善子が林の中に入る直前、

「津島善子さん。善子さんでいいのですよね」

瑠璃の言葉で、その足をとめた。

「話には聞いていましたわ。我が分家にさえ相応しくない、鬼子である」と

感情のこもらない口調に、ルビイが息を呑む。

「それも当然ね。あの路傍の小石のような津島幸子さんが一人で育てたのですもの」

ローファアの厚底が、青々とした下生えを踏む音がした。

「ヨハネよ」

揺れる切り揃えた長い髪と側頭部のお団子で、顔は見えない。

辛うじて、瑠璃に向けられた唇だけが見えた。

「私は墮天使ヨハネ。天国の奴隷であるよりも、地獄の支配者であることを選んだ反逆者。間違えないで、瑠璃さん」

瑠璃の唇が持ち上がる。

この場にあつて初めて見せた、上品な紅に乗せた感情の形。

「資質に自信ない人間ほど、格付けにこだわるものよ。ヨハネさん」
ややあつて、

「ルビイ、もう来なくていいから」

善子は林の中に走り去った。

ルビイは数歩追いかけたが、立ち止まってしまおう。
瑠璃はまた無表情に戻ると、小道を歩いて行く。

ダイヤは――

(おこがましかったですわね)

――反逆されるべき世界のシステムの側に、自分がいることを自覚した。

*

太鼓のバチを筐体のホルダーに叩き込み、名も知らぬカードアークードゲーム筐体の椅子に腰を下ろす。

汗が顎を伝い、白いフリルの上にポタポタと垂れる。

何曲プレイしたか、気付けば曲の途中で腕が上がりなくなっていた。

市内を走り、ゲームセンターで太鼓を叩きまくった過程で、善子がまとっていたゴシック&ロリータ服はぐちゃぐちゃになっていた。

「熱くなってるね」

ペットボトルが差し出された。

顔を上げると、小太りの男性店員が目を細めて立っていた。

「ありがとう」

店員に飲み物をおごってもらうのはどうかと思っただが、汗をかいた身体は水分を欲しがっていた。受け取り、封を切ると、スポーツドリンクの爽やかな酸味が漂う。口を付けてガブガブと飲む。

店内は閑散としており、店員は暇つぶしののように、ゲーム機のディスプレイを拭き始めた。ダークブルーの制服の収縮色で、辛うじて標準体型に見えるが、頬を持ち上げる肉は隠しようがない。

「最近来てなかったけど、なにかあった?」

彼は、善子が中学校の頃に常連になった時には既に、このゲームセンターでアルバイトをしていた。学校に友達のいない善子にとっては、この一箇月で花丸やルビイと知り合うまでは、ほとんど唯一、気楽に話せる他人だったと言える。

「うん、ちょっと」

立ち上がり、腕と肩を動かしてみる。ゲームとはいえ長年太鼓を叩

いているだけあって、腕——特に前腕はかなり鍛えられてはいるが、ダンス向きの身体とはいえない。格闘技経験者の千歌や高飛込選手の曜とは、比べるべくもないだろう。

コインを入れ、画面も見ずに曲を選択。

右から流れてくるノーツを、二本のバチで叩き落とす。

(どうにかしないと)

なにを？

自分の気持ち整理できない。

ダンスのこと？

体力のこと？

花丸のこと？

ルビイのこと？

ダイヤのこと？

瑠璃のこと？

母のこと？

父のこと？

ヨハネのこと？

バチを握る指に力を籠める。

出どころ不明の液体が飛び散る。

やがて、ゲームは終わる。

「リリー……」

一つ上の少女の名前を呟く。

どうすれば瑠璃に、いや、黒澤家に負けない強さを得られるのだろうか。

ブランキアに変身する少女は、その答えを知っているのだろうか。

燃えるように熱を帯びた前腕が、袖の中で震えている。

*

太陽が水平線に消えてからのわずかな間、光と影が混ざり合う魔法のような世界が訪れる。

神々しいまでの金色の光に満ちたその時間を、撮影用語でマジックアワーと呼ぶ。

指で作ったフアインダーに収めた駿河湾は、鮮やかな空の色を映して橙色に光っている。

打ち寄せる穏やかな波は、波打ち際の砂浜を海に引き込んで返していく。

昼と夜の間。

海と陸の間。

「あーあ」

土手から島郷海水浴場の砂浜へ降りるなだらかで幅の広いコンクリートの階段に、黒澤ルビイは腰を下ろしている。

弓道衣からブラウスと桃色のパンツに着替え、裁縫道具と小物の材料を手ここに座ったのは、もう何時間も前だ。

それから、生地を裁ち、縫い、綿を千切り、詰め、手を動かし続けた。

父からも母からも、ダイヤからも連絡はない。

ボデイガードにも、土手の向こうに引いてもらっている。

誰の顔も見たくなかった。

なにも考えなくなかった。

そして今、水平線の下太陽が名残惜しそうに投げかける金色の残光の中、月もとつくに沈んでしまった空に、小さな丸いコウモリのぬいぐるみをかざす。

「ヨハネちゃん、やつぱり、黒澤家の人だったんだよね」

納得するように、呟く。

数年前、とある黒澤分家の長男が離婚した話は、その配偶者の姓が「津島」だという情報も含め、ルビイの耳にも入っていた。

だから、善子が「宗家」と口にした時。

生徒会室でダイヤに怒りを爆発させた時。

そうなのかな、とは思っていた。

でも善子が気にしていないように見えたから、ルビイも気にしないようにしていたのだ。

なのに、こんなことになるなんて。

「せつかく、友達になれたと思ったのにな」

両手をコンクリートにつき、背後を眺める。

残照に照らされて見えるのは、海岸に沿って広がる沼津御用邸記念公園の木々の梢だ。「黒澤家」の名の下に沼津の血を吸い上げ、ルビイの手足を縛る、ぼんやりとした組織の本拠地を隠す緑のカーテンだ。

自分がそこに組み込まれていることを、ルビイは強く意識する。

もしルビイが宗家の娘ではなくて、善子が元分家の娘でなければ、善子はあるな風に怒ったのだろうか。

もしルビイが――

（――ううん、違うよ）

家なんて、ただの言い訳だ。

パンツのポケットをさぐる。

白玉団子のようにさらっとした手触りなのに、海水のように心地よい冷たさを感じ、つまみ出す。

花丸が召喚した妙法寺の本尊と同じと思しき、ロリポリ・フォーメアとパイルアップ・フォーメアを産み出したものと同じと思しき、謎の物体。

プールで果南に渡された、正八面体を内包した淡く光る球体。

『戦え』、か……』

姉の友人は、ルビイにそう言った。

母がどんなことを言っても、ルビイに毅然と立ち向かう姿勢があれば、善子はあるなことを言わなかったはずだ。

相手が誰だろうと正面から自分を叩きつける善子。

それと並び立つに相応しい力が、ルビイにあれば。

「ルビイがもつと……もつと強かったら……」

涙が滲んできて、頭を軽く振る。

ここにいたら、こんなことばかり考えてしまいそうだ。

裁縫道具をしまい、材料を手提げ袋に詰める。

そして立ち上がり――

「ん？」

――波打ち際から少し離れた海面に、不自然な波紋を見て取った。

「お魚さんかな？」

ルビイは荷物をそのままに、幅の広いコンクリートの階段を降りる。

砂浜まで来た時、波紋の中央になにかが見えた。

海草のように広がった、黒々としたなにか。

「……髪の毛？」

ルビイが呟くと同時に、それがするすると海面に立ち上がった。

「ピ……！」

ルビイは息を詰める。

海面から飛び出したそれは、明らかな人の形をしていた。

まるで父親に無理矢理見せられた『リング』で、井戸の中で立ち上がった山村貞子のようなだ。

黒檀のような濃淡のある髪を頭から首までに張り付けさせ、砂浜に歩いてくる。

金色の光に満ちた世界に、その光景は異常だった。

だがルビイは、恐怖を感じていない。

逆に、一歩、その人影に近づく。

「お母……さん？」

無意識に呟いたその言葉が、自分でも信じられない。

だが、その人物は重そうな両腕を持ち上げ、自らの髪をかき上げ――

「ルビイ」

――黒澤宗家のご寮人、黒澤瑠璃と同じ顔と声で、言ったのだ。

*

「リーダー、あれは誰だ？」

トイレから帰ってきた辰本迅が土手の下を見ると、ルビイの前に、さつきまでいなかった女性がいた。

「御方様だ。さつき海から上がってきた」

「瑠璃様？ あれが？」

「見て分からないのか」

黒服の鑑のように直立姿勢を崩さないリーダーは、同僚をちらりと

も見ずに言う。

「あんな格好をするのか？」

その人物は、いつもの瑠璃の和装ではなく、白いワンピースに腰まである羽織のケープを着ていた。それだけでなく、服からは大量の海水が滴っており、髪もべったりと濡れているようだ。五月の駿河湾の水温はウェットスーツでも辛い、と聞いているにもかからずだ。

「瑠璃様とは、連絡がとれているのか？」

「本部には照会した。御方様の現在位置は掴めていない、つまりあの方が御方様だ。連絡が取れない点も、海水浴であれば納得がいく」

「おかしいだろ、その理屈」

「我々は判断しない。警備業務に戻れ」

「……了解だ」

断定するリーダーに、迅は鞆を収めた。

海に背を向けて直立姿勢をとり、ジャケットの胸元から折り畳みの白いパナマ帽を出して――

(業務中の着帽は、禁止されていたな)

――しまい直し、闇に染まり始めた東の空を見た。

一所に立って決められた方向だけに注意を向ける警備の仕事は、単独行動が長かった迅には辛いものがある。

海を波立てて吹き込んでくる風が、クルーカットに刈り上げた後頭部を舐めて通りすぎ、沼津御用邸記念公園の木々を揺らす。

そのざらついた葉擦れが、迅の心を妙にざわつかせる。

「先月は立て続けの襲撃だったようだが、何事もないな」

だから、そう口にした。

「ないに越したことはない」

「俺が来た意味がない」

「御方様を名前で呼ぶ君が、か？」

「敬語は苦手だ」

「それは洒落か？」

無駄話の末、迅は口の端を持ち上げた。

「あと五分で交代だ。天貝と来間に準備をさせておけ」

「了解だ、リーダー」

ざあ、とまた風が流れ、と葉擦れが駆け抜けた。

(イヤな風が吹く街だ)

迅は眉を寄せる。

第九話：震えてる手を握って — 4

／＼ B

「なにしてるの？ お母さん」

その人物はルビイの顔を見て、にこりと笑い。

直後、高笑いを始めた。

「ピギイ！」

甲高い声が夜空を貫き、耳を塞ぎたくなる。

やがて、艶かしく息を飲み込む音がして、

「ルビイ」

まとも呼ばれる。

打って変わって、落ち着いた声で。

「お、お母さんなの？」

「そう、お母さんよ」

真珠のような光沢を放つケープも、ベルトですぼめたノースリーブのアツパツパも、すでに乾いている。その中で、水密フアスナーの青白いテープが装飾的に際立つ。

金色の光の中でその服だけが、空のように白く、青い。

「違うよ、お母さんは、そんな、そんな大正モガみたいな服、着ないもん。それに——」

——そんな笑い方もしない、とは口に出せない。

「疑り深いのね」

母の顔を持つその人物は、優しくルビイの手を取って、頬に触れさせる。

海に入っていたのに、髪が張り付いていたのに、シャドウもチークも落ちていない。顔立ちは母と同じものだが、目鼻立ちの陰影を目立たせるメイクは母とまるで違う。

いや、そんなことより。

「変だよ、お母さん」

指で触れた頬が、指の形の通りに凹んだ。

指を離して、その形が戻っていく様に、ルビイは見覚えがあった。

入学式の日、箒で殴られたエンジェル・フォーメアだ。

「お、お母さん？ 違うの？ フォーメアなの？」

「そうね、私はあなたのお母さんだけど、あなた方の命名に従うなら――」

ケープから出した右手を空にかざす。その爪は、牙のように鋭く伸び、星を反射して光っている。

「――《ラズリ・フォーメア》、かしら」

“lapis lazuli”。

自らそれを冠した怪人はケープに隠れた左手を出した。

広げた手の指の間に挟まっていたのは、淡く光る三センチほどの球体。

「お母さんがフォーメアを作ったの？ お母さんが悪の親玉だったの？」

「解放者、って言ってほしいわね」

「え？」

「恐怖心、罪悪感、強迫観念、敵愾心、嫌悪感、反感心。自分を覆うそんな夜から、解放されるチャンスを与えるの。それが私」

「お母さん」

「ん？」

「怪人なのに、なんで喋ってるの？」

ルビイの言葉に、ラズリは声を上げて笑った。

「そんなこと気にしてる場合？」

その通りだ。

だが、ではなにを気にすべき場合だ？

怪人なのに、緊迫できない。

“あの”母の顔をしているのに、安らいでいる。

奇妙に弛緩した非日常に、ルビイは完全に混乱していた。

「さあ、ルビイ。あなたも解放なさい」

「な、ないよ。ルビイ、解放したいことなんて」

母の顔をしたフォーメアは、球体をルビイに差し向ける。

「戦いたいんですよ？ 誰かを護りたいんですよ？ なのに、ダイヤ

に護られ、瑠璃に阻まれ、なにもできない。家の名を守るために、させてもらえない。自分にだって、なにかできるはずなのに」

「それは……」

手を握る。指の関節がぼんやりとしている。

「あなたを縛る黒澤家の血の鎖。それを解き放ちたいなら——」

球体の淡い光がゆっくりと明滅する。

影のない金色の空が、それを反射する橙色の海が、白づくめのラズリが、近付いてくる。

視界から遠近感が失われていく。

ヒッチコック映画の、眩暈ショットのように。

「——願いなさい。この《闇の真珠》に」

本当に解放してくれるの？

この鎖から？

そうしたら。

力を手にしたら。

また友達になれる？

ヨハネちゃんと。

「うーん」

気付けば母の顔が、ルビイを覗き込んでいた。

「え？ あ、あの……う？」

「反応なし？ まあ、そうかもね。なら——」

ケープを跳ね上げ、右腕を振りかざし、

「——荒療治ね！」

振り下ろした。

「ピ！」

引きつり、砂に足を取られる。

「ピィー！」

尻餅をつき、舞い上がったツーサイドアップの間を、牙のような五本の爪が光の筋を描いた。

「お、お母さん！ なにするのにお!?!」

「言ったでしょ。あなたを縛る黒澤家の血の鎖を、解き放ってあげ

るって。あなたの中に眠る力を——」

ラズリ・フォーメアは母の顔立ちのまま、別人になる。

「——解き放つてあげるのよお！」

両腕で頭をかばう。

だがルビイが聞いたのは、自分の腕がハムのように輪切りになる音ではなく、

「お嬢様！」

男性の声だった。

顔を上げると、土手から跳んだと思しき黒服が、ラズリに体当たりをかました瞬間が目に入った。

二人は砂浜を何度か転がると、ボディガードは砂に踵を突き刺して急制動し、ラズリは両手で跳ね起き、それぞれ立ち上がる。

「お嬢様、お怪我は！」

「う、ううん」

ルビイは立ち上がると、母親の前に立ちはだかった黒服の背中を見る。

「邪魔しないでくれない？ 今、家族のお話をしてるんだけど」

「たとえそうでも、お嬢様を傷付ける行為を阻止するのが、我々の仕事です」

答えた黒服に、ラズリの白いレースに覆われた右手の指先を向ける。

「その職業意識は立派だけど——」

「ぐおッ！」

次の瞬間、ボディガードが吹っ飛んだ。

「ピギイ！」

黒服は砂浜を転がったのち、胸を押さえて砂の上をのたうつ。

「——もう少し私たちのこと、勉強してからいらしてね」

「リーダー！ クソ、総員急げ！」

別の黒服が、幅の広いコンクリートの階段を駆け降りながら叫んでいる。

「不躰な方々だこと」

そう言つてラズリはルビイに笑いかけると、その黒服に右手を向けた。

「気を付けて！ 黒服さん！」

黒服が階段を飛び、コンクリートが弾ける硬い音を背に砂浜に着地した。

「助かった、ルビイ様——いえ、ありがとうございます、お嬢様」

その黒服は、ジャケットの襟を片手で整える。

「爪を撃ち出すのが攻撃手段か。本当に怪人が存在するとはな」

言われて、ラズリは羽織のケープから出していた右手を見せた。指先から伸びていたはずの、牙のように鋭い爪は、人差し指と中指の二本がなくなっていた。

「だが、あと三本、プラス五本か？ 怪人なら、もう少し驚かせてみる」

「ふうん？」

ラズリ・フォーメアは楽しそうに笑い、黒服に右手を差し向ける。

だが金色の光が走った時、黒服は三メートルほどの距離を詰め、ラズリの脇腹に右拳を叩き込んでいた。

「お……？」

ラズリの口から息が漏れ、その時には黒服の右手がケープの肩を掴み、左膝が腹に突き刺さっている。

その後は、ルビイの目には判別できなかった。

多数のパンチとキックが繰り返され、そのたびにラズリの身体が小刻みに揺れる。

風を振り切るように素早く、しかし一発一発が内臓を破壊してしまいくらいの重さを秘めた一撃必殺。

だが。

「お前……。本当に怪人なんだな」

身体に残った拳や靴の跡が、ぐぞぐぞ、と音を立てて治っていく。

それはムーフォームによって作られた泡でできた、怪人の証。

「ええ、仮面ライダーにしか倒せない、ね」

ラズリはスキップするように後ろに退く。

「仮面ライダーのこと、知ってるの？」

ルビイが問うと、ラズリは母の顔で頷いた。

「もちろんよ、私たちの天敵なんだから。でも——」

と、すっかり元に戻った腹部のラインを、指先で艶めかしく撫でる。

「——さすが、手練を集めたってだけはあるわ。私が人間なら、今頃死んでるわよ」

「お前が人間なら、最初の一発で昏倒している」

「それもそうね」

ラズリは握った左手を、ゆらゆらと揺すって見せる。

「でも、その力を得るのに、どれくらいのを過去に置いてきたのかしら？　辰本迅さん」

「その名前、どこで」

「あら、あなたのごことは、よく知っているのよ」

二人のやりとりでルビイは、それが昨日、善子の家で聞いた名前だと思い出した。

ラズリはまた一歩、後退る。

「二九八九年、茨城県神栖市出身。県立波崎高学卒業後に市内の探偵事務所就職。警察顔負けの操作能力と体術を遺憾なく発揮して街から一目置かれるも、二〇一三年、自らのミスで所長と護衛対象の依頼人を死なせる。依頼人は、所長の娘さん——だったかしら」

黒服が息を呑んだのが、背中から分かった。

「街を捨てて落ちぶれていたところを黒澤家に拾われたのが、一年前ね。それまではずいぶん、そう、汚い仕事もしてきたみたいだけど」

「聞いちやダメ！　黒服さん！」

ルビイは叫び、自身のボディガードに駆け寄ると、ジャケットの袖を掴んだ。

「フォーメアって、恐怖の泡って意味なんだよ！　怖いことを思い出させて、イヤなことを思い出させて、それで、怪人を産み出させようとしてるんだよ！」

だが黒服は、ルビイの言葉に反応しなかった。

どこから出したか、白い帽子を握り締め、ラズリを凝視していた。

「よくもまあ、そんな汚れた手で、私の可愛い娘を護れるなんて思った

わね」

ラズリ・フォーメアが、握っていた左手を開く。

正四面体を孕んだ、淡く輝く球体が海に落ちる。

直後、海水が渦を巻き、泡立ち、泡が形を成す。

波打ち際に立ち上がった人影は――

「所長」

――真つ白なジャケットにスラックスを着た、四〇代半ばの男性の姿をしていた。

黒いジャケットを掴むルビイの手が緩む。

黒服が迪々しい足取りで、砂浜を歩き出す。

「黒服さんー」

白服の男性は、やはり白いパナマ帽を深くかぶり、無精ヒゲと厳格そうに曲げた口しか見えない。

いや、鋭く裂けたツバの隙間の奥に、光のない左眼が覗いている。

「チャンスをあげる」

ラズリはケープを開くように、両腕を広げた。

「あなたは、自分の夜を解放できるかしら」

黒服がおずおずと伸ばした手を、白服の手が掴む。

そこで気付いた。

白服がかぶるツバの裂けたパナマ帽が、黒服が握る帽子と同じだと。

「ダメえー」

白服の手が、ずるり、と落ちる。

金色の光を浴びた骨が、黒服の手を掴んでいる。

「所長？」

その時、パナマ帽が風に舞い上がった。

「名前が必要よね」

男性の顔が、ずるり、と落ちた。

「《スケルトン・フォーメア》。どう？」

マジックアワーの金色が溶け、夜が訪れる。

／／＊

ルビイの母の顔をしたラズリ・フォーメアは、指を一振りした。スケルトン・フォーメアと名付けた白骨死体は、どうやって動いているのか、骨格しかない身体で黒服の男の肩を掴んだ。

「逃げて！ 黒服さん！」

もう遅い、男は骨に抱き付かれ、砂浜に押し倒された。

白いパナマ帽が砂浜に転がり、男の絶叫が夜空を貫く。

「強くなればなるほど、置いてきたものも大きくなるわ」

ラズリは瞼を閉じ、眉尻を下げて首を緩やかに振った。

「それを振り払えるほど、自分を鍛え上げられる人は稀」

ルビイは両手を握って俯いている。泣いているようだ。

「泣かないで。私の血を引くあなたは、凡人とは違うわ」

だから、あなたの母であるこの私が、直々に来たのよ。

「やめてよう！」

ルビイが砂浜に叫んだ。

「なんでこんなことするの！ お母さん！」

「言つたでしょ。私は解放者。閉ざされた人の心の錠を壊し、その夜と直面するチャンスを与えるもの」

男は腕と脚をばたつかせ、砂浜を掘り返す。

「でも、扉を強く閉ざしてしまえば、錠もそれだけ硬くなる。錠の破壊に耐えられなければ、心も壊れる。彼は——」

その力も、徐々に失われていく。

「——解放に耐え得る人間じゃなかった」

「違うよ」

俯くルビイの右手から血が滴り、ラズリは眉を寄せる。

「違うよ！ 人の心を無理矢理こじあけるなんて！ そんなの！」

顔を上げたルビイの目が、金色に輝いた。

「そんなの！ 解放じゃない！」

口笛のように鋭い音が、砂浜を駆け抜け。

ルビイの身体を足元から黒い筒のようなものが立ち上がった。

「なに？」

ラズリは思わず肩越しに駿河湾を見るが、金色の残光は消えてい

る。

(なにが起こってる?)

目を戻し、またしても目を疑う。

筒が展開して赤い裏地を見せた時、それが黒いマントだと分かり、マントだと分かった時――

「辰本さんから！」

――その先端がスケルトンを貫いていた。

「離れなさい！」

それはまるで意思があるように、スケルトンを男から引き剥がすと、何度も砂浜に叩き付ける。

そしてついには、粉々の骨片に――水の泡に還ってしまった。

「ルビィ」

ラズリの言葉に、しゃくり上げるように胸を上下するルビィが目を向ける。

その金色の光が、消えていく。

「俺……俺は？ おやつさんは？ ルビィ？」

男は呆然と、砂に染み込んでいく水を見ていたが、やがてルビィを見上げた。

「ここにいて、辰本さん。お母さんは私が――」

言いかけ、思い出したように男に目を向ける。そして、

「――ピ？ ……ピギイイイ!!」

ラズリに背を向けて走り去ってしまった。

「お、おい、待て！ ルビィ様！」

黒服の男はルビィとラズリを見比べたが、やがて護衛対象を追いかけて、彼も状況から脱していった。

「あら……」

取り残されたラズリは、星の光の下でしばらく立ちすみ、

「もう持ってたんじゃない。《闇の真珠》」

クスクスと笑った。

そして砂浜に転がっていた、直径一〇センチばかりの透明な球体を拾い上げると、海に投げ込んだ。

海水に触れたそれを起点に、泡立った水が骨になり、スケルトン・フォーメアが再構成された。

透明な球体は胸郭の中に収まり、中心のムーフォームを淡く光らせている。

「でも怪人のことは、そんなに知らないみたいね」

ルビイの母の顔を持つラズリ・フォーメアは、白骨死体の手を取って、

「さて、あとはもう一人のお姫様が……」

海の中に消えていった。

／／＊

「くっ、苦しい……！」

「どうしたずら!?! まさか、朝ごはん食べ過ぎたずら!?!」

「違うわよ! ……強力な障壁を感じるのよ。ここは憎き邪教の住まう要塞、無闇に踏み込めば、我が魔力をもつてもどれだけ耐えられるか——」

「雰囲気死ねるなんて、ヨハネちゃん、器用な人ずら」

とはいえ津島善子が感じた神聖な印象は、冗談ではなかった。

(教会なんて初めてだけど……。へえ、こんな感じなんだ)

浦の星女学院付属のチャペル《聖ゲオルギオス礼拝堂》は十字架の形をしており、厳かに響く男声テノールと、本物の蠟燭を用いた調整された色合い、朝日に輝くステンドグラスの煌めきに満ちていた。普段は「墮天使ヨハネ」と自称する善子でも、ここが特別な場所なのは分かった。

ゴールデンウィークの終わる木曜日の早朝、善子が自転車で敵地に入り込むことになったのは、花丸から「学校のチャペルに行かない?」とテキストが届いたからだ。

その理由は分かっている。

だが昨日のことに触れるには、善子の頭は整理がついていなかった。

だから善子は、なにごともしなかったかのように振る舞うしかない。

「ヨハネちゃん、それ」

花丸に促されて入口の脇に立っている盤の水で手を洗い、パイプ椅子が並ぶ内部へ進む。

祭壇の手前に、大の大人が入れる棺桶のようなものが置かれ、その両側に向かい合うように、四人の大人が立っていた。

「あれがここの神父様の、滝川天吾さん」

と花丸が指差したのは、向かって左手に立つ、黒いローブに金の刺繍の入ったタオルのような白い布を首にかけてた人物だ。

「司祭ってヤツね」

「うん」

棺桶を挟んで神父の反対には、白い布に包まれた幼児を抱いた両親らしき男女、そして付き添いなのか女性が立っている。

「洗礼？」

「幼児洗礼だよ」

つまりあの棺桶は、洗礼盤というものか。

「それって、すぐ終わるの？ 話があるんでしょ？」

「平気、一時間も二時間もかかることじゃないから」

「ええ？ でもそんなかかるの？」

二人は小声で話しながら前室を進むと、パイプ椅子に最後列に腰を下ろした。

前の方にも数人の老人が座っていて、信者なのか暇潰しなのか、儀式を眺めている。

「あ、マルじゃん」

背後から小さな呼び声がして、善子と花丸は振り返った。

「スコさん。おはようございます」

祭壇の方から差し込む光で見えたのは、白いセーラー服に灰色のスラックスを着た人物だ。

花丸の挨拶に合わせて善子も頭を下げたが、見覚えはない。

「誰？」

「スコさんだよ、石田健さん」

「スコ？ え？ タケル？ どっち？」

「スコさん」

ガツチリした肩周りの筋肉や、耳を完全に出した刈り上げと太い眉に届かない前髪の人物は、善子たちの後ろを通り過ぎ、花丸の隣に座った。

「マルも洗礼を受けるの？」

「受けません」

そのハスキーボイスで善子は、その人物が女性だと分かった。

緑色のリボンタイは羽を小さくタレを長く結んでおり、男子のネクタイに見える。浦の星女学院の数ある選択式制服の一つであるスラックスも合わせて、敢えて男子に見せるようなコーディネートをしているようだ。善子の知人の中では曜に男っぽさを感じることはあったが、この上級生はその比ではない。

「今日はどうしたんです？」

「ん？ ああ、《クラゲ》のヤツらがまた暴れ出してるらしくてさ。こっちにも来たとかなんとか」

「《クレイジー・フィッシュ》のこと？」

善子が言い、

「知ってるの？」

と健が花丸の向こうから顔を出した。

「ウチ、市内だから。最近結構うるさくて」

「ここ一週間ほど、深夜に及ぶ衣装作業中に甲高いエンジン音が響いているのは、善子も聞いていた。引越す前から市内で働いていた母親の話では、一年ほど前の交通事故で活動を休止した暴走族が活動を再開した、とのことだった。」

「放っておいて、またこっちまで行動範囲を広げられるのみな。付け上がる前に牽制してくる」

「ダメですよ、スピード違反は」

「だから告解に来ただけど、これじゃ無理かな」

祭壇の方に顔を向けると、司祭が乳児を両脇の下から支えて、洗礼盤の中に下ろしていくところだった。座っている善子からは、背の高い盤の中は見えないが、入っている聖水に浸すのだろう。

両親は喜び半分、不安半分で司祭の一挙手に集中している。

途端に乳児が泣き出した。水が冷たくてビックリしたのだろう、両親らしき二人の男女がうろたえたが、司祭はあやすように口で音を立てながら、落ち着いて盤の中に腕を下ろしていく。

数秒ののち、司祭は乳児を引き上げた。

盤の中で響いていた泣き声が教会の球状の天井に反射し、その元気な声に善子の顔は自然と綻ぶ。

「オラ、洗礼って初めて見ました」

「三位一体の名において、水により原罪と罰を赦す」

そんな意味だったのか。

「それを真面目な顔して見てる俺が犯す罪も、たぶん赦されるはずよし、行ってくるわ！」

と健はパイプ椅子から立ち上がると、善子たちの後ろをすり抜けて出口に向かった。

「明日はどうします？ 聖歌隊の練習、振替日ですけど」

「悪い、休むって言っというて」

健は善子たちの後ろを通って、教会から出て行ってしまった。

「オラも休むって言いに来たのに、言いづらくなっちゃったぞら……」

花丸は眉を八の字にして呟く。

善子は聞いていない。

司祭が支える乳児を、白いタオルを準備していた女性が受け取る。さらに、そつと身体を拭きながら父親らしき男性に渡し、男性は母親らしき女性と乳児をあやし始めた。

先ほどまでの暖かい気持ちだが、急速にしぼんでいくのを感じる。

「どうしたぞら？ ヨハネちゃん」

「ん？ うん」

善子は上目遣いで天井を見上げる。

十字架の形をした小さな建物が、急に重苦しく感じられてくる。

「産まれる前から神様に縛られてるのって、どんな気持ちなんだろ」

「ヨハネちゃん。そういう言い方はよくないよ」

咎める口調の花丸に、善子は眉を寄せる。

「だってそうでしょ。親が信者なら、子供に選択権はないわけ？」

「堅信を授かって洗礼が完成するのは、大きくなってからだよ。選べるぞら」

「だから！ 物心ついた時に両親が信者だったら、どうやってそれを裏切れるっていうのよー！」

「ヨハネちゃん！」

小声の言い合いに、善子は憤然として前を向いた。

花丸の言葉は、善子には響かなかった。

神頼みも、懺悔も、善子の世界観にはない。

それで現実が変わるなら、善子は今、*「津島ヨハネ」*などと名乗っていない。

「私、行くわ」

「ちよつと、ヨハネちゃん」

花丸はカーデイガンの袖をめくって小さな腕時計を見て、立ち上がろうとする。

「花丸はここにいなさいよ。堕天使より神様の方が好きなんですよ」

返答を聞く前に、善子はその場を離れた。

出口をくぐる時、手を洗った盤に*「聖水」*の文字が貼ってあったのが目に留まる。

そこで気付いた。

花丸はもしかしたら、最初から怒っていたのかもしれない。

だから堕天使と喧伝している私を敢えて敵地に連れ込み、聖水と秘跡の目撃でダメージを与えようとしたのかもしれない。

私が、みんなを傷付ける悪魔だから。

そんな考えが浮かんでしまえば、誰かと友達になる資格が自分にあるなどとは、到底思えなかった。

第九話：震えてる手を握って ― 5

*

「お尻が沈んでるよ。もっとお腹に力を入れて」

渡辺曜はプールサイドに腰掛けて、仰向けで浮かぶルビイに声をかける。

「胸で浮かぶのをイメージして。膝はわざとらしく伸ばすくらいでいいから」

「は、はい」

伸ばした四肢でバランスをとりながら、ルビイは弱々しく返事をした。

木曜日の午前、曜は伊豆長岡温水プールにある水深五〇センチの小プールで、子供たちに混じって泳ぐルビイを鍛えていた。

だが今日は調子が悪いのか、ルビイは立ったり浮いたりを繰り返して、安定した背面蹴伸びにならない。苦もなく泳いでいる周りの子供たちに気をとられてはいないが、集中しているようにも見えなかった。

もつとも、それは曜自身が集中できていないからかもしれない。曜は単語カードに蹴伸びの継続時間をメモするかたわら、その裏から覗く二枚のカードに意識を向けていたからだ。

「L a z u l i i」

「S k e l e t o n」

O G Iグループの特設サイトに追加された《ラズリ・フォーメア》と《スケルトン・フォーメア》の情報は、ビックリするほど少なかった。誰も撮影していなかったゆえに汎用の人型シルエツトを設定するしかないのは仕方ないとしても、ラズリはなぜか、ほとんどの情報が不明だったのだ。名前だけで想像できるスケルトンと違って、外見を思い浮かべるヒントも、どのように攻撃してくるのかも、なにも分からない。まるで名前を列記したところで飽きてしまった創作ノートのようだ。

だがネットは盛り上がっていた。

なぜなら特設サイトの《フォーメア》のページに、「人間の心の傷を解放するために産み出される」の一文が追加されたからだ。

明記されていないその情報の出どころが、正体不明のラズリに違いないと人々が推測するまで、長い時間はかからなかった。その説が「人の言葉を話す怪人がいる」から「ラズリは敵組織の幹部だ」と発展していき、そこに尾ヒレが何枚もついていくのにも。

（幹部ねえ。そういうえば、今年の『メタルヒーロー』って幹部何人いたっけ）

去年の九月から半年間は見ていた特撮テレビ番組のことは、曜の記憶からほとんど消えていた。もちろん、現実のあれこれに上書きされたためで、今の思考も同じことになる。

（あいつらの目的だよ。そう）

曜はプールに浸した脛を前後に揺らしながら、考えを続ける。

初めて言及された「フォーメアの目的」が、曜には腑に落ちなかった。

数週間前、曜は様々な経緯から、水死体の外見をしたゾンビ・フォーメアを産み出してしまった。特設サイトの文章を信じるなら、それは「曜の心の傷を解放するために、水死体の姿で産まれた」ということになる。

曜が水死体を嫌いなのは事実だ。

それを思い出そうとすると、今でも吐き気がする。

だが、だとしたら、あのゾンビはまず曜を襲うべきだったのではないのか？

実際は、ゾンビは中庭にいる千歌やルビィを襲った。そのあとで、曜のいる屋上に現れたのだ。巨大な目玉になってからは、校庭に避難した曜には目もくれず、校舎の中の教師やむつを襲っている。

わけが分からない。

曜には自分も気付いていないような深層の傷があり、それを解放するため一連の行動が必要だった、とでもいうのか。

今はその傷が癒えてしまったから、意味不明に思っているだけ？

「あー、ダメだ」

眩き、顎をあげる。

千歌と梨子と花丸からは戦っていない旨がテキストで返ってきたし、サイトに載っていないということはOGI——鞠莉も教える気がないということ。龍駒に変身したのは果南だと思っっているが、聞いてもはぐらかされるのがオチだ。

つまり曜の手元には、ネットでみんなが手に入れるような情報もなく、この状態で真相に辿りつくには、ホームズやポアロのような脳みそが必要だろう。

「やつぱ、頭からっぽ曜ちゃんに、謎解きは無理だなあ」

と視線を戻した時、腹を折って沈んでいくルビイの姿が目に入り、曜は慌ててプールに下半身を静めた。

*

「ごめんなさい、集中できなくて……」

「ううん。私こそ、その、ごめん。遅れちゃって」

更衣室に戻ってきた渡辺曜は、消毒槽とシャワーを経たばかりのルビイをベンチに座らせた。

ロッカーの間を確認したところ、幸いにも人の姿はなかったので、曜もルビイの隣に座った。

「なにかあった？」

「えっと、ちよつと……」

ルビイは言葉を濁し、スイムキャップから解放したお団子をほどこいて水を絞る。その顔は、曜の目にも沈んでいるように見えた。

水を飲んでしまったのかとも思ったが、今回も口をしつかり閉じて沈んだようだし、浅いプールゆえに自分で立ち上がったので、違うだろう。単語カードの記録を見ても、今日の一本目がすでに前回のラストよりよくないので、プールの前になにかあったと考えるのが妥当だ。

「いいよ、水泳以外のことでもなんでも。この曜ちゃんに相談しちゃってさ」

だからそう提案したのだ。

ルビイは指を絡ませてもじもじしていたが、ためらいがちに曜を見

上げた。

「あの、ヨハネちゃんが……」

「うん？」

「もう、来なくていいって」

「衣装作りに？」

ルビイが頷くように俯いてしまえば、善子はルビイともケンカしたんだな、と曜にも察せられる。昨日の善子はセンチティブな状態だったし、無理もない。

「一緒に行つてあげようか？」

「え？」

「ヨハネちゃんのところ。話しにくいんじゃない？」

「そんな、悪いですよ。それにヨハネちゃん、たぶん知られたくないことだと思つし」

「あー、私、口軽いしね」

「そ、そうですよう！ ルビイが泳げないって、内緒だったのに！」

「それはごめんって」

ルビイが恨めしげに口を尖らせたので、曜は半笑いで目を逸らした。

「でも真面目な話、ちゃんと話さないとダメだよ。それでケンカになつたとしても」

「そうですか？」

「私だつて千歌ちゃんと、何度となく取っ組み合いしてるからね」

「曜先輩が？」

意外そうに目を大きくしたルビイに、曜は湧いてきた思い出し笑いを引つ込める。

「ちゃんと話さなきゃ伝わらないよ。友達なんでしょ？」

「友達……なのかな？」

「自信がないなら、なおさらだよ！」

「ピギー！」

曜がルビイの手を強く掴んだ時、更衣室のドアを開けて中年女性が入ってきた。

「と、とにかく、今日の練習は終わり。プールなんて急ぎじゃないんだから、ヨハネちゃんのところに行っておいで。友達に恋人より得がたいんだからね」

「こ、恋人!? る、ルビィ、お、男の人はまだ……」

「ごめん、余計なこと言った」

しかし、ルビィに彼氏ができたら、あの四人の黒服の間でデートするの、とそれはそれで見てみたい曜だった。

*

車道から逸れた緩い坂の小道を、護衛対象が登っていく。

《黒澤総合警備保障》の特殊身辺警護部に属する四人の従業員は、護衛対象の前後を五メートルの距離から挟む格好である。防弾防刃着の二枚重ねによるパフォーマンス低下を危惧したがゆえの距離感だが、昨日の一件からむしろ全体の緊張度は高い。

護衛対象は周囲を警戒しながらも、黙って砂利の小道を進んでいく。昨日の今日で外出する度胸、勇気の石の名前は伊達ではない。

そんな護衛対象の左後方を定位置として、飯芽貴光は歩く。

指定の黒いジャケットとスラックスに、ただ一人シャツのボタンをすべてとめた貴光の鳩尾には、砂浜で受けた爪の痛みが残っていた。それは幸運だった。あの場において最も深い傷を負ったのは、倒れた貴光の代わりに怪人と対峙した同僚の辰本迅だったからだ。

やがて坂道はカーブし、青々とした山肌を見せる徳倉山の裾に、「妙法寺」と書かれた扁額のかかる山門が現れた。五人はそこで一時停止し、先行していた二人の同僚のうちの一人が境内に入った。

「なあ、ここが津島ってヤツの家なのか?」

隣に立つ同僚が、貴光に話しかけた。

「違う。ここはお嬢様のご友人、国木田花丸様のご実家だ」

彼は善子の家に行ったことがない。迅の交代要員だからだ。

「花丸? そりや名前か?」

「口を慎め、お嬢様の命の恩人だぞ」

「ふうん?」

貴光はそう聞いている。少なくとも、護衛対象の母から。

同僚の一人が本堂の向こうに消えた時、イヤフォンに犬の吼え声が入ってきた。少しして住職らしき人物との会話が聞こえ、同僚は話をつけたようだった。

「で、俺の代わりってどうなったんだ？」

「知らされていない」

「噂じゃ、ルビイちゃんが拒否したって聞いたぜ」

「知らされていないと言っている」

言い合っている間に、こちらに戻ってきた同僚が本堂の中も確認、護衛対象に「問題ありません」と報告した。

「パフェは平気？」

「はい？」

「ワンちゃん。こっちに来なそう？」

「おそらくは」

そんなやり取りののち、護衛対象は山門をくぐり、境内の参道を歩いていった。

後方についていた貴光と同僚は山門の内外に目を向けて立ち、先行する二人はそれぞれ、境内の巡回と、山の上の広場に繋がる階段の監視についた。

これで配置完了だ。あとは用事が済むまで護衛対象から目を離さないのが、貴光の仕事となる。

「で、なんでその花丸ちゃんってヤツを呼ばないんだ？」

護衛対象やその友人をちゃん付けで呼ぶ同僚の問いに答えるのは、仕事ではないのだが、仕方ない。

「花丸様は内浦だ。スクドルの練習がある」

「スクドル？ あ、待て、言うな。……スクランブルドルマだろ」

「お前、よくここにいられるな」

「そうだよなあ。ドルマはスクランブルできないもんなあ」

雑談の間に護衛対象は本堂の階段を上がり、擦りガラスのはまった腰付格子戸に近付いた。そこに用があるようだ。

「ありや男だな、間違いない」

「私は知らない。考える必要もない」

「あんまり気張んなよ。次は防弾チョッキでも死ぬかもしれんぜ？」
護衛対象が本堂の前で頭を下げるのが見えた。

「その時は、お前がお嬢様を守り抜けばいい」

「へえへえ、大した職業意識ですこと」

迅も模範的とは言えなかったが、この男よりは数段まともだったな、と貴光は直立姿勢で思った。

*

「お久しぶりです、ご本尊様」

黒澤ルビイは小さく呟き、硬く閉ざされた扉に手を合わせた。

一二年前の本尊開帳の日、四歳だったルビイはまさにここで、母の瑠璃に頭を叩かれた。神社の作法と間違えて、手を叩いてしまったからだ。みんなの見ている前で叱られ、正しい作法を強要された。憤ると、さらに叩かれた。

それがルビイの最初の記憶だった。

「ん」

手を下ろし、萌黄色のワンピースの裾を軽く叩く。

スクール水着から着替えたルビイの足は、しかし、津島家宅へ向かわなかった。

幼馴染みがいないと知っていて、この妙法寺に来た。

膝をかがめ、扉のガラスの抜けた空間から本堂の中を覗くと、様々なものが収められている薄暗い部屋の奥に、漆塗りの須弥壇しゆみだんが見えた。そこに敷かれた小さな黄色の布団に、この寺の本尊が鎮座しているはずだった。

太陽のように輝く本尊は、苦しみや不安を取り除き、正しい道に導くという御利益で有名だった。四歳のルビイも、それを求めて母に連れられてきたのだ。

もちろん今日は開帳していない。それでも、扉越しに少しでも御利益にあずかれたら、と思ってやってきたのだが。

(そんな発想だから、叱られちゃうんだよ)

小さな姉と若い父が、叱られるルビイを冷たい目で見ているのも、当然だ。

「もう、いきなりネガティブだよ、ルビイ」

ふるふると頭を振り、唇を軽く噛む。

祈願したのに、期待した気分が得られたとは言いがたい。

(あ、そうだ……)

ルビイはスクールバッグに手を入れる。

年に一回と言わず花丸と忍び込んで拝んだ本尊は、手のひらサイズの球体だった。花丸は詳しく話さなかったが、それがロリポリ・フォーメアを産み出した球体なのは間違いない。

それはイコール、ルビイがプールで果南から受け取った球体と同じ類のもので、曜が《ムーフォーム》と呼び、母の顔をした怪人が《闇の真珠》と呼んだもののはずだ。

(なら、御利益も同じなんじゃ)

そう思ったのだが。

「あ、あれ？」

目的のものに手が触れない。

「なんでよう、昨日の夕方にはあったのに」

そんな大きなバッグじゃないのに、とスクールバッグを覗き込み、水着を入れた防水袋をよけ、電話や手帳をよけ、ポーチをよけるが、見付からない。手提げ袋も同様で、裁縫道具や作り途中の小物やぬいぐるみがいくつか入っているだけだ。

「なくなっちゃった……。せっかく果南先輩からもらったのに……」

両側にまとめた髪をしょんぼりと垂らし、本堂を背にする。

こんな状態では、本物の本尊を拝んだとしても、御利益がもらえるとは思えない。

もう諦めよう。山門からこちらを見ていた黒服のボディガードに、帰る旨を伝えようと手を上げ――

「よう」

――固まった。

「え？　え？」

どこからした声か。

五感が得た情報を吟味する前に、脇の下を空気が動く。

「ピギー！」

驚いて振り返ったルビイの目に映ったのは、ガラスの抜けた扉の隙間にちよこんと乗った、小さな丸いコウモリ。

「探してるのは俺だろ？」

それはルビイが作ったぬいぐるみだった。

*

「あれ、なにやってんだ？」

「不明だ」

護衛対象が身を屈めてなにかに話しかけている様を見ながら、飯芽貴光は答える。

「人形っぽいぞ。スクールアイドルって劇もやんのか？」

背後の坂道が警戒担当のはずの同僚は、今や貴光の肩に手を置き、完全に業務を怠っていた。

「口を慎め、担当に集中しろ」

「心配すんなって、俺は背中にも目があんの！」

「体面というものがある！」

「こんな辺鄙な寺に誰が来ますかって！」

「口を慎め、お嬢様の恩人のご実家だぞ！」

「だからお前が口を出さなきゃ慎んでるっつーの！　って……おいおい」

黒服の二人が言い合っている間に、護衛対象は本堂の扉を開けると、その闇の中へするりと入ってしまった。

「あれ、開いてたのか？　入っていいのか？」

「不明だが、本堂の中も問題ないと報告されている。問題はないだろう」

「そういう問題かあ？」

*

黒澤ルビイは自分の目が信じられなかった。

小さな灰色のぬいぐるみは、フェルトの翼でガラスの隙間をくぐると、扉の向こうから鍵を開けてしまったのだ。

「話をしようぜ。ゆっくりな」

「だ、誰なの？」

声を追って入った部屋は、異常だった。

午後を少し回った時間にもかかわらず、三面の擦りガラスから差し込む日光は部屋の中ほどで減衰し、その奥が地獄の入口のように黒く塗り潰されているのだ。本尊が載っているはずの須弥壇も闇に溶け、辛うじて輪郭だけを浮かび上がらせた毘沙門天の像の顔が、ルビイを見下ろしていた。

「ピギイ……」

か細い泣き声をあげるルビイの前で、ぬいぐるみは闇の奥へとふらふらと飛んでいってしまふ。

「あ、待ってようー」

後ろ手に引き戸を閉めて、闇の中に恐る恐る足を踏み入れ——立ち止まった。

単色の闇の見た部屋の内奥で、さらに濃い闇が立ち上がったからだ。

それは部屋を覆っていた闇を飲み込むように、その濃さを増している。応じて部屋に本来の明かるさが戻っていくが、それは凝縮された闇の深さを際立たせる役割にしかない。

やがて、ルビイの正面に伸びる影の先端に、筒のような影が立ち上がる。

「えっ？」

その表面にスツと赤い線が走り、筒が左右に開く。

ぼとり、とコウモリのぬいぐるみが地面に落ちる。

「待ちくたびれたぜ、ルビイ」

筒の中に見えたのは、顔を覆う真っ白な手。

「やっとお前と話せる」

現れたのは、モノクロの男性だった。

落ち窪んだ眼窩とその奥の眼光鋭い目が、凄味を帯びてルビイを睨めつけてくる。だが艶やかやオールバックの髪とは対照的に、鋭く立ったマントの襟に隠れたこけた頬や、モノトーンの夜会服のブラウスに添えられた骨の形が浮き出た長い指は、異様な存在感の希薄さを

放っている。ビロードのように黒く滑らかなマントの方が、よほど厚みがありそうだ。

ルビイは動けない。踏まれているのは自分の影なのに。

「あなたが……ルビイのフォーメア？」

やっとそれだけを発すると、年齢不詳のそれは口に笑みを浮かべた。

「ずっと、ルビイのバッグにいたの？」

「昨日の夜からな」

「ええ!? 言ってくればよかつたのに!」

「あんな状態のお前にか? 取り乱すのがオチだぜ」
「う」

「枕元に立てばよかつたか?」

「それはヤダ……」

と、ルビイは眉をひそめて、マントから浮かぶ白い顔を凝視する。

「もしかして、ドラキュラさん?」

「ヴラド三世。一四三二年、ワラキア公国のヴォイヴオダでありドラゴン騎士団の団員でもあるヴラド二世の息子として、トランシルヴァニア地方のシギショアラに産まれる。西欧、正教、オスマンのパワーバランスに翻弄されながらも、ヴォイヴオダとしてワラキアをまとめたが、一四七六年、オスマン帝国との戦いで戦死した。『ヴラド・^{Draculi}ツエペシユ^公』の異名を持つが、主には竜^{Draculi}公の息子を意味する『ドラキュラ』の名で知られる。ルーマニア本国では救国の英雄として、ルーマニア国外では吸血鬼や快樂殺人者の暴君として有名だ」

一息で言ったそれは、ポカンと口を開けたルビイに目を向けた。

「それが俺の名前か?」

「え、え? 分かんないけど……。お姉ちゃんに見せられたドラキュラの白黒映画、すごく怖かったんだ。だから、ルビイのフォーメアなら、そうなのかと思って」

「ベラ・ルゴシ、一八八二年、現在はルーマニアに当たるオーストリア
|| ハンガリー帝国のルゴシユで——」

「——待って待って! いいよ、もう蘊蓄は! 知ってるから!」

「つまらん」

そう言つて、それは肩を竦めた。

しかつめらしい風貌の割りに、口調や声色はフランクで、ルビィは思わず口元を綻ばせてしまう。

「ま、なんだ。俺を産み出したのはお前だ。お前が知らないことは俺も知らんぜ」

それはマントを合わせていた手を持ち上げ、手のひらを上に向けてる。

「そうなんだ——」

その時、押さええていたマントが開き、血のように赤い裏地が覗いた。

「——そのマント、なんの生地できてるの?」

「あ?」

ルビィは先ほどまでの硬直がウソのように、その影に歩み寄つてマントを手に取つた。

「表地はビロードっぽいけど、裏地はサテン——じゃないね、毛羽立ってるし」

「お、おい」

「緞帳? 棺桶の裏地? でもベルベットでもコーデュロイでもないし——」

「——話聞けよ」

「あ、ご、ごめんなさい!」

ルビィは一步離れ、頭を下げた。

「俺は泡だぞ。素材なんてあるか」

「それもそうだよね、えつと——なんて呼べばいいの?」

「好きに呼べばいい」

「《ドラキュラさん・フォーメア》?」

「人の名前だろ?」

「《ベラ・ルゴシさん・フォーメア》!」

「それも人の名前——っていうか、怪人の名前に敬称を挟むのはやめろ」

「意外と選り好みするんだ」

「俺の名前だぞ」

「んー……」

ルビイは人差し指を唇に当てて考えに耽りながら、須弥壇の前を歩き来する。花丸やその親族がいれば窘められる態度だが、あいにく本堂にはルビイたちしかいない。

「そうだ、《ストーリーカー・フォーメア》は？」

「なんで」

「だってルビイのこと、ずっとこっさり見てたんでしょ？」

「そんな理由でか？」

「それだけじゃないけどー！」

とルビイは壁際に一歩後ずさった。幸いにも、並んでいる仏具の類にはぶつからなかった。

「しかし、この俺が恐怖の対象と思ってる割りには、怖がってないな」

《ストーリーカー・フォーメア》と名付けられた年齢不詳の怪人は、骨ばった指で髪を撫でながら言う。闇を濃縮したようなマントが音も立てずに揺れ、裏地の赤に夜会服のブラウスの白が上品に映える。

「そもそも男性恐怖症だろ、お前」

「そう……だよね」

ルビイ自身は意識していないが、怪人とはいえ目上の人間デザインの手先に敬語も使っていない。

「昨日は、今まで怖くなかった黒服さんも怖くなっちゃったし。なんでだろ。マルちゃんにもお姉ちゃんにも言われるんだ、恐がり方の遠近感がおかしいって」

「だから、あいつにも怖がらなかったのか？」

「あいつ」——《ラズリ・フォーメア》。

「だって、お母さんと同じ顔だし」

「敵だぞ」

「お母さんなの？」

「あのなあ……。本当に遠近感がおかしいんだな」

「ストーリーカーさんまで」

ルビイは口を尖らせ、呆れ顔の怪人を指で組んだファインダーで捉

える。

ルビイはいまだに、ラズリを怖いと思っていない。

あの時も、攻撃されたし、ボディガードの辰本迅を傷付けられて怒りはしたが、怖くはなかった。

なぜだろう。

ストーリーカーの理屈が正しいのは分かっているのに。

自分の物事の捉え方に、自信が持てない。

ルビイのファインダーは、もう砕けてしまったのだろうか。

「また戦う時がくる。準備しておけ」

その言葉に、ルビイは指を解いた。

「ストーリーカーさんに驚かないように？」

「あいつと戦えるように、だ」

「え!?! む、無理だよ、ルビイが戦うなんて、そんな——」

「——こいつを見つけ出して、破壊するだけでいい」

そう言っつて、ストーリーカーはマントの奥、ブラウスの首元に付いている灰色のボウタイを持ち上げた。結び目の裏に、μフォームの桃色の淡い輝きが見えた。ルビイは知らないことだが、それは他のフォームアと違い、コア・ビードと呼ばれる一回り大きな球体に包まれている、むき出しの状態だった。

「あのマントで？ ルビイが?」

「そうだ。昨日みたいに力を貸してやるから、ちゃんと狙えばいい」

「で、できるかな……?」

「できるさ。瑠璃の顔をした偽者を殺すんだ」

息を呑む。

「(……殺す?)」

ストーリーカーがいつも簡単に使ったその単語が、染み込んでくる。

「なんでそんなこと……。お母さんもストーリーカーさんも、同じフォームアなんでしょ?」

「違う个体だぞ」

「そうじゃなくて……」

たしかに仮面ライダーは何度もフォームアを倒している。

ルビイの感覚からすれば、それは害虫駆除に近いイメージだった。だが昨日ルビイを襲ったラズリ・フォーメアは、人間と同じレベルの意識をもっているように見えた。

それを倒すことは、ストーリーカーの表現通り“人間を殺す”に近いのではないか？

百歩譲って、ルビイにとっては泡の塊だとしても、ストーリーカーにとっては“同族”じゃないか。

「ストーリーカーさんたちって、なんなの？ “恐怖の泡” って言われるけど、人類を滅ぼすつもりなの？ 世界征服？」

ルビイの問いに、ストーリーカーは歯を見せて笑った。

「重要なのはラズリだ。あいつはお前の“解放”とやらを狙ってる。それがなんなのかは分からんが、とにかく、用心しろ」

「どうやって？」

「言っただろ、俺のベースはお前だ。お前が知っていること以外は知らん」

「それじゃ用心できないじゃん。使えないなあ」

「ブーメランだからな」

その今風の言い回しを、一九三〇年代に活躍した俳優の顔で言うものだから、ルビイは思わず噴き出してしまった。

空気が少しだけ緩み、ふと疑問が浮かぶ。

「でもさ、じゃあ、お母さん——ラズリ・フォーメアがルビイや黒服さんに詳しくしたのは、ラズリを産み出した人が詳しくあったから、なの？ そんな人いるかな。もしかして、お母さんが？」

「他人が本人と見間違えるような顔を、本人が作れるとは思えないな」「本人なの？」

「写真か鏡で見た自分しか知らないんだぞ。鏡像なら作れるだろうが、他人からすれば違和感のある顔にしかならん」

「そう……かも？」

「ほら、俺の話は終わりだ」

ストーリーカーは筒のような身体を消し去り、宙に浮いた球体——
フォームだけになった。

いや、その周囲には水の層がある。ルビイが相對していた人物は、水がごく微細な泡となって霧のように分散して作られた形、ということか。

微かに桃色がかった光を発する球体は、一呼吸置くと、落ちていたコウモリのぬいぐるみの中にもぐりこんだ。

「やっぱりこの中は落ち着くな」

そしてコウモリはふわふわと浮かびあがり——ルビイに掴まれた。

「お前、いきなり！」

「綿が入ってなければ、サイズのにはピッタリなんだ。そっか……」

「離せ、おい！」

暴れるぬいぐるみと球体を両手で包むように押さえる。力は強くない。

「このぬいぐるみは大事なものの。クマちゃんにお引越して」

と手のひらを少し開けて、スクールバッグに載った、ピンクのクマの頭のぬいぐるみを見せた。

「吸血鬼ってクマに変身できるもんか？」

「ストーカーさんが知らないなら、ルビイも知らないんでしょ？」

「ぬ……」

更に手のひらを開いて促すと、ややあつて、コウモリのぬいぐるみから力が抜けた。

そしてバッグのクマの頭が動き出す。

「居心地は同じか。綿は泡にしちまって——おい、なんだこりゃ」

クマの頭がスクールバッグから浮かび上がり、すぐに引つ張り戻された。元々持ち手に結び付けていたぬいぐるみだ、その紐以上には動けない。

「解いてくれよ」

「ダメ、なくなったら困るもん。大人しくしててね」

「マジかよ……」

ルビイは本堂の扉を開けて、お天道様の下に出た。

闇の中にいたルビイにその光は眩しく、吸血鬼のように消えてしまいいそうに思える。

そうだったなら、どれだけ気楽だろう。

改めて、山門の脇の黒服に帰宅の旨を合図した。

「行かなきゃ」

「覚悟はできたのか？」

問いかけてきたクマのぬいぐるみに唇を尖らせ、

「分かっているクセに」

ルビイはコウモリのぬいぐるみを撫でると、手提げ袋に戻した。

それは現実逃避かもしれないが、ルビイにできる唯一の行動でもあるのだ。

第九話：震えてる手を握って ― 6 (完)

*

細く開けたドアの向こうに、ツーサイドアップをぶら下げた頭頂部が見えた。

「入る？」

「うん」

一度ドアを閉め、チェーンを外すと、萌黄色のワンピースを着たルビーがはにかんでいた。

「私の部屋、行つて。なんか入れてくから」

「居間じゃなくて？」

「そうよ。黒服抜きでね」

「あ、うん」

ルビーが黒服に指示し、自室に向かうのを見ると、キッチンに入つて引き戸を閉めた。

「ルビーが来ちゃったかあ」

コップにイチゴオレを注ぎ、津島善子は一人ごつ。

襟首のよれた部屋着のTシャツが、いつの間にか汗で湿っている。

自宅のチャイムが鳴った時、善子是对応すべきか迷った。どうせ難しい顔をした黒澤家の人間か小原家の人間が入ってきて、善子の行動を清算して去っていくに決まっていると思つていたからだ。

ところが覗き穴の向こうにいたのがルビー一人なら、招かないわけにもいかない。

(またドアを壊されたくないしね)

化粧していない顔から目を逸らすように、お団子を作っていない頭に手櫛を入れ、パジャマ代わりのジャージのパンツを簡単にはたく。

お盆を手に自室のドアを開けると、壁に貼られた諸々の前に立つルビーが目に入った。

「ああ、座る場所なかったわね」

「ううん、お構いなく」

善子は部屋の中央に準備していた、燭台やお手製の魔法陣スカーフ

を片付け、畳んであった座卓を広げた。

「配信してたの？ 《墮天使ヨハネのお休みふにやらはつぱ》——」
「——《真夜中フラガラッハ》。してないわ」

昨夜配信予定だったのだが、気分が乗らずに寝落ちし、気付けば朝になっていった。だから窓には裏地に紫を配した黒いカーテンがかかったままで、勉強机にはプライバシー保護の布が、壁には“Fallen Angel YOHANE IN Midnight Flagarach”とデザインされたタペストリー風ポスターが貼つてあった。衣装として準備した紫ベースのゴシック&ロリータ服も、箆笥の横にかけたままで。

だが腰を下ろしたルビイが引き続き見上げているのは、配信用のあれこれではなく。

「すごいね」

壁に貼られた『太鼓の達人』世界一決定戦、そのエリア大会優勝の賞状だった。

「エリア大会の上って、どこなの？」

「世界」

「ウソ！ 世界に行ったの!? 善子ちゃん！」

「二回戦負けよ」

そうだ、この去年の大会も、敗因は体力不足だった。前日の練習と一回戦でパワーを使い果たし、二回戦の二曲目はボロボロだったのだ。

『やるからには勝つ』からは程遠いわ」

ダイヤの発言を引用すると、ルビイは目を伏せてしまう。

その気まずさを埋めるように、二人はイチゴオレを一口飲んで、息を吐いた。

「あの、ごめんね。来ないでって言われてたのに」

口火を切ったのはルビイだった。

「テキストでよかったのに」

善子はわざと感情を殺して、コップの中で揺れる淡い桃色をした乳飲料を見る。

「うん……。善子ちゃん、もの凄く怒ってたから。文字じゃ、上手く伝わらない気がして」

ルビイは、捕食者を警戒する小動物のように善子の挙動を見てはいるが、顔は直視しない。

「いいよ、私だって言いたいこと言ったんだから。遠慮しないで」

そう言うと、軽い上目遣いで善子の顔を見たルビイは、唇を舐めた。いつものパターンだ、と善子は思う。

夢中になった時の善子は、相手にどう思われるか考えもせず、正しいと思っただけを行動に移す。

それが物心ついた頃からのやり方だった。

浦女の生徒会室でダイヤに啖呵を切った時も、沼津御用邸記念公園で瑠璃に食ってかかった時も、沼津市立総合水泳場の見学席で梨子に怒鳴った時もそうだった。あの三人は、善子がなぜ怒っているのか、三〇パーセントだって分かっていなかっただろう。

そんな状態で怒りの表出を見せれば、本人が困惑するのも、その周囲が「キレた」善子への攻撃を始めるのも、当然だ。

そうなれば、善子は自分の出番の終わりを選ばざるを得ない。

だから、ルビイがツーサイドアップを荷車の車輪のように回して、「ごめんね！ 善子ちゃん！」

と頭を下げた時には、啞然としてしまった。

「え……。え？ なに、なんでルビイが謝るの？」

「だって、うちのお母さんが、幸子さんと善子ちゃんに酷いこと言っただけだし」

「いや、そりゃ、あんなこと言われたら怒るけどさ、え、待って待って」善子は混乱した。これは想定していた会話ではない。

「でも、余所のお母さんにアレはないでしょ。てか、だとしてもルビイが謝る必要はない？」

「ううん、ルビイはお母さんを注意しなきゃいけなかったんだもん。なのに、なにも言えなくて」

ここに来てようやく善子は、ルビイが謝りに来たのだと理解した。「ルビイ、怒ってないの？」

「なんで？」

「いや、だから——」

力が抜けて箆笥に寄りかかる。

「——ううん、なんでもない」

吹き込んできた風で、部屋着のTシャツがびっしりと汗で濡れているのに気付いた。

ルビイは不思議そうな顔で善子を見ていたが、やがて目をパチクリさせた。

「ルビイが善子ちゃんのこと、嫌いになったって思ったの？」

そう言われてしまえば、なんとバカバカしい理由だ。

肯定するのが恥ずかしくて、お団子のない頭をかき回してしまう

「わけ分かんないヤツでしょ。私って」

「最初からわけ分かんない人だったよ、善子ちゃんは。カメラ持って走ってきた時から」

嘔き出し、ルビイも笑った。

そしてふと気付く。

「なんでさつきから、『善子』って呼んでるの？」

「え、真面目な空気だったから……ダメ？」

「ダメってわけじゃないけど、最近みんな『ヨハネ』呼びだからさ。ムズムズしちやって」

「そうよ、この子は黒澤家のお姫様なんだから。ちゃんとヨハネって呼んであげなきゃ」

「そっか、ごめんね——」

善子はその発言の第三者性に気付く前に、ルビイが声を上げた。

「——お母さん!？」

「昨日振り、ルビイ」

黒いカーテンを前に正座する女性は、瑠璃の顔で艶美に笑っていた。

*

「瑠璃さん？ え、いつウチに!？」

「違うよ、善子ちゃん！ この人は——」

「——《ラズリ・フォーメア》。ラズリって呼んでね」

「ら、ラズリ？ ラピスラズリの？」

「そうよ」

「じゃ、やっぱルビィのお母さんじゃん！」

「そうだけど、違うの！」

「初めまして、ルビィの母です」

真珠のような光沢のある白いアツパツパに、同じ素材の腰丈のケーブを羽織り、瑠璃と呼ぶには空色すぎる装飾的なフアスナーテープ。

大正時代のモガを思わせる洋装の女性は、自身をそう紹介した。

「どうやって——まさか」

立ち上がった黒澤ルビィは、畳にお尻を預けたままの善子を見た。

母の顔をした怪人は、善子の瑠璃に対する敵愾心から産まれたのか

？

だが、当のラズリは首を傾げた。

「ヨハネさんは、黒澤家のボディガードを詳しく知っているかしら？」

それもそうだ、善子は辰本迅を含む二人の黒服の名前は聞いたが、その過去については知らないはずだ。

では？

「ま、待って、ほんとに？ 瑠璃さんじゃないの？」

善子はやつと状況を把握したか、這いずるように立ち上がった。

ラズリは楽しそうに笑うと、ケーブを払うように持ち上げた右手を

「うわっ！」

——ぐしゃり、と白く泡立った不定形に崩した。

「私たちは泡だからね。この程度のスペースがあればどこにでも入れるの」

背後の分厚いカーテンが僅かに揺れている。あそこから入ったに違いない。

「下がって、善子ちゃん。今——」

ルビィはボディガードを呼ぶべく、ショルダーバッグの中に手を入れて電話を取り出そうとした。

だが出てきたのは、手の中に収まる柔らかな球体——手作りのコウモリのぬいぐるみだった。

「——あ、あれ？」

「あら、可愛いじゃない。そんな特技があつたのね」

「ルビィ！ あんた、時と場合をねえ！」

「ち、違うの、そんなつもりじゃいや。」

手の中のぬいぐるみが、微かに振動しているのを感じる。

綿の代わりに入っているムーフォームが——《ストーリーカー・フォーム》が、ルビィに掴ませたのか。

ラズリを殺させるために。

(でも)

ルビィは右手で握ったコウモリのぬいぐるみを胸に押し付ける。

その振動が、心臓の脈動に同期して弾む。

小さく息を吸い、母の顔をしたラズリを見る。

善子の手をとって、少しだけ背の高い彼女を自分の背中に隠す。

「出てって、お母さん」

「なぜ？ せっかくあなたたちを解放しにきたのに」

「そんなことしてほしくないの！ ルビィにも、ルビィの友達にも！」

あらん限りの大声で、母の顔をした怪人に訴える。

善子の手に力が入るのが分かり、ルビィも強く握り返す。

震えているのは、自分の手か、善子の手か。

だが、怯むわけにはいかない。

もちろんこれは瑠璃ではない。心無い言葉で善子を傷つけた本人ではない。だからここで勇気を発揮しても、善子の名誉を回復することにはならない。昨日の失敗の代償行動、あるいはいはずれくるかもしれない同状況へのリハーサルでしかない。

それでも。

「お願い、ここからいなくなつてよー！」

ここで逃げたら、ルビィはきつと、なににも立ち向かえなくなつてしまう。

「ルビイのお母さんなんでしょ？ ルビイの言葉、分かるんでしょ!?
なら——」

「——困ったわね」

ラズリは指先で鼻頭を撫でると、ケープの下から右手を見せた。
その指先が挟んだ、小さな球体を。

「ムーフォーム」

「無理だよルビイ！ どう見ても悪役じゃん！」
通じないのか。

右手に握ったぬいぐるみが発する振動が、心臓の鼓動が、高まる。
戦うしかないのか？

(でもー)

風を切る音。

左手を握っていた善子の手から、力が抜けた。

「ヨハネちゃん!？」

善子の細い首に、細長く伸びたラズリの指が巻きついていてた。

「は……かつ……」

糸のような親指と人差し指が、白い首に血管を浮き上がらせる。

小指と薬指で摘んだ淡く光る球体が、善子の眉間に差し向けられる。
る。

「あなたの夜を、見せてくれる？」

善子は、首に巻きついた指を掴み、歯を食いしばり、見開いた目で
球体を見ている。

その瞳が広がり、球体の光が強まる。

「お母さん!!」

ひゆう、と。

口笛のような音が響いた。

直後、ルビイの首に痛みが走る。

指先の感覚がなくなり、コウモリのぬいぐるみがフローリングに落ちたのを見た時、ルビイの意識も途絶えた。

次回予告

千歌「ルビイちゃん回と思ったら、むしろ善子ちゃん回？」

梨子「いつになく長いお話だったのに、出番が叫び声だけ……」

鞠莉「我慢我慢、名前しか出てない私と果南よりましでエス！」

梨子「理事長代理は八話で大活躍したからいいじゃないですかあ
！」

千歌「まあまあ。次回、仮面ライダーメルシャウム第一〇話、『傷付
けたって構わない』」

梨子「序盤に出番が集中してた分、個人回が始まっちゃうと、私た
ちの出番、少なくなるよね」

千歌「梨子ちゃんが最後にブランキアに変身したの、五話のアバン
タイトルだし」

鞠莉「安心して、九話の裏側を語る一〇話は、全編りりー回だから
！」

千歌「ほんと？ やったよ、梨子ちゃん！」

梨子「イヤな予感しかしないんだけど……」

C

「おつす、ヨハネ」

「おはよ」

廊下の窓に寄りかかって中庭を見ていた津島善子は、階段から登っ
てきたクラスメイトに手を上げた。

「なにそれ、カッコいいじゃん」

クラスメイトが指差したのは、善子の首だった。善子は黒地に銀の
十字架があしらわれたチョーカーを巻いていたのだ。

「天界を追放されし墮天使たるもの、制服にもワンポイント欲しいか
らね」

「そう聞くとカッコ悪いな」

「うっさいわね」

「よ、朝っぱらからなにしてんの？」

別のクラスメイトが電話を手にやってきて、話に加わる。

「ヨハネのチョーカーが墮天的だって」

「別にいいでしょ」

「褒めてるんだよ」

ゴールデンウィーク明け、金曜日の浦の星女学院の空気は、前後の土日が構成する飛石連休も相まって気だるげだ。それでも生徒たちが登校してくれば、遠洋の風浪が打ち寄せるように、徐々に喧騒が立ち上がってくる。

頼むから今日は、昨日みたいなことは起りませんように。

そんなことを思っていると、

「——はい、こちら現場の佐里さざとです！」

クラスメイトの電話が甲高い声を立た。

「こちらが昨日、仮面ライダーブランクシアによってフォーメアが倒されたとOGIより発表のあった、我入道海水浴場の海岸です！」

善子たちが覗き込んだ画面では、八時のワイドショウのタイムシフトが再生されていた。地元の佐里さざと恵りポーターが、いつかの台風で打ち上げられたままの竹や木の枝を乗り越えながら、カメラに向かってテンション高く叫んでいる。

「これ、昨日の？」

「そうそう」

「現れた怪人は、目下話題のラズリ・フォーメアです！ 海の中、ちょうどあの辺りでブランクシアに倒されました！」

海風を受けて荒ぶる髪の毛を押さええて理恵が指差す海面には、なんの痕跡もない。

「なにこれ、ただの海じゃん」

「場所間違ってる？」

クラスメイトが口々に突っ込み、

「まあほら、海だしさ」

と善子が無意味なフォローする。

「現場に人影はなく、怪我人はありませんでした！ 以上、現場の佐里がお伝えしました！」

「終わった!？」

「はあ!? これだけ!？」

「しよがないって、情報がないんだから」

「またもフォローするが、クラスメイトの勢いは収まらない。」

「こんなんなら、わざわざ現場いく意味ないっしょ」

「なんで今回は映像がないの？ 《シエル》の時はあったのに」

「ちよつと、落ち着いてって——」

「——一人くらい撮ってた人だっているっしょ、探してみる」

「てか、ブランキアがカメラと一緒に移動すりやいいじゃん」

「そうだよ、それこそ生中継で戦わせれば——」

「——そんなことできるわけないでしょ！」

善子が思わず声を荒げると、クラスメイトたちは目を瞬かせた。

「ライダーにだって事情があるの！ 流せない情報だつてあるに決まってるじゃん！ それを……寄ってたかって……そんな風に言わなくたっていいじゃない！」

「ヨハネ？ ど、どうした？」

ヨハネはこみ上げてきた涙を隠すように、背を向けて走り出した。

「おい、授業始まるよ！」

廊下を駆け抜け、階段を下りる。

中庭に出たところで予鈴が鳴り、ようやく上った血が落ちてくるのを感じた。

「あんな言い方……」

上気した顔で、太陽に蓋をしたような曇天の空を見上げる。

首を圧迫するチョーカーを意識する。

工事が終わり、樹木が減って見通しのよい広場になった中庭にしゃがみ込む。

「私こそ、あんな言い方……」

昨日の戦いは野次馬がゼロだったので、ネットでも話題にならなかったし、映像も出てこなかった。OGIが撮影していたとしても、相手が黒澤家のご寮人の顔をした怪人なのだから、映像が提供されるわけがない。テレビ番組ではそれだとニュースバリューが低いから、と現場の絵を出したのだろう。それは想像できる。

だが戦いの傍観者たる普通の人は、これでは満足しない。

善子だって、一箇月前なら絶対に文句を言っていた側だった。

そんなこと、分かっているつもりなのに。

「普通の人……か」

善子は無意識に、黒いチヨーカーをさする。

自分はもう、「傍観者たる普通の人」ではないのだろうか。

一箇月前、この中庭で、仮面ライダーの正体を撮影してしまったばっかりに。

私たちを護った人たちが、どんな気持ちだったか知ってしまったばっかりに。

「善子ちゃん！」

背中から声をかけられて、振り返る。

廊下の暗がりには、見覚えのあるツーサイドアップが見えた。

善子の元に走ってきたのは、ルビイと花丸だった。

「なにしてるの？ もう授業始まるよ」

「分かってる」

立ち上がった善子は、花丸の後ろで小さくなっているルビイが気になる。

「もう平気なの？ 昨日、あんた……」

「あ、うん、ルビイは平気……。ごめんね。首、痛くない？」

「これ？ 全然平気。むしろアクセサリのいい言い訳になったわ」

とチヨーカーを指差して笑う。本当は首吊り自殺を試みたような痣が残っているし、時々鈍痛が登ってくるが、そんなことは言っても仕方ない。

「むしろ部屋がぶっ壊れたのが、痛いっっちゃ痛いわね」

「そ、そうだった。ごめんね、うちでリフォームを手配したから、ほんとはごめんね」

「てか、手配してくれたホテルがもう『一泊いくらよ』ってレベルで、墮天使的には昨日のアンラッキー全部帳消し？ みたいなの？」

「そう？ なら、いいんだけど」

ルビイは言葉とは裏腹に、顔を陰らせてしまった。

善子はそれが気になるが、あと数分で一限が始まるなら、後回しにせざるを得ない。

「上、行く」

なんの悩みもなさそうな、コウモリのぬいぐるみを見る。

「ありがとう」

「どういたしまして！・じゃ、行こー！」

ルビイは花丸と一緒に、笑顔で階段を上がり出す。

だが、善子の足は動かない。

まだだ。

もう一言、言うことがあるだろ。

友達になるなら。

「あのさ」

階段を上りかけた二人が振り返る。

なのに、出てこない。

目が合せられない。

手が震えてしまう。

小動物のようだと思ってたルビイだって、私をかばう勇気を見せたのに。

その時、右手と左手を、暖かい感触が包んだ。

顔を上げると、いつの間にか、二人の顔が近くにあった。

涙がこみ上げてきた。

「ごめんね。その……初めて会った時から、今まで」

ルビイと花丸は横目で見交わし——笑い出した。

「もう、そんなの気にしてなかったよ！ 善子ちゃん！」

「え？ ……え!? そうなの!？」

「そうすら！ 善子ちゃんは色々気にしすぎずら！」

「てか、待って、なんでまた善子なのよ！」

涙を流して笑う二人に戸惑っている、そこで誰かが走ってくる足音が聞こえ、本鈴が響いた。

「先生来ちゃうよ、善子ちゃん！」

「急ぎー！ 善子ちゃん！」

「だ、だからー！ 善子じゃなくてヨハネだつてばー！」

階段を駆け上がった二人は振り返ると、目元を拭って声を揃え、

「ヨハネちゃん！」

「……まったくもう！」

善子も涙を払うと、二人を追いかけた。

さっきのクラスメイトたちにも、ちゃんと謝れそうだと思った。

第一〇話：傷付けたって構わない | 1

A V

八挺の機関銃砲塔。

そのいずれかが、一発の5.56×45mm弾を撃つ。一分間に一度、ただし等間隔ではなく。

銃口の先に跪くのは、苔の怪人——仮面ライダーブランキア。

《セディュー》のテストと同様に、薙刀を手にするブランキアは、しかし、銃弾を跳ね返さない。

湾曲した刃を右手で握り、柄を左手で保持し、石突き先端を前方に向けて静止している。

先端に開いた銃口を壁に向けた、膝射の姿勢で。

「テストケース三二、終了しました。このままケース三二に入ります」ハンドガン型リーダー《エウリュース》をスナイパーライフルに変化させるムーフォーム、《ハーチェク》は、ブランキアには不向きだと考えられていた。

クルチ型の刃を生成する《セディュー》を梨子が薙刀術で使いこなすのと同様、スナイパーライフルの扱いにも一定の技能が必要となる。シャイニーのようにスーツの照準システムで補助しなければ、狙撃どころか当てることさえ難しいのだ。ゆえにブランキアのデータ採取対象には、含まれていなかった。

だがロリポリ・フォーメアと龍駒との連戦において、シャイニーのアンダースーツと照準システムが機能しなくなったことで、状況が変わった。シャイニー破損の可能性を前提に、開発中の《ストローク》を含めた外部拡張系ムーフォームの三種を、ブランキアで使用可能か調査すべきではないか、との議論が起こり。

急遽決定されたテストのため、桜内桑介は娘をつれて静岡大OGI諏訪にやってきたのだが。

(これがテストか)

撃ち出される弾丸は、全弾、ブランキアに命中する。

その度に、穴を穿たれ、装甲をえぐられる。

だが、ブランキアは動かない。

最初の一時間で、苔状にした装甲で関節をロックする術を編み出し。

次の三時間で、特定の外部刺激以外の反応を遮断する術を編み出し。

最後の二時間で、ムーフォームの活動を休止状態にする術を編み出し。

最終的にブランキアは、ハーチェクによって引き金と銃口を生成された、二メートル以上の長さのスナイパーライフル——というより超ロングバレルの火縄銃とでも言うべき薙刀を固定し、コンクリートの壁に青い光点が灯った瞬間だけ引き金を動かすだけの生体機械となった。

「テストケース三三二、終了です。お疲れ様でした、梨子さん」

一辺が四メートルの地下室では、当然だが、スナイパーライフルの性能をブランキアが使いこなせるかどうかはテストはできない。

ゆえに今回は、「不規則な攻撃を受ける状況で、ブランキアが銃口をぶらさずに標的を狙える条件を探る」をテスト要件とせざるを得なかった。

つまり、ブランキアが発射される銃弾をすべて受けることは、前提であり。

苔の装甲を穴だらけにされても動かないブランキアは、桑介が想定した状態なのだ。

(分かっている、あれは梨子じゃない。分かっているだろ)

苔を破壊して立ち上がったブランキアの脇腹から、蒸気が噴出した。

*

「申し訳ありません、飛石とはいえゴールデンウィークの途中でしたのに」

「いえ、元々九連休にするつもりはありませんでしたから」

二人の男性の声を磨りガラス越しに聞きながら、桜内梨子は制服の裾を直している。登校直前に呼び出されたので、音ノ木坂の制服のま

ま静岡OGIにやってきたのだが、やはり、ラフな私服と比べると着替えは面倒だ。

頭の後ろの方で、いつものようにピアノのアンビエントBGMが鳴っている。実験や検査が終わった時にはよくあることだが、ブランキアに変身して鋭敏な知覚と精神を酷使したからか、身だしなみ整える指が感覚を失ったようにフワフワする。

それでも、千歌と曜からもらった桜色のヘアブローチで髪をまとめた梨子は、磨りガラスをノックした。

「終わったか？」

磨りガラス越しのシルエットの一つが動き、父の桑介の硬い声が出た。

「うん」

二人のシルエットが離れたのを確認して、磨りガラスを指で押す。見えるか見えないかの切れ込みで区切られたドアがズレて、小さな会議室に籠もっていた潮の匂いがオフィスに出て行った。

「今日は長時間の拘束の上に、更衣室も準備できず、申し訳ありませんでした」

父の横にいた男性が、丁寧な口調で話しかけてきた。

三〇代らしい男性だった。清潔だが使い込まれた白衣の胸に「依田義森」と書かれた社員証がとまっている。『お父さんより若いのに、《静岡OGI》のムーフォーム関連事業の主任なんだ』と桑介から何度か聞かされていた名前だ。だが梨子は一〇回以上会っているのに、その顔と声が覚えられない。

「平日だから人が多くてな、更衣室を準備できなかつたんだ」

桑介の言う通り、見通しのいいオフィスではたくさんの方が作業をしていた。こちらにチラチラと視線を送ってくるのは、平日の会社において、一〇〇キロ以上離れた東京の高校の制服を着た自分が珍しいからだろうか。

「私は平気だから、お父さん」

父は硬い顔のままだった。あまり気にしていなかったが、ここで見る父の顔は、今までもそうだったかもしれない。

「それでは、今日はお疲れ様でした。梨子さん、今週末の土日のいずれかで終わりですので、あと一度、よろしくお願いします」

頭を下げた義森に梨子も会釈を返すと、桜内親子はエレベーターに乗り、地下駐車場に向かう。

そこで梨子を出迎えたのは、一台のバイクだった。

桜色というには白すぎるフェンダーの中型のオフロードバイクは、OGIが梨子に宛がった社用車だ。定期点検整備が終わり、桜内家宅に搬送されるところだった。

「《ブランブロー》か」

父が口にしたのは、鞠莉が名付けた“ライダーマシン”の名だ。

東京で受領してから沼津に来るまでは頻繁に乗っていたのだが、最近はめつきり機会がない。

学校はバス通学だし、静岡OGIには鞠莉が用意したりムジンや父の社用車を手配されることが増え、仮面ライダーとしても活動していない現状では、バイクは不要だからだ。

だからだろう、フロントフォークを傾けてあちらを向いたヘッドライトが、梨子にはすねているように感じられた。

そう思えば、用がなくても変身して、緑色の苔で覆ってあげたくなくてもくる。

「梨子？」

立ち止まった梨子に、桑介が振り返った。

「乗って帰るか？」

「……ううん、今日は疲れちゃった」

気のせいだ。

ブランブローがすねているだって？

心のない物体に感情移入するなんて、どうかしている。

と、スクールバッグの中で電話が震えた。

画面に表示されたのは、“お母さん”の文字列。

「お母さんだ。連絡できるようになったの？」

「ん？ ああ、そうみたいだな」

桑介はさほど驚きもせず、梨子の電話から目を逸らした。

メールの文面は簡単だったが、梨子の口元には笑いが戻ってきた。早く戻ってきてほしい。顔を見せてほしい。

母はそう訴えていたからだ。

今頃、なにをしているのだろう。

もう三箇月近く、顔を見ていない。

ピアノコンクールの練習曲を入れてあげた電話は、あの事故で海に落ちてダメになったはずだ。

「梨子、どうした？」

ふんわりとした感覚の中で、父が話しかけてくる。

「ううん」

月曜日も終わりが近付き、明日からはゴールデンウィークが始まる。

延び延びになった東京行きも、あと一週間後だ。

帰ったら、ピアノを弾こう。

それを録音して、母の新しい電話に入れてあげよう。

でも、私が弾けるピアノって、どこにあったっけ？

うまく弾けるのかな。

自信はない。

A

「グループ名、決めてなかったなんて驚きよ。……もう二週間ないのに。……まだ？　もう、でしょ？」

後部座席の娘が電話口に話す言葉を耳に、桜内桑介は社用車のセダンを走らせる。

「お姉さん、就職してたんだ。……じゃあゴールデンウィーク中は厳しそうだね。……んー、分かった、私、行ってみるよ」

クルマは帰宅ラッシュも過ぎた沼津市内を走る。市街地と中規模の商業ビルが不規則に入り混じる平野の景色は、当初は都内育ちの桑介には物珍しかったが、最近はずっかり見慣れていた。

「え？　重なりそうなの？　……一〇日からだと、五日前だから五日から飲み始めないと……。お店？　分からないよ、曜ちゃんに聞いてみたら？　大会で使うよ、きつと」

梨子は、静岡OGIを出てしばらくして受けた電話に対応中だった。相手はスクールアイドル関係の友人だろう。

「そうよ、ライブはいつどこでやるの? ……え? ちょっと、ウソでしょ。……あのね、私、部員じゃないのよ? あ……。もう」
切られたようだ。

バックミラーの梨子は下唇をわずかに突き出して、不満を表明していた。

「千歌さんだったの?」

「うん。あ、ごめん、ちょっと待って」

梨子はまた電話を耳に当てた。

そのぞんざいな扱いが、さみしいような嬉しいような。

「夜分遅くにすみません、桜内で——うわ……え? シヤ、シヤイニー……。あ、あはは……。はい、あの、ちょっとお願いがあるのですけど」

今度の相手は、OGIグループCEOの娘でありOGI研究所病院の社長——娘からすれば浦の星女学院の理事長代理、小原鞠莉のようだ。

「あ、いえ、それではないんです。……実はライブの会場のことで——
《さいたまスーパーアリーナ》!」

娘がシートから身体を浮かし、桑介は驚く。

「おどかさないでください……。体育館ですね、はい……。一五日の日曜日、はい……。え? 土曜日に——え? ゲ? ゲ、ネ? あ、もしもし?」

やがて梨子は電話を下ろし、深い溜め息をついた。

クルマが信号で停まり、言葉のなくなった車内に、ウインカーの音だけが響く。

「ゲネプロが土曜日で、本番が日曜日?」

梨子はパツと顔を上げた。

「ゲネプロ? なにそれ」

「ゲネラルプロローベ、本番とまったく同じセッティングで行う予行練習だよ。通しリハ、つて言えば分かる?」

ポカン、と梨子が口を開けた。

「なんで、そんなこと知ってるの？」

「もちろん弦部——弦楽合奏部やったからね」

梨子の口がさらに大きく開き、桑介は嬉しくなる。

「言ってなかったっけ？」

「楽器は？」

「ヴァイオラ」

「あ、じゃあ私が遊んでたヴァイオラって、お父さんのだったの？」

「言ってなかったっけ？」

「けっこうすぐピアノにいつちやったからかな」

梨子は眉を寄せて笑った。

クルマが走り出し、狩野川を渡って南下する。道はあつという間に細くなり、目立った建物のない住宅街一色になる。この急激かつシームレスな変化に、桑介は田舎らしさを感じる。

「千歌さんたちは順調？」

「全然。締め切りまで二週間切ってるのに、歌はまだまだだし、衣装は一着しかできてないみたいだし、振り付けなんて今日できあがったんだから。グループ名だって、決めてなかったって今頃、気付いたくらいなんだよ？ どうやって宣伝するつもりだったんだろ」

饒舌な梨子の口調は、内容の割りに楽しそうだ。

「間に合いそうなの？」

梨子は「んんー」とハミングのような音を鳴らした。

そして桑介の方を見た。

バックミラーのその視線に桑介が目を向けると、梨子は慌てて眼を逸らす。

「どうした？」

「……あのね、お父さん」

梨子は無用だったスクールバッグを一度見下ろし、顔を上げた。

「ゴールデンウィーク中って、私の用事、ある？」

「ないんじゃないかな。《ハーチェク》の件は終わりだし、あとは今週末の、《スフィア》の観察データ採集だから」

「それで終わりなんだよね」

「ああ、お母さんにも会えるぞ」

桑介が明るい口調で言うと、梨子は小さく頷いて、パワーウィンドウを開けた。

途端に背後から風が流れ込んでくる。

車内に籠もっていた潮の匂いが動き、洗われ、消えていく。

梨子が苦手という匂いが。

「お母さん、どんな感じ？」

「安静の必要はあるけど、安定してるって聞いている。メールも出せるくらいだからね」

「一人でさびしくしてない？ 電話してもいい？」

桑介は少し考える。

「今はこつちに集中しなさい。お母さんのことは、全部終わってからにしよう」

「……うん」

梨子は素直に頷いた。

内浦へ向かう道の交通量は少ない。遥か遠くに見える赤いテールランプを追いかけて夜道を走るのも、ずいぶん慣れた。

だがそれも、もう終わりだ。

一五日の本番を待たずに。

あれから梨子は、この街に残るか残らないか、桑介に言うことはなかった。

桑介も、東京のOGI研究所への異動の結論を、出していない。

二人とも、決断を保留し続けている。

自分の居場所を決められないまま。

「お父さん」

「ん？」

風の吹き込む窓外を見たまま、梨子が言う。

「ゴールデンウィーク、遊びに行ってもいい？ 怪人のことも、ライ

ダーのことも忘れて」

意外な申し出だった。

桑介は考えてしまう。

シャイニーが軌道に乗り、ワンダと龍駒という新たな仮面ライダーが出現し、加えてロリポリ・フォーメアも人間の味方のように振舞ってフォーメアと戦っている現状、ブランキアの出勤は減っている。というより、ブランキアは対外的に仮面ライダーの名を冠してはいるが、本来《梨子変身体》とでも呼ぶべきメルシャウム群の被検体なのだから、フォーメアとの戦いから遠ざかっている現状が正しい状態なのだ。

だが静岡OGIはブランキアに、変わらず厳戒態勢を指示していた。

いや、龍駒がシャイニーを襲い、シャイニーが破損し、ロリポリの行動原理が不明で、フォーメアについての根本的な研究も進まない状況はむしろ、混迷を極めているとも言えるかもしれない。

そんな状況下で、ブランキアの管理を任されているのが桑介だ。

万一のことが起これば、桑介はその任から外されるだろう。そのあとを引き継ぐのは、あの義森かもしれない。それは娘の顔を見れば、到底許せることではない。

「ごめん、言ってみただけ。あと一週間くらい、我慢するから」

「梨子」

「あーあ、お父さんにもう少し、貫禄があつたらなあ」

梨子はおどけたように言って、窓を閉めた。

車内に沈黙が落ちる。

(貫禄か)

そんなものは、何十年も前に、傷だらけになって捨ててしまった。だからここにいるのだ。

やがてクルマは獅子浜を過ぎ、象の鼻のように江浦湾に突き出した岬を巡る。

この辺りから、人口流出の影響で、目に見えて街が暗くなる。桑介はスピードを落とし、ハイビームが照らす闇の中を慎重に走る。

「この道で、千歌ちゃんの友達がバイク事故に遭ったんだって」

「松和考朔くんのこと?」

「知ってるの？」

「……うん、まあ、ちよつとね」

「それで、高飛込ができなくなっちゃったんだけど、最近またできるようになったんだって、曜ちゃんが言ってたよ」

「曜ちゃん？」

「あ、ごめん、千歌ちゃんの幼馴染みのこと」

「そうなんだね」

とりとめのない雑談をしながらも、桑介は驚いていた。

考朔のことはもちろん知っていた。プールでフォーメアを産み出した彼を検査したのはOGI研究所病院で、その結果を分析しているのが桑介だからだ。

「でも、その松和さん、また入院してるんだよ。せつかく復帰したのに」

桑介はなにも言えない。

考朔が入院しているのは、パイルアップ・フォーメアを完全に撃破するために、OGIグループの息のかかったプールに連れて行かれ、その通りの役割を果たしたからだ。自分が怪人を産み出したことを、情報ではなく、事実として知ってしまったからだ。

一度怪人を産み出した人間がどうなるかは、前例がない。だから申し訳ないと思うが、OGIグループは退院を許可できず、考朔本人もそれを望んだために、彼は今もこの山の向こうに入院しているのだ。

だが、それが、千歌の友達だったとは。

もしかしたら、見舞いに来ていたあの女子高生たちも、梨子と顔見知りだったのかもしれない。

なんて偶然だ。

いや、必然か。

死にかけた街の、狭きゆえの。

「梨子」

「ん？」

「この街にいたいのか？」

フロントガラスを見つめたままでも、梨子が桑介を見たのが分かった。

「……お母さんは心配だし、お父さんにも迷惑はかけられないし、やっぱり——」

「——梨子はどうしたい？」

もう一度、問う。

「私は……分からない。分からなくなるの」

梨子の目が伏せられた。

「私、仮面ライダーだよ。みんなを護る力がある。なのに、この街を離れるなんて、できないよ」

桑介は眉を寄せた。

それが、この街を離れたくない理由なのか。

そんな利他的な理由が。

「遊びに行きなさい」

気付いた時には、口にしていた。

「いいの？ ううん、いいんだよ、なにかあつたら、連絡を入れても」

「この街には、梨子を除いても三人も仮面ライダーがいるんだよ。そのくらい、お父さんなら調整できるから。心配しないで」

「ほんと？」

「ああ。だから、みんな忘れて、遊びに行つてきなさい」

その言葉に、梨子は歯を見せて笑った。

間違いを犯そうとしているのかもしれない、と桑介は思う。

父は平社員であり、会社は仮面ライダーを開発するOGIグループであり、この街はフォーメアに襲われているのだ。

だがそれが、たった一六歳の娘に、なんの関係があるというのか。

*

翌火曜日の午前一〇時三〇分。

意識を取り戻した桜内梨子は、逆光の中で自分を覗き込む四つのお面を目にし、息を吸い——

「リリー、落ち着いて！ 怪人じゃないから！」

——割り込んできたシニヨン頭の少女に、息をとめた。

「津島さん？」

「あ、気が付いた？」

もう一人、声と共に視界に入ってきたのは、ツーサイドアップの少女だ。少女はしゃちほこ張って姿勢を正すと、頭を下げた。

「あ、あの、初めまして。私、黒澤ルビイっています」

「あ、うん……」

上の空で自己紹介を聞きながら、ソファから身体を起こして、薄手のジャンパースカートを着た自分を眺める。

そして徐々に、ここまでの経緯が蘇ってきた。

沼津で過ごす最後の一週間になった梨子は、自分にできることがあれば思い、衣装、ダンス、作曲の各状況を確認しようとしていた。自分の今後のことも、そこで話せばいいかな、と。

そしてゴールデンウィークの初日、衣装制作現場の津島家宅に視察に来たところ、玄関のドアを開けた人物に驚いて即倒したのだった。

「なんなの？ その……なに？ その人たち」

刈り込んだ頭に能面を被った四人の黒服を見回し、梨子は眉をひそめる。

「黒服さんは、ルビイのボディガードなんです」

「ヨハネのリトルデーモン六号く九号だって！」

説明になっていない。

だが長押にかかっている八つの能面を見れば、別に聞かなくてもいいか、と思う程度には状況を把握できた。

だからルビイに向き直り、意識して笑顔を作った。

「えっと、話すのは初めてだよね。私、桜内梨子。千歌ちゃんの作曲のお手伝いしてるの。よろしくね」

「あ、はい、こちらこそです！」

ルビイは安心したように、今度は元気よくお辞儀をした。

後輩に笑いかけると、善子の指示で部屋の中央に運ばれてくるトルソーを見る。そこには白地にくすんだ水色のグラデーションが入った服が着せられていた。曜がデザインした衣装のカラーバリエーションだ。事前の情報の通り、一着はもう完成しているようだ。

「ねえ、あんまり悪魔っぽくないよ」

「見た目に騙されちゃダメだって！ 顔がグワツて開いて、あんなんか丸呑みよ！」

「ピギイ！」

聞こえてるよ。

「それで……。衣装ってどうなってるの？」

「曜先輩のは完成、私のは型紙の手直し中。千歌先輩のは未着手、まだ採寸もしてないわ」

「採寸してないの？ あと二週間しかないのに？」

「あ、いえ、それは、その」

梨子が疑問を口にするのと、コピー用紙を見ていた善子は、なぜか冷や汗を流しながら距離をとった。

「あ、あの！ ほんととは今日しようと思ってたんです。だけど千歌先輩、ウチの仕事で来れなくなっちゃって」

ルビイが弁明するように言って、梨子は思い出す。

「そうだ、千歌ちゃんのお姉さん、ゴールデンウィークも仕事になったんだよね。ごめん、津島さん」

「い、いいわよ、面倒でズルズルきちゃったのは事実だし」

善子はタメ口でそう言いながらも、少しづつ梨子から離れていく。そして型紙の書かれたコピー用紙に目線を落としてからも、チラチラとこちらを見てくる。

(……怖がられてる?)

どうして？

と思いかけて梨子は、善子が、千歌と梨子が仮面ライダーだと知っていることを思い出した。そしてその件で、鞠莉に静岡OGIの一室に監禁されたことも。ルビイは詳細までは知らないだろうが、善子の印象がスライドして漠然とした恐怖心を抱いていると推測する。

だがその誤解を解くのは厄介なので、一旦、放置することにした。怖がられているなら、少なくとも舐められることはないだろう。

「で、どうするの？ すぐにでも作り始めないとまずいよね」

「今日は私の型紙を完成させちゃって、明日から千歌先輩の型紙に入

ればいいんだけど」

「津島さんの衣装、先に作っちゃわないの？」

「型紙熱がホットな間に、千歌先輩のも始末したいの」

その方が効率的か。

「じゃあ、今日中に千歌ちゃんの採寸に行くしかないのね」

「ルビイがクルマで行ってきてもいいけど——」

「——でも、そしたらルビイ、戻ってこないでしょ？ 午後から弓の練習なんだから。リトルデーモン連れていかれちゃったら、正直、手直しは辛いわよ」

まさにその作業に入ろうとしている善子が、ルビイに言う。

「うーん、黒服さんはルビイから離れられないから……」

梨子は少し考えて、手を打つ。

「私が採寸のやり方を覚えて、行ってこようか？ それくらいならできると思うし、二人の作業も遅れないでしょ」

それが最善手だ。測る場所や測り方を忘れてしまっても、電話で確認すればいい。

「できれば測る場所のリストがあると——」

「——ヨハネちゃん、写真スタンバイ」

気付けば目を輝かせたルビイが、すぐ横でメジャーを伸ばしている。

「え？ え？ なに？」

テープが梨子の肩に当てられ、首の後ろを通って反対の肩まで走る。

それを善子の電話が撮影した。

次に肩に当てたテープを、手首まで下ろす。

「梨子先輩、解剖学的ゼロ度でお願いします」

「解剖学？」

ルビイの注文に困っていると、善子が梨子の手首をぐりっと回し、親指を上に向けた。

「この角度らしいわよ」

また写真を撮られた。その画角から、測り方と見るべき位置を撮影

しているのだ、と梨子は察する。

「この通りに数値を調べてくればいいの？」

「はい」

その間にもルビイがメジャーを巡らせ、善子がシャッターを切っていく。

「だからって、別に私を実験台にしなくても——ひやああああ!!」

ジャンパースカート越しに胸を鷲掴みに持ち上げられ、梨子は高い悲鳴を上げた。

「おっきいなあ」

「いいよなあ」

プロの黒服とはいえ、男の人の前でこんな目に遭わされるなんて……。

第一〇話：傷付けたって構わない — 2

*

「それじゃ、頼んだわよ、桜内社外取締役！」

「データは写真でもいいですよ！」

採寸の実演でよれよれになった梨子は、黒澤家のリムジンで内浦まで送られていった。

「あの三人の中なら、俺の推しは断然、梨子ちゃんだな」

津島家宅のドアの横に立つ、曲見しやくみの能面を頭に乘せた黒服の来間急一が言った。

「でも、最近の女子高生の発育、ヤバくないか？ 俺の子供の頃って、もつと芋っぽい子が多かった気がするけど」

「口を慎め、業務中だぞ」

ドアの反対側に立つ貴光が、直立不動のまま小声で返す。

ボディガードは津島家宅に近付く不審者を警戒していた。家主が屋内にいない場合は中に入れない規則なので、急一と貴光が入口で、流平が駐車場からベランダ側で張っている。功はルビィのそばだ。慣れない配置に感じるが、これが訓練してきた本来のフォーメーションであって、四人全員が居間に上がりこんでいる状況が不自然といえる。

「いいなあ、梨子さん、スタイルよくて」

「ルビィに比べたら、みんなスタイルいいんじゃない？」

「う……」

先輩を見送った善子とルビィは、道路で立ち話を始めたようだ。

「でも、思ったより普通の人だったね。なんで怖がってるの？ ヨハネちゃん」

「いや、やばいんだって、ほんと、墮天使の私でもビビる常軌の逸しっぷりでさ」

「ふうん？」

二人が、急一たちがいるアパート二階の共用廊下に戻ってくる気配はない。

「なあ、真面目な話、どう思う？　もしスクドルとして本格的に活動を始めたら、危ないヤツも集まってきたそうなんもんだろ？」

「危ないフアンはそう多くない」

「ええ？　だってドルフタって言ったら、犯罪予備軍じゃねーの？」
「相手が誰だろうと、護衛対象を護るのが我々の業務だ」

貴光は口では平然と言ったが、横目で飛ばした視線は鋭く、急一は気圧される。

「ま、まあ、そりゃそうだけどさ」

ドルフタをイメージで評した急一は、バツが悪くなつて一度口を閉じた。

「でもさあ、梨子ちゃん、あんな感じで危ない目に遭わないかなあ。ちよつとぼんやりしてるっていうか、護つてやりたい感じっていうかさ。そうだ、俺たちがスクドル全体のボディガードになればいいじゃん！　そうすりゃ、いつだって超特急で護衛できるぜ」

「桜内梨子はアイドル活動に参加しない」

その断定に、急一は眉を寄せる。

「なんでそんなこと知ってるんだ？　あの子の情報、関連資料にはほとんど載ってなかっただろ」

「当然だ、桜内梨子は小原家側の人間——敵だからな」

真正面を見たまま放たれた貴光の言葉に、急一は一瞬言葉を失う。

「なんだよ、それ、どういう——」

「——休憩終わり！　リトルデーモン集合！」

外階段を登ってきた善子が手を叩き、急一たちは姿勢を正す。ルビイと地上に下りていた二人の黒服も戻ってきた。

「さて、挨拶が遅れちゃったわね。リトルデーモン初日から悪いけど、聞いている通り余裕はないわ。素早く仕事を覚えて、私の手足になってちょうだい。働きぶりに応じて報酬も考えてあげるわ。いいわね」

四人の黒服が、声を揃えて返事をする。

急一も疑問を飲み込み、頭の上から能面を下ろしてリトルデーモンと化した。

*

「あれ……梨子ちゃん、来るの……？」

畳に頬を押し付けていた高海千歌は、受信したテキストを見て、ごろんとひっくり返った。

にぎにぎと手遊びしていた濡れた海泡石が、手から離れて転がっていく。

「来てほしくないなあ……」

顔を覆った髪を鼻息でどかし、自分が真っ白の長襦袢を着ていることを意識する。

日本の旅館は基本的に、何週間もの滞在を想定していない。そして昼過ぎの宿泊手続きから朝夕の食事、翌朝の退室手続きで回っているため、昼の時間帯は多くの手を必要としない。それは五月三日の老舗旅館《十千万》も例外ではなかった。

ゆえにいつものようにパントローと客室係の手伝いに入った千歌は、飛石連休を有給休暇で埋めた客の朝食の配膳や片付けから、退室手続きや客室清掃に走り回った後、旅館裏の高海家自宅の自室で休んでいたのだ。

「このまま会っちゃおうかな……」

長襦袢は和服における下着だが、薄手の和服に見えないこともない。お泊り会の夜と考えれば、パジャマで会うのも不自然ではない。

「んん……ドン引きされてもなあ……」

曜相手なら通用するが、梨子にはどうだろう。新しい友人にどれくらい腹を割れるか、千歌は測りかねている。

結局、砂浜に打ち上げられて駆除されるのを待つクラゲのように、箆笥まで這いずっていき、和服用のブラとパンツの上からTシャツとジャージに着替えた。

「うーん、これでいいかなあ」

それはあからさまな部屋着で、梨子に外で話そうと言われれば恥ずかしい格好ではある。

でも、それなりに決めた服を見繕う時間はなさそうだし、そうだ、いっそ十千万で作業する時の和服を――

ぴんぽーん、とタイムアップが告げられた。

「——ああ、もう、しょうがない」

なにか言われたら言われた時だ、と千歌は玄関に向かい、引き戸を開けた。

「いらつしやい、梨子ちゃん」

しかし来客は挨拶より前に、

「小さくなった？」

と千歌の胸をマジマジと見て言うのだった。

*

「いきなりおっぱいの話なんてする？」

「それどころじゃないの、急いで急いで！」

千歌の背中を押して三和土で靴を脱いだ桜内梨子は、そのまま、もう何度もお邪魔している千歌の部屋まで上がり込んだ。

「それ、さらしても巻いてるの？ 千歌ちゃん」

「違うよ、和服用のブラだよ」

「和装ブラ？ タイミング悪いなあ。とつちやうわよ」

「え？ え？ あ——」

千歌のTシャツの前をまくり上げ、露出した和装ブラのフロントフラスナーを真っ直ぐ下ろす。

潰れていた乳房がこぶりなお椀型を取り戻し、梨子の目の前で揺れた。

「——そうそう、こんな大ききだったよね」

虫刺されのような慎ましい乳首を横目に、Tシャツを下ろす。

「り、り、梨子ちゃん……？」

腰が抜けたように、千歌が畳に倒れこんだ。

「ん？」

紙袋からビデオカメラとメジャーを取り出して振り返ると、

「な、なにするつもり？」

ノーブラのTシャツを両腕で抱いた涙目の千歌が、ダイオウグソクムシのぬいぐるみにしなだれかかっている。

「まさか、だ、ダメだよ梨子ちゃん、そんな、高校生がこんなこと」

「千歌ちゃんこそダメだよ、ズルズル先延ばしにしちゃ」

「へ？」

「ほら、ルビイさんと津島さんが待つてるんだから」

電話のカメラを起動して千歌に向けると、画面に映るその顔が引きつる。

「そういう趣味があるの？ あの人二人」

「趣味？ ああ、ルビイさんは趣味だけど、たぶん津島さんは私たちに誘われてからよね」

「誘ったの!？」

「私が連れてきたんじゃない」

「そうだったの!？」

梨子は千歌の手を引いて立たせると、背中側に回って姿勢を正させる。

胸を抱えている腕を下ろさせ、自分がされたように手のひらを前に向けて捻る。

「力、抜いて」

「う、うん」

「緊張してるの？」

「動揺してるよう」

梨子の時のように黒服たちが見ているわけでもないのだから、恥ずかしがらなくてもいいのに。

「でも、そっか……。ルビイちゃんは、なんとなく分かる気がするなあ」

「そう？」

「好きそうな感じするじゃん。その、そういうの」

喋る千歌の右肩にメジャーを当て、首の後ろを通して左肩まで走らせる。その数字を電話で撮る。

「やっぱり姉妹がいると違うのかな。でも、ちかっちもお姉ちゃんいるけど、別になんともないよ？」

「ダイヤさんは別に、好きじゃないんじゃないかな」

今度はメジャーを首の後ろから腰の付け根まで伸ばして、数値をチエック。

「じゃああれだよ、姉妹でじやれてるうちに、段々さ」

「作りたくなるの？」

「子供を？」

「え？」

「あ、千歌ちゃん、腕、持ち上げて」

よく分からない受け答えをする千歌の腕を下から支え、肩から手首までメジャーを下ろす。

「……梨子ちゃん？ なにしてるの？」

「これは、えつと……袖丈」

「へ？」

「今回の衣装はノースリーブだけど、一応、採寸してって」

「採寸？」

「千歌ちゃんの衣装、明日には作り始めないと——」

ぐにや、と千歌の身体から力が抜けて、畳にくずれた。

「——ちよつと、ちゃんと立っててよ！」

「だから和服のブラ外したの？」

「胸のサイズが分からないと、測れないじゃない」

千歌は、信じられない、と言いたげな顔で梨子を見上げたが、やがて笑い出した。

「なんだあ、もう、ビックリさせないでよ、梨子ちゃん！」

「私、ビックリさせるようなこと、言った？」

「だって——」

言いかけた千歌は、溜め込んだ息を吐き出すように笑うと、立ち上がって腕を広げた。

「——なんでもない、さっさと測っちゃお！」

そこからの千歌は協力的で、梨子は一五分ほどですべての採寸を完了した。

「データ、受け取ったって」

能面を被った四人の黒服に囲まれて自画撮りを決める、ルビィと善子の写真を見て、梨子は安心する。

善子の家ではバタバタしていて沼津を去る件を伝え損ねてしまっ

だが、これだけ仲がよければ、衣装組は問題ないだろう。

だが作詞作曲組は、梨子がいなくなる影響が大きいはずだ。梨子は表情を引き締める。

「千歌ちゃん、ちよつと時間ある？ 私、今週でね——」

顔を上げた直後、両肩に置かれた手がジャンパースカートの肩紐を外した。

「——沼津を……え？」

くしゃくしゃになった布が、音を立てて畳に落ちる。

「え？」

ブラウスの裾から、太腿が露出する。

「え？」

振り向くと、野獣の眼光で笑う千歌が、両手をワシワシさせている。

「梨子ちゃん」

「千歌ちゃん？」

「梨子ちゃんのおっぱいも見せろお！」

「千歌ちゃ、ちよ、ちよつと！ やめ！」

ベッドに押し倒され、パステルカラーの中で甘い匂いと柔らかな感触に包まれる。

意外と悪い気はしなかった。

*

浦の星女学院スクールアイドル同好会には現在、千歌、曜、果南、善子、鞠莉、花丸の六人が所属している。その中でパフォーマンズをする予定のメンバーは、千歌、曜、善子の三人だ。

だが今日の水曜日、千歌は家の手伝い、曜は高飛込の練習がある。だから花丸の電話が流すインテンポの電子メトロノームに合わせて踊るのは、善子一人だった。

練習着というにはオシャレなフリルのミニスカートとドロワーズで、曜がデザインした振りを黙々とこなす。

「あ、ダメだ、分かんない」

その腕がこんがり、足が止まった。

「いい感じだよ、ヨハネちゃん！ いつの間にそんなに覚えたの？」

花丸が駆け寄り、スポーツドリンクのボトルを渡す。

「これくらい、この世界のあらゆるマンスをダスターした墮天使《イヒ》の力を借りる踊りのヨハネが神の——あれ？」

声色を作るどころか台詞が崩壊している。

「休憩する？」

「ん、もうちよつと頑張る」

そんな一年生二人の会話を遠めから見ていた梨子が、目を細めて口を押さえた。

「暇そうだね」

松浦果南はそれを見て、意地悪そうに笑った。

「ごめんなさい。こんなにサポートしてくれる人がいたら、私は必要なかったな、って」

あくびを噛み殺す梨子とは対照的に、果南は遠慮せず伸びをする。

「私の出番もないね。一応来てみたけどさ」

見上げると、木々に切り抜かれた空の上を、千切れた雲が流れていく。山から吹き下ろす初夏の軽やかな風が、森の中にぽっかりと空いた草原の空気を洗い、果南の高いポニーテールを揺らした。

四人が練習場所として選んだのは、花丸の実家である妙法寺からさらに参道の階段を上った先にある、旧寺地の空き地だった。

ボトルに口をつける善子と彼女の髪を結わき直す花丸がいるのは、数十年前からあるような石畳の舞台。果南と梨子が座っているのは、そこから少し離れた場所にあるベンチだ。浦女の体育館より広い空き地には、それしか人工物が残されていないかった。

「あ、カミキリムシ」

「えっ!」

ベンチの下、誰かが踵で削ってできた凹みの水溜りに、小指ほどの大きさの虫がいた。

そつとつまみ上げ、

「や」

手のひらを見せて挨拶すると、カミキリムシはキリキリと鳴き声を上げた。

それを見た梨子は、身を反らせて果南から離れた。

「苦手？ お友達でしょ？」

「そんなわけないじゃないですか」

心外そうな顔をする梨子に、果南はまた笑う。

「ちゃんとした練習場所、やっぱり欲しいですね」

「ダンスには向いてないよね。これから虫も多くなるし」

ここを提案したのは果南だった。小学生の頃、ダイビングの体力作りで沼津アルプスを縦走した時に、徳倉山の山頂付近から西へ下山したルートの途中でこの場所を見つけたのだ。

もちろん、自分の踊りのチェックができる鏡やガラスもないので、ダンスの練習場所としては相応しくない。しかかも昨夜降った雨のせいで、むき出しの土はどこどころぬかるんでいるし、小動物や虫も目立つ。

それでも、衣装制作に忙しい善子が住んでいる下香貫から、近い範囲で練習場所を探せば、こういう場所になってしまうのだ。

「うし、一番のAメロからいくわ。花丸、ちよつと歌ってくんない？」

「え、マルが？」

「なによ、聖歌隊なんでしょ？ この程度の楽譜、初見で歌えて当然じゃない」

「ヨハネちゃん、横暴ずら」

集まってなにかしている二人を、梨子が首を伸ばして見ている。

「フォーメーションの練習って、始めてます？」

「フォーメーション？ 私は聞いてないなあ」

ダンスの練習を見に来たのは今日が初めてなのだから、果南が分からないのは当然なのだが。

「あと一週間なんですし、そろそろ三人揃って練習をしないと——」

「——『やってみたい、動き出した心は』」

背筋が凍った。

「誰、この声」

梨子が呟くが、その視線が一点を見ている通り、答えは分かっていた。

電子メトロノームの音を鳴らす電話を見る花丸は、目を丸くして固まっっている善子を見て、口を膨らませた。

「ヨハネちゃん！ 踊らないなら歌わないずらー！」

「花丸、あんた……そんな歌上手かったの!？」

「ずらっ!？」

善子が駆け寄り、花丸の頭を掴んだ。

「こんな喉があつて！ なんで『私が出る』って言わないのよ！」

「お、オラはダンスのアドバイザーずらあ！」

「ちよ、ちよつと、津島さん！」

梨子が立ち上がり、二人のところへ走っていく。

そして一言二言の会話ののち、戻ってきた。

その後ろで、花丸が指揮者のように手を上げる。

「じゃあ今度こそ行くよ、ヨハネちゃん」

そして歌い出した。

「ビックリですね」

果南は首肯するしかない。

千歌と曜の歌練習の場では、音程リズムの正確性は自分が一番だと思っていたが、花丸のそれは段違いだ。

メリハリの利いた高音に、伸びやで抑制の効いたビブラート、それらを包み込むように柔らかく響く中低音。

梨子にオーボエのようだと言われた果南の声とは違う、オペラ歌手のような丸みと深みのある声。

いや、そんな理屈じゃない。

聴いた瞬間、満ち潮のように身体に染み入り、引き潮のように心だけをさらっていく。

そう気付いた時には、もう手を伸ばしても届かない。

星のように。

一目惚れだ、と果南は意識した。

「これなら、歌の練習も任せちゃえそうです」

だが梨子は、眉を寄せて口を曲げていた。

「不満そうだね、出番を奪われたから？」

果南が横目で見ているのに気付いた梨子は、無理に笑顔を作りかけたが、諦めたようだった。

「津島さんですよ」

「ああ……」

「基礎的な身体ができてません。このままじゃ——」

——と梨子が言いかけたところで、善子の腕がこんがらがらせ、立ち止まった。

「ダメだ、まだダメ。通しは無理」

「十分ずら！ ヨハネちゃん、衣装も作れるし踊りの覚えも速いし、ほんとすごいずら！」

花丸が方言丸出しで褒めるのも当然で、ダンスの振り付けは二日前に曜の参考動画が展開されたばかりだ。にもかかわらず、パートパートで区切って踊る善子の振りは、ほとんど完璧だった。踊りながら口が動いているのを見るに、歌と曲も頭に入っているのだろう。花丸の歌に驚いたのと同じくらい、果南にとってはそれも驚くべきポイントなのだ。

「おべっかなんていいわ」

「そんなんじや——」

「——頭から行くわよ」

善子は初期ポーズで立つが、シユシユでまとめた姬カットの先からサイハイソックスまで汗だくで、ひとたび動き出せば、リストバンドに染み込みきれない汗が指先から舞い散る。顔付きも鬼のような形貌で、余裕のなさが目に見えていた。

梨子の指摘の通り、善子は身体ができてない。特に足回りだ。腕の振りこそ切れがいいが、一分も踊り続けるとみるみる膝が上がらなくなる。同期して上半身からも精細さが失われ、それを補うように動きが激しく——言い換えれば雑になる。そしてこんがらがってしまう。

「テクニックで踊ってるね。覚えが早くても、これじゃしょうがないなあ」

梨子も頷いた。

だが果南は、善子にアドバイスするつもりはない。自分は人数合わせの補欠なのだ。

だから、

「言ってあげれば？」

梨子を促した。

「でも、津島さん、傷付くと思うし」

「あんな状態でステージに上がる方が、よっぽど傷付くんじゃない？」

果南の指の間でゼンマイ細工のように手足と顎を動かすカミキリムシを、梨子は見ていた。だが立ち上がると。善子と花丸のところに向かった。

その先は、なんとなく想像できた。

梨子の話に思うところがあつたのか、踊りを中断した善子は頷くように膝に手をついた。

花丸は首を振つたが、苦笑した善子の発言で、肩を震わせ始めた。そうなれば、善子は上がらない脚で走り去るしかなかったようだ。

梨子は、脚をもつれさせて泥の上で転んだ善子に呼びかけたが、結局はしゃがみ込んだ花丸の肩に触れた。

息を漏らす。

なにも感じなかった。

二年前の自分なら、梨子の隣で花丸を励ましているか、善子を追いかけて横面を引つ叩くか、どちらかだっただろう。

だが今の自分は、感情移入の回路が動作していないように思える。

膝に肘を置き、脚の間を見下ろす。

泥水の水溜りに映った顔が、見上げてくる。

その非難にも似た視線の方が、よほど人間味があつた。

「やっぱり、ずるいな、私」

カミキリムシはその複眼で果南を見ていたが、やがて指から逃れ、どこかへ行ってしまった。

第一〇話：傷付けたって構わない — 3

*

「梨子ちゃん！」

走り去るバスの手前に、メモを片手に歩いてきた梨子を見つけ、渡辺曜は手を振った。

「誰あれ、友達？」

「そー！」

弁当の残りを口にかきこみ、弁当箱とそれを包んでいたバンダナを雑にスクールバックにねじ込むと、屋外備え付けのテーブルから飛び出した。

「じゃ、またあとで！」

「おー」

「メシ吐くなよ」

昼食を共にした他校の生徒に手を振り、曜は走り出す。

リボンをほどこいた制服の首元に空気が流れ込み、遅れて弾む濡れた髪の毛の摩擦が心地よい。

芝生の中央を伸びる石畳の小道が、靴下も履いていないデツキシューズに跳ね返してくる感触に、足の回転が速くなっていく。

身体を動かすのは楽しい。

そんなシンプルな気持ちに、笑顔が立ち上ってくる。

「梨ー子ーちゃんー！」

濃いインディゴのジーンズ上下の梨子は、なぜか両腕で胸を押さえた。曜はその二の腕を掴むと、梨子を中心に回転するようにスピードを殺した。

「よ、曜ちゃん？」

「行こ行こ、誰もいないとこ」

「だ、誰も!? って、口、飲み込んでから喋ってよ！」

「ふぁーい」

先週先々週の事故の影響が収まった沼津市立総合水泳場は、このゴールデンウィークから通常営業を始めていた。飛込台のような特

殊な設備を求める各校の水泳部はこぞつて集まり、浦の星女学院水泳部の曜もその一人だった。

「さっきの人たち、誰だったの？」

「余所の水泳部。たまに一緒に食べるんだ」

顧問の笠木信代はどこかに行つてしまつたし、先週一緒に練習した幼馴染みの考朔は引き続き入院中、そして浦女の水泳部は曜一人だ。そういう時は、持ち前の社交性の高さで周辺の人に溶け込み、楽しい昼食を過ごすのだ。

「久々の顔が多かつたよ。最近トランポリンとか柔軟とかばつかでなまっっちゃつ——て、どしたの？」

梨子の笑顔が如何にも作り笑いで、曜は眉を潜める。

「うん、ちよつとね……」

曜は歩調を落とし、水泳場のドームの周りに沿つて歩きながら、梨子の話を聞いた。

「色々あつたんだね」

詳しい経緯から出てきた、ざっくりとした感想に、梨子が苦笑する。

「ヨハネさん、悪気はなかつたと思うの」

「でも、『花丸の時間をムダにしちやつた』は、うん……」

「まあねえ……」

善子としては、謝罪のつもりで言ったのだろう。だがダンスをしたこともなければ運動や格闘技もしていなかつた善子の現状はむしろ当然で、そのために、振りを完成させた花丸がフォローに回つていたので。

その役割をムダを呼ばわりされれば、普通は怒る。花丸はその矛先を、自分に向けて泣いてしまったにすぎない。

だが、善子の気持ちも想像できた。自分にはなにもできないんじゃないか、それは曜もたつた一週間前に感じていたことだったからだ。「で、この曜ちゃんのところに相談にきたわけか。わざわざ歌とダンスのチェックなんて都合つけて、可愛いヤツだなあ、梨子ちゃんは」「ううん、それがメインだよ」

「えっ？ な、なんで急に」

「いいじゃない」

そうこうしているうちに、二人はドームを半周ほど回り、平たい管理設備の建物とドームの隙間にできた行き止まりにきた。

「ここなら誰も来ないでしょ」

「う、うん」

なぜか警戒している梨子を余所に、スクールバッグを置いた曜は準備運動をする。日が当たらずに湿ったままのコンクリートの匂いが、背伸びや屈伸の動きで乱され、空間の新陳代謝が始まる。

「もしかして、見られないようにするために？」

「あと聞かれないように。なんのつもりだと思ったの？」

梨子は「いやあ」と呟くも、気を取り直したように電話を構えた。

「一応撮影するけど、平気？」

「平気平気。じゃ……イントロから行くよ」

曜は自分の電話を離れたところにおくと、タイミングを計るクリック音に合わせてパフォーマンスを始めた。

*

電話を構えた桜内梨子は、カメラで曜の全身を収めながらも、肉眼は本人を観察していた。

相変わらず、曜のダンスは安定したクオリティだ。自分でデザインしただけあつて振りは完璧だし、高飛込で鍛えているためか動作の緩急の鋭さは群を抜いている。

なにより、曜のダンスは楽しそうなのだ。

基本、頬と口角を上げた笑顔で、難しい振りが決まった時の「どうよ！」顔も、多幸感という以外ない。この表情を意識して作っているのだとしたら、アカデミー賞女優級だ。

花丸が身体性のレベルで歌を会得しているように、曜にとってのそれは水泳でありダンス——身体を動かすことそのものなのだろう。

身体の柔らかさも三人の中では随一で、上半身を維持して膝を上げる振りの決まりっぷりは——

「——よ、よ、曜ちゃん！」

「なにっ？」

「パンツ！ パンツ！」

「へ？」

クリック音をバツクに足を止め制服のスカートを見下ろした曜は、不意にそれをめくった。

「ちよ!?」

「あ、短パンはいてなかった」

筋肉質の太ももの付け根を覆うグレイの布地が見え、梨子は片手で顔を覆った。顔の下半分を。

「もう、しまつてよ！ それ！」

「いいじゃんパンツくらい、女同士なんだし。ほらほら」

「オープンマインドすぎるよ！ 曜ちゃん！」

今日はなにも起こさせないで、デニム地のジーンズできたのに。

ゴールデンウィークが始まってから、梨子の周囲がどうもおかしい。

これは夢か？

「もう、ダンスは分かったから、歌のチェックをします」

「ほあーい」

曜は地面に置きっ放し&クリック音流しっ放しの電話を一瞥すると、真顔で息を吸い、歌い出した。

「……うん」

アインザッツの思い切りのよさ、ピアノシモとフォルテシモの音量の差、音程の維持など、ツボは押さえている。歌詞はまだ覚え切れていないのか、鼻歌になったり口ごもって半笑いになったりもしているが、歌のクオリティとしては及第点だ。

「いいと思うよ……」

梨子が眩き、曜の歌がとまる。

「どしたの？」

「ごめん、うん……」

花丸の歌を聞いた後だと、どうしても物足りなく感じてしまう。比較するのは悪いと分かっているが、現状は「頑張っているが上手くはない歌」だ。

「『テクニクで踊ってる』か」

果南の言葉を口に出し、頷く。

「曜ちゃん、私が教えたこと、一回、全部忘れて」

「え？」

「歌いたいように歌ってくれる？」

「難しい注文だぞう、それ……」

曜は困惑しながらも、クリック音に合わせて口を開いた。

『キラリ』——」

「——あっ」

梨子は思わず、歌い出しで笑ってしまった。

そのリアクションに曜も眉を寄せて笑ったものの、足で地面を踏みつつ片腕をクルクル回して歌うにつれて興がってきたのか、段々と満面の笑みが戻ってきた。あまつさえ、

「乗ってきた！・ 曜ちゃん、踊っちゃうぞー！」

そのまま振りを乗せてパフォーマンスを始めてしまう。もうパンツがどうこうは忘れている顔だ。

曜を踊るに任せ、梨子は一步引く。

（元気だなあ）

輪郭のはつきりした歌声に、梨子は自然と笑顔になる。心も浮き足立ってくるようだ。

歌い切った曜は、アウトロまで踊って最後のポーズを決めたあと、「ありがとう！・ ありがとう！」

と拍手をする梨子と架空のオーディエンスに、手を振って応えた。

「よかったよ、曜ちゃん」

「知ってたー！」

てらいなく敬礼する曜に、梨子は安心した。

この資質こそ、アイドルに求められるものの一つかもしれない、と梨子と思う。

アイドルソングは、各人の個性を殺して歌声を揃えたり、厳粛な気持ちにさせたりする類のものではない。

ならば、必要以上に譜面の正確性を追求するレッスンは、むしろ余

計かもしれない。

(やっぱり歌練習も、私がいなくても平気だね)

ようやくその話ができそうだ。

なにしろ昨日、千歌の家から解放された時には、埃まみれのはたきのようにぐったりしていたのだから。

「あのね、曜ちゃん。私、今週末で——」

電話が振動する。梨子のものだ。

「——ごめん、誰だろ」

内心舌打ちして画面を見ると、『津島さん』の文字とゴスロリ姿のプロフィール写真が映っていた。

「ヨハネさんだ。ちよっと待って——」

「——あ、私、もう行かなきゃ！」

「え？ あ、曜ちゃん！」

曜はスクールバッグを肩に走りながら、梨子に手を振る。

「よかったら飛込、見学していきなよ！ それでは、さよならであります！」

「あ、ああ……」

また言えなかった。

梨子は勢いよく俯き、思い出して電話に出る。

「はい、桜内です」

反応がない。

「もしもし？」

いや、荒い息遣いが聞こえる。

まさか、善子の変質者に捕まり、成人向け同人誌みたいな目に遭っているのか？

それは杞憂だった。

ややあつて、スピーカーの向こうで風と衣擦れの音がして、後輩の声が出た。

「聞きたいこと、あるんだけど」

*

「来ちゃってよかったの？」

「もちろん——」

ずらりと並ぶ水色の座席の端に座っていた桜内梨子は、階段状の通路を下りてきた後輩を振り返り、

「——どうしたの、津島さん」

眉をひそめた。

「その服……ってというか、髪ってというか」

ゴシック&ロリータ服はフリルがめくれてグチャグチャになり、頭の上のシニヨンもほとんど崩壊していた。まるで突風に立ち向かったかのような有様だ。

「ちよつと、ここ座って」

「いいよ、汚いから」

「いいからー」

梨子は後ろの座席に回ると、一段下の席に座わった善子の髪を持ち上げる。髪は汗で滲んでおり、その下に隠れたシャツもスカートも濡れていた。

運動していたのか？ わざわざこんな服に着替えて？

疑問に思ったが、口には出さない。

飛込台の上に立った曜がこちらを指を差し、梨子は手を振って答えた。

水影揺らめく沼津市立総合水泳場のドームの下、競泳プールに隣接した飛込プールでは、十人前後の男女が代わる代わる飛び込んでいく。曜もその中の一人だった。

反響するバタ足の水音と笛の音、プールサイドいる顧問らしき人々の声を聞きながら、梨子は善子の髪をハンドタオルで拭く。

電話を受けた梨子は、暗い声の善子をなだめ、このプールに呼んだ。あまり大っぴらに話をしない方がいいだろうと考え、屋内の見学席を指定したのだ。

「さつきも言ったけど、一長一短で体力はつかないよ」

一度抜いておいたピンで、くるくる巻いた髪をとめる。

「はい、できましたよ。ちよつとズレちゃったかも」

「……ありがとう」

「うん」

善子に一つ奥に詰めて貰い、隣に座る。

「さつきはごめんね。もう少し言い方、考えればよかった」

「構わないわ。墮天使の道は受難の道。荊の冠を抱きし乙女は、常に傷の痛み能耐えねばならないのよ——」

いかにも強がりな墮天使モードに、梨子は苦笑するだけで二の句が思い浮かばない。

その気まずい空気をごまかすように、

「花丸も泣かせちゃったしさ」

と善子は眩き、飛込台へと目を向けた。

海水パンツの男子生徒が踏切り、身体を捻りながら落ちていく。ぱしつ、と音を立てて水飛沫があがり、遠くの雨のように、水滴が落ちるまぶしい水音がする。

「歌、上手かったなあ、花丸」

「ほんとにね」

果南の正確さとは違う上手さだった。聖歌隊に入っていると聞いていたが、長い間、歌に親しんできたのか容易に想像できる歌声だった。

「体力付けるって、どうすればいいと思う？ 道系？ 水泳？」

「道？ あ、合気道とか？ それこそ一朝一夕じゃ無理だよ。やるなら、毎朝の走り込みとかじゃない？」

「やっぱそういうタイプか……。鍛えるしかないわよね」

善子が前の座席に顎を乗せた時、飛込台に曜が上がってきた。

プールサイドより高い位置から始まり、段々に上がっていく見学席の上の方において、飛込台はそれより高い。

曜は飛込台の先端に立つと、こちらに手を振り、気軽な調子で踏み切った。足をお腹に抱え、くるくると逆回転して落下していく。

おそらく、いつかパラパラ漫画で見せてくれた曜の必殺技、《前逆宙返り三回半抱え型》だ。《おそらく》というのは、曜の動きが速すぎて、何回転しているのか分からないからだ。

ブランキアに変身していれば、分かるだろうか。

そんなことを考える間に、ぱさつ、と小さな音と共に低い水飛沫が立ち、周囲のどよめきが聞こえた。

「すごいよね、曜ちゃん。一〇メートルの高さから飛び降りるなんて」
梨子の言葉に、善子の長い睫が上下に動く。

「私、あんなこと絶対できないよ」

「なに言ってるのよ。やったじゃない、中庭で。もっと危ないこともさ」

善子は鼻で笑って言った。

「それは……無我夢中だったし」

「できるんじゃない」

「ん……」

善子が横目で見てくる。

「リリーはさ、なんで仮面ライダーになったの？」

「もう、なんでリリーって言うの？ 小原先輩も、津島さんも」

梨子は言いながらも、周囲に人がいないことを確認する。

「理事長代理はああ発表したけど、ブランキアって本当は、仮面ライダーじゃないんだよ」

「へ？」

善子は初めて表情を崩した。そういう認識なのだ、と梨子は苦笑で返す。

「今年の初めに船の事故に遭って、助かったら変身できるようになってしまっただけなの」

「事故？」

「うん。沼津にだって、その検査で来たんだから」

そのはずだった。

なにもしなくていい、一箇月程度の検査が終われば解放される、と。でも、入学式の時、来てくれたじゃない。戦うつもりだったんでしょ？」

「シャイニーの準備が整う前に、フォーメアが出てきちやったからね。先方から電話で、行ってってくれて」

「それで、戦ったの？」

「みたい」

「みたい、って」

「それこそ、無我夢中なんてレベルじゃなかったから。変身したのも覚えてない。あとで曜ちゃんに映像を見せてもらって、本当に自分が戦ってるって驚いたくらいよ」

「なんだ、じゃあ資質なんてないじゃない」

善子が呆れたように声を上げ、その通りだ、とまたしても梨子は苦笑する。

千歌や曜を助けたいと思ったから、その力があつたから、手助けをしていた。

それだけでしかない。

「私は、仮面ライダーが本格始動するまでの、ただの繋ぎ。だから、ブランキアの出番はもう終わりなの」

「だから帰るの?」

息がとまる。

不意打ちだ。

「知ってたの?」

「資質のない人間に、出番はないの?」

善子は問いを重ねる。

梨子へではない。

見開いた目を、プールへ向けて。

梨子は眉を緩めて俯いた。

仮面ライダーとしてのブランキアに、もう出番はない。

戦うために作られたシャイニーと、自分から戦う力を掴んだ千歌、誰かが変身しているか不明の龍駒、そして花丸が操るロリポリもいる。

これだけ手が揃えば、フォーメアの活動範囲が広くても、まったく対応できないことはないだろう。テレビの発表では、さらに九人の仮面ライダーの計画があるのだ。仮面ライダーに“なっってしまった”自分が抜ける影響など、あるわけがない。

スクールアイドルだっただけさ。

歌詞を考えてみんなを引っ張る千歌、衣装を考える曜、それを作る善子、ダンスを考えるだけではなく歌もうまい花丸。それに、冷静な助言のできる果南、理事長代理としてサポートしてくれる鞠莉もいる。もう余程のことがない限り、一五日のライブで実績を残せるのは間違いない。

ひとたび部活として動き出せば外部サポートも解禁されるだろうから、ルビイも衣装制作に入るだろう。全体の質が高ければ、作曲に手を上げる人も出てくるはずだ。

あの子たちの遠慮のないスキンシップを甘受する誰かは、ちゃんと現れるはずだ。

誰かと手を繋ぐこともなかった私にだって、そうしてくれたんだから。

「私の出番は、もう終わったのよ」

梨子は顔を上げ、善子に笑いかけた。

「そんな顔、しないでよ」

善子は眼を背けた。

「どうしたの？」

「泣くなら、涙くらい流しなさいって言ってんのよ」

頬に触れる。

涙は流れていない。

笑っているはずだ。

違うのか？

「梨子さんはなにがしたいのよ」

「私は、ただ、千歌ちゃんと曜ちゃんの手伝いが——」

「——あんたはなにをしたいのよ！」

立ち上がった善子が怒鳴り、梨子はその背中を見上げる。

「ルビイも、ダイヤさんも……あんたも」

善子は座席を飛び越えると通路に出て、梨子の背後に消えた。走り去る音が遠ざかる。

「どうしてっ……」

嬉しいはずだ。

仮面ライダーに、浦の星女学院のスクールアイドル。

その立ち上がりの手伝いに、自分が関わられたのだ。

居場所をもたない自分が。

東京と内浦の間で、音ノ木坂と浦の星の間で、人間と怪人の間で、泡のように不確かな自分が。

ただの検査旅行に、これ以上の成果があるか？

だから、これは笑顔のほずなのに。

「どうして？」

自分の顔が分からない。

これなら仮面を被ってる方がまだ。

*

時計が零時を回り、木曜日になった。

「休止モードの実装、目処は立ったようですね」

端末に届いた久しぶりにいいニュースに表情を緩めながら、依田義森は静岡OGI本社三階の自分のオフィスに入った。

ラップトップマシンを復帰させ、二〇通ほどの新着メールから一通を開き――

「だから言ったのですよー！」

――思わず毒突いた。

四月二五日に鞠莉に指示され、四月二六日に提出したシャイニーM ark IIIの開発プランの稟議書が、最終決裁権者たる役員会に拒否されていたのだ。

「いや、落ち着け……。落ち着きましよう」

意識せず口に出る言葉を耳にした時、いつからか流しつ放しだった環境音楽に気付く。停止し、背もたれを深く倒して眉間を指でおさえる。

龍駒が現れた日から八日、ほとんど眠れていない。

散発するフォーメアによる人的被害は、仮面ライダーの活躍でゼロに抑えられていた。それ自体は喜ばしいことだ。

だがその実態は、義森が想定したものではなかった。『仮面ライダー』が差す対象は今や、OGIグループが《メルシャウム群》と呼

称していた領域を含み始めてしまった。ブランキア、ワンダ、龍駒と名付けられた個体の存在感が、世間や社内で日に日に増していくのは、もはや誰にも否定できない事実だった。

そして、本来その名が冠される唯一の存在だったはずの《ラギダイザー計画 試作μ-6型》——シャイニーは、危機的状況にあった。義森を悩ませているのは、ここ数日で問題視され始めた「シャイニーの継戦能力の低さ」だった。

初戦においてシャイニーは、ハンドガン型ライダー《エウリュス》を使って、ロリポリ・フォーメアを一方的に撃破した。だがパイラップ・フォーメアと龍駒との連戦では、μ-フォームの強力な破壊力と引き替えに一回使い捨てのエウリュスと、フォーメアや他の仮面ライダーの攻撃を防ぎきれない装甲、二つの問題点が歴然としてしまったのだ。

「あの子はそういうものだど、分かっていたはずです」

二〇一一年三月の時点で、義森はどちらの問題も把握していた。だから義森は最初にフルスペックの仕様書を書いたのだが、次にいつ現れるか分からない、強さの上限も不確定な“怪人”に対抗するための高すぎる理想は、当然のように決裁されなかった。μ-フォームの基礎研究も未熟だった当時では、実装など夢のまた夢の性能を求めているのも分かっていたが、それでも必須の仕様だったのだ。

ゆえに現行技術のみを使用した極限環境作業技術の人体装着型試作機としてのスーツと、エネルギー発生源としてのμ-フォームを利用した外付けの武装にまとめた妥協案を、多忙の中役員会に通してくれたジョルジヨにも、たった三年間で《Mark I》の完成にこぎ着けたてくれた開発チームにも、感謝しかないのは事実だ。

それを今さら、「ラギダイザー計画 試作μ-6型 3号機がメルシャウム群に対抗可能な性能基準を満たすか不確定」だど？

一被検体として廃棄されるはずだったブランキアの、「外部拡張系μ-フォームの素体としての活用プランが必要」だど？

「どこまで僕らをバカにすれば——！」

しかし、義森が声を荒げる場が防音ガラスの中なのは、反論しよう

のない不備も指摘されていたからだ。

その一点は、シャイニーのバックルが龍駒の攻撃で破壊された件だ。

バックルはバッテリー残量表示機能が目を引くが、本質はシャイニーの基幹システムを収める筐体だ。中でも、MミッシュンDデータRレコーダーとSステーションVボイスRレコーダーを収めたブラックボックスは、《ラギダイザー計画》全体を支える重要な役割を担っている。たとえ敗北したとしても、戦闘データが回収できれば、再戦に向けた改善計画によりシャイニーはさらに強くなれるからだ。

それが破壊されてしまった。結果、もつとも必要だった正体不明たる龍駒のデータは得られず、次回も同じ負け方をする可能性を拭えなくなってしまったのだ。

そんな重要な部品がなぜ、腰部前面のベルトバックルにある設計なのか。

対外的には「将来的にフォーマライズ技術によるスーツおよび装甲の生成システムを実装するにはベルトが最適」と説明し、承認も得ていたが、実際は、設計者たる義森の趣味だった。幼少時代に見ていた特撮ヒーローとしての『仮面ライダー』における、「変身ベルト」の引用なのだ。今回の件は、S―ユニットがモニターした「想定の一四〇パーセントの荷重」で説明したが、このまま放置できる問題でもない。

もう一点は、なぜシャイニーが、あの状況下でバカ正直に殴り合いを続けたのか、だ。

S―ユニットは、鞠莉がロリポリの援護を断った声を聞いていた。追加で投入されたエウリュースも、あの近距離なら照準システムなしに左手で撃てたにもかかわらず、鞠莉は使おうとしなかった。

結果、龍駒のムチで拘束された右前腕は装甲はおろかアンダースーツが分断される寸前、上半身の基本装甲は大破、一式まとめて数千万円に及ぶ損害を被った。それだけの破壊のフィードバックがブラックボックスの破損で得られないとなれば、シャイニーの装着者である鞠莉の適正も、彼女を管理する立場のS―ユニットとの在り方さえ

も、疑問視されてしまう。

義森やS―ユニットだけでない、シャイニーの在り方自体の責任問題になりつつあるのだ。

どうすればいいのか。

溜め息混じりにキーボードを叩いて稟議結果メールを閉じ、

「ん？」

別のメールに意識が向いた。

OGI研究所病院に申請した資料の閲覧許可が承認されたメールだ。東京に戻る直前であるはずの桜内桑介が、沼津で提案書を提出したと聞き、気になっていたのだ。

アドレスを辿って資料を開く。

それはフォーメアの個人識別情報を収集する、携帯電話用の短距離レーダーの仕様書だった。

技術者の桑介が書いただけあり、既存技術と携帯電話基地局の更新で実装可能なプランが書かれている。数箇月の間に業務用機器の認可を得て、一般販売とOGI製携帯端末への搭載も目指しているようだ。将来的には情報収集だけでなく、電話で送信したフォーメア情報をサーバーサイドで処理し、即座に結果を返す仕組みも想定もしている。

「これが、桑介さんの提案ですか」

苦虫を噛み潰したような笑顔で、義森は細く細く息を吐く。

このシステムがフォーメア検出ネットワークを作り出し、それが将来のライダーシステムの要の一つになるのは容易に想像できた。

いや、仮面ライダーという仕組みを外側から括ろうとしている、といってもいい。

これならOGI研究所に引き抜かれるのも当然だ。

『これといった成果は上げてない』……。よく言えたものですね」
高鳴る心音を意識する。

袖机の引き出しを開け、手のひらサイズの拡声器を取り出す。いや、拡声器を模した特撮番組の玩具を。

今は雌伏の時だ。

ブランキアに関する一箇月間の実験で、メルシャウム群のデータは粗方集まった。

シャイニーは世間的な認知度と共に、逐次追加される機能により《人体ラギダイズシステム》としての評価も受けつつある。

μフォームの研究機関であるOGI研究所病院の存在は、メルシャウム群の性能の推測精度を向上させると共に、シャイニー全体をμフォームと水から生成する技術の確立にも繋がるだろう。

ファームウエアの刷新計画も、高海美渡という新たな才能をベースに、今まさに進捗している。

別ラインで始まっている「《黒澤鋳物》の複合装甲と《OGILay On》の耐環境コーティングの相乗効果について」の成果物だって、プロトタイプが来月に完成する噂が聞こえてきているのだ。それらがすべて組み合わせられた時、単なるマイナーアップデートではない、真に革新的な《Mark III》が誕生する。

その時、この依田義森のヴィジョンが世界に認められるのだ。

ならば今は、諦めるわけにはいかない。

「黒澤の力まで借りるの癪ですが……仕方ないでしょう」

義森は玩具の拡声器を構えると、自身を取り巻く磨りガラスのパーティションに向けてトリガーを引いた。

第一〇話：傷付けたって構わない — 4

B

「フォーメーション？」

ピンときてなさそうな曜を前に、国木田花丸が咳払いをする。

「今みなさんは、渡辺先輩が考えた振り付けの通りに踊れるよう、それぞれ練習していると思います」

「花丸ちゃんも一緒に考えたよ！」

曜の小声の補足に、花丸は微笑んで頷く。

「本番は三人が並んで踊ります。その振りも考えないといけません」

「そうなの？」

曜が振り返ると、千歌は「そうだよ。ね、梨子ちゃん」と水を向けた。

「え？ あ、うん……。ごめん、なんの話？」

「フォーメーションの話だってば！」

曖昧に笑った梨子に千歌が口を膨らませ、花丸は曜と目を見合わせ、苦笑する。

森の中で練習した昨日と違い、花丸たちダンス組は、十千万の目の前に位置する三津海水浴場に集まっていた。今日は果南が海に出ているのでおらず、代わりに千歌がいる。というより、昼前後に仕事の手が空く千歌が練習に参加したため、花丸が内浦までやってきた格好だった。

梨子が現状確認に各セクションを回っていると知った花丸は、昨夜、千歌と曜のダンスの出来を問い合わせてみた。すると、千歌から通しのダンス動画が着信し、それなりに踊れるレベルに達したと分かった。次のステップに進まねばならない、と考えたのだ。

だが善子は誘えなかった。体力の件もさることながら、学校のチャペルで見せた怒りを思えば、リスクが大きすぎた。

それでも残り一週間しかない以上、グループ全体で立ち止まっているわけにはいかない。自分でできるのは、いずれ追いついてくる善子のために、鬼火を消し、真の道を示すことだけだ。

花丸はもう一度咳払いをして、注目を集める。

「たとえば三人並んで手を下から上げる振りは、大きく分けて三つに分類できます。上げた手が同じ方向を示す場合、前方で交わる場合、後方で交わる場合です。それぞれ、総体として喚起する印象が変わります。μ、sで言うなら『START：DASH!』の最後が典型ですね。三人が一点に向けて手を伸ばす振りが、迷いを脱して一つの未来を目指す、三人の意思を象徴しています」

「腕が短い穂乃果さんが辛そうなのがポイントだよね」

「ポイントじゃないすら」

曜は単語カードのつづりに、メモを取って聞いている。

「細かい動きだけじゃなくて、舞台を広く使って近付いたり離れたりする時も、左右がどの程度のスピードで動くのか、前に行くのか横に行くのか、中央がその間なにをしているのか、一人ずつ変わってきた。また、『僕らは今のなかで』の冒頭のように、動くメンバーと動かないメンバーで別れる振りもあります。九人の群舞ならではの醍醐味ですね」

「中央で立ち止まってキリッとしてるの、気まずそうだよね」

「気まずくないすら」

細かく茶々を入れてくる千歌の横で、曜は首を縦に振る動作をしている。

「曜ちゃん、どう？ 分かる？」

梨子が問いかけると、

「ごめん、全然ピンときてない」

曜は片目を閉じて眉をしかめた。

アイドルの勉強をしているとはいえ、さすがに各曲までは分からないようだ。単語カードを睨んで固まっていれば、花丸にもそれは伝わった。

「じゃあ、まず三人で踊ってみましょう。私はカメラで撮ります」

「オツケー」

「三人？ 私、踊れないよ？」

梨子の言葉に花丸は答えず、太陽を指差すように右手を軽く持ち上

げ、呼吸を整える。

握りと開きの中間の手のひらに意識を集中し、目を閉じる。

手の中に太陽の穏やかな温もりを感じる。

空気の流れにハミングのような音が混じる。

皮膚をつつく感触が手の中に生まれ、やがて天日に晒した井戸水のような、心地よい温さが取って代わる。

「ポリちゃん、Come[＊]！」

手の中に現れた本尊——ム——フォームがすっ飛び、海水浴場の海へと落ちた。

「ウソ！」

千歌が声を上げる中、ぼこぼここと白く泡立つ海水から立ち上がったのは、黒光りする甲殻を背負った身長二メートル弱のダンゴムシ怪人。

「ロリポリ・フォーメア！」

「いいの!? 花丸ちゃん、これ！」

初対面の千歌が砂に尻餅をつき、梨子が周囲に目を向ける横で、
「久しぶり、ポリちゃん！」

曜はロリポリの背中に抱き付き、顔を押し付けた。泡でできた殻に頬のあとがつく。

「へ、平気なの？ 曜ちゃん。それ……フォーメアでしょ？」

立ち上がった千歌は、逆立ちの格好になったロリポリの前面を、舐めるように見ている。

「フォーメアだけど、ポリちゃんだよ」

共にパイルアップと戦った曜はそう言ったが、当然ながら千歌と梨子は警戒したままだ。

「ポリちゃん。オラのお願ひ、聞いてほしいぞら」

花丸が顔になっっているお尻の部分に言うのと、ロリポリは曜を背中にしがみつかせたまま歩いていく。

そして、一メートルほどの護岸コンクリートを背にして整備された、ウツドデツキの上に立った。

「高海先輩、お願いします」

「え？」

曜もロリポリの背中から飛び降りて、「千歌ちゃん、早く！」と呼んだ。

そこまできて、千歌もロリポリが「三人目」だと気付いたようだ。デッキの上に、千歌を中央に、向かって右に曜、左に善子の代わりのロリポリが並んだのを確認して、花丸は電話の電子メトロノームを起動した。

「では頭から、踊りだけで。いち、に、さん、し、いち！」

花丸の拍で、三人は一斉に踊り出す。

(うん、いい感じすら)

ダンスは綺麗に揃っていた。

曜は当然のように完璧だが、千歌も悪くない。「難しい」「大変だ」「疲れた」と文句の多い先輩ではあるが、踊れるレベルでは安定している。

なにより、二人とも楽しそうだ。

曜は午前中にルビイの水泳の特訓をしてから来たそうで、表情も動きも心なしか活き活きしているし、千歌もゴールデンウィークの二日間で溜め込んだストレスを発散しているせいか、動きに遠慮がない。同じ振り付けながら、動きのシャープな曜に、重心が低い千歌と、個性も出ている。

二人のベースにあるのが、長年培ってきた高飛込と空手を基盤とする肉体への自信なのは、間違いない。そこに一番近いのは、高校三年生にしてダイビングインストラクターのライセンスを持つ、果南だった。

幼馴染みでもある三人が踊る当初の想定であれば、一週間後のライプも問題はなかっただろう。だがそれは、体験入学生の梨子が部員に数えられない問題に、人数合わせで入った鞠莉と果南の不仲疑惑問題が続き、叶わなくなってしまった。

結果的に、ゲームと動画生配信を趣味と公言する善子が、裁縫要員から果南の穴埋めという正反対の役割にシフトすることになってしまったのは、不幸としか言いようがない。

だが事情はどうあれ、善子を曜たちと遜色ないレベルに到達させなければ、ライブの開催そのものが危ぶまれる。

あと一〇日間で、どこまで善子が自分を鍛えられるか。

花丸は現状を、そう考える。

太極拳で身体を作り、ロリポリに躍らせられるレベルで振り付けを記憶している自分は、数に入れていない。

*

曲が終わり、国木田花丸は録画をとめた。

「決まったあー！」

「いえーい！」

最後のポーズから復帰した先輩二人が声を上げ、ロリポリとハイタッチする。

「やるじゃん、ポリちゃん！」

「当然！ この曜ちゃんの命の恩人だもん！」

たった一曲のダンスで千歌は、ロリポリと打ち解けてしまったようだ。曜と一緒に、七対の足が折り畳まれたお腹をくすぐっている始末だ。

ロリポリもそのままひっくり返り、足を展開してされるがまだまだ。

花丸が飼い犬のパフェにする構図と大差ない。

「二人とも、フォーメーションの話だよ」

梨子が言うと、二人は笑いながらロリポリから離れた。

「それでどうなの、花丸ちゃん！」

花丸は録画したダンスを電話の画面に出すと、ウッドデッキに腰を下ろして、やってきた二人に見せた。背後では、仰向けのロリポリがなんとか姿勢を戻そうと、足をわさわささせていたが、市内の方から走ってくるクルマの音に驚いたか球体になってしまった。

「まずダンスに関しては、二人とも問題ないと思います」

そして生唾を飲み込み、続ける。

「正直な評価では、渡辺先輩は一〇〇点、高海先輩は七五点です」

「うっ。意外と辛辣だね、花丸ちゃん」

「で、でも、水準は超えています！ 二人は問題ありません！」

花丸が慌てて付け加えると、思案顔だった千歌は笑顔に戻った。

「ただ現状は、個人が三人並んで踊っているのと同じです。足し算、一七五点です。これを“一つのユニット”にして、かけ算、つまり七五〇〇点にするのが、フォーメーションの目的です」

「ユニット！ そうだよ、その単語だよ！ アイドルっぽいよ、花丸ちゃん！」

「え、そうなの？」

「そのつもりで使いました」

普段なら“一単位”と言っているところだ。

「なんか今、初めて私、『スクールアイドルになるんだ！』って思ったかもー」

「そのポイントなかったの？ 今まで。曲ができた時とか」

「デモの時は『梨子ちゃんが歌ってる！』だったし、編曲は私だしなあ」
また話が逸れてきた。

「とにかく、検討しましょう。要所要所に三人のポーズを入れれば、自然とユニットらしさが——」

——と電話の振動音がした。

花丸は先輩たちを見回す。

「梨子ちゃん？ 出ないの？」

受信者はすぐに分かった。バッグから出した電話の画面を、梨子が無表情で見っていたからだ。

「ごめん、進めてて。……もしもし」

梨子は電話を耳に当てて、離れていく。

「ねえ、梨子ちゃん、どうしたの？」

「どうって？」

「なんか、さつきから上の空じゃない？ 昨日プールで会った時は、あんな感じじゃなかったんだけど」

「一昨日採寸された時は、別に普通だったよ？」

「なにかあったのかな、その——」

曜は一瞬、花丸を見た。

「——アレでさ」

花丸は顔を上げ、

「あ、ポリちゃん、どこ行くの!」

砂浜に七対の足跡を残してずるずると進む、ロリポリに声を投げた。

「ごめんなさい、ちよつと待っていてください!」

先輩たちに頭を下げ、ロリポリを追う。

「もう、ダメだよ、ポリちゃん!」

二人の声が聞こえない距離まできたところで、ロリポリは歩調を落とした。

もちろん、花丸の意思通りだった。

曜の態度に、二年生の三人が共有している秘密の存在を感じれば、気を遣わせるわけにはいかない。

黒く光るロリポリの背中を撫でながら、花丸は曜たちからさらに離れる。

「そりゃ、オラは振り付けを手伝うだけのオマケだもん。仕方ないぞら」

その時、遠くでバイクのエンジン音がした。

*

前腕が燃えるように熱い。

押し潰されていた気管が苦しい。

頭が爆発しそうだ。

遠ざかっていた五感に、硬いものが崩れる音と、硬いものが捻じ曲がる音が届き。

それ音が収まり、米神を打つ心音が聞こえてきた頃、肩を掴まれた感触に身体を震わせた。

「下がってて」

津島善子は気付けばフローリングに尻餅をついて、もうもうと舞い上がる埃で際立つ日光を見ていた。

「こちらK I S T ー4、護衛対象はいない」

その中を、黒服のボディガードが部屋の中を走り回っては、押入れを無造作に開けたり、勉強机の下を覗き込んだりしている。

視聴覚情報と記憶の照合ができるところまで回復した頭が、その人物を認識した。一昨日マスカミの面を渡した、リトルデーモン八号だ。

「繰り返す、護衛対象はいない——お前がどう言おうと事実は変わらない」

マスカミは壁際の瓦礫を慎重にまたぐと、ベランダに出て居間の方に行ってしまった。

(瓦礫?)

そして惨状を理解する。

「あ……あああ!!!」

ベランダに出る二枚のテラス窓は、完全に失われていた。それを囲っていたサッシは繊維壁とモコモコした断熱材と共にベランダに散乱し、辛うじて窓の縁しが見ついたカーテンレールから、吊り下げるべきカーテンを失ったランナーが畳の上に流れていく。

「どうすんのよ、私の部屋あー!」

ベランダの手すりは外側に捻じ曲がり、天井と床の一部も破壊されているので、すでにアパートレベルの問題だ。

善子はよろりと立ち上がり、壊れた壁をよけて窓に近付いた。

「……墮天使ヨハネの立方結界を打ち砕くほどの強大な魔物——私が本気を出さなければならぬ時が来たようね——」

墮天使モードで強がってはみたが、狭い小道を挟んで向かいに立つ一軒屋の下屋瓦屋根に大穴が開き、真上の二階部分の外壁と内装が危ういバランスで空中にあるのを見れば、現実逃避の限界を感じざるを得ない。

だが次の瞬間、善子の現実と逃避的妄想は、すべて吹き飛んだ。

一軒家の二階部分が崩れ、煙が吹き上がったその向こうに、その人物が立っていたからだ。

「ラズリ・フォーメア……?」

真珠のように光沢のある白い服と羽織のケープをはたいて、怪人は下屋に足をかけた。

過呼吸のように腹を震わせ、善子に気付いてもいない。

視線は、善子の上を見ていた。

崩れた屋根の断面から水平に直立している、黒い塊を。

先端から二つにまとめた髪を垂れ下げた、真つ黒な布に包まれた筒状のものを。

萌黄色のワンピースに鎖のようなベルトを締めたそれは、善子のよく知る顔をしていた。

「ルビィ……う？」

ラズリが笑い出した。

腹の底で沸騰していた喜びが、やっと口まで届いたように。

「来なさい！ ルビィ！」

黒い塊が消えた。

次の瞬間、黒い霧が——小さなコウモリが矢のような早さでラズリに殺到。

赤い裏地のマントを翻すルビィの形が現れ——

「え」

——その貫手がラズリの胸を貫いた。

息を呑む間もなかった。

ラズリの首が前に折れ、腕から力が抜ける。

「や……った？」

「いいえ」

ラズリの指がルビィの腕を掴み、瞬時に白く泡立った塊に変化する。

「こういうのを求めてたのよ、ルビィ。でも！」

ルビィの横顔を覆うマントの襟に、ラズリの腕だったものが食らいついた。

「言ったでしょ、私たちは泡なのよ！」

それは木の枝に産み付けられた、カマキリの卵のように、ルビィの頭を丸ごと包んだ。

遅れて、ラズリだった胴体、脚、頭も、じわじわと崩れ、ルビィとマントを蝕んでいく。

「やっぱりダメだ、マスカミ！ マスカミ！」

ようやく善子が黒服を呼ぶ。

「ムダよ。この子は私の手の内なんだから」

抱き付くように襟に寄生したラズリの頭が、善子を見た。その顔に浮かぶのは、勝者の余裕だ。

「まだ勘違いしてるのか」

だから善子は、その言葉が誰のものか分からなかった。

「ルビイには戦わせないぜ」

ルビイが再びコウモリに分裂し、ラズリの部品が切り裂かれる。

「ウソ！」「でしょ!?!」

半分になったラズリの頭がそれぞれ叫び、それを無視したコウモリの群が空に舞い上がった。

「ウソでしょ」

ラズリと同じ台詞を口にし、善子は呆然と空を見上げる。

そこに、ベランダからマスカミが戻ってきた。

「なにがあった」

マスカミは状況が終わった後の窓の外を見回し、善子に問うた。

「今の見てなかったの!?! ヴァジュリオンみたいにコウモリに分裂して、ラズリと一緒に飛んでっちゃったのよ! たぶん、ルビイが!」

「君はなにを言ってるんだ?」

マスカミは黒服としての時には見せないだろう、訝しき一〇〇パーセントの顔を善子に向けた。側面の道路に出てきた別の黒服や野次馬が、空を指差し、見上げているにかかわらずだ。

「私だつて分かんないわよ、私だつて——」

言いながらルビイにコールするが、予想通り、反応はない。

「——出るわけないか……ルビイ」

「いや、お嬢様が巻き込まれたのは確かなようだ」

マスカミはまたイヤフォンとマイクでなにかを話した。

「ここにいろ、すぐ黒澤家の人間がくる。あいつは俺たちが追う」

「は? ちょっと——」

「——リトルデーモンは終わりだ」

言い切り、マスカミは廊下へ出て行ってしまった。

「ちよ、待ってろっての!? マスカミ!」

追いつがろうとしたが、実際のところ、どうしようもないことは分かっていた。

善子は堕天使ではないし、仮面ライダーでもない。戦う訓練だって受けていない。

現場を撮影するくらいが関の山、ノコノコについていったって邪魔になるだけだ。

俯いた時、瓦礫の陰になにかが見えた。

拾い上げる。

それはコウモリのぬいぐるみだ。

善子が衣装を作るかたわらルビイが作っていた、紫色の丸っこいぬいぐるみ。

「待ってられるわけじゃないじゃない!」

ぬいぐるみをポケットにねじ込み、玄関に走る。

電話の画面に指を走らせ、連絡帳にその名前を見つけてコールする。

「花丸!」

花丸がロリポリ・フォーメアという怪人を使役している、との噂をSNSで見かけたことがある。

直接聞いたことはない。ただの噂かもしれない。

でも、その力を借りられるなら。

靴を履いていると、呼び出し音が途切れた。

「もしもし、国木田です」

その硬い声を電話越しに聞いて、しかし善子は戸惑ってしまった。

ルビイのことで頭がいっぱいになっていたが、善子が心無い言葉で花丸を泣かせてしまった件はなにも解決していない。それどころか、今朝も教会で花丸に酷いことを言ってしまったのだ。そのことに関する心構えもしないままに電話をかけたことに、善子は後悔した。

首筋の締められた跡が疼く。

痣になってしまったらどうしよう。

このまま電話を切ってしまいたい。

「もしもし？ ヨハネちゃん？」

だがその控えめで不安そうな声に、先ほどのルビイとの会話が蘇る。

花丸も、善子の方が怒っていると思っていいたら？ お互いに距離を測ってるだけだったら？

(ああ、もう！)

靴をはき終えた善子は立ち上がると、お団子のない頭をかく。

玄関のドアを開け、共用廊下を走る。アパートの住民はすでに避難したようで、敷地内に人気はない。

「花丸、よく聞いて」

「う、うん、ヨハネちゃん」

階段を駆け下りる。

「ルビイが危ないの。あんたの助けがいると思う」

「それって——」

その時、電話が耳元で緊急速報を鳴らした。

「——うわー！」

思わず声をあげ、口を押さえる。黒服たちは側面の道路で近所の住民と話をしている。部屋で待っていると言われた善子が、外に出ているのを知られたらまずい。

「戦える……のよね？」

一瞬の間。

「うん」

ハッキリとした肯定に、善子は唾を飲み込んだ。

「場所はまた連絡するわ」

身をかがめて駐輪場に向かうと、軽快車の鍵を外し、正面の道路に出る。

遠くの空に、ルビイと思しきコウモリの群れが見えた。進行方向はほぼ真西。

「よし、行くわよ、善子ー！」

中学校からの足である自転車に飛び乗ると、善子は重いペダルに体重をかけ、力一杯こぎ始めた。

*

「桑介さんからお話は聞いております。無理にとはいりません」
依田義森は、電話の向こうの言葉少なな少女の顔を思い浮かべる。
名乗りはしたが、おそらく自分の声と名前は紐付いていないだろう。
番号から、入学式の日バイクで移動中の彼女に電話をした人間
だと分かるだけだ。

「シャイニーは準備を進めていますが、先日の戦闘の修理が終わって
おらず、直接交戦はできない状況です。龍駒とワndaとは連絡がとれ
ません。我々が頼れるのは梨子さんしかいないのです」

そこまで言って、唾を飲み込む。

スピーカーフォンにした端末に、その音は届いただろうか。

義森が黙ってしまえば、義森の耳にはラップトップマシンの排熱と
オフィスの空調の音しか聞こえなくなる。

磨りガラスで区切られたオフィスに沈殿する、沈黙の音しか。

もう一度唾を飲み込む。

左手の指がデスクの天板を小刻みに撫で、右手の指がタブレットの
環境音楽の再生ボタンに伸びる。

できれば納得してほしかったが。

やはりダメか。

「場所はどこですか？」

沈黙が破られた。

息をとめる。安堵の息を吐くのはあとだ。

「沼津市内、おそらく駿河湾沿岸に向かっています。詳細は追って連
絡します」

「分かりました」

「私も援護に向かいます。失礼致します」

電話を切り、総務に内線をかける。

「鞠莉さんはどちらにいらっしゃいますか？ ……はい、通信インス
タンスを送ってください」

アタッシェケースを手に、義森はオフィスを飛び出した。

*

義森との電話を終えた桜内梨子は、どろどろ、と唸りを上げて近付いてくるエンジン音を耳にしたまま、動けないでいる。

またしても、出番は与えられた。

あとはOGIが起動したバイクに乗って、現場に向かえばいい。それが梨子の居場所。

なのに、足が動かない。

「もしもし？ ヨハネちゃん？！」

砂浜の少し離れたから、ロリポリ・フォーメアを引き連れた花丸の声が聞こえた。電話の相手は善子のような声。昨日の件はまだ仲直りしていないのだろうか、確かめるような声で言葉を探っている。

その時、全員の電話がサイレンを発報した。

「フォーメア通報だ！」

曜が木製のデッキから、勢いよく立ち上がった。

「花丸ちゃん、ポリちゃん引っ込めて！」

「市内だよ、曜ちゃん」

千歌は対照的に、腰を下ろしたままで呟いた。

だがそのどちらの言葉も、花丸の耳には届いていないようだった。電話を切った彼女はロリポリに頷くと、手のひらを向け、彼をムーフォームに戻した。

そして砂浜を走り出した。

「花丸ちゃん？」

「オラ、これで失礼します！」

その目的は明白だった。

「待って、危ないよ！」

国道へ上がる階段へ走る花丸の前に割って入ったのは、曜だった。

「危ないのはルビイちゃんです！ オラが行かないと——」

「——千歌ちゃん？」

曜の声の方向が変わった。

ふらつく足で階段に向かっていたのは……千歌なのか？

「待って、ちよっと！」

「行かなきゃ」

「行くって」

曜に肩を掴まれ、千歌は階段の前で立ち止まった。

千歌の顔は真っ青だった。

瞬きは不規則、で荒い息を浴びた唇もかさついていっている。高い日光を浴びているにもかかわらず、背中を覆う長い髪を靡かせたその表情に、初めてこの砂浜で出会った時の輝きはない。

なのに視線だけは真っ直ぐに曜を見ている。

それが恐ろしい。

「行かなきゃ」

「無理だつて！ 戦えるわけないじゃん！」

「戦う？ 高海先輩が？」

尋常ではない様子に、花丸も動けない。

そこで、全員の注意が逸れた。

波音が響くだけの内浦に、くつきりと浮かび上がった音に。

どろどろ、と低音を響かせる、エンジン音に。

「あ、ちよつとー」

千歌と花丸は国道沿いの歩道に駆け上がった。曜もそれを追う。

そこを、バイクが横切った。

「ずらっ!？」

「無人!？」

曜が叫んだ通り、それは無人だった。タンDEMシートにヘルメットが固定された中型のオフロードバイクは、一台のクルマも通らない国道を通りすぎると、十千万の前でターンし、花丸たちの前に戻ってきた。

ほのかに桜色を帯びたフェンダーが、前輪と共に傾き、こちらを向いた。

「なに、このバイク。自動運転なの？」

曜はガードレールから身を乗り出し、興味津々とばかりにバイクに眺めている。

千歌もそれに並ぶ。

花丸は——振り返った。

いまだ砂浜から動けない梨子を見た。

その目の確信が、梨子に伝播した。

花丸は階段を駆け下り、梨子の前まで走って来ると、頭を下げた。
「オラを乗せてってください」

「どうして、私が……」

梨子が問うと、花丸は頷いた。

「あの時の音、オラは忘れません」

あの時。

私が覚えていない、あの時か。

「怪人のところには、ルビィちゃんがいいます。たぶん、善子ちゃんも」
花丸は手の中のムーフォームを見た。

彼女が言うところのご本尊は、ほのかに黄色を帯びて輝いていた。
ムーフォームを発動した状態で、フォーメアを産み出させないよう制御しているのだ。妙法寺に安置されていた頃から構築された関係がなせる技だろう。彼女の資質は大きな戦力になる。

「ルビィちゃんが困ってる時は、私が手を差し伸べるんです。そう決めるんです。だから——」

梨子は頷いた。

「——差し伸べてあげて。フォーメーションを考えて、ね？」

花丸は呆気にとられたようだった。

「そ、そんな場合じゃないぞら！」

「そんな場合よ。ライブまでもう一〇日しかないの。これを成功させなきゃ、浦女のスクールアイドルは終わっちゃう」

「でも、オラが……」

花丸は俯いた。

そのまつげが光ったのが見えた。

「振り付けを考えようとして、入部してくれたんでしょ？ 替えがないんだよ、国木田さんは」

「じゃあ、桜内先輩は替えがあるんですか」

「私は……」

即答できなかつた。

「ある」と言えるはずなのに。
どうして。

どうしてこんなに、安定してしまっただろう。

「ブランキアだから」

顔を上げた花丸の頬を、涙が伝った。

梨子は笑顔を作った。

今度は笑えているだろうか。

「お願いね」

梨子が花丸の横を通り抜けようとした時、

「待ってください」

花丸が梨子呼び止めた。

差し出された小さな手のひらの上で、ムーフォームが小さく明滅した。

「オラの代わりです」

ロリポリ・フォーメアを産み出す、淡く輝く球体。

受け取ると、春の穏やかな日差しのような温もりを感じる。自然と心拍数が下がり、まどろみを覚えるような温もりが。

「ありがとう、花丸ちゃん」

花丸は目の端に残っていた涙を拭い、頷いた。

梨子は走りながらゴムで髪をまとめる。

歩道に上がると、梨子も知らない仕組みでやってきた専用マシンが、エンジンを静かにアイドリングさせて待っていた。

「さすが優遇されてるよね、梨子ちゃん」

「そんなことないよ」

ガードレールを跳び越え、タンDEMシートに固定されていたグローブをはめる。まとめた髪を潰すように、ヘルメットを被る。

「梨子ちゃん」

千歌が口を開いた。

クリアシールドをバイザーに跳ね上げ、その青い顔を見る。

理由は不明だが、千歌は戦える状態にない。だが、それを正面から指摘すれば、千歌は無理をしても戦うだろう。

「あつちは任せて。千歌ちゃんは二人をお願い」

千歌は眉の力を抜き、次いで「うん」と頷いた。

バイクにまたがる。

柔らかなデニム地のパンツを通して、エンジンが産み出す泡の爆発の連続が、腹を突き上げてくる。

待ち焦がれた梨子を、求めるように。

曜を見、頷き合う。

現状、もつとも冷静なのは曜だ。

逆説的だが、それは彼女が戦う力を持たないからだろう。

だが、そのバランスがいいのだ。

もし梨子たち全員が戦う力を持ってしまうえば、きっと――

（――ううん）

それこそ、今考えても仕方ない。

ヘルメットのシールドを下ろし、アクセルを開く。

熱されたタイヤがアスファルトを掴み、バイクは梨子を乗せて急加速した。

「ヨーソロー！」とポーズをとった曜が、千歌の肩を抱いた花丸が、バックミラーの中で小さくなっていく。

シールドの内側に表示されたナビに、交通量はない。

「行くよ、《ブランブロー》！」

梨子はハンドルを捻り、時速七〇キロで最初のカーブに突っ込んだ。

甲高い一繋がりエンジンの音が、ミシンのように断続的な音に引き延ばされる。

狭まっていた視野が、二〇〇度近くまで広がる。

数瞬前の自分が、数瞬後の自分を見る。

ブランクアを。

直線に立ち上がった時、バイクは緑色のカウルに覆われ、さらに速度を上げた。

第一〇話：傷付けたって構わない — 5

*

本体であるムーフォームを封じられたラズリ・フォーメアが形を取り戻した時、周囲の状況は一変していた。

高いフェンスとコンクリートの防潮堤に二方を囲まれた、土をむき出しにした広場。

背後には、連なる波消しブロックと狭い砂浜に、穏やかに波音を立てる駿河湾。

「ここか」

ラズリもよく知る場所だった。

島郷公園や牛臥山を挟んで沼津御用邸記念公園と海岸沿いに隣接する、我入道海水浴場。

その北端に位置する野球場だ。

「見る影もないわね。ここも」

打ち寄せられた大量の竹や木の枝にプラスチックのゴミが、グラウンドの大部分を覆うように散乱していた。いつの増水の影響か、すっかり乾いたそれらは幾重にも積み重なっており、ここが使われなくなつて久しいことを意味している。砂浜から波消しブロックで隔てられたグラウンド自体も、飛び地のように海水が溜まつたくぼみがいくつもあり、野手が空を見上げて走り回れるような状態ではない。

そんな中、ラズリの足元に辛うじて見える、布のほつれた二塁ベースだけが、妙に白々しい。

「ホームランボールが海に落ちると、私が泳いで拾いに行ったわよね」
「お前の懐古はどうでもいい」

外野の一角に降り立ったその存在は、コウモリの集合とルビイの中間の形状を保つたまま、男の声で言った。黒い靴下のつま先は、グラウンドから突き出した枯れ竹の先端に接しているが、グラつく様子は無い。

「お前がルビイに近付くなら、殺すだけだぜ。俺たちは」

「あなたは、でしょ？ えっと——」

言葉の途中で、コウモリからルビイが分離した。

「ピ？・ピギー！」

ルビイは枯れ竹の上から解放され、奇声を上げながら地面に落ちた。その周辺は直前に、数匹のコウモリがゴミを吹き飛ばしていた。

「――ストーカー。《ストーカー・フォーメア》って呼んでくれ」

筒のように立ったマントの襟から、オールバックに撫で付けた髪に彫りの深い顔が現れた。灰色のボウタイからはマントだけ、空っぽだ。

「いったあ……」

萌黄色のワンピース姿に戻ったルビイは、ストーカーとラズリを見ると、もう一度奇声を上げた。

「お、お母さん？　ここ、どこ？」

言いながらも、ルビイは狩野川の河口の方に目を向けた。視線の先には、沼津港を津波から護る水門であり、観光名所でもある展望施設《びゅうお》が見えるはずだ。現在地はすぐに判別できるだろう。

「ヨハネちゃんは？」

「いないわ。親子歓談の邪魔をする人は、誰も、ね」

ラズリは頬を持ち上げ、二塁ベースを踏んでルビイに近付く。

「俺を忘れてもらっちゃ困るぜ」

ストーカーのマントがふわりと浮かび、ルビイの前に下りた。ルビイは立ち上がろうとしたが、眩暈がしたか、再びグラウンドにお尻をつけてしまう。

「ストーカーさん、ルビイ、どうなっちゃったの？」

「血を少しもらっただけだ」

「る、ルビイの!？」

ルビイは思わずといった具合にワンピースの裾をおさえ、

「首だ、首！」

ストーカーはマントの端で首を示した。

ラズリは嘔き出す。まるでコントだ。

その時、ルビイがラズリの背後を見た。

肩越しに振り返ると、防潮堤の上に自転車に乗った人物の姿が見え

た。ラフなTシャツにジャージのパンツをはいた少女だ。

「ルビィ！」

「ヨハネちゃん！」

それはシニヨンのない善子だった。コンクリートのスロープを下り、ゴミだらけのグラウンドに向かってくる。

「意外と早かったわね」

「さあ、年貢の納め時だ。ラズリ」

「ルビィになら納めてもいいけど」

ラズリが両腕を広げると、ストーカーはふわりと浮き上がり、ルビィを覆った。恋人を背中から抱き締め、顔を寄せるように。

「いくぞ、ルビィ」

骨ばった口が開き、二本の牙がルビィの首に突き刺さった。

*

津島善子は、マントのようなものがルビィに覆い被さるのを見た。俯いたルビィが顔を上げ、ツーサイドアップが広がり、血管のような文様が頬に走り。

遅れて、口笛のような音が届いた。

*

「あんだ、味方じゃないの!？」

「せっかちなんだから」

「時間切れだ」

誰かが話している。

誰だろう。

ゆがんだ視界に、散らかる色が輝く。

小さな色が、キラキラと踊っている。

教会で見たステンドグラスのように。

視界が回る。

砂浜が見える。

脚がそちらに向かう。

誰の脚？

寒い。

血を抜かれたみたいなの。

いや。

なにかを注入された？

ゴミを蹴る。

凹みに足を取られる。

前のめりに倒れ、水に手をつく。

潮の香りが腕の隙間を撫でる。

潮の辛さが脛の隙間を撫でる。

手を持ち上げようとした時、痛みが脳天を貫いた。

身体を支えていた力が抜け、水に上半身が没する。

意識が頭蓋骨から逃れようと、膨張と収縮を繰り返す。

それも、痛みが遠のくと共に、足元から同調していく。

「ル……ル……ル……？」

誰かの声があった。

「ヨハネちゃん？」

これは誰の声だ？

*

「解剖学的ゼロ度？ ……これ……誰？」

その声は間違いなく、先ほど仲直りをした同級生達のものだ。

だが津島善子は、声をかけるべき言葉がなかった。

グラウンドの小さな水たまりに膝をついた存在は、人間の形をしていなかった。

角と牙を同時に表すような金色の目。

生物的なフォルムの赤黒い身体。

背中から首を覆う黒鉄色の鎧。

骨だけが残された前腕と脛。

ビデオカメラのディスプレイに映るそれは、どう見ても怪人だった。

水が流れる腕と脚に、鎖が巻き付いている。

「《運命の鎖》？」

善子は出会ったばかりのルビイを、『鎖で雁字搦めにされてる』と評

した。それはもちろん、黒澤家という呪いで身動きがとれなくなっている、という抽象的な意味合いだったのだが。

その概念が恐怖の形として具体化し、変身したルビイに物理的な鎖を与えたのか？

「そうよ」

善子の呟きに、光沢のある白いアツパツパを着たラズリ・フォーメアが答えた。ルビイの母の顔で笑いながら。

「苦しいでしょう、ルビイ。でも安心なさい」

ルビイとコウモリが切り開いた枯れ枝の道を歩いてきたラズリが、ケープを払うように腕を上げ、手を差し伸べた。

「あなたの夜を、解放してあげる」

ピアノを弾くように滑らかに動く指先。

それに応えるように、鎖の巻きついた右腕が持ち上がる。

「そうはさせないぜ」

その男声が響いた瞬間、ルビイの右腕が飛び出した。

次の瞬間、その先端についた前腕がラズリのケープの襟を掴んでいた。

「なに!？」

からから、と音を立てる鎖が、二人の距離を埋めた。どこにそんな長さがあったのか、その間、約五メートル。

襟を引っ張られたラズリは一瞬うろたえたが、一回転してケープを脱ぎ捨て、拘束を脱する。

「ルビイ——じゃないわね。ストーカー、とやら?」

「ああ」

肘に戻った前腕を眺めるのは、降り注ぐ日光に強く輝く金色の目。泡に戻り消えていくケープを投げ捨てて、黒い鎧をまとった存在がゆるりと立ち上がる。

「ムダなことを」

「俺の台詞だ」

善子の家で、ルビイの身体が発していた声だ。それは今、鎖のようなベルトのバックルに当たる位置にぶらさがっている、ムーフォーム

と思しき球体をくわえた逆さまのコウモリから聞こえてくる。

人間の形をしたルビイをマントで操っていたように、今は怪人の形をしたルビイをバツクルで操っているのか。

「お前を殺すぞ、ラズリ」

もう一度、黒い鎧のストーカーが腕を伸ばした。

ノースリーブの白い上着を着たラズリは、直線的なその腕を避け、右手の人差し指でストーカーを指差す。

ストーカーが身体を逸らした直後、左肩の鎧が後ろに弾かれた。ラズリがなにかを発射したのだ。

ストーカーは弾かれた衝撃を殺さず、左足を背後に踏み込んでラズリに背を向ける。

そしてまるでピッチングのように、伸びきった右腕を振りかぶった。

右手で掴まれたラズリの身体が、宙に浮き上がる。そのままコンクリートの波消しブロックに叩きつけるつもりだ。

「ムダなことを！」

空中のラズリが繰り返し、ストーカーの鎖を引いた。

「なにッ!？」

鎖が巻き付いたストーカーの脚が、地面から離れる。

二人は絡み合った腕を中心に、両端に錘をつけたボラののように、または二つ一組の連星のように、宙を回転し――

「ちよ、ちよっとー」

――海に落ちた。

水柱をビデオカメラに収めながら、善子はグラウンドの外野を走る。

連なる波消しブロックの手前で立ち止まると、黒い鎧をまとったストーカーと、白い服をまとったラズリが、海面から顔を出した。

ラズリはまるで階段を登るように海面の上に立つと、上半身を水の上に出したストーカーを見下ろす。

「水面の上にも立っていないなんて、それでもフォーメア？」

そして小さな波を踏みつけて走り、伸びる腕をかくぐつて爪を撃

ち出す。

それは一見すると、怪人と人間の戦いだ。だが男の声で喋る怪人の中身はルビィで、女の声で喋る人間の中身はムーフォームなのだ。おまけに人間の外見はルビィの母親ときている。

「もう、なにがなんだかー!」

自分が撮影する映像が、直感的に理解できない。

これは仮面ライダーとフォーメアの戦いなのか？

スクープだとカメラに収めたブランキア対エンジェルと同じ構図？

中庭に現れたワンダを撮影した時、善子はどう思った？

なにも知らないみんなはこれを見て、どう思う？

「こんなの、どこにも出せないわよ!」

抱える秘密が、また一つ増えてしまう。

*

防潮堤の下で電動スクーターを停めた依田義森は、シートの中からアタツシエケースを出すと、階段で防潮堤の上へと駆け上がった。

O G Iのロゴが刻印されたケースをコンクリート柵に立てかけながら、二人の怪人の姿を海に認める。

海面に立つ白い怪人と、海中に浸かった黒い怪人。前者はO G Iが公表を控えているラズリ・フォーメアだと分かったが、後者は分からない。ブランキアでないことは確かだ、内浦からバイクで移動したにしては早すぎるからだ。

砂浜で二人を撮影しているらしき少女は、黒澤家のルビィだろう。気にする必要はない。

その時、防潮堤と防風林の間にある小道に黒塗りのバンが停車した。その後部ドアが開き、《O G Iスクード》のボディガードがぞろぞろと降りてきて、最後にシャイニーが現れた。

仮面ライダーを警護する黒服か、と笑いたくなる。一五分の稼働時間しかないシステムゆえの処置と分かっている。一五分の稼働時

「義森!」

シャイニーのマスクを展開した鞠莉が、下から声をかけてきた。

義森は人差し指を口に当てて見せると、上がってくるよう腕を動かす。

鞠莉は、彼女がセブと呼んでいる専属ボディガードとSーユニットの人間を連れ、防潮堤に上がってきた。

シャイニーは、普段よりも輝いていなかった。ムーフォームを装填していないどころか、アンダースーツにベルトを締めただけの状態だからだ。《Mark II》の物理的な装甲の全てが水泳場での戦闘で修理対象となったため、《Mark I》で使用していたアンダースーツを着てきてもらったのだ。

プラットフォーム形態にすらなれないシャイニーだが、本作戦に必要な機能が搭載されているの是一目で確認できた。アンダースーツの各部位にあるステータスインジケーターが消灯しているのは、明け方に実装が完了した休止モードだからで、それは搭載されたフォームウェアが最新であることの証明だからだ。

Sーユニットの男がラップトップマシンを広げるのを一瞥しつつ、義森はアタシエケースを開ける。

「ブランドキアはまだです。あと一〇分はかかるでしょう」

「OK。その間に説明を頼むわ、そいつのね」

鞠莉が指差したのは、義森が取り出した小さな拡声器だ。

「なんです？ その玩具」

Sーユニットの男が訝しげに言った単語は正しい。それは義森がリサイクルショップで買った、特撮番組の変身アイテムという名のプラスチックの塊だ。

「こんなもののために、僕たちを呼び出したんですか？」

「こんなものではありません。《ムーフォームによる泡形成に対する音圧変化パターン》の――」

「――日本語で言つてくださいよ！」

「落ち着きなさいよオ Calm Down、パイン」

「……すみません」

この男が「パイン」――野尻松之介か。

鞠莉に謝罪しながらも義森を睨め付けたままの男に対し、義森は意

識的に口の端を持ち上げる。

「失礼しました。S—ユニット整備班班長の野尻松之介さんともあれば、私の計画立案書には目を通していると思っただけです」

慇懃無礼な言葉に、松之介は心外とばかりに目を剥いた。

「通しましたよ！ あれじゃさっぱり理解できないから聞いているんです！」

「だとすれば、勉強不足ですね。シャイニーの戦闘補助も担うあなたが、ムーフォームの基本的な特性を理解していないとは」

「僕は物理的な整備が担当なんですよ！」

「これにしてもそうです。私の説明を聞く前から、ただの玩具と侮ってはいませんか。だから龍駒にも負けたのです」

「あれは引き分けだって——」

「——私は理解していますよ。先日の戦闘報告書を。なぜ《Mark

II》が、あのような状態になったのかも——」

「——私のせいだって言いたいわけエ？」

割り込んだのは鞠莉だった。義森は一拍おいて、OGIグループCEOの娘に目を向ける。

「正体が定かではない存在に『仮面ライダー』の名を与え、不用心に接触した結果である。上はそう評価しています」

義森の発言は皮肉だが、本心でもあった。

だから、鞠莉の視線を正面から受け止めた。

「議論はあとです、お嬢様」

口を挟んだのは、ずっと黙っていた鞠莉の専属ボディガードの黒服だった。

「Yup、今はあっちが先決ね」

「同感です」

義森は目を逸らした。背中の脂汗を意識し、鞠莉と相對するほどに肝の据わった人間ではない、と自分を評価した。

「じゃ、いくわよオ」

シャイニーは腰のホルダーからシーリングされたムーフォームを取り出し、ハンドガン型リーダー《エウリュース》に読み込ませた。

『ハーチエク』の起動音声と同時に、シャイニーの身体が穏やかな紫色に包まれた。後頭部から肩にかけて大量に生成された、直径一センチほどの円盤の装甲から、二本の細長い装甲がずらずらと伸びたためだ。

脚まで届く短冊状のワイヤー装甲をまとった《シャイニーⅡハーチエクフォーム》は、さながらギリースーツのように、あるいはフジのツルを這わせた藤棚のように、その人間的フォルムを隠してしまっただ。

唯一、左側頭部から突き出た鞠莉の髪型に似たアンテナと、大きな観測装置のついた左眼、巨大な複眼がむき出しになった右眼が構成する、横倒しになった“è”を表わす顔だけが露出していた。

「まったく、地味なお披露目よねエ」

「だからこそ美しいのですよ、鞠莉さん」

「《Hack》が、でしょオ？」

シャイニーは、エウリユス上にフォーマライズされていくブルパツプ式のロングバレルライフル——《エウリユスⅡハーチエク》に弾倉を装填し、コンクリート柵を越える数段の階段の上で膝をついた。膝射の姿勢だ。

「照準システムは如何ですか？」

「絶好調ね」

怪人が争う現場まで、ゴミだらけのグラウンドを挟んで一五〇メートルもない。ハーチエクの性能なら目と鼻の先だ。

義森は拡声器を階段の手すりにテープで固定し、タブレット端末とOUBで接続した。すぐに端末を介したシャイニーへのリンク確立が通知された。エウリユスⅡハーチエクをコントロールするシャイニーの照準システムと、拡声器が同期したのだ。

「Well、その玩具が《Mark III》より
High Priority案件か、Checkしてあげましょー
ー」

と、言葉の途中で鞠莉は笑った。

「——相変わらずあだ名にしにくい名前よね、義森って」

「生れ付きです」

「改名したら？」

「婿養子になるなら、考えますが」

「じゃ、意外と可能性あり？」

その時、かすかなバイクのエンジン音が聞こえた。

「ブランキアです！」

双眼鏡を手にした松之介が言った。

「もう？ 早すぎる」

鞠莉によつて《ブランブロー》と名付けられた緑色のマシンは、モトクロス用バイク《XR250》がベースにしても速すぎるスピードで、養浜されていけない砂浜を爆走してくる。

「やる気みたいね、リリー！」

「シャイニー、狙撃モードに遷移します！」

ギリースーツに包まれたシャイニーの身体が、方々で微かな光を放った。

「作戦通りですよ、梨子さん……」

義森は玩具の拡声器に手を伸ばし、念のために起動ボタンを押した。

勇ましい効果音とピアノの環境音楽がかすかに聞こえ始め、義森は咳払いをし、眉を寄せた松之介を無視した。

*

拡張された桜内梨子の視力と聴力が、高鳴るエンジン音と巻き上がる砂の向こうを捉えた。

左手前方一〇〇メートルばかり、凧いだ遠浅の海岸を波立たせる存在。

黒と赤の身体に黒鉛のような鎧を着た怪人と、白と青の服を着た人間だ。

人間の存在はルビイだけだと伝えられていたのに、と思った時、後者がこちらに手を差し向け――

「！」

――なにかがこちら目掛けて飛翔した。

首を左後方へ逸らす。

猛禽類の牙のような形をした、爪だった。

バイクの速度による偏差を計算に入れ、撃ち出したのだ。

爪が描く軌跡をかくぐり、仮面の下で舌打ちする。

ブランキアの能力を知られてしまったからだ。

だが少なくとも、あの人間の顔をした存在が《ラズリ・フォーメア》だと確信はもてた。

「それで十分！」

ブランキアはハンドルを切ると、後輪をスライドさせて車体を倒し、ブレーキをかけた。時速一〇〇キロメートルで突っ込んできた三〇〇キログラム近い質量が、狭い砂浜を盛大にえぐり飛ばした。

μ—フォームの力でスパイクの生えたタイヤは、湿った砂の層まで掘り返し、黒い砂で大きな三日月が描く。

その中心で、梨子はバイクを降りた。

「待ってて、ルビィちゃん。今——」

「——意外と見えてないのね。その目」

三日月の内側に、善子が立っていた。

頭から砂を被って。

「よ、ヨハネさん!? ごめんなさい！」

「いや、うん、今日はこういう日なのよ」

善子は閉じた瞼をピクピクさせ、唇を震わせて砂を噴き飛ばした。

「ああ、もう、どうしよう」

海の上で誰かが呟いた「あらら」の声に、梨子は仮面の下で赤くなる。

「いいって、私のことは。ルビィよ」

黒っぽい砂を目の周りから除いた善子は、彼女には珍しいよれよれのTシャツとジャージ姿だった。頭の上にはシニヨンもない。

「あの怪人が？ 変身したの？」

「うん」

梨子も背後を振り向いた。

そこでようやく、花丸の情報と義森の電話が、状況と結び付いた。

自分のすべきことが、結び付いた。

「ごめんね、津島さん」

「だから。いいって、もう」

「やっぱり私、みんなの手伝いならできる」

善子が顔を上げた。

梨子は見なかった。

砂浜を進み、海水に足をつける。

梨子の苦手な、潮の匂いをはらんだ水に。

そこに、爪が飛来する。

人差し指と中指でつまみとり、弾き捨てる。

静岡OGIのテストで受けた機関銃に比べれば、なんと遅いことか。

水深一メートルばかりの水を、半ばかき分け半ば泳ぎ、二人の元へ走る。

なにをしに来たのか。

なにがしたいのか。

曜と善子に言われ、答えられなかった問いが、頭を過ぎる。

どうして了承してしまったのだろう。

ゴールドンウィーク中は、怪人のことなど忘れて、みんなの手伝いをするつもりだったのに。

あの場には、私が去ったあとに街を任されるはずだった、二人がいたのに。

空手で怪人を圧倒する、白い装甲の仮面ライダー、ワンダ。

怪人でありながら人間の味方をするダンゴムシ、ロリポリ。

二人が、自分が行くと言ってくれたのに。

梨子は頷けなかった。

ワンダとは、スクールアイドルを目指してダンスの特訓をし、怪人の報に青い顔をした少女。

ロリポリとは、先輩たちの手伝いを申し出て、友達の危機にも涙ながらに同行を求めた少女。

それに気付いてしまった。

怪人と戦った経験があっても、人々を護った経験があっても、戦えない時だつてある。戦いに赴くべきじゃない時だつてある。

戦う力を掴んだなら、齒を食いしばつて戦い続けなきゃいけない？

そんな法はない。

だから、私が戦うんだ。

自分の居場所がないなら、せめて、みんなの居場所を護る。

そのためなら、どれだけ私を傷付けたつて構わない。

第一〇話：傷付けたって構わない　― 6 (完)

*

変身したルビイを操るストーカー・フォーメアは、右腕の鎖を解き、赤黒い骨をぶら下げた右手を伸ばした。

同じくラズリ・フォーメアの右手指が、それぞれろくろ首のように伸び、五本の先端から爪が連射される。

二本の指は伸ばした右手で掴んで射線を逸らし、一本の爪は左手の鎖で弾き、

「ぐっ……いー」

捌き損ねた二本の爪が胸に食い込む。

ストーカーを狙ったラズリの隙を、海底を蹴ったブランキアが背後からつく。

だがぐるりと背中側に向けられたラズリの左手指が、三本の爪を同時に発射。

散弾のように広がりながら迫る爪の二本が、ブランキアの顔面と右肩に命中。

二人ともラズリから吹き飛ばされ、海中に没した。

「無様ね、ストーカー」

ストーカーが水面に顔を出すの待ち、ラズリが嘲った。

掴んだはずのラズリの指の感触は、とうにない。ラズリ側に千切られ、文字通り泡のように消えてしまった。

その指は波打つ海水を浴びたラズリの手から再生し、撃ち出された爪も瞬く間に補充されていく。

四肢満足に戻ったラズリは両腕を広げ、その首元にじわじわと、失われたケープを修復する。

完璧なシステムだ。

「戦う覚悟のないルビイを乗っ取ったって、なんの役にも立たないわ」「かもな」

変身したルビイは黒鉄色の鎧をまもってはいるが、それは背中一面と左肩を護る役割で、胸から腹にかけてはなぜか、呼吸で上下する程

度の柔らかな赤い部位が露出していた。脚も同様で、鎖によって脛は両脚共に全面が護られているものの、膝から腰にかけては左脚の側面に鎧がつくに留まっている。

伸びる右腕はアドバンテージと思えたが、射程距離はせいぜい七メートル前後と中距離攻撃レベル、同じく中距離攻撃だがより射程の長い指と併せて遠距離攻撃の爪を持つラズリに勝てる要素がない。しかも鎖を伸ばしていると拳に重さが乗らず、かといって腕を戻すと鎖が手のひらに巻き付いて拳も握れない。

左腕に至っては、自由な手のひらの代わりか、鎖が知恵の輪のように手首に絡み付いて可動範囲を極端に制限されている有様だ。

挙げ句の果てに、脛に巻き付いた鎖はダンベルのように重く、足を一つ持ち上げることさえ体力を消耗してしまう。

射程も、手数も、パワーも、スピードも、持久力もない。

そして鎧も鎖もルビイが産み出した形状であるゆえ、ストーカーにはこの矛盾の塊を逸脱できないのだ。

「あなたはそのまま沈んでなさい。さ、ルビイ。今その鎖を解放して

——」
海面から光が飛び出し。

「——む」

ノースリーブのアツパツパから伸びた左腕が、肘から切断された。

海面に落ちた腕と入れ替わるように現れたのは、ナイフのように分厚い一対の角を生やした、緑色の頭。

ガラ空きになったラズリの左脇に突き刺さったのは、その人物が握る片刃の薙刀。

(ブランクアー！)

ストーカーは海中に沈めていた右腕を、一気に持ち上げた。

ストーカーとラズリを結ぶラインに砂と水が飛び散り、ラズリの股下を鎖が舞う。

赤黒い前腕が宙で反転し、背中からラズリを狙い——

「間に合わせにしてはいい連携だったけど」

——伝わってきたのは、握手の感触だった。

ラズリの右腕があり得ない方向に捻れ、ストーカーの手を握ったのだ。

そしてブランキアの薙刀は、五〇センチほどの反った刃は、ラズリの身体に半分ほど潜り込んでいた。左脇腹から入り、ヘソのすぐ右に出るまで。

「二メートル一〇センチ。競技用の薙刀よね。あなたの攻撃手段はとつくにチエツク済みよ」

それ以上は動かなかった。

ブランキアの脚から生えたラズリの左腕が、薙刀の柄を掴んでいたからだ。

「奇襲は誰も知らない手でいかなきゃ。今はインターネットっていう便利なものがあるんだから——ね！」

そしてお返しとばかりに、その爪でブランキアの左腕を切断してしまった。

「ぐ……い！」

ブランキアが苦悶の声と共に薙刀を手放し、ラズリは身体をずらして刃を抜いた。そして回収した左手で薙刀を掴むと、握手したままだったストーカーの右腕の橈骨と尺骨の間に刃を滑り込ませ、鎖で縛り上げてしまった。

（無理だ）

ストーカーは鎖の巻き付いた脚の重さで踏ん張るも、唯一の攻撃手段である右腕を抑えられてしまっただけはどうしようもない。

エンジェルやゾンビを葬ってきたブランキアの手を借りても、たった数メートルの距離も縮められないのか。

「そろそろお開きにしない？ 悪いけど、私、あなたたちには興味ないのよ」

ラズリはうんざりしたように、首を傾げた。

だが隻腕になったブランキアは、改めて、顔面を護るような高い構えをみせる。

（勝つ気なのか？）

ラズリのヘソに並んだ傷跡を見ながら、ストーカーは思考を再度巡

らす。

ルビイの知識に寄れば、ストーカーを含む今までのフォーメアは「泡立った水によって形作られた恐怖心」で人を襲っていた。だがラズリは、「液体を泡立てて形を作る」というフォーメアの性質そのものを使っているように観察できる。その差は歴然で、戦闘速度の中で自由に変形できる腕と指は、その力が強くななくても、爪の発射がなくても、二人を手玉にとるには十分だった。

だが、それはどこまでに適応できる性質だ？

津島家宅でルビイをわざと取り込ませた時、腕以外の変形はゆつくりだった。砂浜で失ったケープを復活させたのも戦闘が一段落したタイミングだし、今もヘソの横の開いた穴を修復せずにいる。

そこに、付け入る瑕疵があるかもしれない。

頭や胴体を破壊して、隙を作れば。

(だがどうやって、*“隙を作るための隙”*を作る?)

自分は右腕を封じられ、ブランキアは左腕を失ったのに。

ストーカーの思考を露知らずブランキアは、腰を洗う波や肘や鰓から垂れる水滴にも動かされず、構えを解かない。

「あなた、ルビイと同じなのね。自分が中途半端な存在だって、分かっている?」

ブランキアは反応しない。

緊張感のある構えのまま、じりじりと、ストーカーとは逆の方へ自分の位置をずらしていく。

挟み撃ちを狙っているのか、と思ったが、ストーカーへの目配せなどはない。

「まあ、あなたの夜は、私には解放できそうにないけど」

ブランキアが足を止めた。

「あなたの正体も目的も、興味ないわ」

会話を拒絶する女声の返答に、ラズリは切りそろえた前髪をかき上げた。ノースリーブの脇は、きちんと処理されている。

ストーカーは、それに眉をひそめる。

*

ブランキアが動いた。

これで決めるつもりだ。

迷いなく水深一メートルの海水を裂いて接近する姿に、ラズリ・フォーメアはそう察した。

小柄なブランキアのリーチは、腕が約七〇センチ、脚が約九〇センチといったところ。その距離まで潜り込んでラズリをフォーマライズさせているムーフォームを抜き出せば、ブランキアの勝ちだ。

対するラズリは、今この瞬間にもフォーマライズを解いてムーフォームを海に落とせば、それで勝ちではある。

だが――

「仕方ないわね」

――受けて立つことにした。

仮面ライダーとはよく言ったものだ、とラズリ・フォーメアは思う。巨大な一対の複眼に、触覚というには接触を拒むナイフの角を持つその仮面は、顔を完全に隠している。

だが、顔を隠せば心が隠せると思っっているなら、大間違いだ。

(待つてるわね、誰かを)

打ち上げられたゴミが堆積するグラウンドまでは約八〇メートル、防潮堤まででも一〇〇メートル強、距離からしてライフルの類だろう。

ブランキアとの再戦があるかは分からない。だが手の内を隠しているなら、確認してから撤収しても損はない。弾体の飛翔であれ衝撃波であれ、認識も回避も可能なのだから。

そして想定通り、光の瞬きを捉えた。

避けるまでもない。

高速回転する針状の弾丸を、左肩で受ける。

身体が揺れ、左腕が海に落ちる。

泡が飛び散り、水に還る。

それだけだ。

(じゃ、私の勝ちね)

ラズリ・フォーメアは笑った。

それは油断だった。

かすかな音楽を知覚した直後、ラズリは視聴感覚を消失した。

*

大きな耳垢がとれたようだった。

トンネルから抜けたようだった。

ぼうっとした音が輪郭を取り戻すと共に、右肘に痛みが登ってきた。

なにをしていたのか。

顔が濡れているのを感じ、慌てて目と口を閉じる。

曜先輩に「水面に顔をつけたら、絶対に口を開かないこと」と言われていたからだ。

プールで泳ぐ練習をしていたんだっけ？

だが両膝と両手は、水の中で波に移ろう砂に触れている感触がある。髪もツーサイドアップに結ばれたままだ。プールではない。

口を膨らませたまま、顔を上げる。

目を開けると、待ち針の先端のように小さな点から、光が広がった。青々とした空の下に広がる穏やかな海、右手から左手に向けて伸びる波止場、その向こうにある沼津港の入口。

「え？」

視界の中央に、母の姿があった。

白いアツパツパに、腰丈のケープを羽織った母が。

左半身を失い、右半身の断面を白い泡が覆っている母が。

喉のえぐれた頭が、首の座っていない赤ん坊のように背中側に垂らした母が。

「お母さん？」

その声を耳にしてようやく、自分が黒澤ルビイだと思い出した。

*

「な」

三日月のように残された顔の一部が、空気を空に漏らした。

人間的な形状を保ったラズリ・フォーメアの右半身を残して、牡丹雪のような泡が海に落ちていく。

シャイニーの攻撃が成功したのだ。

あとは、私の番。

水を裂いて走る桜内梨子は、ブランキアの右腕を伸ばす。

不規則にささくれ立った断面を覆う泡の奥に覗く、折れた肋骨が作る胸郭。

その奥に、直径一〇センチの透明な泡が見えた。

(コア・ビード！)

指先が、その表面に触れた。

これを割れば、勝ちだ。

淡く輝くムーフォームを掴めば。

だが――

「一手……遅かった……わね」

――割れない。

ラズリの身体が、重力とは違う力で倒れ始めた。

ラズリの右手指のうち三本が海に伸び、おそろくは砂を貫通して岩盤を掴み、ラズリを海へと引っ張り込んでいるのだ。

指が空をかく。

ラズリの残り二本の指が、ブランキアの右手首を掴んだ。

離れていく。

一〇センチ。

ダメなのか。

二〇センチ。

いや。

三〇センチ。

みんなの居場所をおびやかすものは、私が排除する。

四〇センチ。

そのためなら、一人のフォーメアも逃がさない。

五〇センチ。

絶対に――

六〇センチ。

「――逃がさない！」

右手を開く。

顎門アギトが開く。

左肩に違和感。

肩の装甲に生じた、腕を三倍する広さの黒い影。

それが蛇腹を伸ばすように左上腕を走り、切断された肘を通り過ぎ

ぱちん、と。

——ラズリの身体が海に落ちた。

白い泡が右半身の形に広がり、その中心を駆け抜ける。

空を切った右手をそのままに、立ち止まる。

「……間に合わなかった」

俯き——奇妙な左腕が目に入った。

欠損したはずの前腕が修復されている。

いや、奇妙なのはそこではない。肩から手の甲まで、いや、手の甲からさらに先にまで、昆虫の外骨格のように黒光りする装甲がついているのだ。黒く、ところどころに金色の斑点がある装甲がなにかは、思い出すまでもない。

「ロリポリ？」

応えるように、右腕に対して長すぎる左腕が、梨子の意思を無視してこちらを向いた。

そこで、修復された左手に、なにかを握っている感触があると気付いた。

「正四面体から円柱形に再結晶していく、海の色を反射して淡く光るムーフォーム。」

ベルトが瞬く。

波に洗われる桜色のフォームの左隣で輝いたのは、黄色のフォーム。

それを見下ろす仮面の目も、赤から黄に変化している。

「届いた」

届かせてくれたんだ。

花丸ちゃんが。

そこで、花丸からなにを頼まれていたのかを思い出し、振り返った。「ルビイさん、怪我はない？」

顔を上げたのは、黒鉄色の鎧をまとったストーカー・フォーメアではなく、ツースайдアップから萌葱色のワンピースまで海水でしどどにしたルビイだった。腰まで海に浸かり、寒そうに肩を抱いている。

「遅くなってごめんね、すぐ浜に――」

「――ピギイ！」

ルビイは梨子を見ると、奇声を上げて気を失ってしまった。

「ちよ、ちよっと！」

海面に仰向けになったルビイを、リーチの伸びた左腕で抱きかかえ、首を傾げる。

「ブランキアのこと、怖がってたっけ？」

だがルビイをお姫様抱っこする左腕の内側を見て、梨子は笑った。

ダンゴムシの脚のような、わしわし動く何対もの細かな指が、腕一面に蠢いていたからだ。

「うん、これは私もイヤかな」

ロリポリはシヨックを受けたようで、大きく指を広げて表明した。

*

「なにが起こったんです？ 今の」

「さつき義森が説明した通りでしょオ？ 怪人を音楽でぶっ壊すつて」

それは聞いていた。ハーチェクで撃ち込んだ弾丸で、指向性スピーカーで照射した音楽を増幅させる、と。

「じゃあ、フォーメアを崩壊させる量子信号パターンが本当に存在したんですか？ 本当に？」

「私だって分かんないわよオ！」

「す、すいません……」

シャイニーのマスクを展開した鞠莉に声を荒げられ、野尻松之介は質問をやめた。

眼前では《OGIスクード》の黒服数人が、ゴミまみれのグラウンドを我入道海水浴場へと走っていた。人間の状態に戻った黒澤家の

息女を保護するためだ。

松之介は双眼鏡を挿んだまま、背後に立っている黒服を一瞥する。鞠莉の専属ボディガードであるセブが松之介の視線を受け止めたかは、サングラスで分からなかった。

鞠莉の首元から漏れるメロウかつラウドな音楽を耳に、松之介は考える。

特定の量子信号パターンを与えることで、液体の “泡”^{Foam} を “形”^{Form} にする。ムーフォーム関連技術の根幹である《フォーマライズ》という概念は、義森に嫌味を言われる自分でも共通認識の範囲だ。フオーメア^{怪人}とスランバラー^{本体}がなんらかの信号でやりとりしているのも、それが “μ”^{ミュー} が表わす通り音楽^{Music}と関係している件と合わせて、社内では機密でもなんでもない。

なぜならシャイニーのフォームチェンジも、フオーメアと同じ理屈だからだ。ムーフォームを介して水を泡に成形する理論を静岡OG Iが実用レベルに発展させ、ムーフォームを覆う量子信号発信器として実装、プラットフォーム状態のシャイニーに装甲や機能をフォーマライズする技術としたのであって、そこには大量の従業員が関わっているからだ。

だからこそ、そのフォーマライズを無効化する方法の存在は——
「——もの凄く重要な発見、ですよね？」

仮面ライダー事業の主任が、今まさに防潮堤の上を喚声を上げて走る気持ちは、松之介にも理解できた。

「重要、よねえ」

反面、鞠莉は気怠げに膝射の姿勢から身体を起こし、エウリュスIIハーチエクを操作した。エウリュスに生成されていたスナイパーライフル部分と、頭の上についていた一眼の観測装置、そしてシャイニーからギリースーツのようにぶら下がっていたワイヤー型の装甲が消える。

「やっぱ肩こるわア、《Hack》は」

アンダースーツ姿に戻ったシャイニーは、鉄の階段を鳴らして防潮堤に下りた。

松之介はシャイニーと入れ替わるように階段を上がり、玩具の残骸を拾い上げた。

“もの凄く重要な発見”が具体化した玩具の拡声器は、シャイニー主導の一撃で溶解したプラスチックの塊と化してしまった。配線や基盤が埋もれて残った辺り、発生するエネルギー量はエウリュスの必殺技に比べれば微々たるものだが、二度目の使用は不可能だ。

「主任が設計するシャイニーの武装って、なんで一発限りなんでしょう」

「そうねエ……」

身の入っていない受け答えに、松之介は鞠莉を振り返る。

「鞠莉さん、S—ユニット機の存在意義は薄れませんよ。ただ音楽を聞かせれば、怪人が崩れるわけじゃないんですから」

「そうじゃなくてエ」

「エウリュスと同じく一撃限定の武器だとしても、今回みたいに仮面ライダーと協力すれば問題ないですって」

「だアかアア……まあいいわ」

銀色のシャイニーをまとった主人の顔は、いつになく冴えない。

いや、そういうえば墜落する前のスターフォア一六号でも、義森が最近変だと気にして——

「——見ましたか!? さっきの!」

どこで折り返してきたのか、戻ってきた義森が声を上げた。

「あっ………はい、すごい必殺技でしたよね」

「《GⅡロリポリフォーム》ですよ!」

シャイニーのマスクに半分顔を埋めた鞠莉の横目と、松之介の目が合う。

「ブランキアにロリポリのフォームを内部から埋め込んで、二つのフォームの力を乗算させた、つまり、フォームチェンジというよりフォームロードです! シャイニーや《GⅡセディーユフォーム》とは違うんです! しかも発動者がいなくてもロリポリがロリポリの形を——いや、ロリポリをベースにした追加武装を産み出したとなれば、フォーム内部にその情報を保持しているか、なんらかのプロト

コルで発動者と通信しているか、これは新発見で——いや、セディユと薙刀でも同様の事象が起こっていたのかもしれない!」

「この玩具の件で興奮してたんじゃないんですか?」

「そうみたいねエ」

松之介と鞠莉は小声で言い合う。

「梨子さんは、いつ東京に戻るんですか!」

「さあア、私は知らないわよ」

「引き留めてください! 私は大諏訪に戻ります!」

「主任、これはどうします?」

基盤が埋もれた元玩具のプラ塊を見せると、義森は目を何度か瞬かせたのち、首を振った。

「処分してください」

「いらないんですか?」

「ええ。フォーメアへの効果は想定内でしたので」

打って変わって無感情にそう言うと、義森は防潮堤の階段を駆け下り、スクーターに乗って行ってしまった。

「僕らも撤収しますか」

義森が放置していったアタツシエケースを手に取り、鞠莉に言う。

だが返答がない。

「鞠莉さん?」

松之介が顔を向けると、鞠莉はシャイニーの内部から音漏れしている音楽を気にもせず、口を小さく動かしている。

「主任が変なのなんて、いつものことじゃないですか。また変な道具を作って、ひよっこり来ますって」

「撤収するわよ。今日の件は報告に上げないで」

「え?」

鞠莉は松之介の発言を無視して階段を下り——

「相談があります、理事長代理」

——振り返った。

逆光の階段の上に立って海水を滴らせる、苔のような装甲をまとった仮面ライダーに。

次回予告

曜 「……ねえ、グループ名ってどうなったの？」

千歌「九話の冒頭から一〇万文字以上使って、結局決まらなかったね」

鞠莉「さらに一〇万文字使っても、決まらなかったりしてエ」

曜 「まつさかあ……。え、まさか、だよな？」

千歌「次回、仮面ライダーメルシャウム第一話、『失敗する予感は』！」

曜 「え、ほんとに決まらないの？」

千歌「クールラストのライブ回に向けて、よいつむトリオが忙しくなるよー！」

曜 「グループ名、決まってるのにライブするの!？」

鞠莉「You, I like OK! 結成して一年以上Group名がなかったAfter SchoolなTea Timeパイセンもいるんだしいー！」

曜 「それ、ロックバンドじゃないですかあ！」

C

お弁当を食べ終わった渡辺曜が千歌とルビィと話をしていると、梨子と善子が階段を上がって屋上に出てきた。

「だから、その……悪かったって」

「気にしないで。私だってお陰でお父さんに、わがまま言ってこれたんだから」

「じゃあ、このまま？」

「もう少しね」

その後ろを黙ってついてくる人影を見て、

「理事長!?! どうしたんです?！」

曜は思わずバックジュースを持つ手に力を入れてしまった。

「濡れちゃいますー！」

「あ、とととと」

こぼれるジュースを脚を開いて避け、短パン必須のミニスカートだったことに安堵する。

「ダ・イ・リ、って言うのも久しぶりねエ」

そうしている間にも、鞠莉、梨子、善子の三人は、曜たちのところへやってきた。

屋上の縁に腰掛けていた三人は、増えたメンバーに合わせてコンクリートの屋根に下り、車座を作った。ルビイは丁寧にハンカチを敷いているが、曜と千歌は胡坐だ。鞠莉は小さな折り畳み椅子を広げて腰を下ろした。

「で、なんの話？」

曜が問うと、梨子は困ったように含み笑いをし、善子は軽く曲げた指で顔を覆った。

「新たに我が傘下に加わったリトルルデーモン一〇号の手により、我が肉体を包む《ヘパイストス》の暗き炎を、《テテユス》の見えざる海で鍛え上げる——って話よ」

「私が善子ちゃんを徹底的にしごいてあげるって話」

「だから、ヨハネだつてば！」

「はいはい、ヨハネちゃん」

「むうー！」

善子と梨子は軽口を叩き合い、ルビイと千歌はクスクス笑う。

「じゃあ梨子ちゃんが、ヨハネちゃんのダンス、見てくれるの？」

「うん、ライブに向けて詰めなきやいけないのは、もうそこだけだから」

「責任重大よねえ」

「頑張つてね」

「はい」

そんな二人のやりとりに、曜は疑問を覚える。

（梨子ちゃんとヨハネさんって、こんな仲良かったんだっけ？）

そして曜は、二人の親密さについて具体的に知らないことに気付いた。梨子は最近まで千歌の編曲の手伝いで、善子は衣装作成とダンスの練習だったから、二人の会話を見ること自体が稀だった。性格的に二人は合わないだろう、とのイメージがあっただけなのだ。

（あれ？ でも、そもそも津島さんを私たちに紹介したのって、梨子

ちやんなんだっけ。実は仲良かったのかなあ)

千歌も気にしていないようだし、そうなのかもしれない。

(ま、いっか)

だから曜も、頭を空っぽにすることにした。

「でも、衣装はどうするの？ まだ曜先輩の分しかできてないよ？」

ルビイが言うと、善子と梨子が顔を見合わせる。

「そのための、マリー召喚よ」

「理事長代理が協力してくれるんですって」

「ええ!?」「代理が!？」

思わず声を上げた曜と千歌に、戦国武将のように折り畳み椅子に腰掛ける鞠莉は渋い顔をした。

「私、ものを作るのって苦手なんだけどねエ。壊すのは男、作るのは女、って言うでしょオ？」

「言いませんよ。って、じゃあ代理は作る方じゃないですか!」

「私は壊す側なのオ！」

「こんなものぶら下げといて女なんて、ずるい！」

「ピギ!? ぶ、ぶら下げてる!？」

「陰と陽を重ねし印をその身に秘めたるは、天上におわす我が議長――」

「秘めてるんですか!？」

「秘めてないって！ 私は壊す側なのオ！」

*

みんなが談笑する様を微笑ましく見ていた桜内梨子は、バッグの中で震えた電話に首を傾げた。梨子に直接連絡をするのは、父を除けばここにいる友達だけだったからだ。

だが画面に映された名前を見て、顔を強張らせた。

「どしたの？」

隣にいた曜が問うたので、画面を見せる。

「お母さんから。やっぱり、もう平気みたい」

「平気？ え、どこか悪かったの？」

「事故で入院してたの。私と同じ事故で」

「ごめん、そうだったんだ——え？ やっぱりそうなの？」
「やっぱりって？」

言いながらメールに目を通すと、次第に眉根がよってくる。
月曜日に受信したメールと、趣旨は同じだった。

早く戻ってきてほしい。顔を見せてほしい。

「そうだよね……」

東京を出た娘の状況を、母は知らない。友達を一人も家に連れてこないような一人娘が、父の付き合いと自身の検査のために、田舎で寂しく過ごしていると思っただけだ。

だが、そうではない。この街でできた友達のために、ライブの手伝いをしたい。だから可能な限りこの街にいたい。そう父に告げられるくらい、梨子は変わってしまったのだ。

「お母さん、こつちに転院できないのかな……」

「梨子ちゃん。ねえ、ねえ梨子ちゃん」

物思いに沈んでいた梨子に、曜が電話を突き出してきた。

「この記事の事故って、梨子ちゃんのだよね？」

「1／15 東京湾 転覆事故」と簡潔なシノプシスが書かれた単語カードの下から、電話の画面が出てきた。そこには今年の一月に起きた、東京湾クルーズの海難事故の記事が表示されていた。

「レストラン船ヴェントウーノ、乗組員六三名、乗客四一五名、……うん、これだよ。ネットニュースになってたんだ」

「そりゃ、ひと月くらい大騒ぎだったもん、全国区だよ」

ひと月というと、東京の病院に入院していた期間だ。ちょうど騒ぎが収まった頃に退院したということか。新聞記者も現れなかったし、局所的なものだと思っていた。

「でも、じゃあ、やっぱり誤報だったんだね」

「なにが？」

「ハハ」

と曜が指差す。

『救助された二名のうち、一名は心肺停止の状態です。都内の病院に運ばれたが、15日深夜に』——

「――死亡?」

「この記事、一旦消えて、この部分が削除されてアップされたんだよね。たまたま保存してたから気になってたんだけど、でもよかったよ、お母さんも生きてて!」

曜は笑っている。

梨子は電話に目を落とす。

母から届いたメールに。

第一一話：失敗する予感は — 1

AV

「無理無理無理無理!! 絶対無理!」

「無理じゃないよ! むっちゃんならできるよ!」

「始まる前と、曲紹介と、終わりの挨拶だけでいいから! お願い!」
むつがドアまで後ずさり、曜と千歌に脇から固められる。

「なんで私に頼むの! MC司会なんて誰でもできるって!」

「できないから言ってるんだよ!」

「放送委員のマイクパフォーマンスが見たいのであります!」

「そんなのないって!」

幼馴染みのむつが困っているのを見ても、内山いつきにはなにもできな
きない。

《ラブライブ!》のエントリィが始まった五月九日。

「緊急ミーティング!!」のテキストで昼休みの部屋に集まったス
クールアイドル同好会の面々は、控えめに言っ
て、窮地に立っていた。
「会場設営も必要よねエ」

「立ち見じゃないの? ライブでしょ?」

「お祖父ちゃんお祖母ちゃんが来たらどうするの?」

長机では鞠莉と善子と花丸が、体育館の利用申請書の写しを見て話
をしている。小原鞠莉名義で理事長代理が提出し、いつきたち生徒会
が受領した申請書だ。

「じゃあ椅子は必須として、ゲネプロ? 前に準備ね。花丸、手伝える
?」

「もちろんずら——です」

「椅子はみんなに手伝ってもらいたいね」

「もういっそのこと、講堂でも作っちゃおうかしらア」

音ノ木坂女学院のような講堂がない浦の星女学院では、イベントに
は体育館か校庭を利用するしかない。パイプ椅子を並べて席を作る
のにも、体育館の場合は床を傷つけないようにフロアシートを敷く作
業が、校庭の場合はパイプ椅子を掃除する作業が、最低でも発生する。

その上に放送機材や照明の準備に、使う練習も必要になるのだから、会場設営をスキップしたいと思う鞠莉のは当然の発想だった。アプローチはおかしいが。

「大丈夫かな」

よしみが耳打ちにしてきて、サイドテールの髪がいつきの頬に触れる。

二人は部員たちの邪魔にならないよう、キャビネットの前に突っ立っていた。

「ライブが形になればいいんでしょ?」

「お客さんの数も求められるみたい」

「それ、まずくない?」

いつきたちはヒソヒソ話をやめ、体育館側の窓際に固まっている人たちの声に耳をそばだてる。

「あんまり話題になってないよう……」

「もつと派手に露出しないとダメか?」

「露出!? あ、えつと……。そうですね、《浦の星女学院スクールアイドル同好会》だと宣伝が難しいですよ」

「話題になってるかどうかも分かりにくいです」

鉄格子で補強された窓のそばでは、顧問の笠木信代が移動式の黒板に作業の割り振りを書き出し、ルビイと梨子がそれぞれ電話やタブレット端末を操作している。SNSなどをエゴサーチしているのだろう。

「でもでも、曜先輩のポスターは拡散されてますよ」

「でもイラスト部分ばかり。肝心の情報が見切れちゃってる」

「お、それは誤用だぞ、桜内」

「はい?」

むつが内浦から沼津までバイクで走り回って、ポスターの掲示を依頼し始めたのが、ゴールデンウィーク頭——本番の二週間前。静岡県警に申請した駅前でのビラ配りができるのが明日以降、本番の五日前からだ。これがギリギリなのか、興味がある人に情報が行き渡るのか、渡ったとして予定を開けてきてくれるのか、いつきには想像もつ

かない。まして彼女らは、スクドルが飽和状態にある二〇一六年に誕生する、実績も知名度もゼロの新人なのだ。

「意外と全方位にノープランだったんだなあ」

「私たちが呼ばれるのも分かるね」

よしみの呟きに、いつきは目をしょぼしょぼと瞬かせて同意した。

五月一五日をターゲットにライブの準備を始めたのが一箇月前で、そこから詞に曲にダンスに衣装に、がむしやらに走ってきたのはいつきも認めるところだ。だが表に見える部分に注力した余り、それ以外が疎かだったのは否めない。

ゆえに、よしみ、いつき、むつの《よいつむトリオ》は、千歌の「どうせ暇でしょ」の一言で、彼女らの手伝いをすべく招集されてしまったのだ。

千歌、曜、善子、鞠莉、花丸、梨子、ルビイ、よしみ、いつき、むつ
部員五人、手伝い五人、顧問一人と、第二教官室が狭く

感じる――一人が集まるこの状況、窮地と言わずして、なんと言おう。

「絶対無理！ ぜえったいむうりい！」

むつが千歌と曜から脱出し、いつきたちの方に逃げてきた。トリオの二人を千歌たちに差し出すように押し出し、自分はその後ろに隠れる。

音響機材
「PAの調整ならできるよ、放送部だし！ でもMCは無理だから！

無理だよ！」

ずり落ちたカチューシャで髪をかきあげ、いつきたちの耳元で喚くむつを見れば、千歌も曜と片目で見合い、

「じゃあ、むつちゃんには放送関係をお願いするよ」

と妥協を受け入れることにしたようだった。

そして二人の目は、いつきとよしみに向いた。

「私、撮影する」

「いつき!? ズルい！」

「ごめんね」

舌を出す。先手必勝だ。

「平気？ ダイヤさん、怒るんじゃない？」

曜が人差し指を立てて言う。その指先には、黒澤家長女のダイヤの

顔が入った吹き出しが浮かんでいるのだろう。

「ちようどいいよ。生徒会長も、『スクールアイドル同好会の、部活動への昇格を決める職員会議に必要な資料を入手してください』って言ってたし」

「ダイヤさんが？ わざわざ？」

曜が首を傾げ、いつきは頷く。

職員会議で参照する動画は、おそらくそのまま、《ラブライブ！》エントリー時に提出するパフォーマンス動画になる。ダイヤは生徒会長として、そのクオリティをチェックしたいのだろう。

「じゃあ、MCはよっちゃんでもいいの？」

「それしかない……んだよね？」

千歌の消去法に、よしみは半笑いで言う。

「でも、人前で喋るなんて経験ないよ。なんでむつはやりたくないの？」

「ちよつと、またボールこつちに来るの？ 無理だって！」

背中から刺された格好になったむつは、よしみからも距離をとる。

「トリオの切り込み隊長が、今さら恥ずかしがらなくても」

「してないわよ！ 切り込みなんて！」

「してたじゃん、ルビイちゃんを勧誘した時とか」

「ピギ！」

耳聴く自分の名前を聞き取った後輩が、梨子の影に隠れた。

「とにかく、無理なものは無理だから！」

とむつが二年生の集団の間をすり抜け――

「Shoot！」

――鞠莉のお尻にぶつかった。

「あ、ごめんなさい！」

鞠莉のサインペンが滑り、長机で落書きしていたイラストに黒い線が走ってしまった。

「ちよつとオ、全年齢番組に相応しくないSワードが出るところだったじゃないのよオ」

「ごめんなさい！ 私、もう行くから！」

むつは頭を下げながら部室のドアへ走り、

「おい、部室は走るな！」

笠木が端末から顔を上げた時には、屋外に飛び出していた。

「千歌ちゃん、あんまり無理に誘ったらダメだよ」

「さすが無理に誘われた筆頭」

「曜ちゃん！」

イタズラっぽく笑う曜に梨子が苦笑を返すが、千歌は釈然としない顔だ。

「できるはずなんだよ、むつちゃん。中学の文化祭とかでMCやつてももん」

「そうなの？」

新しい友達に問われ、曜が含み笑いで口を開く。

「そうだよ。私たちがやった人形劇じゃ、ナレーションもしてたしね」
「懐かしいなあ。よつちゃんが恥ずかしがって、台詞言えなくなっちゃったんだよね」

「そうそう、結局、考朔くんにチェンジしてね。全編アドリブみたいになっちゃって。あれは盛り上がったなあ」

「もう、忘れてよ！あのことは」

よしみが割り込み、千歌と曜とじゃれ始めた。

「松和さん、早く退院できるといいよね」

「ほんとだよ。事故に怪人に踏んだり蹴ったり——」

完全に雑談にシフトした千歌たちから離れ、いつきは一人、自分たちのことを考える。

市立静浦中学校に入学したいつきとむつは、一年次の三学期に廃校となった同校から隣の沼津市立内浦中学校に転入した。そこで出会った内浦の子供たちと仲良くなり、その中でも強く意気投合したよしみと、三人の名前をもじって《よいつむトリオ》と自称するに到ったのは、一回りも小さなむつがいつきを引っ張ってくれたからだ。

そのむつが、いつ、ピラ配りもイヤがるようなキャラになったんだろう。

「私、MCやるよ」

雑談の切れ目、よしみが言った。

「ほんど?! よかったあ!」

千歌は単純に喜び、

「なんで急に?」

曜は疑問を呈した。

「一応、松月の看板娘だし? 少しは顔を売っておくのもいいかな、って」

「そっか……じゃ、よろしくね、よしみちゃん!」

曜は明るく返し、よしみも笑顔で応える。

「担当は決まったか? じゃあ、もう昼休みも半分だし、一旦解散だ。パフオーマーと衣装担当以外は放課後、またここでミーティングするぞ!」

信代が顧問らしく音頭をとり、一年生と三年生は三々五々に解散した。千歌たちは部室でお弁当を食べるらしいが、いつきとよしみはむつを探すべく部室をあとにする。

「MC、できそう?」

「平気平気。私だけなんにもしないってのも、みんなに悪いしさ」

「どっちにしても、会場設営は手伝わされそうだけどね」

「全校生徒レベルでしょ、それは!」

よしみはケラケラと笑いながら、昇降口への渡り廊下を歩く。

いつきはその少し後ろを付いていく。

むつがよしみの横にいないことを除けば、いつもの位置だ。

よしみが言った理由が体裁なのは、いつきにも分かった。だが曜はよしみの発言から、それ以上のことを読み取つたらしい。そうでなければ、あんな割り切った笑顔で了承しないだろう。

千歌と曜がスクドルを始めると言い出した時は、いつきは大いに驚いた。

だが二人は幼馴染みではないし、毎日朝から晩まで遊ぶ間柄でもなかったたので、心境の変化があったのだらうと思える程度ではあったのだが。

よしみとむつは、そうではない。

「よし、直ったぞう！」

高海美渡は両腕を天に伸ばしたが、パーティションに区切られた個人オフィスの中に、その成果を共有できる人はいない。平静を装ってキーボードに手を戻し、インスタントメッセージでデプロイ依頼を出す。

先月の途中で異動してきたJN開発室に、美渡はまだ慣れていなかった。防音の磨りガラスから出ていける情報はネットワーク経由以外になく、仕事中には声もジェスチャーも笑顔も必要ない。そんな職場は、ホテルオハラのコシエルジュ時代にも静岡OGIのJH開発室にもなかったからだ。

と、数秒でリソース管理システムから完了報告と、美渡が書いたコードを反映した処理実行結果が送られてきた。

コンピュータでシミュレートした風洞に、人型モデルが水平に浮かんでいる映像だ。

カウントダウンと同時に、風洞内に風が吹き込まれる。

大気の流動がアニメーションで表現され、その中を、顎を上げ、手のひらと脛から化学ロケットを噴射する人型モデルが飛んでいく。

「……ようし」

シャイニーに実装を予定している飛行機能の制御システム——《ストローク》、その内部結合テストだ。

テストケースの表示の変化に合わせて、横風にぶつかり、エアポケットに入り、音速を超え、様々な状況がシャイニーに課せられる。

シャイニーのモデルは、手と足の位置を調整してロケットスラスターの噴射方向をコントロールし、各所のフラップと合わせて姿勢を制御し、状況に対応していく。雲を示す印に飛び込むたびに、溶存酸素溶解換気装置が回収した水が電気分解されて水素と酸素になり、画面左のゲージが増加する。

ウェアラブルエアクラフトとしてのシャイニーは、小型かつ小回りが効き過ぎるため、システムからの緻密な四肢制御が不可欠と想定されていた。その実装も、このテストが過ぎれば道程半ばといったところ

ろだ。

「うん、オツケー」

美渡のコード修正前にも繰り返された巡航テストケースは、修正後も問題なくパスできた。

そして、攻撃が加わる。

「ここからだぞ」

対空ミサイルを想定した圧力変化に煽られ、シャイニーのモデルが弾かれた。

二発目、三発目の爆圧がアニメーションし、その度に手のひらと脛でスラストが小刻みに瞬き、コンデンサに蓄えられた電力が小刻みに増減、レットゾーンの縁を舐める。

だが、それも乗り越えた。

メインカメラで索敵する動作ののち、シャイニーは巡航状態に戻り、次のテストに移った。

「ようし……い！」

前回異常終了したテストケースを超え、美渡は息をついた。

もちろん美渡は、流体力学の専門家でも航空力学の専門家でもない。誰かが設計した計算式から切り出された仕様を、仕様書に従って愚直に実装しただけだ。今回の自分の修正が具体的にどう反映されたかも、美渡自身は分かっていない。

それでも、シャイニーの全身モデルのあちこちが動き、大気を裂いて渦を生み、過酷な状況を乗り越える様を見れば、達成感を得ないわけがなかった。

その時、ノックの音がした。

磨りガラスの向こうに人のシルエットを見付け、席を立ってガラス戸を押し開ける。

「お疲れ様です。修正は終わったようですね」

来訪者は主任だった。

「はい。今、確認中ですけど」

「お食事には行かれましたか？」

「まだですけど、なんでです？」

「もう一五時ですよ」

「ウソ！」

腕時計を見て、その事実には驚いた。

「一三時半くらいだと思ってました」

「結果を確認したら、食べに出来ませんか？」

「でも、こんな時間ですよ？」

「早い夕食、ということだ」

上品な笑顔を浮かべる主任の提案に、美渡は渋い顔を浮かべそうになり、押しとどめた。

ボサボサだがいつもと違い脂っ気のない髪に真新しい白衣と、彼にしては珍しく身だしなみに気を遣っているのが分かり、無下に断るのも悪いと思ってしまったのだ。

と、マシンがアラートを発した。

「なんだろう」

ディスプレイがアピールしていたのは、フラップの負荷の増大を知らせるワーニングメッセージだった。

「やばい、直ってない？」

美渡が椅子に座り直した時、上背部フラップが根元から破損、

「あ」

という間に、きりもみ状態に入ったシャイニーは風洞のモデルに激突した。

「うわあ……。主任、ちょっと待っててください」

「もちろんです」

美渡は修正したばかりのコードの設計書を最新化し、単体テストコードを再生成からの再実施、そのかたわらでMミッションデータレコーダーD Rのログにアクセスする。

テストコードはオールグリーン。設計書通りだ。

「風洞シミュレートを取り除いても、立て直すのは不可能ですね。燃料の収支が合いませんでした」

主任が自分の端末を操作しながら言った。実際に飛んでいる状態である状況に陥ったら、間違いなく助からない、ということだ。

「背中側のフラップ、どこかと干渉してたっけ」

「直接の干渉はありません。空気抵抗も想定内のはずです」
「ですよね」

ロケツトは手のひらと脛だ、余程の姿勢と挙動にならなければ背中とは干渉しない。

だがMDRのログを時系列で追っていく限り、テストの進捗に従って上背部フラップの動作効率が落ちているのは事実だ。スプレッドシートにログを転記し、上から下に、左から右に、ディスプレイを指でなぞり――

「――脛だ。脛横のフラップが先に、手のスラストでやられてる。それをカバーしようとして背中もやられたんだ。でも、なんで？」

主任がそばにいることを意識していない口調で呟き、フラップと熱のデータを絞り込んで並べる。

「主任、センサー系のコードの閲覧権をください」

「でしたら申請を――」

「――後でしますから！」

「は、はい……。これを」

主任の端末をひったくり、身体の各所に存在するTAT^{全温}センサーと、肩に埋め込まれた^{対気速度計}ピトー管の情報を取得するコードを開く。

「これだ」

定数系を眺めて、すぐに分かった。

「バグですか？」

「クロックがあつてない。TATセンサーの取得がオーバーヘッドだ」

姿勢とフラップの位置を決定するための熱情報の取得が遅延し、実態とズレた熱情報による角度調整が行われた。その積み重ねが系を狂わせたのだ。

「定数のコミットは昨日の夜二〇時五三分、単体テスト用の値で本チャンのソースを上書きしたっばい」

「猪飼さんですね」

数日前の腕部制御テストの際、左前腕を解剖学的ゼロ度を超えて動

かした障害で、名前が挙がった技術者だった。

主任は美渡から端末を返してもらうと、誰かと通話を始めた。

美渡はその裏で、調べた内容をまとめてチームに周知した。名指しはしない。状況は伝わるはずだ。

「よし、ボールは投げたぞ」

独り言と同時に、お腹が鳴る。

「行きませんか？ 食事」

「そ、そうですね……」

恥ずかしさから思わず返事をしてしまい、美渡は後悔する。

妙にこぎれいな成りの主任に「そのつもり」を感じてしまうと、元々男つ気のない二一年間ではあったが、それを求めたことも求められたこともなかった美渡は、対応に困ってしまう。

「あ、でも定数の修正なんてすぐ終わっちゃいますよ？ それでまたこっちマターのエラーがあったら？」

「四つ目のμ-6型が発見されないことに、《ストローク》のシステムテストは始まらないのです。食事を抜いてまで急ぐ必要はありませんよ」

そして、口元を持ち上げて上品に笑う。

(うーん、まあ、メシくらいならいいか)

結局は腹をくくり、美渡はシザーケースを改造したウエストポーチを手に席を立った。

主任が押さえているドアをくぐり、廊下に出る。

「この時間までランチやつてるお店って、ありますか？」

「市内まで出てみますか」

「わざわざ？」

「散歩がてら、ですよ」

(デートがてら、じゃない?)

そう思いながらも、地下へ向かうエレベーターが来てしまう。

美渡はそこに乗るしかない。

*

「浦の星女学院！ スクールアイドル同好会でーす！ 次の日曜日に

ライブやりまーす！」

コンビニから出てきた男性が、千歌からB5サイズのビラを受け取った。

「ありがとうございます！ ご家族お友達お誘い合わせの上、ご来場くださいー！」

丁寧にお辞儀をして次のターゲットを探す千歌を見て、

「浦の星女学院スクールアイドル同好会、ライブのお知らせです！」

小口田よしみも可能な限り声を上げる。

静岡県警に申請したビラ配りの場所は、沼津駅の南口からバス乗場へと続くアーケードの下だった。千歌、梨子、よしみ、いつきの四人は分散し、ロータリーを行き交う人たちに向けて宣伝をしていた。

パステルカラーで描かれた千歌、曜、善子が並ぶビラは、なかなか受け取ってもらえなかった。放課後の学生にはそれなりに出ていくが、大人は学生活動であるスクールにはほとんど興味を示してくれない。少し話ができても、内浦の事情を市内で働く人たちが知っているわけがなく、まして力になる余裕もないと言われれば、ビラを渡すのも気兼ねしてしまう。

「浦の星女学院スクールアイドル同好会でーす！ 廃校を阻止するため！ ライブのご観覧にご協力をお願いしまーす！ はい、ありがとうございます！ 内浦の浦の星女学院です！」

それでも千歌は、旅館の手伝いで培ったというには街頭演説のような応対と、歌の練習で鍛えた発声とで、通りすぎる人に自分たちの所属とイベントの詳細を連呼していた。知ってくれば受け取ってくれるかもしれないし、バス停に並んでいる人も覚えてくれるかもしれない、と思っているのだろう。

だが、手元のビラが減らなければ、気持ちも消耗してくる。

宣伝の合間に、ふと虚脱した千歌が目に入り、よしみは駆け寄った。「千歌、どんな感じ？ こっちはあんまり受け取ってもらえなくてさ」声をかけられた千歌は、張ろうとしていた声を飲み込むように、口を閉じた。

そこに、いつきもビラ配りを抱えてやってきた。

「ちよつと休憩しない？ あんまり頑張ると、喉、潰しちゃうよ」

彼女は眠そうな目でロータリーの先を指差した。そちらには彼女らがよくたむろしている喫茶店があった。

千歌はビラに目を落としたが、口の端を下げ、頷いた。

「よし、じゃ——つて、桜内さんは？」

歩き出したよしみは、もう一人のビラ配りメンバーが見当たらないことに気付く。

「あそこ」

いつきが指差す進行方向に、女子高生に揉みくちやにされた梨子の姿が見えた。

「その制服、音ノ木坂のだよね!？」

「桜内さんでしょ？ 聞いたよ、スクドルやるんではよ？」

「あの、私は出ないんです。友達が歌うので、その、あの」

ビラを奪われていく梨子に、よしみといつきは視線を交わす。

「さすが都会もんよのう」

「美少女の人気は違うねえ」

「はいはい！ 私がスクールアイドルの高海千歌です！」

そこに千歌が走っていき、女子高生がそれに気付き、ビラを指差す千歌の演説が始まった。

千歌が元気になったのは嬉しいが、しかしあれは元々スクールアイドルに興味のあった高校生が、音ノ木坂の制服に惹かれて集まっただけだろう。目的に沿う宣伝になるかは疑わしい。

それが一段落すると、よれよれになった梨子を連れた千歌が戻ってきて、四人は歩き出した。

「しっかし、ほんと、変な天気だね」

よしみは降りそうで降らない曇天を見上げて言う。

昨日から降っていた雨は明け方にやんだが、空は午後までずっと雲に覆われていた。ロータリーを行く人の多くが傘を手に入れているのを見たよしみは、ビラを受け取る人が少なかったのはそれも大きかったのかも、と今さら思った。

「金曜からこつち、ついてないね。そのヨハネって子、ほんとに雨女な

のかな」

「ほんとほんと。曜ちゃんの太陽パワーといい勝負だよ」

いつきと千歌の噂話で、淡島で特訓中の善子と曜は、今頃クシヤミをしていそうだ。

「でも、また降ってきそうだよね。雨の中で練習しないといいんだけど」

梨子が口にした心配は、よしみも同感だった。雨の中で練習を頑張りすぎて身体を壊すのは、あのμ'sが犯した失敗でもあるのだ。

ロータリーを出たよしみたちは、《NAKAMISE》と書かれた入口をくぐってアーケードの商店街に入った。

「ごめんね、小口田さん。せっかくお店休んでまで来てくれたのに」

梨子に話しかけられ、よしみは首を振る。

「平気平気、今日は配達も少ないし」

「むっちゃちゃんが店番代わったんだっけ？ 珍しいよね。ピラ配りなんて、むっちゃちゃんがむしろやりたがりそうなのに」

千歌が口を挟んできて、

「MCもやりたがらないし、裏方が好きになったのかもね」

と、いつきが曖昧に笑うが、よしみはそんな話を聞いたことはなかった。

「って、曜もじゃない？ なんで来なかったの？」

よしみは千歌に話題を投げ返した。

『梨子ちゃんとはっぴかり練習してるのはよくない』って、ヨハネちゃんが言ってる

「私、四日も付きっ切りでダンスの特訓してたから——あ、あそこ？ やばコーヒーって」

と、梨子が指差した。

アーケードの商店街と狭い車道の交差点に、《やば珈琲店》の看板が見えた。広い店内だけでなく、全面解放されたアーケード側に狭いながらテラス席も準備された、市内に遊びに来たよいつむトリオもよく利用していた喫茶店だ。

「やば珈琲？ へえ、意外とお洒落なんだね」

「意外？」

「あ、ううん、あの、えっと」

「あいせー！ やば！ やば！ やばコーヒー！」

「なに、その替え歌」

梨子に問われ、よしみは忍び笑いをする。

「最初に『Start:Dash!』を聞いたのがここでき。なんか、クセになっちゃって」

「μ sの歌って、替え歌にしやすいよね」

「その部分だけじゃーん」

いつきの意見に、千歌はビラの入ったビニール袋を振り回して異を唱えた。

「でも、そっか。『私たちも《ラブライブ！》に出る！』とか言っちゃってよっちゃんたちが歌ってたの、基本μ sの替え歌だったよね」

「お、よいつむトリオの黒歴史に触れる？」

「まあ、あの時はみんながみんなラブライブ！を目指して——」

と、交差点に四人が差し掛かった時、千歌が言葉を切った。

「——うわっ、千歌ちゃん？」

立ち止まった千歌の背中に梨子がぶつかり、声を上げる。

「どっちにしても、今のパラメーターだと、あの小回りが活きませんよ」

千歌の焦点はよしみを通り越し、交差した車道の先を見ていた。

よしみはその視線を追う。

「スラスターを直接浴びても平気な素材を使わないと。今より少なくとも二二五パーセント強いヤツです」

「その数値には同意です。飛行機能の実装自体が現状のスペックでは不可能だ、と実証する材料としては十分でしょう」

「不可能？ え、じゃあ、あの失敗も想定内なんですか？」

「猪飼さんの設定ミスは想定外ですよ」

白衣の男性とグレイのパンツスーツの女性が、そんな会話をしながらアーケード商店街に近付いてきた。

その一方の声と姿に、よしみは覚えを認める。

「千歌、あれって美渡さ——」

「——なにしてんの！ 美渡姉！」

千歌が叫び、よしみたち三人はビクリと肩を揺すった。

目の前にいる高海家の次女、千歌の姉の高海美渡もそうだった。

*

「ち、千歌!」

「忙しくないじゃん！ 朝帰りじゃん！」

「いや、違うって！」

「昨日の服のまんまじゃん！」

自分の服を見下ろし、千歌に戻した視線は、明らかに狼狽している。

「あなた！ いつから!」

美渡と一緒に立ち止まった三〇代らしい男性が、驚いたように目を開いた。

「僕？ なにがです？」

「いつから美渡姉と付き合ってるの！」

「付き合っていないわよ！」

「じゃあ昨日なんで帰ってこなかったの！」

「仕事が忙しいって言ったでしょ！」

「ウソ！ こんな時間に出歩いて！」

「お昼だよ！」

「おやつじゃん！」

大して広くない交差点で、千歌と美渡がツカツカと歩み寄り、メートルの距離で言葉の撃ち合いを始めた。

弾かれた女子高生三人と男性一人は、なんとなく合流する。

「なんか、ごめんなさい」

「ごちらこそ、ですわね」

小口田よしみが声をかけると、男性は目を合せずに答えた。スウェットの上下に重ねた白衣は綺麗だが、あまり身だしなみに気を遣っているようにはみえない人だ。髪もボサボサで、男女関係以前に美渡がお近付きになるタイプとは思えない。

と、千歌たちに視線を向けながら通りすぎる人の流れに、真っ黒い

セダンが車道を走り込んできた。スモーク処理されたガラスで、明らかにそっちの道の方々のクルマだと分かる。

車道の真ん中で口論していた千歌と美渡は一時休戦すると、千歌が珈琲店側に、美渡が駅側に分かれて車道から離れる。

ところがクルマは二人の間に停車し、降りてきた黒い服を着た男性に千歌が囲まれてしまった。

「え、え、なに、私?」

「高海千歌さんですね」

「は、はい!」

「津島善子様がお待ちです」

その言葉で、千歌は首を傾げる。

「ヨハネちゃんが? なんでです?」

「理由は存じません」

よしみがいつきを見ると、彼女も不安そうな顔でこちらを見ている。

「黒総警ですか」

男性が呟いた。よしみが見上げると、彼はセダンのフロントグリルを指差した。そこにある四つ葉のカタバミは、黒澤家の家紋だ。

「いらしていただけますか」

千歌はこちらを一度見ると、口を結んだビニール袋を美渡に投げた。

「あとでちゃんと説明してもらおうからね! お母さんにもだよ!」

「なによこれ! あ、千歌! バカチカ!」

美渡がビニール袋を見ている間に、千歌は黒塗りのクルマに乗り、アーケードを走り去ってしまった。

「はあ……? ちよつと、なんなのよ」

ビニール袋の口を解いた美渡が、据わった目でよしみたちの方を見た。

「もしかして、私にピラ配りを手伝えっての? こんないっぱい?」

「ち、ちち、違います違います!」

交差点を渡ってきた美渡にいつきが駆け寄り、袋を受け取った。梨

子は不思議そうな顔をしているが、内浦を生きたものなら、美渡と対等に渡り合えるのは千歌だけだと理解しているのだ。

「つたく……主任、行きましよう」

「では、僕らはこれで——」

「——あの」

と、梨子が袋からビラを出して、美渡と、主任と呼ばれた男性に手渡した。

「よかったら、これ、もらってください」

「スクールアイドル？　ですか？　あなたが？」

男性は梨子の顔と、ビラに描かれた三人と見比べている。

「私たちじゃないです、千歌ちゃ——美渡さんの妹さんと、その友達です」

よしみが横から訂正すると、

「ああ、そうでしたか」

男性は安心したように、頬を緩めて息を吐いた。

「日曜日が本番ですので、ぜひ、浦の星女学院に来てほしいんです。美渡さんも一緒に」

と梨子はビラを胸に訴えるが、

「せっかくのお誘いですが、僕らは難しいと思います。ゴールドンウィークも入社していただくくらいですから」

自分の年齢の半分ほどの女子高生に、男性は上品な笑顔と丁寧な口調で謝辞を告げた。

「そ、そうですか、ごめんなさい」

「でも……そうですね、社内には検討する人もいるかもしれませんが、もう少しいただけますか？」

「いいんですか!？」

「もちろんです。浦の星女学院は、廃校かどうかの瀬戸際ですからね」
差し出された救いの手に、梨子が一五枚ほどのビラを渡す。

「よく知ってますね。ビラをもらってくれた人だって、浦女の名前も知らない人ばかりだったのに」

よしみが言うと、男性は口元で小さく笑う。

「僕にとっても、あそこは大切な場所ですから」

沼津市内でビラを配つても意味はないのではないか、一〇キロも離れた片田舎の状況を誰が気にするのか、とビラ配り初日で思い始めていたよしみには、男性の言葉は一縷の希望だった。

服装と髪は雑で、美渡が好きになるタイプではなさそうだが、いい人のようなだ、とよしみは男性の第一印象を上方修正した。

「では、僕らはこれで」

男性は同じ台詞を繰り返し――

「あ、高海さん!?! どちらに!」

――来た道を引き返す美渡に声を上げ、追いかけていつてしまった。

「……あの人たち、やば珈琲に来たんじゃないの?」

「戻ってくるかな。ねえ、他にドトールとかない?」

「あるけど……」

いつきと梨子が喋る横で、よしみは美渡の後ろ姿を見ている。

千歌の姉は、ビラを目にしてから一つも言葉を発しなかった。

第一一話：失敗する予感は — 2

*

「鞠莉先輩、次はこれです。予算的にもう生地は買えないので、慎重にお願いします」

「分かっているってエ」

待ち針で固定された型紙に沿って、小原鞠莉はチャコペンで生地に線を描く。だが力の入れ具合が安定せず、線が濃くなったり薄くなったりする。

「あ、あ、また、もっと滑らかに——」

「——ペンを寝かせるんでしょオ？」

「は、はい……」

髪をツーサイドアップにした後輩が首を縮込ませ、視界の隅で黒澤総合警備保障のボディガードが軽く肩をすくめる。

鞠莉は聞かれないように細く息を吐いて、気を静めた。

「マリーに手伝わせるのが、そもそもM i s t a k eなのでエス」

「そ、それはそうですけど……」

白い生地を走る紫色のチャコペンは、何日経っても鞠莉の手に馴染まない。

善子がダンスと体力作りに集中したために、衣装制作の現場は津島家宅から小原家宅へと移った。

リビングの脇には曜と千歌の衣装を着たトルソーが並び、ソファに沿ったローテーブルには、善子が設計した型紙のプリントアウトが広げられている。鞠莉は三着目、善子用の衣装を作るべく、背中側の部品となるらしい線を布に書いているのだが。

(はあア……やっぱり向いてないわア……)

窓際の丸テーブルに目を向けると、三脚並んだ椅子の背もたれの向こうに、作業途中の布の山が見えた。一件作業が進んでいるように見えるが、既製品のミドルブーツとワンポイントのアンクレットとグローブで進捗が底上げされているだけで、ここ五日間で鞠莉が形にしたのはサイハイソックスだけだ。あとはまだ“切り刻まれた布”で

しかない。

(ほんとに終わるのオ？　こんなP a c eで)

そんな布に仲間入りする切片の絵を、やっと生地を描き終えた時、
「あれー？　まだ廊下じゃん」

開け放たれたドアから声がした。

「エレベーター出たらそこがそう、ってボーイさん言っただけだった？」

「そうなんだよ、曜ちゃん。これ、スイートルームってヤツだよ」

「ねえ、そのリトルデーモン。この城の主まで案内してちょうだい」

「え？　あ、そっち？　おい、理事長！」

ドヤドヤ、と声が近付いてきて、鞠莉は肩の力を抜いた。

「ダ・イ・リー！　こつちよオ！」

リビングに入ってきたのは、我らが浦の星女学院スクールアイドル
同好会のパフォーマー、善子、千歌、曜だった。

「うわあ、こんなところに住んでたんですか!?　鞠莉先輩！」

曜が窓際に駆け寄りながら言う。

「そオ！　Welcome to 《Presidential Suite》！」

小原家宅——正確には、淡島の北岸に位置する、《OGIホテル&
リゾーツ》が所有する七階建ての高級ホテル《ホテルオハラ》、その
屋上に建てられたpenthouse・スイートだ。

淡島の北を頂点に、東のサンライズウィング、西のサンセットウイ
ングの二棟で構成されたホテルオハラ、ちょうど中央に位置するこ
のスイートは、全室スイートルームであるホテルオハラの中でも最高
級の《プレジデンシャル・スイート》として、一九九一年の開業以来
いわゆる「各界の大物」が使用してきた。そのスイートを、二〇一四
年の四月に内浦にやってきたOGIグループCEOのジョルジョ・ル
カーニアが、浦の星女学院への入学を希望する鞠莉のために「自宅」
としたのだ。

つまり現在は名実ともに、《OGIグループ社長のスイート》とい
える。

「二室貸し切ってるって噂は聞いてたけど、一番いい部屋なんて」

曜は北向きの窓から外を眺めた。駿河湾と沼津市内と富士山が
いつぺんに望める最高のオーシャンビューだが、今日は残念ながら灰
色の空しか見えない。

千歌は同じ旅館業だからか、壁に掛けられたテレビのサイズを指で
測ったり、調度品や壁などを見て回ったりしている。

「一泊いくらくらいするんです?」

曜が窓に手をペったり当てながら言った。

「四桁は下らないわね」

「え? 数千円?」

「Dollarで、よ」

「ドツ……!?!」

窓の指紋を隠すようにこちらを向いた曜を見て、鞠莉はにんまり笑
う。

「これ、シルクですね」

床に這いつくばった千歌が、部屋に敷かれている絨毯に触ってい
る。毛足の長い艶やかなパイル織りのそれは、部屋のサイズに合わせ
て織ってもらった特注品だ。発注から納入まで二年かかった、父もお
気に入りの一品だった。

「こ、これも高いんです?」

「二〇万ドルはしなかったはずだけど」

「二〇〇〇万!?!」

「そんな驚くこと? ここを三年間貸し切るのに、
Two Million Dollarsくらいかかっているのよオ
?」

「ダメだよ千歌ちゃん! ここ、私たちがいちゃいけないところだよ
!」

絨毯の上で爪先立ちになった曜が、ゾンビのように手を上げて千歌
の方へ戻っていく。

「安い方じゃない? 우리가《主神ゼウス》のおわす天上の樂園なん
だから」

善子に気にする様子はない。

墮天使後輩の言う通り、三年間で二〇〇万ドルは破格だ。小原家による淡島リゾート化計画により開業したホテルオハラは、バブル崩壊で経営難に陥ったところをルカーニア一族の海外資本で立て直された格好だったが、その業績も二〇一一年の一件で沼津から人が離れたことで陰りが見え始めていた。CEOの娘がここに住んでいること、ホテルオハラの価値を再定義しようとする力の関係は、沼津の御家問題を囓った人間なら常識であり、元黒澤分家の善子が知っていないもおかしくはない。

その善子は、羽織っていたウインドブレイカーを脱いだ。鞠莉が三人のパーソナルカラーに合わせて手配させた、時計を射貫く矢のロゴが入ったOGI製のボデイガードに手渡した。

「降ってきたの？」

「パラパラね。門限で帰ってたなら、ルビイも降られてたわよ」

「平気だよ、今日もヘリで送ってもらうんだ」

ルビイの門限は、鞠莉が小原家経由で交渉したことで、門限を延長してもらい、午後七時になっていた。

「曜もそれ、脱いでね。絨毯にカビが生えちゃうわア」

曜はいそいそとウインドブレイカーを脱ぎ、黒服に恐縮して渡した。女王様のような態度の善子とは対照的だ。

千歌は制服姿だった。淡島で特訓していた善子と曜と違い、千歌は駅前のビラ配りだったと聞いている。

「千歌先輩、こっちきて。カワズ、衣装の準備」

「承知致しました」

善子の指示で、ルビイのボデイガードの一人がトルソーに近寄り、橙色の衣装を脱がせていく。

「え、今着るの？」

「ほら、これ着たら呼んで。早く。鞠莉先輩、使っていない部屋ある？」

「廊下の向かいにツインの寝室があるわ」

「じゃ、サクツとお願いね」

千歌はペチワンピを押し付けられ、あれよあれよと部屋を出て行っ

た。

善子に仕切られるのは面白くないが、鞠莉にも余裕はない。

「Here、これでどう？ ルビィ」

テーブルに広げたままの生地をルビィに示す。

ルビィは待ち針でとめた型紙の端をそつとめくつていき、

「問題ないです」

と上目遣いで頷いた。

「じゃあ、次は切るわよオ」

「鞠莉先輩、もう予算が——」

「——何回目よオ！ もオ！ セブ、Light！」

「どうぞ」

鞠莉の八つ当たりに近い言葉に、セブがデスクライトを動かす。

テーブルランプや壁の間接照明が投げる穏やかな光では、手作業をするには仄暗く、生地に残る薄いチャコペンの紫色は目をこらさなければ見えない。燕尾の黒服を着た専属ボディガードがライトを傾ける姿に、ティーポットで紅茶を注ぐ執事を連想しながら、鞠莉は裁ちばさみを繰る。

すりすりすり、と滑らかな感触ののち、切れた布の端が手の甲に垂れ下がった。

汗のかいた手で布をつまみ、振れた切断線に戻す。

可能な限りいい道具を用意させたものの、自分の技術までは改善できない。だから一挙手一投足の判定を、すぐそばで鞠莉の動向を見守っている、ルビィの大きな目に任せるしかないのだが。

(やりにくいったらないわア)

自分の行動の正誤をつぶさにチェックされるなど、鞠莉の人生にはそう多くなかった。しかも、こんな目前で。

しばらくの間、そうして神経をすり減らせて。

「ど、どうか」

声に顔を上げた鞠莉は、

「What then……」

裁ちばさみを落としそうになった。

スタンドライトのLEDに照らされて立つ、橙色の衣装を着た千歌を見たからだ。

「すごい！」

ルビイがソファから立ち上がり、千歌に駆け寄った。

「やっぱりリボンはここがいいよね！」

ルビイは腰の後ろについたリボンと、そのギリギリまで届く千歌の長い髪に触ってはしゃいでいる。

「曜先輩！ 曜先輩も着ましよう！」

窓際のテーブルに腰かけた曜は、千歌を見たまま、口をぽかんと開けていた。

「曜ちゃん！」

「あ、私？」

千歌の言葉で、曜は何度かまばたきを繰り返した。

「そうね、並んだところでチェックしてみよっか」

善子も同意した。

「でも私、汗だくだよ？」

「どっちにしたって洗濯するわよ。ゲネプロは明々しあさ後日なつてなんだし。カントン、マスカミ、ちよっと」

善子は黒服たちに落ち着いた口調で指示すると、千歌の衣装をいじくり回しては、タブレット端末にスタイラスを走らせる。

「千歌ちゃん、ツイン？ の寝室ってどこ？」

「そのドアの向こうのダイニングの正面のドアの向こうの廊下の左斜め前のドアの中だよ！」

「ドア多すぎない？」

曜は居間を後にした。

「胸回りがきつそうね。寸法ミスったかな」

「うひゃあ！ 揉んだ！ 思いつきり揉んだよヨハネちゃん！」

後ろから善子に胸を揉みしだかれ、千歌が悶えている。

「ん？ これって……。ルビイ、ねえ、これ」

「あ、千歌先輩！ ちゃんと言ってくださいよ！」

「ちよっと、ルビイちゃんまで！ 揉む必要ないじゃん！」

衣装を着ているからか、千歌は胸を揉んでくる二人を無造作にふりほどけないようだ。

「これ、誤差の範囲だと思う?」

「終われば、たぶん。千歌先輩、本番は平気なんですか?」

「平気、平気だから! 土曜日にまたチエックしよう!」

「マスカミ、一応記録して」

「承知致しました」

「ちよつと、ルビィ! こつち見ててよオ」

「あ、ご、ごめんなさい!」

鞠莉の猫なで声に、千歌の胸を揉んでいたルビィがソファまで戻ってきた。

後輩たちのわちゃわちゃを見ていたのは山々だが、鞠莉にも作業がある。

「ルビィ、こつちは微調整のデータ集めちゃうから、理事長を頼むわよ」

「うん、任せて!」

「ダ・イ・リ!」と指摘する余裕は、鞠莉にはなかった。

千歌の衣装は、ゴールデンウィークのラズリ・フォーメアのドタバタが終わってからの五日間で、体力作りと梨子のダンス特訓と並行して善子一人で制作されたそうだ。それに比べて、同じだけの日数しかけた自分はどうだ。灰色の布を大量生産しただけだ。

いや、分かっている。目の下をくまで落ち窪ませて、堕天使キャラを作る余裕もない善子は、曜用の一着を作った経験に睡眠不足を上乗せして作業したのだ。ずぶの素人ゆえに、門限のあるルビィの監修下でしか作業できない鞠莉とは、比較にならない。それは分かっている。

だが、こうも目の前に出されては、焦らずにいられるわけがない。
ややあつて、

「いやあ、やつぱ、やばいかな……」

水色の衣装を着た曜が、寝室から出てきた。

「おお、いいじゃん!」

善子に捕われたままの千歌が、曜に称賛を送る。

「でも、うーん、こんな腕と脚が出るんだよね。似合わくない？」

曜は心細そうに上腕を撫でると、両腕を背中に隠してモジモジし始めた。それでもノースリーブの袖から出た筋肉質の肩や、薄い生地のスックスに覆われた筋張った腿は隠せない。

「そんなことないよ！ 私が思った通りの曜ちゃんだよ！」

「そ、そうかな……」

「オレンジと青で、相性バツチリですよ！」

「それは、そうだけど」

「この前ウチで着てたのに、なにを今さら」

「あの時は衣装にビックリしちゃって」

千歌と善子とルビイは各々曜に声をかけるが、曜の顔は晴れない。体型に関するコンプレックスは、感じたことのない人には意識できないものだ。

「休憩します？」

「ん？」

ルビイが鞠莉の手元を見ているのを見て、作業がとまっていたことに気付いた。

「ごめんなさい、急がせてばかりで」

「平気よ、『Time flies』って言うしね」

ルビイは少し考えて、小さく手を叩いた。

『光陰矢の如し』

鞠莉は口の端を持ち上げる。

O G Iグループである父——ジオルジョ・ルカーニアの座右の銘口癖であり、O G Iのロゴマークでもある格言。

「ミシンくらい買ってもいいじゃない。まったく、Moneyの力を使えないマリーなんて、手足を縛られてるようなもんよオ」

「ほんとルビイがやらなきゃいけないのに」

「いいわよ。金がなかったり、どこを縛られてたり、技術がないとしても、なにもやらないことの言い訳にはならないのでエス」

ルビイはしゅんとしてしまうが、鞠莉には人の心配をしている余裕

はない。

千歌と曜は並んで振り付けを試し、善子はそのたびに衣装の状態をチェックしている。あの衣装の出来がどれだけよくても、善子が着るべき灰色の衣装が完成しなければ意味がない。パフォーマーが三人なのは、もう発表されているのだから。

ルビィを指でつつき、裁断を再開する。

(私にこんな手伝いをさせるなんて、なんて子たちなのかしらア……)
同好会設立に足る五人を満たすために形だけで書いた名前が、とんだ展開になってしまった。

理事長代理に就任したからには、スクールアイドルと交わる機会なんてもうないと思っていたのに。

(もつと暇な生徒に頼みなさいよねエ、まったくもオ)

*

「ごめん、ずいぶん時間かかっちゃった」

「ううん、大助かりだよー」

教室にきた千歌に駆け寄り、井藤むつは紙袋を返した。

「目に付いたお店は全部かな」

むつは先週の一週間、松月のアルバイトもせず、友達とお店で喋りもせず、スクーターで内浦から沼津まで走り回っていた。それもこれも、グループ名も決まっていない千歌たちスクールアイドルのポスターを、各地のお店に掲示してもらったためだった。

ターゲットは、コンビニ、駄菓子屋、本屋、旅館、美容室、などなど。顔見知りの店が多いはいえ、最初は訝しげな顔をされたが、元吹奏楽部顧問の笠木先生の名前出すと、あっさり許可してくれた。定期演奏会のポスター掲示の実績が役に立った格好だが、逆にいえば、その信頼をスクールアイドル活動で裏切るリスクを負った、ということでもある。

(学校の名前を冠するわけだしね)

これが自分たち《よいつむトリオ》だったら、と考えると動悸が激しくなる。実際、自分が出演者だと勘違いされるたびに、カチューシャで出したおでこがテカるほどイヤな汗が出たのだ。スクドルを

始めなくてよかった。

「あ、それ見たよ、市内で」

教室の後ろで話していたクラスメイトが、A3のポスターを手にした千歌に話しかけた。

「ほんとにやるんだ。千歌ちゃんってそういうキャラだったの?」

「キャラじゃないけど、やるんだよ!」

「次の日曜日だよね、行けたら行くよ」

「行けたらじゃダメ! 絶対来て!」

「行けたら!」

席に着いたむつは、すぐ前の席に座っているよしみの背中を叩いた。

「おはよ、よしみ」

「ん、うん」

ぼんやりしている反応だ。

「どしたの?」

「うん」

むつは首を傾げながらも後ろを振り返ると、ポスターを手にした千歌も、浮かない顔をしている。

「来てくれるかなあ」

橙色、水色、白色の三色に塗り分けられた背景に、ポップな絵柄の人物が三人描かれたポスターだ。ポスターカラーの平面的なタッチで塗られた三頭身のデフォルメ絵だが、それが千歌と曜、そしてヨハネと呼ばれる一年生なのは、むつも見ただけで分かった。

日時：2016/5/15(日)

開場：午後4時半

開演：午後5時

場所：私立浦の星女学院高校体育館

そんな情報が曜の元気な手書きの文字で、しかし手触りからして高そうな半光沢の紙に並んでいる様を見てみると、

(ほんとにやるんだ……)

部外者のむつも不安になってくる。

「おはヨーソロー！」

その曜が、大声を上げて教室に入ってきた。

「お、ポスター。ありがとね、むつちゃん」

「うん、他になんか、やることある？」

「ビラ配りはしたくないでしょ？」

「うん、ごめんけど」

「なら、あとは私たちが頑張るだけ！」

曜は席について、単語カードをペラペラとめくりながら言った。

千歌はまだ、心配そうな顔でポスターを眺めている。

「むつちゃん、まだやれることあるかな」

むつが曜に問うたのが耳に入っていなかったように、千歌はむつに聞いてきた。いつも明るい千歌とさえど、本番が近くなればセンチティブにもなるうものか。

「練習以外だと……自分で宣伝する？ 動画のアップとかしてないでしょ」

「ちよいちよい上げてるよ」

「わちやわちやしてるヤツじゃなくて、宣伝用の」

『来てくださーい！』みたいな？」

「そう！」

「私たちが？ それって宣伝になる？」

曜が首を傾げた。

「いやいやいや、曜たちがメインコンテンツなんでしょ？ それで客を呼べなかつたら誰も来ないよ」

「んんん……？」

千歌も唸り声を上げ始める。

長年付き合ってきた自分の身体で客を呼べと言われても、ピンとこないかもしれない。だがアイドルとなれば、パフォーマンスをする本人の露出こそが最大のアピールで、その自覚のためにも動画コンテンツは必要だ。

ただし、下手を打てば、内輪向けやナルシズムの逆効果で終わってしまう可能性もある。その点で、傾げた頭を机に着陸させた曜と、

唸り声のロングトーンに挑戦する千歌には、自意識と適切な距離感があるとは言いがたい。

「ヨハネちゃんは？」

だから、むつはもう一人の名前を挙げた。

「あの子って、あの子でしょ？ 何年か前からネットでなにか生放送してた、《墮天使ヨハネ》でしょ？」

「そうなの？」

「そうだよ」

千歌は初耳のようだが、曜は知っていた。

「あの子だったら、PVの上手い作り方とか、知ってるんじゃない？」
もしくは、大事故の起こし方とか。

「PVか……」

千歌は少し考える素振りを見せ、頷いた。

「よし、今日は練習中止！ PV撮影で露出アップ作戦だよ！」

「露出!？」

登校してきた梨子がギクリと肩を揺らした。

「おはヨソロ。どうしたの？」

「いや、だって、露出って」

梨子はそわそわと視線を逸らしながら隣の席に着いた。

「そっかあ。梨子ちゃんも一緒にやりたいんだ」

斜め後ろから千歌に言われ、梨子の肩が跳ねた。

「や、やりたくないってば！ だ、だいたいこの前からみんな——」

「——ちよつとちよつと、PVに出るのは基本、出演者だけだよ？」

「PV？」

「あと四日しかないんだから、ちゃんと計画立てて宣伝しなきゃ」

「宣伝？」

梨子が目をパチクリさせて、千歌が顔を背けて舌打ちをしている。
なにを考えていたんだ？

そこで本鈴が鳴った。ガタガタと生徒が席に着き、むつも一限の準備に取りかかる。

「でもさ、だったらますますグループ名があるよね。『浦の星女学院ス

クールアイドル同好会です!』とか言うの?」

千歌はまだ、机にポスターを出していた。グループ名は空白のままだ。彼女たちはそれを決めかねているのだ。

「まあパンチには欠けるけど——」

「——間に合った!」

いつきが教室に駆け込んできた。

「おはよ、いつき。珍しいじゃん、こんなギリギリ」

普段は眠そうな目を珍しく大きく開き、いつきは席に着いた。

先生が入ってきて教室が授業モードに切り替わる中、

「なんかあったの?」

曜が手を伸ばしていつきの肩を叩いた。

いつきは首の周りの汗を拭きながら肩越しに振り返ると、眉間にしわを寄せた。

「生徒会長と果南さんが、大変だったのよ」

「え、ケンカ?」

「どうなのかな、結構深刻そうだったけど。だから私の作業、全然進まなくて」

「なんの話で?」

むつの後ろで千歌が無声音を発した。

「分かんない。私がいたからだと思うけど、なんか、海がどうか、よく分からなくて——」

「——いっちゃん!」

曜が顎で教室の前を示した。

右腕をアームホルダーで吊った矢野先生が、ニコニコして千歌たちの集団を見ていた。

「話は終わったか?」

一五人しかいないクラスなのだから、数人のごそごそが目立つのは当然だ。千歌、曜、いつきがわざとらしく化学の教科書を開き、話していなかったむつも、ふんわりと投げかけられる先生の視線で額が汗ばんでくる。

(PVかあ……)

撮影となれば、ビラ配り以上に人目につくかもしれない。

言い出しつぺのむつは、協力しないとイケないのかもしれない。

(適任者きてくれないかなあ……)

名前を貸したただけ状態になっている先輩にも、そろそろ表舞台に出てきてほしいものだが。

*

「会合には出ませんか？ 果南さん」

高いポニーテールが揺れ、だが相手が振り向かないのを見て、黒澤ダイヤは鼻から息を漏らす。

「日曜のライブ、今が正念場でしょう」

「あの子たちにとつての、ね」

果南は防水バッグから出した靴を履き、西日の差す昇降口を出ていく。

「待ってくださいー！」

ダイヤは自分の下駄箱に向かうか迷った末、上履きのまま昇降口を出た。

果南は律儀に待っていた。春の装いを捨て去った、緑の茂る桜を眺めながら。

「協力する気はないのですか？」

「練習場所を提供したよ。お寺の上と、ウチの前」

「一人でも多くの手が必要な状況ですよ」

「なんであんたが手伝わせようとするわけ？ あの子たちを拒絶したクセに」

果南は正門脇の駐輪場へと歩き始め、ダイヤもそれを追う。今朝海水をくぐってきたらしき藍色のスポーツウエアは、春の陽気では乾ききっていない。

「手伝ってほしいとは言っていないせんわ。同好会に参加したあなたが、浦の星女学院の生徒として恥ずかしくない行動をしているか、評価しているのです」

「知ってる？ そういうのツンデレっていうんだよ」

「建前というのです」

ダイヤは眉根を寄せたが、果南の口の端はかすかに上がった。駐輪場に辿り着いた。幅二〇メートルばかりのスペースには、自転車一台、原動機付き自転車五台が施錠されて立っているだけだ。岬の丘の上にある高校で、生徒と教師を含めてこれは寂しい入りだ。果南は屋根を支える細い鉄柱に触れる。そしてこちらを見た。

『わたくしは夢を語れませんの』
「な」

『でも、あなた方の夢を叶えることはできますわ』

「な、なにを言っているのです！ 果南さん！」
完全な不意打ちだ。

「ん、『語れませんわ』、『できますの』だったっけ？」

「果南さん!!」

「お返しだよ、朝のね」

顔が赤くなるのを意識する。

「お互い、記憶力はいい方ですわね」

「まだ二年だしね」

果南は、剥げたペンキから錆びの覗く鉄柱を一周する。

スポーツシューズが踏んでいるのは、三拍子のボックスステップ。手を取りたい、とダイヤは思う。

だが今の果南のお相手は、物言わぬ四角柱だ。

「分かってる。この海はもう、私たちのものじゃない。明け渡す時が来たんだって。でもね……」

果南の歩調がリタルダンドしていき、やがてとまる。

「アレが背負ってるのは、私たちの願い。私たちの夢。私はそれを、誰かに背負ってほしくない」

「果南さん……」

果南は足を止め、柱に触れていた手をはたいた。そして高く結んだ髪を競技用のヘルメットに押し込み、グローブをつけると、やはり競技用の自転車を日向に押ししてきた。

「鞠莉さんとは、お話しましたの？」

すぐにダイヤは、口を滑らせたと気付いた。

果南の顔が瞬時に無表情になったからだ。

「言ったはずよ。したいようにするって」

そして自転車にまたがると、手を広げてみせることもなく、校門へと走り去ってしまう。

「待ってくださいー！」

先ほどと同じ言葉を繰り返し、ダイヤは上履きのまま校門を出る。

今度は、果南は待たなかった。

「あなた方の夢は！ 高海さんたちの夢と同じはずですよ！」

見慣れた背中はずぐに小さくなり、緩やかにカーブする道の向こうに消えていった。

第一一話：失敗する予感は — 3

B

「歌を意識して！ 歌いながら踊れば動きが変わるから！」

インストウルメンタルの音楽とウツドデッキを踏むスニーカーの音が、雨そぼ降る夜空に響く。

照明を浴びた二人の少女が、水滴の流れるガラスに反射している。

「拍を意識して！ 拍と歌と振りの頂点が合わないともないよ！」

時刻は二〇時を回り、あわしまマリナーパークを含む淡島全体は、とつくに店仕舞い済みだ。本土への連絡船もロープウェイも終了している。

それでも二人は、カエル館とファビュラス・ダイバー・ボーイズのある建物の、ガラス張りの外壁に向かって踊り続けている。

音楽が終わり、ダンスが決めポーズで終わり。

ヨハネはすぐに最初のポジションに戻る。

「リリー、もう一回、通しでお願い」

「そろそろ休憩しない？ 顔色悪いよ、ヨハネちゃん」

「暗いからよ。いいから、お願い」

「……うん」

松浦果南はその様子を、海沿いの手すりに寄りかかって眺めている。

善子は三曲の振り付けを踊りきれるようになっていた。体力もついたのでだろうが、梨子に教わった手の抜き方の効果が大きそうだ。

パフォーマンスの完成度向上に伴い、梨子のアドバイスは抽象的なものになり、大詰めに入ったのが窺える。

「あの子たちのわけないか」

ラギダイズ加工されたOGI製のタブレット端末を手に、果南は口を曲げる。

回収したムーフォームの数が、記録と一致しない。そう気付いたのは、二週間ほど前だ。

一つのズレだったので、記録間違いの可能性を考慮しつつも隠し場所を変えたのだが、昨日、更に二つが減ったことで確信に変わった。誰かが盗んでいる。

あの場所の存在を知っているのは、果南を含めて三人だけだということの。

「……三人もいたんだ」

腰を捻り、振り返える。

雨粒が叩く海面を見下ろす。

島が眠りにつくこの時間、世界は果南のものだった。

本土へ伸びるロープウェイのワイヤーが揺れる音も、年々数を減らしていく生簀の浮いた狭い海の匂いも、手のひらが触れる錆の感触も、海面に映る自分の顔の大きさも、一七年以上続いてきたものだ。

それがここ数日は、まったく違う。

まるで別の世界のように感じられる。

いや、ずっと前から変わっていたのに、私だけが気付いていなかったのか。

「果南ちゃん！」

顔を戻すと、点々と灯る常夜灯の円の中に、現れたり消えたりする二人の姿が見えた。淡島の外周を巡る散歩道を走ってきた、千歌と曜だ。

「渡辺曜！ ただいま戻りました！」

「同じく！」

「お疲れ。中、入る？」

敬礼する二人を引き連れ、果南はウッドデッキに上がってダイビンググシヨップのガラス戸を引き開けた。

「こんなに走ったの、何年振りかなあ」

雨風避けのウィンドブレイカーを脱いだ千歌は、店内に置いていたタオルで顔や脚を拭いていく。

「千歌はまだまだ元気そうだね」

「そりやもう！」

「曜ちゃんは結構応えてますよ」

曜も雨に濡れたウインドブレイカーの前を開けて、スポーツドリンクを飲んでいる。

「なまってるぞお、曜ちゃん」

「短期決戦型なの」

言い合ってはいるが、一周二キロの淡島を何周もしてきた後だ。基礎体力は遜色ないのはお互い分かっている。

そこに、

「もう上がる？」

店内に三人が入っていったのを見たのだろう、髪を縛った梨子がやってきた。

「いやー、どうしようかな。ヨハネさんはどんな調子？」

「うかうかしていると千歌ちゃんが追い抜かれちゃうレベル、かな」

「ほんとに!?!」

千歌と曜が出入口から外を見る。窓際に立っている果南もそれに付き合っ外を覗くと、善子はまだ、カエル館の方のガラスに向かって、一部のステップを繰り返し練習していた。揃いで着ているウインドブレイカーの方々に、反射素材のロゴがキラキラと輝いている。

「私、もう一周してくる!」

「あ、待ってよ千歌ちゃん! 私も!」

二人の幼馴染みが飛び出して行き、

「風邪引かないでね!」

幼馴染みの新しい友達が、ガラス戸の向こうに言った。

「頑張るね、雨なのに」

「ごめんなさい、場所を貸してもらった上に、こんな時間まで」

梨子はガラス戸を閉めながら、申し訳なさそうな顔で果南を見た。

「いいよ、私だって用があるわけじゃないし」

そういう体になっている。

梨子は申し訳なさに笑顔を重ね、ガラス戸の外に顔を向けた。

「雨、ようやく小降りになってきましたね」

「ここで練習しだしてからだっけ? 一週間くらいほとんど雨だったよね」

果南が言うと、梨子は鳥が囁くように笑う。

「ヨハネちゃん、墮天使ですから」

梨子は膝と肘を曲げ伸ばしすると、ウィンドブレイカーのファスナーを首元まで上げた。

「私も、もう少しやってきます」

「桜内さんは頑張らなくていいんじゃない？」

「身体動かした方が、考え事しないで済むんで」

梨子が出て行き、入口を撫でた海風が、ひゆう、と音を鳴らし、後輩三人の残り香が夜空に逃げていき――

ばん、と。

――果南の手がドアを掴んだ。

梨子が不思議そうにこちらを振り返る。

果南は無視した。

デツキを駆け降り、手すりに走り寄って海に身を乗り出す。

「ダイヤ？」

その先にはなにもなかった。

海面をうねる暗い波が、岸壁を打っていた。

*

「お姉ちゃん」

ルビイがホワイトソースで煮込まれたマカロニをつつきながら、ダイヤを呼んだ。

だが、呼ばれた当人は気付いていない。黒澤宗家の一家四人が広い食堂に分散した膳の前に正座しているから、でもあるが。

「……………」

ダイヤは苦戦しているからだ。高温の耐熱皿を指で押さえようとしたりは手を離し、なんとかホワイトソースをまとったマカロニをすくい上げるも立ち上る熱気に顔を背け、何度も息を吹きかけて冷ましてからも口に運ぶのを躊躇するほど、集中しているからだ。

「お姉ちゃん？」

膳に乗っている夕食は、珍しく洋食だった。

基本的に膳の和食しか食べない黒澤宗家は、極端に熱いものを食べ

ることが少ない。ダイヤは特にその傾向が強く、最高の完成度で現れたフランス料理と格闘を始めて、かれこれ二〇分は経過していた。そのメインディッシュは、ルビイがリクエストしたマカロニグラタンだ。

かき混ぜて冷ましながら食べる琳太郎、小食な瑠璃、熱いものが得意なルビイに並んで、料理を崩さずキッチンと平らげるダイヤは不利だ。姉に気を遣ってゆっくり食べるルビイにさえ、遠く及ばない。

とはいえ妹のコンタクトを無視させ続けるのもよくない、

「ダイヤ」

黒澤琳太郎は少し大きな声を出してダイヤの注意を引いた。

ダイヤは顔を上げ、ルビイの視線に気付いた。

「ごめんなさい。なんですの、ルビイ」

「う、うん」

ルビイはスプーンを置くと、改めて上目遣いでダイヤを見た。

「今日、なにか見る？」

「ええ。『バニシング・ポイント』か『暴力脱獄』を考えていましたわ」「バリーとポールのニューマン繋がりが？」

琳太郎がそれぞれの主演の名を言うと、ダイヤは今気付いたというように眉を持ち上げてから、

「そういうつもりではありません」

と口を尖らせた。

「どんな映画？」

「いわゆるアメリカン・ニューシネマですわね」

ルビイが眠くなるジャンルだ。

「見たいものでもあるのか？」

テレビが娯楽室の一台しかない黒澤家では、六〇年代から七〇年代にかけてアメリカで製作された反体制作品が好きなダイヤと、二〇〇〇年代から昨今にかけて製作されるVFXを多用した娯楽作品を好むルビイで、希望がぶつかることがよくあった。

琳太郎が問うと、次女は曖昧に頷きながらグラタンを口に入れた。

熱い料理を熱いまま食べるルビイに、ダイヤが怪物を見るような目

を向ける。

「多すぎではありませんの？ これもあなたの希望でしょう？」

「最近グラタンを食べてないって言い出したの、お姉ちゃんだよ」

「人のせいにしてないでいただきたいですわ」

「ダイヤ」

話が進まない、琳太郎はダイヤを制す。

「で、なにが見たい——いや待て。この前言ってたのは、あれだな、『アルマゲドン』。『ジョン・カーター』もだ」

「どちらも刺激が強すぎますわ。最近のSFでしたら、わたくしの見たところ、『アナザー・プラネット』、『月に囚われた男』あたりではないですか？」

「ドラキュラさん……」

「え？」

「ドラキュラさんが見たいの」

控えめに、だが大きな声で発された名前は、琳太郎の予想ともダイヤの提案とも違うものだった。

二人が目を合せていると、

「やめなさい、ルビィ」

食事が始まって初めて、瑠璃が口を開いた。

「人を恐怖に陥れる映画など、あなたが見るべきものではありませんわ」

「……そうですね。お母様が正しいです」

長女の同意を得て、瑠璃は食事に戻る。

ルビィは上唇と歯茎の間に空気を入れて膨らまし、ダイヤはそんな妹を不憫に思ったか、食べられるものがないのを誤魔化すためか、口を開く。

「一応確認しますが、何年版です？」

「ベラ・ルゴシさんのヤツ」

『魔人ドラキュラ』か。一九三一年、アメリカはユニバーサル映画がトッド・ブラウニング監督で製作したホラー映画の栄えある第一号だな。ベラ・ルゴシのドラキュラもエポックメイキングだが、脚本の整

理により役どころを増したレンフィールドを——」

「——お父様。それですか？ ルビィ」

二人の確認に答えるように、ルビィは耐熱皿をスプーンでこする。「その作品、何度か見ましたわね。最初はたしか、わたくしが小学校低学年の頃でしたか」

「俺のコレクションを毎晩こつそり見てた頃か」

「誘惑の多い家で困っていた頃ですわ。でも——」

と、長女は次女を見やる。

「——ルビィ、あなたが小学生の時、きちんと見たいと言ったことを覚えていますか？ その時はたしか、レンフィールドが村を起つところで、見るのをやめてしまいましたわ」

「う、うん……」

「始まって五分くらいじゃないか？ そこ」

「その次はもう少し進みましたが、それでもドラキュラ城に入る前にはやめています」

「まさかルビィ、ドラキュラを見てないんじゃないか？」

「厳密には——」

「——もういいよう」

ルビィは唇をへの字にして、グラタンをもりもり口に運びだしてしまった。

「ドラキュラが見たいなら、レスリー・ニールセンのアレはどうだ？」

あれはマイルドだぞ」

「またお父様は刺激の強いものを。『モンスター・ホテル』は如何でしょう」

「アニメだろ？」

「ドラキュラには違いありませんわ」

だん、と。

ジャガイモのコンソメスープを飲み干したルビィが、カップを無造作に膳に置いた。そして、

「ご馳走様でした」

座を離れ、大股で歩き出した。

「ルビィ！ お待ちなさい！」

ダイヤもそれに続こうとするが、グラタンもスープもまだ熱く、立ち上がれない。

そうこうしているうちに、ふすまが開けられ、そして閉められ、板張りの廊下をドスドスと歩く音が遠ざかり、

「ルビィが……」

「怒った……う？」

ダイヤと琳太郎は、思わぬ展開に目を見合わせるだけになってしまった。

瑠璃だけが、無表情でスープに口を付けている。

琳太郎は給仕に手を上げ、食事を終えた膳を下げさせると、

「最近どうなんだ？ ルビィは」

真面目な口調を意識して妻に問う。

「どう、とは？」

「色々だよ。高校に入ってからこっち、立て続けに襲われてるって聞いているが」

「問題ありませんわ。わたくしたちのボディガードと小原さんの仮面ライダーで、大事には至っておりません」

「報告書は読んでる。家族としての所感が聞きたいんだ」

この問いかけ自体、〃家族として〃ではないな、と琳太郎は思う。

瑠璃は品良くナプキンで口を拭くが、答えない。

「特にラズリ・フォーメアは、誕生から消滅まで、ルビィの目の前だったらしいじゃないか。君の顔をした怪人が倒されるのを見て、普通でいられるとは思えない」

「ですから今日は、ルビィのリクエストに応えたのですわ」

会話が噛み合っているのかいないのか。

「ダイヤは？ どうだ？」

同じ学校に通う長女に問うてみるが、彼女はスプーンを手にしたまま眼を伏せた。

「ごめんなさい。わたくしはこここのところ、ルビィに気をかけられていませんでした」

「ライブか」

あの学校に誕生する三組目のアイドルグループが、次の日曜日にライブを行うのだ。琳太郎在校中と同じなら、その手のイベントの調整は生徒会の役割だ。

「ルビィは順調なのか？ 衣装だろ？」

「追い込みのようです。土日はホテルオハラに宿泊したいとも言っていました」

「僕も小原家経由で鞠莉さんから相談されてるけど、難しいな。スイートの宿泊費を黒澤家が出す、って話になると、生徒会的にはアウトだろう？」

「もちろんです、わたくしたちの財力を基盤とされては、部活動とは言えませんか」

すっかり生徒会長としての黒澤ダイヤになった長女は、ようやく湯気がまばらになってきたグラタン皿を前で姿勢を正した。

「ご馳走様でした」

瑠璃が辞儀をして立ち上がった。

「わたくしたちも観覧いたします。浦の星女学院の代表として恥ずかしくない公演を、期待しておりますわ」

「承知しております」

ダイヤは母に頭を下げた。自分がパフォーマンスに参加せずとも、生徒が生徒会の傘下にある以上、生徒会長には一定の責任が伴う。それが黒澤宗家の長女とあれば、なおさらだ。

ルビィもダイヤも揺れている。

だが琳太郎には、宗家当主としても男親としても、できることが少ない。

だから、ようやくグラタンを食べられるようになったダイヤに近付くと、小声で言った。

「ライブが終わったら、ルビィと一緒に『キャプテン・アメリカ』の新作でも見に行くか？」

返答は『『アイアムアヒーロー』に付き合っていただけなのでしたら』だった。

映画でまでゾンビを見なくても……。

*

「ほら、あれ、少し前に始まったユーフォの映画、面白いつて話だよ」
「そうなんだ」

「吹奏楽部の話だけど、内容はほとんどスポ根ものでね」

「へえ」

「あの手の萌えアニメが苦手な人も楽しいって——」

「——私がスクドルやるって言ったら、どう？」

「え？」

小太りの男性店員にまじまじと見つめられて、津島善子は意識して微笑んだ。

「ヨハネちゃんが？ 冗談でしょ？」

「なんで？」

「だって、ネットアイドル《墮天使ヨハネ》が、人間とグループ組んで歌って踊るの？ キャラ違いだよ」

「あれ、アイドルじゃないんだけど」

思わず地声で言うと、店員は慌てて手を振る。

「ごめんごめん。でも、そっか、それでここ最近、全然来てなかったんだ。そっか」

安心したように言う店員を見て、善子は内心で鼻息を漏らした。

スーパーマーケット付属のゲームセンターにやってきた善子は、『太鼓の達人』の筐体には立ち寄りなかった。特訓で身体がボロボロなのもあるが、今日の来店には明確な目的があったからだ。

男性店員は、喜色を隠さず善子を歓迎し、閉店作業を放り出して格闘ゲームコーナーの低い椅子を並べて、文字通り腰を据えて会話に臨んだ。

それが善子の目的だった。

「じゃあ、浦女の子が貼らせてって来たアレ、お団子頭はヨハネちゃんだったんだ」

店員は門構えの柱に下がった掲示板を指差した。本来はゲーム対戦イベントや大会の予選情報が貼られるべき場所には、曜が描いたパ

ステル調のポスターが偉そうに貼られていた。

「そそ。よかつたら見に来ない？ ヨハネの初生墮天なのに、リトルデーモンお客が少なかつたら盛り上がりませんか？」

「もちろん、元々行くこうと思ってたよ」

「ほんと!？」

大声を上げてしまい、口を押さえて周囲を見る。

もちろん誰もいない。

普段は喧噪に満たされる空間も、ゲームの電源が落ちれば二四時間営業のスーパーの物音しか聞こえない。この寂しさと、プレイする人のいないゲームが元気に発する電子音に囲まれて過ごす寂しき、どちらが上だろう。

そう思うと、罪悪感が芽生えるのを自覚する。

『太鼓の達人』目当てでこの店の常連になった善子に、彼は最初から好意的だった。当初は、開店休業中のゲームセンターに女子中学生が通い始めたら、若い男性が盛り上がるのは当然だと思ったし、ゲームの大会を勝ち進む自分が界限で有名な《墮天使ヨハネ》とバレてからは、そういう視線だろうと解釈していた。男女の色恋に関心をもつ余裕が善子にはなかったし、好意とその反転の悪意に幾度となく触れてきた自分を好きになる人がいるとも想像していなかったからだ。

だから、彼がすんなりライブに行くと言ってくれたのは、善子を複雑な心境にさせた。

「悪いわね。ここ最近ほとんど来られなかったのに」

「全然。俺はヨハネちゃんのリトルデーモンなんだから」

その認識にも、彼をナンバリングしていない善子の罪悪感は一乗せだ。

それでも善子は笑顔を維持し、椅子から腰を上げた。

「じゃ、その、なんだ、友達家族お誘い合わせのうえ、ご来場下さい。えっと——」

そこで善子は、彼の名前を知らないことに気付いた。

「——なんて読むの？」

ダークブルーの制服にとめられた、名札を指差す。

「これ？ 対田、掴武。だけど」

「ツカム？ 完全にDQNネームね」

「ヨハネちゃんが言う？」

「違うない、と善子は笑った。

「じゃ、掴武さん、絶対来てよね！ 約束よ！」

そう言うと、善子はピースを横から右眼にかざす《墮天使ヨハネ》の決めポーズを「ギラン！」と決めた。

「分かってるって！」

店員も同じポーズを返してくれた。

敢えて名前呼びで念を押した自分を改めてズルいと思いつながら、善子はゲームセンターをあとにした。

自転車で街路に出て、すっかり慣れてしまった夜の暗さの中、駅を目指す。

「嬉しそうだったな……」

高校に入学して一箇月強であそこに行ったのは、ブランキアとワンドの正体を知った後、黒澤宗家の人間関係に直面した時、そして今回の浦女スクドル宣伝のためと、三回だった。

週に三〜四回と足繁く通っていた女子中学生が、高校に入学したらパツタリ来なくなったとあれば、彼も不安だっただろう。

その気持ちを利用したのだ。

「はあ……」

狭い道の両脇で点々と灯る窓を見ながら、溜め息をつく。

「私の唯一の宣伝が、騙し討ちとはね……」

ポスターにビラ配りに加えてPVでの宣伝が遡上に登った横で、個々人でもライブをアピールしていかうという話になったのだが。

中学校までの過去を葬り去った善子は、友達がいなかった。浦の星女学院関係者以外で招待できるのは母親しか思い浮かばないが、高校生にもなって学校のイベントに親を呼ぶなど、善子の自意識が許さない。なのに、ただ一人思い付いたあの店員の誘い方さえ、この有様なんて。

やっとダンスが形になってきたのに、次から次へと自分のダメなど

ころを突き付けられる気分だ。

「なんでスクールアイドルになんか、なっちやったかなあ」

それがなければ、先輩たちに引っ張り回されることも、三月末に引越したばかりのアパートが大破することも、OGIが手配してくれた駅前のホテルで生活することも、なかったはずだ。全国大会に向けて太鼓を叩きまくり、夜な夜な占い番組の生配信をして、カメラのレンズに堕天使の笑顔を振りまいていたことだろう。

その方がよかったのか？

「分かんないわよ、そんなの……」

暗い夜道に、自然とネガティブな思考が立ち上がってくることを意識する。

「ああ、もう、太鼓叩く体力はないし、ホテルじゃ《フラガラツハ》も配信できないし、どうすりゃいいのよ——」

そこまで独り言を呟いたところで、頭の上に電球が灯った。

「——宣伝？ ある、まだあるじゃん！」

そう叫ぶ善子の頭の中からはもう、店員男性の顔も名前も消えていた。

*

トライウエア姿の松浦果南は、海水に濡れたお尻をサドルに押し付け、ヘルメットを被り、ふと、その手を止めた。

淡島への港に併設された駐車場、その脇に立てられたあわしまマリパークのイベント告知看板に、パステル調のカラフルなポスターが見えたからだ。

松浦果南は目を細めると、ロードバイクのペダルに力を籠めた。

「今日は星が見られそうだね」

久々に文句のない晴天だ。早く髪で日光を浴びたい。

内浦湾の漁船が届けるエンジン音とガソリン臭の中、果南は車道を走る。

対向車線をクルマが通る度に、手のひらで挨拶。

朝の通学時間、沼津市内からこちらに向かうクルマはまずいない。

左車線は果南のレーンだ。

いつもの海に、いつもの道。

変わりはない。

と、駄菓子屋の表に、またあのポスターが見えた。

もう少し先にあるコンビニにも、その先にある老舗旅館にも、さらに先にある水族館にも、同じように貼ってあるだろう。先週から目に留まるようになり、祖父やその友人の話では沼津の方にも広がっているらしい。

スピードを落とさなくても読めるし、読まなくても分かる。

《浦の星女学院スクールアイドル同好会》の、ファーストライブのお知らせ。

この海にはなかったもの。

「おはヨーソロー！」

後ろから聞こえた声に、果南はクラシクを回すスピードを緩めた。「や」

果南が開いた右手を向けた相手は、スクールアイドル同好会の「水

色——曜だ。

走るための形をしたロードバイクの果南に、軽快車のギアを目一杯重くして併走してくる。

「今日はゆっくりじゃん、果南ちゃん」

「探しものしててね」

「また『お化け』とか言わないでよ」

「懐かしいね、それ。それよりさ——」

果南はクラシクをとめ、曜が楽に会話できるスピードまで落とす。ラチエツトが立ってる滑らかな音が、背筋に気持ちいい。

「——グループ名、どうなったの？」

「うーん、みんなパフォーマンスに夢中で、棚上げ！」

「よくないねえ」

「果南ちゃんだけだよ、案、出してないの」

「私は補欠だから」

「理由になってない！」

曜は不平を表明したが、顔は笑っていた。

果南も唇の橋を持ち上げ、ペダルの重さと太腿の筋肉の収縮に意識を向ける。

(ここまで来るとはね)

幼馴染みの満足げな顔に、果南は複雑な気持ちになる。

ダンスの練習にテラス窓の外壁を使わせてほしい、と梨子と善子に頼まれた時、果南は渋った。閑古鳥の鳴いている内浦の、閑古鳥も寄り付かない淡島の、シーズンオフのダイビングショップの、さらに外側とはいえ、あそこは父の忘れ形見だ。本来の使い方以外をさせるのは、いい気分ではなかった。しかも練習の主目的が善子の特訓とあれば、また逃げ出すのではないかと心配するのは当然だろう。

ところがゴールデンウィーク明けの金曜日から始まった練習は、水曜日まで六日連続で続いていた。初日こそ、淡島の散歩道を走ったり、山頂の淡島神社までの参道を往復したりと身体作りで始まったが、週末に梨子によるマンツーマンでのダンス特訓にシフトしてからは、二〇時越えが当たり前になってしまった。

ダイビング客を乗せることも減ってしまったジュール丸は、連日彼女らに乗せて本土まで往復している。『ロープウェイが終わっても船は出せるよ』と安請け合いました、先週の自分を呪いたい。いや、善子の上達と根性を思えば、祝うべきか？

いずれにせよ、千歌が主体となったスクールアイドル同好会は、三段跳びの最初の“ホップ”に到達しつつある。果南個人の評価がどうあれ、それを認めるのにやぶさかではない。

だが“ステップ”が一番の難関なのだ。

そこでつまづけば、すべてが崩壊する。

(予断は許されないか)

しばらく黙ってペダルをこぎ、トンネルを抜け、海岸通りに出る。

そこで正面を走るバスを見付け、その後部座席に見覚えのある長い髪を見付けた。

「千歌ちゃんだ」

曜は立ち漕ぎになって果南の前に出る。

一列縦隊になった二人は左側を空けたバスの横を通り、千歌に手を振って追い越した。

そのまま長井崎岬への道の手前まで走ると、自転車をとめる。曜は派手に後輪をスライドさせて、果南は緩やかにブレーキをかけて。

「今日があっちの練習？」

「うん、飛び込んでないとなまっちゃうからね」

とるところとバスが近付いてくる。沼津市内からやってきた車体は、朝日を反射して、この街には似つかわしくない輝きを放っている。

「千歌が言ってたよね。『今度は資質のない人が頑張る番だ』って」

果南が言うと、曜は片眉を上げて記憶を探る素振りをした。

「ダイヤさんに？ 言ってたね」

「本当に資質がないと思ってる？ 自分たちに」

「まさか。あるよ、千歌ちゃんとヨハネさんは」

「曜は？」

「ないでしょ」

あつけらかんとした口調は、長年親しんだ曜を思わせる。

「だから仮面ライダーになりたいわけ？」

髪を乱して向けられた目は、果南が初めて見る目だ。

見開き、驚いている目。

同時に、果南を探る目。

μ—フォームを盗んだことがバレて焦っている目——

（——じゃないね）

果南が《仮面ライダー龍駒》かどうか疑い、それを確認するのを怖がっている目だ。

やがて曜は、頬を引きつらせて笑顔を作った。

「べ、別に、なりたくなんてないよ」

「そう？」

「そうだよ、大変そうじゃん。みんな見てると」

「みんな？」

「ああ、えっと、そうじゃなくて——」

「——おっはよー！」

バスが二人の前で停まり、千歌が降りてきた。

「おはヨーソロー！」

曜は誤魔化すように大声を出し、千歌が投げ寄越したスクールバッグを軽快車のカゴに入れた。

だが千歌は曜の後ろに乗らず、走り出した。

「じゃ、みかん山のてっぺんまで、行つくぞー！」

「オトモするであります！」

曜も当然のように自転車をこぎ始めた。

同じじゃない。

なにもかも、変わりつつある。

果南がこの街を出ても、変わらないと思っていた海も。

果南を産み、両親を殺し、自らも死にかけている海も。

千歌たちが動き出したことで、その変化は決定的になった。

神の如く世界を支配するシステム。

それに対抗する、人間たちの力が。

「私たちの夢……私たちの海、か」

願いを失った果南は無力だ。

*

「ごめんなさい、全然来られてないのに、こんなお願いまでして」
聖ゲオルギオス礼拝堂と駐車場を隔てるフェンスの前で、花丸は小さく頭を下げた。

「構いませんよ。ですが、信徒の皆さんがアイドルのライブに興味を持つかは、お約束できませんね」

「まさに神のみぞ知る、ですね」

滝川天吾と名乗った神父が困ったように笑い、桜内梨子は失言だったと恐縮した。

日曜日は浦の星女学院スクールアイドル同好会のライブ本番だが、同日には学校付属のチャペルでミサも行われる。そこで、ミサに参加する信徒にも、目の前の体育館のイベントを宣伝しよう、と花丸が昼休みに提案し、放課後、神父に確認をとりに来たのだ。

（まあ、ダメとは言わないよね）

ニコニコ顔の若そうな神父からは、黒いローブのものと思しき嗅ぎ慣れない匂いがする。

「では日曜は、そちらの開場時刻に合わせて鍵を開けておきますね」
「お願いします」

一般の信徒にも開放されている聖ゲオルギオス礼拝堂だが、学校での犯罪防止のため、フェンスで区切られている。一般の信徒は教会の裏側に位置する出入口で、生徒は教会の正面にあるフェンスドアから出入りする形だ。神父が言っているのは、そのフェンスドアにかけているシリンドー錠のことだった。

頼みごとは終わった。これでスクールアイドル同好会の手伝いとしてのすべきことは済んだのだが。

「あの、ミサって、普段はどのくらいの人がいらつしやるんです？」

梨子は小さく手を挙げた。

「六〇代以上の方が多くですね。二〜三〇代の方は先日引越してしまっ——」

梨子がえも言われぬ顔をしたせいか、天吾は口をすぼめて言葉を

切った。

「——人数のことですか？ 七、八人です」

多くはないが、少なくとも、と梨子は感じた。

「もうそんなに集まってるんです？ エンジェル・フォーメアが倒されて間もないのに」

梨子は西側を向いた教会の入口を眺める。

ここに来るのは、梨子は初めてだった。梨子は一般的な日本人と同じで、いわゆる信仰心というものが無い。どちらかといえば敬遠したいと思っている。ましてここは、梨子が東京でも戦ったエンジェル・フォーメアの、三度目の出現ポイントでもあるのだ。戦った覚えはなくても、近付くのが愉快的な体験でないのは想像できた。

だが今の梨子は、千歌たちのライブを成功させるために力を尽くそう、と決めている。であれば、体育館の目と鼻の先である教会から避けることはできない。

だから少しでも、情報を集めたいと思っていたのだが。

「梨子さん、失礼ずら」

「え？ あ」

視線を戻すと、神父は困った笑顔を浮かべていた。

「ご、ごめんなさい、私、なに言ってるんだろ」

「事件直後はたしかに、ミサに来る方は減りました。引越した方もいらつしやいます。ですが、あの存在が如何なる場所でも出現する可能性があると知れ、小原さんがそれに対抗する手段を発表したことで、少しずつが、信徒の皆さんも戻ってきてくださいました」

「神様に祈るのは一人でもできます。でも、信徒として成長するには助け合いの心が必須なんです。『教会』という共同体は、その手段でもあるんです」

「迷い、疲労、明日への不安。私たちは日々、心配を抱えて生きています。主の日である日曜日に集まり、主の聖体としてのホスチアと聖杯カリスのワインを拝領することは、私たちが神の子としての自覚も新たに、今日を生きる力を得ることなのです」

「そ、そうなんですか？」

天吾神父と花丸はいつの間にか並び立ち、梨子に教えを説いている。こうなってしまうから、宗教は敬遠したかったのだが。というか、花丸はどういう立場なんだ？

「中には、怪人を『天使の顕現だ』と考えている方もいらっしゃるんですよ」

「フォーメアを？」

梨子は耳を疑った。ムーフォームを起点に液体が泡立って作られる怪人が、天の使い？

「最初の怪人を、小原さんが『エンジェル』と名付けましたからね。この街の年輩の方には、『小原さんや黒澤さんの言うことは間違いない』と考える人が、まだまだ多いのです」

その理由は、梨子にはピンとこない。花丸も梨子と同じようだ。

「普段は施錠してるんですか？」

梨子がフェンスドアの錠を見て言う。

「休日はしてますよ。私が赴任した時には、その指示がありました」

「入学式の時は開いてたんですか？」

「平日ですから」

「入学式の時は、天吾さんはなにを？」

「新入生に洗礼希望者がいらつしやいましたので、聖水にするための純水を搬入して、洗礼盤を準備しましたね。あとはいつも通り、時課を務めていました」

「純水は、洗礼盤に入れたんです？ 入れる前に怪人の騒ぎがありました？」

「前ですね。純水のタンクが搬入されて、盤を裏の倉庫から出して祭壇の前に設置していただいた後、タンクの蓋が開いているのに気付きました。そこで、事務所で搬入元に問い合わせた時に、騒ぎが発生したのです」

「タンクの水は減っていました？ 中に異物は？」

「そうですね、その日は結局洗礼を行わなかったもので、タンクは搬入元に返送してしまいました。なので――」

天吾は思い出すように教会を見、すぐに目を戻した。

「——中身の確認はしていませんね。どうしてそんなことを？」

「あ……いえ」

怪人が、光る球体と水と恐怖心からできていることは、天吾は知らないらしい。

「天吾さん以外の方は？ お手伝いさんとか、そういう方は」

「ここを任されているのは私だけです」

となると、搬入されたタンクから天吾が離れた隙を突いて、誰かがムーフオームを入れた可能性が高い。

誰かが？

自らの恐怖を意図的に発動し、怪人を産み出した、と推測しているのか？

「梨子先輩、理事長代理みたいすら」

「二人目の名探偵ですね」

花丸と天吾が笑い、梨子は首を傾げる。

「どういうことですか？」

「あの事件の翌週、小原さんが同じようなことを聞きに来たんですよ。理事長代理就任から間もなかったですし、今思えば仮面ライダーとしての責任もあったのでしよう」

梨子は驚いたが、当然か、と思い直した。

自分の動きが、むしろ遅いくらいなのだ。

(私がこの学校にいる間に、謎が解けたらしいんだけど)

と、花丸が梨子の背後を見た。

「あ、スコさん来た」

振り返ると、昇降口からやってくる生徒の姿が見え、

「あの人……」

梨子は警戒した。

その人物は、梨子がこの学校にやってきたその日、音ノ木坂女学院の制服を着た梨子を、『スクールアイドルを始めるのか』と質問攻めにした上級生だ。そのせいで梨子は不安定になり、四度目のエンジェル・フォーメア出現の時に、気を失ってしまったのだ。

顔を背けようと思ったが、梨子は今も音ノ木坂女学院の制服を着て

いるのだから、素直に諦めた。

「お、桜内さん」

名前もバレている。

「こんにちは」

目を合わせないように頭を下げる。

「日曜は俺も行くよ」

「え？」

思わず顔を上げると、スコと呼ばれた先輩は体育館の方を親指で示していた。

「ようやくだ、ここがライブステージになるなんてな」

ベリーショートというには短すぎる刈り上げ頭の横顔は、満足そうでもあり、寂しそうでもあった。それはそうだろう、ここから浦の星女学院が盛り上がりつつしていくとしても、それは廃校までの短い期間だし、三年生の先輩にとっては最後の一年だけなのだから。

「そうだ、ルビイ見てないか？ ダイヤが探してたんだけど」

「理事ホテ長代理ルオハラの家に行く、って言ってましたよ」

花丸が答えた。

「やっぱそうか、準備で忙しいもんな」

その女生徒は、フエンストアから教会の入口を覗き込んで言った。

「で、マル、今日はどうするんだ？ アイドル？ 聖歌隊？」

「聖歌隊です。あっちの出番はもう、オラにはないですし」

「じゃあ、今度のミサも？」

「はい、久しぶりに一緒に歌えます。そのあとは会場設営の手伝いですけど」

「そっちは俺もやるよ」

「では、練習を始めましょうか」

と、天吾が二人に声をかけた。

つまり、スコと呼ばれた上級生も、この教会の聖歌隊のようだ。

「桜内さんは如何いたします？ 見学していかれますか？」

「あ……」

聞いてみたい、と思った。

梨子は自分の教えを囁に捨てさせ、自分の好きなように歌ってもらうことにした。

しかし花丸が、梨子や果南を魅了したあの歌声でもって、聖歌隊として聖歌を型通りに歌うのなら。

どんな化学反応が起こるのか。

(……ううん)

音ノ木坂女学院の制服を着た梨子は、ここに踏み込む権利がないように思う。

校外の信徒を迎え入れているのは分かっているが、梨子はこの街の人間でもないのだ。

だから、首を振った。

「梨子先輩、また明日」

「うん」

二人がフェンスドアの向こうに進み、天吾がそれに続くようにする。

「滝川さん」

「はい？」

「神様のこと、どのくらい信じています？」

産まれたのが「天使」の怪人である以上、エンジェル・フォーメアを産み出したのがこの神父である可能性は高い。

だから、先ほどの発言以上に失礼だと分かっている、聞かなければならない。

「本当に、小原さんと同じ質問をされるのですね」

天吾は眉を寄せたが、真つ直ぐに視線を向けてきた。失言だと思わないでくれたようだ。

「同じ回答を致しましょう。私は神に献身した身です」

質問から回答までの彼の目に、ウソはない……と、梨子には思えた。「ごめんなさい。何度も失礼なことを聞いてしまつて」

頭を深々と下げる。信仰心を試すなど、謝って済むことではないとは思っている。

「あなたは如何です？」

「え？」

顔を上げる。

「あなたは、あなたの主を、愛していますか？」

「私の、ですか？」

質問の意味が分からない。

「私に神様はいないです。いれば私は、今ここにいませんから」

私は父と母と三人で、東京にいたはずだ。

私がピアノを引いて、貫禄のない父と気の強い母が聞いていたはずだ。

こんなにも「どうして」を繰り返さずにいたはずだ。

私に神様がいれば。

「そうですね」

天吾は微笑み、頭を下げると、ローブの裾をはためかせて教会に向かう。

フェンスドアが梨子の前で閉じられる。

神父は待っていた二人の生徒を促し、厳かな光に満ちた建物へと入っていった。

その後ろ姿が幸せそうな家族に見えて、梨子は目を伏せた。

*

「ルビイ、宜しいですか？」

黒澤ルビイはすぐに、それが姉の声だと分かった。

だが、風呂上がりの髪をぐしゃぐしゃとタオルで拭いて、聞こえない振りをした。

昨日の夕食に大きな音を出してからこちら、家族とは一言も口を利いていなかった。登校時のリズムジンでは黙ったままだったし、鞠莉の手伝いをした後もわざと門限ギリギリを狙ってOGIのヘリで帰ってきた。

それが子供っぽい行動なのは、ルビイ自身も分かっている。それでも、この矛をどう収めるべきなのか、姉妹ゲンカもろくにしてこなかったルビイには分からないのだ。

「昨日はごめんささい。ルビイの気持ちを聞きもしないで、わたくしたちの意見ばかり」

だから、相手が折れるのを待っていた。

「ルビイは子供だから」と思ってくれるのを、期待していた。そんな意図を自覚できるくらいには子供じゃないことも、分かっているのに。

「いいよ、もう」

タオルを肩にかけると、下ろした髪の間には姉の寝巻が見えた。その上にあるであろう、妹を気遣う姉の顔を見る覚悟は、ルビイにはまだない。

なのに、

『魔人ドラキュラ』、見ませんか？」

その提案には、顔を向けずにいられなかった。

しつとりと濡れた髪をまとめたダイヤは、小さく頬を持ち上げた。恥ずかしくなって、ルビイはまた視線を外してしまう。

「昨日、なにも見なかったの？」

「ええ、一人で見ても楽しくありませんから」

妹が口を利いたことで安心したのか、ダイヤは廊下へのドアを開け、ルビイを促した。

外廊下に出ると、夜陰に落ちた沼津御用邸記念公園から、虫の鳴く声に乗って穏やかな風が流れてきた。

姉はこの空気に、ツツジの香りを、そして初夏を感じているのだろうか。ルビイには、あの匂いがよく分からない。

先を歩く姉の後ろ姿は、母のようにも思える。

二重ガーゼの綿に染められた、梅の花と桃の花。同じ素材で同じ型の寝巻なのに、自分が着ると女兒用ロンパースのようだ。なぜだろう。

同じ家柄に生まれ、同じ家で育ち、同じものを見てきたはずなのに、ルビイはダイヤとまるで違う。

口調も、態度も、佇まいも。

得手も、不得手も、映画の好みも。

なにが、姉の今を形作っているのだろう。

どうしたら、姉みたいになれるのだろう。

「お姉ちゃんって、怖いものってあるの？」

だから、そう聞いた。

「教えると思いませんか？」

「じゃあ、あるんだ」

「内緒ですわ。寝首をかいてくれ、と言っているようなものです」

姉が笑い、ルビイもつられる。

外廊下を折れ、居間と台所の間を歩く。ややあって、日本家屋には異質な壁が現れ、やはり異質な戸を姉が引き開ける。

二人が足を踏み入れたのは、父が作った娯楽室だ。防音処理された部屋に窓はなく、四面の黒い壁で橙色の間接照明が長い光を描いている。

ダイヤはリビングテーブルから端末を拾い上げ、プロジェクションスクリーンを下ろす。ルビイは冷蔵庫から麦茶のピッチャーを出す。二人で映画を見る時のルーチンワークだ。

背後のプロジェクターからスクリーンに、時計とそれを射貫く矢——OGIのロゴが投影された。次いでライブラリのリストが表示され、ふかふかのソファに腰を下ろしたダイヤが端末で操作する。

「知ってしまうこと、ですわ」

唐突な言葉に、ルビイは麦茶を注ぐ手をとめ、姉の顔を見る。

「怖いものです」

「知ってしまうこと？」

スクリーンのリストが絞り込まれ、一九三〇年代公開のユニバーサル・スタジオ製作のホラー作品が並ぶ。大昔、面白半分で見たり見せられたりしては、散々泣かされたタイトルたちだ。

「たとえばルビイ、あなたが、ドラキュラも、フランケンシュタイン博士やその怪物も、ミイラ男も、ホレーズ邸も、狼男も、大アマゾンの半魚人も、あらゆる怪物を知らなかったとしたら、深夜の暗闇の奥に想像します？」

「うーん……。お父さん？」

「怖いですか？」

「怖くはないよね」

ルビイは笑ったが、ダイヤは笑わなかった。

「知識」とは呪いですわ。この世界が地獄だったと気付いてしまえば、自分こそが怪物だと気付いてしまえば、二度と元には戻れない。フィルムに定着した時間を戻せないように」

ダイヤは言葉を切り、こちらを見た。

「不可逆性。きつとそれが、わたくしの怖いものだと思います」

「不可逆性……」

見下ろすグラスの中で、琥珀色の液体が揺れる。

結露して汗をかけたガラスの表面を、お盆に向かって水滴が流れる。

「ルビイ、昔はケイシちゃんたちのこと、怖がってなかったの？」

「もちろんですわ。ルビイが産まれた時から、ケイシはもちろん、ライフもアスペットも、ずっと仲良しでしたのよ」

そんな記憶はない。

ただ、犬は恐ろしいという認識だけがある。

「ルビイも、なにか知っちゃったのかな。だから、パフェも、男の人も、怖くなっちゃったのかな」

叔父の琢朗は、昔は抱き付きに来たのに、と言っていた。

先日も、ルビイを助けてくれた黒服の辰本が、突然怖く思えてしまった。

なにが変わったのかな。

せつかく、情熱、勇氣、命を象徴する宝石ルビイの名を授かったのに。

いつの間にか、ルビイの心は砕けちやっみたい。

その欠片をなんとか並べて、ルビイの形に見せているだけなのかも。

太陽に照らされた時だけ輝く、ステンドグラスみたいに。

「わたくしには分かりかねますわ」

ダイヤは鼻から空気を漏らして、『魔人ドラキュラ』にカーソルを合わせた。

グラスをテーブルに並べ、濡れた髪に気を付けながらダイヤの横に座る。

姉の親指が端末を操作すれば、あの白黒の映像が流れ出す。

自分が産み出したストーリーカー・フォーメアに似た、遠い昔に亡くなったベラ・ルゴシの映像が。

ルビイはそれを確認したかった。

フォーメアの基盤があの映画なら、ストーリーカーに操られないようになるヒントも、そこにあると思ったから。

でも。

「あの、お姉ちゃん」

ダイヤの視線を、上目遣いに受ける。

「やっぱり……『モンスター・ハウス』にしようかな」

「よろしいのです?」

「うん。ルビイ、今見たら、怖くて泣いちゃうかも」

そう言いながらすでに涙ぐんでいるルビイに、ダイヤは眉尻を落としました。

「分かりましたわ」

リモコンを操作するダイヤを余所に、ルビイは目を伏せる。

「やっぱり自分は子供じゃないんだ、と思う。」

もしここで、当初の目的を達成したなら、なにかが変わるかもしれない。

フォーメアに与えられた鎖を、破れたかもしれない。

でも今は、「知識が不可逆の呪いを産み出す」という知識そのものが、ルビイの新しい鎖になってしまった。

ストーリーカーが、その鎖を解き放つ勇気がない自分を、護ってくれる存在なら。

それがたとえ吸血鬼神への反逆者だとしても、そばにいて欲しいと思っている。

そんなずるい子供はいない。

*

フアビュラス・ダイバー・ボーイズのガラス張りの外壁に向かって、三人の女子高生が踊っている。

“チ”の字の『カタT』を着た千歌、白と黄のラインをたすき掛けしたTシャツを着た曜、二段プリーツのミニスカートを慎ましいパニエで広げた善子だ。

その手前で“生放送中！”の看板を掲げているのは、のつぽパン（みかん）をくわえたまま文庫本を読む花丸、看板と三人の女子高生を指向性マイク付きビデオカメラで捉えるのは、マットの上で立ち膝をとるいつきだ。

その看板が徐々に斜めになっていき、

「花丸ちゃん、右！ 右！」

いつきの小声で、花丸は看板を垂直に戻す。

小口田よしみはその状況から視線を外し、隣で電話を触っているむつを見た。

「どんな感じ？」

「上々だね」

むつがこちらに向けた小さな画面には、ニコニコ動画の生配信が映っていた。看板と踊る三人を斜め後ろから捉えた映像の上に、「誰この子たち」「スポーツウエアのヨハネ様も美しい」「あれ渡辺曜じゃね？」などとコメントが流れ、「オリンピック選手がなにやってんのw」「選手落ちした」「ロングの子誰？」「ヨハネ様だって」「真ん中のだよ」などと別のコメントと応答している。

「本格的じゃん」

「ほんとにそう思ってる？」

並んで画面を見ていた考朔のコメントが牧歌的で、よしみは嘖き出してしまった。

PV撮影は、準備の都合で結局、練習風景の生配信に落ち着いた。放送枠は《墮天使ヨハネの真夜中フラガラッハ》が普段使っている

チャンネルで、配信が滞って焦っていた同番組のファンを取り込む狙いもあった。

敢えてなにも説明していないのは、善子の作戦だ。ダンスと音楽と見えそうで見えない顔だけを配信すれば、見にくる一〇〇人ほどの視聴者——善子曰く「固定客」——は勝手にコメントでやりとりするだろう、との読みだった。コメントは画面上を流れ、それが多ければ盛り上がっているように見え、違う人やコメントを呼び込むはずだと。それは功を奏したようで、現在の来場者数は二五〇人を超えていた。

こまごましたセッティングや機材の準備も、善子の知識がなければ丸一日格闘しただろう。「やつとお鉢が回ってきたって感じね」と墮天使そつちのけで場を仕切った善子を思い出すと、感謝と含み笑いがこみ上げる。

「ほんと、退院が許されてよかったよ。こんな配信、病院じゃ見られなかったもん」

考朔は電話の画面と実物を見比べ、ひそひそ声でよしみに言った。「じゃ、誘って正解だったね」

内浦を去った考朔との親交を、バイク事故の見舞いの名目でなんとか維持していたよしみは、やはり彼の退院でその繋がりを失った。だから怪人に襲われて再度入院したと曜から知らされた時は、彼には悪いが僥倖だと思ってしまうたし、いずれくる退院にむけて別方向での繋がりを作らねばならないと思っただのだ。

とはいえ、他校のスクールアイドル活動の、それも練習の見学に誘うのは、小さくないジャンプが必要だったのだが。

考朔と内緒話をしている現状が、ジャンプの成功を物語っていた。(でも、ここからが本番だよ、よしみ)

よしみは短いサイドテールを形作るゴムを締め直し、鼻息を勢いよく吐いた。

配信が始まってから、つまりダンス練習が始まってから一〇分が経過したところで、むつが手を上げた。

「花丸ちゃん、反転！」

看板がぐるりと翻ると、『浦の星女学院スクールアイドル同好会』の文字が動画に登場。

数秒おいて、「スクドルの宣伝か」「この歌オリジナル?」「歌詞聞き取れないー」などと並んだコメントが画面を支配する。

その中でも「どこの学校?」系のコメントは多かった。当然だ、ネットを介した配信に地域性はなく、視聴している人々が沼津に住んでいるとは限らない。

だから、

「お待たせしました! こちら、静岡県は沼津にある、淡島からお送りしています!」

よしみはカメラの前に躍り出て、背後の三人を手で示した。

「そしてあの子たちは、私立浦の星女学院高校に誕生するスクールアイドル! グループ名はまだ決まっていますが、明後日の日曜日に控えたファーストライブに向けて、最後の追い込み中です!」

レンズの中央に光る赤い反射光を相手の顔だと意識しながらも、その向こうで意外そうな顔をしている考朔に視線がくすぐつたい。

「ですが、彼女たちスクールアイドルはまだ同好会、部として承認されていません! そのために学校から提示された条件は、ファーストライブを成功させること! 会場となる体育館を満杯にするために、皆さん! 皆さんの力が必要なんです!」

カメラを指差して強く宣言するが、しかし、余計なことが気になつてくる。

立ち位置は打ち合わせ通りか、看板と三人は見えているか、左手はどの位置におくか、頭をどの程度動かすか、マイクがあれば左手は遊ばずに済んだのに、なんでマイクを準備しなかったんだ、中学校の時どむつつてどんな風にMCをしてたっけ?

その間に台詞が飛んだ。

(やばい、次。次なんだっけ)

ネットの海に通じる物言わぬカメラが、よしみを捉えて放さない。

いつきが手を口の前に持ってきてパクパクと動かすが、そんなことで台詞が出てくれば苦労はしない。日曜日はカメラどころではない、

何百人もの人の前でこれをしなければならぬのに。

(カンペ準備しておくべきだった！ 放送事故になる！)

と――

「待たせたわね！ たあッ！」

――デツキの手すりを蹴って飛んだ善子が、よしみの前に着地した。

下着をガードするパニエがふんわりと太腿を覆い、追ってミニスカートが形を取り戻す。

「ラストオラクルから幾星霜、私がついに昇天したと思ってたかしら？ 甘いわ！ 迷えるリトルデーモンに新たな託宣を授けるべく、数多の神々との戦いを経て復活を果たした墮天使ヨハネ！ ここに墮天！」

善子は左手で顔を軽く隠し、右手を斜め中空に伸ばすポーズを「ギラン！」と決めた。

よしみが完全に固まっている中、

「コメントすごいよ！ えっと、『ギラン』『ギラン』『ヨハネ様!!!』『ギラン』『うおおおおお！』『ギラン』『ギラン』『久しぶりの打点んんん！』――変換ミスってる」

考朔が真っ白になった画面をこちらに向けて報告してくる。

だが善子は反応しなかった。その程度の反応は当然ということか。

「ヨハネちゃん！ 練習！」

「もう、目立ちたがりなんだから」

千歌と曜も、結局カメラの前に集まってきてしまった。段取りなどあったものではない。

「全国の我がリトルデーモンに紹介するわ。この墮天使と肩を並べ、魔都《EASTERN PIT》京から這い出るスクールアイドルたちを打ち倒すべく集まった、悪魔の精鋭たちを！」

「悪魔あ？」

「曜ちゃんはヨソローなだけなんだけど」

「隠さなくていいわ、このヨハネの《ウジャトの目》から逃れられるものはいないのだから――」

自分の役割を取られてしまった、とよしみは思ったが、これこそが善子の役割なんだろうな、と考え直し、逃げるようにフレイムアウトして考朔たちの元に走った。

「ごめん、全然ダメだった」

よしみは汗ばんだ顔をハンカチで拭い、笑っている考朔を見ないようにする。

「いや、面白かったよ。よしみってこんなこともするんだ」

「しないしない！ ああ、なんでMC司会やるなんて言っちゃったんだろ」

「いいじゃん、やんなよ。俺、絶対行くから」

「ウソ、いや、来ないで、ほんと来ないで」

軽口を叩きながら、これが本番の二日前でよかったと思う。レンズ越しとはいえ、明日のゲネプロでも感じられないだろう視線の力を体感できたのは大きかった。

「でも、なんでむつじやないの？ 社会経験を積ませたかったの？」

考朔の半笑いの問いに、むつは答えなかった。

カチューシャで出したおでこを、よしみと同じかそれ以上に汗まみれにして、小刻みに首を振っていた。

*

「学校はどうしたの？ ダイヤ」

反響する声に、人影が動いた。

「ここを知ってるのは私たち三人だけ。でも、まさかあんたの方なんてね」

直径四メートルほどの半球の岩窟に、天使の輪のように岩肌に打ち込まれたLED電球が光を投げかけ、そこに床の三分の一を占める水面の反射が水影を揺らす。

日光のない空間にあって、その横顔は黄昏時のように判然としな

い。
ただ、身を屈めてこちらに向けた長い黒髪と、腰丈のケーブだけが見える。

「学校サボって正解だったわ」

光と光の隙間に落ちた壁際の闇から、松浦果南は姿を現した。

上半身をはだけたウェットスーツも、むき出しにしたトライウエアも、すっかり乾いている。当然だ、スキンドビングで十数メートルの横穴を抜け、水面から顔を出したのは、六時間も前なのだから。立ち上がり、頭をこちらに向けた人物は、目の上で切り揃えた髪から海水をこぼした。当然だ、外に繋がる水面からこのドームに現れ、窃盗を働こうと木箱に近寄ったのは、わずか三〇秒前なのだから。

「結構あるでしょ。二〜三個持っていってもバレないと思った？」

水路に繋がる水面の反対側のドア、その脇に置かれた木箱の中で光っているのは、直径三センチほどの球体。

ムーフォームと呼ばれる、力の結晶。

「さ、持ってたヤツ、返して。それもね」

だがその人物は、左手でいくつかの球体を抱えたまま、水面の方へ歩を進める。

果南はその進行方向を遮るべく、水面の縁に沿って岩肌の地面を歩く

「三つ、あなたは間違いをしてるわ」

その声に、果南は首を引いた。

「一つ、ここを知っているのは、あなたたち三人だけじゃない」

「一つ、私がこのムーフォームに手を出すのは、これが初めて」

「一つ、私はあなたの友人、黒澤ダイヤじゃない」

やがて、その人物がライトに下に入った。

真珠のように白く光沢のあるノースリーブの服に、装飾的に入ったジッパーテープだけが青い。

「瑠璃……さん？」

思いもしなかった顔だった。

「果南ちゃんか。大つきくなつたね。何年振り？」

「……二年前には、よくお邪魔してましたが」

答えたが、違和感に眉を寄せる。

「瑠璃さん。悪いけど、私は黒澤家を信じてません。それを置いてください」

「返してもらいにきたの」

「私が引き揚げたんです」

「だからよ」

含み笑いと足音が、ドーム状の空間に響く。

その足音に、違和感。

「あんた、誰？」

手のひらを水面に向ける。

さっと走った波紋が、天井の水影を大きく揺らす。

「よく気付いたわね。ルビイなんて、名乗っても納得しなかったのに。納得したくなかっただけかしら」

果南は答えない。

ダイヤが影響された「ですわ」喋りではないことも、ダイヤの面影のあるその顔が記憶の中の黒澤瑠璃とは違うことも、今は主題ではない。

「そこでとまらなきゃ、腕の一本じゃすまないよ」

「へえ」

球体を抱えていない右腕が、身体の横に水平に持ち上がる。

「もう一つ、間違いを指摘しましょうか」

その右腕から、水が落ちない。

たった一分ほど前に海から上がった身体から、海水が消えている。

「この島には昔、《海軍音響兵器研究所》があったのよ」

「は？」

しゅ、と右手の指先が動いた。

そう知覚した時には鼻に激痛が走り、果南は背後の海中に没していた。

*

デニムのオーバーオールをはいた脚をソファの肘掛けに乗せ、さつきまでルビイが座っていた凹みに頭を収め、小原鞠莉は壁に掛けたテレビを見ている。

五〇インチの画面にタイル状に表示されているのは――

左上：浦の星女学院でエンジェル・フォーメアの身体からムーフォームを抽出するブランキア。

中上：長井崎岬の海岸でエンジェル・フォーメアの身体からムーフォームを抽出するワンダ。

右上：再び浦の星女学院でゾンビ・フォーメアが変化した目玉を叩き出すブランキア。

左中：同じく浦の星女学院で目玉を割ってムーフォームを爆破するワンダ。

中央：伊豆三津シーパラダイスでシエル・フォーメアを爆破するワンダ。

右中：沼津市立総合水泳場でパイルアップ・フォーメアを追撃するロリポリ・フォーメア。

左下：同じく沼津市立総合水泳場でシャイニーと戦う龍駒。

中下：我入道海水浴場でラズリ・フォーメアの身体からムーフォームを抽出するブランキア。

——だ。

各々の肝のクリップを繰り返すそれは、Sーユニット宛に届いた『ラギデザイナー計画 試作μ-6型 1号機および2号機の運用に関する短期評価報告書』、そこに添付されていた『非OGI製仮面ライダーの実態』と題された動画だった。

「どうしてこう、この街にはHeroが多いのかしらア」

プレゼンシャル・スイートの居間に、独り言が転がる。

「ほんとですね」

Sーユニットの整備班代表である松之介が同意を示し、

「よろしいのではないでしょうか」

Sーユニットのオーナーであるセブが反意を示した。

「それどういう意味よオ、セブウ」

「お嬢様が戦う必要はありません、という意味です。音楽再生専用のスーツを準備しましょう」

表情の読めない笑顔でゆっくりと喋る鞠莉専属ボディガードに、しかし「Parano・d」と書かれた黒Tシャツを見下ろす鞠莉は反論しない。

「あんなに訓練したのにさア」

「ブランキアの機能を部分的に再現したエウリュスを含めたP R X
— M 6 | 1、P R X — M 6 | 2は、μ—フォームの実体であるメル
シャウム群に及ばない。よって、P R X — M 6 | 3の開発は無期延期
とする」

それが、もつぱら「仮面ライダーシャイニー」の名称で呼ばれるよ
うになった《人体ラギダイズシステム》に対し、C E Oたるジョル
ジョ・ルカーニアを筆頭としたO G Iグループ役員会が出した結論
だった。

基礎研究を含めて一〇年二〇〇〇億円をかけて完成させたシャイ
ニーは、物理的な機械だ。壊れれば動かなくなるし、スペック以上の
力は出せない。対してフォーメアでありながらフォーメアと戦う口
リポリ・フォーメアとそれを使役する国木田花丸、《園田流》合気道
と薙刀術で戦うブランキアこと桜内梨子、《飾流》空手で戦うワンダ
こと高海千歌、映像は不鮮明だが松浦果南が変身したと思われる龍駒
は、スタイルこそ三者三様だが、μ—フォームの力を直接使用する点
でフォーメアと同等の存在——《メルシャウム群》である。その自
己修復機能による安全性、燃料を必要としない可用性は、機械である
シャイニーにはない。

とはいえそれは、龍駒との戦闘でM a r k I Iが大破した時に分
かっていたことだ。

致命傷は、拡張性だった。研究の初期から議論されていたμ—
フォームによる装甲と武器の生成は、外部刺激を機械部品のシーリン
グで遮断したμ—フォームに限定し、μ—フォームチェンジ機能とし
てシャイニーに実装された。それは多様なフォーメアに瞬時に対応
できるシャイニーの優位となるはずだった。

しかしラズリ・フォーメアを倒したブランキアをμ—フォームチェン
ジさせたのは、プレーンなμ—フォームだった。これについて、暫
定的にμ—フォーム関連事業を任されている桜内桑介は、ブランキア
での実験データと、五年前に依田義森が書いた論文の仮説を引用し、
あらゆるフォーメアは理論的に、別のフォーメアの能力を組み合わせ
ることが可能だと示した。《ウムラウト》、《セディュー》、《ハー

チエク》、そして開発中の《ストローク》と、既定の機能しか組み合わせられないシャイニーの優位は、失われたのだ。

「Mark IIIまで中止されちゃうとはねエ」

「先週主任が提案した、《ムーフォームによる泡形成に対する音圧変化パターン》の妨害、およびその過程における制御奪取の可能性について》が示す機能が実現すれば、シャイニーを用いた近接戦は不要になります」

あの名前を覚えたのか、と鞠莉はセブに笑みを返す。

初老の専属ボディガードは、鞠莉のリアクションを皮肉だと誤解したようだ。

「たしかに現時点では一射限定の特殊武器でしかありませんし、音波を増幅する石を撃ち込む方法は別途考えなければなりません。しかしミリ波レーダーによるムーフォーム位置の特定が可能になれば、我々OGIスクードの人員で十分となるでしょう」

「黒澤家との提携は不要、ってこと？」

セブは口を開きかけ、閉じた。その青い目はサンガラスに隠れて見えない。

「アナタが自分の家をどう思ってるかは知らないけど——」

「——もう私の家ではありません」

「口を挟まないの。ご主人様に向かって」

「ちよつと、落ち着いてくださいよ、鞠莉さん！」

松之介が割って入り、

「申し訳ありません」

セブは身を引く。

「あの提案を表に出すつもりはないわ。Foamを再結晶化できないなら、アレの影響を受けるのはむしろ——」

と、ドアが開く音がした。

「——のんびりだったじゃない、ルビィ。No.2だったの？」

だがテラス窓に反射した戸口に見えたのは、スクールアイドル同好会の後輩ではなかった。

「果南？」

身体を起ここした鞠莉が改めて見たのは、ウエットスーツ姿の果南だった。

「果南！ やつと来てくれたのねエ！」

鞠莉はソファを飛び越え、果南に抱き付いた。

「もオ！ 帰ってきてからこつち、いけずな態度ばかりとるんだからア！」

「松浦様。来る時は一言いたただかないと困ります。セキュリティブリーチ扱いで私が始末書を——」

「——いいじゃない、セブウ、私たちだけの抜け道なんだから。ね、果南」

果南はなにも言わない。

「果南？」

鞠莉は身体を離す。

「アナタ、誰？」

抱き締めた感触が違う。

顔も、髪型も。

二年前の彼女と違う。

答えは投擲だった。

下投げで放られた球体が、鞠莉の頭のすぐ横——輪にした髪を通り抜けたのだ。

「Hey! ちよつと So close!」

「果南さん、なにを！」

鞠莉は自分の髪に目を向け、松之介は窓ガラスでバウンドした物体を目で追う。

「戦え」

その声に目を戻した時、手を拭きながらルビイが部屋に入ってきた。

「ごめんなさい、遅くな——どうしたんですか？」

黒総警の四人の黒服が所定の位置に進み、ルビイが歩を進め、

「果南！」

鞠莉は入れ替わるように廊下に飛び出した。

スイートの中央を貫く廊下には、誰もいなかった。

「来てたんです？ 果南さん」

ドア枠の向こうから言ったルビィに、鞠莉はエレベーターを見ながら頷く。

そこでようやく、自分のTシャツが濡れていないことに気付いた。あの道を通ってきたなら、ウェットスーツが濡れないはずがない。直後、八人の電話がサイレンを鳴らした。

「フォーメア通報です！ 龍駒とカヴァアルツチャー・フォーメアと――ラズリ・フォーメア!? 《海軍棧橋》に！」

松之介の報告に、部屋に戻った鞠莉は言葉を失う。

「龍駒が？」

自身を守るべく動き出した四人の黒服の間で、ルビィは松之介を見ている。

いや、彼が注意深く拾い上げた、直径三センチほどの球体を見ている。

その中で揺れるのは、正六面体の結晶。

「果南さん、もしかして、『戦え』って？」

鞠莉は思わずルビィを見たが、ややあって、ゆるゆると首を振った。

「あれは果南じゃないわ」

端的な主張の声も、記憶のそれとは違った。

第一一話：失敗する予感は — 6 (完)

*

突然の水飛沫が、スクールアイドル同好会の三人を襲った。

「ちよー！ ちよつと！ なにこれ、ストップ！」

咄嗟にブレーキをかけた内山いつきは、バンドで帽子に固定したビデオカメラも忘れて背後を振り返り、

「いつき、前見て前！」

よしみに言われ、前を向く。

そして目を疑う。

海面から反り返るように立ち上った海水が割れ、巨大な金属製のタツノオトシゴが現れたからだ。

その水が、目の前の広場に落下していく。

ホテルオハラが管理する今は使われていない《海軍淡島棧橋》、その根元にある、ステイプル状に塗装された赤と緑の上塗りが剥げ、下地のコンクリートが見えている見通しのよい広場。

そこに海水がぶちまけられ、流れていき——

「意外と容赦ないわね」

——真つ白な服を着た女性が残された。

「だつ、大丈夫ですか！」

自分もしとどに濡れた曜が駆け出し、広場のゲートにかかったチエーンをまたいで女性に向かう。

千歌は左手の海面から立ち上がった金属製のタツノオトシゴを見上げ、善子は倒れた女性に幽霊を見るかのような視線を向ける。

女性は上半身を起こし、艶やかな黒檀色の長髪を背中側に流す。

「なにになに？ どうなってるの？」

いつきは誰の動きに追従していいか迷い、四人を見比べ、結果的にカメラマンとしての役割とまっとうしていた。

「宣伝するなら淡島も見せようよ」とは、曜の案だった。

淡島の周囲をグルリと巡る散歩道は、ファビュラス・ダイバー・ボーイズとカエル館の建物を通りすぎると、急に閑散とした道行きにな

る。それでも目に留まるものは時折あり、それらをランニングする三人を自転車で追いながらカメラに収めよう、となったのだ。

といっても、ペンギンが遊んでいる《いきもの広場》に、併設された《ペンギンラボ》、誰が作ったか分からないが点々と設置されたブルンズ像、鬱蒼と覆い被さってくる植物を破って姿を見せる、ライオンの口のように張り出した獅子岩や、今は閉鎖されている《淡島釣堀》、浸食作用で気持ち悪い穴だらけの岩、内浦湾から駿河湾に向けて開けた海、誰も使わない島内専用公衆電話といった、外部の人間の興味を引けるかは疑問なものばかりだったのだが――

(これは、これはちよつと……！)

――とんでもないものを掘り当ててしまった。

海面スレスレに直立する、一〇メートル級の怪人《カヴァアルツチャー・フォーメア》と、その頭の上に立つ――

「――龍駒?」

何週間か前に、なんの報道もないタイミングで特設サイトにアップされた、四人目の仮面ライダー。

「いつき、こっち!」

ポカンと見上げるいつきだったが、むつに手を引かれ、よしみと考朔の方へ導かれた。彼らはレンタル自転車を横倒しにして、栈橋広場の外周に沿って散歩道を走っている。

「どうなってるの!! こんな聞いてないって!」

いつきたち現場とは裏腹に、むつの電話が映す配信は大盛況だ。「またフォーメアかよww」「あれ龍駒じゃね?」「龍駒って怪人?」「ライダーって何人いるの?」「宣伝金かけ過ぎww」「人襲われてるww」などとコメントが飛び交い、画面は再び真っ白になる。

考朔たちのところに追い付くと、いつきは頭を――カメラを状況に向ける。

使い込んだ鉄板のような緑色のタツノオトシゴが水中に身体を没し、その頭から、同じような材質の鎧を着た龍駒が広場に降りた。だが、仮面ライダーと名付けられた正義の味方は、曜が手を貸して立たせた女性を狙っているように見える。

海にいたあの女性を、カヴァルツチャーで広場に引き揚げたのは龍駒のようだが、女性が着ているのは真珠のように滑らかな服に羽織のケープで、海に入れる格好に見えない。

「カメラとめて！」

「撮影中止！」

曜と善子が叫び、いつきは帽子ごとビデオカメラを頭から外した。

「ありがと、曜さん」

「当然！」

指示されるが、いつきはカメラの電源がどこか分からず、取り敢えずバンドを解きにかかる。

「どういうつもり？ シヤイニーならまだしも、瑠璃さんにまでこんなこと！」

曜が龍駒に向けて放ったのは、黒澤宗家夫人の名前だ。

いつきはその人物の顔をはっきりとは知らず、隣にいたむつに視線を向けるが、彼女も首を振った。

「曜先輩、そいつが《ラズリ・フォーメア》よ！ 人間の顔をした怪人なの！」

善子はいつの間にか龍駒の斜め後ろに立ち、曜の背後にいる人物を指差した。

「え、でも、ラズリって、だってこの前——」

「——だからこの前ブランキアが倒したのが、そいつなのよ！ なんて生きてるのかしらないけど、生かしちゃおけないヤツなの！」

いつにない怒声を放つ善子に気圧されたか、曜は上半身で女性を振り返える。

「ついてないわ、その子がいるなんて」

女性は息を漏らし、善子を見た。

「瑠璃さん……う？」

「骸骨スケルトンさんには悪いことしちゃったわね」

「瑠璃さんじゃ……ないんです？」

曜が女性から、一步、距離をとる。

「さつきから言ってるじゃない」

女性は笑ったが、曜は腰を抜かした。

「これ、配信しないの？ 最高の宣伝じゃない！」

「だって、二人ともダメだって！」

よしみに文句を言われ、いつきは反論する。

「カメラ、もつと近付けって、つて！」

考朔もむつの電話に流れるコメントを読み、広場を指差す。

「怪人なんでしょ!? 危なすぎるよ！」

ネットの向こうの声に従うのか、といつきは首を振るが、

「これ以上の宣伝はないって！」

考朔は業を煮やしたか、いつきのカメラを奪うと、手すりを乗り越えて広場に入ってしまった。

「考朔くん！」

よしみが彼のあとを追い、少し迷っていたらしきむつも続いた。

三人は戦場カメラマンのように身を屈め、小走りに近付いていく。

「ウソでしょ？」

いつきは、自分以外で唯一、棧橋広場に入っていない千歌に目を向ける。

*

三戦に立つ。

ワンダに変身するための構え。

だが、指先に力が入らない。

手の甲が震えている。

足が動かない。

あの音が聞こえない。

ハミングのようなあの音が。

「ワンダ……？」

かすれ声を絞り出し、ポケットに手を入れる。

出てきたのは、多孔質の鉱物。

海水が染み込み、柔らかくなった白い石。

海泡石。

「な、なんで？」

ムーフォームを入れたはずだ。

これがそうなのか？

失われてしまったのか？

戦うための、あの白い海泡石の鎧が。

なにもない私が、やっと手にした輝きが。

「そんなわけない……！」

勝てる気がしない。

戦わなきゃいけないのに。

私が待ってたのは、これだったのか？

なにもない私には、本当になにもないのだと。

分かったかったのか？

「そんなわけない！」

叫ぶ。

足が動いた。

ゲートのチェーンをくぐり、走る。

海泡石を左手に握り込み。

練習着のお尻を濡らした幼馴染みに向かって。

人の顔をした怪人に向かって。

「曜ちゃんから！」

跳躍。

「離れろお！」

渾身の飛び上段突き。

その拳にそつと手を添えられ、逸らされる。

広場に肩から落ち。

「(っ)ら(っ)ら」

受け身、立ち上がる。

ケープを背中に払い、女性が構える。

「素人相手に使っちゃダメ、って教わらなかった？」

空手の構えだ。

緊張。

師範の言葉が頭を過ぎる。

死の可能性が。
いや。

指の神経を意識。

対人戦じゃない。

怪人なら、一撃で終わる。

変身しさえすれば。

「だッー！」

先手必勝、踏み込み、右中段突き。

逸らされる。

分かつてる。

流れた右肘を胸に押し付け、ケープを掴み。

前進、至近からの左中段突き。

握った感触は海泡石のまま。

音は聞こえない。

語りかけてくれない。

でも！

「うおりゃあー！」

泡を引っこ抜きさえすれば。

変身しさえすれば——

「——え？」

左手は届いた。

胸と胸の間に。

なのに。

水月に掌底が刺さってる。

「あ」

「もう少し鍛えてきてね、じゃないと——」

力が抜ける。

海泡石が落ちる。

「——死ぬよ」

膝が折れる。

息が吸い込めない。

いや、次は吐く番か？
横隔膜が動かない。
熱いものがこみ上げてくる。
お昼、なに食べたっけ？

*

一瞬だった。
千歌のパンチを受け止めた手が、いつの間にか、千歌の腹を殴っていた。

「千歌ちゃん！」

曜が這い寄り、戻している千歌を抱き上げる。

ただ一人状況の外にいる内山いつきは、それを見ているしかなかった。

「さてと……」

女性は足元から白いものを拾い上げ、そして、

「あなた」

龍駒を指差した。

「あなたはとつくに解放されてるみたいね。いいわ、それでいいのよ」
文脈を掴めない。

それは龍駒も同じか、顎を僅かに引いた。

「その子は無理として、四人か。これだけあれば問題ないかしら」

と、女性が発した直後、

細長い肌色の物体が、広場を走った。

「なに？」

いつきの疑問を余所に、それは曜の首に結び付き、むつの首に結び付き、よしみの首に結び付き、考朔の首に結び付き——

「龍駒！ あいつを殺して！」

善子が叫び、その前に金属の鎧を着た仮面ライダーは動き出している。

「間に合う？」

——その先端に灯った光が、四人の眉間に突き付けられた。
それは小さな球体のようなだった。

いつきは広場を縦横に走るその物体が、女性のケープの裾から出て
いることに気付く。

(腕? 指?)

四人はチョウチンアンコウの光に誘引された魚のように、目を見開
き、球体の輝きを寄り目で見上げる。

「あなたたちの夜を、見せてくれる?」

むつの足元に電話が落ち、考朔の手にバンドで固定されたカメラが
明後日の方を向く。

「なんなの?」

いつきが口を開く間に龍駒が跳び、女性に飛び蹴りを放つ。

女性は爪先でステップを踏み、その足裏から逃れる。

伸びていた肌色がすると戻り、女性が人間の形を取り戻す。

「残念、今回は私の勝ちよ」

広げた指に挟まっているのは、四つの球体。

広場に力なく倒れていくのは、四人の友達。

「ラズリ!!」

「じゃあね」

叫ぶ善子に右手を振り——その肘が切断される。

走る龍駒が、その右腕に装着したタツノオトシゴの頭から、圧縮し
た水をレーザーのように発射したのだ。

白い球体が地面に落ちる。

「ハズレよ」

四つの球体を手に、女性が背後の海に飛んだ。

その身体が、迸った水の線で真っ二つに切断される。

女性だった破片が、音を立てて海に落ち、

「やった!?!」

龍駒はとまらない。

「カヴァアルツチャー!」

くぐもった声で叫び、落ちた白い球体を拾うと、女性を追って海に
飛び込んだ。

巨大なタツノオトシゴも、身を翻して海中に沈んでいく。

その水飛沫が舞い上がり、雨のように棧橋広場に落ちる。
そして――

「曜先輩……」

―― 駆け寄った善子が、曜の顔を叩いた。

それを契機にいつきは、すべてが終わったのを実感した。

「みんな」

いつきは散歩道を戻り、チェーンをくぐって広場に入る。

善子が倒れた四人に順に声をかけ、その度に起き上がった同級生たちは、首の横に触りながら辺りを見回している。

その中で、千歌だけが俯いたままだ。

昼食を戻した跡のそばで、座り込んでいた。

「千歌?」

声を上げず、汚れた口を拭いもせず、自分の手のひらを見下ろして、しやくり上げていた。

だが、涙は出ていなかった。

次回予告

よしみ「宣伝……うん、宣伝にはなったよね」

むつ「私たち倒れちゃったけど、平気なの?」

いつき「自業自得だよ、二人と考朔くんは」

よしみ「グウの音も出ません」

いつき「それはさておき、次回、仮面ライダーメルシャウム第二二話、『誰もが一つ持つてる、勇気の欠片』!」

むつ「ついにライブ回だ!」

いつき「歌は流せないけどね」

よしみ「一クールラストの前後回だから、予算もたっぷり!」

いつき「絵は出ないけどね」

むつ「グループ名はどうなる! ついにあの名前が登場するのか!」

いつき「結果は周知の事実なんだけどね」

よしみ「ついでに前回のラストで触れた梨子ちゃんの話も、決着なる!?!」

いつき「そこって引つ張りどころだったの？」

4 & 6 「乞うご期待！」

いつき「自由だなあ、私たち」

C

浦の星女学院スクールアイドル同好会とその仲間たちは、本土の港に併設されたロープウェイ乗場を出た。

「誰もいないね」

渡辺曜は、だだっ広い駐車場に眩く。

四〇分近くスクールアイドルの宣伝を生配信をして、最後にはフォーメアと仮面ライダーの姿まで流していたのに、野次馬の一人もいなかった。所在地を晒したにもかかわらず、だ。善子の配信番組のファンに、この街の住民はいないのだろうか。

伊豆三津シーパラダイスで千歌がシエル・フォーメアと戦った時は人だかりができたのに、と思うが、今回はリアルが目撃者がいなかったことを思い出す。それどころか、同じロープウェイに乗っていた若いカップルは、発報されたフォーメア通報が島の反対側の件だと気付いてもいなかった。

いくらネットで盛り上がっても、リアルにフィードバックはないのか？

今回の淡島での宣伝は、根本から失敗だったのかもしれない。

と、遠くからエンジン音が近付いてくるのが聞こえた。その音が誰か、今度は曜にも分かった。

「みんな！ 怪我は——」

駐車場に滑り込んだ中型オフロードバイクからライダーが飛び降り、

「——どうしたの？」

漫然と立ちすくむ曜たちに、フルフェイスヘルメットの梨子は目をしばたかさせた。

「怪我はないよ。ね、考朔くん」

「うん、まあ」

発言の通り、曜自身はなんともなかった。

梨子はヘルメットを脱ぎ、七人を見比べる。

「あの、誰が倒れた……んだっけ？」

「二人と、私と——」

「——俺」

手を挙げたメンツを見て、梨子は眉を八の字にした。

ラズリ・フォーメアに襲われて倒れた、曜、よしみ、むつ、考朔は、むしろ平然としている。

「私は平気だったんだけど……」

と、いつきが無言のままの二人にそっと目を向けた。

憔悴した千歌と、眉間にしわを寄せた善子は、ここまで一言も口を利いていない。

「どうしよう、私」

梨子は乗ってきたバイクを一瞥した。後部座席に大きめのコンテナが結び付けてある。

それを見て、曜はピンときた。

「もしかして、東京に帰るの？」

「どうして知ってるの？」

梨子は驚いたが、曜には意外ではなかった。元々短期間の滞在と聞いていたし、特に五月に入ってから二週間、梨子が今までになく色々なセクシヨンに関わっていたのを見て、薄々感づいていたからだ。

「ああ、あれは違うよ、お礼を持ってきたの。みんなにとって。帰るのは日曜日だし、でも……」

梨子は言葉を途切れさせ、千歌を見た。

千歌も予感があったようだ。黙って梨子を見ているその目に浮かんでいるのは、不甲斐なさか。

「大丈夫？ 千歌ちゃん」

その単語は、と曜が思った時には、千歌はひきつけを起こしたように声を上げた。

考朔とよしみの幼馴染み組がすぐに千歌に駆け寄り、いつきとむつは所在なげにする。

梨子の心配は分かる。

千歌の調子は悪い。先週ラズリ・フォーメアが現れた時に顔が真っ青だったのは体調不良だと思ったが、今日のように、人間の顔をしているとはいえフォーメアと仮面ライダーの戦いを前にして、幼馴染みたちが襲われているのを目にして、変身できなかつたのは異常だ。

曜にはこれが、ここ数日間が終わる問題とは思えなかつた。今まではフォーメアが現れる度に、新しい仮面ライダーやそれに類する力が現れていたから顕在化しなかつただけだとすると、その一翼であるブルンキアがこの街を去るのは、危険かもしれない。

「心配しないで。この街のことは、この街の人間が解決するわ」

曜の懸念を余所にそう宣言したのは、善子だった。

「スクールアイドルと仮面ライダーにおんぶにだっこじや、学校を救うなんて夢のまた夢よ。やれる人がなんとかしなきゃ」

「この街って、善子ちゃん、沼津の人でしょ？」

「その差、重要？」

善子の態度が普段とも墮天使ヨハネとも違い、曜はつい本名で呼んでしまったが、善子はそれに気付かなかつたようだ。

「とにかく、リリーは自分のしたいようにしなさいよ」

ぶつきらぼうにそう言うと、善子は腕時計を一瞥した。

「バス、あと五分で来るけど。明日は予定通りゲネプロでいいのね？」

「ヨハネちゃん、練習は？」

「続けられると思う？」

善子は駐車場を斜めにつきつて歩いていく。

その背筋の伸びた後ろ姿は鮮烈で、なぜそんなにも強いのだろう、と曜は思う。

ただでさえギリギリの状況なのに、すべてを台無しにしてしまいうな出来事が起きた。そんな局面であつて、善子は一向に折れる気配がない。

曜が次々と底が抜けていく現実には耐えられているのは、千歌やよしみたちがいるからだと思つている。正確に言えば、折れそうな誰かを見ているからだ。自分が見た絶望的な光景を、誰にも見せたくないか

らだ。だから、折れそうな誰かに支えるために、踏ん張っていないければならないと思う。

善子もそうなのだろうか。

あの子も、地獄の底を見てきたのだろうか。

「俺たちも行こ」

考朔の声に、曜は我に返る。

「元気出してよ千歌、明日はウチから差し入れ持つてくからさー」

「そうだよ、学校みんなが準備に集まるんだから、頑張らなきゃ！」

「あと一日あるんだし、配信も後追いで広まってくつて！」

「俺は明日は無理だけど、明後日は絶対見に行くから！ 西高のヤツら連れて！」

よいつむトリオと考朔も、一部はバスに乗るべく、一部は徒歩で帰るべく、善子のあとを追い、

「うん、よろしくね！」

曜はそれに手を振った。

「千歌ちゃん」

梨子の声に、千歌は表情のない顔を向ける。

「言うのが急でごめんね。ほんとは先月いっぱい予定だったんだけど、ズルズル伸びるうちに、言いそびれちゃって」

「うん」

「ほんとはライブが終わるまでいたかったけど、復学の手続きがあるから」

「うん」

会話が續かない。

バスの音が近付いてきて、停まり、走り去る。

梨子が革のライダーブーツの爪先でコンクリートを叩き、数センチ転がった小石を千歌が見る。

背中まで届く二人の髪が、生ぬるい海風に煽られる。

気まずい沈黙。

またエンジン音が近付いてきた。美渡の軽自動車が迎えに来たのだ。

「じゃあ私、あいさつに行ってくるね。また明日」
「うん」

千歌は頬を持ち上げて、手を振った。
梨子はそれを見て、瞼を伏せた。

千歌の顔が、笑顔に見えなかったからだろう。
梨子がバイクで走り去り、入れ替わりに軽自動車が駐車場に入ってくる。

千歌の手は力なく垂れた。

「千歌ちゃん、ごめんね」

「え？」

「瑠璃さんが——ラズリが怪人って分かった時、私、すごく怖かった。でも千歌ちゃんは、いつもあんな思いしてたんだよね」

「曜ちゃん」

千歌が口を開きかけたが、曜は彼女の手を握った。

「善子ちゃんの言う通りだよ。ここは私たちの街なんだから、私だって頑張らなきゃ」

なのに。

まだ手が震えている。

目尻が熱くなってくる。

頭を空っぽにしたいのに。

「帰る？」

やってきた美渡が、二人に呼びかけた。

「うん」

千歌は結局、泣かなかった。

ただ、途方に暮れた顔をしていた。

第一二話：誰もが一つ持つてる、勇気の欠片 | 1

A V

弱々しい電話のライトの中、鏡を覗き込む。

酷い顔だ。

目の下にくまが落ち、唇は荒れている。

洗濯ばさみでとめた前髪の下には、にきびも増えた気がする。

顧問の信代からもらったベースメイクを手の甲に出し、額に塗る。

眠れなかった。

美渡は仕事から帰ってこなかったから、いつもの罵声はない。

珍しく多くの宿泊客を迎える十千万の手伝いは、明後日の本番を控

えて免除された。

気を休める夜にしてもらったのに。

ファンデーションを、パウダーパフに少量こすりつける。

背中まで伸ばし放題の髪を持ち上げ、頬に撫で付ける。

眠れなかった。

深夜を回った頃、営業の終わった温泉に忍び込み、脱衣所の椅子に

腰を下ろした。

教えられた化粧は、いつもうまくいわずにやる気が出なかったけ

ど。

今なら、どんなに下手クソな化粧でも、成果が見えそうだったから。

失敗したって、温泉で流してしまえばいい。

でも。

なにも変わらなかった。

鏡の中にいたのは、高海千歌だった。

*

「みんなー！ 今日準備ありがと！ おやつ持ってきたから食べ
てー！」

体育館の第二教官室から、橙色のキャラクターと「寿太郎みかん」

が描かれた段ボールが現れた。いや、それを抱えた千歌が現れた。

学校指定のジャージ姿の千歌は、フロアシートに置いた段ボールの

封をバリバリと派手に開けた。中身はもちろん、この浦の星女学院がある長井崎岬^{みかん山}で収穫されたみかんだ。

壁際で休んでいた浦女生たちが声を上げて集まり、

「うわ、待って、押さないでってばー!」

千歌の姿はすぐに見えなくなった。

「こんな準備しなくても、よかつたんじゃないかな」

渡辺曜は、即席のライブ会場と化した体育館を眺める。

モップで綺麗に拭き掃除されたアリーナに暗緑色のフロアシートが敷かれ、そこに八〇〇脚近いパイプ椅子が並べられた光景は、去年の文化祭で見たそれと同じだ。違うのは、この会場が自分たちのためだけに設営された事実。そう思えば、曜だって謙虚にもなる。

ところがお団子頭の後輩は、曜と同じ光景を見て、ふん、と鼻を鳴らした。

「何万人のリトルデーモンがこの現世にいると思ってるの? この程度のハコ、秒単位で埋まって当然よ——」

「余裕じゃん、ヨハネちゃん」

曜は頬を綻ばせた。

善子の芝居めいた低い声に、少し前なら気付かなかっただろう空元気のニューアンスを感じたからだった。

金曜日に協力を呼び掛けたところ、実に二八人の有志生徒が会場設営に集まってくれた。元々このライブにかかわっていた梨子、花丸、よしみ、いつき、むつの五人を含めて、五〇人に満たない全校生徒の七割が集まったことになる。それだけの数がいからこそ、明日の一番を控えた曜たち三人は、設営に本腰を入れずに済んだのだ。

逆に言えば、この空間で同好会^{ライブを成功させられる}が活動実績を作れるか否かは、パフォーマンスの手に委ねられた、ということ。

プレッシャーの可視化に、こみ上げてくるものを感じる。

「あ、あ、あー、あー。はい、うん。本日は晴天なり、本日は晴天なり。……晴天? 曇ってるよね?」

ステージ上のよしみの声がスピーカーから流れ、みかんを食べていた生徒たちが笑った。

「そう、そのみかん、私が運んだんだからね！　半分は私だと思って食べてよ！」

その通り、先ほど千歌が持ってきた差し入れのみかんは、よしみが看板娘をやっている菓子屋《松月》が入荷数を間違えたひと箱を、同好会で安く譲り受けたものだった。その実は厚意だろう、と曜は推察している。

「ピンスポ右、いきますー！」

頭上から声がして、がちやんとステージに明かりが差し込んだ。アリーナ二階のギャラリーに設置されたスポットライトを、いつきが点灯したのだ。

「うわー！　眩しいって、いつきー！」

照らされたよしみがヘッドセットマイクに言うが、

「ピンスポ左、お願い！」

いつきの大声で反対側のスポットライトも点灯され、

「ボーダー！　サス！　アツパーと……ローホリ！　えっと、あと、フット、ステスポ！」

指示の度に、ステージに光が満ちていく。

「ぎゃああああ!!」

重なり合う照明の中でよしみは、日光で溶ける吸血鬼のようなジェスチャーをした。

「なにやってんだか」

と善子は手のひらを上に向けたが、顔は笑っている。

「問題なさそうだね」

ライトが順次消えていくと、曜は単語カードをめくり、チェック項目にペケ印を入れた。

「はいはい、はいはい、ワイヤレスマイクABC、全部オツケー！」

よしみがステージで手を振り、

「じゃあ次、ミュージックうう……スタート！」

今度は放送室にいるむつの声が、ステージ両サイドのスピーカーから聞こえた。すぐに、体育祭でよく聞く音楽が流れる。

『『剣の舞』だ』

「そんな曲名なの？ 詳しいんだね、ヨハネちゃん」

「つてわけじゃないんだけど」

と、ぷつ、ぷつ、とノイズが走り、

「ごめん、ちょっと待って。入力が違う。えっと……」

ややあつて――

「あー！」

――段ボールのそばに屈んだ千歌が、声を上げた。

流れ出したのは、打ち込みのインストウルメンタル。

シンセアプリで作られた、お世辞にもハイクオリティとはいえないペラペラの音色で、ここにいるほとんどが詳細を知らない曲だ。

それでも浦女生たちの間に、ざわめきが広がっていく。

生音で録音した手拍子に合わせ、生徒たちの手拍子がまばらに重なり。

ベースとドラムが合流した時には、本番さながらに口笛や黄色い声が上がっていた。

(やるんだ、これを)

そう思うと、胸の中がムズムズしてきた。

この気持ちは、プレッシャーだけじゃないはず。

「明日ね」

舌打ち混じりに呟く善子の気持ちも、同じだと確信できた。

千歌は？

友達に笑いかける幼馴染の気持ちは、曜には見えない。

*

スクールアイドル同好会顧問の笠木信代の監督において行われた予行練習ゲネプロは、午後一六時半、無事終了した。

ステージに上がっているのは、パフォーマーの千歌、曜、善子と、サポートの花丸、梨子、《よいつむトリオ》のよしみ、むつ、いつき、そしていまだ白いギプスを鼻に乗せた信代だけだ。ほかの生徒たちは「今見たら明日こないだろ！」と信代が追い払っていたからだ。

「特に問題はなさそうだな」

「ほんとですか？」

「致命傷はなかった」

「水準低すぎない？」

高い声を上げる生徒たちを、信代は順繰りに見回す。

六割方の出力に抑えさせた歌とダンス、MCの進行や照明のタイミング、いずれも、吹奏楽部の顧問として演奏会を見てきた経験から、申し分ない出来と評価できた。

気になるのは、青白い笑顔を貼り付けた千歌だ。

同好会の発案者で実質的なリーダーである彼女のパフォーマンスは、最後まで冴えなかった。

さすがの千歌も、本番前は不安なのだろう。

だから、信代は千歌の肩を叩いた。

「気張るな、高海。どうせ奇跡なんて起きない」

「変な慰め方」

「本番でものをいうのは練習だけってことだ」

千歌は唇を尖らせたが、その方がまだ生き生きしてみえた。

「ヨハネちゃんの衣装、ぶつつけ本番だけど平気かな」

懸念を口にした曜、そして千歌と違い、善子は一年生カラーの山吹色のジャージ上下を着ていた。彼女の衣装が間に合うかは、この瞬間にも淡島で作業を続ける理事長代理にかかっているのだ。

「分かってないわね、曜先輩」

だが曜の心配を余所に、善子は不敵に笑い、横倒しのピースを顔に添えた。

「堕天使の本懐は、魔への誘惑。この《アプサラス》の如き美貌と肉体を持ってさえすれば、数万の人間たちを魅了することなど造作もないこと——」

「ジャージでいいって」

「じゃあ小原には一報入れとくぞ」

「冗談！ 冗談だってば！ これじゃイヤだよお！」

「よしよし、シャイニー先輩を信じるぞら」

お団子頭を花丸に撫でられ、善子は泣き真似をやめた。

「ねえ、センセ。私たち、もうちよつと機材の練習してきたいんだけ

ど」

むつが言い、いつきも頷いた。

「だったら私もMCの練習したいな。ダメです？」

よしみが手を挙げ、

「あ、やるなら私がぼつちり教えちゃうよ」

「教えるくらいならむつがやってよ！」

「ヤダ。掃除の案内なら任せて」

「そんなの私だってできるわ！」

漫才を始めたトリオの前に、信代は腕時計を見た。

「四時半か。六時までとってるから、その辺までならいいぞ。ほら」

と信代は、鍵束をいつきに投げ渡した。

「本番が終わったら返せ」

「え、いいんです？」

「ほんとはダメだ」

三人は声を上げて、放送室へ向かって舞台袖へと走って行く。

「お前らは？ なにかあるか？」

パフオーマーに問うと、善子は頭を振り、曜は首を傾けた。

「ほんとは、果南ちゃんにも見てもらいたかったんですけど」

予想外の名前に、信代は肩を竦める。

「あいつは、まあ……しょうがない。本番をぶち壊しにくるようなヤ

ツじゃないし、心配するな」

そして、言葉少なな千歌に目を向ける。

「高海は？」

「私——」

千歌は口を開くと、梨子を見た。

「——梨子ちゃんのピアノで歌いたい」

「え？」

黙って同好会の面々を見守っていた梨子は、突然回ってきた発言権に、目を丸くした。

「今、そんな話じゃなかったよね？」

「そういえばリリーのピアノって、聞いたことないかも」

「私もだよ！ 聞きたい聞きたい！」

善子と曜も乗ってきた。

「おい、あんまり無理強いするな」

信代は思わず三人を牽制するが、

「中学校のピアノコンクールのなら、音源がニコ動にありましたよ」

「でかしたわ、マル！」

「あとでリンク送って！」

花丸も入ってきて、話がこんがらがってきた。

そこに改めて、千歌が上目遣いで梨子に近付く。

「ダメ？」

「おい、高海！」

だが、当の梨子はニッコリ笑い、

「ごめんなさい」

と頭を下げ、

「だと思ったあー！」

千歌の声を皮切りに、五人は笑い出した。

その状況に、信代は面食らう。

梨子が困っているようには見えなかったからだ。

「ね、梨子ちゃんは、なにかある？」

千歌に問われた梨子は、四人の顔を見回し、次いで、ステージ上か

らアリーナを眺めた。

「いいんだよ、なんでも言って！」

「栄^はえあるリトルデーモンー〇号の願いとあれば、この身に宿る《テ

ルプシコラ》の力を授けても構わないわ——」

「待って、それ音楽の神様だよね？ 授けるのはライブが終わってか

らにしてよ」

善子は曜に突っ込まれ、

「梨子ちゃんの音楽の才能だけ、置いてってくれないかなあ」

「せめて作曲の才能に限定するぞーら」

千歌は花丸に突っ込まれ、

「もう、与えるか奪うかしかないわけ？」

梨子が全部ひつくるめて、五人はまた笑い合う。

梨子の変化は明白だった。周囲の要望を断る流れこそ体験入学当初と同じだが、応酬の安定感是比较にならない。

それを下支えする信頼関係が、部活動で培われたものかは不明だが、この同好会の顧問になった甲斐はあった、と信代は思う。

ゆえの、やるせなさでもある。

梨子は明日、本番を待たずに沼津を離れるのだから。

口を開けずに笑っていた梨子は、やがて千歌を見て、首を振った。

これで終わりだ。

「よし、じゃあ解散。今日は練習禁止だからな」

「えー!？」

「休息も準備のうちだ。朝練も身体をあつためるだけにしておけ」

「はあーい」

渋々の応答で舞台袖に戻っていく五人を眺め、信代は鼻から息を漏らす。

本当に希望がないのか、遠慮しているのか。

いずれにせよ、教師の役目は、生徒の道を決めることではない。

A

二〇一六年五月一五日。

「なんでよう！ 明日は晴天って言ってたのに！」

プレジデンシャル・スイートのプリンスルームで、黒澤ルビイは叫んだ。

慣れないベッドでの眠気など忘れ、一面のテラス窓に駆け寄る。

地上八階、東向きの眺望が見せた内浦の山々は、濃い曇天に包まれていた。風の音は聞こえないが、眼下で波打つ江浦湾で間接的に強さが分かる。このままでは船がとまってしまいかもしれない。

「ど、どうしよう」

と、ノックの音がして、

「ルビイ様、お加減は如何ですか」

梁のスピーカーから男性の声が出た。

「あ、あの、なんでもないです！」

真つ赤なバラが描かれたネグリジエの胸元を無意識に押さえ、ルビイは内線電話でキングルームをコールする。

「……ルビイ？ 何時だと思ってるのよオ……」

「五時半です！ 外、見てください！ 本土に戻れなくなっちゃいます！」

鞠莉のほとんど口が動いていない声に怒鳴ると、もぞもぞと布のこすれる音がした。

「Cor、早いところ出た方がよさそうね。パイン？ ……パイン！^{あちら}いつまで寝てるの!? Chopperの準備！ ……あ、Sorry、ルビイ。準備できたらLiving Roomまで来て。パイン、衣装の上がりは何時？」

受話器を戻し、ルビイは小さなトランクに飛びついた。ダイヤが準備してくれた替えの制服に着替えて、荷物をまとめてプリンスルームを出る。

「ルビイ様、こちらへ」

「ピ……」

パブリックスペース^{廊下}に出るなり警護についたサンングラスの黒服は、黒澤総合警備保障のルビイ専属ボディガードではなかった。彼らはルビイの門限である午後七時で業務を終え、黒総警と業務提携しているOGIスクードの警備員がボディガードを引き継いでいたのだ。

それを忘れていたルビイは、だから、自分を褒めた。一箇月前の自分なら、絶対に高周波を発していた場面だったからだ。

黒服の先導でやってきた居間には、誰もいなかった。

今のうちに、とルビイは電話を耳に当てる。

「もしもし」

「あ、お姉ちゃん？ ルビイです。おはようございます」

「おはようございます。よく眠れましたか？」

「うん。ありがとね」

「なにがですか？」

「お泊まりのこと。お姉ちゃんが説得してくれたんでしょ？」

「あなたが直接お父様をお願いしたから、ですわ」

ダイヤの声は明瞭だ。今日は自分の方が早起きだと思ったのに。

「それで、完成したのですか？」

「うん、二時頃までかかっちゃったけど」

小さな鼻息が聞こえた。ルビイが最初から制作に関わっていて、こんな計画性のないスケジュールになってしまったのだから、呆れられるのも当然だ。

「それでね、お姉ちゃん」

「気後れするが、意を決する。」

「ライブ、来る？」

少しの間。

「いえ」

息を止め、溜め息を押しとどめる。

「父も母もそちらに向かうのです、わたくしは記念公園で張り番をいたしますわ」

「そっか……。ごめんね、しょうがないよね」

「いいえ。では、頑張ってくださいね」

「うん、じゃあ」

電話は切れた。

ルビイは我慢していた溜め息をつき、寝室と同じ仕様の広いテラス窓に近寄る。

駿河湾の向こうに、姉のいる沼津御用邸記念公園の林が見えた。

張り番は建前だ。

そんなことは分かっている。

来てくれるなんて、最初から思ってたなかった。

でも――

「――忘れちゃったの？ お姉ちゃん。みんな本気なんだよ」

*

「行ってくるね、お母さん」

千歌はのれんの間から十千万の玄関を覗き込み、退室手続きの準備をしていた枝海に声をかけた。

「千歌、待ちなさい」

すぐに行こうと思ったのだが、母がこちらに歩いてきたので、のれんをくぐる。

「午後からは晴れるみたいだけど、気を付けて」

「うん」

「お母さんもお父さんも行けないけど、応援してるから」

「分かってるよ」

今日は連泊の宿泊客がいて、ライブの時間は入室手続きや夕食の準備と被ってしまう。家の繁盛を思えばしょうがない。

「千歌ちゃん」

と、勘定台の前の休憩所から、和装の老婆が姿を現した。すぐ裏手に住んでいる、今は亡き祖母の友達だ。

「今日はライブの日なんだっけ?」

「あ、はい! 浦女の体育館でやります!」

さらに休憩所から、近所のデイサービス施設《ひだまりの郷》から遊びにきていた老人たちも顔を出した。

「何時からやるんだっけ?」

「夕方の五時からです!」

「何チャンネルでやってるの?」

「テレビなんて来ませんよ! ネット配信は予定してますけど」

「そういうの、分かんないなあ」

「まだクルマがあれば、見に行けるんだけど。今日は雨ずらよねえ」

「しょうがないですよ! 有名になったらテレビ中継してもらいますから!」

千歌は強気に返し、内心で残念がった。

内浦に住む一七〇人ほどの住人のうち、大半を占めるのは老人だ。彼らがライブに来ないのは予想していたが、本人に言われる実感は重かった。

「じゃ、行ってきます!」

それでも明るい声で手を振り、千歌は曇天の下に飛び出した。

「千歌」

立ち止まる。

外履きの草履が土間をこする音ののち、枝海がのれんをかき分けて現れる。

「なに?」

「大丈夫?」

千歌は口を開いて、閉じた。

頷きたかった。

親指を立てて、自信に満ちた笑顔で。

大丈夫、と。

でも。

枝海は、僅かに眉尻を下ろした。

遠くにバスの音が聞こえて、千歌は通りに目を向ける。

「美渡姉、帰ってきてないよね」

「うん、今日も泊まりだつて」

「志満姉は……」

「……来ないでしようね」

母は明言した。

「しようがないよね」

千歌は笑顔で母を見た。

たくさんの「しようがない」がある。

その積み重ねの先で、今日のライブが失敗に終わり、あの学校が消えたとしても。

それも、「しようがない」のかもしれない。

「無理はしないで」

母の言う通りだ

でも。

「私にできる無理はするよ」

その言葉で、母はやつと笑ってくれた。

*

二階まで吹き抜けになった部屋の中央に、《仮面ライダーシャイニー》が立っている。

余所行きの格好ではない。紫色の目と追加装甲がないだけではな

く、銀色の装甲もない。銀と黒のアンダースーツに、バッテリー表示のついたベルトを締めただけの構成だ。それでも一目でシャイニーと分かるのは、ベルトからぶら下がるスカートのようなバッテリー群のためか。

「μ-6型へのデプロイ、完了しました」

「テストケース四四再実施、開始準備」

「準備完了です」

「では、開始」

スピーカーから流れるピアノのアンビエントBGMに、女声の報告と男声の指示が連なる。

正方形の部屋にいるのは、シャイニーだけだ。

壁際に並ぶ背の高い機材にはカバーが掛けられ、作業机には書類一枚ない。

「《ストローク》をエウリュースの銃口へ装填してください」

横にいる男性がマイクで指示を出すと、シャイニーは右手に持った寸詰まりのハンドガンのようなものに、機械部品でシーリングされた球体を押し当てた。

直後、ハンドガンを取り巻くように白い泡が産まれる。それはシャイニーの胸から背中を覆い、さらに背中から四肢に伸び、半円のような部品を各部に配しながら、手のひらとふくらはぎに大きめの機械部品を残して伸展を終えた。

かすかに紫色を帯びた、装甲と呼ぶには繊細すぎるそれらは、鏡面処理による反射で輝き。

最後に、顔面に円が現れ、向かって右上から左下に斜線が走り、割れ、二つの半円となって目の位置に納まる。

○リストローク
■・◇になる。

「《PRX—M6—1》、フォームチェンジ完了」

ガラスで隔てられたこちら側から見下ろす人々が、ほっと息を漏らした。

桜内梨子は、それらとは違う溜め息を漏らす。

「どうした？ 梨子」

「東京に帰るんじゃないのかなったの？」

私はなにをしてるんだらう。

こんなものに興味はない。

「それはそうなんだが」

父は梨子を見ていなかった。禿げ上がった頭に脂汗を浮かせ、銀色の仮面ライダーを見ていた。

「最後に協力を頼まれてしまったから——」

「——いかがですか、梨子さん」

隣の男性が話しかけてきた。

「あれがこの街を護ってきた、弊社の仮面ライダーです。非OGIグループの仮面ライダーは、変身者の心が“形”を作り出すようですが、私たちはプログラムでもって、指定された量子信号パターンを発するユニットを介して“泡”を制御しているのですよ」

三〇代らしい男性だった。清潔だが使い込まれた白衣の胸に「依田義森」と書かれた社員証がとまっている。「お父さんより若いのに、《静岡OGI》のムーフォーム関連事業の主任なんだ」と桑介から何度か聞かされていた名前だ。だが梨子は一〇回以上会っているのに、その顔と声が覚えられない。

「“program”——“書かれたもの”を意味する——gram“に、“公に”を意味する接頭辞“pro-”がついたものです。原義は“公文書”と言ったところですが」

男性が梨子の顔を見る。

「それが意味するのは、“支配”」

向けられた笑顔に、心がざわめく。

梨子がガラスに目を戻すと、銀色に輝く人物はマイクの指示に従っている。ダンスのアイソレーションのように、頷く、腕を上げる、振り向くなどの動作チェックを粛々と言う姿は、理事長代理とは思えない律義さだ。

「結論が知りたいです。テストケース一六六を実施してください」

義森が声を上げ、マイクを握る女性が「本気ですか？」と彼を見た。

「本来は今朝に終わっていたはずの行程です。エウリュースIIストローク

でのシステムテストは終わっているのですから、問題はありません」
「ですが、あのμ-6型は先日小原さんから提供されたばかりで、安全性の——」

「——発動を示す量子信号パターンは観測されていません。だから今日のテスト実施も承認が得られたのです。《人体ラギダイズシステム》の開発続行を検討させるためにも、一八時までにはストロークフォームの成果を出さなければなりません。そのためにMark Iまで引っ張り出してきたのですよ」

反論は続かなかつた。

「テストケース一六六まで省略します。準備してください」

シャイニーが腕を広げるジェスチャーをしたが、床に描かれたマークの中央に立った。

「テストケース一六六、開始！」

女性が語気を強めてマイクに言った時、真下に向けたシャイニーの手のひらが、文字通り輝いた。

「出力二・〇五パーセント、正常です。ケース一六七に移行」
手のひらの輝きが増し、銀色のスーツを着た腕が震える。

「次、ケース一六八」

輝きがさらに強まり、だから見間違えたかと思った。

「浮いた！」

誰かが叫んだ。

横に並んでいた大勢が、ガラスに顔を近付けた。

シャイニーの足は、床から浮いていた。

「出力二・五三パーセント、浮遊効率一〇三・一パーセント、姿勢制御モジュールの外部結合テストからの誤差、許容範囲内です」

手のひらから放たれる光が不安定に身体を揺すり、そのたびに腕が前後に振られ、バランスが保たれる。

「テスト終了！」

光が収まり、がん、と音を立ててシャイニーの踵が地面に落ちた。

歓声が上がリ、義森の横顔に笑みが浮かぶ。

「続いてケース二六一に飛びます」

「主任、ここでスラスタ―は危険ですよ」

「最低出力のケースなら可能な数値です」

「ですが――」

遠くで誰かのやりとりが聞こえる。

ライブ本番前、みんなは昼食を食べている頃だろうか。

結局一度も、一緒にご飯を食べられなかったな。

ううん、できれば、できれば、みんなと――

「……………」

――なにがしたかったんだっけ。

思い出せない。

ピアノのBGMが耳障りだ。

ばし、と。

回転灯が光り、アラームが鳴った。

遅れて、ガラスにヒビが走る。

「中断！ 停止コードを打ってください！ 中断です！」

義森がガラスから離れ、磨りガラスの扉から出て行った。

二本の赤い光が壁を回る。

鳴り響く警告音で、側頭部が割れるように痛い。

「お父さん、私」

「梨子、行こう」

吹き抜けの部屋に男性が現れ、倒れたシャイニーに駆け寄るのが見えた。

「ムーフォームの支配はまだ遠く、だね」

誰かの言葉を最後に扉が閉まり、梨子は廊下に連れ出された。

残されたのは、アンビエントBGMだけ。

第一二話：誰もが一つ持つてる、勇気の欠片 ― 2

*

「《ナルキッツソス》……ってさあ」

電子シャッター音が鳴る。立て続けに、二度、三度、四度。

「正直、全然感情移入できなかつたんだったけど……。今なら、なんか、分かる気がするわ」

体育館の壁際で、青みがかつた灰色の衣装を着た後輩が、電話で自画撮りしている。指の動きからして、SNSにアップしているようだ。

「着替えたくらいで大袈裟だなあ」

渡辺曜は指抜きグローブをはいた手を屈伸し、手の甲に切り抜いたスピードマークの伸縮をチェックする。

「くらい？ 見なさいよ、この宣伝効果。通常の一五倍以上の拡散スピードよ」

善子がこちらに向けた電話には、今まさに拡散数がカウントアップしている善子のSNS画面が映っていた。

「ほんとだ。すごい」

「この前の宣伝動画だって、なんだかんだでネットニュースに取り上げられるまでいったからね」

「顔はモザイクだったけどね」

言う間にも、「似合う似合う！」「もつと引いて見せて！」などと返信がぶら下がり、その横で「これどこで売ってるの!?!」「手作りだよ前の見てねーのか」などと善子と関係ない言い合いが始まった。

「自由だねえ」

曜は眩き、自分の電話に目を戻す。天気予報は午後から天気が回復するといっているが、体育館の窓から見える空はいまだ黒い雲に包まれ、中庭の木々は強風に揺れている。

「曜ちゃんの体感天気予報も、晴れそうな感触してたのにな」

このまま天気が崩れるなら、誰も来なくなってしまう。長井崎岬の上の浦の星女学院へは、クルマなら海沿いの道を通らなければならな

いが、風が強まれば波の危険が出てくるからだ。

「ちよつと雲がズレただけでしょ。……あ、お母さん」

「どしたの？」

善子は電話を見たまま、眉を小さく上げた。

「今日、来られないって」

「そっか。お父さんは？」

「ウチは、まあ……ね」

触れない方がよさそうだ。

「ウチも、今日は誰も来ないんだ」

「ふうん。ま、神の庇護を捨てた堕天使とそのリトルデーモンなら、珍しくない世界観よね」

「そう？」

「でもない？」

ボールを返され、言葉に詰まる。

気まずい空気。

堕天使モードで中和してくればいいのに。

善子もそれを感じたか、ステージの方に目を向けて、

「おーい！ 千歌先輩！」

と声を張り上げた。

ステージでよしみと話していた千歌が、こちらを見る。

「宣伝活動よ！ 誰かカメラお願い！」

誰か、と言っても、パイプ椅子の並べられた体育館に人は少ない。

スクールアイドル同好会のパフォーマー三人に、よいつむトリオ、顧問の信代。

そこで、唯一の部外者――

「はい！ ルビィ、撮ります！」

――ルビィが手を挙げた。

「頼んだわ」

「宣伝？ え、顔出し？」

善子の意図に気付き、曜が声を上げる。

「当たり前でしょ。どうせライブも配信するんだし」

「私も？」

「なに勿体ぶってんの」

「じゃなくて、私が映つてもしょうがなくなる？」

「謙遜はいいから」

ルビイは、補修していたピンクの熊の頭のぬいぐるみを手提げ袋にしまつと、コンパクトデジタルカメラコンデジを取り出して走ってきた。

「どうしたのー!？」

橙色の衣装を着た千歌も、ステージからおりてやってくる。

「ルビイ、全身入れて撮って」

「うん！　じゃ、フォーメーションの並びをお願いしますー！」

カメラマンルビイの指示で三人は慌ただしく並ばされ、衣装の初出となる写真を撮るべくポーズをとり――

「まさか……」

――わななき声に、緊張を解く。

「こ、こんな、こんなことに気付かなかつたなんて！　ルビイ、一生の不覚！」

「どうしたの？　ルビイちゃん」

千歌が問うと、ルビイは二本の人差し指を善子と曜に向ける。

「色が被ってますー！」

「え？」「は？」

指差された二人は互いの衣装を見合い、

「青みがかつた灰色！　鮮やかな水色！　色調が被ってるんです！」

三人は「あー……」と声を揃えた。

「でも、μ'sでもさ、ことりさんと花陽さんが緑系で被ってるよね？」

凜さんだつて一時期――」

「――九人中三人と三人中二人じゃ、話が違ふんです！」

自らの絶叫を追い越すように、ルビイが走ってくる。

「この絵面じゃ、オレンジ色がリーダー格で、二人はバックダンサー扱いされちゃう！　そしたら、千歌先輩派と曜先輩&ヨハネちゃん派で分裂したファンの抗争が過激化、リーダーによるメンバー管理の是非論に発展し、闘争を求めるスクドルが羽田空港で正面衝突する「シビ

ル・ウォー：スクールアイドル」が勃発！ 責任をとった千歌先輩のグループ解散発表不可避！ ああ！ ルビイが木を見て森を見なかったばかりに！」

「ならないでしょ」

「なるんです！」

ヒートアップするルビイは千歌に任せ、曜と善子は声を潜める。

「ヨハネちゃんのパーソナルカラーって、どうやって決めたの？」

「これ？ ほんとは黒か白がよかつたんだけど、それじゃ華がないってルビイがこの生地、買ってきて」

と重ね着のように表現された衣装を摘まむ。

「せめて赤系だったらなあ」

と千歌が、善子のカチューシャのぶら下がったりボンに触れる。

「あの時は梨子先輩が桜色——」

「——ルビイ！」

善子が割り込んだが、遅かった。

瞬きの間に、空気が凍り。

ルビイから血の気が失せる。

「色かぶりなんて、今さら気にしてもしょうがないよ！ 最後は九人になるんだしき！」

だが千歌は明るい声で言い、曜と善子の腕を引いた。

「ほら、写真アップしなきゃ！ ルビイちゃん！」

ルビイは弾かれたように離れていき、しょんぼり顔をカメラの向こうに隠した。

千歌から表情が消えた瞬間を忘れようと、曜は笑顔を作った。

*

「ですからね、是非是非、見に来ていただきたいなあ、と」

「えっと、なんてヤツなんだっけ？」

「スクールアイドルです。スクドル。学校の部活でアイドル活動をするんです」

「《フォーリーブス》みたいなの？」

「へ？」

「《フィンガー5》！」

「懐かしいわあ！」

「そう、あんたの旦那、マー坊そっくりだったわよね！」

「だから！ だから選んだって！」

「あ、あの、なので、ライブをです、えっと、あの」

青みがかかった灰色の衣装で着飾った善子は、普段の墮天使キャラが悲しくなるくらいに右往左往している。

「花丸！ なんとかしてよ！」

「オラは手出ししないですよ」

「こんな元気なんて思ってたんだけど！」

「人生経験がたりないですよ」

「だからですね！ 浦女の高海千歌と、渡辺曜と、この私——」

「——高見知佳！」

「いたわねえ！」

「え？ あの、デビューは今日で、っていうか、それで三人目がこの私——」

「——枝海ちゃんがずっと謳ってたの、覚えてる？」

「『高見枝海です！』ってね」

「千歌って、そういうことでしょ？」

「もう！ だから！ スクールアイドルやるんです！ 三人で！」

「スクドル？」

「μ、sですよ！ μ、sみたいなことするんです！」

「石鹸の？」

「そのボケはやめなさいって」

「はいはい、知ってるわよ、μ、sなら。うちの子もマニアだし」

「そうならそう言いなさいよ」

「だからあ！ 最初から言ってたじゃあん!!」

制服姿の国木田花丸は、対岸の火事を見る気分だ。

パイプ椅子を並べた信徒席に座って話をしている八人の老婦は、午前のミサから教会に集まり、OGIが配達する弁当を食べて、午後六時半からの夕方のミサに参加する信徒たちだ。ミサの間を教会で雑

談してすぐす彼女らに、善子は椅子を提供する気分でライブに招待しようと考えたのだ。

だが年齢的には六〇七〇代といっても、足腰が弱っている一人を除けば毎週、このみかん山を徒歩で登ってくるような人々だ。精神的にも肉体的にも「かくしゃく 矍鑠」という表現さえ不相応、花丸の印象は「白髪が増えたお母さん」に近い。

だから善子が、イメージしていたであろう「老人」との違いに面食らっても、不思議ではない。

「も、もう！ とにかく！ 私たちが歌って踊るの！ だから見にきてよ！」

堪りかねた善子が大声を出すと、老婦たちは一瞬声をとめ、だがチャペルから残響が消える前に笑い出した。

蠟燭の炎を吹き飛ばしかねない大音声の笑いと、「気が向いたらね！」「いい席準備しておいてね！」などなどの声に追われるように、墮天使はチャペルから退散していった。

「ヨハネちゃん、やっぱり耐えられなかったぞら」
それは前回と同じように、チャペルの神聖さゆえではないだろうが。

入れ替わりに、黒いキャソックスを着た人物が入ってきた。この聖ゲオルギオス礼拝堂の司祭、滝川天吾だ。

「神父様、私はひとまず、これで失礼します」
花丸が頭を下げると、

「はい、ありがとうございます。またお願いしますね」

と天吾は神の子らしい笑顔を浮かべた。それに合わせて、

「ありがとう、花丸ちゃん！」

「ちよくちよく来てよ！」

と信徒席からも声が飛んでくる。

のちにライブ客になるかもしれない老婦に笑顔でお辞儀をし、花丸はまた天吾に目を向ける。

「神父様は、見に来てくれますか？」

「申し訳ありません。私は余程のことがない限り、ここを開けており

ますので」

それはそうだ。

夕方のミサは午後六時半からで、ライブの時はその準備をしているだろう。

「しようがないです。では、またミサで」

再度お辞儀をしてチャペルをあとに――

「待てよー!」

――振り返ると、奥から健が歩いてきた。今日はスカートの制服を着ている。

「スコさん、まだいたんです?」

「メシ食って寝てた」

健は刈り上げた頭をかきながら、隠しもせずあくびをしていた。朝のミサから三時間は経っているのに、大した肝だ。

二人は並んで屋外に出て、駐車場とチャペルを隔てるフェンスまでやってきた。

「で、まだ入れないのか? 開場って何時だっけ」

「四時半です」

健はフェンスドアを掴み、シリンダー錠がかかっているのを見て手を離れた。開場時間になったら開けるとは、施錠管理担当の天吾の話だった。

「まだ部外者は入れませんよ」

「いいだろ、俺とマルの仲間じゃん」

「私と同好会のみんなは、そんな仲間じゃないんです」

「入部したんだろ?」

「ただの手伝いです。アイドルに興味はありません」

「それでよく協力できるな」

「教会にも興味はありませんし」

そこまで言うと思っていなかったのか、健はチャペルを横目で気にしながら笑った。

「しかし、ようやくウチにもスクドルができるな。あの転校生は?」

「あいつも踊るのか?」

健はフェンス越しに体育館を眺め、花丸は笑顔を維持する。

梨子が体験入学生で、昨日付けでこの学校から去ったことは、スクールアイドル同好会とその周辺しか知らない事情だ。それを言う立場に、花丸はいない。

その時、バイクのエンジン音が聞こえた。

「桜内先輩？」

そう口にしてしまったが、すぐに違うと分かる。遠いエンジン音は何台分もあり、それが重なり合い、うねっているからだ。

「《クラゲ》の野郎か」

健が舌打ちをして、沼津市内に居する暴走族の蔑称を口にした。

「《クレイジー・フィッシュ》の皆さんも、ライブを見にきたんでしようか」

「そんなわけないね。俺、行ってくる」

「ええ!? あと……一時間半でライブですよ。スコさんスカートですし、雨だつて降つて——」

空を見上げた花丸の顔に、一滴の雨が落ちる。

「——きたすら」

「なおさらだね」

言うなり、健はフェンスの編み目を登り、軽々と乗り越えてしまった。スカートが胸までめくれたのも気にせず。

「スコさん！」

「しようがないだろ！ ダイヤたちに謝つといてくれ！」

体育館に目もくれず駐輪場へ走っていく先輩を、花丸は見送るしかない。

*

「今日は店を閉めるぞ」

「了解、じゃあこつちも片付けちゃうよ」

本土の受付にいる祖父からの電話に、松浦果南はレジカウンターに腰かけて答える。

「船はとまった。ロープウェイも時間の問題だ」

タブレット端末が表示した天気予報は、五時発表も一一時発表も午

後から晴れと伝えていた。大外れだ。曜の体感天気予報も同様だろう。

「昨日までの予報はまったく当てにならない。油断するな」
「アイ・サー」

淡島は朝から続く暗い雲に続いて、一五時頃から急速な発達をみせた風と波に囲まれていた。今も避難準備情報のアナウンスと共に、閉島時間を前倒しして退出を促す島内放送が流れている。各施設の従業員も順次本土に渡っているようで、隣接するカエル館の館長も先ほど挨拶に顔を見せた。今頃はもう島を離れただろう。

「買っていった方がいいものはあるか？」

「ないかな。いざとなればみかんもあるし」

「分かった」

淡島の居住区に住み、島内のファビュラス・ダイバー・ボーイズで店番をしている松浦一家は、島から出る必要はない。だが海拔わずか数メートルのダイビングショップにいるのは危険だ。いくら海が果南の日常になったといっても、波や風まで彼女の味方というわけではないからだ。

「で、祖父ちゃんは？」

「港外退避してくる」

「ジュールを？ 陸揚げじゃなくて？」

「この発達速度だと間に合わん」

「パイロットボートは？」

「出ないだろうな」

節三は、松浦家所有の《ジュール丸》を、内浦湾外に係留しようとしているのだ。そして自分も、嵐が去るまで戻らない可能性を示唆している。

その状況において、

「オツケー、任せるよ」

果南の返事は軽かった。

波がどこまで荒れるか定かではないが、祖父が乗り切れない波などないと、果南は信じていた。

「じゃ、またあとで——」

「——果南」

遮った祖父の言葉に、電話を隔てた緊張を感じる。

「なに？」

「こつちに来るか？ ロープウェイがとまる前に」

「本土に？ なんで？」

「あれがあるんだろ？ お前の——部活の」

一瞬、息がとまった。

「最近、高海さんのところにも遊びに行つてないだろ」

ラギダイズ加工が施された端末の、時計を模したロゴが睨んでくる。

「いいんだぞ。《十千万》の一泊くらい、工面できる」

ややあつて。

肺の中の空気を、溜め息のように吐き出して笑う。

「言ったでしょ、私は補欠だって。千歌たちがちゃんとやってくれるから、出番はないの」

「そうなのか？」

「そうなのです」

「本当に？」

「しつこいよ」

電話の向こうで、節三の息が聞こえた。

「分かった。店を閉めたらまっすぐ帰れ。家から出るなよ」

「アイ・サー」

電話は切れた。

果南は終話音を鳴らす受話器を手に、長方形に切り抜かれた薄暗い窓外を見る。

金曜日のラズリ・フォーメアの襲撃で、果南は五つのムーフォームを失った。

黒澤瑠璃の顔をした怪人の動機は分からない。だがこの異常気象が無関係とは思えない。そして——

「ライブか」

——廃校を阻止しようと開催する、千歌たちの動向だ。

黒澤家と小原家は、沼津市と共に内浦を再開発しようとしている。そこに浦の星女学院が邪魔なのは、ダイヤが語った通りだ。

さらに、ラズリの発言が正しければ、フォームを盗んだ存在は彼女だけではない。怪人と、千歌たちの他に、なにかを企んでいる存在が別にいる。それが内浦を牛耳る企業たちだとしたら——

（——関係ない）

頭を振る。

（この海はもう、私たちのものじゃない）

受話器を戻した時、レジカウンターの上に置いた、白い石が目に残った。

それを手に取る。

父がヨーロッパの土産で買ってきた、多孔質の鉱物。

千歌に渡し、ラズリに奪われ、そしてここにある石。

軽く、しなやかで、水に濡れると柔らかくなる物質。

海の泡メルシャウムの石。

象徴的だ。

私たちの夢も、父の夢も、泡となって消えた。

もはや誰のものでもない、この海に。

「そうでしょ」

レジの奥に目を向ける。

陳列棚の写真立てにいたる松浦鏡一は、最期の瞬間、なにを考えていたのだろうか。

*

「皆さん、お待たせしました！ もう間もなく開演の時間です！」

舞台袖から緞帳の前に出てきた小口田よしみは、一人スポットライトを浴び、体育館のアリーナに大きく手を振った。

「本日のパフォーマーは、我らが私立浦の星女学院高校にようやく誕生したスクールアイドル！ 名前はまだありません！」

フロアシートに並べたパイプ椅子から、パラパラと笑いが起こる。

「夢は大きくラブライブ！優勝、でもその前に部活動への昇格が必須

となります！ そのファーストステップが今日のライブなのです！」
緞帳と舞台の間の狭いスペースに立ち、ライトの熱で汗を流しながら、記憶した台詞をハンドマイクにまくし立てる。一昨日の生配信で失敗したお陰で、それほど緊張していない。

だからよしみには、照明がついておらず、悪天候もあつて薄暗い即席のライブ会場を、観察する余裕があった。

一〇人。

八〇〇脚用意したパイプ椅子の、一パーセントにさえ満たない。

(マジか……)

あまつさえ、そのうち二人がルビィと花丸、残りが昨日設営を手伝ってくれた浦女生とあれば、スクールアイドルで学校の存在を外部にアピールする計画など夢のまた夢だ、と証明してしまったようなものだ。

しかしそれとは違う思いを、よしみは抱いていた。

(考朔くん、来てくれなかったんだ)

自分が変わったところを幼馴染みに見せたくて、MC司会を買って出たのに。

「よしみ、準備オツケーだよ」

右耳にはめたイヤフォンから、放送室のむつの声がした。三人のスタンバイが完了したのだ。

(しっかりしろ！ 今は千歌たちの手伝いが第一義！)

よしみは笑顔を維持したまま、唇を舐める。

「結成から僅か一箇月のユニットですが、そんな但し書きは不要！
最高のパフォーマンスをお届けします！」

一呼吸。

次の台詞を言い終われば、幕が開く。

この光景を、千歌たちに見せることになる。

自分のように不純な動機ではない、真剣にこの学校のことを考える
あの子たちは、耐えられるのか。

無人のファーストライブでさえ伝説にしてみました、sの強さが、あの子たちにあるのか。

信じるしかない。

「それでは開演です！ 《浦の星女学院スクールアイドル同好会》！

大きな拍手でお迎えください！」

よしみが舞台袖に引き、するすると緞帳が上がっていく。

粒は少ないが大きな拍手に、口笛が重なった。

もう後戻りはできない。

*

軽快なエレキギターがイヤフォンから流れ、小さな画面上で並んだ三人が手を打ち合わせ始める。そのリズムに観客のものらしき手拍子が乗った頃、リズム隊が曲に輪郭を与え、次いで、最初の言葉が放たれた。

配信画面の上部に表示された『決めたよHand in Hand』が曲名のようだ。始まりそれで始まらない不安な気持ちを拭おうとする歌詞は、まさに今の彼女らの感情そのものだろう。タイトルの通り「手」を意識した振りは緩急の利かせ方が上手いし、千歌を含む二人の長い髪の毛の動きはダイナミックだ。音ノ木坂からの転校生が書いたといわれる曲はノリのいいアップテンポで、観客との一体感をもたらす手拍子も合わせて、盛り上がる要素が過不足なく盛り込まれた、ライブの一曲目に相応しい。スリーピース編成の基礎のキの字に達したばかりの拙い編曲にも、目をつぶってやりたくなる。

だが、パフォーマンス外の声は僅かだ。固定カメラは客席を映さないが、おそらく二〇人も入っていないだろう。それは、舞台に現れた千歌が、小さく息を呑んだことから明らかだった。

「なにが大丈夫よ」

高海美渡は感情の籠らない声で呟いた。

静岡OGIの医務室で目覚めて最初に思ったのは、妹が出演するライブのことだった。だから産業医にベッドでの待機を命じられた美渡は、誰かが来る前にチェックしておこうと、シザーケースを改造したウエストポーチに手を伸ばした。

母に部費をねだる時、あれだけ大見得を切って宣言したのだ。

その勝算の結果を確認しなかったのだ。

「だから言ったじゃない」

想像通りだった。

枕を背中にベッドに腰かけた美渡が見たのは、ただ必死な三人の姿だけだった。

SNSでは配信URLが七〇〇回以上拡散される程度には話題になっているし、画面を流れるコメントも賑わっているが、それは「学校を救う」という千歌の目的とは合致しない。少なくとも、短期的には。

「もういいや……」

イヤフォンを耳から抜いて、配信アプリを閉じようとした時、ノックの音がした。

「どうぞ」

「失礼します」

ドアを開けて入ってきたのは、顔を強張らせた主任だった。彼はベッドから起き上がっていた美渡を見て、目を見開いた。

「もう大丈夫なんですか？」

「え、あ……」

美渡は答えに詰まる。

「高海さん？ まだ痛みますか？」

「あ、いえ、大——丈夫です」

呪いの言葉を口から押し出し、笑顔を作ってみせる。

「ごめんなさい、なんかグツスリ寝ちゃって。あの、脱臼も治ってるんで、心配しないでください」

美渡が無造作に左腕を動かすと、主任は苦笑してボサボサの頭をかいたが、改めて頭を下げた。

「申し訳ございません。本来はソフトが出来たところで、高海さんの役割は終わっていたのですが」

「しやうがないですよ、鞠莉さんに一番近いの、私なんですから」

《シャイニーMark III》開発の無期延期を撤回させるため、可及的速やかに《ストローク》の実績を上げなければならぬ。しかし危険性の高い飛行機能であるために、社長兼CEO令嬢鞠莉に装着させるこ

とはできず、いつものテスト要員も準備できず、ゆえの代理装着であり。

結果が、この医務室だった。

「それよりMark Iは？」

「機体としては無事です。ですが、《ストローク》のテストはこれ以上進められない以上、計画の凍結は免れないでしょう」

主任は冷静な口調を保っていたが、笑顔は暗かった。

「仮面ライダーは、これで終わりです？」

「ムーフォームを利用しない、本来の意味での《人体ラギダイズシステム》事業として、継続される可能性があります。リストラは免れないでしょうが」

「ですよー。せっかく楽しくなってきたのになあ」

美渡は顎を上げた。テストを主導した主任とスーツを着た美渡が大きな責任を負うのは、容易に想像できたからだ。

「ホテルオハラのコシエルジュに戻されるだけならいいけど。つて、もうOGI系の就職は無理かな」

「高海さん、それは？」

独り言を呟く美渡を無視し、主任は電話に目を向けた。

そこにはまだ、三人の少女が踊るステージが配信されていた。

「あ、ごめんなさい。就業時間中に」

「いえ、この間の、えっと……なんでしたっけ」

「スクールアイドルです」

主任が興味を示したので、美渡は電話の画面を彼に向けてイヤフォンのジャックを抜いた。

音楽が流れ出し、主任が苦い顔をする。

「なんと言っているのか分かりません」

ワイヤレスのヘッドセットマイクの性能がいいのか歌はよく通っているが、主任の言う通り、放送室から流しているらしき伴奏のノイズと、電話筐体のスピーカーの質もあって、言葉はろくに聞こえなかった。

それでも女子高生の歓声と照明の中で踊る三人に、主任も事故後の

緊張から解放されたか、やっと笑顔になった。

「楽しんでますね、三人とも」

それは美渡も感じている。

あの千歌が、楽しくないわけがないだろう。

自分たちでスクールアイドルを立ち上げ、パフォーマンスを作り上げ、発表するところまでやってきたのだから。

だが、部活動に相応しい実績を上げて、同好会を脱せられるかは、また別の問題だ。

主任や美渡たちの努力も虚しく、ストロークのテストが失敗に終わったように。

『楽しいだけじゃない、試されるだろう』

美渡が呟いたフレーズに、主任は微かに首を傾けた。

*

『決めたよHand in Hand』は、観客全員が初めて聞く曲だった。

だが馳せ参じた浦女生の何人かはアイドル楽曲のコール文法を見出している人——いわゆるアイドルオタクと呼ばれる人たちのように、二番が始まる時には不完全ながらもコールが成立しつつあった。

黒澤ルビイもそうだった。

最初は、念のためにと手提げ袋に入れてきたペンライトを小さく振っていたのに、文字通り手を引っ張られていくような期待感に溢れた歌詞に、自然と身体が動き出してしまうダンスチューンに、気付けば照れや恥ずかしさなど忘れて立ち上がり、声を張り上げていた。

「ルビイちゃん、夢中ずら」

隣に座る花丸に答える余裕もない。

観客は二〇人以上に増えた。体育着や道着を着たまま体育館を訪れた浦女生たちは、最初こそ後ろの方の席で慎ましく聞いていたが、次第にルビイたちの傍までやってきて、控え目ながらも声を発し始めた。

数名が持ってきたペンライトの光が、橙色、水色、白色の三色にひらめき、曇天の闇を切り裂く。

体育館の窓ガラスを揺する風の音も、屋根を叩き始めた雨の音も、今は聞こえない。

信じられない。

この言葉を紡ぎ、このダンスを刻み、この音楽を描いたのが、たった一つ年上の、しかもルビイの知り合いたちだなんて。

どれだけの勇気を出せば、こんなことができるんだろう。

「はい、聞いていただいた曲は、『決めたよHand in Hand』でした！」

MCのよしみが出てきて、曲の終わりに気付いた。

声援が飛び、MCと三人が曲の説明をする中、ルビイはパイプ椅子にもたれ込む。

ペンライトの電源を切つても、まだ光の渦にいるみたい。

鼓動が収まらない。

A—RISEに魅了された時とも、μ'sのラストライブの時とも、根本的に違う気持ちだが、身体を内側から叩いている。

と、笑顔でこちらを見ている花丸に気付いた。

「ごめんね、マルちゃん。うるさかったよね」

自分の行動を思い返して手提げ袋に顔をうずめるが、幼馴染みは満面の笑みで首を振った。

「二曲目、少し待ってください！」

MCを終えたステージ上の先輩たちが、指示があつたか、舞台袖を見ながら告げた。

「すごいよね、あの衣装」

「既製品じゃないんでしょう？」

「部員の手作りだって、ヨハネ先輩言ってたよ」

そんな会話が聞こえて、ルビイは改めて三人を見上げる。

歌と踊りが消えたステージでスポットライトに際立つのは、演者としての三人、そして衣装だ。

「褒められてるよ、ルビイちゃん」

花丸がルビイの肩に寄りかかるように囁いてきて、ルビイはこそばゆくなる。

たしかに、衣装をデザインして、手を動かして形にしたのは、スクールアイドル同好会のみんなだ。

でも、デザインをクリンナップして、型紙の設計から裁縫の基礎まで教えたのは、他でもない、このルビイなのだ。

その事実が誇らしくて、裁縫道具や型紙本を入れた手提げ袋を抱き締める。

大声で誰かに教えたくなる。

ルビイがいなければ、あの衣装はあそこになかったんだ、と。

「そっか、だからスクールアイドルなんだ」

私たちが作る、私たちのアイドル。

私たちのもの。

その概念が、実感として染み込んできた。

「次はお団子に挑戦しようかな」

ルビイの独り言に、花丸はクスクスと笑った。

当のお団子を頭に載せた友人は、二人のやりとりなど露知らず、何パターンもの堕天使ポーズを決めていた。

第一二話：誰もが一つ持つてる、勇気の欠片 ― 3

「雨……かな」

高海美渡の眩きを裏付けるように、音楽が消えた後に残ったノイズが、ばたばたばた、と激しくなってきた。間を開けずに画面にブロックノイズが生まれ、MCの音声途切れがちになる。

その時、二人の電話が警報を鳴らした。

「またフォーメア？」

「いえ、大雨と暴風、あと波浪警報ですね」

なら珍しいことではない。美渡は警報の通知を消して、アプリでリアルタイム天気図を開き――

「は？」

――地声が漏れた。

伊豆半島の覆う台風のような雲の渦が、その中心部分が狙い澄ましたかのように内浦湾にあったからだ。

「なにこれ……」

昨日の天気予報では、前線はもっと西にあつて、今日は一日晴天だったはず。

時系列を遡って雲の動きを見ると、未明に内浦を中心に発生した低気圧が、ここ一時間で急激に発達していったのが分かる。

こんなことが起こるのか？

電話を配信画面に戻すと、回線が切り替わったか、映像も音も見られる品質に戻っていた。

千歌は舞台袖の誰かと話してるようだが、声は聞こえない。中止を検討しているのだろうか。千歌は真剣な面持ちで、曜は不安そうに自分の身体を抱き、見覚えのないもう一人のお団子頭は場？ぎのためか謎ポーズを披露している。

聞こえるのは、強くなる雨音と、女子高生の心配そうなざわめきだけ。

それが美渡の心に、じわじわと不安を染み込ませていく。

「どうなるんだろ」

「大丈夫でしょう。暴風は内浦から大瀬崎にかけてですし、この規模なら前例はいくらでもあります」

「大丈夫？」

美渡は顔を上げる。

窓のブラインドに指をかけた主任が、小雨の空を背景にこちらを見ている。

「では、私はこれで失礼します。高海さんは大丈夫そうですが、念のため、ゆっくり休んでいて下さい」

社交的な笑顔で部屋を出ていく主任を、美渡は口を開けて見送る。大丈夫だった？

私の妹が渦中にいるのには？

「皆さん！ 聞いてください！」

画面の中の千歌が、ワイヤレスマイクを押さえて言った。

「現在ここ内浦に、爆弾低気圧による大雨、暴風、波浪警報が出ています！ でも心配しないでください！ この学校が指定避難場所です！ 体育館から出なければ安全です！」

ノイズ混じりにそういうと、曜ともう一人の女生徒に視線を向け、再度客席の方を見た。

「父兄の方々や近隣の方々も避難されてきましたので、ライブは一時中断とします！」

観客の暖かなブーイングと拍手の中、

「みんな待ってて！ きつと戻ってくるから！」

と三人は舞台袖に引いていった。

スポットライトが消え、照明が一つずつ落とされ。

やがて様々な声をかき消すように、大雨がスピーカーを支配する。

「そりゃ、『大丈夫』なんて言えないよね」

美渡はベッドに腰を下ろしたまま、一人笑った。

千歌はちゃんと理解している。

この状況が自分たちの範疇を超えていると。

嵐の話ではない。

千歌だつて、志満の挑戦の結果を、見ていた。

このライブがどう終わるかなんて、分かっているのだ。

だから、美渡は応援なんてしたくない。

「しようがないじゃない」

これ以上、姉妹の涙は見たくない。

*

「果南、こっちは大丈夫だ」

エンジンを切った《ジュール丸》は錨で繋ぎとめられ、二メートル近いうねる波をたゆたっている。松浦節三はその操舵席で、淡島居住区の孫娘に呼びかけた。

海上ネットワークで繋がったタブレット端末には、こちらに背を向けて壁際に立つ果南が映っている。顔は見えない。風を吸収する複合素材の外壁が振動し、その度に、果南の高い位置でまとめた髪が微かに宙を撫でるだけだ。

港外どころか湾外まで退避した節三の予測は正しかった。

低気圧は午後の予報も覆して発達を続け、沼津全体を雨雲で覆い尽くした。そればかりか、中心部の内浦湾は局所的な暴風雨となり、外から見たそれはまるで小さな台風のように見えた。圏内の海上風速は二〇メートル以上あるだろう。

とはいえ、この程度の低気圧なら、数年に一度のレベルだ。局所的ゆえに被害範囲は広くならないだろうし、中心部に近い淡島居住区も戦前の軍施設を活用したもので、強度の問題はない。

「果南、いいか、絶対に外に出るな。絶対だぞ」

だが節三は強調した。今回の低気圧は、事前の気圧配置を無視した急激な発達に、周囲の気の流れに逆らって留まり続ける中心気圧と、予断を許さないからだ。

操舵席に固定された端末の中で、しかし、果南は答えない。

閉めた雨戸が戸袋や窓枠とぶつかる音、木々が互いをこする音、波が岩肌を洗う音、それらが遠近問わずひっきりなしに聞こえてくる中で、うなじを見せる果南の意志は、頷くジェスチャーにしかない。

無理もない、と節三は思う。

五年前、まさに今回のような局所的低気圧で、果南は父を失ったのだから。

「よく聞け、果南。重寺港の船も何隻か一緒だ。暴風域がこれ以上拡大しなければ、余所の港に向かう。たぶん静浦漁港に――」

「――セツさん！」

無線のスピーカーが叫んだ。漁師時代に懇意にしていた友人の息子だ。

会話を遮られた節三は、刈り上げた頭をかきながらマイクを掴む。

「どうした」

「なんかいるー！」

返答するより早く、異変に気付いた。

海面のうねりが、クルーザーの花緑青色の船底が足裏に伝えてくる波の周期が、変化したのだ。

操舵席から周囲を見ると、同じように港外退避にきた漁猟船やOG Iグループの作業船が、不規則な波に揺れている。

その中の一艘、中型の延縄漁船のデッキに立つ浅黒い漁師が、無線機を片手に内浦湾を指差していた。

「湾内ですー！」

節三は双眼鏡を取り出し、傷だらけの前面窓越しに海に向ける。

「なんだ……？」

薄暗がりの暴風域で、なにかが蠢いていた。

海面を裂いて渦巻く雨中に躍り出たちっぽけなシルエット。

その形状を、節三はOG I発表の情報で知っていた。

口が開いてくるのをとめられない。

湾から一キロ以上離れた避難海域から見えるということは、小さく見積もっても全高五メートルはあるということ。

そして、それが雲を泳ぎ、空に昇っていくのだ。

「怪人なのか……？」

濃い雲に飛び込んで見えなくなる存在を見届け、節三はかすれた声を漏らした。

「あれがフォーメアだっていうんですか！」

「そんなもん、小原のヤツらの自演だつて言ってるだろ！」

「でも、みんな見たでしょ！」

「こんな距離で判断できるか！」

スピーカーの向こうで、誰かの言い合いが始まる。

「どつちにしろ、すぐ仮面ライダーが片付けてくれますよ！」

「バカ言うな！ それこそ小原の自演だ！」

「雨に映してんだよ！ 島からプロジェクターが——」

——その仮説は途切れる。

輝く線が、空から海に振り下ろされ。

暴風が引き裂かれ、雲が吹き払われ。

日光を反射して緑青の輝きをまとったタツノオトシゴが現れたからだ。

「カヴァルツチャー・フォーメア……」

眩きを否定する声は、もうなかった。

天から舞い降りたそれは、台風から誕生した龍のように白雲をたなびかせ——

「——こつちに来るぞ！」

誰かが半笑いで叫んだ。

「エンジン始動！ 換気は待つな！ 海域を離脱しろ！」

思わず指示してから、節三は自分がもう船団長でないことを思い出す。

「了解、エンジン始動！」

「エンジン始動！」

だが海域にまとまっていた漁獵船の多くは、節三の号令で行動を開始した。目前で進行する状況を自ら理解するより、聞き慣れた声に従う方が容易かったのだろう。

方々で船が息を吹き返し、船員が動き始める。

その中で節三は、カヴァルツチャーと名付けられたフォーメアに、小原の情報とは違う点を見て取った。

鋼鉄の顎と腹で、直径数メートルはあろう巨大な球体を挟んでいるのだ。

まるで龍が掴んでいる如意宝珠のように、透明に透き通った球体を。

カヴァルツチャーは前傾していた身体を一度逸らすと、勢いよく頭を振り下ろし――

「まさか!」

――その球体を海面に叩きつけた。

「東南東から高波くるぞ! 各船、走錨に警戒しろ!」

海が凹み、直後、水柱が立ち上がる。

カヴァルツチャーの巨体を悠々と飲み込む飛沫が水面に落ち、海が白く泡立つ。

節三は双眼鏡を構えたまま揚錨機のリモコンに触れ、しかし錨綱を伸ばすか巻き上げるか迷う。

泡のように水面に浮き上がってきた球体に向かって、海水が反時計回りの渦を巻いて引き寄せられていくのが見えたからだ。

波が来るのか、波が引くのか。

波に耐えるべきか、波から逃れるべきか。

判断できない。

いや、それよりも――

「まさか、あれも?」

――海面が落ち窪んでいるのは、沈む対流が生まれているからか?

あの球体が、海水から急速に熱を奪うことで? なら、ここを包む低気圧は?

節三の疑問は、中斷を余儀なくされる。

本当の衝撃が来たからだ。

海面から顔を出したカヴァルツチャーが、球体を見下ろす金属のタツノオトシゴが、輝く線を放ったのだ。

球体が裂け。

海面が爆ぜる。

双眼鏡を外した節三は、わずか一キロ先の、数ミリの水しぶきを見る。

数秒後、海面を微かに波立てて届いた、遠雷のような音を聞く。

まるで現実感がない。

子供の頃に父に連れられて見た『ゴジラ』のようだ。

産まれて七〇年以上暮らしてきた街が、怪獣映画に登場するミニチュアに見える。

穏やかな海面が、目の前の光景を自分の世界と隔絶された景色のように感じさせる。

だが違う。

穏やかな海の上で、心拍数が上がっていく。

「揚錨急げ！ 各船、湾に正対して全速後進！」

カヴァアルツチャーの影響が到達するのは、数分後になるだろう。それは節三たちの船舶に余裕があることを意味しない。すべてのものが水と重力の緩やかな伝播でもたらされる海上においては、数分後の危機を目前と感じられる時間間隔が求められる。

だが、あの怪人はそうではない。

海上という節三の日常を、文字通り一息でひっくり返してしまう非常日常。

そんな波を、どう乗り越えればいい？

「果南！ 家から出るな！ いいな！」

そう端末に叫ぶのが精いっぱいだった。

信号の乱れが激しくなった映像の中で、孫娘はいまだに背を向けたまま。

その顔が微かにこちらを見て、なにかを呟くように顎が動いた時、映像が途切れた。

「果南！」

叫び、しかし、意識を切り替える。

今は自分の船に集中すべきだ。

『ゴジラ』の僅か四年後、節三の父はこの海に消えた。そして、その五三年後には息子も。

三代に渡り海で死ぬジンクスなど、果南に残せるわけがない。

*

鋼鉄製の引き戸が開くと、女子高生のざわめきが聞こえてきた。

体育館の昇降口に集まってきた人々は、それにひるんだようだが、

「傘と合羽は靴と一緒に置いていってください」

「中に椅子がありますので、順次座っていってください」

「フロアシート以外の場所は踏まないでください」

などと呼びかける教師たちに従い、次々と中へ入っていった。

彼らはサイレンと共に発された避難勧告に従い、指定避難場所の浦の星女学院にやってきた近隣の住民たちだ。父兄の顔も見えるが、ほとんどは部外者だ。長井崎岬の丘に集まってきた彼らは、勧告こそされたものの、ここまでの風雨になると思っていなかったか、半数が壊れた傘を手に、半数がそれを捨てて走ってくる。

ライブに集まった生徒が一〇人、避難者が学生約二〇人に一般人約一三〇人、教会から出てきた老婦が七人。

それらが体育館に入ったのを確認すると、背後を振り返る。

内浦湾を覆う灰色の空から垂れ下がっていた雲は、高圧縮の水流に分断され、勢力を弱めていた。

代わりに、淡島の向こう側で爆発した水飛沫が、高波となって内浦湾に押し寄せてくる。

その中心にいるのは、見る者の遠近感を狂わせる、金属光沢を放つタツノオトシゴ。

「やるじゃない、龍駒。もう《デプレッション・フォーメア》を倒しちゃうなんて」

異常な低気圧を引き起こした直径五メートルの球体状の怪人は、カヴァルツチャー・フォーメアによって海面に押さえつけられ、外殻を破壊されつつある。龍駒が乗り込み、ムーフォームを摘出するのは時間の問題だ。

「それじゃ、第二ラウンド開始ね」

ラズリ・フォーメアは楽しそうに唇を歪ませると、教会の尖塔から飛び降りた。

*

ベリベリ、ぱんぱん、と不格好なエンジン音を鳴らして、四台の改造バイクが海沿いの道を北上する。鷹揚と表現していいほど遅いス

ピードで蛇行し、四台中二台が装備する改造シーシーバーから、二人乗りした少女がこちらを煽ってくる辺り、共同危険型暴走族のお手本のような走りっぷりだ。

(時代錯誤なヤツらだな)

二年前にも同じことを考えた、と石田健はスクーターのハンドルを操りながら思う。

《クレイジー・フィッシュ》は、古い言い方をすれば『レディース』だ。七〇年代に《静岡県立沼津西高等学校》の在校生とOGから誕生し、九〇年代から現代に至るまでも細々と活動を続けてきた暴走族だった。

去年の交通事故で総長が怪我を負い、自然解散したと思われたのだが――

(――再結集は必然か。浦女にスクドルが誕生するなら)

フェイスガードに当たる雨粒が、大きく多くなる。

イヤな雨だ。

スクーターの小径タイヤが伝える路面に意識を向けたまま、ハンドルのコンソールで電話を操作する。

「ケン、そっちの《クラゲ》はどうだ」

フルフェイスヘルメットの中で呟くと、イヤフォンに音が返る。

「こっちは問題ないよ、総長」

「総長はやめろ。ジユウは」

「みかん山も動きはなしだ、総長」

「総長はやめろ」

似たような二人の応答に、健は笑った。

「こっちも動きはない。引き続き頼む」

健が率いる《ローズ・アジエンダム》は、三組に分かれて行動していた。長井崎岬から大瀬崎の方へ向かった連中を追う組と、長井崎岬から沼津へ向かった連中を追う組^健、その隙に浦の星女学院にやってくる連中を警戒する組だ。

対外的には違法競走型暴走族――いわゆる“走り屋”と定義されるレディースの《薔薇》は、マシンスペックで劣る《クラゲ》を悠々

と捉え続けて走る。本気で抗争するつもりはなく、《薔薇》を浦の星女学院から引き離すのが目的と推測する。

(いや、俺を、か)

江浦湾の縁を巡る県道一七号線から、信号無視する先行車を追って国道四一四号線に入り、すぐに多比第二トンネルの入口をくぐる。

見通しのいいトンネルを、蛇行するテールランプの軌跡を目で追いながら走っていると、背後からエンジン音が近付いてきた。

「挟み撃ちね」

舌打ち混じりに呟き、しかし、違和感を覚えた。

エンジン音が妙に濁った響きを伴い、不気味に反響してくるのだ。しかも煽るにしては速度が――

「――ぬッ！」

光る線が通りすぎた直後、風圧に弾かれた。

バイクが大きく傾き、咄嗟に厚底ローファアで地面を蹴る。

体勢を立て直した時、そのシルエットはトンネルの出口の光に染み込み。

「おい！ 殺す気か！」

叫んだ時、女子高生の甲高い叫び声と共に、《クラゲ》たちのテールランプが不規則に揺れた。

うち一台が急ブレーキをかけ、スキール音を立てて横転。

「クソ！」

投げ出されたクラゲの一員を、濡れたタイヤで注意深く回避する。

通りすぎ、肩越しに一瞥するが、彼女は橙色のライトの下でなんとか立ち上がっていた。

(仲間じゃないのか!?)

健はアクセルを開き、トンネルを飛び出す。

一時でも対向車線にはみ出した事実には、遅れて冷や汗が噴き出す。

光に慣れた目に、多比の街を貫く片側一車線の道路を走る、五台のバイクが見えた。四台はクレイジー・フィッシュの改造バイク。だが、その四台を先導するもう一台は――

「クルーザーか？」

——曇天に銀色の輝きを放つ、長くどっしりとした車体。マットな黒と光沢のある青の部分をこちらに見せてスピードを上げる。クラゲの改造バイクはやかましいエンジン音をマフラーから吐き出し、三台がそれを追ってやはりスピードを上げた。

「馬鹿野郎！ お前らの総長を忘れたのか！」

健の叫びは届くはずもない。

雨の路面だ、誰がどこで事故を起こしてもおかしくないのに。

「ケン！ 救急車を呼べ！」

「そ、総長!? なにがあつたの!?!」

取り乱した声がイヤフォンに届く。

「多比第二トンネルでバイクの単独事故だ！ とにかく呼べ！」

「分かつた！」

言っている間に、タンDEMシートの少女たちが細長いなにかを取り出した。

クルーザーらしきバイクに振り上げたのは、竹刀だ。

だがその時代錯誤の異物は、空を切るまでもなかった。

クルーザーが急制動をかけ、少女たちに体当たりをしかけたのだ。

二人乗りの一台が足を滑らせ、それに引つかかった一台と共に、沿線のコンビニの駐車場に投げされる。

残された一台は、一瞬エンジン音を高めたが、すぐにブレーキをかけた。賢明な判断だ。

「ケン、追加だ。二台三人のバイク事故だ」

「なにしてるの、総長！ 手は出さないって言ったじゃん！」

「俺じゃない！ あいつが——」

言いかけ、目を見開く。

多比第一トンネルの前でテールスライドするそれは、六つのタイヤを有する、奇妙な物体だった。

健はそれに見覚えがあつた。

三台のバイクが連結して作られたフォルムに。

「——パイルアップ！」

いや、前後から押し潰された、緑色の中型ストリートファイターに。

心臓が驚掴みされたような気分。

タイヤが撃ち出された。

直後、健のスクーターの前輪がひしゃげ、宙に投げ出され。

またか、と間延びした時間間隔の中で思った。

*

その女性は、青いラインが装飾的に入った白いアップパツパに同色のケープを羽織り、まっすぐ切り揃えた髪を揺らして、穏やかに微笑んでいた。

避難していた体育館の人々は、近寄ろうとする人、それを引き留める人、不安そうに会話をする人と、対応を決めかねている。

だが、来訪者が黒澤宗家の御寮人だと確信している人は、一人としていないのではないか。

淡島の一件で顔情報が解禁され、各メディアで公開されてしまったのだから。

「お父さん？ ……うん、ルビイです。お母さん、そこにいる？ ……ううん、なんでもないんだ。それじゃ」

「やっぱり？」

「うん」

最前列、つまり入口から一番遠い客席に座る黒澤ルビイは、青ざめた顔で花丸に首肯した。

父の琳太郎は今、この学校を目指すリムジンで通行止めに引っかかり、往生しているそうだ。もちろん、そこには瑠璃もいる。

だからルビイの母の顔をしたあの人物は、《ラズリ・フォーメア》で間違いない。

でも、なぜ？

ラズリの存在は周知の事実なのに、なぜ、わざわざあの顔でくる？
ラズリは頭だって変形できるはずなのに。

そんなことを考えていたから、

「ここにいて、ルビイちゃん」

花丸が立ち上がったのに気付くのが遅れた。

「へ？ ま、マルちゃん!？」

ルビイが顔を向けた時には、花丸は舞台下手側から体育館後方へと走っていくところだった。

その向こうに、壁際でスタンバイしていたルビイの専属ボディガードが、襟元のマイクになにかを話しているのが見える。

まさか、みんな、戦う気なの？

「ねえ、ルビイ、あれってお母さんじゃないんでしょ？」

「この前、同好会の人が襲われてた、ラズリってヤツ？」

後ろの席に座っていた先輩たちが、振り返ってルビイに聞いた。

「そ、そうですけど——」

「——ごきげんよう」

ルビイはビクリと肩を振わす。

「光栄ですわ。不肖の娘ルビイも手を貸したスクールアイドルのライブに、こんなに大勢集まってく دادさったなんて」

「あなたが光栄に思う謂れはないよ！」

スピーカーからの声に振り返ると、マイクを手にした曜が、ステージからラズリを指差していた。

「いますぐ出ていかないと、仮面ライダーが黙ってないよ！」

「オラもいますー！」

付け加えたのは、客席の向こうに立った花丸だ。

四人の黒服も、闖入者から観客を護るように配置された。

間に挟まれるかっこうの観客や避難者は、その構図にざわめく。

「この嵐もあなたの仕業なんでしょ？ 残念だけど、もう龍駒が終わらせちゃうから！」

曜が手にした電話の画面は小さくて見えなかったが、言われてみれば、屋根と窓を叩く風雨は弱まった気がする。

嵐はこのまま去るの？

「もう少し粘ると思ったんだけどな、デプレッションちゃん」
ラズリはクスクスと笑う。

その音が、なぜかよく響く。

「なにがおかしいの！」

曜の言葉に、ラズリは照明の落とされた天井を見上げた。

「ほんと、たくさんの存在に護られた街よね、内浦^こは。小原家、黒澤家、仮面ライダー。シャイニー？ ロリポリちゃんも。どんな悪者が夜をもたらししても、必ず誰かが日を照らしてくれる」

そして、羽織ったケープから手を見せる。

「今回も？」

その指を一つ、立てる。

「さ、見せてちょうだい。あなたたちの夜が、明けるかどうか」

直後、数十体の水死体が、入口からまろび入ってきた。

ライブの開場に殺到したファンのように。

*

貧乏揺すりがとまらない。

電話に映っているのは、さつきまで三人の女子高生が踊っていたステージだ。浦の星女学院スクールアイドル同好会の初ライブを画面いっぱいに捉えるには、最高のカメラ位置ではある。

だが松和考朔が今見たいのは、ステージで体育館の入口に向かってマイクで叫んでいる幼馴染みではない。彼女の声の行き先だ。

そこに誰かがいるはずなのだ。

「落ち着かねーよ、マツ」

友人の腕が伸び、神経質に上下する膝を掴まれた。

静岡県立沼津西高等学校の男子生徒を乗せたバスは、海岸通りの真ん中、《三の浦総合案内所》のバス停で停車していた。

東海バスが運行する西浦線は、沼津駅から大瀬崎に向かう海岸線沿いを路線とするが、そのルートは内浦湾上の暴風域から外れていたのだ。風雨が強くなり始めたあともしばらくは平常運行を続けていた。だがカヴァアルツチャー・フォーメアが起こした高波の影響で、西浦線は内浦湾の前後で折り返し運転となり、ちようど湾の海岸通りを走っていた考朔のバスは、風雨が収まるまで一時停車してしまったのだ。

だから考朔やそのクラスメイトは、誰かが撮影しているであろう体育館への闖入者の映像を探して、配信サイトやSNSを見ていたのだが。

(埒が明かない)

考朔はバッグを掴んで立ち上がると、降車ボタンを押した。

「マツ、おい」

「俺、走るわ」

元々バスは長井崎岬を回らないので、二つ先のバス停で降りたら走るつもりだった。ここからでも大差はない。

空気の漏れる音と共に扉が開き、考朔は友人を押し出してシートの中奥から出ようとする。

だが隣のクラスメイトは動かず、

「焦んなよ、もう間に合わないんだし」

「どうせオレたちに追い抜かれるだろ」

と考朔の腕を引っ張って座らせようとしてくる。

「どうします？ 降りられますか？」

運転手の言葉に考朔は少し考え、結局「いえ」と席についた。

「すぐ動くよ」

クラスメイトの予測は当たりそうだった。

嵐はすでに沈静化しつつある。風の音はするが雨はパラパラになり、海岸に沿って係留されているボートやクルーザーの揺れも、高波の残滓を食らっていた五分前との差が分かるほどに小さい。千切れていく灰色の雲も、小さな台風の形に戻ろうとはしなかった。

それらが、二度目の遭遇である鋼鉄のタツノオトシゴが、直径五〇六メートルはありそうな球体に何度も水のレーザーを撃ち込んでいくことと、無関係とは思えなかった。

あの巨大戦が一段落すれば、バスは動き出す。そうすれば考朔たちは、電話の中で展開される世界に行ける。それまで辛抱すべきだ。

「あった！ おい、こっこー」

と、クラスメイトの一人が自分の電話を指差した。考朔は前の座席のそれを覗き込む。

「ラズリー！」

体育館にパイプ椅子で作った客席から、ステージの反対側——体育館入口を捉えた映像に映っているのは、つい一昨日出会った人の顔を持つ怪人。

そして、その背後で蠢く、水死体のような存在。

「ゾンビまで!？」

女子高生や大人たちの悲鳴が上がった。

特設サイトが静止画しか公開していなかった、ピカソの絵のように抽象化された《ゾンビ・フォーメア》が、我先にと入ってきていたのだ。

映像では判然としないが、その数は続々と増え、一〇体や二〇体で

はすまなそうだ。フロアシートの敷かれたアリーナを歩くそれは、名前の通りホラー映画のゾンビに似て、ステージ側にいる生者へと緩慢な動作で近付いていく。

つまり、カメラの方に。

「曜」

自分の電話に目を向けた時、とーん、と雑音が響いた。

曜がステージに座り込んだ。さっきまで強気な発言を増幅していたハンドマイクが、異音を立ててステージを転がっていく。

「ヤバイ」

眩くが、考朔になにができるわけでもない。

カヴァルツチャーがああ球体を破壊してくれないことには――

「あれ？」

――電話から湾に目を移した考朔は、小さく声を上げた。

カヴァルツチャーによって沈められていた球体が、ぷかり、と海面に浮かんでおり。

透明だと思っていたその表面が、絹のように白い艶を帯び始め。

そこを中心に、真っ白な空気が噴き出したからだ。

「おいおい」

それは飛行機の翼端に発生する飛行機雲のようであり、それが急速に渦を巻き始め、つまり――

「《デプレッション^{低気圧}》って、そういうこと？」

――嵐が戻ってきた。

見る間に空に分厚い雲が広がり、空が覆われ、バスの天井を雨が殴り付け始める。

台風のような雲が海に向かって垂れ込み、カヴァルツチャーに向かって発達していく。

その渦に向かい、タツノオトシゴの口からレーザーを放たれた。

しかし、「レーザー」とはいえ所詮は高圧の水、強力な回転で捻じ曲げられ、水飛沫と飛び散り。

お返しとばかりに、雲に巻き込まれたタツノオトシゴは、空を舞った。

……こちらに向かつて。

「おいおいおいおい！」

「発進します！ お掴まり下さい！」

停止していたバスのエンジンが震える。

その間にも、何トンか何十トンか、緑色の金属光沢を放つ巨大な物体が、夢の中のようにゆっくりと回転しながら近付いてくる。

「おい、あれ！」

その巨体を、友人の一人が指を差した。

「なんだよ！」

「あれだよ！」

「あれってなに！」

クラスメイトが言い合い、考朔には見えた。

カヴァルツチャーから、小さななにかが分離したのが。

それが弧を描いて海岸通りの上空を通過し、空き家ばかりの長浜の街へ落下するのを、リアウインドウ越しに見た。

「仮面ライダー？」

だから、クラスメイトたちの騒ぎに気付くのが遅れた。

「マツ！ ヤバい！」

「え？」

「掴まって下さい！」

「え？」

湾に目を向けた時、防波堤の向こうにカヴァルツチャーが落ちた。

ややあつて、係留中のクルーザーのマストが、グツと下がり――

「ちよ……ちよちよちよちよ！」

――水の壁が立ち上がった。

防波堤を乗り越えたクルーザーに激突され、横殴りの高波で横転する阿鼻叫喚のバスの中、考朔は本気でヒーローの登場を願った。

*

「果南！」

「ダメですよ、鞠莉さん！」

テラス窓に駆け寄ろうとする鞠莉の腕を掴み、野尻松之介は絨毯を

後退りする。

二人の視界を埋め尽くすのは、ホテルオハラの大《プレジデンシャル・スイート》の窓外一面を灰色に塗り替えた、雲。

「なんでよォー！ アイツ、もう死ぬんじゃないのオ!?」

雲の切れ間に見える始めていた青空は、ほんの数瞬で、猛烈に発達した雲塊に押し飛ばされた。

いや、もはや「発達」などという気象用語で表現するのは不適切だ。配信の中でラズリが《デプレッション・フォーメア》と呼んだように、カヴァルツチャー・フォーメアが破壊しようとした巨大な球体は、信じがたいことだが、「怪人」なのだ。

そう分かれば、12.7mm弾の狙撃をも防ぐ防弾ガラスに絶え間なく走る振動に、雇い主を近付けさせるわけにはいかない。

鞠莉は松之介の手を払うと、スイートのリビングを歩きながらイヤーマニターに触れた。

「セブ！ Chopperの準備！」

「なにする気ですか！」

「助けに行くのよ！ 果南を！」

「無理ですよ、こんな風で！」

軍用の輸送ヘリを改修した《スターフォア一七号》を使うとしても、この強風では格納庫から出すのも危険だ。

「じゃあBoatオ！」

「船もロープウェイも無理ですって！ だから、ルビイさんと本土に渡れば、って言ったじゃないですか！」

「今さら遅いわよォー！」

鞠莉はソファを蹴っ飛ばした。

緑青色のスカートと制服のスカートが揺れ、覗く紫色の下着に、松之介は目をそらす。

「だいたい、行ってどうするんですか。シャイニーは三津に預けっぱなしです。僕らにできることなんてないですよ」

破損したMark IIの装甲は、アンダースーツと共に三津の《OGIシーテック》に搬入されたままだ。そして、シャイニーのプロ

ジエクトがOGIグループの上層部によって凍結され、S—ユニットが事実上活動停止状態となれば、松之介を代表とする整備班はMark I Iに触る権限もないのだ。

蹴りの衝撃で絨毯に落ちたタブレットを、松之介は拾い、壁のテレビを見る。

四つのパネル状に映されている——

パイルアップ・フォーメアが起こしたらしき江浦湾の事故現場の速報。

暴風をまとうデプレッション・フォーメアと内浦湾に倒れたカヴァルツチャー・フォーメアのヘリからの中継。

浦の星女学院体育館のステージをフィックスで流し続ける配信。

同アリーナのゾンビ・フォーメアとラズリ・フォーメアによる混乱を捉えた配信。

——そのいずれにも、仮面ライダーはいない。

(狙ったのか？ このタイミングを)

シャイニーが行動不能なのはまだしも、ブランキア——桜内梨子がこの街を離れ、ワンダ——高海千歌が動作不良のままライブに出演している今、自由に動けるのは、国木田花丸が操るロリポリと、松浦果南と思われる龍駒だけだ。

そして江浦湾沿岸をパイルアップが、内浦湾上空をデプレッションが抑えてしまえば、バイクでの移動能力しか持たないブランキアが内浦に戻ることも容易ではない。

ラズリ・フォーメアには、それだけの知性がある、ということ。

(でも、なにが目的なんだ?)

怪人が中止させたライブの会場には、髪の高い少女が座り込んでいるだけだというのに。

*

土砂降りの雨。

シートが広げられた体育館。

沢山の水死体。

悲鳴にならない声。

充満する腐敗臭。

いや。

腐敗臭はない。

《ゾンビ・フォーメア》は記号としての水死体だ。

一箇月前に屋上で出会った時だって、匂いはなかったはずだ。

だから、これは幻覚。

分かっているのに。

「カードが揃った」

四枚の手札が、五枚目を呼び込んだ。

「カヴァルツチャーがやられた!」

「パイルアップが出たって」

「ライダーは?」

「なんで来ないんだよ!」

「ブランキア!」

ゾンビが出入口を塞ぐように広がって迫る。

みんなの恐れが伝わる。

私と同じ恐怖が。

伝播し、増幅し、拡散する。

こちらの手札は?

警棒で立ち向かうルビイのボディガード。

制服のまま走っていく花丸。

無理だ。

相手はもう死んで^アいる^{デッド}。

頭を千切っても、心臓を撃ち抜いても。

私の頭からは殺せない。

*

「警察はダメだな。パイルアップの事故と暴風の対応に追われてる」

「消防も、バスの横転が優先だって」

「理事長代理は繋がらないです。シャイニー、向かってるのかな」

防音処理された放送室であっても、体育館を叩く雨音は強い。放送機材のそばのツールで、担任の信代とむつといつきが話し合う声

も、少し離れば様々な環境音に混ざってしまう。

だから、小窓から見下ろすアリーナで進行しているゾンビ襲撃の騒音も、遠い世界のここのように感じられた。いつこちらに到達するか分からない状況なのに。

小口田よしみの顔が青い原因はむしろ、電話の向こうにある近い世界のことだった。

「考朔くんのバス、高波で引っ繰り返ったって」

「マジで!?!」

むつが大声を上げ、よしみは小刻みに頷く。

「ドアが下になっちゃって、開かないって。非常口も歪んじゃって。だから来られないって」

「バスが動かないってテキストはきてたんだけど、あ、じゃあ消防の云々って、それか」

「どっちにしても、消防士がゾンビと戦えるわけないし」

話し始めるいつきとむつから信代が離れ、よしみの方に歩いてくる。

「じゃ、私たちでなんとかしなきゃってことだな」

スクールアイドル同好会の顧問は、よしみの横で小窓を覗き込んだ。

動きの遅いゾンビの侵攻速度と、四人のボディガードが押し返そうとする力は、今のところ拮抗している。

「膠着状態か。黒総警がどれだけ持つか、だが——小口田? どうした?」

よしみは高いサイドテールを揺らし、担任を見上げた。

「デプレッションって怪人、たぶん、私がスラン^本バラ^体ーです」

「は? すら……ずら?」

信代はその用語を解さなかった。

「考朔くんがパイルアップ、曜がゾンビを産んだんです。淡島でラズリになにかされた四人の中で、むつと私がなんの怪人か分かってなくて、でも——」

スツールに座って電話をいじっているカチューシャの友人を見る。

「——むっ、台風なんて怖くないでしょ？」

「え？ まあ……そうかな」

五年前の三月一日に起きた、《さんどつぐ号》の沈没事故。

内浦の産業を壊滅させたあの事故で、よしみの実家《松月》は倒産に追い込まれた。小原家が採算度外視で買収しなければ、よしみは今、この街にいない。

「だからデプレッションは、私が産み出しちゃったんです」

あの球体は、この暴風は、よしみの恐怖の象徴だ。

高波がバスを横転させ、考朔を閉じ込めたのは、私のせいなんだ。

だが担任の女教師は、アリーナに目を向け、

「怪人って、そんな仕組みで産まれるのか」

得心した調子で呟いた。

「先生、ネットとか見てないの？」

「そんな暇じゃないしな。そうか、泡のように浮かび上がる恐怖心の具現か」

そして、よしみを一瞥した。

「なら、これはたぶん、お前だけの恐怖じゃない」

「どういう……ことですか？」

「普遍的な恐怖ってことだ。誰か一人がものすごく怖がる特殊なものじゃなく、みんながそこそこ怖がるもので、恐怖の総量を稼ぐ。あのラズリってヤツはそういう手で攻めてきたんだろうよ」

「総量？」

「しかも暴風なら物理的な被害も起こせるし、ライブ会場の体育館に人を閉じ込められる。そこに水死体を組み合わせれば、この街の人間なら誰だって怖がる状況の完成だ。一石三鳥だな」

信代が導き出した推論に、よしみは寒気がした。

「避難させたかったんだ。大人の人を」

当時小学生だったよしみは、その「場」を直接は見えていない。浦女生の多くも同じだろう。

だが、大人が悄然と歩いていた街の光景は、今でも覚えていた。体育館を叩き続ける雨音を見上げる。

それがラズリの計画だとしたら、なんとという頭の良さだ。

淡島で私の恐怖を引き出してから、たった数日だというのに。

「よしみ」

「ん？」

声に顔を上げた時、サイドテールを掴まれた。

「いて、いててて！ ちよ、ちよ！ むつ！」

「前に職員室で見た目玉、でっかい球だったよ」

「は？」

解放されたよしみは、生え際を撫でながら、いつの間にかそばにいたカチューシャの友人を見る。

「覚えてない？ 私がワンダに吹っ飛ばされた時、怪人は真ん丸の球だったじゃん」

ゾンビ・フォーメアが現れた日にむつを襲った、三重の目玉みたいな怪人のことか？ それが、球体のデプレッションと似ていると言っているのか？

「でも、あれってゾンビじゃないの？」

「そんなの分かんないけど、でも形だって普通すぎる。私たちと関係ないヤツかもしれないじゃん」

「そりゃ、そうだけど」

「センセが正しいなら、たぶんあいつら、私たちが怖がると強くなるんだよ」

「そんなこと言っただつむゆうー！」

頬をつままれ、よしみは奇声をあげる。

「心頭滅却！」

「分かったって、もうー！」

むつを振り払い、だが、よしみは落ち着いてしまった。

汗で滲んだむつの指で、むつ自身も平常ではないと分かっただけで、たからだ。

「よし、お前らはじゃれてろ。ちよっと思って行く」

信代はそう言って、放送室の壁に立てかけてあったモップを手にとった。

「無茶ですよ、ゾンビは倒せないですよ!」

いつきが引き留めるが、信代は答えず、よしみを見た。

「小口田、恐怖なんて誰にでもある。責めるべきは、そいつを利用して折れた鼻骨は、
うとする誰かの悪意だ」

そして鼻のギプスを剥がし、ゴミ箱に投げ捨てた。

最初の日に《エンジェル・フォーメア》に殴られて折れた鼻骨は、
もう治っていた。

「私は黙ってるつもりはないぜ。あいつらもだろ」

信代が放送室から出ていった時、スピーカーが誰かの声を発した。

*

「慌てないの! 我がリトルデーモンたち!」

マイクを拾い上げたのは、この一箇月でずいぶん親しんだ少女だ。

「カンタン! マスカミ! 左を抑えなさい! シャクミは中央!

カワズは右!」

指示に合わせて動いていく黒服を見て、ゾンビの層が向かって左側
だけ厚かったことに気付く。

「マル! その女を無力化して!」

「了解ずら! ポリちゃん! 行ってGO!」

後輩の手から放たれた球体がゾンビに命中し、蠢く腹を食い破るよ
うにダンゴムシの怪人が産まれる。

ざわっ、と走る、畏敬入り交じるさざめき。

右手のゾンビの群れをすり抜け、後輩が走る。

少量の水から産まれた、二回りばかり小さいロリポリを携えて。

ロリポリなら、フォーメアなら、ゾンビを殺せるのか?

殺せるわけがない。

ラズリ・フォーメアのそばの水たまりで、ゾンビが蘇る。

「マル! 本丸に集中!」

「分かってる——ずらッ!」

二足歩行形態のロリポリの足がパンチを繰り出し、

「おっと」

しかしラズリは悠々とリーチから逃れる。

「私たちの歌は《ギャラルホルン》じゃないわ！ 《ロキ》よ、嵐の神の名において、己おのが子の腸の虜囚りよしゅうとなりなさい！」

「それ、私のこと言ってる？」

白いアツパツパを着た道化ジョーカーが微笑を浮かべる。

「リトルデーモンは生徒に集中！ 戦線を維持しなさい！」

黒服は近付いてくるゾンビに警棒やパンチで応戦し、倒せないまでも近付かせない。

「ビビってる暇はないわ！ 反撃開始よ！」

そして歌舞伎のように、足裏でステージを踏み鳴らした。

その震動をお尻で感じる。

ラズリは「夜」と言った。

あの水泳場の日、花丸は私のことを「太陽」だと言った。

一昨日の淡島だって、真っ先に走り出したのは私だったのに。

今、状況の中心にいるのは善子だ。

沈んでしまったのか。

今さらのように、みんなの電話がフォーメア通報を告げる。

*

「マスカミ！ 頭を破壊しなさい！」

マイクの声に応じて、ボディガードの一人が緊張した構えを見せ

「アアアアッ！」

——怪鳥音と共に打ち出された手刀が、ゾンビの頭を吹き飛ばした。

女子高生の黄色い声の向こうで、ゾンビの首から下が水になってフロアシートにこぼれた。

「おらー！」

さらにどこからか現れた女教師が、野太い声と共にモップをフルスイングした。

ゾンビの頭が切り離され、空中で水になって飛び散る。

「見なさい！ 仮面ライダーに頼るまでもないわ！」

実例を見た三人の黒服も頭への攻撃を始め、次々とゾンビを水に還

していく。

中庭の時と同じく、それらは数秒で復活してしまう。だが今回は^{復活}リスポーン地点が体育館入口のラズリ・フォーメア付近に固定されているようで、ゾンビの総数は減らないものの、侵攻状況はリセットできる。

「マル！ 左が手薄！ 抜けて！」

善子はザコの分散具合をステージから観察し、花丸をボスへと導いているのだ。

そんなゲーム的な発想が思い浮かぶのは、黒澤ルビイがこの状況を、電話の画面で見ているからだろう。

「鍵は？」

「ダメ、外からかかっているみたい」

「周到、ってかまあ、当然だよな」

「にしても、マジでロリポリってマルのペットだったわけ？」

「怪人と戦ってるって噂、あったよね」

「スゲーぞあいつ」

フロアシートに膝をついたルビイは、周りの声を聞きつつ、パイプ椅子の背もたれの上から顔を出す。

せっかく準備したパイプ椅子が倒れて積み重なるアリーナには、浦女生と避難者合わせて一七〇人ほどが集まっていた。内浦の人間の大半が集まったと言っても過言ではないその場で、ルビイは一番ステージに近いところ——一番安全なところにいた。

「頭、引っ込めてな」

ライブで一緒にペンライトを振っていた先輩が、ルビイの肩に手をかけた。

「狙われてるんでしょ？ 難儀なもんだよね、黒澤家も」

「うう……」

手提げ袋を掻き抱いたルビイは、言われた通り小さくなる。

だから、こちらに攻めてくるラズリとゾンビも、それに対抗するロリポリと黒服も、ルビイからは見えない。今ここ起きていることなのに、誰かが撮影している映像をインターネット経由で電話で見ると

かなかった。

状況はそんなに変わっていない。

ルビイの専属ボディガードである四人は、黒いジャケットとワイシャツをゾンビの爪で切り裂かれ、うち二人は上半身を完全に露出していた。

背中から腕までを覆う筋力増強用サイバネティクスと防弾防刃着を素肌にした彼らは、あちこちから出血している。「黒服」という記号を剥奪されたその姿に、ルビイは言いようのない不安を覚える。

そんな黒服とゾンビの向こうに、幼馴染みを見付けた。

「ポリちゃん！ 押さえて Holdー！」

ゾンビの腕をかくぐりながら発された花丸の指示で、一回り小さなロリポリがゾンビの上半身にしがみ付き、押し倒す。

「隙だらけよ」

顔を上げた花丸の腕に、ろくろ首のようにグニャグニャと伸びたらズリの指が巻きつく。

「ロリポリがいながら、とんだ体たらくね」

目前に現れたラズリが笑い、しかし花丸は手を広げる。

「ポリちゃん！」

直後、ゾンビを抑えていたロリポリが分解した。当然、そのゾンビは立ち上がり、花丸の方へと爪を振りかぶり――

「ハイジャックー！」

――ラズリの指を切断した。

「ぬっ！」

指のテンションを失い、ラズリが仰け反ってたたらを踏む。

それを追って花丸が突進、細い顎に掌底を打ち込んだ。

母の顔が歪み、ルビイは口を手で覆う。

なぜゾンビがラズリを襲った？

画面を拡大して、察した。ゾンビの首筋、鬱血を表すらしき紫がかかった模様にかぶさるように、黒い甲殻のようなものが広がっていたのだ。「ハイジャック Hijack」――フォーメアを乗っ取ったのか。

「それが切り札かしら。意表はついてくれたけど、でも——」
だがラズリは顎を上げたまま、下目遣いに花丸を見た。

「——無駄よ」

効いていない。ボディガードの辰本迅が砂浜で戦った時と同じだ。

「花丸！ 左！」

スピーカーが発した善子の声より早く、人間の形に戻ったラズリの右腕が、花丸に殴りかかる。

花丸は左肩を引いて回避、ラズリの右腕を、両手で左右から挟み込むように極め——

「ずらッ！」

——地面に引き倒した。

「あの子も空手？」

先輩が問うたが、ルビイは答えられない。

健康法としての太極拳の演舞とは似ても似付かないから、ではなく

「腕はダメだよ！ マルちゃん！」

——ぐにやり、と右腕がのたうち、ジャツキのように倒れたラズリを立ち上げさせたからだ。

左腕もいつの間にか、ロリポリの半球状の甲殻に巻き付いて、七対の足を拘束してしまっている。

「ろくに情報連携もできてないのね」

「ずらッ！」

勝ち誇ったラズリの腹に、花丸が掌底を繰り出す。

ラズリは勢いで数歩後退りしたが、やはりダメージにはなっていない。

「だから、無駄だつてば」

それでも幼馴染みはとまらない。

「ポリちゃん！ Ride on！」

ロリポリが泡と消え、ラズリの拘束から逃れたムーフォームが飛ぶ。

「無駄かどうか！」

再度の掌底。

「思い知るぞら！」

ずん、と。

「な——え？」

ラズリの表面に波紋が広がる。

ぶうん、と奇妙な音が響く。

音楽のような、振動の連なりが。

「なに？」

誰かが言った。

ラズリが右肩を持ち上げ、伸びたままの腕を引っ張る。

だが、右腕は変化しない。左腕も同様だ。

「フォーメアの対抗手段が仮面ライダーだけなんて、思わないことです」

花丸が近付いてきたゾンビを殴る。

その右腕が見える。

黄色に輝く球体を手の甲に据えた、黒光りする籠手をはめた右腕が。

「あれ……ロリポリだよな？」

パイプ椅子の上でオペラグラスを覗く先輩が呟いた。

「情報連携ならちゃんとしてるわ。『フォーメアはムーフォームでしか倒せない』『ラズリは腕しか変形できない』『ロリポリはブランキアに影響を及ぼした』。この三点」

スピーカーから自信満々の善子の声が響く。

ロリポリを弓懸ゆがけのような籠手に変形させて、花丸自身が使えるようにした。

そしてロリポリの力で、ラズリの力を封じ込めたんだ。

「妄想筋ってヤツを鍛えておけば、この程度の発想、当然じゃない？」

ラズリは溜め息をつくように、両肩を降ろす。

「でも、なんでそんなこと知ってるの？ ヨハネ」

誰かがステージに放った疑問に対する回答は、聞き慣れたものだった。

「何度も言わせないで！ 何人なんびとたりとも、この墮天使ヨハネの《ウジャトの目》からは逃れられないのよ！」

笑いが起こる。

小さいが、恐怖の中にぽつんと産まれた、確かな笑い。

それは希望だ。

「ふ——ふふ」

そこに、ラズリの吐息のような笑いが混じる。

「参っちゃうわね。何度目かしら、不意打ちを食らうのは」

「それもちやんと連携してるわよ。『ラズリは油断してブランキアに負けた』ってね」

また笑い声。

「そうね、ええ。油断。その通りよ。じゃあ今度こそ——」

ラズリは言って、口を開いた。

その喉の奥に、淡く輝く球体が見えた。

「花丸！ 抑えて！」

花丸がラズリに向けて再度、籠手を引き絞る。

だが、遅かった。

球体が一際強く光り、ざあ、と水が動く音が続き。

「——本気の本気よ」

体育館の水がラズリの足元に集まり、さらなるゾンビが現れたからだ。

ゾンビ・フォーメアのムーフォームは、ラズリの体内にあるのか。

「花丸！ 引いて！」

舌打ち混じりの善子の指示で、花丸は新鮮なゾンビの群れから離れ、ロリポリ・フォーメアも籠手から二足歩行の姿に戻る。

ゾンビの数は、もちろん判別できない。

だが、ここにいる人の多くは、最大何体になるかを理解しているはずだ。

「総力戦だぞう」

パイプ椅子の上に立つ先輩が、オペラグラスを手に呟いた。

「リトルデーモンたち！ やることは同じよ！ 禪を締め直しなさい

！」

スピーカーから友人が叫んだ。

やることは同じ。

でも、生徒たちの諦念の空気は消えた。

でも、ゾンビの量的な手加減は消えた。

(でも……)

でも、ルビイの不安はいまだに消えない。

第一二話：誰もが一つ持つてる、勇気の欠片 — 5

B

いつか、妹に教えたことがある。

現代社会においてゾンビは、「ブードウーゾンビ」と「モダンゾンビ」に大別できる、と。

zombieとはそもそも、ブードウー教の司祭が薬品で仮死状態にさせ、のちの蘇らせた意識のない人間のことだ。一九三〇年代にアメリカに入ってきたその概念は、おりしもモノクロホラー映画が流行していたハリウッドに取り入れられるのだが、当時のゾンビは悪の大ボスの凶悪さを表現する手駒だったり、単なる労働力だったり、どちらかと言えば犠牲者の側面が強かった。

それを一変したのが、ジョージ・A・ロメロ監督の『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』だ。一九六八年、カウンターカルチャーによる若者の革命が下火に向かい、アメリカン・ニューシネマ勃興のタイミングで公開されたこの作品で、ゾンビは人種問題の隠喩となり、「頭を弱点に持ち、生者を襲い増殖していく死者」と定義された。多さと遅さが特徴で、全力疾走ゾンビも本質的にはこちらのバリエーションだ。

だから——

「妙ですわね」

—— 娯楽室のプロジェクターに、黒澤ダイヤは呟く。

《ゾンビ・フォーメア》は分類不能だ。

母の顔をした怪人に使役される集団としてはブードウー系だが、彼女の指示で行動しているようには見えない。

死体の姿をした緩慢な集団としてはモダン系だが、人間に噛み付こうとはしていない。実体が水である都合、生者をゾンビ化する能力もないだろう。

フォーメアは人間の恐怖により形を得る、と聞き及んでいる。《ローズ・アジエンダム》と《クレイジー・フィッシュ》の抗争に一般人が巻き込まれた追突事故が、パイルアップ・フォーメアを産み出し

たように。

ならばこの怪人たちは、フィクションのゾンビから産み出されたのではない、ということか？

「お嬢様、繋がりました」

思考を遮ったのは、防音扉の横に立つ蓮生だった。

ダイヤ専属のボディガードが差し出す固定電話の子機を耳に当てると、毛足の長いカーペットを踏む音が聞こえた。

「シャイニー装着中ではなさそうですね。なにをしていますの？」

「Oooh! ダイヤア! 直接連絡くれちゃうなんて、どういう風の吹き回し!?!」

「質問に質問を返すのはマナー違反ですわ。ブランキアは？」

「一度に二つも質問するのも、Manner違反よオ？」

「鞠莉さん？」

「んもう、いイけエズウ」

電話口の甘ったるい声に、眉間のしわが深まる。

「では改めて聞きますわ。仮面ライダーはどうしていますの？」

「ShinyはProjectごと凍結、Wonderは現場にいるわア。Branchiaは——ま、企業秘密ね」

……なんですって？

「シャイニーの凍結理由は？」

「Dadにダメって言われちゃって」

「なぜワンダは現れないのです？」

「お腹が痛いのかも？」

「ブランキアは」

「引退じゃなアい?」

「ふざけている場合ですか!」

黒服の肩が引きつった。

「魑魅魍魎跋扈するあの地獄変でライブイベントを行うなど、仮面ライダーの存在なしにはできない調整だったのですよ!! それを——今動けないのならば、わたくしたちになんの存在価値があるというのです—」

音響環境のいい部屋に怒号が豊かに響き渡り、その振動もやがて収まり、静寂が訪れる。

そこに、

「ふざけてるのはどっち？」

静かな声が重なる。

「みんな本気なのよ。本気でこの街を救おうとしてる。なのにダイヤ。アナタはそこに籠って、なにをしてるわけ？」

「黒澤家が売り渡し、小原家が切り刻もうと計画を立てているこの街に、わたくしになにができるというのです」

いつの間にか立ち上がっていたダイヤは、ソファに腰を下ろした。プロジェクターではいまだ、黒総警のボディガードとゾンビたちの、泥に杭な攻防が繰り返されている。

あそこには浦女生に内浦の市民、そしてルビイがいるというのに。

沼津の半分を牛耳る黒澤宗家の長女であり、浦の星女学院の生徒会長であり、ただの女子高生である自分には、誰を護る力もない。

半身不随の隠居にも関わらず、いまだに羊の皮をかぶった狼であり続けている祖父とは違うのだ。

「覚えてる？ ダイヤ。私たちの家の罪を」

返ってきたのは、鼻にかかるハミングのような声だった。

「……なんの話ですの？」

「さんどつぐ号よオ」

ああ、と音が漏れた。

二〇一一年三月一日の一六時に発生した爆弾低気圧、その局所的な大嵐により駿河湾に沈んだ大型カーフェリー。

「忘れられるわけがありませんわ」

五二名の死者と一名の行方不明者を出した海難事故は、当初、黒澤宗家党首の黒澤琳太郎が直々に救助に向かった第一報で英雄的に広まった。しかし、沈没の直接原因が機関部の爆発による出火であると判明してからは一転、製造元の《黒澤造船》と所有者の《OGIフェリー》に矛先が向けられ、特に黒澤家は責任所在を巡って内紛状態になりかけたのだ。最終的には、下請けのボルト製造会社が違う経のネ

ジを混入して納入したことが調査報告で示され、事故の話題自体も未曾有の大災害の陰に消えた格好となったが、少し状況が違えば、黒澤家の屋台骨は叩き折れ、ダイヤの今は失われていたであろう。

「だからこそわたたくしたちは、経済の崩壊した内浦地区への助力を――」

そこまで口にして、思い至った。

「――まさか、このゾンビは？」

体育館の半面を占める怪人のモチーフは、さんどつぐ号で死亡した人々なのか？

ならば、舞台上で座り込んだままの女子高生に、合点がいく。

当時、沼津市立内浦小学校の六年生だった、さんどつぐ号の船長の娘に。

遺体安置所となった浦の星女学院の体育館で、放心していた少女に。

「言ってたわよね、ダイヤ。『世界の終わりは爆発じゃなくてすすり泣き』だって」

睡を飲む。

クルツは死に、ガイ・フォークスは処刑され、あなたの王国は失われる。

「なら、これがその終わりよ、ダイヤ。計画も、抵抗も、安全も、驚きも、なにもかも消え去るわ。あの学校から。でも――」

と、小さな吐息に続き、

「――シャイニーは動けないのよねエ！」

鞠莉はあつけらかんと笑った。

「まったく、あれだけ宣伝してそれでは、なんの意味もありませんわ

！」

「My bad、色々準備があるのよ、こつちにも」

準備？

「言ったわよね、ダイヤ。『自分は夢を語れなくても、私たちの夢を叶えることはできる』って」

「な」

またか。

「アイツを準備しておいて。私の電話、今度はちやアんと待つてなさいよオ？」

そして終話された。

子機を耳から離し、スピーカーを見下ろす。

溜め息。

果南も鞠莉も、思い出したようにダイヤの心をえぐる。

「勝手ですわね、本当に。わたくしの時をとめたのは、あなたですのに」

だが。

スクリーンに目を戻す。

モダンゾンビは、世界の変化に取り残された古い人々の隠喩だ。そして大抵の作品で、新しい人々たる生者は負ける。時代の変革者は往々にして、旧来の価値観に押し流されてしまうからだ。

では、浦の星女学院の廃校を阻止するため、スクールアイドルを結成して立ち上がった千歌たちは？

内浦湾一帯の災害対策計画都市化を進めるべく廃校を目指す両家に、負けてしまうのか？

ダイヤは唇を結ぶと、体育館の配信映像を終了した。

ややあつて、OGIのロゴがスクリーンに浮かぶ。

その意味は、「光陰矢の如し」。

秒読みは始まった。

放たれた矢は、三本揃わなければ、今回も折れてしまうだろう。

「蓮生」

「はいっ。」

切り揃えた前髪の下から、専属のボディガードを見る。

「《オートチェイニー》を準備してください」

*

左袖を引っ張られた。

引っ張り返すと、ニットのほつれるイヤな音と共に、カーディガンが肩先の縫い目から音を立てて裂けた。

その先には、自分の爪に絡まったアクリルウールを不思議そうに見る水死体。

「ポリちゃん！・行ってGO！」

金色の斑点がちりばめられた籠手が泡と弾け、目の前のゾンビが内側からロリポリ・フォーメアに取って代わられる。

「もう、お気に入りであったのに！」

その間に左下勢独立、カーデイガンスオシャーシードウーリを破いたゾンビの懐に入り込み、左蹴りの爪先で頭を破壊。

その先に、次のゾンビが立っている。

(手が足りないすら)

国木田花丸は唇を舐めて、視覚以外で四方に気を配る。

手近なゾンビを次々と水に還していくも、常に四々五体のゾンビに囲まれ、ラズリにまったく近付けない。

「シャクミ！ カワズ！ 何体か破壊しなさい！」

「先生！ 倒しすぎよ！ 花丸が突っ込めない！」

善子はひっきりなしにリトルデーモン——ルビイのボディガードや先生へ指示を飛ばしているが、四々五〇人に増えたゾンビでは、単純に数が合わない。数を合わせるために空間を広く取ろうとすれば、それだけ前線を押し上げられてしまうし、前線を押し返そうとゾンビ破壊のペースが上がると、ラズリ周辺のゾンビ密度が高まって花丸が前進できなくなってしまう。

終わらないモグラ叩き。

ロリポリは強力とはいえ、七対一四本の腕脚は如何せん短く、大勢を同時に相手にするのは不向きだ。それに、花丸が自分の動きに集中するほどロリポリの動きは機械的になり、頭を狙うことさえできなくなる。

それでもラズリを抑えられる唯一の存在として、花丸は渦中に突入しなければならぬ。

善子は、「油断」と言った。

花丸たちにも、それがあつたのは否定できない。

ゾンビの数を増やせると分かっていたら、ラズリから距離をとって

はいなかった。

いや、爆発の可能性を承知で、花丸がラズリを倒すべきだったのではないか？ 善子に厳禁されていたとしても。

(後悔先に立たず、ずら)

予定通り、待つしかない。

花丸にできることは、ラズリの力が戻る前に、再度ロリポリの制御下に置くことだけだ。

仮面ライダーが来ることを祈って。

意を決し、身を低くしてゾンビの波をかき分け、体育館を入口へと突き進む。

前方のゾンビの奥に、ラズリの顔が見えた。

あと一人――

「――国木田様！ 前を！」

黒服の誰かが叫んだ。

目の前のゾンビの胸が弾け、なにかが見えた。体育館の照明に光る、牙のように鋭いなにか。

(爪！)

とまれない。

身体を捻り、前方のゾンビ左肩からぶつかる。

「ポリちゃん！」

指示を発声する余裕もない。

飛来したムーフォームに手を伸ばすが、さらに飛来した爪に弾かれる。

濡れたフロアシートに背中から転がる。

見上げた体育館の天井に、複数のゾンビの顔が覆い被さる。

どこに逃げる？

逃げられない。

(ルビィちゃん！)

だがゾンビの手は、花丸に届かなかった。

どん、どん、と腹に響く音と共に、怪人が飛び散ったからだ。

「ぶっ！」

水死体だった水を顔に浴び、それを拭いながら身体を上げると——
「えつと、《ヘア・オブ・イナバ》かしら」

——二本のペンライトを手にした、少女が立っていた。

青みがかった灰色の衣装を着た、お団子頭のスクールアイドルが。

「善子ちゃん！」

「ヨハネだつて——」

善子は両手のペンライトを、太鼓のバチのように左右に開いて構え、

「——言ってるでしょお！」

二体のゾンビの頭にそれぞれ振り下ろす。

どどん、と。

中空のペンライトとは思えない低音が響き。

一拍、ゾンビの頭が爆ぜた。

「やっぱり、使い慣れた得物が一番ね」

手の中でペンライトをクルクルと回すと、彼女はラズリを見る。

「遊撃に回るわ。あいつは任せるわよ、花丸」

そして集まってきたゾンビの群に突撃すると、跳躍、彼らの頭を踏んづけて走り去った。

*

「遊撃。そうするしかないわよね」

ゾンビの胸に貫手を突き刺し、その水で爪を補充しながら、ルビイの母の顔をした怪人は笑う。

*

均衡が崩れ始めた。

舞台上^{かみ}手の袖幕からアリーナを見ている高海千歌は、その兆候に気付いた。

こちらに迫るゾンビと、それを抑えるボディガードと担任の信代。

ゾンビの頭や肩を踏んで跳び回りながら、撃ち漏らしたゾンビを潰して帳尻を合わせていく善子。

その境界線が、目に見えてこちらに近付いてきた。

黒服たちが護るべき観客と避難者たちと、ゾンビの間に広がる緩衝

地帯が、滅っているのだ。

「ヨハネちゃん、ダメだよ」

今まで指示を出していた善子が前に出たことで、全体を見て指示を出す人がいなくなってしまう。

だから、戦闘は派手になったが、戦線は維持できなくなっている。

なのに……。

ゾンビはパイプ椅子をガタガタ踏みならし、時には足を引っかけて倒れながら近付いてくるが、観客たちがステージに上がらざるを得ないほどには近付いてこない。

なぜ？

長浜を高波で洗ったデプレッション・フォーメアは、内浦湾一帯に暴風と間断ない風浪を産み出しているそうだ。

暴走族の一団を病院送りにしたパイルアップ・フォーメアも、江浦湾沿いの県道で暴走行為を続けているらしい。

どちらも、決定的な被害は出していない。

遊ばれている？

いや、真綿で首を絞めてきているんだ。

なんのために？

「恐怖……」

怪人を産み出す人間の感情。

今、私を支配している感情。

狙いは、その最大化か。

花丸とロリポリはたしかに、ラズリを封じる力を持っている。ゾンビは大群だが、普通の人が戦える程度の存在でしかない。だからみんな、勝機を信じていられる。

仮面ライダーが来るのを待っている。

波のように寄せてくる恐怖を抑える、堤防のこちら側で。

でも、それが破壊されたら？

怒濤だ。

そんなことはさせない。

「戦わなきゃ」

だから、スクールアイドルになりたいって思ったんだ。
仮面ライダーとして戦うって決めたんだ。

すべての希望が失われた時に、それでも「大丈夫だよ！」と叫ぶために。

みんなの笑顔を守るために！

なのに。

「戦わなきゃ……」

変わるための力は、もう私の手にはない。

*

どれくらい経っただろう。

ルビィ専属のボディガードである四人は、露出した肌のいたるところから血を流していた。

お気に入りのカーデイガンを失った花丸も、ロリポリを身体に這わせたり外したりしながら、ゾンビのただ中にいる。

加勢に入った顧問の信代は……姿が見えない。

同級生や先輩、避難してきた大人たちは、パイプ椅子を押し倒してステージ側に集まり、ルビィはその中で小さくなっている。

(これでいいのかな……)

ボディガードを矢面に立たせ、体育館に集まった人々に囲まれ、だが、ルビィはなぜその状況に疑問を抱くのか、疑問に思う。

これが普通だ。

ルビィが花丸と抱き合って震えている間に、ボディガードが傷付きながらも生徒を護り、大人や仮面ライダーが脅威を退けてくれる。

これが普通だったはずだ。

(ううん……)

花丸はルビィを護る道を選び、ロリポリを我が物にした。

善子は黒服を指揮する側に回り、《因幡の白兔》のようにゾンビの頭上を飛び回っては、先輩から借りたペンライトでゾンビを蹴散らしている。

ルビィが襲われたどの局面とも、状況は変わっているのだ。

なのにルビィは今も、手提げ袋を後生大事に抱えているだけ。

果南からムーフォームを与えられたのに。

「……あれ？」

ふとスカートポケットに触れてみるが、あの球体の感触がない。落としてしまった？ いや、こんなことは前にも——

「探してるか？」

——経験していたから、スクールバッグにぶら下げたピンクのクマの頭のぬいぐるみがピクピク動いているのを見ても、「ピギィー」と発さずにいられた。

「ス——ベラさん」

「ストーカーじゃなかったのか？」

「だ、だって」

と、先輩の視線を感じて、慌てて電話を耳に当て、クマの頭のぬいぐるみをバッグから外した。

「そんな名前じゃ、ルビィがストーカーに追われてるみたいだし」

「だからベラドラキュラ 俳優・ルゴシ優か？ 元に戻っちまったじゃないか」

クマの頭のストーカー・フォーメアは、おちよくるようにルビィに言ってから、ひよい、とルビィの頭の上に乗った。

「問題なさそうだな」

「え？」

「忠誠心のある兵士、それを前線から指揮する参謀、王を護る肉の壁。いい布陣だ。これで騎兵隊が来れば、お前が戦う必要はない」

仮面ライダー
騎兵隊。

「来てくれるかな」

「どっちにしたって、マントを使っても変身しても、お前一人じゃ勝てないんだからな」

「そうかもしれないけど——」

そう眉を寄せた時、流してしまった言葉に気付く。

「——肉の……壁？」

「ん？」

ぬいぐるみが頭からおり、セーラー服の襟首に腰掛けた。

「何人殺されるまで壁にいるかは、正直俺にも分からん。黒澤家——」

「つてより、お前自身がどれだけ崇敬すっけいされてるか、だからな」
殺される？

《妙法寺》での会話を思い出す。

平然と、自分と同じフォーメアであるラズリを殺せと言った、ス
トーカーのことを。

「どうして、そんな簡単に、命のお話ができるの？」

クマの頭は、襟の上で小さく傾いた。

「言っただろ、俺のベースはお前だつて」

電話を当てた耳が汗ばむ。

「そんなことないよ、ルビイ、誰にも死んでほしくないよ」

「おいおい、しっかりしろよ。あいつが狙ってるのはお前の『解放』
だ。こいつがそのお膳立てだつてことぐらい、分かるだろ」

「分かるけど、それは分かってるけど」

「善子と花丸あいつらにラズリのことを教えた時から、この展開は想定してたは
ずだぜ。なにせお姫様の仕事は、戦争と兵士の死から目を背け、英雄ヒーロー
を待つことだけなんだからな」

「そんな、ルビイは、そんなこと——」

「——ヨハネー！ 後ろ！」

先輩が叫び、顔を上げた。

そして見た。

衣装のスカートを引っ張られた善子が、ゾンビの頭を踏み外したの
を。

《因幡の白兔》のように。

「ヨハネちゃん！」

自分の叫び声が、妙に遠くから、間延びして聞こえる。

善子に掴みかかるゾンビが、コマ送りのように見える。

感覚が遠ざかる。

手提げ袋が手からこぼれ、針ケースが騒々しい音を立てる。

ペンライトや型紙本が滑り出し、フロアシートに散らばる。

『待つ』。

その通りだ。

ストーカー・フォーメアは、ルビイから産まれた。
ストーカーの言葉は、ルビイの言葉に他ならない。
護ってほしい。

何度そう思った？

怪人から、犬から、男性から、親戚から、先生から、水から。
姉に、黒服に、両親に、家に、学校に、街に。

黒澤家は、沼津に巣くう、人々の血を吸って生きる吸血鬼の城。
ルビイは、城の最上階に護縛られたお姫様。

その構図が、実体を持って現れただけだ。
なにかを待つだけの、ルビイの世界が。

「違っよ……」

唇に痛みを感じる。

血の味が広がるのを感じる。

「違っよー。もうルビイは、こんなの待ってない！」

叫びの波が広がり。

消えた時、五感が戻ってきた。

クマの頭のぬいぐるみを襟から引き剥がし、電話と一緒にバッグに
押し込む。

手提げ袋の中身を、型紙本の表紙を、その人物と視線を交わし、
一步を踏み出す。

「おい、ルビイ！」

応えないルビイに、密集していた友達が、先輩が、大人が、道を空
ける。

その先で、ゾンビの海が同じように左右に分かれる。

濡れたフロアシートに倒れた善子が不思議そうに身体を起こし、口
リポリを腕に乗せた花丸がこちらを見る。

ラズリが娘を受け入れるように腕を広げ、その一〇本の指でゾンビ
を抑える。

その道を、ルビイは歩く。

倒れたパイプ椅子で転ばぬよう、一步ずつ。

黒澤家はなんのために、人々の血を吸うことを許されている？

ルビイはなんのために、丁重に護^縛られてきた？
姉や幼馴染みが、教えてくれたじゃないか。

*

ロングヘアの少女が舞台袖から出てきて、ステージに座り込んでいたショートボブの少女を立たせた。二人ともスクールアイドルの衣装を着て、後者の少女は転がっていたハンドマイクを手にした。

だが、ライブが再開される様子はなかった。今の二人はむしろ、観客の側なのだから。

黒澤瑠璃は、そんなステージしか表示しない車載映像に気を揉んでいた。

別アングルの映像に切り替えたいが、リムジンのコンパートメントには自分しかおらず、リモコンの操作方法は分からない。夫の電話を手取るも、几帳面にロックされている。

手詰まりだ、と電話を持ち主のシートに投げ返し、背もたれに身体を預けた時、

「善子ちゃん、怪我はない？」

ルビイの声が聞こえた。

「平気……みたい」

「先生は？」

「ああ。あいつら、なんか押さえつけてくるだけだったぞ」

「黒服さん、二人をお願い」

「お嬢様、ですが——」

「——下がって」

瑠璃は眉をひそめる。

落ち着いた口調に滲む、有無を言わせぬ凄味に。

「待ちくたびれたわ、ルビイ」

「ルビイちゃん」

「マルちゃん」

「あら、まだみたいね」

車載画面はなにも映していない。

それでもルビイが、瑠璃と同じ顔をした怪人と対峙しようとしてい

ることは分かる。

「まったく……さすがはあなたの娘ですわね」

瑠璃がリムジンの防音ガラスの向こうに目を向けると、横転したバスの上に立つ小太りの夫が見えた。クルーザーの激突で歪んだ非常口をこじ開けようと、テコの原理とマススターキー消防斧を駆使しているところだった。黒い袴は叩き付ける雨に濡れ、身体に重くまとわりついているようだが、彼が怯む様子はない。

巨大なタツノオトシゴが起こした高波でバスが横転したと聞いた琳太郎は、リムジンを発進させない運転手を引きずり出して通行止めを突破し、海岸通りに辿り着いた。ボディガードはもちろんとめようとしたが、同時に雇い主が聞き入れるわけがないとも分かっているのだ、今は琳太郎の主導する救助作業に全面的に協力していた。

内浦分遣所からやってきた消防車が見えた時、非常口が根負けし、琳太郎がバスの車内に手を伸ばした。ややあつて、男子生徒がバスの側面に登ってきた。

《黒澤車両運行》の運転手が走ってくるのも見え、これで夫の英雄的行動も終了か、と瑠璃は鼻息を漏らす。

「お待たせ、お母さん」

そんな時に、また、ルビイの声がした。

「最後の忠告だよ。これを全部片付けて、出ていってください」

「手が震えてるわよ、ルビイ」

自分と同じ声が、甘ったるい口調で言う。

「でも心配しないで、あなたの夜明けはすぐよ。さあ、私の手を取って。闇の真珠に心を——」

「——出てって！」

きん、と。

雑音混じりの叫びが、スピーカーを揺らす。

「解放も、夜も、サダメノクサリ運命の鎖も、どうだっていいんだ。ルビイたちのスクールアイドル。この街が奏でる音楽！ 大事なのはそれだけなんだよ！」

ルビイが口答えをした。

自分と同じ顔をした怪人に。

「『ノブレス・オブリージユ』か。やつと、黒澤家に夜がもたらされるのね」

返答は、噛み合わない言葉。

ルビイの顔も、怪人の顔も、いまだ見えない。

スモークガラスの向こうで狼狽する運転手がリムジンに乗れば、状況は変わるだろう。

それまでは、琳太郎が持ち出したキーでしか開けられないリムジンに護縛られた瑠璃璃に、できることはない。

「やはり、似ても似付きませんわね。あなたとわたくしは」

*

ラズリ・フォーメアは目を見開き、唇の端を持ち上げていた。

ゾンビを腕で抑える故にジェスチャーは控えめだが、歓迎の意を伝えなくてはならなかった。

だが、変心はなかったようだ。

「ベラさんー」

ルビイの呼び声に応えるように、小さな球体が飛んでくる。

「だから、俺が言った通りになったろ」

語りかけたのは、紫色のコウモリのぬいぐるみ。

「ずいぶん可愛くなっちゃったのね、ベラちゃん」

「うるさい」

ルビイの頭上をフラフラと飛ばたくたびに、笛のような音をなびかせるコウモリが、ルビイの闇の真珠、ということ。

明確な非日常の存在に、アリーナの奥で民衆が声を上げる。

「あいつ腕、マントだけじゃ勝ち目はないぞ。また俺が、お前の力を借りて——」

「——違うよ」

ルビイが宙に手を伸ばし。

その球体を掴む。

「ルビイが力を借りるんだ」

「おい！ 待て——」

——ぶちり、と。

乾いた音が響いた。

左手の甲に押し付けられたぬいぐるみが、その中の闇の真珠が、その中の正多面体が、皮膚を破る音が。

「ルビィー！」

ツーサイドアップにまとめた髪が広がり。

制服の腰を、鎖がベルトのように締め上げ。

頬に血管のような文様が浮かび。

強く閉じた瞼から、涙がこぼれる。

痛みに耐えるように。

「もう、ルビィー」

ラズリはゾンビを腕で抑えたまま、一歩、娘に近付く。

押さえたままのルビィの左手から、一筋、血が流れる。

「だから、解放してあげるって言ったのに」

ルビィは瑠璃の手で、痛みを伴う行動から遠ざけられていた。

一番大きな怪我でも、膝小僧をすりむいた程度と聞いている。

なのに、自分で自分を傷付けてしまうなんて。

「無理しないで」

ラズリはもう一歩近付き。

娘の大きな目が開かれる。

瞳孔が散大した目が、金色に輝く。

砂浜で再会した、あの夜と同じ。

すべてを反射し、拒絶する光。

いや。

二つの満月が欠けていく。

半月から三日月へ。

そして新月へ。

元の黒へ。

「ルビィ?」

広がっていた髪が収まる。

瞳孔が収縮する。

もう泣いていない。

「ごめんね、お母さん」

そしてコウモリの球体を――

「変身！」

――鎖のベルトにねじ込み――

「おいルビィ！ こっちじゃない！」

――ルビィは碎け散った。

*

ルビィの心は、どれくらい残ってるんだろう。

これまで知ってきた恐怖に、トンカチみたいに叩かれて。

叩かれて、叩かれて。

欠けた月みたいに、もう欠片しか残ってないと思う。

あと一度叩かれたら、きつと、ルビィは碎けてなくなっちゃうかも。

なのに、戦うの？

戦うんだよ。

恐怖が怪人を強くしちゃうなら。

ルビィに残された最後の欠片は、一番純粋な恐怖は、今、使うべき

なんだ。

ノブレス・オブリージュ。

街の血を吸って生きる黒澤家の人間として。

吸血鬼フアンガイアの牙として。

せめて、食らい付いてから碎けてやる。

*

ルビィの形をした切片が、ガラスのように飛び散り。

フロアシートに落ち、泡のように弾けて消える。

だが、ルビィはそこにいた。

高い襟で首までを覆う黒鉄色の鎧をまとい。

骨をむき出しにした前腕と脛に鎖を巻き付け。

角と牙を表わすコウモリのような仮面を被って。

ブランキアやワンダのようで、まったく違う姿で。

「フォーメア……っ？」

誰かが呟いた。

「ルビィが……」

ざわめきが広がる。

だから、

「仮面ライダーだよ！」

渡辺曜は叫んだ。

「そうよ！ 仮面ライダー！ 仮面ライダー……ヴァラーよ！」

“Valor”——“勇気”か。

善子の命名が残響する体育館に、歓声があがった。

「引っ張りすぎだぞルビィ！」

「頑張れルビィ！」

「バラ！」

「頼むぞバラ！」

薔薇？

「え、違うって！ ヴァラーよ、ヴァー！」

「バラ！」

「バラ！」

「だ、だから！ バラじゃなくて、ヴァ・ラ・ア！」

「バラ！」

「だーかーらー!!」

よかった。

ルビィは仮面ライダーになった。

怪人なんて、あんな子には似合わない。

ルビィ——《仮面ライダーヴァラー》はギャラリーに惑わされず、
ゆっくりと腕を構える。

じやらりと。

その腕は、鎖で縛られたまま。